レーニン生誕100年記念

レーニン10巻選集

⑥

日本共産党中央委員会
レーニン選集編集委員会 編

大月書店

レーニン10巻選集のしおり

No. 9
1971. 9. 21.
大月書店

レーニン10巻選集
第六巻（第九回配本）について

渡辺　武

一

この巻には、一九一四年秋（九月とおもわれる）から一九一六年七月までのあいだに、レーニンが執筆したおもな著作が収められています。これらの著作は、大別してつぎの三つの系列にわけることができます。

第一の系列は、当時勃発し、ますます拡大していた第一次世界大戦の渦中で、第二インタナショナルの指導者の大多数を先頭とした、ロシア内外の日和見主義者の裏切りとたたかい、帝国主義戦争にたいするロシア社会民主労働党と国際プロレタリアートのマルクス・レーニン主義的な方針を確定し、第二インタナショナルからの分離と第三インタナショナルの創設のための、および切迫したロシア革命の勝利のための、思想的、組織的準備をおこなうために書かれた諸論文です。この系列のなかには、「戦争とロシア社会民主党」「第二インタナショナルの崩壊」「社会主義と戦争」「社会主義革命と民族自決権」その他、この巻におさめられている論文の大部分がふくまれます。

第二の系列は、第一の系列とかたくむすびつくものですが、「資本主義の最高の段階としての帝国主義」および、この「帝国主義論」を書くためにレーニンがあつめた膨大な準備資料のなかから本巻に収録した「世界の分割状態」などで、帝国主義の歴史的特質の全面的な解明にあてられた経済論文です。

第三の系列は、「カール・マルクス」「弁証法の問題について」などで、マルクス主義の原理についての解説、解明にあてられたものです。

以下、これらの著作の書かれた当時の歴史的背景とこのなかから提起された理論上、実践上の問題、レーニンの著作のおもな内容、そのもつ意義などについて私の考えを簡単にのべ、読者のみなさんの参考に供したいと思います。

二

第一次世界大戦は一九一四年七月にはじまりました。この戦争は、はじめはドイツ＝オーストリア＝ハンガリー・グループと、イギリス＝フランス＝ロシアの「協商国」とのあいだではじまり、しだいに一五億以上の人口をもつ二八ヵ国をまきこむ世界大戦として発展しましたが、これらの交戦国のどちらの側からみても、他国を征服し、競争国

を没落させてその植民地を強奪しようとする強盗戦争であり、自覚的プロレタリアートをはじめとする各国の人民の解放闘争の発展を鎮圧することをめざした反動的な戦争でした。とくにこの戦争の主力となったものはドイツとイギリスの帝国主義者でしたが、それは急速に発展して一九世紀のおわりには工業発展の点でイギリスを追いこすまでになったドイツと、最大の植民地帝国であったイギリスが「勢力圏」を奪い合い、世界を自分の有利に再分割しようとしたところに最大の原因があります。

このような強盗戦争は、帝国主義の発展そのものから不可避的に生みだされたものです。二〇世紀の初頭に資本主義が到達した、その最高の段階である帝国主義は、国内はもとより国際的にひとにぎりの独占体の支配が確立されていること、地球がかれらの手に最後的に分割されてしまっていることなどをおもな特徴としています。また帝国主義の段階では個々の産業部門、個々の国々等々のあいだの資本主義の不均等な発展が非常に激しくなりますが、いまのべたような帝国主義の基礎のうえでは、新たな力関係に応じて世界を再分割しようとする帝国主義者の競争が不可避的に発展します。また、自由競争が独占にかわるにつれて、ひとにぎりの金融王の手による人民にたいする搾取と支配、反動と侵略の志向が激しくなり、これにたいするプロレタリアートの反抗、被抑圧民族の解放闘争が全世界的な規模で発展します。反面、これにたいする帝国主義者の攻撃も不可避的に激化します。帝国主義戦争は、このような帝国主義の政治の暴力的な手段による継続にほかなりません。

このような帝国主義世界大戦は、資本主義が、それ以前の比較的平穏な発展の時期をおえ、戦争と革命の激動の時代にはいったこと、資本主義が歴史的に進歩的であった時代をすでにはるか以前におえて、その死滅しつつある時代にはいったことを物語っています。

ところで、このような強盗的、反動的な世界戦争、交戦国のどちらの側に属しているかにかかわりなく、また戦争の勝敗がどうなるかにかかわりなく勤労人民に深刻な災厄と苦痛をあたえるこの戦争にたいして、どのような態度をとるか、これがすべての国の自覚的プロレタリアートのまえに必然的に提起される問題です。

すでに第二インタナショナルは、一九〇七年のシュトゥットガルト大会と一九一二年のバーゼル大会で、労働者にたいし、戦争の勃発に反対して闘争したり、すでにおきた戦争を停止させるために闘争するだけでなく、戦争によって生じた危機を利用してブルジョアジーの打倒をはやめるためにもたたかうことを、すべての社会主義党の名でよびかける決議を採択しています（この決議の採択にあたってレーニンは大きな役割を果たしています）。とくに、第一次世界大戦の勃発する直前にひらかれたバーゼル会議の決議は、切迫する戦争が「資本主義的帝国主義」と「王朝の利害」を基盤とするものであり、「どんなものであれ、国民的利益をいささかでも口実にして是認することはできない」ものであることを明確に宣言しており、また、戦争が

「諸国政府にとって」（すべて例外なしに）危険なものであり、諸国政府が「プロレタリア革命」を気づかっていることを指摘し、社会主義者は、戦争によってつくりだされる「経済的および政治的危機」を「資本主義の没落をはやめる」ために利用しなければならないとして、一八七一年のコミューンと一九〇五年の一〇―一二月の実例、すなわち革命と内乱の実例をきわめて明確にさししめしています。

ところが、実際に戦争がはじまってみると、第二インターの指導者の大部分をしめる日和見主義者たちは、自分も賛成して満場一致採択したこのバーゼル宣言の正しい立場を完全に裏切って、帝国主義戦争を擁護する社会排外主義の道に転落してしまいました。こうした転落と第二インタナショナル崩壊の歴史的背景はつぎの要因にあります。

帝国主義諸国の独占体は、植民地および従属国の諸民族の略奪によって前例のない超過利潤を獲得しました。帝国主義者は莫大な利潤の中から、ごくわずかな部分を労働者と他の勤労者層の一部にわけあたえることによって「労働貴族」とよばれる労働者の特権層を育成します。かれらはじぶんに特権をもたらす帝国主義の維持に関心をもち、ブルジョアジーのまえに屈服しました。こうした指導者が第二インタナショナルの主流をしめるにいたったのです。

こうして第二インタナショナルのなかで最も強力な、最も影響力をもつ党であったドイツ社会民主党の指導者たちは、いちはやく議会のなかで軍事公債に賛成投票し、フランス社会党の代表者やイギリス、ベルギーなどの社会主義者は反動的なブルジョア政府にはいって政府の戦争政策に協力するなど、ブルジョアジーとの公然たる階級協力・公然たる戦争協力の道に恥知らずにもすすみました。

レーニンは国際大会で日和見主義に断固として反対しました。ボリシェヴィキは第二インタナショナルの革命的路線を守ってたたかい、国際労働運動における革命勢力を結集しました。ドイツのリープクネヒト、ルクセンブルグ、ツェトキン、メーリング、ブルガリアのディミトーリのように左派が日和見主義に反対してたたかいました。

しかし、日和見主義者はますます優位をしめるようになりました。それだけでなく、党内には日和見主義者を批判はするが、しかしかれらとは手をきらないグループが生まれました。このグループは「中央派」とよばれました。この流派の著名な指導者はドイツのカウツキー（ロシアではトロツキーなど）でした。かれらは自己の日和見主義を左翼的言辞でおおいかくすだけでなく、公然たる日和見主義とたたかわず、かれらと革命的民主主義との妥協をはかろうとする最も危険な分子でした。

こうして第二インタナショナルは、公然たる右派と、「中央派」、レーニンらを先頭とする左派の三派から構成されていました。第一次世界大戦の勃発は、このような危険な役割をますます明らかにし、第二インタナショナルの崩壊に導きました。

このような事態を前にして、かれらの裏切りを公然と暴露し、国際プロレタリアートに正しいマルクス・レーニン

主義的な方針をしめすこと、崩壊した第二インタナショナルと袂をわかち、新しい情勢のもとに歴史的任務をはたすことのできる新しいインタナショナルを創設すること、また、開戦以前からあらたな昂揚をみせはじめ、戦争のなかでいちだんと発展しはじめたロシアの労働者のたたかいを徹底的におしすすめ、革命を勝利にみちびくこと、これらの必要がきわめて緊急の問題としてうまれてきました。歴史が提起したこの偉大な任務は、文字どおりレーニンとボリシェヴィキ党の肩にかかりました。レーニンは、この歴史的諸任務にこたえ、複雑で困難な情勢のもとで、マルクス主義の革命的原則をまもりぬき、理論的にも実践的にもそれをいっそう発展させ、マルクス主義をゆたかにしました。レーニンのこの時期のかがやかしい活動の理論的反映が、この巻におさめられた諸論文です。

三

I 第一の系列の諸論文

「戦争とロシア社会民主党」

この論文は一九一四年九月ごろに書かれたものとみられています。第一次世界大戦が勃発した直後の七月二六日にレーニンは亡命先のオーストリアのガリチア（ポロニノ）でうその密告によって逮捕され、まもなく釈放されて、中立国スイスのベルンにのがれてここに住みました。レーニンはベルンに到着したその翌日、郊外の森でひらかれたボリシェヴィキ・グループの会議に出席して、「ヨーロッパ戦争における革命的社会民主主義派の任務」について報告しました。これは、戦争の当初にあたってはやくもだされた、この戦争についての明確なマルクス・レーニン主義的テーゼであって、レーニン全集二一巻に収録されています。本巻に収められている論文「戦争とロシア社会民主党」は、右のテーゼがボリシェヴィキ党の在外支部や国内での各組織で採択されたのち、ロシア社会民主労働党中央委員会の宣言の形にレーニンが書き改めたものです。

この文書は、まず勃発した戦争のただ一つの現実的な内容が、「他国の土地をうばい、他国を征服し、競争国を没落させ、その富を強奪し、ロシア、ドイツ、イギリスその他の国の国内の政治的危機から勤労大衆の注意をそらせ、労働者を分裂させ、その素朴さにつけこんで民族主義であざむき、プロレタリアートの革命運動を弱めるために労働者の前衛をみな殺しにすること」にあることを鋭くのべ、社会民主党は、なによりも、戦争のこの真実の意義をあきらかにし、地主とブルジョアジーが戦争を弁護するために流布している「愛国主義的」言辞を容赦なく暴露する義務を負わされているとのべています。

また、この重大な時期に、第二インタナショナルの指導者の大多数が社会主義を裏切ったこと、そして、プロレタリアートをなによりも妨害しているのは、日和見主義と革命的民主主義とのあいだを動揺して、この第二インタナショナルの崩壊に口をつぐむか、かくそうとしている、ドイツ社会民主党の「中央派」（カウツキーその他）のような

人々であることも指摘して、この崩壊を公然とみとめ、その原因を理解し、「日和見主義ときっぱり手をきり、日和見主義がかならず失敗することを大衆に説明しなければ、現在、社会主義の任務を遂行することはできないし、労働者のほんとうの国際的団結を実現することもできない」とのべています。

文書はまた、ロシアのツァーリ君主制をはじめとして自国の反動的政府の敗北こそが、戦争の害悪を最も少なくするものであることを指摘し、ブルジョアジーがプロレタリアートの口を完全にふさぐために戦時法を利用しているので、プロレタリアートは扇動と組織の非合法形態をつくりださなければならず、現在の帝国主義戦争を内乱に転化せよというスローガンこそ「コミューンの経験によって指示され、バーゼルの決議がその輪郭をしめし、高度に発展したブルジョア諸国間の帝国主義戦争のすべての条件から出てくる、ただ一つ正しいプロレタリア的スローガンである」と強調しています。

このように、この文書は、帝国主義戦争の勃発にあたって、当時、プロレタリアートが当面している主要な問題点のすべてについての、マルクス主義的な方針の全体としての骨格を簡潔にのべたものです。当時ひきつづいて執筆されたレーニンの論文のほとんど――本巻に収められている「大ロシア人の民族的誇りについて」「よその旗をかかげて」「第二インタナショナルの崩壊」その他――はこの、文書に示された基本方針のそれぞれの側面を、いっそう深く詳細に展開したものです。

「大ロシア人の民族的誇りについて」

この論文は、戦争の激化するにつれて、戦争弁護のための欺瞞的な「愛国主義的」な宣伝、「祖国」や「民族性」についての論議が政府、反動的文筆家、社会排外主義者等等の大合唱としておこなわれているなかで、真の愛国主義、愛国主義と国際主義との相互関係はなにかについての、マルクス主義者の立場を明確にしめしたものです。

レーニンは、真の愛国主義、真の民族的誇りとは、自国の勤労大衆に暴行をくわえ、抑圧し、愚弄している、また他民族を抑圧して大ロシア人の品位をけがしている、地主、貴族、資本家に屈従することではなく、かれらに反抗し、自由と社会主義のためにたたかうことであることを強調しています。

またレーニンは、愛国主義と国際主義との関係について次のように強調しています。

「『他民族を抑圧する民族は自由にはなりえない』。一九世紀の一貫した民主主義の最も偉大な代表者であり、革命的プロレタリアートの教師となった、マルクスとエンゲルスはこう言った。そして民族的誇りのみちあふれている、われわれ、大ロシア人の労働者は、その隣人との関係を、偉大な民族をはずかしめるような農奴制的特権の原則のうえにうちたてるのではなく、平等の人間的原則のうえにうちたてる、自由で独立的な、自主的で、民主主義的で、共和主義的な、誇り高い大ロシアを、ぜがひでも、のぞんでい

る。このような大ロシアをのぞむからこそ、われわれは、つぎのように言うのである。あらゆる革命的手段で、自分の祖国の君主制、地主および資本家、すなわちわが祖国の最悪の敵とたたかう以外には、この二〇世紀に、ヨーロッパで（たとえそれが、ヨーロッパの最東部であっても）『祖国を擁護する』ことはできない。」

「大ロシア人に抑圧されている、すべての民族の完全な平等と自決権とを、このうえなく断固として、一貫して、大胆に、革命的に擁護するように、大衆を長期にわたって教育することが、ほかならぬ大ロシア人のプロレタリアートの利益からみて必要なのである」

「よその旗をかかげて」

この論文は、一九世紀のイタリア戦争などについてとったマルクスの態度をひきあいにだして、それとは歴史的段階のちがう現代の帝国主義戦争にたいする日和見主義的態度を合理化しようとする、ロシアのメンシェヴィキの代表者の一人ア・ポトレソフや、おなじ論法をつかっているカウツキーなどの立場を批判しながら、帝国主義戦争の歴史的特質、この戦争にたいするマルクス主義の戦術、社会排外主義の歴史的根源などをくわしくのべたものです。

レーニンは、この論文のなかで、

一、資本主義の歴史は、通例、(一)一七八九—一八七一年、(二)一八七一—一九一四年、(三)一九一四年—？に区分されているが、「フランス大革命からフランス＝プロシア戦争にいたる第一の時代は、ブルジョアジーの興隆の時代、彼らが完全な勝利をおさめた時代である。それは、ブルジョアジーの上向線〔の時代〕であり、一般にブルジョア民主主義運動の、とくにブルジョア民族運動の時代であり、命数のつきた封建的＝絶対主義的諸制度の急速な崩壊の時代である。第二の時代は、ブルジョアジーの完全な支配と衰退の時代であり、進歩的ブルジョアジーから、反動的な、さらに最も反動的な金融資本への移行の時代である。それは、新しい階級、現代民主主義派が勢力をととのえ、徐々に勢力を結集していった時代である。いまはじまったばかりの第三の時代は、ブルジョアジーを、第一の時代のあいだの封建領主と同じ「地位」においている。これは帝国主義の時代であり、また帝国主義から生ずる帝国主義的激動の時代である。」

二、マルクスは、第一の時代の、たとえば一八五九年のイタリア戦争のさい「どのブルジョアジーの勝利がいっそうのぞましいか」という問題を検討したが、これはマルクスが、当時は、ブルジョアジーこそが、上向線をすすみ、ただひとり圧倒的な力で封建的・絶対主義的制度に対抗できた主要な階級であり、歴史的に進歩的な役割を果たしていたのであり、戦争にくわわっているブルジョアジーのどちらの側の勝利が、民族的な、概して人民的な一般民主主義運動の発展を、より多くたすけることができるかということを考慮したからである。

また、ひかえめな自由主義運動をあらしのような民主主義運動に発展させること、いっそう広い、いっそう「平民

的な」大衆、すなわち一般的には小ブルジョアジー、とくに農民、最後に無産者階級の参加によって、ブルジョア民主主義運動を拡大し激化させることに、なによりも心をくばっていたからである。

三、しかし、第三の時代の国際的紛争の社会的、階級的内容は、これとは根本的に変化している。客観的な歴史的な情勢が根本的にかわっており、上向線をたどる資本の、封建制度にたいする闘争にかわって、下向線をたどりつつある、最も反動的な金融資本の、新しい勢力（プロレタリアート）にたいする闘争があらわれている。上向線をすすみ、歴史的進歩的役割をになっているものはプロレタリアートだけである。このような時代において国際的紛争を利用する正しい道は、国際的金融資本全体とたたかうことであり、帝国主義戦争を内乱に転化させ、自国の政府の敗北のためにたたかうことである。

などの点をきわめて明確にあきらかにしています。私たちは、この論文から帝国主義と帝国主義戦争の歴史的反動的な性格と、この戦争にたいしてとったレーニンの態度の正しさを十分に学びとるとともに、歴史的事件を評価するにあたっての弁証法的な方法のみごとな実例や、歴史的事件にたいするマルクス主義の戦術の基礎などを学びとることができるとおもいます。

「第二インタナショナルの崩壊」

この論文でレーニンは、第二インタナショナルのマルクス主義とインタナショナルの原則の完全な裏切りの本質を全面的にあばき出しながら、第二インタナショナルの「崩壊」の必然性とその「崩壊」をのりこえてすすむべき真の革命的な道をしめしています。その意味で、レーニンのこの論文も世界史的意義をもっており、今日でもなおあらゆる種類の日和見主義・偽マルクス・レーニン主義にたいする不動な闘争の武器のひとつになっています。

レーニンは、戦争と革命の問題でプレハーノフ・カウツキー一派のバーゼル宣言の厳粛な誓いをかなぐりすてた、帝国主義・植民地的略奪戦争を国民的・防衛的な戦争に見せかけようとする「幼稚な理論」とその裏切行動を正当化していることを糾弾しています。

レーニンは、帝国主義戦争は、「偶然的なものでなく金融資本の支配をもたらした資本主義の必然的産物である」とのべ、マルクス主義の戦争論を発展させています。またレーニンはカウツキーらが戦争がはじまるとバーゼル宣言の革命的規定は誤りだとか、かれら自身も承認した原則をすてて、ブルジョアの側にはしったことをするどく批判し、革命が決していって結局、革命の期待は幻想となったとか主観的願望や希望によって達成されるものでないことを教えました。レーニンは革命情勢なくして革命は不可能であり、また革命がおこるためには「強力な革命的大衆行動をおこす革命的階級の能力」という主体的条件がくわわる必要があると強調しています。そしてレーニンは「資本主義の崩壊を『はやめる』ために危機を「利用」し、コミューンと一九〇五年一〇―一二月の先例を指針とすべきである、

と。今日の諸政党が自分のこの義務を履行しないのは、それらの党の裏切りであり、政治的な死であり、自分の役割の放棄であり、ブルジョアジーの側に寝がえることである」とのべています。

またレーニンは、日和見主義と社会排外主義の生まれる歴史的根源・その諸条件、その意義と力について全面的に分析し、それといかに原則的にたたかうかに論及しています。また、レーニンは「変化した歴史情勢に応じた」「革命組織」を各国労働者のなかにつくらなければならないとの結論をひきだし、このことを世界の革命的労働者と社会主義者に訴えています。

とくにレーニンは、「最も巧妙に科学性と国際性をよそおった社会排外主義の理論はカウツキーが提起している超帝国主義」の理論であると社会排外主義とそれの裏切りをおおいかくし、たすけている「中央主義」にたいして、断固たる徹底的な政治的、思想的な闘争をしています。そしてマルクス主義の原則を歪曲し、または修正する日和見主義や修正主義と政治上、思想上の一線を画し、非妥協的にたたかうこと、これによってのみマルクス主義の戦闘性、純粋性をとりもどし、強化することができることを教えています。

「平和の問題」

この論文は、当時人々の関心のまととなっていた、平和の問題、これと関連して講和条件の問題についての態度を明らかにしたものです。

レーニンはこのなかで、(1)平和のスローガンは講和条件と関連させて提起すること、(2)講和条件は各国政府が提起しているような帝国主義的なものではなく、さまざまな国の社会主義者を統合できるものでなければならず、それは、あらゆる民族にたいする自決権の承認と、いっさいの「領土併合」の放棄を無条件にふくむものでなければならない、(3)このような要求は、すべての先進国における一連の革命、とくに社会主義の勝利なしには実現できない、(4)大衆のもつ平和の要求を、革命なしには実現できないことをも説明するために利用しなければならない、(5)そのためには日和見主義と絶縁しなければならない、(6)民族自決問題の核心は抑圧民族の社会主義者の行動にある、自国政府にたいする革命闘争と民族自決の要求とを結びつけなければならない、などの点を主張しています。

「社会主義と戦争」

この論文は一九一五年八月にひらかれたツィンメルヴァルド会議の直前に書かれたものです。ツィンメルヴァルド会議は社会排外主義にたいする各国労働者の批判がたかまるなかで、第一次世界大戦中に最初にひらかれた国際主義者の会議です。レーニンはこの会議の成功のために左派グループを結集し、多数派をしめていたカウツキー派とたたかいました。論文は左派グループの結集とその後の各国でのたたかいに大きな役割を演じました。この論文は、すでに紹介した「ヨーロッパ戦争における革命的社会民主主義派の任務」「戦争とロシア社会民主党」、およびその後ベルンでひらかれたロシア社会民主労働党在外支部会議の決議

（全集二一巻所収）などで展開された、戦争にたいする原則的な態度と戦術を、その後の論点をふくめて、集大成して簡明に逐条的に叙述されております。

本巻所収の論文ですでにふれられた点以外に、この論文であらたに展開されたおもな点は、(1)戦争にたいする社会主義者の態度、すなわち正義の戦争と不正義の戦争の問題、(2)ロシアにおけるボリシェヴィキ党のたたかい、とくにロシア社会民主党議員団の原則的なたたかい、(3)新カウツキー主義の危険性の暴露と第二インター内部の動揺分子にたいする態度、第三インター創設のための組織方針、(4)ロシアの社会民主主義派の分裂の歴史とその現状などです。私は、このなかでも、ロシア社会民主労働党議員団のたたかいが、現在の日本とは条件は違うとしても、その原則的な態度においてきわめて学ぶべきものがあると思います。また「ロシア社会民主主義派の分裂の歴史とその現状」の項は、ロシアにおけるマルクス主義と日和見主義との闘争の歴史を天才的に概括したもので、非常に教訓的なものです。

「ヨーロッパ合衆国のスローガンについて」

この論文は、さきにのべた一九一五年三月にひらかれたロシア社会民主労働党在外支部会議で採否を延期した「ヨーロッパ合衆国」のスローガンを採用しないことにした理由をあきらかにしたものです。この論文の内容のもつなによりも大きな歴史的意義は、レーニンがはじめて、帝国主義段階での一国における社会主義の勝利の可能性をのべている点にあります。レーニンは次のようにのべています。

「経済的および政治的発展の不均等性は、資本主義の無条件的な法則である。ここからして、社会主義の勝利は、はじめは少数の資本主義国で、あるいはただ一つの資本主義国でも可能である、という結論が出てくる」

このマルクス主義の革命理論において画期的な主張は、のちに「プロレタリア革命の軍事綱領」（本選集第七巻に収録）のなかでさらに展開され、その正しさはロシア革命の勝利によって証明されました。

なおこの論文には帝国主義同盟の階級的な性格についての貴重な指摘もふくまれています。

「革命の二つの方向について」

この論文は、ロシアに切迫した革命にそなえ、革命の勝利の条件がプロレタリアートと農民の同盟にあることをかさねて強調し、プレハーノフ、とくにトロツキーの危険な理論を批判しています。

レーニンはトロツキーについて「トロツキーの独創的な理論は、ボリシェヴィキからは、プロレタリアートの断固たる革命的闘争への呼びかけと、プロレタリアートによる政治権力の獲得への呼びかけをとり、メンシェヴィキからは、農民の役割の「否定」をとった」と指摘し、この立場が、ロシア革命においてプロレタリアートと指導権を争っている自由主義的ブルジョアジーの方向に不断に転落してきた、プレハーノフ等メンシェヴィキをたすけるものであると批判しています。

「社会主義革命と民族自決権（テーゼ）」

これは、本選集第七巻におさめられている「自決にかんする討論の総括」とともに、社会主義革命と民族自決権との関係についてのマルクス・レーニン主義の原則を定式化した綱領的な文書です。

レーニンは、すでに一九一〇年からはじまったロシアの労働運動の新しい昂揚期にあたって、諸民族の墓場といわれたロシアで、民主主義革命の勝利の条件である労働運動の民族をこえた統一を達成するために、民族問題を重視し、「民族問題についての批判的覚え書」「民族自決権について」（本巻所収）その他の論文で、ボリシェヴィキ党の民族綱領の基礎をきずきました。その主な内容は、民族自決権すなわち分離して独立の国家を創設する権利、当該国家の構成部分としてのこることをのぞむ民族のための地方自治制、あらゆる民族と言語の完全な同権などです。「社会主義革命と民族自決権」は、帝国主義と帝国主義戦争の一般的条件のもとで、この民族綱領をいっそう発展させたものです。

レーニンはこのなかで、(1)帝国主義にあっては、抑圧民族と被抑圧民族への諸民族の分裂が本質的である。抑圧民族の社会主義者は自国によって抑圧されている植民地および諸民族の民族自決権を要求してたたかい、これを社会主義革命と結びつけなければならない。被抑圧民族の社会主義者は、抑圧民族の労働者と被抑圧民族の労働者との統一を実現しなければならない。(2)民族自決権とは、もっぱら政治的意味での独立権、抑圧民族から自由に政治的に分離する権利を意味するだけであり、けっして分離、細分、小国家の形成の要求と同じではない。社会主義者は民主主義的中央集権制のもとでの大国家を有利とかんがえ、また社会主義の目的は究極には諸民族を融合させるところにあるが、すべての被抑圧民族の完全な解放の行なわれる過渡期を通じてはじめて諸民族の融合に到達できる。などの点を強調しています。そして民族解放運動を社会主義革命の構成部分とすることに反対した第二インタナショナルの指導者たちや、トロツキー、ブハーリン、ピャタコフなどの見解を論破しながら、「他民族を抑圧する民族は自由ではありえない」というマルクスの革命的立場を擁護し、これを発展させています。

なお本巻には、民族問題を扱った論文として「ユニウスの小冊子について」が収められています。これはドイツ社会民主党の左派であったユニウス（ローザ・ルクセンブルグ）を激励しながらも、彼女が「帝国主義の時代には、民族戦争はありえない」と書いていることに同志的な批判をあたえたものです。

「第二回社会主義者会議へのロシア社会民主労働党中央委員会の提案」

これは一九一六年四月スイスのキンタールでひらかれたツィンメルヴァルド派の第二回国際会議にたいする提案です。

この提案でとくに強調されている問題は講和の問題、それと関連して「併合」の問題です。提案は、強盗戦争を行

なっているブルジョア政府のもとでは民主主義的講和などはありえないこと、またブルジョア政府とたたかわずに口さきだけで民主主義的講和を提案している第二インタナショナルの指導者たちの欺瞞は社会主義にたいする裏切りであることを暴露しなければならないとのべ、一連の革命がなければ民主主義的講和は不可能であり、自国の政府の敗北のために帝国主義戦争を内乱に転化させるためにたたかわなければならないことを強調しています。また「併合」の問題についての唯一の正しい回答は、民族自決権を要求してたたかうことであることを強調しています。

この会議では、帝国主義戦争の内乱への転化、自国政府の敗北、第三インタナショナルの組織などの提案は採択されませんでしたが、ツィンメルヴァルド会議のときよりも左翼勢力が優勢で、これらの分子から一九一九年の第三インタナショナル（共産主義インタナショナル）が形成されることになりました。

四

II　第二の系列の論文

「資本主義の最高の段階としての帝国主義」はレーニンの二回目の亡命先のスイス（一九一六年の一―六月のあいだ）で書かれたものです。

この労作は、レーニン自身がその序文のなかでのべているように、「現在の戦争と現在の政治とを評価するさいそれを研究しておかなければなにも理解できない根本的な経済問題、すなわち帝国主義の経済的本質の問題」をあきらかにするために、書かれたものです。すでに各論文でみたような、帝国主義戦争にたいするマルクス・レーニン主義の原則的な態度と戦術は、この戦争の歴史的、階級的な性格にたいする正しい認識を前提条件としています。そしてこの認識は帝国主義のあれこれの政策ではなく、その経済的本質を明らかにしてはじめて達成されます。レーニンはこのために「帝国主義論」を書いたのです。またこの労作はカウツキー主義を粉砕するためにも注意をはらっています。すでにみた第一系列の諸論文は「帝国主義論」とあわせ読むことによって、いっそう深い理解にすすむことができます。

マルクスは「資本論」によって主として帝国主義以前の資本主義の運動法則をあますところなくあきらかにしましたが、レーニンは「帝国主義論」によって、このマルクス主義の経済理論を資本主義の帝国主義段階に適用し、新しい段階に発展させました。「帝国主義論」は「資本論」以後あらわれたマルクス主義経済学の最大の金字塔です。

レーニンはこの労作のなかで、「すべての交戦列強と全世界との経済生活の基礎にかんする資料の総体」を分析して、

(1)、自由競争は、生産の集積と大企業の制覇を生みだし、企業家の独占団体―トラスト、カルテル、シンジケート、コンビナート等―がうまれ、二〇世紀の初頭に自由競争は独占に転化したこと、また銀行業務の集積がすすみ、独占

的銀行資本と独占的産業資本の融合した金融資本がうまれ、資本主義は資本一般の支配から金融寡頭制の支配に転化したこと、

(2)、資本輸出がとくに重要な役割を演ずるようになり、資本家の国際団体（国際カルテル等）による世界の分割がすすみ、列強の間に世界（農業国、工業国を問わず）の分割が完了したこと、

(3)、帝国主義は資本主義の特殊の段階、最高の段階であり、資本主義から社会主義への過渡であること、

(4)、帝国主義に固有の傾向としての資本主義の寄生性と腐朽は、プロレタリアートの上層を買収し、労働者を分裂させ、日和見主義を強める。社会排外主義は日和見主義の成熟と腐朽であること、

(5)、カウツキーの「超帝国主義論」は平和な帝国主義同盟を夢想して、帝国主義の矛盾をかくそうとしている。資本主義発展の不均等性の激化は、世界の分割と再分割のための闘争を尖鋭化し、帝国主義戦争を不可避とする。帝国主義は社会のあらゆる面での反動、諸矛盾の極端な激化、民族抑圧と併合の熱望の激化をもたらす。

(6)、帝国主義は資本主義のあらゆる矛盾を激化させる。それは死滅しつつある資本主義であり、社会主義革命の前夜であること、

などを証明しています。

レーニンは、帝国主義の研究のために、この時代のさまざまな国の経済、技術、歴史、地理、政治、外交、労働運動、植民地問題その他についての世界の文献を読破し、二〇冊ものノートにくわしい抜粋、概要、覚え書、表などをつくりました。これはレーニン全集三九巻に「帝国主義論ノート」として収められています。本巻に収めた「世界の分割状況」は、このノートからとったものです。

Ⅲ　第三の系列の論文

「カール・マルクス」

この論文はマルクスの全生涯とマルクス主義の全体についての、レーニンの手になる簡潔な解説です。本選集第五巻に収められている「マルクス主義の三つの源泉と三つの構成部分」などとともに、マルクス主義の学習にとって欠くことのできない文献です。

「弁証法の問題について」

この小論文は、レーニンの「哲学ノート」（全集三八巻）から収録したものです。レーニンは、ロシアに切迫した革命にそなえるために、この時期に前述の「帝国主義論ノート」や、農業問題についての膨大な資料の抜粋などのほか、哲学とくに弁証法を改めてふかく研究し、ヘーゲルの「論理学」「歴史哲学」「哲学史」やアリストテレス、フォイエルバッハなどの著作から多くの抜き書きをつくりました。この弁証法の研究が、複雑な諸情勢のもとで革命をあやまりなく指導するうえで大きな武器となったものと思われます。「弁証法の問題について」は、この研究過程での覚え書きで、弁証法の核心である矛盾の問題を、深く鋭く解明したものです。

レーニン生誕100年記念

レーニン10巻選集

第6巻

日本共産党中央委員会
レーニン選集編集委員会 編

大月書店

はしがき

このヴェ・イ・レーニン10巻選集は、レーニン生誕百年記念出版として日本共産党中央委員会レーニン選集編集委員会の責任で編集し刊行するものである。

一九世紀の四〇年代、マルクスとエンゲルスによってつくりあげられた科学的社会主義の学説のもつ不滅の真理性と豊かな創造性は、一世紀余にわたる世界史の発展と国際労働者階級が示したすべての闘争によって、あますところなく実証されている。

レーニンは、マルクスとエンゲルスの学説を正しく継承し、一九世紀末から二〇世紀の初めにかけて、帝国主義とプロレタリア革命の時代の新しい歴史的条件のもとで、哲学、経済学、社会主義というマルクス主義の三つの構成部分全体にわたって、マルクス主義を創造的に発展させた。レーニンは、社会主義革命とプロレタリアートの執権(ディクタツーラ)の理論と戦術を仕上げ、労働者階級の前衛部隊としての党の建設、ブルジョア民主主義革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーの思想、ブルジョア民主主義革命の社会主義革命への成長転化、労働者階級と農民の同盟、帝国主義の理論的分析、一国における社会主義革命の勝利の可能性、社会主義革命と民族解放運動の結合、社会主義建設の道と方法等々の問題について、マルクス主義を新しい段階に発展させた。

マルクスによって創始され、レーニンによって発展させられたマルクス・レーニン主義は、現代の国際プロレタリアートのまえに提起されたすべての根本問題について原則的な解答をあたえている。マルクス・レーニン主義は、今日、全世界のほとんどすべての国で労働者階級の前衛党の行動の指針となり、社会主義世界体制、資本主義諸国の革命運動、民族解放運動を三つの原動力とする現代の人民運動を指導する偉大な物質的力となっている。

日本の労働者階級と人民の闘争を勝利にみちびく最も重要な保障は、マルクス・レーニン主義の基本的諸命題を、

現代の複雑な諸条件や、わが国の特殊性に応じて具体的に適用し、発展させる創造性と、マルクス・レーニン主義の原則を厳密に擁護する原則性とを正しく統一することである。

この選集の発刊の目的、編集の基本的観点も、この要求にこたえることにある。

編集にあたっては、(1)レーニンの全労作をつらぬく思想と基本命題を全体として理解できるようにすること、(2)わが国の歴史的条件、特殊性を考慮し、日本の労働者階級と人民の実践的課題にこたえること、(3)今日、国際共産主義運動とマルクス・レーニン主義の直面している重要な試練を正しくのりこえ、マルクス・レーニン主義と国際共産主義運動の歴史的発展をかちとる課題にこたえることに主眼をおいた。これらの点は、この選集のすぐれた特徴となっていると確信している。

このような選集は、日本の民主運動や革命運動の発展に貢献し、わが国におけるマルクス・レーニン主義の発展を願う多くの人々から、久しく求められていたものである。

この選集は、日本の独立、民主、平和、中立、生活向上をめざしてたたかっているすべての人々に、喜びむかえられるものと確信する。

この選集が、祖国を愛し、平和と民主主義を求めるすべての人々、さらに社会主義、共産主義日本の実現を願う人人にひろく読まれ、民主運動と革命運動の実践のなかで生きいきと活用されることを心から期待してやまない。

＊　＊　＊

選集の刊行にあたって、より正確で、より立派な翻訳に仕上げるために努力してくださった方がた、発行、発売にあたって全面的な協力をいただいた大月書店の方がたにたいして、あらためて謝意を表するものである。

一九六九年一一月

日本共産党中央委員会
レーニン選集編集委員会

凡　例

一　本巻は、レーニン生誕百年記念出版として日本共産党中央委員会レーニン選集編集委員会の責任で編集し刊行するものである。

一　編集にあたっては、邦訳『レーニン全集』（第四版）および『レーニン選集』、国民文庫などの訳文を原則として使用し、全集第五版にもとづいて手をくわえた。

一　原文のゴシック体の箇所は訳文でもゴシック体にし、イタリック体の箇所には傍点を付し、ゴシック体で隔字体の箇所には黒丸を付し、イタリック体で隔字体の箇所には白丸を付した。ただし見出しのところなど、この方針によらなかった場合もある。

一　レーニンの原注は＊をもって示し、本文の段落末にかかげた。

一　事項注は、本文中の該当箇所に通し番号（一）（二）……をつけて巻末に一括してかかげた。この注は全集第四版および第五版の注を参考にして多少簡略にした。そのなかに出てくるレーニンの著作のページ数は邦訳『レーニン全集』のものであり、マルクス、エンゲルスの著作のページ数は邦訳『マルクス＝エンゲルス全集』、同『選集』（全八冊）のものである。また、訳文については、若干手をくわえた。なお簡単な注は〔　〕に入れて本文中に示した。

一　人名注は、全集第五版の注を参考にしてごく簡略にして作成し、アイウエオ順に配列して巻末に一括してかかげた。

一　人名、地名は現地読みに近く表記することを原則にしたが、慣用に従ったものもある。

目 次

カール・マルクス(一)
(略伝とマルクス主義の解説)

序文

ここに単独の抜刷りとして刊行するカール・マルクスについての論文は、私が一九一三年(私の記憶しているかぎりでは)にグラナート辞典のために書いたものである。この論文の末尾には、マルクスにかんする、主として外国の文献の、かなり詳しい目録がつけてあった。この目録は、この版では省略した。それから、この辞典の編集部は編集部で、検閲を考慮して、マルクスの革命的戦術を叙述したこの論文の終りの部分を削除した。原稿をどこかクラコフかスイスの私の書類のなかに残してきたので、残念ながら、私はここでこの終りの部分を再録することができない。ただ、論文のこの終りの部分で、とりわけ、一八五六年四月一六日付のエンゲルスにあてたマルクスの手紙から、マルクスが次のように書いている箇所を引用したことを覚えているだけである。「ドイツでは、なにか農民戦争の再版のようなもので、プロレタリア革命を支持できるかどうかで万事が決まるであろう。そうなったら事はすばらしかろう(二)。」これこそ、一九〇五年以来、わが国のメンシェヴィキが理解しなかったことである。彼らは、いまでは、社会主義を完全に裏切り、ブルジョアジーの側へ寝がえりするまでに転落してしまった。

エヌ・レーニン

モスクワ、一九一八年五月一四日

カール・マルクスは、一八一八年の新暦五月五日、トリール市（プロイセン、ライン州）で生まれた。彼の父は弁護士で、一八二四年に新教に改宗したユダヤ人であった。家庭は裕福で、教養があったが、革命的ではなかった。トリールの中学校を終えたのち、マルクスは、はじめボンの大学に、ついでベルリンの大学にはいり、法学を学んだが、主として研究したのは歴史と哲学であった。彼は一八四一年に大学の課程を終え、エピクロスの哲学についての学位論文を提出した。当時まだマルクスは、その見解からすれば、ヘーゲル派の観念論者であった。ベルリンでは彼は、「ヘーゲル左派(一)」の仲間（ブルーノ・バウアーその他）にくわわっていた。彼らは、ヘーゲルの哲学から無神論的な、また革命的な結論をひきだそうとつとめていた人々であった。

　大学を終えてから、マルクスは、教授になろうと思って、ボンに移り住んだ。だが政府は、一八三二年にはルートヴィヒ・フォイエルバッハの講座を奪い、一八三六年には彼を大学に復帰させることをまたも拒み、一八四一年には少壮教授ブルーノ・バウアーからボンで講義をする権利をとりあげるといった状態だったので、この政府の反動政策をみて、マルクスは、学者として身をたてることを思いとどまった。そのころ、ドイツにおけるヘーゲル左派の見解は、非常に急速に進歩していた。とくにルートヴィヒ・フォイエルバッハは、一八三六年以来神学の批判を始め、唯物論へ転向しはじめた。一八四一年には、彼の見解のうちで、唯物論が完全に勝利を占めた（『キリスト教の本質』）。一八四三年には、同じく彼の『将来の哲学の根本問題』が刊行された。エンゲルスは、後年、フォイエルバッハのこれらの著作について、次のように書いている。これらの著作の「解放のはたらきというものは、それをみずから体験した人でなくては、想像することとさえできまい」。「われわれ」（すなわち、マルクスをもふくめたヘーゲル左派）「は、すべてたちまちフォイエルバッハの徒になっていた(二)」と。そのころ、ヘーゲル左派とある接触点をもっていたラインの急進的ブルジョアが、ケルンに『ライン新聞(三)』という反政府的な新聞を創刊した（一八四二年一月一日から出はじめた）。マルクスとブルーノ・バウアーは、おもだった寄稿家として描かれたが、マルクスは、一八四二年一〇月に編集長となって、ボンからケルンに移転した。マルクスが編集するようになってから、この新聞の革命的民主主義的傾向は、ますます明確なものになった。そこで政府は、はじめこの新聞に二重三重の検閲を課したが、ついで一八四三年一月一日には、同紙の発行をまったく禁止することに決めた。マルクスは、この期限以前に編集者をやめなけれ

ばならなかったが、彼が身をひいても、新聞はけっきょくたすからず、一八四三年三月に禁止された。エンゲルスは『ライン新聞』にのったマルクスの最も大きな論文のうち、のちにあげるもの（文献を見よ）[6]のほかに、さらにモーゼル河流域地方の葡萄栽培農民の状態についての論文[7]をあげている。新聞の仕事をしてみてマルクスは、自分に経済学の知識が不足していることをさとった。そこで、彼は熱心にその研究にとりかかった。

一八四三年にマルクスは、クロイツナッハで、幼な友だちで、すでに学生時代に婚約していたイェンニー・フォン・ヴェストファーレンと結婚した。彼の妻は、プロイセンの反動貴族の家の出であった。彼女の兄は、最も反動的な時代の一つである一八五〇—一八五八年に、プロイセンの内務大臣であった。一八四三年の秋にはマルクスは、アルノルト・ルーゲ（一八〇二—一八八〇年。ヘーゲル左派、一八二五—一八三〇年は獄中にあり、一八四八年以後亡命、一八六六—一八七〇年以後はビスマルク派）といっしょに国外で急進的な雑誌を発行する目的で、パリにおもむいた。だが、この雑誌『独仏年誌』[8]は、第一号が出ただけであった。ドイツ国内でそれを秘密に配布することが困難だったため、またルーゲと意見の相違をきたしたために、停刊されたのである。マルクスは、この雑誌に書いた諸論文のなかでは、すでに革命家として現われ、「いっさいの現存事物への仮借ない批判」、とくに「武器による批判[9]」を宣言し、大衆とプロレタリアートに呼びかけている。

一八四四年九月、フリードリヒ・エンゲルスが数日間パリにきたが、このとき以後彼はマルクスの無二の親友となった。二人は、そのころのパリの革命的諸グループのわきたった生活（とりわけ重要であったのは、一八四七年にマルクスがその著書『哲学の貧困』のなかできっぱり始末をつけたプルードンの学説であった）に最も熱心に参加し、小ブルジョア的社会主義のいろいろな学説と激しくたたかいながら、革命的なプロレタリア的社会主義すなわち共産主義（マルクス主義）の理論と戦術をつくりあげた。あとの文献にあげたこの時期（一八四四—一八四八年）のマルクスの著作を見よ。一八四五年にマルクスは、プロイセン政府の強硬な要求によって、危険な革命家としてパリから追放された。彼はブリュッセルに移った。一八四七年の春、マルクスとエンゲルスは、秘密の宣伝団体である「共産主義者同盟[10]」にくわわり、この同盟の第二回大会（一八四七年一一月、ロンドン）に参加して有力な役割を果たし、大会の委任によって、一八四八年二月に刊行された有名な『共産党宣言』を起草した。この著作のなかには、新しい世界観、社会生活の分野をもふくむ首尾一貫した唯物論、

最も全面的で深遠な発展学説としての弁証法、階級闘争と新しい共産主義社会のつくり手であるプロレタリアートの世界史的・革命的役割とについての理論の概略が、天才的に明瞭に、あざやかに描きだされている。[二一]

一八四八年の二月革命が起こったとき、マルクスはベルギー[二二]から追放された。彼は、ふたたびパリにきたが、三月革命ののち、そこからドイツに、ほかならぬケルンに移った。そこでは、一八四八年六月一日から一八四九年五月一九日まで『新ライン新聞』[二三]が発行され、その編集長はマルクスであった。新しい理論の正しさは、一八四八―一八四九年の革命的諸事件の経過によってみごとに確証されたが、これはまた後日、世界のすべての国々のすべてのプロレタリア運動と民主主義運動とが確証したところでもあった。勝利した反革命は、はじめマルクスを裁判にかけ（一八四九年二月九日に無罪になった）、次にはドイツから追放した（一八四九年五月一六日）。マルクスは、はじめパリに[二四]行ったが、一八四九年六月一三日のデモンストレーションのあとでそこからも追われて、ロンドンに去り、死ぬまでそこに住んだ。

マルクスとエンゲルスの往復書簡（一九一三年出版[二五]）がとくにまざまざと明らかにしているように、亡命生活の環境は、きわめて苦しいものであった。貧困は、マルクスとその家族をまったく息づまらせた。もしエンゲルスが絶えず献身的な財政的援助をしなかったなら、マルクスは、『資本論』を完成できなかったばかりか、貧困の圧迫のためにきっと倒れたであろう。そのうえ、小ブルジョア的社会主義、一般に非プロレタリア的な社会主義のいろいろな学説や潮流が優勢であったため、マルクスはそれと絶えず仮借ない闘争をおこなわなければならなかったし、ときには気違いじみた途方もない人身攻撃を撃退しなければならなかった（『フォークト君』[二六]）。マルクスは、亡命者のいろいろな小サークルから離れて、おもに経済学の研究に力をそそぎながら、いくつかの歴史的労作（文献を見よ）のなかでその唯物論的理論を仕上げた。マルクスは、その著作『経済学批判』（一八五九年）と『資本論』（第一巻は一八六七年刊）のなかで、この経済学に変革をおこさせた（あとのマルクスの学説の項を見よ）。

五〇年代の終わりから六〇年代にかけて民主主義運動が復活した時期は、マルクスをふたたび実践活動に呼びよせた。一八六四年（九月二八日）に、有名な第一インタナショナルすなわち「国際労働者協会」が、ロンドンで創立された。マルクスはこの協会の中心人物で、協会の最初の『宣言』[二七]と多くの決議や声明や宣言の起草者であった。マルクスは、さまざまな国の労働運動を統合し、さまざまな

形態の非プロレタリア的・前マルクス主義的社会主義（マッツィーニ、プルードン、バクーニン、イギリスの自由主義的組合主義、ドイツにおけるラッサール派の右翼的偏向など）を共同行動の道に向かわせるようにつとめ、これらすべての宗派や小学派の理論とたたかいながら、さまざまな国の労働者階級のプロレタリア的闘争の統一的な戦術をきたえあげた。パリ・コミューン（一八七一年）をマルクスは、きわめて深く、適切に、みごとに、行動的に、革命的に評価したが（『一八七一年のフランスにおける内乱』）、そのパリ・コミューンが没落したあと、またバクーニン派によってインタナショナルが分裂させられたあとでは、ヨーロッパでインタナショナルが存続することは不可能になった。インタナショナルのハーグ大会（一八七二年）ののちマルクスは、インタナショナルの総評議会をニューヨークに移転させた。第一インタナショナルはその歴史的役割を終わって、世界のすべての国々の労働運動がはるかに巨大な成長をとげる時代、すなわち、労働運動の幅がひろがり、個々の民族国家を基盤にして、大衆的な社会主義的労働者党がつくりだされる時代に、席をゆずった。

　インタナショナル内での激しい活動と、さらに激しい理論的研究とのために、マルクスの健康はすっかり破壊されてしまった。彼は、新しい資料を大量に集め、いくつもの外国語（たとえばロシア語）を研究しながら、経済学をつくりかえ『資本論』を完成する仕事をつづけたが、しかし病気は彼に『資本論』を完成するのを許さなかった。

　一八八一年一二月二日、彼の妻が死んだ。一八八三年三月一四日、マルクスはその安楽椅子によったまま、静かに永遠の眠りについた。彼はその妻とともに、ロンドンのハイゲート墓地に葬られている。マルクスの子供の幾人かは、一家がひどく困窮していたころ、ロンドンで夭折した。三人の娘はイギリスとフランスの社会主義者にとついだ。エリナー・エーヴリング、ローラ・ラファルグ、ジェニー・ロンゲがそれである。ジェニー・ロンゲの息子はフランス社会党の党員である。

マルクスの学説

　マルクス主義とは、マルクスの見解と学説との体系である。マルクスは、人類の三つの最も先進的な国に属する、一九世紀の三つの主要な思想的潮流の継承者であり、天才的な完成者であった。この潮流とは、ドイツの古典哲学、イギリスの古典経済学、一般にフランスの革命的諸学説と結びついたフランス社会主義である。マルクスの見解は、彼の敵でさえ認めているように、すばらしく首尾一貫した

全一的なものであって、その総体において、世界のすべての文明国の労働運動の理論および綱領である、近代唯物論および近代の科学的社会主義となっているので、われわれは、マルクス主義の主要な内容であるもの、すなわちマルクスの経済学説を述べるまえに、まず彼の世界観一般を略説しなければならない。

哲学的唯物論

マルクスの見解がかたちづくられた一八四四―一八四五年以来、彼は唯物論者であり、ことに、L・フォイエルバッハの支持者であった。後になってもマルクスは、フォイエルバッハの唯物論が十分に首尾一貫した、全面的なものでなかったことだけが、フォイエルバッハの弱点である、と考えていた。マルクスは、フォイエルバッハの世界史的、「画期的」な意義は、まさにフォイエルバッハがヘーゲルの観念論ときっぱり縁を切って唯物論を宣言したことである、と認めていた。唯物論は、すでに「一八世紀に、とくにフランスで、既成の政治的諸制度にたいする闘争であり、同時に……宗教および神学にたいする闘争であったばかりでなく、さらに……あらゆる形而上学」（「しらふの哲学」と区別しての「酔っぱらった思弁」という意味での）[二]「にたいする……闘争でもあった」（『遺稿集』中の『聖家族』）。マルクスはこう書いている、「ヘーゲルにとっては、彼が理念という名で一つの独立の主体にさえ転化させている思惟過程が、現実的なもののデミウルゴス」（造物主、創造者）「である。……私にあっては、反対に、観念的なものは、人間の頭脳のなかでおきかえられ翻訳された物質的なものにほかならない」（『資本論』第一巻、第二版あとがき）[三]。F・エンゲルスは、マルクスのこの唯物論哲学に完全に一致し、またそれを叙述しながら、『反デューリング論』（その項を見よ）――マルクスはこの著作を原稿で読んでいた――で、次のように書いている。……「世界の統一は、それの存在ということにあるのではなく、……それの物質性にある。そして、この物質性は、……哲学と自然科学との長い、長々しい発展によって証明ずみのものである。……運動は、物質の存在の仕方である。運動のない物質、物質のない運動は、いつ、どこにもなかったし、あるいはありえない。……思惟や意識とはいったいなんであり、またどこから生まれてくるのか、とたずねてみると、それらは人間の脳髄の産物であること、そして、人間そのものが自然の一産物で、それ自身の環境のなかで、またこの環境とともに発展してきたものであることがわかる。そうだとすると、人間の脳髄の生みだしたものも、結局は、やはり自然の産物なのだから、その他の自然の連関と矛盾しな

いで照応するのは、あたりまえのことである』。「ヘーゲルは観念論者であった。つまり、彼には、彼の頭のなかの思想は、現実の物と過程との多かれ少なかれ抽象的な模写」(Abbilder エンゲルスはときには「転写」といっている)「とは考えられないで、逆に、物とその発展とは、彼には、すでに世界のできるまえからどこかに存在していた『理念』の現実化された模写としか考えられなかった」。[三〇]F・エンゲルスがフォイエルバッハの哲学についての彼自身とマルクスとの見解を叙述した著作『ルートヴィヒ・フォイエルバッハ』は一八四四—一八四五年に彼とマルクスがヘーゲル、フォイエルバッハおよび唯物史観の問題について書いた旧稿をあらかじめ読みかえしてから印刷に付されたものであるが、この著作のなかでエンゲルスは次のように書いている。「いっさいの哲学の、とくに近代の哲学の大きな根本問題は、……存在にたいする思惟の、自然にたいする精神の関係の問題、……なにが根源的なものか、精神かそれとも自然かという問題である。……それにどう答えたかに応じて、哲学者たちは、二大陣営に分裂した。自然にたいして精神が根源的であると主張した人々、したがって、結局、あるなんらかのかたちの世界創造を認めた人々は、……観念論の陣営を形成した。自然を根源的なものとみた他の人々は、唯物論の種々の学派に属する』。(哲学的)観念論と唯物論という概念をこれ以外の意味につかうことは、すべて混乱をひきおこすだけである。マルクスは、なんらかの仕方でつねに宗教と結びついている観念論ばかりでなく、今日とくにひろまっているヒュームやカントの見地、すなわち、いろいろな形をとった不可知論、批判主義、実証主義をも、断固として排撃し、このような哲学は観念論への「反動的な」譲歩であり、よくいっても、「唯物論をかげでは容認しながら人まえでは否認する、恥ずかしがり屋のやり方」であると見ていた。[三一]この問題については、右にあげたエンゲルスとマルクスの諸著作のほかに、一八六八年一二月一二日付のマルクスのエンゲルスへの手紙を見よ。そこでマルクスは、有名な自然科学者T・ハックスリが、いつもより「いっそう唯物論的」な演説をおこない、「われわれが現実に観察し、考えるかぎり、われわれはけっして唯物論から離れることができない」と承認したことを指摘するとともに、ハックスリが不可知論、ヒューム主義への「逃げ道」をつくったことを非難している。[三二]とくに指摘しなければならないのは、自由と必然性の関係についてのマルクスの見解である。「『必然性が盲目なのは、それが理解されないかぎりにおいてにすぎない』。自由とは必然性の認識である」(エンゲルス『反デューリング論』)、いいかえれば、自然の客観的合法則性を承認し、必

然性が弁証法的に自由へ転化すること（まだ認識されてはいないが、しかし認識できる「われわれのための物」に転化され、「物の本質」が「現象」に転化されるのと同様に）を承認することである。マルクスとエンゲルスは、「古い」唯物論——フォイエルバッハの唯物論（ましてビュヒナー＝フォークト＝モレショットの「俗流」唯物論はもちろんのこと）をふくめて——の基本的欠陥は、次の点にあると考えた。（一）この唯物論は、「主として機械的」であり、化学や生物学の（今日ではさらに物質の電気理論の、とつけくわえるべきだろう）最新の発展を考慮にいれていなかった。（二）古い唯物論は非歴史的、非弁証法的（反弁証法という意味で形而上学的）であって、発展の見地を首尾一貫して、全面的に貫いていなかった。（三）彼らは、「人間の本質」を抽象的に理解して、これを（具体的＝歴史的に特定の）「社会的諸関係の総体」と理解せず、したがって世界を「変える」ことが肝心であるのに、世界を「解釈する」だけであった。すなわち、「革命的・実践的活動」の意義を理解しなかった。

弁証法

マルクスとエンゲルスは、最も全面的で、最も内容に富み、また深遠な発展学説としてのヘーゲルの弁証法を、ドイツ古典哲学の最大の達成であると考えた。彼らは、発展、進化の原理についてのこれ以外の定式化はすべて一面的で、内容上まずしく、自然と社会発展の実際の歩み（しばしば飛躍、激変（カタストロフ）、革命をともなうところの）をゆがめ、かたわにするものであると考えた。「マルクスと私とは、おそらく、意識的な弁証法を……」（ヘーゲル学説をもふくめた観念論の混乱から）「救いだして、唯物論的な自然観……にとりいれた、ほとんど唯一の人間であろう」。「自然は弁証法の検証となるものである。そして近代の自然科学は、こういう検証のために、きわめて豊富な」（これが書かれたのは、ラジウムや、電子や、元素の変換等々が発見されるまえのことなのだ！）「日ごとにつみかさねられていく材料を供給し、それによって、自然ではものごとはけっきょく形而上学的にではなく弁証法的におこなわれているということを証明した」(三)。

エンゲルスはこう書いている。「世界はできあがった諸事物の一つの複合体としてではなしに、諸過程の一つの複合体——そこでは、みかけのうえで固定的な諸事物も、われわれの頭脳のなかにあるこれら諸事物の思想的映像である諸概念におとらず、生成と消滅の絶えまない変化のうちにある……——として把握されるべきであるという偉大な根本思想——この偉大な根本思想は、ことにヘーゲル以後

は、普通の人々の意識にかなりしみこんでいるので、この一般的なかたちではおそらく、ほとんどなんの異論もなかろう。しかし、この根本思想を口さきだけで承認することと、これを実際に個別的に当面の研究のそれぞれの分野で適用することとは、別のことである」。「弁証法的哲学のまえには、究極妥当なもの、絶対的なもの、神聖なものは、なにひとつ存在しない。この哲学は、いっさいにつき、いっさいにおいて、それが消滅するものであることを示す。そして、この哲学のまえには、生成と消滅の不断の過程、低いものから高いものへの限りない上昇の不断の過程よりほかには、なにものも存在しない。そして、この過程の、思惟する脳髄における、たんなる反映が、すなわちこの哲学なのである」。だから、マルクスによれば、弁証法とは「外界ならびに人間の思惟の運動の一般的諸法則の科学」である。[註]

マルクスは、ヘーゲル哲学のこの側面、革命的な側面をうけついで、発展させた。弁証法的唯物論は、「他の諸科学のうえにたつ哲学を必要としない」。これまでの哲学のうちでなおひきつづいて残るのは、「思惟とその諸法則とにかんする学問——すなわち形式論理学と弁証法」である。[註]そして弁証法は、マルクスの理解するところでも、またヘーゲルによっても、今日、認識論、グノセオロギアといわれるものをふくんでいて、この認識論は自分の対象を同様に歴史的に考察して、認識の発生と発展、無知識から認識への移り行きを研究し総括しなければならないのである。

今日では、発展、進化の思想はほとんど完全に社会的意識のうちにはいりこんでいるが、これは、ヘーゲル哲学をつうじてではなく、ほかの道をとおってはいったのである。けれども、マルクスとエンゲルスがヘーゲルにもとづいて定式化したかたちでは、この思想は、流行の進化思想にくらべてはるかに全面的であり、またはるかに内容に富んでいる。すでに経過した諸段階をくりかえすかのように見えながら、以前とは違った仕方で、いっそう高い基盤のうえでそれを繰りかえす発展(「否定の否定」)、直線的におこなわれるのではなしに、いわば螺旋(らせん)をえがく発展、——飛躍的な、激変的な、革命的な発展、——「漸次性の中断」、量の質への転化、——ある物体に、またはある現象の範囲内で、あるいはある社会の内部で作用しているさまざまな力や傾向の矛盾、衝突によってあたえられる発展への内的衝動、——おのおのの現象の、すべての側面の相互依存性と、最も緊密な、切り離すことのできない連関(そのうえ歴史はつぎつぎに新しい側面をひらいてみせる)、単一の、合法則的な世界的運動過程をなしている連関——以上が、いっそう豊富な(普通の発展学説にくらべて)発展学説と

しての弁証法の若干の特徴である。（シュタインの「不器用な三分法」を嘲笑し、それを唯物弁証法と混同するのはばかげていると述べている一八六八年一月八日付のマルクスのエンゲルスへの手紙を参照せよ。[26]）

唯物史観

マルクスは、古い唯物論の不徹底なこと、不完全なこと、一面的なことを認識した結果、「社会にかんする科学……を唯物論的な基礎と調和させ、この基礎の上にたてなおす」[27]必要があるという信念に達した。およそ唯物論が意識を存在から説明するものであってその逆でないなら、人間の社会生活に適用された唯物論は、社会的意識を社会的存在から説明することを要求していた。マルクスはこう言っている（『資本論』第一巻）。「技術学は、自然にたいする人間の能動的な態度をあらわにしており、人間の生活の、したがってまた人間の社会的生活諸関係およびそれに由来する精神的諸観念の、直接的生産過程を、あらわにしている」[28]。マルクスは、人間社会とその歴史とにおしおよぼされた唯物論の基本的諸命題のまとまった定式を、その著作『経済学批判』の序文のうちに、次のことばであたえている。

「人間はその生活の社会的生産にあたって、一定の、必然的な、彼らの意志から独立した関係、生産関係にはいる。この生産関係は、彼らの物質的生産力の一定の発展段階に照応する。

これらの生産関係の総体が社会の経済的構造をかたちづくる。これが現実の土台であって、その上に法律的および政治的な上部構造が立ち、またそれに一定の社会的意識諸形態が照応する。物質的生活の生産様式が、社会的・政治的・精神的な生活過程一般を条件づける。人間の意識が彼らの存在を規定するのではなくて、逆に、彼らの社会的存在が彼らの意識を規定するのである。社会の物質的生産力は、その発展のある段階で、この生産力がそれまでその内部で運動してきた現存の生産関係と、あるいはそれを法律的に言いあらわしたものにすぎないが、所有関係と、矛盾するようになる。これらの関係は、生産力の発展の形態から、その桎梏にかわる。そのとき、社会革命の時代が始まる。経済的基礎の変化とともに、巨大な上部構造全体が、あるいは徐々に、あるいは急速に変革される。このような変革を考察するさいには、自然科学的な正確さで確かめることのできる経済的生産諸条件における物質的変革と、人間がこの衝突を意識し、またこれとたたかって決着をつけるところの法律的、政治的、宗教的、芸術的あるいは哲学的な、つまりイデオロギー的な諸形態とを、つねに区別しなければならない。

ある個人がどういう人物かということを判断するのに、その個人が自分で自分をどう考えているかによらないのと同じように、このような変革の時代を、その時代の意識によって判断することはできないのであって、むしろこの意識のほうを、物質的生活の諸矛盾によって、社会的生産力と生産関係とのあいだに衝突があるということによって、説明しなければならない。……大づかみにいって、経済的社会構成体のあいつぐ諸時代として、アジア的・古代的・封建的・近代ブルジョア的の諸生産様式をあげることができる[29]」（一八六六年七月七日付のマルクスのエンゲルスへの手紙にある短い定式、「生産手段によって労働の組織が規定されるというわれわれの理論[30]」を参照せよ。）

唯物史観の発見、もっと正確に言えば、社会現象の分野への唯物論の首尾一貫した延長、適用によって、それ以前の歴史学説のもっていた二つのおもな欠陥がとりのぞかれた。第一には、それ以前の歴史学説は、せいぜい人々の歴史的活動の思想上の動機を考察したにとどまり、こうした動機がなにによってよびおこされたかを研究せず、社会関係の体制の発展における客観的合法則性を把握せず、これらの関係の根源が物質的生産の発展水準のうちにあることを見てとらなかった。第二には、それ以前の学説は、ほかならぬ住民大衆の活動を考えにいれていなかったが、これにたいして史的唯物論は、大衆の社会的生活条件とこれらの条件の変化とを自然史的な正確さで研究することをはじめて可能にした。マルクス以前の「社会学」と編史とは、せいぜい断片的にかきあつめてきた生のままの事実を集積し、歴史的過程の個々の側面を描写しただけであった。マルクス主義は、いっさいのあい反する諸傾向の総体を考察し、それらをさまざまな社会階級の正確に規定できる生活諸条件と生産諸条件とに帰着させ、個々の「主導的」な思想を選びだしたり解釈したりする点での主観主義と気ままを排除し、例外なしにあらゆる思想、あらゆるさまざまな傾向の根源が物質的生産力の状態にあることを明らかにして、経済的社会構成体の発生、発展、衰退の過程を包括的、全面的に研究する道をさししめした。人間は自分で自分の歴史をつくる。しかし、その人間の、しかも多数の人間の動機はなにによってひきおこされるのか、あい反する思想や志向の衝突はなにによって決定されるのか、幾多の人間社会のこれらすべての衝突の総体はどういうものか、人間の歴史的活動全体の土台をなす物質的生活の生産の客観的条件はどういうものか、これらの条件の発展法則はどういうものか、――マルクスはこれらすべての問題に注意をむけ、歴史を、はなはだしく多方面的で矛盾にみちたなかにも合法則的な、単一の過程として、科学的に研究する道を

さししめしたのである。

階級闘争

ある社会でその成員中のある人々の志向が他の人々の志向とくいちがうこと、社会生活が矛盾に満ちていること、歴史の示すところでは、国民と国民、社会と社会のあいだにも、またそれらの内部にも闘争がおこなわれているうえに、さらに革命と反動、平和と戦争、停滞と急速な進歩または衰退の時期が、かわるがわるにくること——これらの事実は、一般に知られている。マルクス主義は、この一見迷宮や混沌と思えるもののなかに合法則性を見いだせるようにする手引きの糸をあたえた。階級闘争の理論が、それである。ある一つの社会または一群の社会のすべての成員の志向の総体を研究してはじめて、これらの志向の結果を科学的に規定できる。ところで、あい反する志向の生まれる源泉は、それぞれの社会を分かっている諸階級の生活上の地位と条件との違いにある。マルクスは『共産党宣言』のなかでこう書いている。「すべてこれまでの社会の歴史は」（原始共同体の歴史を除いて——と、エンゲルスは後年つけくわえている）「階級闘争の歴史である。自由人と奴隷、貴族と平民、領主と農奴、ギルドの親方と職人、つまり、抑圧するものと抑圧されるものとは、つねに対立し、ときには隠然と、ときには公然と、絶えまなくたたかってきた。そして、この闘争はそのつど全社会の革命的改造に終わるか、さもなければ、あいたたかう階級の共倒れに終わった。……封建社会の没落から生まれてきた近代のブルジョア社会は、階級対立を廃棄しはしなかった。それはただ、新しい階級、新しい抑圧条件、新しい闘争形態を古いものにおきかえたにすぎない。けれども、現代、すなわちブルジョアジーの時代は、階級対立を単純にしたことを特徴とする。社会全体が、敵対する二大陣営へ、直接あい対立する二大階級へ、ますます分裂しつつある。すなわち、ブルジョアジーとプロレタリアートとへ」と。フランス大革命このかた、ヨーロッパの歴史は、多くの国々で、諸事件の真の内幕である階級闘争を、とくにまざまざとあらわにした。そして、すでにフランスの王政復古時代の歴史家の幾人かは、目前の出来事を総括して、階級闘争こそ全フランス史を理解する鍵であることを認めざるをえなかった（ティエリ、ギゾー、ミニエ、ティエール）。しかし、最近の時代、すなわちブルジョアジーが完全に勝利し、代議機関、広範な選挙権（普通選挙権とまでいかなくとも）、大衆にゆきわたる安い日刊新聞、等々の時代、強大な労働者団体と経営者団体が現われ、それがますます広範になってゆく、等々の時代は、階級闘争が諸事件の原動力であるこ

とを、いっそうまざまざと（ときにはきわめて一面的、「平和的」、「立憲的」な形態においてではあるが）示した。マルクスの『共産党宣言』から引用した次の章句によって、マルクスが、近代社会の各階級の発展の諸条件の分析と結びつけて、各階級の地位を客観的に分析する点で、どんな要求を社会科学に提出しているかが、わかるであろう。「今日ブルジョアジーに対立しているすべての階級のなかで、プロレタリアートだけが、真に革命的な階級である。その他の階級は、大工業のもとで衰え、没落する。プロレタリアートは、大工業の最も固有な産物である。中間層、すなわち、小工業者、小商人、手工業者、農民、彼らのすべてがブルジョアジーとたたかうのは、中間層としての自分たちの存立を没落から守るためである。したがって、彼らは革命的ではなく保守的である。それればかりではない。彼らは反動的である。なぜなら、歴史の車輪を逆にまわそうとしているからである。もし彼らが革命的になるとすれば、それは、自分たちがプロレタリアートへ移行する時が迫っていることをみて、そうなるのである。その場合には、彼らは、彼らの現在の利益ではなしに未来の利益を守っているのであり、彼ら自身の立場をすててプロレタリアートの立場に立っているのである」。マルクスは、幾多の歴史的著作（文献を見よ）で、唯物論的な編史のみごとで深遠な模範、すなわち、それぞれの階級や、ときにはまた階級の内部のさまざまな集団ないし層の地位を分析する模範を示し、なぜ、またどのようにして「階級闘争はすべて政治闘争である」[三]かを、如実に示した。さきにわれわれが引用した断片は、マルクスが歴史的発展の全合成力を算定するために、社会的諸関係と、一つの階級から他の階級への、また過去から未来への過渡的段階とのどんなに複雑な網を分析しているかを、例証するものである。

マルクスの理論の、最も深遠な、全面的な、そして詳しい確証であり適用であるものは、彼の経済学説である。

マルクスの経済学説

『資本論』の序文のなかでマルクスはこう言っている。「近代社会」（すなわち資本主義的ブルジョア社会）「の経済的運動法則を明らかにすることが、本書の最終目的である」[三]。歴史的に特定のある社会の生産関係を、その発生、発展、衰退において研究すること——これがマルクスの経済学説の内容である。資本主義社会では商品生産が支配している。そこでマルクスの分析は商品の分析から始まっている。

価値

商品とは、第一に、人間のなんらかの欲望を満たす物である。第二に、それはほかの物と交換される物である。物の有用性は、その物を使用価値にする。交換価値（またはたんに価値）は、まず第一に、ある種類の使用価値のある数量が他の種類の使用価値のある数量と交換される割合、比率である。日々の経験が示すところでは、何百万件、何十億件というこのような交換が、多種多様な、たがいにまったく比較しようのない、ありとあらゆる使用価値を、絶えずたがいに等しいものとしている。では、特定の社会関係の体制のなかで絶えずたがいに等しいものとされているこれらの種々さまざまな物のあいだには、どういう共通点があるのか？ それらに共通なのは、それらが労働生産物だということである。人間は、生産物を交換することによって、多種多様な労働をたがいに等しいものとしているのである。商品生産は、個々の生産者がさまざまな生産物をつくり（社会的分業）、これらの生産物のすべてが交換のさいに等しいとされる、そういった社会関係の体制である。したがって、すべての商品のなかにある共通なものとは、特定の生産部門の具体的労働ではなく、一定種類の労働ではなくて、抽象的人間労働、人間労働一般である。すべての商品の価値の総和に表わされるある社会の総労働力は、一個同一の人間労働力である。無数の交換の事実がこのことを証明している。したがって、一つ一つの商品は社会的必要労働時間のある分量を表わすにすぎない。価値の大いさは、社会的必要労働の量、つまりその商品、その使用価値の生産のために社会的に必要な労働時間によって決定される。「人々は、彼らのあい異なる種類の生産物を、交換において価値としてたがいに等しいとすることによって、彼らのあい異なる労働を人間労働としてたがいに等しいものとする。彼らはそれを意識してはいないが、それをおこなうのである」[33]。価値とは二人の人のあいだの関係である、とある昔の経済学者は言った。彼はただこうつけくわえるべきであったのだ、——物の外被におおわれた関係、と。価値とはなにかということは、ある特定の歴史的な社会構成体の社会的生産関係の体制、しかも何十億回となく繰りかえされる大量的な交換現象に現われている諸関係の体制という見地から、これを見るときに、はじめて理解できる。「価値としては、すべての商品は、一定量の凝固した労働時間にすぎない」[34]。商品に体現された労働の二重性を詳しく分析したのち、マルクスは価値形態と貨幣の分析に移っている。ここでのマルクスの主要な課題は、価値の貨幣形態の起原を研究すること、個別的、偶然的な交換行為（「単

純な、個別的な、または偶然的な価値形態」、つまりある一商品の特定の量が他の一商品の特定の量と交換される場合）から始まって、多くのあい異なる商品が一個同一の特定の商品と交換される一般的価値形態にいたるまで、そして金がこの特定の商品すなわち一般的等価物となる価値の貨幣形態にいたるまで、交換が展開してきた歴史的過程を研究することである。交換および商品生産の発展の最高の産物である貨幣は、私的労働の社会的性格を、市場によって結合された個々の生産者のあいだの社会的連関をあいまいにし、おおいかくす。マルクスは、貨幣の種々の機能にきわめて詳しい分析をくわえているが、その場合、ここでも（これは『資本論』のはじめの諸章について一般に言えることであるが）、抽象的な、ときには純演繹的なものに見える叙述の形式が、実際には交換および商品生産の発展の歴史についての膨大な事実材料を再現していることに、注意することがとくに大切である。「貨幣は、……商品交換のある水準を前提とする。貨幣の特殊的な諸形態――たんなる商品等価物、または流通手段、または支払手段、蓄蔵貨幣、および世界貨幣――は、そのあれなりこれなりの機能のおこなわれる範囲が異なるにしたがい、またどの機能が相対的に優越するかにしたがって、社会的生産過程のきわめてさまざまな段階を表示する」（『資本論』第一巻[三三]）。

剰余価値

商品生産の発展がある水準に達すると、貨幣は資本に転化する。商品流通の公式は、W（商品）―G（貨幣）―W（商品）であった。すなわち、他の一商品を買うためにある一商品を売ることである。資本の一般的公式は、これに反してG―W―Gである。すなわち、売る（利潤をとって）ために買うことである。流通に投じられる貨幣の最初の価値にたいするこの増加分を、マルクスは剰余価値と名づけている。資本主義的流通において貨幣がこのように「増加」する事実は、あまねく知られている。まさにこの「増加」こそ、貨幣を、特殊な、歴史的に特定の社会的生産関係としての資本に転化させるのである。剰余価値は商品流通から発生することはありえない。なぜなら、商品流通は、等価物の交換しか認めないからである。剰余価値は価格への付加から発生することもありえない。なぜなら、買い手と売り手が相互に損をするか、得をすれば、損得は相殺されるであろうし、それにここでは、まさに大量的、平均的、社会的な現象を論じているのであって、個々の現象を論じているのではないからである。剰余価値を手に入れるためには、「貨幣の所有者は……市場で、それの使用価値その

ものが価値の源泉であるという独特の性質をもっているような一商品を見いださなければならない[三六]」。つまり、それの消費過程が同時に価値創造の過程であるような一商品を見いださなければならない。そして、そのような商品は存在する。それは人間の労働力である。労働力の消費は、労働であって、労働は価値を創造する。貨幣所有者は労働力をその価値どおりに買うし、この価値は、ほかのあらゆる商品の価値と同じく、それの生産に必要な社会的必要労働時間によって（すなわち、労働者とその家族の生活資料の価値によって）決定される。貨幣所有者は、労働力を買った以上は、その労働力を消費する権利、すなわち、それをまる一日のあいだ、たとえば一二時間、働かせる権利をもっている。ところが労働者は、六時間のあいだに（「必要」労働時間）、自分の生活費を償うだけの生産物をつくりだし、あとの六時間のあいだに（「剰余」労働時間）、資本家から支払をうけない「剰余」生産物すなわち剰余価値をつくりだす。したがって、生産過程の見地からすれば、資本の二つの部分を区別しなければならない。すなわち、生産手段（機械、労働用具、原料など）に支出される不変資本――その価値は変化せずに、できあがった生産物に（一度にか、一部ずつか）移される――と、労働力に支出される可変資本とである。可変資本の価値は不変のままではなく、労働過程で、剰余価値をつくりだして増大する。だから、資本による労働力の搾取の度合いを言い現わすには、剰余価値を、総資本と比較するのではなく、可変資本だけと比較しなければならない。剰余価値率――マルクスは、この比率をこう名づけている――は、たとえばさきの例では、$\frac{6}{6}$すなわち一〇〇%となるであろう。

資本の発生の歴史的前提は、第一には、商品生産一般の発展が比較的高い水準に達しているところで、個々の人間の手中にある額の貨幣が蓄積されていることであり、第二には、二重の意味で「自由」な労働者、すなわち、労働力を売るのにどんな妨害や制限からも自由であり、さらに土地や一般に生産手段から自由な労働者、主人持ちでない労働者、労働力を売る以外には生活の道のまったくない「プロレタリア」たる労働者が、いあわせることとである。

剰余価値をふやすことは、二つの基本的な方法によっておこなうことができる。労働日の延長（「絶対的剰余価値」）による方法と、必要労働日の短縮（「相対的剰余価値」）による方法とである。第一の方法を分析するさいに、マルクスは、労働日の短縮のために労働者階級がおこなってきた闘争と、国家権力が労働日を延長するために（一四―一七世紀）、またそれを短縮するために（一九世紀の工場立法）おこなった干渉との壮大な絵巻を繰りひろげている。『資

本論』が出されてからのちにも、世界のあらゆる文明国の労働運動の歴史は、この絵巻を例証する幾千、幾万の新しい事実を提供している。

相対的剰余価値の生産を分析するにあたって、マルクスは、資本主義による労働生産性向上の三つの基本的な歴史的段階を研究している。すなわち、(一)単純協業、(二)分業とマニュファクチュア、(三)機械と大工業である。この場合、マルクスが資本主義の発展の基本的・典型的な特徴をきわめて深く明らかにしていることは、とりわけ、ロシアのいわゆる「クスターリ」工業の研究が、右の三つの段階のうちまえの二つについてきわめて豊富な例証材料を提供していることからみても、明らかである。そして、一八六七年にマルクスがえがいた機械制大工業の革命的作用は、そのとき以来過ぎさった半世紀のあいだに、幾多の「新しい」国(ロシア、日本、等)で現われてきた。

さらに、マルクスにあってきわめて重要で斬新なのは、**資本の蓄積**の分析である。すなわち、剰余価値の一部が資本に転化されることとの、それが資本家の個人的な必要や気まぐれに使われないで、新しい生産に使われることとの、分析である。マルクスは、資本に転化される剰余価値はすべて可変資本となるもののように考えていた以前の古典経済学全体(アダム・スミスをはじめとして)の誤りを示した。実際には、それは、**生産手段**プラス可変資本に分かれるのである。可変資本の部分が不変資本の部分に比較していっそう急速に増大する(資本総額のうちで)ことは、資本主義の発展と、それの社会主義への転化との過程において、巨大な意義をもっている。

資本の蓄積はまた、機械による労働者の駆逐を促進することにより、一方の極に富を、他方の極に貧困をつくりだすことによって、いわゆる「労働予備軍」、労働者の「相対的過剰」、あるいは「資本主義的過剰人口」を生みだす。この「過剰人口」は、非常にさまざまな形態をとるが、非常に急速に生産を拡大する可能性を資本にあたえる。この可能性はとりわけ、信用や、生産手段における資本の蓄積とあいまって、過剰生産**恐慌**を理解する鍵をあたえる。こういう恐慌は、はじめは平均して一〇年ごとに周期的に資本主義諸国を襲ったが、その後はこれはもっと長い、そしてもっと不確定な間隔でやってくるようになった。資本主義を基礎としておこなわれる資本蓄積と、いわゆる原始的蓄積とは、区別しなければならない。原始的蓄積とは、働き手を生産手段から強制的に分離し、農民を土地から追いたて、共同体の所有地を盗みとること、また植民地制度、国債制度、保護関税制度等々の体系のことである。「原始的蓄積」は、一方の極に「自由な」プロレタリアを、他方

の極に貨幣所有者すなわち資本家をつくりだす。

「資本主義的蓄積の歴史的傾向」を、マルクスは次の名高い文章によって特徴づけている。「直接的生産者の収奪は、無慈悲きわまる蛮行をもって、また、最もいやしむべき、最もきたならしい、最も卑小でいとうべき欲情の衝動のもとでなしとげられる。自分で働いて得たいわば個々独立の働く個人と彼の労働条件との融合にもとづく」（農民と手工業者の）「私的所有は、他人の、だが形式上は自由な労働の搾取にもとづく資本主義的な私的所有によっておきかえられる。……いまや収奪されるべきものは、もはや自分で経営を営む働き手ではなくて、多くの労働者を搾取する資本家である。この収奪は、資本主義的生産そのものの内在的な諸法則のはたらきによって、資本の集中によって、なしとげられる。おのおのの資本家が多くの資本家をうちほろぼす。こうした集中、すなわち少数資本家による多数の資本家の収奪にともなって、絶えず規模を増していく労働過程の協業的形態が、科学の意識的な技術的応用が、土地の計画的利用が、労働手段の共同でしか使用できない労働手段への転化が、生産手段を結合された社会的労働の生産手段として使用することによるあらゆる生産手段の節約が、世界市場の網のなかへのすべての国民の組入れが、したがってまた資本主義制度の国際的性格が、発展する。この転化過程の利益をすべて横領独占する大資本家の数が絶えず減少するにつれて、貧困、圧迫、隷属、堕落、搾取の量が増大するが、また、絶えず膨張してゆき、資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され統合され組織されてゆく労働者階級の反抗も増大する。資本独占は、この独占とともにまたこの独占のもとで花さいた当の生産様式の桎梏となる。生産手段の集中と労働の社会化とは、それ自身の資本主義的な外被とあいいれなくなる点に到達する。この外被は破砕される。資本主義的私的所有の弔鐘が鳴る。収奪者が収奪される（『資本論』第一巻）。[四七]

さらに、きわめて重要で斬新なのは、マルクスが『資本論』第二巻であたえた社会的総資本の再生産の分析である。ここでもマルクスは、個々の現象ではなくて大量的な現象を、社会の経済の一断片ではなくて総体としてのこの経済を、とりあげている。さきに述べた古典派の誤りを訂正しながら、マルクスは、社会的生産全体を二大部門、すなわち、(一) 生産手段の生産、(二) 消費資料の生産に分け、数字で表わした例をつかって、全体としての社会的総資本の流通を、再生産が従来どおりの規模でおこなわれるときと蓄積がおこなわれるときとの双方の場合について詳しく考察している。『資本論』第三巻では、**平均利潤率**の形成の問題が、価値法則にもとづいて解決されている。マルク

スは、俗流経済学や現代の「限界効用説」がしばしばそこでとどまっているような、個々の事例や競争の外面的な現象の観点から分析をおこなわないで、大量な経済的現象、社会経済の総体の観点から分析をおこなっているが、これは、経済科学の一大進歩である。マルクスは、はじめに剰余価値の起原を分析して、そのあとではじめて利潤、利子、地代へこの剰余価値が分割される問題に移っている。利潤とは、一企業に投下された総資本にたいする剰余価値の関係である。「有機的構成の高い」資本（すなわち、可変資本にたいする不変資本の優位の度合いが社会的平均よりも高いもの）は、平均よりも低い利潤率をもたらす。「有機的構成の低い」資本は平均よりも高い利潤率をもたらす。資本のあいだに競争があり、また一部門から他の部門への資本の移動が自由であるため、どちらの場合にも利潤率は平均利潤率にひきもどされるだろう。ある一社会のすべての商品の価値の総和は、商品の価格の総和と一致するけれども、個々の企業や個々の生産部門についてみれば、商品は、競争の影響をうけて、その価値どおりには売られずに、支出された資本と平均利潤との和に等しい生産価格で売られる。

こうしてマルクスは、価格が価値からそれるという、また利潤が均等であるという、あまねく知られた、議論の余地のない事実を、価値法則にもとづいて完全に説明した。というのは、すべての商品の価値の総和は価格の総和と一致するからである。しかし価値（社会的な）が価格（個別的な）におちつくことは、単純な、まっすぐの道筋をとおっておこなわれるのでなく、きわめて複雑な道筋をとおっておこなわれる。ただ市場をつうじてのみ結合している個々ばらばらの商品生産者たちの社会では、合法則性が、あるいは一方へ、あるいは他方への個々の偏差をたがいに相殺した平均的、社会的、大量的な合法則性としてしか現われえないことは、まったく当然である。

労働生産性の向上は、可変資本にくらべて不変資本がいっそう急速に増大することを意味する。ところが、剰余価値はもっぱら可変資本の機能であるから、利潤率（可変資本部分だけにたいする剰余価値の比率ではなく、総資本にたいする剰余価値の比率）が低下する傾向をもっていることは明らかである。マルクスは、この傾向と、またこの傾向を隠蔽するか、あるいはこれに反対に作用する多くの事情とを詳しく分析している。われわれは、高利貸資本、商業資本、貨幣資本を取り扱った第三巻のきわめて興味ある諸篇の紹介に立ちいらずに、最も主要な篇、すなわち**地代**論に移ろう。農産物の生産価格は、土地の面積に限りがあり、資本主義諸国ではこの土地が残らず個々の経営主に占

有されているために、中位の土地での生産費ではなしに最劣等地の生産物によって、生産物を市場に供給する条件が中位の場合でなしに最も悪い場合の生産費によって、決定される。この価格と、より良質の土地の（あるいは条件がよりよい場合の）生産価格との差額から、等差地代または差額地代が生まれる。マルクスは、差額地代を詳しく分析して、これが個々の地所の肥沃度の差異から、また土地への資本の投下額の差異から発生することを示しており、差額地代は、優良な土地からつぎつぎに劣等な土地へ移っていく場合にだけ生じる、と考えたリカードの誤りを、あますところなく暴露した（『剰余価値学説史』をも見よ。そこではロードベルトゥスにたいする批判がとくに注目に値する）。それとは反対に、逆の移行の場合もよくあることであり、ある等級の土地が他の等級に変わる（農業技術の進歩、都市の膨脹などのために）こともしばしば起こる。そして、あの評判の「土地収穫逓減の法則」は、はなはだしい誤りであって、資本主義の欠陥や限界や矛盾を自然のせいにするものである。次に、工業の、一般に国民経済のすべての部門で利潤が均等であるためには、競争が完全に自由であり、一部門から他の部門への資本の移動が自由であることが前提となる。ところが、土地の私的所有は、このような自由な移動の障害となる独占をつくりだす。この独占のおかげで、資本の構成が比較的低く、したがって個別的には比較的高い利潤率を特徴とする農業の生産物は、利潤率の平均化のまったく自由な過程にははいっていかない。土地所有者は、独占者として価格を平均価格以上に保つ可能性を得る。そして、この独占価格が絶対地代を生むのである。差額地代は、資本主義が存在するところでは廃止できないが、絶対地代のほうは廃止できる。たとえば、土地を国有化すれば、つまり土地を国家の所有に移せば、廃止できる。このような〔土地の国家への〕引渡しは、私的所有者の独占をくつがえすことを意味し、農業における競争の自由が、いっそう徹底的に、いっそう完全に実行されることを意味するであろう。だからこそ、急進的ブルジョアは歴史上なんども土地の国有化というこの進歩的、ブルジョア的要求をかかげたのだ、とマルクスは指摘している。だがこの要求は、ブルジョアジーの大多数をおびえさせる。なぜなら、それは、もう一つの独占、現代においてとくに重要で「敏感な」独占、すなわち生産手段一般の独占の急所にあまりにもまぢかに「触れる」からである。（マルクスは自分で、一八六二年八月二日付のエンゲルスへの手紙のなかで、資本にたいする平均利潤と絶対地代にかんする自分の理論をすばらしく平明に、簡潔に、明快に説明している。『往復書簡集』第三巻、七七―八一ページ

を見よ。また同書、八六―八七ページの一八六二年八月九日付の手紙をも参照せよ）[三八]。地代の歴史については、マルクスの次のような分析を指摘することも重要である。すなわち、労働地代（この場合、農民は地主の土地での労働によって剰余生産物をつくりだす）が、生産物地代すなわち現物地代（この場合、農民は自分の土地で剰余生産物を生産し、それを経済外的強制によって地主に引き渡す）に転化し、ついで貨幣地代（前記の現物地代が商品生産の発展によって貨幣に転化されたもの、昔のルーシの「年貢金（オブローク）」）に転化し、最後に、資本主義的地代――この場合、農民にかわって農業企業家が現われ、賃労働をつかって耕作を営む――に転化することを、マルクスは示しているのである。「資本主義的地代の発生」についてのこの分析に関連して注意しなければならないのは、**農業における資本主義の進化**についての、マルクスの幾多の深遠な（そしてロシアのようなおくれた国にとってはとくに重要な）思想である。「現物地代の貨幣地代への転化は、かならず、無所有の、貨幣で雇われる日雇の階級の形成をともなうばかりでなく、この後者が前者に先行しさえする。だから、この新しい階級がまだ散在的に登場するにすぎないその成立期のあいだに、地代支払義務を負う農民のうち比較的裕福なもののあいだに、自分の勘定で農村賃金労働者を搾取する習慣が必然的に発達してきた。これは、すでに封建時代に富裕な隷農が、彼ら自身でさらに隷農をかかえていたのとまったく同じである。こうして彼らのあいだには、ある程度の財産をためて、自分自身を将来の資本家に転化する可能性が徐々に発達する。こうして、以前の、自分で労働する土地所有者そのもののあいだに、資本主義的借地農業者の培養場ができあがるが、この後者の発展は、農村の外での資本主義的生産の一般的発展によって条件づけられている」（『資本論』第三巻、第二部、三三二ページ）[三九]。……「農村住民の一部の収奪と追放は、産業資本のために、労働者と、さらにその労働者の生活手段と労働材料とを解放するだけではない。それはさらに国内市場をもつくりだす」（『資本論』第一巻、第二部、七七八ページ）[四〇]。農村住民の貧困化と零落は、それはそれで、資本のために労働予備軍をつくりだすうえに一役を演ずる。「だから」、あらゆる資本主義国で、「農村人口の一部分は、絶えず都市プロレタリアート、すなわちマニュファクチュア・プロレタリアート」（すなわち、非農業的プロレタリアート）「に移行しようとしている。だから、相対的過剰人口のこの源泉は、絶えずわきでてやむことがない。……だから、農村労働者は、賃金の最低限までおしさげられ、つねに片足を窮民状態の沼に踏みこんでいる」（『資本論』第一巻、第二部、六六八

ページ[41])。農民が自分の耕す土地を私有しているということが、小規模生産の基礎であり、またこの小規模生産が繁栄し、典型的な形態を取るようになるための条件である。だが、このような小規模生産は、ただ生産および社会の狭い原始的なわくとしか両立しえないものである。資本主義のもとでは、農民の搾取が「産業プロレタリアートの搾取と違うのは、形式の点だけである。搾取者は同一者、すなわち資本である。個々の資本家は個々の農民を抵当や高利貸付によって搾取する。資本家階級は農民階級を国家の税によって搾取する」(『フランスにおける階級闘争[42]』)。「いまではもう農民の分割地は、資本家が耕地から利潤、利子、地代を引きだしながら、農耕者の賃金を捻出することは農耕者自身に工夫させるための口実にすぎない」(『ブリュメール一八日[43]』)。ふつう、農民は、賃金の一部までも資本主義社会、すなわち資本家階級に引き渡し、こうして自分は「アイルランドの小作人の水準に」落ちぶれていく。「――しかもこれがすべて私的所有者であるという見せかけのもとに」(『フランスにおける階級闘争[44]』)なされるのである。「分割地所有の支配的な国々では、資本主義的生産様式のおこなわれている国々におけるよりも穀物の価格が低い原因の一つ」(『資本論』第三巻、第二部、三四〇ページ)はどこにあるか? それは、農民が剰余生産物の一部分を無償で社会に(すなわち資本家階級に)引き渡すことにある。「だから」(穀物その他の農産物の)「この低い価格は、生産者たちの貧窮の結果であって、彼らの労働が生産的であることの結果ではけっしてない」(『資本論』第三巻、第二部、三四〇ページ)。小規模生産の正常な形態である分割地所有は、資本主義のもとでは、退化し、破壊され、滅亡する。「分割地所有は、その本性上、労働の社会的生産力の発展や、労働の社会的諸形態や、資本の社会的集積や、大規模な牧畜や、科学の累進的応用を排除する。高利貸付と租税制度とは、分割地所有をいたるところで貧困化させずにはおかない。土地価格への資本の投下は、それだけの資本を耕作からひきあげる。生産手段のかぎりない分散および生産者そのものの孤立化」。(小農民の協同組合は、きわめて、進歩的なブルジョア的役割を演じるものではあるが、この傾向を弱めるだけで、とりのぞきはしない。それにまた、これらの協同組合は富裕な農民には大いに役だつけれども、貧農大衆の役にたつことはきわめて少ない、いやほとんどないことを、次にこれらの組合自身が賃労働の搾取者になることを、忘れてはならない。)「人力のはなはだしい浪費。生産条件の累進的悪化と生産手段の騰貴。これらが分割地」(小)「所有の必然的な一法則である[45]」。資本主義が生産過程を改造するのは、農業でも、工業におけ

ると同様に、もっぱら「生産者の殉難史」を代償としてである。「農村労働者が比較的広い地域に散在していることは、彼らの抵抗力をくじく、――しかも、集中が都市労働者の抵抗力を高めているそのときに。都市の」（近代的）「工業におけると同じように、近代的」（資本主義的）「農業においても、労働の生産力の増大とその流動化の増進は、労働力そのものを荒廃させ、衰弱させることであがなわれる。そして、資本主義的農業のあらゆる進歩は、労働者から略奪する技術の進歩であるばかりでなく、同時に土地から略奪する技術の進歩でもある。……だから、資本主義的生産は、すべての富の源泉である土地と労働者とを同時に破壊することによって、はじめて社会的生産過程の技術と結合とを発展させるのである」（『資本論』第一巻、第一三章の末尾[32]）。

社会主義

以上に述べたことから明らかなように、マルクスは、資本主義社会が社会主義社会へ転化することは避けられないという結論を、まったく、もっぱら近代社会の経済的運動法則から導きだしている。労働の社会化は、幾千の形態でますます急速に前進しており、マルクス死後の半世紀のあいだに、大規模生産の成長、資本家のカルテル、シンジケートおよびトラストの成長にも、また金融資本の規模と威力の非常な増大にも、とくにまざまざと現われているが、――これこそ、社会主義がかならずくるということの、主要な物質的基礎である。この転化の知的・精神的な原動力であり、その物質的な執行者であるのは、資本主義そのものによって教育されるプロレタリアートである。プロレタリアートのブルジョアジーにたいする闘争は、さまざまな形態をとって現われ、しかもそれらの形態の内容は絶えずますます豊かなものになってゆくが、この闘争は、不可避的に、プロレタリアートによる政治権力の獲得（「プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）」）をめざす政治闘争になってゆく。生産の社会化は、生産手段が社会の所有に移され、「収奪者が収奪される」結果へ導かずにはおかない。労働の生産性のいちじるしい向上、労働日の短縮、原始的な、細分された小規模生産の遺物と残骸にとってかわる改良された集団的労働の出現――これらが、このような移行の直接の結果である。資本主義は、農業と工業との結びつきを最後的に断ち切るが、それと同時に、その最高の発展によって、それは、科学の意識的応用や、集団的労働の結合や、人類の居住地の再配置（農村の見捨てられた状態、その外界からの隔離、その未開性をも、大都市への膨大な大衆の不自然

な密集をも、両方ともなくす）にもとづいてこの結びつきの、工業と農業との結合の新しい諸要素を準備する。家族の新しい形態、婦人の地位と若い世代の教育とにおける新しい諸条件が、近代資本主義の最高の諸形態によって準備される。すなわち、婦人労働と児童労働、資本主義による家父長制家族の分解は、近代社会では、不可避的に、このうえもなく恐ろしい、悲惨な、いとわしい形態をとるのであるが、それにもかかわらず、「大工業は、婦人や、男女の青少年に、家庭の領域外の社会的に組織された生産過程で、決定的な役割を割り当てることによって、家族と両性関係とのより高度な形態のための新しい経済的基礎をつくりだす。いうまでもなく、キリスト教的・ゲルマン的な家族形態を絶対的なものと考えることは、古代ローマ的形態なり、古代ギリシア的形態なり、東洋的形態なり――これらは、ともあれ、相互に一つの歴史的発展系列をなしている――を絶対的なものと考えるのとまったく同様に愚かなことである。同様に、さまざまの年齢の男女の諸個人から結合労働要員が構成されることは、労働者が生産過程のために存在していて、生産過程が労働者のために存在するのではない、この構成の自然発生的な、残忍な資本主義的形態にあっては、堕落と奴隷状態の禍根であるけれども、適当な事情のもとでは、逆に、かならずや人間的発展の源泉に転化するということも、明らかである」（『資本論』第一巻、第一三章の末尾）。工場制度は「未来の教育の萌芽」を示している。この「未来の教育は、社会的生産を増大させるための一方法としてだけでなく、また、全面的に発達した人間を生産する唯一の方法として、一定年齢をこえたすべての子供にたいして、生産的労働と教育および体育とを結合するであろう」（同）。マルクスの社会主義は、民族および国家の諸問題をも、これと同じ歴史的基盤のうえに提起している。それは、たんに過去を説明するというだけの意味ではなく、また恐れることなく未来を予見し、この未来の実現をめざして大胆に実践的に活動するという意味での歴史的基盤である。民族は、社会発展のブルジョア時代の不可避的な産物であり、その不可避的な形態である。そして労働者階級は、「みずからを民族のわく内で組織すること」なしには、「民族的」（「ブルジョアジーの言う意味ではけっしてないが」）であることなしには、強くなり、成人し、成熟することができなかった。だが、資本主義の発展は、ますます民族的隔壁をうちこわし、民族的分立をなくし、民族的対立を階級対立とおきかえていく。だから、発達した資本主義国では、「労働者は祖国をもたない」ということ、またすくなくとも文明諸国の労働者が「共同して行動すること」がプロレタリアートの「解放の第一条件

の一つである」(『共産党宣言』[四〇])ということは、完全な真理である。組織された暴力である国家は、社会の一定の発展段階で、すなわち、社会が和解することのできない諸階級に分裂したとき、社会が、見かけのうえで社会のうえに立ち、ある程度まで社会から分離した「権力」なしには存立しえなくなったときに、不可避的に発生した。国家は階級矛盾のなかから発生するので、「最も勢力のある、経済的に支配する階級の国家」となる。「この階級は、国家を手段として政治的にも支配する階級となり、こうして、被抑圧階級を抑圧し搾取する新しい手段を獲得する。たとえば、古代国家は、なによりもまず奴隷を抑圧するための奴隷所有者の国家であった。それと同じように、封建国家は、農奴と隷農を抑圧するための貴族の機関であったし、近代の代議制国家は、資本が賃労働を搾取する道具である」(エンゲルス『家族、私有財産および国家の起原』[四一])。エンゲルスはこの著書で彼自身とマルクスの見解を述べている)。ブルジョア国家の、最も自由で進歩的な形態である民主的共和制さえ、けっしてこの事実をとりのぞくものではなく、ただその形態をかえるにすぎない(政府と取引所との結びつき、官吏と新聞の——直接間接の——買収、等々)。社会主義は階級の廃絶へ導くが、そのことによってまた、国家の廃絶へ導く。エンゲルスは『反デューリング論』で書いている。「国家が実際に全社会の代表者としてたちあらわれる最初の行為——社会の名において生産手段を掌握すること——は、同時に、国家が国家としておこなう最後の自主的な行為である。社会関係にたいする国家権力の干渉は、一分野から他の分野へとつぎつぎによけいなものとなり、それからひとりでに眠りこんでしまう。人にたいする統治にかわって、物の管理と生産過程の指導とが現われる。国家は『廃止』されるのではない。それは死滅するのである」[四二]。「生産者の自由で平等な協同関係(アッソツィアツィオン)にもとづいて生産を組織しかえる社会は、国家機構全体を、そのとき当然おかれるべき場所へ移すであろう、——すなわち、糸車や青銅の斧(おの)とならべて、考古学博物館へ」(エンゲルス『家族、私有財産および国家の起原』[四三])。

最後に、収奪者が収奪される時期にも小農民はひきつづいて残るであろうが、その小農民にたいするマルクスの社会主義の態度の問題については、マルクスの思想を言い表わしているエンゲルスの次の言明を指摘しなければならない。「われわれが国家権力をにぎったときには、大土地所有者を暴力的に収奪するほかはないが、小農をも同じように暴力的に収奪する(有償であろうと無償であろうと同じことである)というようなことは考えられない。……小農にたいするわれわれの任務は、なによりも、力づくではな

く、実例とそのための社会的援助の提供とによって、小農の私的経営と私的所有とを協同組合的なものに移しかえることである。そして、それが有利だということを小農に示す手段を、われわれはたしかに十分にもちあわせている。この有利さは、いまでもすでに小農に理解されるにちがいない」（エンゲルス『西欧の農業問題』[三一]、アレクセーエヴァの版、一七ページ。このロシア語訳には誤訳がある。原文は『ノイエ・ツァイト』[三二]所載）。

プロレタリアートの階級闘争の戦術

マルクスは、すでに一八四四―一八四五年に、古い唯物論の根本的な欠陥の一つが革命的実践活動の諸条件を理解できず、またこのような活動の意義を評価できなかった点にあることを明らかにしたが、その全生涯をつうじて、理論的な労作とならんで、プロレタリアートの階級闘争の戦術の諸問題に絶えず注意をはらっていた。この点については、マルクスのすべての著作が膨大な材料を提供しているが、ことに一九一三年に出版された彼とエンゲルスとの往復書簡集全四巻はそうである。この材料は、収集され、まとめられ、研究され、仕上げられるまでにはまだなかなかなっていない。だから、われわれはここでは、ごく一般的な、簡単な意見を述べるだけにとどめなければならないが、マルクスが、**この**側面の欠けた唯物論は中途半端で、一面的で、死んだものだと、正当にも考えていたことを、強調しておく。マルクスは、プロレタリアートの戦術の基本的任務を、彼の唯物弁証法的世界観のすべての前提に厳密に一致して規定していた。ある社会の、例外なくすべての階級の相互関係の総体を客観的に考慮すること、したがって、この社会の客観的な発展段階をも、この社会と他の諸社会との相互関係をも考慮することだけが、先進的な階級の正しい戦術の土台となりうる。この場合、すべての階級とすべての国が、静態においてではなく動態において、すなわち、静止の状態においてではなく運動（この運動の諸法則はそれぞれの階級の経済的な生存条件から生まれる）において、考察される。この運動そのものは、過去の観点からだけではなく、また未来の観点からも考察され、しかもゆるやかな変化しか見ない「進化論者」の卑俗な考え方によってではなく、弁証法的に考察される。マルクスはエンゲルスへの手紙にこう書いている。「大きな歴史的発展においては二〇年は一日にも等しい。もっとも、そのあとで、二〇年を一つに圧縮した数日がくることもあろうが」（『往復書簡集』第三巻、一二七ページ[三三]）。どの発展段階にも、どの瞬間にも、プロレタリアートの戦術は、この、客観的

に避けられない、人類史の弁証法を考慮にいれて、一方では、先進的な階級の自覚と力と闘争能力を向上させるために、政治的停滞の時期、または亀の歩みのようにのろのろした、いわゆる「平和的」発展の時期を利用するとともに、他方では、その階級の運動の「終局目標」に向かって、「二〇年を一つに圧縮した」偉大な日々がきたとき偉大な任務を実践的に解決できる能力をこの階級のうちにつくりだす方向に向かって、この利用の活動全体をおこなわなければならない。この問題では、マルクスの二つの考察がとくに重要である。その一つは、『哲学の貧困』のなかにあるプロレタリアートの経済闘争と経済的諸組織にかんする考察であり、いま一つは、『共産党宣言』のなかにあるプロレタリアートの政治的任務にかんする考察である。前者は次のように述べている。「大工業はたがいに見ず知らずの多数の人間を一つの場所によせあつめる。競争は彼らの利害を分裂させる。しかし、賃金の維持という、彼らがその雇い主たちに対抗してもつこの共通の利害が、反抗という同じ共通の考えで彼らを結合する。それが、団結である。……はじめははなればなれであった団結は集団を形成する。そして、つねに結合している資本をまえにして、労働者にはその組合を維持することのほうが賃金を維持することよりいっそう重要になる。……この闘争――まさに内乱というべきもの――をつうじて、きたるべき戦闘に必要なあらゆる要素が結合し発展する。いったんこの点に達すると、組合は政治的性格をおびるようになる」。[25] ここにわれわれが見るのは、「きたるべき戦闘のために」プロレタリアートの軍勢を訓練する長い期間全体にたいする数十年にわたる経済闘争と労働組合運動との綱領と戦術である。これには、イギリスの労働運動の例についてマルクスとエンゲルスがあたえたおびただしい指摘をつきあわせてみる必要がある。すなわち、産業の「繁栄」が、「労働者を買収し」(『往復書簡集』第一巻、一三六ページ)[26]、彼らを闘争からそらせようとする試みをよびおこしていること、この繁栄が一般に労働者の「士気を退廃させる」こと(第二巻、二一八ページ)、イギリスのプロレタリアートは「ブルジョア化」しつつあり、「すべての国民のうちで最もブルジョア的なこの国民」(イギリス国民)「は、ついにはブルジョアジーとならんで、ブルジョア的貴族とブルジョア的プロレタリアートをもつところまですすみたがっているようにみえる」こと(第二巻、二九〇ページ)[27]、イギリスのプロレタリアートの「革命的エネルギー」が消滅しつつあること(第三巻、一二四ページ)、「イギリスの労働者がかかっているようにみえるブルジョアかぶれからぬけだす」までには、かなり長いあいだ待たなければならないだろうとい

うこと（第三巻、一二七ページ）、イギリスの労働運動には「チャーティストの熱情」(五八)が欠けていること（一八六六年、第三巻、三〇五ページ）、イギリスの労働者の首領たちは、そのタイプからいって「急進的ブルジョアと労働者」との中間物のようなものになりつつあること（ホリオークについて、第四巻、二〇九ページ）、イギリスの独占のおかげで、またこの独占が打破されるまでは、「イギリスの労働者はいっこう動きそうにない」こと（第四巻、四三三ページ）(五九)、——これらがその指摘である。ここでは、経済闘争の戦術は労働運動全体の歩み（とその結果）に関連させて、いちじるしく広範な、全面的な、弁証法的な、真に革命的な見地から考察されている。

『共産党宣言』は、政治闘争の戦術についてマルクス主義の根本命題を次のように提出している。「共産主義者は、労働者階級の直接当面する目的と利益を達成するためにたたかうが、しかし、現在の運動のなかにあって同時に運動の未来を代表する」(六〇)。だからマルクスは、一八四八年に、ポーランドでは「土地革命」の党、すなわち「一八四六年のクラコフの反乱を起こした党」(六一)を支持した。ドイツでは、一八四八—一八四九年にはマルクスは最左翼の革命的民主主義派を支持し、その後も、当時彼が戦術について言ったことをけっして取り消さなかった。ドイツのブルジョアジーについては、彼は、「はじめから、人民を裏切りやすく」（農民と同盟してのみ、ブルジョアジーは、その任務を完全に実現できたであろうに）、「古い社会の代表者である王権と妥協する傾きがあった」要素として見ていた。次に示すのは、ブルジョア民主主義革命の時期におけるドイツ・ブルジョアジーの階級的地位についてマルクスがあたえた総括的分析である。ついでに言えば、この分析は、社会を運動において考察し、しかも運動のうしろむきの側面からだけ考察することのない唯物論の模範である。「……自分自身を信頼せず、人民を信頼せず、上にたいしてはぶつぶつ言い、下にたいしてはおそれおののき、……世界のあらしにおびえ、……どの点でも無気力で、あらゆる点で剽窃（ひょうせつ）し、……独創を欠き、……強壮な一民族の青春のういういしい流れを自分自身の老衰した利益にしたがって導く……ことが自分の宿命であると見ている、のろうべき老いぼれ……」（『新ライン新聞』(六二)、一八四八年。『遺稿集』第三巻、二一二ページを見よ）。約二〇年たってからマルクスは、エンゲルスにあてた手紙のなかで（第三巻、二二四ページ）、一八四八年の革命が失敗した原因は、ブルジョアジーが、自由のためには先ゆき闘争が予想されるというだけで、それよりは隷属していても平穏なほうがよいと考えたことだ、と言明している。一八四八—一八四九年の革命期が終わっ

たとき、マルクスは、あらゆる革命遊びに反対し（シャッパー＝ヴィリヒおよび彼らとの闘争）、いわば「平和的に」新しい革命を準備する新しい時期に活動する能力をもたなければならない、と要求した。マルクスが、この活動をどういう精神でおこなうように要求したかは、一八五六年の最も陰惨な反動期におけるドイツの状態について彼がくだした次の評価から知られる。「ドイツでは、なにか農民戦争の再版のようなもので、プロレタリア革命を支持できるかどうかで、万事が決まるであろう」（『往復書簡集』第二巻、一〇八ページ）[42]。ドイツで民主主義（ブルジョア）革命がまだ終わらないうちは、マルクスは、社会主義的プロレタリアートの戦術では、農民の民主主義的エネルギーを発揮させることにすべての注意をむけた。彼は、ラッサールを、「客観的には労働運動全体をプロシア人に売り渡す」（第三巻、二〇一ページ）ものだと見なしたが、これは、とりわけラッサールが、地主とプロイセンの国権主義とを黙認したためにほかならなかった。エンゲルスは、一八六五年に、彼ら二人がまさに新聞に発表しようとしていた共同声明のことで、マルクスと意見を交換しながら、次のように書いている。「主として農業国である国で、工業プロレタリアートの名においてもっぱらブルジョアジーを攻撃しながら、大封建貴族が農村プロレタリアートにくわえている家父長制的なむちの搾取には一言もふれないというのは、卑劣である」（第三巻、二一七ページ）[43]。ドイツのブルジョア民主主義革命が完成された時期、すなわち、この上からの革命を完成するあれこれの方法をめぐってプロイセンとオーストリアの搾取階級がたたかった時期が、終りに近づいた一八六四－一八七〇年の時期には、マルクスは、ビスマルクに媚びを売ったラッサールを非難したばかりでなく、また「親オーストリア主義」と地方主義の擁護とに陥ったリープクネヒトの誤りをもただした。マルクスが要求したのは、ビスマルクとも、親オーストリア主義者とも同じように容赦なくたたかう革命的戦術であり、「戦勝者」すなわちプロイセンのユンカーに調子をあわせず、プロイセンの軍事的勝利によってつくりだされた基盤のうえでもただちにこのユンカーとの革命的闘争を再開する戦術であった（『往復書簡集』第三巻、一三四、一三六、一四七、一七九、二〇四、二一〇、二一五、四一八、四三七、四四〇－四四一ページ）[44]。マルクスは、一八七〇年九月九日の有名なインタナショナルの宣言のなかで、フランスのプロレタリアートに時期尚早の蜂起をおこさないように警告したが[45]、それにもかかわらず蜂起がおこると（一八七一年）、マルクスは、「天をも襲おうとする」大衆の革命的創意[46]を熱狂して歓迎した（マルクスのクーゲルマンへの手紙）。

マルクスの弁証法的唯物論の見地からすれば、こういう情勢のもとでは、また他の多くの情勢のもとでもそうであるが、既得の地歩を放棄するよりも、たたかわずに降伏するよりも、革命的行動の敗北のほうが、プロレタリアの闘争全体の歩みと結末とにとってまだしも害が少なかった。そのような降伏は、プロレタリアートの士気を沮喪させたであろうし、その戦闘能力をそいだであろう。マルクスは、政治的に停滞し、ブルジョア的合法性が支配している時期に、合法的闘争手段を利用することの価値を十分に認めていたから、社会主義者取締法が発布されたあとの一八七七—一八七八年には、モスト[六八]の「革命的空文句」を激しく非難したが、しかし、公式の社会民主党が、取締法にこたえて、剛毅と不撓不屈と革命的精神と、非合法闘争に移る決意とをすぐさま示さず、一時日和見主義に支配されたのにたいしては、前者の場合にまさるともおとらぬ激しさで、攻撃をくわえた（『マルクス＝エンゲルス往復書簡集』[六九]第四巻、三九七、四〇四、四一八、四二二、四二四ページ。さらにゾルゲへの手紙をも参照せよ）。

一九一四年七月—一一月に執筆
一九一五年に一部省略してグラナート百科辞典、第七版、第二八巻に発表
署名、ヴェ・イリイン

序文は一九一八年にエヌ・レーニン『カール・マルクス』、モスクワ、「プリボイ」出版所に発表
全集、第五版、第二六巻、四三—九三ページ所収
邦訳全集、第二一巻、三一—六七ページ所収

戦争とロシア社会民主党(1)

あらゆる国の政府とブルジョア政党が数十年にわたって準備してきたヨーロッパ戦争が勃発した。先進諸国の資本主義発展の最新の帝国主義段階における軍備の増大、市場獲得闘争の極度の激化、最もおくれた東ヨーロッパの諸君主国の王朝的利害、これらは、不可避的にこの戦争へ導かずにはおかなかったし、また実際に導いたのである。他国の土地を奪い、他国を征服し、競争国を没落させ、その富を強奪し、ロシア、ドイツ、イギリスその他の国の国内の政治的危機から勤労大衆の注意をそらせ、労働者を分裂させ、彼らを民族主義であざむき、プロレタリアートの革命運動をよわめるために労働者の前衛をみな殺しにすること、——これが、今日の戦争のただひとつ現実的な内容であり、役割であり、目的である。

社会民主党は、なによりも、戦争のこのほんとうの役割を明らかにし、支配階級である地主とブルジョアジーが、戦争を弁護するために流布しているうそ、詭弁、「愛国主義的」言辞を、容赦なく暴露する義務を負っている。

交戦国の一グループの先頭には、ドイツのブルジョアジーが立っている。彼らは、戦争をしているのは祖国と自由と文化を擁護するためであり、ツァーリズムに抑圧されている諸民族を解放するためであり、反動的なツァーリズムを崩壊させるためだと主張して、労働者階級と勤労大衆をだましている。だが実際には、このブルジョアジーこそ、ヴィルヘルム二世をいただくプロイセンのユンカーのまえに平身低頭して、つねにツァーリズムの最も忠実な同盟者となり、ロシアの労働者と農民の革命運動の敵となってきたのである。戦争の結末がどうなろうと、実際には、このブルジョアジーは、ユンカーといっしょに、ロシアの革命に抗してツァーリ君主制を支持することに全力を傾けるであろう。

実際には、ドイツ・ブルジョアジーは、セルビアを征服し、南スラヴ人の民族革命を圧殺しようとして、セルビアにたいする略奪戦役を企てたのだ。それと同時に、その兵力の大部分を、より自由な国であるベルギーとフランスにさしむけ、このより富裕な競争相手を略奪しようとしたのである。ドイツ・ブルジョアジーは、この戦争が自分につ

いては防衛戦争であるという作り話をふりまいているが、実際には、兵器器材で達成した自国の最新の改良の成果を利用し、ロシアとフランスがすでに計画し、予定していた新しい軍備ができあがるのに先んじて、戦争をおこすのに自分に最も有利だと思われる時機を選んだのである。

交戦国のもう一つのグループの先頭には、イギリスとフランスのブルジョアジーが立っている。彼らは、祖国と文化をまもるために、ドイツの軍国主義と専制主義にたいして戦争をしているのだと主張して、労働者階級と勤労大衆をだましている。実際には、このブルジョアジーは、すでにはやくから何十億という金で、ヨーロッパの最も反動的で野蛮な君主制である、ロシアのツァーリズムの軍隊を雇い入れ、ドイツ攻撃を準備していたのである。

実際には、イギリスとフランスのブルジョアジーの闘争目的は、ドイツの植民地を奪い取り、ほかよりも急速な経済的発展できわだっている、この競争国を没落させることである。しかも、この崇高な目的のために、「民主主義的」な「先進」国は、野蛮なツァーリズムが、ポーランド、ウクライナなどをさらに抑圧し、ロシア革命をさらに弾圧するのをたすけている。

略奪、残虐行為、限りない戦禍の点では、交戦国の両グループはたがいにひけをとらないのに、各国のブルジョアジーは、プロレタリアートをだまし、ただひとつほんとうの解放戦争、すなわち、「自」国のブルジョアジーにたいしても、「他」国のブルジョアジーにたいしてもおこなわれる市民戦争から、プロレタリアートの注意をそらすために、この崇高な目的のために、愛国主義についての空文句で「自」国の戦争の使命を絶賛することにつとめ、自分たちが敵に勝とうと努力しているのは、土地を奪い占領するためではなく、自国民は別として、他のあらゆる国民を「解放」するためであると説得することにつとめている。

しかし、あらゆる国の政府とブルジョアジーが、労働者を分裂させ、彼らをたがいにけしかけようと熱心になればなるほど、この崇高な目的のために、戒厳令と戦時検閲の体制（この体制は、戦時のいまでも、外敵よりも「内敵」のほうをはるかに迫害している）が苛酷なものになればなるほど、あらゆる国の「愛国的」なブルジョア徒党の排外主義の横行にたいして、自分たちの階級的団結、自分たちの国際主義、自分たちの社会主義的信念をまもりぬくという、自覚したプロレタリアートの義務は、ますます緊急なものとなっている。自覚した労働者がこの任務を放棄することは、自分たちの社会主義的な志向は言うまでもなく、解放目的と民主主義的志向とをすべて放棄することを意味するであろう。

ヨーロッパの最も重要な国々の社会主義政党が自分たちのこの任務を果たさず、これらの党――とくにドイツの党――の指導者たちの行動は社会主義の大業の直接の裏切りと紙一重であるということを、確認しなければならないとは、かえすがえすも苦々しいことである。世界史的に最も重要な時機に、今日の第二社会主義インタナショナル（一八八九―一九一四年）の指導者の大多数は、社会主義を民族主義にすりかえようと試みている。彼らの行動のおかげで、これらの国の労働者党は、政府の許すべからざる行動と対決しなかっただけでなく、労働者階級の立場を帝国主義政府の立場に融合させるように彼らに呼びかけた。インタナショナルの指導者たちは、戦費の支出に賛成投票し、「自」国のブルジョアジーの排外主義的（「愛国的」）スローガンを繰りかえし、戦争を正当化して弁護し、交戦国のブルジョア内閣にはいり、その他等々することによって、社会主義を裏切った。今日のヨーロッパの最も有力な社会主義的指導者と最も有力な社会主義的機関紙が立っているのは、ブルジョア排外主義と自由主義の見地であって、けっして社会主義の見地ではない。社会主義をこのようにはずかしめた責任は、なによりも、第二インタナショナルの最も強大で、有力な党、すなわちドイツ社会民主党が負うべきである。しかし、自分の祖国を売り渡し、コミューンを鎮圧するためにビスマルクと結んだ、まさにそのブルジョアジーの政府で閣僚の椅子を占めているフランスの社会主義者も、正しいと認めることはできない。

ドイツとオーストリアの社会民主党は、まさにこの戦争を支持することによってロシアのツァーリズムとたたかっているかのように見せかけようと、よそおって、自分たちの戦争支持を正当化しようと試みている。われわれ、ロシアの社会民主主義者は、このような正当化を詭弁にすぎないとみなすことを声明する。ツァーリズムにたいする革命運動は、わが国では近年ふたたび巨大な規模に達するようになった。この運動の先頭には、いつもロシア労働者階級が立っていた。この数年の幾百万人の政治的ストライキは、ツァーリズムを打倒し、民主的共和制を要求するというスローガンのもとでおこなわれた。戦争のまさに前夜に、フランス共和国の大統領ポアンカレーは、ニコライ二世訪問のときに、ロシアの労働者の手で築かれたバリケードを、ペテルブルグの街上でみずから目撃することができた。ロシアのプロレタリアートは、ツァーリ君主制の汚辱から全人類を解放するためには、どんな犠牲もいとわなかった。しかし、ツァーリズムの滅亡を一定の条件のもとで引き延ばすことのできるものがあるとすれば、ロシアの全民主主義派とのたたかいでツァーリズムをたすけることのできるものがあるとす

れば、それは、イギリス、フランス、ロシアのブルジョアジーの財布をツァーリズムの反動的な目的に役だたせた、今日の戦争にほかならない、とわれわれは言わなければならない。また、ツァーリズムにたいするロシアの労働者階級の革命的闘争を困難にすることのできるものがあるとすれば、それはまさに、ドイツとオーストリアの社会民主主義の指導者たちの行動にほかならない。ロシアの排外主義的出版物は、この行動をひきつづきわれわれの手本として示している。

ドイツ社会民主党の力が非常にたりなかったために、やむをえずどんな革命的行動も断念しなければならなかったと仮定しても、――そういう場合でも、排外主義の陣営にくわわるべきではなかったし、ドイツ社会民主党の指導者たちはプロレタリアのインタナショナルの旗をけがしているという、イタリアの社会主義者の正しい声明のきっかけとなったような行動をとるべきではなかった。

わが党、ロシア社会民主労働党は、戦争にともなってすでに大きな犠牲をはらったし、将来もなおはらうことであろう。われわれの合法的な労働者出版物はすべて破壊された。労働組合の大多数は閉鎖され、われわれの同志の多くは逮捕され、流刑に処せられた。しかし、わが党の議会代表団――ロシア社会民主党労働者国会議員団――は、戦費の支出に投票しないことを、それどころか、自分たちの抗議をいっそう精力的に表明するために国会の議場から退場することを、自分たちの無条件の社会主義的義務と考え、ヨーロッパ諸国の政府の政策[三二]を帝国主義政策として糾弾することを義務と考えたのである。そしてツァーリ政府の圧迫が十倍も強化されたにもかかわらず、ロシアの社会民主主義的労働者は、すでに最初の非合法の反戦アピールをだして、民主主義とインタナショナルにたいする義務を果たしつつある[三三]。

ドイツ社会民主主義者の少数派と中立諸国のすぐれた社会民主主義者という、革命的社会民主主義の代表者たちは、第二インタナショナルのこの崩壊について激しい恥辱を感じており、イギリスでも、フランスでも、社会民主党の多数派の排外主義に反対する社会主義者の声があがっているが、またたとえば、ずっと以前から国権的自由主義の立場に立っているドイツの雑誌『社会主義月刊』(《Sozialistische Monatshefte》)に代表される日和見主義者たちは、まったく正当にもヨーロッパの社会主義にたいする自分たちの勝利を謳歌しているが、――このようなときに当ってプロレタリアートの最大の足手まといは、日和見主義と革命的社会民主主義とのあいだを動揺して、第二インタナショナルの崩壊に口をつぐむか、外交辞令でそれを隠そうと

している人々（ドイツ社会民主党の「中央派」のような）である。

すべての国の労働者の新しい、いっそう強固な社会主義的団結をうちたてることができるようにするためには、それとは逆に、この崩壊を公然と認め、その原因を理解しなければならない。

日和見主義者は、シュトゥットガルト、[33] コペンハーゲン、[34] バーゼル[35]の各大会の決定をふみにじってしまった。これらの決定は、どんな条件のもとでも、排外主義にたいしてたたかう義務をすべての国の社会主義者に負わせ、ブルジョアジーと政府がはじめたあらゆる戦争にたいする回答として、内乱と社会革命を強力に宣伝する義務を社会主義者に負わせていたのである。第二インタナショナルの崩壊は、過ぎさった（いわゆる「平和な」）歴史的時代の特殊性を基盤として育成され、近年インタナショナル内での事実上の支配権を得ていた日和見主義の崩壊である。日和見主義者は、社会主義革命を否定し、それをブルジョア改良主義とすりかえた。彼らは階級闘争とそれが一定の時機には必然的に内乱に転化することを否定し、諸階級の協力を説いた。彼らは、愛国主義と祖国防衛にかこつけてブルジョア排外主義を説き、労働者は祖国をもたないという、すでに『共産党宣言』に述べられている社会主義の基本的な真理を無視するか、あるいは否定した。彼らは、すべての国のブルジョアジーにたいするすべての国のプロレタリアの革命戦争の必要を認めるかわりに、反軍国主義の闘争ではセンチメンタルな小市民的見地にとどまった。彼らは、ブルジョア議会制度とブルジョア的合法性を利用する必要をもちあげて、この合法性を無条件に崇拝し、危機の時代には非合法形態の組織と扇動がぜひとも必要だということを忘れてしまった。彼らはこうして、第二インタナショナルの崩壊をずっと以前から準備してきたのである。日和見主義の当然な「補足物」である――同じくらいブルジョア的であり、プロレタリア的すなわちマルクス主義的見地に敵意をもった――アナルコ＝サンディカリズムの流派の特徴は、今日の危機の時期に、排外主義のスローガンを、日和見主義者におとらず恥しらずにも得々と、繰りかえすことであった。

日和見主義ときっぱり手をきり、日和見主義がかならず失敗に終わることを大衆に説明しなければ、現在、社会主義の任務を遂行することはできないし、労働者のほんとうの国際的団結を実現することもできない。

各国の社会民主主義者の任務は、まず第一にその国の排外主義とたたかうことでなければならない。ロシアでは、この排外主義は、ブルジョア自由主義派（「カデット」）を

完全にとらえ、エス・エルや社会民主主義者の「右派」にいたるまで、ナロードニキをある程度とらえている（とくに、たとえば、イェ・スミルノフ、ペ・マスロフ、ゲ・プレハーノフの排外主義的な発言を、ぜひとも糾弾しなければならない。彼らの発言は、ブルジョア的＝「愛国主義的」な出版物が受け売りして、ひろく利用している）。

二つの交戦国グループのどちらが敗北したほうが、社会主義にとって害が少ないかを、国際プロレタリアートの見地から決定することは、現情勢のもとでは不可能である。しかし、われわれ、ロシアの社会民主主義者にとっては、次のことを疑う余地はない。すなわち、ロシアのすべての民族の労働者階級と勤労大衆の見地からすれば、ツァーリ君主制の敗北、ヨーロッパとアジアの最も多くの民族と最も多くの住民大衆とを抑圧している、最も反動的で野蛮なこの政府が敗北したほうが、害が最も少ないということである。

ヨーロッパの社会民主主義者の当面の政治的スローガンは、共和制のヨーロッパ合衆国の樹立でなければならないが、その場合プロレタリアートを排外主義の共通の流れにひきいれるためとあれば、どんなことでも喜んで「誓約」するブルジョアジーとは違って、社会民主主義者は、ドイツ、オーストリア、ロシアの君主制を革命的に打倒しなければ、このスローガンがまったく偽りであり、無意味であることを説明するであろう。

ロシアでは、この国が最も立ちおくれていて、まだ自国のブルジョア革命をやりとげていないために、社会民主主義者の任務は、これまでどおり、徹底的な民主主義的変革の三つの基本条件、すなわち、民主的共和制（すべての民族の完全な同権の自決のもとでの）、地主の土地の没収、八時間労働日を実現することでなければならない。しかし、すべての先進国では、戦争が社会主義革命のスローガンを日程にのぼせている。このスローガンは、戦争の重荷がプロレタリアートの肩に重くのしかかればのしかかるほど、また巨大資本主義の技術的進歩がすばらしく発展している情勢のもとでおこなわれている、今日の「愛国主義的」蛮行の恐ろしさが過ぎさったのちにヨーロッパの再建でプロレタリアートの果たす役割が当然に積極的になればなるほど、ますます緊急なものとなる。プロレタリアートの口を完全にふさぐために、ブルジョアジーが戦時法を利用しているので、プロレタリアートは、扇動の組織の非合法形態をつくりだすという無条件の任務に直面している。日和見主義者は、自分の信念を裏切るという代価をはらって、合法組織を「まもる」なら「まもる」がよい。だが、革命的社会民主主義者は、社会主義のための危機の時代にふさわ

しい非合法闘争形態をつくりだすために、また労働者を自国の排外主義的ブルジョアジーとではなく、すべての国の労働者と結合するために、労働者階級の熟達した組織能力と組織上のつながりを利用する。プロレタリア・インタナショナルは滅びはしなかったし、また滅びはしないであろう。労働者大衆は、あらゆる障害をのりこえて、新しいインタナショナルをつくりだすであろう。日和見主義のいまおさめている勝利は、ながつづきするものではない。戦争の犠牲が大きくなればなるほど、日和見主義者が労働者大業を裏切っていること、それぞれの国の政府とブルジョアジーに武器をさしむけなければならないことが、労働者大衆にますますはっきりしてくるであろう。

現在の帝国主義戦争を内乱に転化せよということは、コミューンの経験に教えられ、バーゼルの決議（一九一二年）にその輪郭が示された、そして高度に発展したブルジョア諸国間の帝国主義戦争のすべての条件から出てくる、ただ一つの正しいプロレタリア的スローガンである。このような転化にともなう困難が、ある時期にはどんなに大きくみえようとも、社会主義者は、戦争が事実となった以上は、この方向をめざして系統的に、ねばりづよく、たゆみなく準備活動をすすめることをけっしてやめないであろう。ただこの道によってのみ、プロレタリアートは、排外主義的ブルジョアジーへの依存を脱することができ、諸国民のほんとうの自由への道と社会主義への道を、形は違い、速度の違いはあっても、断固としてすすむことができるであろう。

あらゆる国のブルジョアジーの排外主義と愛国主義に反対する労働者の国際的友愛万歳！

日和見主義から解放されたプロレタリア・インタナショナル万歳！

ロシア社会民主労働党中央委員会

一九一四年九月二八日（一〇月一一日）以前に執筆
一九一四年一一月一日に新聞『ソツィアル－デモクラート』第三三号に発表
全集、第五版、第二六巻、一三－二三ページ所収
邦訳全集、第二一巻、一三－二一ページ所収

大ロシア人の民族的誇りについて

今日、民族性や祖国について、なんとたくさん口にされ、解説され、わめきたてられていることだろう。イギリスの自由党の閣僚や急進派閣僚、フランスの数多くの「先進的」な政治評論家たち（彼らは反動派の政治評論家とすっかり一致していることがわかった）、ロシアのやたらに多い官僚派、カデット派、進歩派の三文文士（これには一部のナロードニキ派や「マルクス主義派」の文士もふくんでいる）——こういった手合いはみな、「祖国」の自由とか、独立とか、民族独立の原則の偉大なことなどについて、色とりどりの調子で謳歌している。これでは、見わけがつかない仕末である。これでは、金で買われた絞刑吏ニコライ・ロマノフの御用讃美者や黒人とインド住民の拷問者にたいする御用讃美者は、いったいどこでおわることになるのか、愚鈍であるか無節操であるかするために「時流」に乗っているなんのとりえもない俗物は、いったいどこではじまることになるのか、見わけがつかないのである。もっとも、このようにけじめをつけることは、重要でもないが。ここにあるのは、非常に広範囲にわたる、きわめて深い思想の潮流であって、その根は大国民族の地主、資本家諸君の利害ときわめてかたく結びついている。年間に数千万数億という金が、こういう階級にとって都合のよい思想を宣伝するために使われている。つまりそれは、かなり大きな水車であって、信念のかたい排外主義者のメンシコフから、日和見主義あるいは無節操の点からみて排外主義者であるプレハーノフとマスロフ、ルバノヴィチとスミルノフ、クロポトキンとブルツェフまでの、四方八方から水をとってきているのである。

われわれ大ロシア人の社会民主主義者も、この思想的潮流にたいする自分の態度をはっきりさせよう。ヨーロッパのいちばん最東部とアジアのかなりの大きな部分の大国民族の代表であるわれわれが、民族問題の大きな意義を忘れるならば、それは体裁がわるいだろう。正当にも「諸民族の牢獄」と呼ばれている、この国でとくに、また資本主義がちょうどヨーロッパの最東部とアジアで、多くの「新しい」大小の民族の生活と自覚を目ざめさせているようなと

きに、またツァーリ君主制が連合貴族会議(三六)とグーチコフら、クレストヴニコフら、ドルゴルコフら、クートレルら、ロヂーチェフらの利益にしたがって幾多の民族問題を「解決」するために、大ロシア人と「異民族」の幾百万人もを完全武装させたような時点では、とくにそうであろう。

民族的誇りの感情は、われわれ大ロシアの自覚したプロレタリアートにとっては縁のないものであろうか？　もちろん、そんなことはない！　われわれは自分の言語と自分の祖国を愛している。われわれは、祖国の勤労大衆（すなわち祖国の人口の一〇分の九）を民主主義者や社会主義者なみの自覚した生活の水準にまで引きあげようと、なによりも活動している。ツァーリの絞刑吏、貴族、資本家が、うるわしいわが祖国にどのような暴行をくわえ、抑圧し、愚弄しているかを目撃し、感ずることは、われわれにとってなによりも痛ましい。われわれは、これらの暴行がわれわれのあいだから、大ロシア人のあいだから反撃をよびおこし、この環境がラヂーシチェフやデカブリストや〔一八〕七〇年代のラズノチーネツ革命家(三七)を輩出させ、大ロシア人の労働者階級が一九〇五年に強大な革命的大衆党をつくりだし、大ロシア人の百姓が、同じ時期に民主主義者となりはじめ、坊主と地主を打倒しはじめたことを、誇りに思っている。

われわれは、いまから半世紀まえに大ロシア人の民主主義者チェルヌィシェフスキーが、自分の生涯を革命の大業にささげて、言ったことば「哀れむべき民族、奴隷の民族。上から下までみな奴隷だ」(三八)を思いだす。大ロシア人出の公然の奴隷と内々の奴隷（ツァーリ君主制にたいしての奴隷）は、こういうことばを思いだしたがらないのである。しかし、われわれの考えでは、これは真に祖国を愛することばであって、大ロシア人の住民大衆のあいだに革命精神が欠けていることをなげく愛のことばであった。その当時には革命的精神はなかった。いまではそれがすこしではあるが、すでに現にあるのである。われわれは、民族的誇りの感情をいっぱいにもっている。なぜなら、大ロシア民族も革命的階級をつくりだしたからであり、また大ロシア民族は坊主・ツァーリ・地主・資本家にたいするはなはだしく卑屈な態度や大がかりなポグロム〔ユダヤ人の組織的な虐殺〕や絞首台の行列や拷問部屋や大飢饉を人類に提供する能力があるばかりでなく、自由と社会主義のための闘争の偉大な模範を人類にしめす能力もあるということを、やはり証明したからである。

われわれは民族的誇りの感情をいっぱいにもっている。だからこそ、われわれは自分の奴隷的な過去（過去に地主貴族はハンガリー、ポーランド、ペルシア、中国の自由を

圧殺するために、百姓を戦争にかりたてた）をとくに憎んでいる。だからこそ、われわれは自分の奴隷的な現在を憎んでいる。現在、この同じ地主たちは、資本家にせきたてられて、ポーランドとウクライナを絞殺するために、ペルシアと中国の民主主義運動をおしつぶすために、われわれ大ロシア人の民族的品位を汚すロマノフ一家、ボブリンスキーら、プリシケーヴィチの一味徒党を強化するために、われわれを戦争にかりたてているのである。たとえ奴隷の生れであっても、それはだれの罪でもない。しかし、自由をかちとろうとする努力を避けるばかりでなく、自分の奴隷的な地位を正当化し美化する奴隷（たとえば、ポーランド、ウクライナなどの絞殺を大ロシア人の「祖国防衛」と呼ぶこと）、そのような奴隷は、当然の憤りと軽蔑と嫌悪の情をよびおこさせる下司、下郎である。

　一九世紀の一貫した民主主義の最も偉大な代表者で、革命的プロレタリアートの教師となったマルクスとエンゲルスは言った。「他の民族を抑圧する民族は自由ではありえない」[五]と。そして、民族的誇りの感情をいっぱいにもっているわれわれ、大ロシア人の労働者は、自由で、独立的な、自主的で、民主的で、共和主義的な、誇り高い大ロシア人が、その対隣人関係を、人間平等の原則にもとづいて打ちたて、偉大な民族を辱しめる農奴制的な特権の原則にもとづいて打ちたてないよう、ぜがひでも望んでいるのである。このような大ロシアを望んでいるからこそ、われわれは、あらゆる革命的な手段をもって、自分の祖国の君主制、地主、資本家、つまりわが祖国の最悪の敵とたたかう以外には、二〇世紀のヨーロッパでは（たとえヨーロッパの遠東部でも）「祖国を防衛する」ことはできないと言うのである。大ロシア人は、大ロシア住民の一〇分の九にとっていちばん害悪のすくないあらゆる戦争におけるツァーリズムの敗北をのぞむよりほかには、「祖国を防衛する」ことはできない。なぜなら、ツァーリズムは住民のこの一〇分の九を経済的にも政治的にも抑圧しているばかりでなく、さらに堕落させ、卑屈にし、辱しめ、その節操を売らせ、異民族にたいする抑圧に慣れさせ、その恥辱を偽善的な、えせ愛国主義的な空文句でカムフラージすることに慣れさせているからである。

　たぶん、われわれに反論する人がいるだろう。ツァーリズムのほかに、その翼のもとで、すでにもうひとつの歴史的な勢力、すなわち大ロシアの資本主義が発生して強固になっていて、進歩的な働きをし、広大な地域を経済的に集中化し、結合させているのであると。しかしこのような反論があったからといって、ツァーリ＝プリシケーヴィチ派社会主義者と呼んでしかるべき（マルクスがラッサール派

をプロイセン王国政府社会主義者と呼んだように[3]）わが社会排外派の身のあかしがたつわけではなく、彼らはさらにもっと強く非難されてしかるべきである。かりに歴史が大ロシア人の大国的な資本主義にとって有利に、多くの小民族にとって不利に、この問題を解決するだろうとさえ仮定してみよう。資本の全史は暴力と略奪、血と汚辱の歴史であるから、これはありえないことではない。それに、われわれは、けっしていつなんどきでも小民族の味方であるわけではない。われわれは、他の条件が同じならば、無条件に中央集権に賛成し、連邦関係という小ブルジョア的な理想には反対する。しかし、たとえそのような場合でも、第一に、ウクライナなどを絞殺しようとするロマノフ＝ボブリンスキー＝プリシケーヴィチを助けることは、われわれのやるべきことではなく、民主主義者（社会主義者はもちろん）のやるべきことではない。ビスマルクは、彼一流のやり方で、ユンカー流に進歩的な歴史的事業をやってのけたのであるが、「マルクス主義者」がこれを根拠にしてビスマルクにたいする社会主義者の援助を弁明することを考えようなどとしたら、とんでもない！　しかも、ビスマルクは、他の民族に抑圧され、細分化されていたドイツ人を統合することによって、経済の発展を助けたのである。ところが、大ロシアの経済的繁栄と急速な発展は、他の諸民族にたいする大ロシア人の暴力から国を解放することを要求している。生粋のロシア人のえせビスマルク派を崇拝している者たちは、この区別を忘れているのである。

第二に、もし歴史がこの問題を大ロシア人の大国的資本主義に有利に解決するならば、このことから出てくる結論は、資本主義によって生みだされる共産主義革命のおもな推進力としての大ロシア人のプロレタリアートの社会主義的役割は、なおさら偉大なものとなるであろうということである。ところがプロレタリアートの革命のためには、労働者を最も完全な民族の平等と友愛の精神で長期にわたって教育する必要がある。したがって、ほかならぬ大ロシア人のプロレタリアートの利益の見地からは、大ロシア人に抑圧されているあらゆる民族の完全な同権と自決権を最も断固として、徹底的に、大胆に、革命的に擁護するよう、長期にわたって大衆を教育する必要があるのである。大ロシア人の民族的な誇り（奴隷のセンスで理解されたものでない）の利益は、大ロシア人（および他のすべての民族）の社会主義的利益と一致している。イギリスに数十年も住んでいて、半ばイギリス人になっていたマルクスが、イギリス労働者の社会主義運動の利益のために、アイルランドの自由と民族独立を要求したことは、われわれの手本として残るであろう。

わが国産の社会排外派、プレハーノフその他は、われわれが考察した右の第二の仮定の場合〔第二に、もし歴史が……以下をさす〕、自分の祖国、自由で民主的な大ロシアの裏切者となるだけでなく、ロシアのあらゆる民族のプロレタリア的な友愛の、すなわち社会主義の大業の、裏切者にもなるであろう。

『ソツィアル－デモクラート』第三五号、一九一四年一二月一二日
新聞『ソツィアル－デモクラート』のテキストによって印刷
全集、第五版、第二六巻、一〇六－一一〇ページ所収
邦訳全集、第二一巻、九三－九七ページ所収

よその旗をかかげて〔八〕

『ナーシェ・デーロ』〔八三〕（ペトログラード、一九一五年一月）の第一号に、ア・ポトレソフ氏のきわめて特徴的な綱領的な論文『二つの時代の境目で』が発表されている。すこしまえにある雑誌に掲載された、同じ筆者のこのまえの論文と同じように、この論文は、今日の重要な焦眉の諸問題についての、ロシアの社会思想の一つのブルジョア的潮流、すなわち解党主義的潮流の基本思想を述べたものである。実をいえば、ここにあるのは論文ではなく、ある一派の宣言なのである。そして、これらの論文を注意ぶかく読み、その内容を深く考えてみる人はだれでも、この筆者（と彼の友人たち、なぜなら彼は一人ぼっちではないから）の思想が、宣言あるいは『クレード』（信仰告白）という、もっと適切な形で表現されることを妨げたのは、偶然的な考慮、すなわち純粋に文筆上の利益には関係のない考慮だ

けであるということが、わかるであろう。

ア・ポトレソフの主要な思想は、今日の民主主義派が二つの時代の境目にあるということである。そして、その場合新時代と旧時代の根本的な区別は、民族的な狭量から国際精神への移行である。ア・ポトレソフは、一八世紀末と一九世紀のはじめの三分の二期に特有な旧ブルジョア民主主義派とは異なる、ちょうど一九世紀末と二〇世紀はじめに特有な民主主義派を、近代民主主義派と解している。

一見したところでは、いま今日の民主主義派を支配している国権的自由主義的傾向の反対者であって、国権的自由主義者ではなく、「国際主義者」であるように見えるかもしれない。

実際に、国際精神を擁護し、民族的狭量や民族的排他精神を、過去の旧時代の代物とすることは、国権的自由主義の疫病、近代民主主義派のこの潰瘍、もっと正確にいえば、近代民主主義派の公認代表者のこの潰瘍ときっぱりと関係を断つことではないか？

一見したところでは、そのように見えるかもしれないばかりでなく、不可避的にそう見えるにちがいない。ところが、それは根本的な誤りである。この筆者は、よその旗をかかげて自分の積荷を運びこんでいるのである。彼は「国際精神」の旗のもとで国権的自由主義という禁制品をいっそう安全に運びこむために、小さな軍事的計略をもちいた、――この場合、それが意識的であるにせよ、無意識的であるにせよ、どのみち同じである。なぜなら、ア・ポトレソフは、まったくまぎれもない国権的自由主義者だからである。彼の論文（と彼の綱領、彼の政綱、彼の『クレード』）の本質は、まさにこの小さな、お望みなら、無邪気といってもよい、軍事的計略をもちい、国際精神の旗のもとに日和見主義を密輸入していることである。この本質を明らかにするためには、問題が大きな第一義的な重要性をもっているから、大いにくわしく論じなければならない。ア・ポトレソフがよその旗を使っていることは、彼が「国際精神」という原則をかくれみのにしているばかりでなく、「マルクス的方法論」の支持者という肩書をもかくれみのにしているから、なおさら危険である。いいかえれば、ア・ポトレソフはマルクス主義の真の信奉者となり、表現者となりたいと思っているが、実際には彼はマルクス主義を国権的自由主義とすりかえている。ア・ポトレソフは、カウツキーの「弁護士業」を非難して、すなわち、ときにはAの民族の、ときにはBの民族の、つまりいろいろな民族の色彩をおびた自由主義を弁護するやり方を非難して、カウツキーを「修正」しようとしている。ア・ポトレソフは国権的

自由主義（というのは、カウツキーがいま国権的自由主義者となっていることは、疑う余地がなく、争う余地もないからである）に国際精神とマルクス主義を対置しようとしている。だが実際には、ア・ポトレソフは雑色の国権的自由主義に単色の国権的自由主義を対置しているのである。マルクス主義は、いまの具体的な歴史的情勢のもとでも、あらゆる点で、いっさいの国権的自由主義にたいして敵対的である。

これが現実にそうであり、なぜそうであるかということについては、これから論じてみよう。

一

不幸にも、ア・ポトレソフは国権的自由主義の旗をかかげて航行する結果となったが、読者は彼の論文の次のような箇所を洞察するならば、この不幸の要点を最も容易に理解することができるであろう。

「……彼ら（マルクスとその同志たち）は、そのもちまえの熱情のすべてをかたむけて、問題を解決しようと突進した。問題がどんなに複雑であろうとも、彼らは紛争を診断した。彼らは、どちらのほうの勝利が彼らの見地からみて望ましい可能性のより多くの余地をひらくかを、規定しようとした。このようにして、彼らは自分の戦術をうちたてるための一定の基盤をきずいた」（七三ページ。引用文中の傍点は引用者のもの）。

「どちらのほうの成功が望ましいか」——まさにこれを、しかも民族的見地からでなく、国際的見地から規定しなければならない。まさにここにマルクス的方法論の本質がある。カウツキーは、まさにこのことをおこなわず、そのために「裁判官」（マルクス主義者）から「弁護士」（国権的自由主義者）になりかわったのである、という。これがポトレソフの思想である。ア・ポトレソフ自身は、一方の側（すなわち自分の側）の成功が望ましいと主張するとき、彼はけっして「弁護士」の役割を果たしているのではなく、他方の側の「常軌を逸した」罪過についての真に国際的な考慮にしたがって行動していると、非常に深く確信している……

ポトレソフも、マスロフも、プレハーノフその他も、真に国際的な考慮にしたがって行動し、ポトレソフと同じ結論に行きついている。……これは、……はなはだ幼稚である……しかし、われわれは先走りしないで、まず純理論的な問題の検討からはじめよう。

「どちらのほうの勝利が望ましいか」ということを、マルクスは、たとえば、一八五九年のイタリア戦争で規定した。ア・ポトレソフは「そのいくつかの特殊性のゆえに、

われわれにとって特別の興味をひく」、まさにこの例を立ちいって論じている。われわれのほうも、ア・ポトレソフが選びだしたこの例をとることに同意する。

ナポレオン三世は、イタリアの解放のためでもあるかのように装いながら、実際には自分の王朝的目的のために一八五九年にオーストリアに宣戦を布告した。ア・ポトレソフは、こう書いている。「ナポレオン三世の背後からは、そのまえにフランス人の皇帝と秘密協定を結んだばかりのゴルチャコーフの姿がくっきりと見えていた」。その結果、一方には、イタリアを抑圧していた最も反動的なヨーロッパの君主制があり、他方では、解放のためにたたかっている革命的イタリアの代表者たちが、ガリバルディをもふくめて、超反動家ナポレオン三世と手を携えているなどという、矛盾の糸玉が出てきたのである。『双方とも悪い』と言って、罪過を回避するほうが簡単ではなかったか」とア・ポトレソフは書いている。しかし、エンゲルスも、マルクスも、ラッサールも、このような「無造作」な解決策には誘惑されずに、「衝突がどのような結末になれば、それが、彼らのすべてにとって貴重な事業に最大のチャンスをあたえうるかという問題の探求」（ア・ポトレソフは、問題の研究、調査と言いたいところである）「にとりかかったのである」。

マルクスとエンゲルスは、ラッサールとは反対に、プロイセンが介入すべきであると考えた。ア・ポトレソフ自身のみとめるところによれば、「敵対的な連合勢力との衝突の結果、ドイツに民族運動が起こり、それが多くのドイツ統治者の頭越しに繰りひろげられるかもしれず、ヨーロッパ協商のうちのどの大国が中心の悪玉であるか、ドナウ沿岸の反動的な君主国〔オーストリア〕か、それともこの協商の他のすぐれた代表国であるか」ということも、マルクスとエンゲルスの考慮のうちにはいっていた。

われわれにとっては、マルクスが正しかったか、それともラッサールが正しかったかということは大事ではなく、大事なのは、どちらのほうの成功が望ましいかを、国際的見地から規定する必要があるという点で、三人がみな一致しているということである、とア・ポトレソフは結論している。

以上がア・ポトレソフのとりあげた例である。以上がこの筆者の議論である。双方の交戦国の政府が極度に反動的であったにもかかわらず、その当時、マルクスが「国際紛争を評価」（ア・ポトレソフの表現）するすべを知っていたとすれば、いまでも、マルクス主義者は、このような評価をくだす義務がある、とア・ポトレソフは推論している。

この推論の帰結は、次のようなものであるから、それは幼稚な子供っぽいものであるか、そうでなければ、粗雑な詭弁的なものである。マルクスは、一八五九年にどのブルジョアジーの成功のほうが望ましいかという問題を解決したのであるから、われわれも、半世紀以上もたった今日、ちょうど同じ問題を解決しなければならない、と。

ア・ポトレソフは、一八五九年（とその後の多くの場合）のマルクスにあっては、「どちらのほうの成功が望ましいか」という問題は「どのブルジョアジーのほうの成功が望ましいか」という問題とひとしいということに、気づかなかった。[23] ア・ポトレソフは、無条件に進歩的なブルジョア的運動が現存していたときに、——現存していたばかりでなく、ヨーロッパの最も重要な諸国家において歴史過程の前面に立っていたときに——マルクスがこの問題を解決したということに気づかなかった。今日、たとえば、イギリスやドイツのようなヨーロッパ「協商」の無条件に中心的な、最も重要な諸国家については、進歩的なブルジョアジーとか進歩的なブルジョア運動を考えることさえ、こっけいであろう。これらの中心的な、最も重要な大国の古いブルジョア「民主主義派」は、反動的なものになった。ところが、ア・ポトレソフ氏は、このことを「忘れてしまい」、現代の（非ブルジョア的な）民主主義の見地を、古い（ブルジョア的）えせ民主主義の見地とすりかえた。このように別の、しかも古い、寿命のつきた階級の見地に移行することは、最も純粋な日和見主義である。新しい時代と古い時代の歴史過程の客観的内容を分析することによって、このような移行を正当化することは、問題にもなりえないのである。

ほかならぬブルジョアジーは——たとえばドイツで、またイギリスでも——ア・ポトレソフのおこなっているようなすりかえ、帝国主義時代と、ブルジョア的進歩的な、民族解放運動、民主主義的解放運動の時代とのすりかえをおこなおうと努めているのである。ア・ポトレソフは無批判にブルジョアジーにのろのろ追従している。ア・ポトレソフみずからも、彼自身のあげた例のなかで、とっくの昔にすぎ去った時代にマルクス、エンゲルス、ラッサールがどのような種類の考慮にしたがって行動したかをみとめ、かつしめさねばならなかったから、こういうやり方は、なおさら許しがたいものである。*

* ついでにいえば、ア・ポトレソフは、一八五九年の戦争の諸条件を評価するうえで、マルクスとラッサールのどちらが正しかったかをきめることを断念している。われわれの考えでは、（メーリングとは反対に[24]）マルクスは正しかったし、ラッサールは、ビスマルクに媚びていた当時と同じように、日和見主義者であった。ラッサールはプロイセンとビスマルク

の勝利に迎合し、イタリアとドイツの民主主義的民族運動に十分の力がなかったことに迎合した。まさにそうすることによって、ラッサールは国権的自由主義的な労働者政策のほうへ動揺したのである。マルクスは、自主的な、徹底して民主主義的な、そして臆病な国権的自由主義に敵対的な政策を鼓舞し、発展させた（一八五九年にプロイセンがナポレオンに反対して干渉行動をとっていたなら、それはドイツの人民運動を刺激したであろう）。ラッサールは、下方よりもむしろ上方を覗い、ビスマルクに見とれてしまった。ビスマルクの「成功」は、けっしてラッサールの日和見主義の弁明にはならない。

第一に、それは民族運動（ドイツとイタリアの）についての考慮であり、それが「中世紀制度の代表たち」の頭を越えて発展したということについての考慮であり、第二に、ヨーロッパ協商内のもろもろの反動君主国（オーストリア、ナポレオン等々）の「中心悪」についての考慮であった。

これは、まったくすっきりした、議論の余地のない考慮である。マルクス主義者は、封建的絶対主義勢力にくらべて、ブルジョア的民族解放運動が進歩したものであることを、けっして否定しなかった。ア・ポトレソフは、今日の中心的な、すなわち最も主要な、最も重要な、紛争諸国家のなかには、なんらそのようなもののないこと、またありえなかったことを知らないわけがない。その当時には、イタリアにも、ドイツにも、民族解放型の数十年にわたる人民運動があった。その当時には、西欧のブルジョアジーが、その財力で他の特定の大国を支持したのではなく、その反対に、これらの大国がほんとうに「中心悪」であった。ア・ポトレソフは、他の諸大国のうちのどの一国も、いまの時代では「中心悪」ではなく、また、ありえないということを、知らないわけにはいかないし、彼自身も同じ論文のなかで、それをみとめているのである。

ブルジョアジー（たとえば、ドイツのブルジョアジー、とはいえけっして彼らだけではないが）は、貪欲な目的からして民族運動のイデオロギーを奨励していて、それを帝国主義の時代に、すなわちまったく別の時代に引きうつそうと努めている。プルジョアジーのあとには、例によって例のごとく、日和見派がのろのろと追従し、近代民主主義派の見地を放棄し、古い（ブルジョア）民主主義派の見地に移っている。まさにここに、ア・ポトレソフと彼の解党派仲間のすべての論文、すべての立場、すべての方針の基本的な過誤があるのである。マルクスとエンゲルスは、穏健な自由主義運動をすさまじい民主主義運動へ発展させることを念願しながら、どのようなブルジョアジーの成功のほうが望ましいかという問題を、古い（ブルジョア）民主

主義の時代に解決した。ア・ポトレソフは近代（非ブルジョア）民主主義派の時代に、イギリスでも、ドイツでも、フランスでも、ブルジョア的な進歩的運動も、穏健な自由主義運動も、すさまじい民主主義運動も問題になりえないときに、民族主義的ブルジョア自由主義を唱導している。マルクスとエンゲルスは、自分の時代から、すなわち進歩的なブルジョア民族運動の時代から、前進し、これらの運動をさらにおしすすめ、それが中世紀制度の代表たちの「頭越しに」発展するよう念願した。

ア・ポトレソフは、すべての社会排外派と同じように、自分の近代民主主義派の時代から後退し、古い（ブルジョア）民主主義派のとっくに寿命のつきてしまった、死んだ、したがって内部的に偽りの見地へ飛び移っている。

したがって、民主主義派に訴えているア・ポトレソフの次のような呼びかけは、最も大きな混乱であり、最も大きな反動的な呼びかけである。

「……後退せず前進せよ。個人主義をめざすな、最も完璧な、最も力強い国際意識をめざせ。前進は、ある意味では後退をも意味している、すなわちエンゲルス、マルクス、ラッサールまで後退すること、国際紛争にたいする彼らの評価方法まで後退すること、民主的な利用の一般的な範囲に国家の国際的行動をもふくめることへ後退することを意味している」。

ア・ポトレソフは「ある意味ではなく、あらゆる意味で、今日の社会民主主義を後退させ、それを古いブルジョア民主主義のスローガンとイデオロギーへ引きもどし、ブルジョアジーにたいする大衆の従属状態へ引きもどしている。

……マルクスの方法は、なによりもまず、その具体的な時点における、その具体的な情勢のもとにおける歴史過程の客観的な内容を考慮し、どの階級の運動がこの具体的な情勢のもとにおける可能な進歩の原動力であるかを、なによりもまず理解することである。一八五九年の当時、大陸ヨーロッパにおける歴史過程の客観的な内容は帝国主義ではなく、ブルジョア的民族解放運動であった。主要な原動力は封建的絶対主義勢力に反対するブルジョアジーの運動であった。ところが、あまりにも賢明な、ア・ポトレソフは、五五年経過して、反動的な封建領主に似た老残のブルジョアジーの大金融資本王が、これらの封建領主の地位についたときに、国際紛争を、新しい階級*の見地から評価せず、ブルジョアジーの見地から評価しようとしている。

* ア・ポトレソフは、次のように書いている。「実際に、停滞しているかのように見えていた、ちょうどこの時期に、各国の内部では巨大な分子過程がおこっていて、国際情勢も徐徐に変質した。なぜなら、植民地獲得の政策、つまり戦闘的

な帝国主義の政策が、国際情勢のもとでますます明瞭に決定的な要素となったからである」。

ア・ポトレソフは、自分がこれらのことばのなかにもちこんだ真理の意義を洞察しなかった。かりに、二つの国がブルジョア的民族解放運動の時代に、たがいに戦うと仮定しよう。今日の民主主義の見地からは、どの国の成功が望ましいか？　ブルジョアジーの解放運動をいっそう強く推進し、いっそうスピーディーに発展させ、封建制をいっそう強く掘りくずすような国の勝利が望ましいことは、明白である。さらにこう仮定してみよう、――客観的な歴史的情勢の決定的な要素が変化し、民族を解放しつつある資本に国際的に反動的な、帝国主義的金融資本がとってかわった、と。かりに第一の国がアフリカの四分の三を、第二の国が四分の一を領有しているとしよう。これらの国の戦争の客観的な内容はアフリカの再分割である。どちらの成功のほうが望ましいか？　こういう従来どおりの問題の出し方は、ばかげている。なぜなら、われわれには従来の評価基準がないからである。つまり、ブルジョア的解放運動の多年にわたる発展もなければ、封建制の崩壊の多年にわたる過程もないからである。第一の国がアフリカの四分の三の〔領有〕「権」を確保しようとするのを助けることも、第二の国（たとえ、この国が第一の国よりも経済的に急速に発展していようと）がこの四分の三を奪取しようとするのを助けることも、近代民主主義派のなすべきことではない。

近代民主主義派は、どの帝国主義的ブルジョアジーにも加担しない場合にだけ、「双方とも悪い」と語る場合にだけ、各国における帝国主義的ブルジョアジーの不成功を望む場合にだけ、依然として自分自身に忠実であろう。これよりほかのどの解決策も、実際には真の国際精神とはなんの共通点もない国権的自由主義的な解決策であろう。

ただ読者は、ア・ポトレソフの技巧をこらした用語法にだまされてはならない。彼は、自分がブルジョアジーの見地へ移行したのをカムフラージするために、それをもちいている。ア・ポトレソフが「個人主義をめざすな、最も完璧な、最も力強い国際意識をめざせ」と叫んでいるとき、彼が念頭においているのは、カウツキーの見地と自分の見地との対置である。彼は、カウツキー（とその同類）の見解を「個人主義」と呼んでいるが、そのさい彼が念頭においているのは、カウツキーは「どちらのほうの勝利が望ましいか」を考慮することを拒否し、それぞれの「個々」の国の労働者の国権的自由主義を是認しているということで

ある。ところが、われわれ、ア・ポトレソフ、チェレヴァーニン、マスロフ、プレハーノフその他は、「最も完璧で力強い国際意識」に訴えている、なぜなら、けっして個々の国家的（あるいは個々の民族的）見地からでなく、真に国際的な見地から一つの特定の色彩の国権的自由主義を支持しているからである、というのである。……この議論はそれほど……破廉恥ではないにしても、こっけいであろう。

ア・ポトレソフ一派も、カウツキーも、自分が代表しようとしている階級の見地を裏切って、よちよちとブルジョアジーに追従している。

二

ア・ポトレソフは、その論文の表題を『二つの時代の境目で』とした。われわれが二つの時代の境目に生きていることは、争う余地がない。そして、われわれの眼前でおこっている、最大に重要な歴史的事件は、まず第一に、一つの時代から他の時代への過渡期の客観的条件が分析されてはじめて、理解されうるのである。いまここでは大きな歴史的時代が問題にされている。それぞれの時代には、ときには前進的な、ときには後退的な、個々の部分的な運動があるし、将来もあるであろうし、運動の平均的な型や平均的なテンポからの、さまざまな偏差があるし、将来もあるであろう。われわれは、当の時代の個々の歴史的運動がどんな速度で、どんな成功率で発展していくかを知ることはできない。しかし、われわれは、どんな階級があれこれの時代の中心に立ち、時代の主要な内容、時代の発展の主要な方向、その時代の歴史的情勢の主要な特殊性等々を規定するかということを知ることができるし、また知っている。これを基盤にしてはじめて、すなわちまず第一に、いろいろな「時代」の区別の基本的な特徴（個々の国の歴史の個々の挿話でなく）を、考慮にいれてはじめて、われわれは自分の戦術を正しく策定することができる。そしてその時代の基本的な特徴を知ることだけが、あれこれの国のいっそう詳細な特殊性を考慮する基盤となりうるのである。

まさにこの分野に、ア・ポトレソフとカウツキー（彼の論文〔『国際精神と戦争』〕は『ナーシェ・デーロ』の同じ号に発表されている）の根本的な詭弁があり、あるいは彼ら二人をマルクス主義的な結論へ連れていかずに、国権的自由主義的な結論へ連れていっている両者の根本的な歴史的誤りがあるのである。

ア・ポトレソフがとりあげていて、彼の「特別の関心」をひいている例、一八五九年のイタリア戦役の例とカウッ

キーがとりあげている多くの同類の歴史的な例は、われわれがその「境目に」生活している「まさにその歴史的時代」のものではないのであって、この点が問題なのである。われわれがはいろうとしている（あるいはすでにはいっているが、まだその初期の段階にある）時代を、今日（あるいは第三）の時代と呼ぶことにしよう。われわれが出てきたばかりの時代を、きのう（あるいは第二）の時代と呼ぶことにしよう。そうなると、ア・ポトレソフとカウツキーがその例をとってきている時代は、一昨日（あるいは第一）の時代と呼ばなければならない。ア・ポトレソフとカウツキーどちらもの議論のはなもちのならない詭弁、がまんならない偽りは、まさに、彼らが今日（第三）の時代の条件を、一昨日（第一）の時代の条件とすりかえているところにある。

説明しよう。

なんどもマルクス主義文献のなかで引用され、カウツキーによって幾度となく繰りかえされ、ア・ポトレソフによってその論文のなかで採用されている通例の歴史的時代区分は、次のようなものである。（一）一七八九―一八七一年、（二）一八七一―一九一四年、（三）一九一四年―？　もちろん、境界はここでは、自然界や社会におけるすべての一般の境界と同じように、条件的であり、可動的であり、相対的であって、絶対的ではない。そして、われわれは、とくに顕著な、人目につく歴史的事件を、大きな歴史的運動の道標として、ただ大まかにとるにすぎない。フランス大革命から普仏戦争までの第一の時代は、ブルジョアジーの興隆の時代、彼らの完全な勝利の時代である。それは、ブルジョアジーの上向線であり、ブルジョア民主主義運動一般、とくにブルジョア民族運動の時代であり、寿命のつきてしまった封建的絶対主義制度の急速な崩壊の時代である。第二の時代は、ブルジョアジーの完全な支配と衰退の時代であり、進歩的ブルジョアジーから反動的、超反動的な金融資本への移行の時代である。それは、新しい階級、近代民主主義派がその勢力をととのえ、徐々に結集していった時代である。いまはじまったばかりの第三の時代は、ブルジョアジーを、第一の時代の期間に封建領主がおかれていた「地位」においている。これは、帝国主義の時代であり、また帝国主義から生ずる帝国主義的激動の時代である。

ほかのだれでもなく、カウツキー本人が、その多くの論文と小冊子『権力への道』（一九〇九年刊）のなかで、到来しつつある第三の時代の基本的な特徴を、最も完全にはっきりと描写し、この時代と第二（昨日）の時代との根本的な区別を指摘し、近代民主主義派の直接の任務の変化や闘争の条件と形態の変化、客観的な歴史的条件の変動から

生じてくる変化をみとめた。いま、カウツキーは、自分が崇拝していたものを焼きすてようとしており、まったく信じられえないほどの、最も不体裁な、最も破廉恥なやり方で、戦線を変更しようとしている。彼は、前掲の小冊子では、戦争が、しかも一九一四年に事実となったまさにその戦争が近づきつつあるということの徴候について率直に述べている。この小冊子のいくつかの箇所をカウツキーのいまの著作と単に比較するだけでも、彼が自身の信念と堂々たる声明とを裏切ったということを、完全に明瞭にしめすことができるであろう。そしてカウツキーは、この点では、ただ一つの事例ではなく(しかも、けっしてドイツの事例ではなく)、危機の時点にブルジョアジーに投降した近代民主主義派の上層全体の典型的な代表者である。

ア・ポトレソフとカウツキーがとってきている歴史的な例[22]のすべては、第一の時代のものである。一八五五年、一八五九年、一八六四年、一八六六年、一八七〇年ばかりでなく、さらに一八七七年(ロシア＝トルコ戦争)と一八九六―一八九七年(トルコ＝ギリシア戦争とアルメニア動乱)の戦争時代の歴史的現象の基本的な客観的内容はブルジョア民族運動であったか、さもなければ、さまざまな種類の封建制度から解放されつつあったブルジョア社会の「痙攣(けいれん)」であった。多くの先進国における真に自主的な、そしてブルジョアジーの爛熟と凋落の時代にふさわしい、近代民主主義派のどんな行動も、その当時には問題にもなりえなかった。当時のこれらの戦争時代に、これらの戦争に参加し、上向線をたどり、ただひとり圧倒的な力で封建的絶対主義制度に対抗することのできた主要な階級は、ブルジョアジーであった。いろいろな国で、有産者的商品生産者のさまざまな層によって代表されるこのブルジョアジーは、程度の差はあっても進歩的で、ときには(たとえば、一八五九年のイタリアのブルジョアジーの一部)革命的でさえあったが、しかし時代の一般的特徴は、まさにブルジョアジーの進歩性であった。すなわち封建制度にたいする彼らの闘争が未解決で、未完了であることであった。まったく当然のことではあるが、近代民主主義派の諸分子は――その代表者としてのマルクスも――封建制度に対抗して進歩的なブルジョアジー(闘争能力のあるブルジョアジー)を支持するという争う余地のない原則を、指針として、「どちらがわの」、すなわちどのブルジョアジーの「成功」のほうが望ましいかという問題を、その当時解決したのである。戦争に見舞われた主要な国々の人民運動は、その当時は、その経済的内容と階級的内容からみて、一般民主主義的な、すなわちブルジョア民主主義的な運動であった。まったく当然なことではあるが、どのブルジョアジーの成

功のほうが、〔諸条件の〕どんな組合せのもとで、反動的な（ブルジョアジーの興隆を妨げる封建的絶対主義的な）諸勢力のうちのどの勢力の失敗の場合に、近代民主主義派にとってより大きな「活動舞台」を約束するかという問題のほかに、その他の問題を、その当時提起することはできなかった。

しかも、マルクスは、ア・ポトレソフでさえ余儀なくみとめているように、ブルジョア民族運動とブルジョア的解放運動を基盤とした国際紛争の「評価」にあたっては、どちらがわの成功のほうが民族運動とおおむね人民的な一般民主主義運動の「発展」（ア・ポトレソフの論文、七四ページ）をより多く助けることができるかという考慮を指針としていた。これは、個々の民族において、ブルジョアジーが権力の座につくことを基盤にした軍事的紛争の場合に、マルクスが、一八四八年のときと同じように、より広範な、より「平民的」な大衆、小ブルジョアジー一般、とくに農民、最後に無産者階級の参加によってブルジョア民主主義運動を拡大、激化させることになによりも多く配慮していたことを意味している。マルクスが運動の社会的基盤の拡大と運動の発展を、このように考慮していたことこそ、マルクスの徹底して民主主義的な戦術を、ラッサールの不徹底な――国権的自由主義派と同盟をむすびがちな――戦術から根本的に区別したものである。

国際紛争は、第三の時代でも、その形態からみれば、依然として第一の時代と同じ国際紛争であったが、その社会的内容と階級的内容は根本的に変わっていた。客観的な歴史的情勢は、まったく一変してしまっていた。

上向線をたどり、民族的に解放されつつある資本の、反封建闘争には、下向線をたどり、衰退してゆく、最も反動的な、命数のつきた、老残の金融資本の闘争――新しい勢力に反対する闘争――がとってかわった。第一の時代には、封建制度から解放されつつある人類の生産力の発展の支柱であった国家のブルジョア民族的な枠は、いまや第三の時代には、生産力のいっそうの発展の障害となった。ブルジョアジーは、興隆しつつある先進的な階級から転落していく、衰退的な、内部的に死んだ、反動的な階級になった。まったく別の階級が、興隆していく――広範な歴史的規模で――階級となった。

ア・ポトレソフとカウツキーは、この階級の見地を放棄してしまって後退し、ブルジョア的な欺瞞を繰りかえしているが、この欺瞞は、今日でも歴史過程の客観的な内容は、封建制度に反対するブルジョアジーの進歩的運動であるかのようにいう見解を拠りどころとしている。だが、実際には、近代民主主義派が反動的な帝国主義的ブルジョアジー

によちよち追従していくことは、いまでは問題になりえないのである、――このブルジョアジーの「色彩」がどんなものであろうと、どのみち同じである。

第一の時代には、客観的にみて、歴史的な課題は、進歩的なブルジョアジーが、瀕死の封建制度の主要な代表者との闘争のなかで、国際紛争をいかに「利用」して、全世界の全ブルジョア民主主義派一般の最大限の利益となさねばならないかということであった。第一の時代の当時、いまから半世紀以上まえには、封建制度によって奴隷化されていたブルジョアジーが「自国」の封建的抑圧者の失敗を望んでいたことは、当然であり、不可避であった。そしてそのさい、全ヨーロッパ的な威信をもつ主要な、中心的な封建的城塞の数は、まったく多くなかった。そして、マルクスは、その当時の具体的な情勢（局面）のもとでは、どの国におけるブルジョア的解放運動の成功のほうが、全ヨーロッパ的な封建的城塞の爆破にとっていっそう大事であるかということを、「評価」していたのである。

第三の時代の今日では、全ヨーロッパ的な意義をもつ封建的城塞はまったく残っていない。もちろん、「利用」（国際紛争を）することは、近代民主主義派の任務であるが、しかし、ア・ポトレソフとカウツキーとは反対に、国際的利用の鋒先は、個々の国の金融資本にむけるべきではなく、国際金融資本にむけるべきである。そして、いまから五〇―一〇〇年まえに興隆しつつあったその階級が、こういう利用をおこなってはならない。その当時は、最も先進的なブルジョア民主主義派の「国際的行動」（ア・ポトレソフの表現）が問題であった。いまでは、同じ種類の任務が歴史的に成熟し、客観的情勢によって、まったく別の階級のまえに提起されているのである。

三

第二の時代、あるいは、ア・ポトレソフの表現によれば「四五年の期間」（一八七〇―一九一四年）を、彼はきわめて不完全にしか特徴づけていない。同じような不完全さは、トロツキーのドイツ語の著述におけるこの時代の特徴づけにも見られる。とはいっても、トロツキーは、ア・ポトレソフの実際的な結論に同意しているのではない（これは、トロツキーがア・ポトレソフよりもすぐれているからだというべきである）、――この場合、この二人の著述家にはおたがいのある程度の近親関係の原因が、両者にわからずじまいになるということは、まずあるまい。

ア・ポトレソフは、われわれが第二の時代、あるいは昨日の時代と呼んだ時代について、次のように書いている。

「活動や闘争のこまごまな制限、すべてのものに浸透

していく漸進主義という、ある人々が原理にまつりあげたこれらの象徴——時代の——は、他の人々にとってはその生活の習慣的な事実となり、そのようなものとして、彼らの心理の一つの要素となり、彼らのイデオロギーのニュアンスとなった」（七一ページ）。「計画的に徹底的に、慎重に前進していく才能（この時代の）は、その反面、第一に、漸進性の破綻の時機とあらゆる種類の破局的な現象とに明白に適応しないという性格をもっており、第二に、民族的行動——民族的環境——の圏内にのみ閉じこもるという性格をもっていた」（七二ページ）……「革命でもなく戦争でもない」（七〇ページ）……「民主主義勢力の『陣地戦』の時期が長びけばながびくほど、ヨーロッパの中心に国際紛争がなく、したがってまた、民族国家の領土の限界をこえる動乱を経験せず、全ヨーロッパ的あるいは世界的な規模の利害を痛感しなかったヨーロッパ史の時代が、舞台から長く去らなければならないほど、民主主義派は、それだけいっそう首尾よく民族主義化されたのである」（七五—七六ページ）。

この特徴づけの基本的な欠陥は、トロツキーによる同じ時代の特徴づけの欠陥と同じように、前述の基盤のうえに発展した近代民主主義派の深刻な内部矛盾を見つけ、かつみとめることをのぞまないところにある。その結果、あたかもこの時代の近代民主主義派は、依然として一つのまとまった全体であって、概していえば、漸進主義の精神がしみこみ、民族主義化され、破局や漸進性の破壊を忘れてしまい、卑小化し、かび臭くなったかのようである。

だが、実際には、そういうことはありえなかったのである。なぜなら、前述の傾向とならんで、争う余地もなく、別の対抗的な傾向が作用し、労働者大衆の「生活」は国際化され、人々は都会へ都会へとあこがれ、全世界の大都市の生活条件は平準化（平均化）し、資本は国際化し、都市住民と農村住民、土着住民と異民族住民は巨大な工場のなかで混淆するなどして、階級矛盾が激化し、企業家団体は労働者団体をより重く圧迫し、たとえば、大衆ストライキのような、いっそう尖鋭な、いっそう酷烈な闘争形態が生まれ、生活費は高騰し、金融資本の抑圧が耐えがたいものとなったりなどしたからである。

実際に事態がそのようで（ポトレソフの言うようで）なかったことを、われわれは確実に知っていた。この時代のあいだに、近代民主主義派内部の二つの相矛盾しあう傾向相互の闘争をまぬがれた国は、ヨーロッパの大きな資本主義国のうち一つも、文字どおりただの一つもなかった。大国のそれぞれでは、時代の一般に「平和的」、「停滞的」、惰眠的な性格にもかかわらず、ときには、この闘争は分裂

をもふくむ、最も激烈な形態をとった。これらの相矛盾しあう諸潮流は、例外なくすべての多様な生活領域と近代民主主義派の諸問題、すなわちブルジョアジーにたいする態度、自由派との同盟、公債への賛成投票、植民政策、改良、経済闘争の性格、労働組合の中立性、などにたいする態度に影響をおよぼした。

「すべてのものに浸透していく漸進主義」は、けっしてポトレソフやトロツキーの言うような、近代民主主義派全体を全一的に支配している気分ではなかった。そうではなく、この漸進主義は、一定の流派へ結晶し、この流派は、この時期のヨーロッパにおいて、しばしば近代民主主義派の個々の分派をつくりだし、ときには個々の党派をさえつくりだした。この流派は独自の指導者、独自の機関紙、独自の政策をもち、住民大衆にたいして特別の――とくに組織的な――影響力をもっていた。それればかりではない。この流派は、近代民主主義派内部のある社会層の利益にたよるようになり、最後には、すっかり――もしこういう表現がつかえるなら――「頼りきってしまった」のである。

「すべてのものに浸透していく漸進主義」は、当然に、近代民主主義派の隊列に多くの小ブルジョア的な同伴者を引きいれた。ついで、生活の――したがってまた政治的「方向づけ」(傾向、志向)の―― 小ブルジョア的な特質が、議会人やジャーナリストや組合役員のある層のあいだにつくりだされた。労働者階級の一種の官僚と貴族が、多少とも鮮明に、多少ともくっきりと分離していった。

たとえば、植民地の領有、植民地領土の拡張をとってみたまえ。疑いもなく、これは、この時代〔第二の時代〕と大多数の大国家との目だつ特徴の一つであった。ところで、これは経済的にはなにを意味したか? それは、ブルジョアジーにとっては、一定の超過利潤と特殊の特権との総和を意味し、つぎに、小ブルジョアのうちのわずかな少数者にとっても、つぎに高級職員や労働運動の役員その他にとっても、疑いもなく、これらの「ピローグ〔ロシア饅頭〕の切端」のおこぼれを頂戴する可能性を意味していた。労働者階級のごくわずかな少数者が、このように植民地利得、特権による利得のおこぼれを「享有」することとは、たとえば、イギリスでおこったことであるが、これは、すでにマルクスとエンゲルスがみとめ、かつ指摘している議論の余地のない事実である。だが、その当時、例外的なイギリスの現象であったものが、ヨーロッパのすべての資本主義的大国が大規模な植民地領有へ移行するにつれて、一般に資本主義の帝国主義時代が発展し成長していくにつれて、これらの資本主義的大国に共通の現象となった。

一言でいえば、第二（あるいは昨日）の時代の「すべてのものに浸透していく漸進主義」は、ア・ポトレソフが考えているように、「漸進性の破壊」にある程度「順応」できなくさせたばかりでなく、トロツキーが考えているように、ある程度の「ポシビリスト的」(3)な性癖をつくりだしたばかりではない。このような漸進主義は、近代民主主義派内部の一定の社会層をよりどころとし、共通の経済的、社会的、政治的利害の無数の糸で、独自の民族「色」のブルジョアジーと結びつけられている、一つのまとまった日和見主義的流派、「漸進性の破壊」を説くどんな思想にも、まっこうから、公然と、まったく意識的、系統的に敵対する流派をつくりだした。

トロツキー（ア・ポトレソフについてはいわずもがな）における多くの戦術的な誤りや組織的誤りの根源は、日和見主義的流派が完全に「成熟」し、この流派が今日の国権的自由主義派（あるいは社会民族主義）ときわめて緊密に不可分に結びついているというこの事実をみとめることを恐れるか、望まないか、それともみとめる能力がないかというところにある。実践のうえでは、この「成熟」という事実とこの不可分の結びつきとを否定すれば、いまのさばっている社会民族主義（あるいは国権的自由主義）にたいして、すくなくとも、まったく当惑し、手も足もでなくなるのである。

ア・ポトレソフも、マルトフも、アクセリロードも、ウラジーミル・コソフスキー（彼は、ドイツの民主主義者が国権的自由主義の立場から軍事公債に賛成投票したのを擁護すると言いきった）も、トロツキーも、概していえば、日和見主義と社会民族主義との結びつきを否定している。

彼らの主要な「論拠」は、民主主義派を「日和見主義」に区分する昨日のやり方が、それを「社会民族主義」に区分するきょうのやり方と、完全には一致しないということである。この論拠は、第一に、いますぐわれわれがしめすであろうように、事実上まちがっている。第二に、それはまったく一面的で、完全でなく、マルクス主義の原則からみれば成りたたない。個人やグループは一方から他方へ移ることができるし、これは、可能であるばかりでなく、どんな大きな社会的「激動」の場合でも、不可避でさえあるのである。ある潮流の性格は、このためにすこしも変わらない。一定のもろもろの潮流の思想上のつながりも、変わらないし、それらの潮流の階級的意義も変わらない。すべてこうした考え方は、あまねく知られており、議論の余地のないものであるから、それをいまさら強調するのは、なんだかひどく気まりが悪いようである。ところが、まさにこのような考え方を、前述の著述家たちは忘れているの

である。日和見主義の基本的な階級的意義、あるいはお望みとあれば、社会＝経済的内容は、近代民主主義派のある分子が、幾多の個々の問題について、ブルジョアジーの側に移った（実際上、すなわちたとえ彼らがそれを意識しなくとも）ことである。日和見主義とは自由主義的な労働政策のことである。われわれは、こういう表現の「分派的」な外見を恐れる人には、すくなくともイギリスの日和見主義についてのマルクス、エンゲルス、カウツキー（彼は「分派活動」の反対者にとっては、とくに好都合な「権威者」である——そうではないか？）の評言を研究する労をとるようおすすめする。このような研究の結果、日和見主義と自由主義的な労働政策との根本的、本質的な一致がみとめられるであろうということは、すこしも疑う余地がない。今日の社会民族主義の基本的な階級的意義も、まったく同じものである。日和見主義の基本思想は、ブルジョアジーとその対立者との同盟（ときには協定、ブロックなど）あるいは接近である。社会民族主義の基本思想も、まったく同じものである。日和見主義と社会民族主義とが思想的＝政治的に近縁関係をもち、つながりをもち、それどころか同一であるということは、すこしの疑いをもいれない。だが、もちろん、われわれは、個人やグループを基礎としてとるべきではなく、まさに社会的諸潮流の階級的内容の分析、これらの潮流の主要な本質的な原則の思想的＝政治的分析を基礎としてとるべきである。

いくらか別の側面から同じテーマにアプローチして、質問をだしてみよう。社会民族主義は、どこからきたか？ それは、どのように生育し成長したか？ なにが、それに意義と力をあたえたか？ こういう問いにあえて答えない人は、社会民族主義をまったく理解していないものである。そして、もちろん、そういう人は、たとえ社会民族主義と「思想的に一線を画する」用意があると誓い、かつ神かけて誓ったにしても、「思想的に一線を画する」能力はまったくないのである。

ところで、この問いにたいする答えとしては、社会民族主義は日和見主義から成長し、まさにこの日和見主義が社会民族主義に力をあたえている、というただ一つの答えしかありえない。社会民族主義は、どうして「いきなり」生まれることができたのか？ 受胎のあと九ヵ月たてば、赤ん坊が「いきなり」生まれるのとまったく同じである。第二（あるいは昨日）の時代の全期間に、ヨーロッパのすべての国における日和見主義の無数のあらわれの一つ一つは、細流であったが、それらのすべてがいまや「いきなり」あい合して、たとえ水量ははなはだ少なくとも——（ついでにつけくわえれば、濁って、汚なくとも）——社会民族主

義という大河に「合流」した。受胎後九ヵ月たてば胎児は母親から分離しなければならない。日和見主義の受胎後数十年もへて、その成熟した胎児、社会民族主義は多かれすくなかれ短い期間（数十年にくらべて）に、近代民主主義派から分離しなければならない。いろいろなおめでたい連中が、こういう思想や言説について、どんなにわめきたて、どんなに腹をたて、どんなに狂乱しようとも、これは避けられないのである。なぜなら、これは近代民主主義派の社会的発展全体から、第三の時代の客観的情勢から生じているからである。

しかし、「日和見主義別」の区分と「社会民族主義別」の区分とが完全に一致していなかったら、それは、これらの現象のあいだに本質的な関連のないことを証明していないのか？　第一に、それは証明していないのである。それは、一八世紀末のブルジョアジーの個々の人物が、ときには封建領主の側に、ときには人民の側に移ったことが、ブルジョアジーの成長と一七八九年のフランス大革命とに「関連のない」ことを証明していないのと同様である。第二に、大まかにいって、――ところで大まかにこそ問題なのである――このような一致は存在しているのである。一ヵ国でなく、一連の国、たとえばヨーロッパの一〇ヵ国、ドイツ、イギリス、フランス、ベルギー、ロシア、イタリア、スウェーデン、スイス、オランダ、ブルガリアをとってみたまえ。いくらかの例外をしめしているのは、傍点をつけた三国だけである。日和見主義の断固たる反対者の潮流が、まさに社会民族主義に敵対的な潮流を生みだしたのである。ドイツにおける有名な『社会主義月刊』派とその反対派、ロシアにおける『ナーシェ・デーロ』派とその反対派、イタリアにおけるビッソラーティ党とその反対派、スイスにおけるグロイリヒ派とグリム派、スウェーデンにおけるブランティング派とヘーグルント派、オランダにおけるトルルストラ派とパンネクーク＝ホルテル派、最後にブルガリアにおける『オープシチェエ・デーロ』派と『テスニャキ』[42]派を対比してみたまえ。古い区分と新しい区分とがおおむね一致していることは、事実である。だが、完全な一致は、ごく単純な自然現象のなかにもない。それは、カマ河の流入後のヴォルガ河と流入前のヴォルガ河とのあいだに完全な一致がなく、あるいは赤ん坊と両親とのあいだに完全な一致がないのと同様である。イギリスは外見上の例外である。実際には、同国には戦争前に、二つの主要な潮流があり、これらの潮流は、その大衆性の最も確実な標識である二つの日刊新聞、すなわち日和見派の新聞『デイリー・シティズン』[43]と日和見主義反対派の新聞『デイリー・ヘラルド』[44]とを中心にしていた。この二つの新聞は民族主義の波

にのみこまれてしまった。しかし『デイリー・シティズン』の支持者のほぼ七分の三は、民族主義に反対を表明した。「イギリス社会党」と「独立労働党」とだけを対比するという普通のやり方は正しくない。なぜなら、この「独立労働党」がフェビアン派(三)とも、「労働党」(二)とも実際上のブロックをむすんでいることを、忘れているからである。そこで例外としてのこるのは、一〇ヵ国のうちの二ヵ国だけであるが、しかし、もろもろの流派がたがいにその地位をとりかえたのではなく、ただ波〔民族主義の〕がほとんどすべての日和見主義反対者をのみこんでしまった（その原因ははなはだ明白だから、それを詳しく述べるまでもない）のだから、この場合も完全な例外ではない。これが波の力を証明していることは、争う余地がない。しかしこれは、古い区分と新しい区分の全ヨーロッパ的な一致を、すこしもくつがえすものではない。

「日和見主義別」の区分は古くさくなっているし、意味があるのは国際精神の支持者と民族的偏狭心の支持者とに区分することだけである、と言う人がいる。これは根本的に正しくない意見である。「国際精神の支持者」という概念は、それを具体的に展開させないならば、あらゆる内容とあらゆる意味を失うであろう。そして、このような具体的な展開の一歩一歩は、日和見主義にたいする敵意の標識を列挙することであろう。実践のうえでは、このほうが正しいであろう。国際精神の支持者でありながら、他方で、日和見主義の最も徹底した断固たる反対者ではない者は、一つの蜃気楼にほかならない。おそらく、このような型の個々の人物は本心から「国際主義者」をもって自任しているかもしれないが、しかし人物についての判断は、その人物が自分について思っていることにはよらないで、その政治行動によるのである。日和見主義の徹底的な断固たる反対者でない、このような「国際主義者」なるものの政治行動は、つねに民族主義派の潮流を援助し、あるいは支持するであろう。他方では、民族主義派も「国際主義者」と自称しており（カウツキー、レンシュ、ヘニシュ、ヴァンデルヴェルデ、ハインドマンその他）、しかもそのように自称しているだけでなく、人々や人々の思想様式の国際的な接近、協調、融合を完全にみとめている。日和見派は「国際精神」に反対してはいない。彼らは日和見派の国際的な賛同と国際協調を支持しているにすぎないのである。

……………………

……………………

……………………

……………………

弁証法の問題について（注一）

一九一五年一月以後に執筆
一九一七年にモスクワ「プリリーフ」出版所発行の第一『論文集』にはじめて発表
署名——エヌ・コンスタンチーノフ
『論文集』のテキストによって印刷
全集、第五版、第二六巻、一三一—一五四ページ所収
邦訳全集、第二一巻、一二八—一五一ページ所収

統一的なものが二つに分裂すること、この統一的なものの矛盾した二つの部分を認識すること（ラッサール『ヘラクレイトス』〔第二部〕の第三篇（「認識について」）のはじめにある、ヘラクレイトスについてのフィロンからの引用文（注二）を見よ）は、弁証法の核心（「本質」の一つ、唯一の根本的な特性あるいは特徴ではないまでも、根本的な特性あるいは特徴の一つ）である。ヘーゲルもまさにこのように問題を提起している（アリストテレスは、その『形而上学』のうちでたえずこの問題をめぐってもがいており、ヘラクレイトスと、すなわちヘラクレイトスの諸思想と、格闘している）。

弁証法の内容のこの側面の正しさは、科学の歴史によって検証されなければならない。弁証法のこの側面には、通常（たとえば、プレハーノフの場合）十分な注意がはらわ

れていない。対立物の同一は実例の総和と解されて〔「たとえば、種子」、「たとえば、原始共産主義」。エンゲルスにあっても同じである。しかしこれは「通俗化のため」である……」〕(29)、認識の法則（および客観的世界の法則）とは解されていない。

数学では、十と一。微分と積分。

力学では、作用と反作用。

物理学では、陽電気と陰電気。

化学では、原子の結合と解離。

社会科学では階級闘争。

対立物の同一（おそらく対立物の「統一」と言うほうが正しいのではないか？　もっとも同一と統一という術語の区別は、ここではとくに重要ではないが。ある意味では両者とも正しい）とは、自然（精神も社会もふくめて）のすべての現象と過程とのうちに、矛盾した、たがいに排除しあう、対立した諸傾向を承認すること（発見すること）である。世界のすべての過程を、その「自己運動」において、その自発的な発展において、その生きいきとした生命において認識するための条件は、それらを対立物の統一として認識することである。発展は対立物の「闘争」である。二つの根本的な（あるいは二つの可能な？　あるいは歴史上に見られる二つの？）発展（進化）観は、次のものである。

減少および増大としての、反復としての発展、および対立物の統一（統一的なものがたがいに排除しあう二つの対立物に分裂すること、および両者の相互関係）としての発展、である。

第一の運動観にあっては、自己運動が、その推進力が、その源泉が、その原動力が、かげに隠れたままである（あるいは、この源泉が外部に――神、主観、等々に移される）。第二の運動観にあっては、おもな注意はまさに「自己」運動の源泉の認識に向けられる。

第一の考え方は、死んだ、生気のない、ひからびたものである。第二の考え方は、生きたものである。第二の考え方だけがすべての存在するものの「自己運動」を理解する鍵をあたえる。それだけが、「飛躍」、「漸次性の中断」、「対立物への転化」、古いものの消滅と新しいものの発生を理解する鍵をあたえる。

対立物の統一（合致、同一、均衡）は条件的、一時的、経過的、相対的である。たがいに排除しあう対立物の闘争は、発展、運動が絶対的であるように、絶対的である。

NB――主観主義（懐疑主義と詭弁、等々）と弁証法との区別は、とりわけ、（客観的）弁証法においては、相対的なものと絶対的なものとの区別もまた比較的（相

対的）だということにある。客観的弁証法にとっては、相対的なもののうちに絶対的なものがある。主観主義と詭弁にとっては、相対的なものはひたすら相対的であって、絶対的なものを排除する。

マルクスの『資本論』では、最初に、ブルジョア（商品生産）社会の最も単純な、最も普通な、最も根本的な、最も大量的な、最も日常的な、何十億回となく出くわす関係、すなわち商品交換が分析されている。その分析は、この最も単純な現象のうちに（ブルジョア社会のこの「細胞」のうちに）、現代社会のすべての矛盾（あるいはすべての矛盾の胚芽）をあばきだす。それから先の叙述は、これらの矛盾とこの社会との発展を（成長をも運動をも）、その発展の個々の部分の総和において、その発展のはじめから終りまで、われわれに示している。

弁証法一般（というのは、マルクスにおいては、ブルジョア社会の弁証法は、弁証法の特殊な場合にすぎないからである）の叙述（あるいは研究）の方法も、またこのようなものでなければならない。最も単純なもの、最も普通なもの、最も大量的なもの、等々から始めること、木の葉は緑である、イヴァンは人間である、ジューチカは犬である、等々のような任意の命題から始めること。すでにここには（ヘーゲルが天才的に認めたように）、個別的なものは普遍的なものであるという弁証法がある（アリストテレス『形而上学』第三巻、第四章、第八—九節、シュヴェーグラー訳、第二巻、四〇ページを参照せよ。「なぜなら、われわれはもちろん、目に見える家々のほかに家（註）——家一般——があるなどとは考えることができないからである」"οὐ γὰρ ἂν θείημεν εἶναί τινα οἰκίαν παρὰ τὰς τινὰς οἰκίας" つまり、対立物（個別的なものは普遍的なものに対立している）は同一である。個別的なものは、普遍的なものへつうじる連関のうち以外には、存在しない。普遍的なものは、個別的なもののうちにだけ、個別的なものをつうじてだけ存在する。あらゆる個別的なものは（なんらかの仕方で）普遍的なものである。あらゆる普遍的なものは、個別的なもの（の一部分あるいは一側面あるいは本質）である。あらゆる普遍的なものは、すべての個別的な事物をただ近似的に包括するだけである。あらゆる個別的なものは、完全には普遍的なもののうちにはいらない、等々、等等。あらゆる個別的なものは、何千もの移行によって他の種類の個別的なもの（もろもろの事物、現象、過程）に連関している、等々。すでにここに、自然の必然性、客観的連関、等々の要素、萌芽、概念がある。偶然的なものと必然的なもの、現象と本質とが、すでにここにある、なぜな

ら、われわれが、イヴァンは人間である、ジューチカは犬である、これは木の葉である、等々と言うとき、われわれは多くの徴表を偶然的なものとして捨て去り、本質的なものを現象的なものから区別し、一方を他方に対立させるからである

このようにして、われわれは、任意の命題のうちに、「細胞」(「小細胞」)のうちにでもあるかのように、弁証法のすべての要素の萌芽をあばきだすことができる(また、あばきださねばならない)。このようにして、弁証法が総じて人間のすべての認識に固有なものであることが示される。そして自然科学は、客観的自然が、個別的なものの普遍的なものへの、偶然的なものの必然的なものへの転化、対立物のもろもろの移行、変移、相互連関という同じ諸性質をもっていることを、われわれに示している(これをもやはり任意の最も単純な実例について示さなければならない)。弁証法こそ、(ヘーゲルおよび)マルクス主義の認識論である。事柄のまさにこの「側面」(これは事柄の一「側面」ではなく、事柄の核心である)に、ほかのマルクス主義者は言うまでもなく、プレハーノフも注意をはらわなかった。

*

認識を一系列の円の形で表わしているのは、ヘーゲル(『論理学』を見よ)もそうであり、——また現代の自然科学「認識論者」で、折衷主義者で、ヘーゲルぶり(彼はそれを理解しなかった!)の敵であるパウル・フォルクマン(彼の『〔自然科学の〕認識論的根本特徴』を見よ)もそうである。

哲学における「諸円」——〔人物についての年代記は必要か？ 必要でない！〕

古代——デモクリトスからプラトンまで、およびヘラクレイトスの弁証法まで。

ルネサンス——デカルト 対 ガサンディ(スピノザ？)。

近代——ドルバック—ヘーゲル(バークリ、ヒューム、カントをへて)。

ヘーゲル—フォイエルバッハ—マルクス。

現実へのあらゆる接近の仕方、近づき方の無数の色合いをもつ(それぞれの色合いから一つの哲学体系が一つの全体へと成長していくところの)、生きいきとした、多側面的な(その側面の数がたえず増大していくところの)認識としての弁証法——そこには「形而上学的」唯物論とくら

べてはかりしれないほど豊富な内容がある。この後者の根本的な不幸は、反映論に、認識の過程と発展とに、弁証法を適用する能力がないことである。

　哲学的観念論は、粗野な、単純な、形而上学的な唯物論の見地からすれば、たわごとにすぎない。これに反して、弁証法的唯物論の見地からすれば、哲学的観念論は、認識の特徴、側面、限界の一つを、物質から、自然から切り離された、神化された絶対者へと、一面的に、誇大に、過度に（ディーツゲン（六））発達させ（膨張させ、ふくらませ）たものである。観念論は坊主主義である。

この警句に注意

そのとおりだ。しかし哲学的観念論は、（「より正しく言えば」そして「そのうえさらに」）人間の無限に複雑な（弁証法的な）認識の**色合いの一つ**をとおって坊主主義にいたる道なのだ。

　人間の認識は直線ではなく（あるいは直線をえがいてすすむものではなく）、一系列の円へ、螺旋へ無限に近づいてゆく曲線である。この曲線のどの断片、破片、小片も、独立の、まったくの直線に転化する（一面的に転化する）ことができる。その場合には、この直線は（木を見て森を見ないならば）、泥沼に、坊主主義にみちびいてゆく（支配階級の階級的利害がそこにその直線を固着させる）。直線性と一面性、硬直と化石性、主観主義と主観的盲目性、これが観念論の認識論的な根である。ところで坊主主義（＝哲学的観念論）には、もちろん、認識論的な根がある、坊主主義は根拠のないものではない。それは疑いもなくあだ花であるが、しかしそれは、生きいきとした、実をむすぶ、真の、強力な、全能な、客観的な、絶対的な人間認識の、生きた木についたあだ花なのである。

一九一五年に執筆
一九二五年に雑誌『ボリシェヴィク』第五—六号にはじめて発表
手稿によって印刷
全集、第五版、第二九巻、三一六—三二二ページ所収
邦訳全集、第三六巻、四一九—四二四ページ所収
同第三八巻、三一六—三三〇ページ所収

第二インタナショナルの崩壊

インタナショナルの崩壊ということばは、ときとして、たんにこの問題の形式的な側面を意味するだけのもの、すなわち、交戦国の社会主義諸党間の国際的なつながりが断ちきられ、国際会議も、国際社会主義ビューローも召集できないこと等々を意味するものとされている。中立の小国の若干の社会主義者たち、おそらくはそれらの国の公認の諸党の大多数の者でさえ、さらには日和見主義者とその擁護者たちも、この見地に立っている。ロシアの出版物では、ヴラヂーミル・コソフスキー氏が、ブンドの『情報リーフレット』の第八号で、深甚な感謝に値するほど率直に、この立場を擁護したが、しかも『リーフレット』の編集部は、この筆者に同意しないという、一言の断りも述べておかなかった。軍事公債に賛成投票したドイツの社会民主主義者を正当だとまで言ったコソフスキー氏が民族主義を擁護していることは、多くの労働者がブンドのブルジョア民族主義的性格を最後的に納得するのをたすけてくれるものと、期待してよいであろう。

自覚した労働者にとっては、社会主義はまじめな信念であって、小市民的＝協調主義的な志向や民族主義的＝反政府的な志向をおおいかくす便利なかぶりものではない。彼らは、インタナショナルの崩壊とは、公認の社会民主党の大多数が、自分の信念と、シュトゥットガルトとバーゼルの国際大会での演説や、これらの大会の決議等々でおこなったその厳粛な声明とをはなはだしく裏切ったことを意味すると思っている。この裏切りを見ないでいられるものは、それを見ることをのぞまない者、それを見ることが利益でない者だけである。問題を科学的に、すなわち、近代社会の諸階級間の関係の見地から定式化するならば、われわれは、大多数の社会民主党と、なかでも、まっさきに、第二インタナショナルの最も大きな、最も有力な党であるドイツ社会民主党が、プロレタリアートに反対して、自国の参謀本部、自国の政府、自国のブルジョアジーの側に立った、と言わなければならない。これは、世界史的に重要な出来事であって、それをできるかぎり全面的に分析しないわけにはいかない。以前からみとめられているように、戦争は、はなはだしい恐怖と惨禍を伴うにもかかわらず、人間の諸

制度のなかの多くの腐敗したもの、寿命のつきたもの、生気を失ったものを容赦なくあばきだし、暴露し、破壊するという、多かれすくなかれ大きな利益をもたらすものである。一九一四―一九一五年のヨーロッパ戦争もまた、文明諸国の先進的な階級の諸党のなかにいやな化膿した腫物のようなものがうんできて、どこからともなく耐えられないような屍臭がただよってきていることを、この階級にしめして、疑う余地のない利益を人類にもたらしはじめた。

一

ヨーロッパの主要な社会主義諸党が、自分の信念と任務をすべて裏切ったことは事実だろうか？　いうまでもなく、当の裏切者も、裏切者と親しくまじわり、仲よくしなければならないということをはっきりと承知している――あるいはぼんやりと気づいている――者も、このことをかたりたがらない。しかし、第二インタナショナルのいろいろな「権威者」や、ロシアの社会民主主義者のあいだにいる彼らの味方である分派にとって、どんなに不愉快であろうとも、われわれは、ものごとを直視し、直言し、労働者に真実をかたらなければならない。

現在の戦争のまえに、そしてこの戦争を予想して、社会主義諸党は自分の任務と戦術をどのように見ていたか、という問題について事実上の資料があるだろうか？　それは争う余地もなくある。それは一九一二年のバーゼル国際社会主義者大会の決議である。われわれは、これを、(六七)同じ年ケムニッツでひらかれたドイツ社会民主党大会の決議とひとまとめにし、社会主義の「わすれられたことば」を思いだすよすがとして本誌に再録する。このバーゼル決議は、あらゆる国の膨大な反戦を宣伝・扇動する文書を総括して、戦争と戦争にたいする戦術についての社会主義者の見解を、最も正確かつ完全に、最も厳粛に正式に叙述したものである。だが、昨日はインタナショナルの、きょうは社会排外主義の権威者である人々のうちだれ一人として、ハインドマンも、ゲードも、カウツキーも、プレハーノフも、この決議をその読者に思いださせる決心がつかず、それについてまったく沈黙するか、その第二義的な箇所を引用して本質的なものはすべて回避する（カウツキーのように）かしている事実そのものが、裏切りというほかはないのである。最も「左翼的」な、超革命的な諸決議と、それの最も恥知らずな忘却、または放棄とは、インタナショナルの崩壊の最も明瞭な現われの一つであり、同時にまた、今日決議だけで社会主義を「訂正し」、「社会主義の方針をただす」ことができると信じる者は、無類の素朴さと、これまでの偽善を永続させようとするずるい希望とがとなりあわせてい

る人々だけだということをしめす、最も明瞭な証拠の一つである。

戦前にハインドマンが、帝国主義擁護に転向したとき、「ちゃんとした」社会主義者はみな、彼を気のくるった変人とみなし、だれも彼のことをさげすんだ口調でしかかたらなかったのは、つい昨日のことだと言ってよい。ところが、いまでは、あらゆる国の最も著名な社会民主党の指導者たちが、すっかりハインドマンの立場に落ちこんでしまった。――おたがいのあいだの違いは色合いと気質だけである。そこで、われわれは、たとえば『ナーシェ・スローヴォ』の執筆者たちのように、ハインドマン「氏」についてはさげすんだ口調で書き、「同志」カウツキーについては、尊敬した（あるいは卑屈な？）様子でかたる――またはだまっている――人々の市民的勇気を大なり小なり議会風な用語で評価したり特徴づけることはどうしてもできない。このような態度を、社会主義にたいする、また一般に自分の信念にたいする尊敬と調和させることができるであろうか？　もし諸君が、ハインドマンの排外主義が偽りであり、有害であることを確信しているなら、このような見解のよりいっそう有力な、より危険な擁護者であるカウツキーにたいして批判と攻撃を向けるべきではないだろうか？

ゲードの見解は、最近ゲード派のシャルル・デューマがその小冊子『われわれののぞむ平和』でおそらく最もくわしく表現している。この「ジュール・ゲード官房長」――は、この小冊子のとびらには、こう署名してある――は、もちろん、社会主義者のこれまでのいろいろな声明を、愛国的精神で「引用」している（ドイツの社会排外主義者ダヴィッドも、祖国防衛にかんする彼の最近の小冊子のなかで、これと同じような声明を引用しているように）が、バーゼル宣言は引用していない！　この宣言については、プレハーノフも口をつぐみ、なみなみならぬひとりよがりな顔つきで排外主義の卑俗な文句をもちだしている。カウツキーもプレハーノフに似た振舞いをしている。すなわち、彼は、バーゼル宣言を引用するにあたって、そのなかのすべての革命的な箇所（すなわちその肝心の内容全体！）を抜かしている。――おそらく、検閲で禁止されるという口実だろうが。……警察と軍当局は、階級闘争と革命についてかたることを検閲で禁止することによって、「折よくも」社会主義の裏切者をたすけにやってきたのだ！

しかし、ひょっとすると、バーゼル宣言は、なにか無内容な檄文であって、そこには、いまの具体的な戦争に無条件に関係のある正確な内容は、歴史的なものも戦術的なものも、なにもないのであるまいか？

その正反対である。バーゼル決議には、ほかの決議より

も、空疎な美辞麗句が少なく、具体的な内容が多い。バーゼル決議は、実際におこったほかならぬその戦争のことを、一九一四―一九一五年に勃発したほかならぬその帝国主義的衝突のことを、述べている。バルカンをめぐるオーストリアとセルビアの紛争、アルバニアその他をめぐるオーストリアとイタリアの紛争、一般に市場と植民地をめぐるイギリスとドイツの紛争、アルメニアとコンスタンチノープルをめぐるロシアとトルコその他との紛争、――これをこそ、バーゼル決議は述べており、今日の戦争をこそ予見しているのである。バーゼル決議が、この戦争は「**どんなものであれ、国民的利益をいささかでも口実にして是認することはできない！**」と述べているのは、まさに「ヨーロッパの大国」間の今日の戦争のことである。

そして、いまやプレハーノフとカウツキーが――この二人の最も典型的な、われわれに最も身ぢかな、権威ある社会主義者をとってみよう。その一人はロシア語で書き、一人は解党派の手でロシア語に訳されている――、戦争を正当化するいろいろな「国民的な（もっと正確にいえば、ブルジョア的赤新聞からとってきた庶民的な）理由」をさがしもとめ（アクセリロードの援助により）、また彼らが、博学ぶりと、マルクスのまちがった引用の蘊蓄によって、あるいは一八一三年と一八七〇年の戦争の「実例」を引合いにだして（プレハーノフ）、あるいは一八五四―一八七一年、一八七六―一八七七年、一八九七年の戦争の「実例」を引合いにだしている（カウツキー）ときに、あえてこのような論拠を「真に」うけるもの、またこれを前代未聞のジェズイットぶり〔偽善的な言いぬけ〕、偽善、社会主義の冒瀆と呼ばないでいられるものは、じっさい、露ほどの社会主義的信念も、一かけらの社会主義的良心もない人間だけである！　ドイツの党指導部（「フォルシュタンド」）は、メーリングとローザ・ルクセンブルグの新しい雑誌（『インテルナッツィオナーレ』）がカウツキーをただしく評価したという理由で、同誌をのろうがよい。ヴァンデルヴェルデ、プレハーノフ、ハインドマン一派は、「三国協商」の警察の援助を受けて、自分の反対者を同じようにあしらうがよい。われわれは、裏切りというほかには呼びようのない、指導者たちの転向を暴露するバーゼル宣言を、ただ再録して回答としよう。

バーゼル決議が述べているのは、ヨーロッパにその例がたびたびあって、一七八九―一八七一年の時代には典型にさえなっていた民族戦争、人民戦争のことではなく、社会民主主義者が将来けっしてやりませんと誓ったことのない革命戦争のことではない。「資本主義的帝国主義」と「王朝的利害」を基盤とし、オーストリア＝ドイツとイギリ

ス＝フランス＝ロシアという双方の交戦列強の「侵略政策」を基盤とする今日の戦争のことである。プレハーノフ、カウツキー一派は、この帝国主義的、植民地的、略奪的な戦争を、人民的、防衛的（どちらの側にとっても）な戦争に見せかけようと全力をつくしている、あらゆる国のブルジョアジーの利己的なうそを繰りかえし、帝国主義的でない戦争の歴史的実例の範囲のなかから、今日の戦争の弁明をさがしもとめて、労働者をまったく欺瞞している。

この戦争の帝国主義的、略奪的、反プロレタリア的な性格の問題は、とうの昔に純理論的な問題の段階を脱している。帝国主義のすべての主要な特徴は、滅亡に瀕し、老衰し、くされはてたブルジョアジーが、世界を分割し、「小」民族を奴隷化するためにおこなう闘争として、理論的に評価されているばかりではない。これらの結論は、あらゆる国の社会主義者の無数のあらゆる新聞刊行物のなかで何千回も繰りかえされたばかりではない。たとえば、われわれと「同盟」関係にある国民の代表者であるフランス人のドレジが、小冊子『さしせまる戦争』（一九一一年！）のなかで、フランス・ブルジョアジーの側からみても、いまの戦争が略奪的な性格をもっていることを、平易に解説しただけではない。それればかりではない。あらゆる国のプロレタリア党の代表たちが、まさに帝国主義的な性格の戦争がさしせまっているという不動の信念を、バーゼルで満場一致で正式に表明し、そのことから戦術的な結論をひきだした。したがって、一国的な戦術と国際的戦術との区別は十分には討議されていない（『ナーシェ・スローヴォ』第八七号と第九〇号にのったアクセリロードの最近のインタビュー参照）などという口実はみな、とりわけ詭弁として即座に一蹴しなければならない。それは詭弁である。なぜなら、帝国主義をより全面的に科学的に研究すること――そういう研究はいまはじまったばかりであり、それは、科学一般が無限であるように、その本質からみて、無限である――と、何百万部もの社会民主党の新聞やインタナショナルの諸決定のなかに述べられている資本主義的帝国主義にたいする社会主義的戦術とは別個の事柄だからである。社会主義諸党は討論クラブではなく、たたかうプロレタリアートの組織である。そして一連の大隊が敵側に寝がえったときは、それを裏切者と呼び、裏切者と罵るべきであって、「だれもが一様」に帝国主義を理解しているとは「かぎらない」とか、排外主義者のカウツキーや排外主義者のクノーは、それについて何巻もの本を書く力をもっているとか、この問題は「十分に討議されていない」とかいう偽善的なことばに「ひっかかって」はならない。資本主義の略奪性のすべてのあらわれと、その歴史的発展や民族的特質のす

べての微細な枝葉末節までが徹底的に研究しつくされることはけっしてないであろう。学者たち（とくに衒学者）は、細かい事柄についてこの論争をけっしてやめないだろう。「これを根拠にして」、資本主義にたいして社会主義的に闘争することを断念するなら、この闘争を裏切った者に反対することを断念するなら、おかしなことであろう。だが、カウツキー、クノー、アクセリロードなどは、いったいこれ以外のどんなことをわれわれに提案しているのか？

開戦後の今日、だれも、バーゼル決議を検討し、その誤りをしめそうと試みさえしなかった！

二

しかし、ひょっとすると、誠実な社会主義者は、戦争が革命的情勢をつくりだすだろうと予見して、バーゼル決議に賛成したのに、諸事件は、彼らの見込みをくつがえし、革命が不可能になったのではあるまいか？

まさに、このような詭弁をもって、クノーは（小冊子『党の崩壊か？』やいくつかの論文のなかで）、自分がブルジョアジーの陣営にうつったことを正当化しようと試みているが、これを暗ににおわせたものとしては、カウツキーを先頭とするほとんどすべての社会排外派に、そういった「論拠」が見られる。革命の期待は幻想となった。ところで、幻想をまもるのはマルクス主義者のなすべきことではない——とクノーは論じている。だが、そう言いながら、このストルーヴェ主義者は、バーゼル宣言の全署名者の「幻想」のことは一言も述べないで、とびきり高貴な人間らしく、パンネクークやラデックのような極左派に罪をきせようとつとめている。

バーゼル宣言の起草者たちは、革命の到来を心から予想していたのに、諸事件が彼らの見込みをくつがえしたのだ、という論拠の本質について考察してみよう。バーゼル宣言は、次のように述べている。（一）戦争は、経済的および政治的危機をつくりだすであろう。（二）労働者は自身が戦争に参加することを犯罪とみなし、「資本家の利潤や王朝の野心のために、または秘密外交条約を履行するために、たがいに射ちあう」ことを犯罪とみなす。戦争は労働者のあいだに「憤怒と激昂」を呼びおこす。（三）社会主義者は「人民を鼓舞し、資本主義の崩壊をはやめる」ために、右の危機と労働者の右の精神状態とを利用する義務がある。（四）「諸国の政府」は——すべて例外なしに——「自分自身に危険をまねくことなしに」戦争をおこすことはできない。（五）諸国の政府は「プロレタリア革命を気づかっている」。（六）諸国の政府は、パリ・コミューン（すなわち内乱）やロシアの一九〇五年の革命を「わすれないよう

に」すべきである、等々。すべてこれはまったく明瞭な思想である。ここには革命がくるという保証はない。ここでは事実と傾向を正確に特徴づけることに力点がおかれている。このような思想や考察をとりあげて、予期していた革命の到来は幻想となったと言うものは、革命にたいして、マルクス主義的な態度をとらず、ストルーヴェ主義的な、警察的＝背教者的な態度をとっていることを暴露するものである。

革命的情勢なしには、革命は不可能であり、しかも、どんな革命的情勢でも革命をもたらすとはかぎらないということは、マルクス主義者にとっては疑う余地がない。一般的にいって、革命的情勢の徴候とは、どんなものであろうか？　次の三つの主要な徴候をあげれば、たしかにまちがいではないだろう。(一) 支配階級にとっては、いままでどおりの形で、その支配を維持することが不可能なこと。「上層」のあれこれの危機、支配階級の政策の危機が、割れ目をつくりだし、そこから、被抑圧階級の不満と激昂がやぶれ出ること。革命が到来するには、通常、「下層」がこれまでどおりに生活することを「のぞまない」だけではたりない。さらに、「上層」が、これまでどおりに生活していくことが「できない」ことが必要である。(二) 被抑圧階級の欠乏と困窮が普通以上に激化すること。(三) 右の諸原因によって、大衆の活動性がいちじるしくたかまること。大衆は、「平和」の時代にはおとなしく略奪されるままになっているが、あらしの時代には、危機の環境全体によっても、また「上層」そのものによっても、自主的な歴史的行動に引きいれられる。

個々のグループや党の意志ばかりでなく、個々の階級の意志とも無関係な、これらの客観的な変化がなければ、革命は——通例——不可能である。これらの客観的変化の総体が、革命的情勢と呼ばれるのである。こういう情勢は、ロシアでは一九〇五年に、西欧ではすべての革命期に存在していた。しかし、それはドイツでは前世紀の六〇年代にも、ロシアでは一八五九—一八六一年と一八七九—一八八〇年にも存在していた。もっとも、これらの場合には、革命はおこらなかったけれども。それはなぜか？　すべての革命的情勢から革命がおこるとはかぎらず、以上に列挙した客観的変化に主体的な変化がくわわる場合、すなわち、旧来の政府をうちくだく（またはゆるがす）にたりるほど強力な革命的大衆行動をおこなう革命的階級の能力がくわわるような情勢からだけ革命がおこるからである。旧来の政府は、それを「たおさ」ないかぎり、たとえ危機の時代であろうと、けっしてひとりでに「たおれる」ものではない。

これが、マルクス主義者の革命観であって、すべてのマルクス主義者によって、なんどもなんども展開され、議論の余地のないものとしてみとめられてきたものであり、われわれロシア人にとっては、一九〇五年の経験によってとくに明瞭に確証されたものである。そこで問題になるのは、この点で、一九一二年のバーゼル宣言は、なにを予想したものであったか、そして一九一四—一九一五年にはなにがやってきたかということである。

予想されていたのは「経済的および政治的危機」という表現で簡単に記述された革命的情勢である。それはやってきたか？　疑いもなく、やってきた。社会排外主義者のレンシュ（彼は、偽善者のクノー、カウツキー、プレハーノフ一派よりも、いっそうむきだしに、いっそう率直に、いっそう正直に排外主義を擁護している）は「われわれは、独特の革命に際会している」とさえ言っている（彼の小冊子『ドイツ社会民主党と戦争』、一九一五年、ベルリン、六ページ）。政治的危機は現存している。どの政府もあすのことに確信がない。どの政府も、財政の破綻、領土の喪失、自国からの追放（ベルギー政府がベルギーから追いだされたように）の危険をまぬかれているものはない。すべての政府が噴火山上に生活している。あらゆる政府が、自分から、大衆の自主活動と英雄精神に訴えている。ヨーロッパの政治体制全体がゆりうごかされている。そして、たしかに、だれも、われわれが最大の政治的動乱期にはいったこと（そして、ますます深くはいりつつあること——私は、これをイタリアの宣戦布告の日に書いている）を否定しようとはしないだろう。カウツキーが、宣戦布告の二ヵ月後に（一九一四年一〇月二日の『ノイエ・ツァイト』で）「開戦当初ほど、政府が強く、諸政党が弱いときはない」と書いたのは、ジュデクムその他の日和見主義者の気にいるようにと、カウツキーが歴史科学を偽造した見本の一つである。戦争のときほど、支配階級のすべての政党が同一歩調をとること、また被抑圧階級がこの支配に「おとなしく」服従することを政府が必要とするときはない。これが第一である。第二に、たとえ「開戦当初には」、とくにすみやかな勝利を期待している国では、政府が全能なものに見えるにしても、だれが、かつて、世界のどこでも、革命的情勢の期待をもっぱら開戦「当初」の時機にのみ結びつけたものはなかったし、まして、「見えるもの」を現実的なものと同一視したものはなかった。

ヨーロッパ戦争が他に比類のないほど苦しいものになるだろうということは、だれもが知り、見、みとめてきたところである。戦争の経験は、このことをますます確証している。戦争は拡大しつつある。ヨーロッパの政治的屋台骨

は、ますますぐらついている。大衆の災厄はおそるべきものがあり、この災厄を黙殺しようとする政府、ブルジョアジー、日和見主義者の努力が、挫折することはますます頻繁になっている。ある資本家グループの戦争利潤は前代未聞で、けしからぬほどの巨額である。矛盾の激化ははなはだしいものである。大衆の口にはださない憤り、ちゃんとした(「民主主義的な」)講和をのぞむしいたげられた無知な階層の漠然たる願望、「下層」のあいだの不平の始まり——すべてこうしたことが現存している。ところで、戦争がもっと長びき、はげしくなればなるほど、政府みずから大衆に尋常ならぬ力の緊張と自己犠牲を呼びかけて、彼らの活動性をますます強力に発展させるし、また発展させざるをえない。戦争の経験は、歴史上のあらゆる危機、人間生活のうえのあらゆる大災厄、あらゆる激変の経験と同じように、ある人々を愚鈍にし、くじけさせるが、そのかわりに、他のものを啓蒙し、きたえあげる。しかも大体に、全世界の歴史をとってみれば、あれこれの国家が没落し滅亡した個々の場合をのぞけば、後者の数と力のほうが前者のそれよりも大きかった。

講和の締結は、これらのすべての災厄とすべての矛盾のこの激化とを「一挙に」おわらせることができないばかりでなく、反対に、多くの点で、これらの災厄を最もおくれた住民大衆にも、いっそう痛感させ、とくに目にみえるものにする。

一言でいえば、ヨーロッパの大多数の先進国と大国には、革命的情勢が現存する。この点で、バーゼル宣言の予見が正しいことが、完全にしめされた。クノー、プレハーノフ、カウツキー一派がやっているように、この真理を直接間接に否定するか、あるいは黙殺することは、最大のうそをつき、労働者階級をだまし、ブルジョアジーに奉仕することを意味している。われわれは、『ソツィアル-デモクラート』(第三四号、四〇号、四一号)に、革命をおそれている人々、つまり小市民的なキリスト教の坊主、参謀本部、百万長者の新聞がヨーロッパにおける革命的情勢の徴候を確認せざるをえなかったことをしめしている資料をあげておいた。

この情勢はながくもちこたえるであろうか、そしてなおどれほどはげしくなるであろうか？　それは革命にいたるであろうか？　われわれはそれを知らないし、だれも知ることはできない。経験だけが、先進的階級であるプロレタリアートの革命的気分が発展し、革命的行動にうつっていくことだけがそれをしめすであろう。この点では、一般になにかの「幻想」も、また幻想のくつがえしも、問題にさえなりえない。なぜなら、ほかならぬこの(次のでなく)

戦争、ほかならぬ今日の（あすのでなく）革命的情勢が、革命を生みだすであろうという保証をした社会主義者は、かつて、どこにも、いなかったからである。いま問題となっているのは、すべての社会主義者の最も議論の余地のない、最も基本的な義務、すなわち、革命的情勢が現存することを大衆に明らかにし、この情勢の広さと深さを説明し、プロレタリアートの革命的自覚と革命的決意を呼びさまし、プロレタリアートをたすけて革命的行動にうつらせ、こういう方向にむかって活動するために革命的情勢に応ずる組織をうくりだすという義務である。

有力な、責任ある社会主義者で、これこそ社会主義諸党の義務であるということをあえて疑ったものは、いまだかつていなかったし、バーゼル宣言は、どんなに小さな「幻想」をもひろめることなく、やしなうことなく、社会主義者のほかならぬこの義務について次のように述べている。――人民を鼓舞し、「ゆりうごかし」（プレハーノフ、アクセリロード、カウツキーがやっているように、排外主義をもって彼らをねむりこませないで）、資本主義の崩壊を「はやめる」ために危機を「利用」し、コミューンと一九〇五年一〇―一二月の先例を指針とすべきである、と。今日の諸政党が自分のこの義務を履行しないのは、それらの党の裏切りであり、政治的な死であり、自分の役割の放棄であり、ブルジョアジーの側に寝がえることである。

三

しかし、どうして第二インタナショナルの最も著名な代表者と指導者たちが、社会主義を裏切るというようなことがおこりえたのであろうか？　この問題にたいしては、この裏切りを「理論的」に正当化しようとする企てをまず検討してから、あとでくわしく論じることにしよう。われわれは、社会排外主義の主要な理論の特徴づけをやってみよう。プレハーノフ（彼は、主としてイギリス＝フランスの排外主義者、ハインドマンとその新しい支持者たちの論拠を、繰りかえしている）とカウツキー（彼は、ほかとは比較にならないほど、理論的にしっかりしたものにみえる、はるかに「精巧」な論拠を押しだしている）は、これらの社会排外主義理論の代表者とみなしてよい。

おそらく最も幼稚な理論は「張本人」説であろう。われわれは攻撃された。われわれは自分を防衛しているのだ。われわれはプロレタリアートの利益のために、ヨーロッパ平和の破壊者を撃退する必要がある、と。これは、あらゆる政府の声明と全世界のあらゆるブルジョア新聞や黄色新聞の繰りかえしである。プレハーノフは「弁証法」を偽善的に引合いにだすという、この著作家にはなくてはならないやり方で、

あれほど陳腐な俗説さえ粉飾している。すなわち、具体的な情勢を評価するためには、なによりもまず張本人をみつけだし、それに懲罰をくわえるべきであって、そのほかの問題はみな、情勢が変化するまで延ばすべきであるというのである（プレハーノフの小冊子『戦争について』、パリ、一九一四年と、アクセリロードが『ゴーロス』の第八六号と第八七号で、この小冊子の議論を繰りかえしているのとを見よ）。弁証法を詭弁とすりかえるという高尚な仕事にかけては、プレハーノフはレコードをやぶった。詭弁家は「いくつかの論拠」のうちの一つを抜きだすが、すでにヘーゲルが正当に述べているように、世界中のどんなことのためにもかならず「論拠」は見つかるものである。弁証法はあたえられた社会現象をその発展において全面的に研究し、外的なもの、外見的なものを、根源的な推進力に、すなわち生産力の発展と階級闘争に帰着させることを要求する。プレハーノフは、ドイツ社会民主党の新聞から一つの引用文を抜きだしてくるが、それによると、ドイツ人自身が、戦争のおきるまえにオーストリアとドイツが張本人であることをみとめていたという――それだけである。ロシアの社会主義者がツァーリズムのガリチア、アルメニアなどの侵略計画を何回となく暴露してきたことについては、プレハーノフは沈黙している。彼には、せめて最近三〇年間の経済史と外交史だけにでも触れてみようとする試みは露ほどもない。ところが、この歴史は、植民地の略取、他国の土地の強奪、自分よりうまくやっている競争者の駆逐と破滅こそ*、いま交戦中の両強国群の政策の主軸であったことを、反駁の余地なく証明しているのである。

＊ 社会主義者を気どることとさえいとわない、イギリスの平和主義者ブレイルスフォードの著書『鋼鉄と金の戦争』（ロンドン、一九一四年。この本の日付は一九一四年三月になっている！）は、きわめて教訓に富んでいる。著者は、民族問題は、だいたいうしろにしりぞいており、すでに解決されており（三五ページ）、問題はいまではこの点にはなく、「現代外交の典型的な問題」（三六ページ）は、バグダード鉄道、そのための軌条の納入、モロッコの鉱山などであることを、まったくはっきりとみとめている。著者が、植民地勢力範囲の分割とパリの株式取引所におけるドイツ証券の上場許可との協定にもとづいて、ドイツと和解しようとするカイヨーの試み（一九一一年と一九一三年）に反対する、フランスの愛国者とイギリス帝国主義者の闘争を「最近のヨーロッパ外交史上の最も教訓的な出来事」の一つである、と考えているのは正しい。イギリスとフランスのブルジョアジーは、こうした協定を失敗させた（三八―四〇ページ）。帝国主義の目的は、弱小国に資本を輸出することである（七四ページ）。イギリスでは、こうした資本からの利潤は、一八九九年には九千万―一億ポンドであり（ジフェン）、一九〇九年には一億四千万ポンドであった（ペイシュ）。私のほうからつけくわ

えておけば、――ロイド・ジョージは、最近の演説のなかで、これを二億ポンド、すなわち約二〇億ルーブリと計算した。きたない策略とトルコ貴族の買収、インドやエジプトにおける自分の息子たちのための椅子――ここに眼目がある（八五―八七ページ）。とるにたりない少数者が軍備と戦争でもうけている。だが、彼らには社会と金融業者が賛成しているのに、平和擁護者に賛成しているのはばらばらの住民である（九三ページ）。今日、平和と軍備縮小を説いている平和主義者も、あすは、軍需納入業者に完全に依存している政党の党員になっている（一六一ページ）。三国協商のほうが優勢で、モロッコを取り、ペルシアを分割するだろう。――三国同盟は、トリポリを取り、ボスニアに地歩をかため、トルコを従属させるだろう（一六七ページ）。ロンドンとパリは、一九〇六年三月にロシアに数十億ルーブリをあたえて、ツァーリズムが解放運動をおしつぶすのをたすけた（二二五―二二八ページ）。いまイギリスは、ロシアがペルシアを圧殺しようとするのをたすけている（二二九ページ）。ロシアはバルカン戦争に放火した（二三〇ページ）。――すべてこうしたことは新しいことではないではないか？　すべて、これは、だれでも知っていることであって、全世界の社会民主主義的新聞のなかで、千回も繰りかえされたことではないか？　戦争の前夜に、イギリスのブルジョアは、このうえなく明瞭にそのことを知っていた。だが、これらの簡単な世界周知の事実をまえにして、ドイツに責任があるというプレハーノフやポトレソフの理論、あるいは、資本主義のもとでも軍備縮小と永続的平和の「見込」があるというカウツキーの理論は、なんという不体裁なナンセンスであり、なんというがまんのならない偽善であり、なんという甘ったるいうそであることか！

　ブルジョアジーのごきげんをとるために、プレハーノフがこのように恥しらずに歪曲している弁証法の根本命題を戦争に適用すると、「戦争は別の」（すなわち暴力的な）「手段による政治の継続にすぎない」ということになる。これが、戦争史の問題についての偉大な著作家の一人であるクラウゼヴィッツ*の定式であるが、彼の思想は、ヘーゲルによって実り豊かなものにされた。そして、これこそいつでもマルクスとエンゲルスの見地であって、彼らは、それぞれの戦争を、その時代の当該の関係強国――およびそれらの国の内部のいろいろな階級――の政治の継続とみたのである。

* カール・フォン・クラウゼヴィッツ『戦争論』、著作集、第一巻、二八ページ、第三巻、一三九―一四〇ページ参照。「戦争は、諸政府間および諸国民間の政治関係によってのみひきおこされるということは、もちろん、だれでも知っている。しかし、ふつう人々は、戦争の開始とともにこの関係が中絶し、自己独自の法則だけに従う、まったく別の状態がやってくるように考えている。われわれは、これに反して、戦争は、別の手段の介入による政治関係の継続にほかならない、と主張するものである」。

プレハーノフのむきだしの排外主義は、カウツキーのより洗練された、協調的で甘ったるい排外主義とまったく同じ理論的立場に立っている。このカウツキーは、あらゆる国の社会主義者が「自国」の資本家の側にうつったことを、次のような議論で神聖化している。

だれでも、その祖国を防衛する権利があり、義務がある。真の国際主義とは、この権利を、わが国民とたたかっている国民をふくめた、すべての国民の社会主義者にみとめることとである……(『ノイエ・ツァイト』一九一四年一〇月二日号と、同じ著者の他の諸著作を見よ)。

このような無類の議論は、社会主義を際限もなく嘲弄(ちょうろう)するものであるから、これにたいする最良の答えは、一面にはヴィルヘルム二世とニコライ二世の肖像を、他の面にはプレハーノフとカウツキーの肖像をきざんだメダルを注文することとだろう。真の国際主義とは「祖国防衛」の名において、フランスの労働者がドイツの労働者に、ドイツの労働者がフランスの労働者に発砲するのを正当化することだ、ということとである!

しかし、カウツキーの議論の理論的前提を注意ぶかくみれば、戦争の開始とともに諸国民間および諸階級間の歴史的に形成された政治関係が中絶し、まったく別の状態!「単なる」攻撃者と防衛者、「祖国の敵」の「単なる」撃退!がやってくるという、ちょうどその見解が得られるのである。およそ八〇年まえにクラウゼヴィッツが嘲笑した、地球人口の過半数を占める多くの民族にたいする帝国主義的大国民族の抑圧、獲物の分配をめぐる大国民族のブルジョアジーのあいだの競争、労働運動を分裂させ、圧しつぶそうとする資本の意欲――プレハーノフとカウツキー自身が戦前の数十年のあいだ、このような「政治」を描いていたにもかかわらず、すべてこうしたことは、たちまち両者の視野から消えうせてしまった。

この場合、マルクスとエンゲルスをごまかして引用することが、社会排外主義の二巨頭の「切札的」な論拠となっている。プレハーノフは、一八一三年のプロイセンの民族戦争と一八七〇年のドイツの民族戦争を思いだしており、カウツキーは、マルクスが一八五四―一八五五年、一八五九年、一八七〇―一八七一年の戦争では、どちら側の(すなわちどのブルジョアジーの)勝利のほうが望ましいかという問題を解決したが、マルクス主義者も一八七六―一八七七年と一八九七年の戦争では同じことをしたと、いかにも学者面をして証明しようとしている。あらゆる時代のあらゆる詭弁家のやり口は、原則的に似もつかないケースだということがわかりきっている実例をとりあげることとである。両者がここにあげている従来の戦争は、多年にわたる

ブルジョアジーの民族運動、すなわち他国の異民族の抑圧に対抗し、絶対主義（トルコとロシアの）に対抗する運動の「政治の継続」であった。その当時には、どのブルジョアジーの勝利のほうが望ましいかという問題のほかには、どんな問題もありえなかったのである。マルクス主義者は、このような型の戦争をまえもって人民に呼びかけ、民族的憎悪をかきたててもよかった、——マルクスが一八四八年とそれ以後に対ロシア戦争を呼びかけ、エンゲルスが一八五九年に抑圧者のナポレオン三世とロシアのツァーリズムにたいするドイツ人の民族的憎悪をかきたてたのと同じように。*

* ついでにいえばガルデーニン氏は、反革命的民族としての正体を実際にあらわしたヨーロッパの民族、すなわち「スラヴ人とくにロシア人」に対抗する革命戦争に、マルクスが一八四八年を支持したことをさして、これはマルクスの「革命的排外主義」であり、とにかく排外主義であると『ジーズニ』[六八]紙上で呼んでいる。このようなマルクス非難は、この「左派」社会革命党派の日和見主義を（あるいは、もっと正確にいえば、まったくのふまじめさをも）かさねて証明するだけである。われわれマルクス主義者は、反革命的な民族にたいする革命戦争をつねに支持してきたし、いまも支持している。たとえば、もし一九二〇年にアメリカあるいはヨーロッパで社会主義が勝利をしめ、そのとき、日本と中国がわれわれに対抗して——まず外交的にでも——彼らのビスマルク派を押したててくるなら、われわれは彼らにたいする攻撃的な革命戦争を支持するであろう。ガルデーニン君、これは君には解せないのか？　君はロープシン流の革命家だよ！

封建制と絶対主義に抗する闘争の「政治の継続」、自己を解放しようとしているブルジョアジーの政治の継続を、老衰した、すなわち帝国主義的な、すなわち全世界を略奪しつくした、反動的な、そして封建領主と同盟してプロレタリアートを圧しつぶそうとしているブルジョアジーの「政治の継続」と比較することは、アルシン〔尺度の単位〕とプード〔重量の単位〕を比較することを意味している。これは「ブルジョアジーの代表者」ロベスピエール、ガリバルディ、ジェリャーボフを、「ブルジョアジーの代表者」ミルラン、サランドラ、グチコーフと比較するのに似ている。新しい民族の幾十万人を封建制との闘争のなかで文明生活へ起ちあがらせたブルジョア的「祖国」の名においてものを言う世界史的な権利をもっていた偉大なブルジョア革命家に深甚な尊敬の念をいだかないようでは、マルクス主義者ではありえないのである。そして、ドイツ帝国主義者によるベルギーの圧殺について、オーストリアとトルコの略奪をめぐるイギリス、フランス、ロシア、イタリアの取引について、「祖国防衛」をうんぬんしているプレハーノフとカウツキーの詭弁に軽蔑の念をいだかないようでは、

マルクス主義者ではありえないのである。

社会主義は、資本主義の急速な発展に基礎をおいている。わが国の勝利は、この国の資本主義の発展を促進し、したがって社会主義の到来をも、促進するであろう。わが国の敗北は、その経済的発展をおくらせ、したがって社会主義の到来をおくらせるであろう、というのが、社会排外主義のもう一つの「マルクス主義的理論」である。このようなストルーヴェ主義的な理論を、わが国ではプレハーノフが、ドイツ人のあいだでは、レンシュその他が展開している。カウツキーは、この粗雑な理論に反対し、これをあからさまに擁護しているレンシュに反対し、これを内密に主張しているクノーに反対して論争しているが、それは、もっと精巧な、もっと偽善的な排外主義理論を基礎にして、あらゆる国の社会排外主義者を和解させるためにすぎない。

この粗雑な理論の検討にながくたずさわる必要はない。ストルーヴェの『批判的覚え書』は一八九四年に出版された。そしてそれから二〇年のあいだに、ロシアの社会民主主義者は、革命性をぬぐいさった「マルクス主義」のヴェールをかぶって、自分の見解や願望を伝導する、教養あるロシアのブルジョアのこういう「やりくち」をすっかり知ってしまった。ストルーヴェ主義は、ロシア的な志向であるばかりでなく、最近の諸事件がとくにはっきりとしめしているように、マルクス主義の「扇動者的」、「デマゴギー的」、「ブランキスト的＝ユートピア的」側面をのぞいて、「真に科学的」な側面や要素は「すべて」みとめるかのようなふりをして、マルクス主義を「親切で」まいらせ、抱擁によってマルクス主義をしめころそうとするブルジョア理論家の国際的な志向でもある。言いかえれば、改良のための闘争をもふくめて、階級闘争（プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）ぬきの）をもふくめて、「社会主義的理想」の「一般的承認」をもふくめて、「新しい制度」による資本主義の代置をもふくめて、自由主義的ブルジョアジーが受けいれることのできるいっさいのものをマルクス主義から取りいれ、「ただ」マルクス主義の精髄「だけ」を、その革命性「だけ」を投げすてるのである。

マルクス主義はプロレタリアートの解放運動の理論である。だからマルクス主義をストルーヴェ主義とすりかえる過程に、自覚した労働者が大きな注意をはらわなければならないのは、当然である。この過程を推進する力は数多く、また多様である。おもなものを三つだけ指摘しておこう。(一) 科学の発展は、マルクスの正しさを証明する材料をますます多く提供している。そこで、偽善的なやり方で、マルクス主義の原則に公然とは反対しないで、それをみとめるようなふりをし、詭弁によってその内容を去勢し、マ

ルクス主義をブルジョアジーにとって無害な聖「像」に変えることによって、マルクスとたたかわなければならなくなる。(二) 社会民主党のあいだでの日和見主義の発展は、マルクス主義のこのような「つくりかえ」をたすけて、日和見主義へのあらゆる譲歩を正当化するのに適したようにマルクス主義を調理している。(三) 帝国主義の時期は、他のすべての民族を抑圧している特権的な「大」民族のあいだでの世界の分割である。この特権とこの抑圧から得られる獲物のおこぼれは、疑いもなく、小ブルジョアジーと、労働者階級の貴族や、さらにその官僚の一定の層の手に落ちる。これらの層は、プロレタリアートと勤労大衆とのとるにたりない少数者であって、「ストルーヴェ主義」に心をひかれている。なぜなら、ストルーヴェ主義は、彼らがあらゆる民族の被抑圧大衆に敵対して「自」国のブルジョアジーと同盟をむすぶのを、正当だとしているからである。これについては、あとで、インタナショナルの崩壊の原因の問題に関連して、もう一度述べる折があろう。

四

最も洗練された、最も巧妙に科学性と国際性をよそおった社会排外主義の理論は、カウツキーが提起している「超帝国主義」の理論である。著者自身による、この理論の最も明瞭な、最も正確な、最も新しい叙述は、次のとおりである。

「イギリスにおける保護貿易運動の後退、アメリカにおける関税の引下げ、軍備縮小への努力、戦争前の数年間におけるフランスとドイツからの資本輸出の急速な減少、最後に、いろいろな金融資本閥の国際的な絡みあいの強化、——これらのことからして私はこう考えるようになった。現在の帝国主義的政策が新しい超帝国主義的政策によって駆逐され、後者が各国の金融資本相互の闘争を国際的に連合した金融資本による世界の共同搾取とおきかえるということは、ありえないかどうか? いずれにしても資本主義のこのような新しい段階は考えられる。それが実現されるかどうか、これをきめるにはまだ十分な前提がない」(『ノイエ・ツァイト』第五号、一九一五年四月三〇日、一四四ページ)。

……「現在の戦争の経過と結末は、この点で決定的なものとなるかもしれない。金融資本家たちのあいだの民族的憎悪をも極度にたかめ、軍拡競争をさらにつよめ、第二の世界戦争を避けがたいものとすることによって、戦争は、超帝国主義の弱い芽をすっかりおしつぶすかもしれない。そうなれば、私が自著『権力への道』のなかで定式化した予想がおそるべき規模で実現され、階級対立の激化は急速につのり、それとともに資本主義の道徳

的死滅」(文字どおりには「破産」、《Abwirtschaftung》、崩壊)……(注意しておかなければならないが、カウツキーはこの気どったことばを、たんに、「プロレタリアートと金融資本とのあいだの中間層」、つまり「インテリゲンツィア、小ブルジョア、さらには小資本家」までもが資本主義に「敵意」をもつという意味につかっているのだ。)……「も急速につよまるであろう。だが、戦争は、これとは別な終り方をするかもしれない。それは超帝国主義の弱い芽をつよめるような形でおわるかもしれない」。「戦争の教訓は」(これに注意!)「平時ならば長いことと待たなければならないような発展を、はやめるかもしれない。事態がそこまですすめば、すなわち、諸民族の協定、軍備縮小、永続的な平和に達すれば、そのときは、戦前にはますます資本主義の道徳的死滅へと導いていた諸原因のうちの最悪のものは、消えてなくなるかもしれない」。もちろん、新しい段階は、プロレタリアートにとっては、「おそらくはいっそう悪い、新しい災厄」を伴うであろう。しかし、「一時的には」「超帝国主義」は、「資本主義の枠内で新しい希望と期待とにみちた一時代をもたらすかもしれない」(一四五ページ)。この「理論」から、どのようにして社会排外主義の正当化が導きだされてくるのか?

それは、――「理論家」としては――かなり奇妙なやり方、すなわち次のようなやり方によって導きだされてくるのである。

ドイツの社会民主党の左派はこう言っている。帝国主義とそれが生みだす戦争は、偶然的なものではなく、金融資本の支配をもたらした資本主義の必然的な産物である。だから、革命的大衆闘争へ移行することが必要である。なぜなら、比較的に平和な発展の時代はすぎさったからである、と。社会民主党の「右派」は乱暴にも次のように言明している。帝国主義が「必然」であるならば、われわれも帝国主義者とならなければならない、と。そこでカウツキーは「中央派」の役割を買って出て、調停するのである。

カウツキーは、その小冊子『民族国家、帝国主義国家、国家連盟』(ニュルンベルグ、一九一五年)のなかでこう書いている。「極左派」は、不可避的な帝国主義に社会主義を「対置」しようとする。すなわち、「われわれが半世紀このかた資本主義的支配のあらゆる形態に対置してきた、社会主義の宣伝だけでなく、その即時の実現をも対置しようとする。それは、非常に急進的に見えはするが、社会主義が即時実際に実現されるとは信じていない人を、ことごとく帝国主義の陣営に追いやることにしかなりえない」(一七ページ、傍点――引用者)。

カウツキーは、社会主義の即時の実現をうんぬんする場合、ドイツでは、とくに戦時検閲制のもとでは、革命的行動を口にすることができないのをいいことにして、すりかえを「実現」している。左派が革命的行動の即時の宣伝と準備とを党に要求してはいても、「社会主義を即時実際に実現する」ことをけっして要求していないことは、カウツキーもよく知っているのだ。

左派は、帝国主義の必然性から、革命的行動の必要を導きだしている。「超帝国主義の理論」は、カウツキーが日和見主義者を正当化するのに役だっており、日和見主義者はけっしてブルジョアジーの側へうつったのではなく、ただ即時の社会主義を「信じていない」だけであり、これからさき軍備縮小と永続的な平和の新しい「時代」が「くるかもしれない」ことを期待しているのだ、というふうに見せかけるのに役だっている。この「理論」の帰着するところは、日和見主義者と公認の社会民主党がブルジョアジーに加担し、バーゼル決議の厳粛な声明にそむいて、現在のあらしの時代に革命的な（すなわちプロレタリア的な）戦術を放棄するのを、カウツキーが、資本主義の新しい平和な時代への期待をもちだして、正当化しているということであり、しかもただそれだけである！

注目すべきことは、この場合カウツキーが、新しい段階はこれこれの事情や条件から出てくるし、またかならず生じなければならない、とは言明していないばかりか、反対に、新しい段階が「実現するかどうか」の問題さえ私はまだきめかねている、と率直に言明していることである。そして、実際、カウツキーがさししめした新しい時代への「諸傾向」というものを見てみたまえ。驚くべきことに、著者は「軍備縮小への志向」を経済的事実の部類に入れているのだ！　これは、諸矛盾の鈍化という理論とはまったくあいいれない、疑う余地のない諸事実からのがれて、罪のない、小市民的な取りざたや空想のかげにかくれることを意味している。カウツキーのいう「超帝国主義」――ついでに言っておくが、このことばは著者が言おうとしていることを全然あらわしていない――とは、資本主義の諸矛盾の非常な鈍化ということを意味するのだ。「イギリスとアメリカにおける保護貿易主義の後退」とおっしゃる。いったいどこに、新しい時代への傾向がほんのすこしでもあるというのか？　極端にまでなったアメリカの保護貿易主義は後退したが、しかし保護貿易主義はのこった。それは、イギリスに有利なイギリス植民地の特権、特恵関税がのこったのと同じである。資本主義の過去の「平和」な時代が、なににもとづいて現代の帝国主義の時代と交替したかを、思いだしてみよう。それは、自由競争が独占的資本家団体

に席をゆずったこと、および、地球全体が分割されてしまったことにもとづいている。この二つの事実（と要因）が真に世界的な意義をもっていることは、明らかである。資本が妨害されることなしに植民地をふやし、アフリカその他でまだ占領されていない土地を奪取することができたあいだは、自由貿易と平和的な競争とは、可能であったし、また必然的であった。その当時は、資本の集中はまだ弱かったし、独占企業、すなわち、ある産業部門全体を支配するほど巨大な企業は、まだなかった。このような独占企業の発生と発展（この過程は、イギリスでも、アメリカでも、たぶん、停止しなかったと思うが？　戦争がこの過程を促進し激化させたことは、カウツキーでさえ、おそらくあえて否定しないであろう）は、以前のような自由競争を不可能にし、その基盤を掘りくずしており、また地球が分割されてしまったことは、平和的な拡張から、植民地と勢力範囲との再分割のための武力闘争へうつることを、よぎなくさせている。二つの国での保護貿易主義の後退がこの場合なにか事態を変更できるかのように考えるのは、こっけいである。

つぎに、二つの国でこの数年間に資本の輸出が減少したこと。この二つの国、すなわち、フランスとドイツは、たとえば一九一二年のハルムスの統計によれば、それぞれ国外にほぼ三五〇億マルク（約一七〇億ルーブリ）の資本をもっていたが、イギリスは、一国だけでその二倍をもっていた。* 資本輸出の増大は、資本主義のもとでは、かつて均等ではなかったし、またありえなかった。資本の蓄積が減退したということや、あるいは、たとえば大衆の状態が大きく改善されたため国内市場の受容力がひどく変化したというようなことは、カウツキーも、おくびにだすことさえできない。このような諸条件のもとでは、二つの国で数年間資本の輸出が減少したということから、けっして新しい時代の到来という結論を導きだすべきではない。

* ベルンハルド・ハルムス『世界経済の諸問題』、イェナ、一九一二年。ジョージ・ペイシュ『植民地その他におけるイギリスの投資』、『王立統計協会雑誌』第七四巻、一九一〇—一九一一年、一六七ページを見よ。ロイド・ジョージは、一九一五年の演説のなかで、イギリスの在外資本を四〇〇億ポンド、すなわち約八〇〇億マルクと計算した。

「いろいろな金融資本閥の国際的な絡みあいの強化」。これは、数年間だけでなく、また二ヵ国だけでなく、世界全体の、資本主義全体の、ただ一つの真に全般的な、疑う余地のない傾向である。しかし、なぜこの傾向から、いままでのように軍備への志向ではなしに、軍備縮小への志向がかならず出てくるというのか？　世界的な「火砲」会社

（一般に軍需品製造会社）のどれか一つを、たとえばアームストロング会社をとってみよう。最近イギリスの『エコノミスト』（一九一五年五月一日づけ）は、この会社の利潤が、一九〇五―六年度の六〇万六〇〇〇ポンド（約六〇〇万ループリ）から、一九一三年には八五万六〇〇〇ポンドに、また一九一四年には九四万ポンド（九〇〇万ループリ）にふえたことを報じていた。金融資本の絡みあいは、この場合非常に大きく、しかもますます増大している。ドイツの資本家は、イギリス会社の事業に「参加」しており、イギリスの会社は、オーストリアその他のために潜水艦を建造している、等々。国際的に絡みあった資本は、軍備や戦争ですてきな商売をやっている。いろいろな国の資本が結合し、絡みあって、単一の国際的な全体をつくるということから、軍備縮小への経済的傾向という結論を導きだすことは、階級的諸矛盾の現実の激化を、それの鈍化をねがう善良な小市民的願望とおきかえることを意味している。

五

カウツキーは、戦争の「教訓」ということをまったく俗物的な精神で述べており、この教訓を、戦争の災厄にたいするなにか道徳的な恐怖のように見せかけている。たとえば、彼の小冊子『民族国家』では、次のように論じている。

「世界平和と軍備縮小を最も切実な利益とする層があるということは、疑うべくもないし、証明するまでもない。小ブルジョアや農民、いや多くの資本家やインテリゲンツィアさえ、戦争や軍拡競争によって彼らがこうむる損害を上まわる利益を帝国主義にもってはいない」（二一ページ）。

これが、一九一五年二月に書かれたものなのだ！　事実は、小ブルジョアや「インテリゲンツィア」までをふくめてすべて有産階級が、ことごとく帝国主義者に加担していることを、ものがたっている。ところが、カウツキーは、まったく箱のなかの男として、[26]なみなみならぬ自己満足の態で、甘ったるいことばで、事実をはらいのける。彼は、小ブルジョアジーの利益を、その行為によって判断しないで、一部の小ブルジョアのことばによって判断している。ところが、これらのことばは彼らの行為によってたえずくつがえされているのである。これは、ブルジョアジー一般の「利益」をその行為によって判断しないで、現代の制度にはキリスト教の理想がしみわたっていると、神かけてちかうブルジョア的坊主たちの慈愛にみちた説教によって判断するのと、まったく同じである。カウツキーがマルクス主義を適用する仕方は、マルクス主義からあらゆる内容が消えさってしまい、なにか超自然的な、心霊論的な意味で

の「利益」ということばだけしかのこらないというふうな仕方である。なぜなら、彼が念頭においているのは、現実の経済ではなく、社会の福祉という罪のない願望だからである。

マルクス主義は「利益」というものを、日々の生活の幾百万という事実に現われる階級的諸矛盾と階級闘争とにもとづいて判断する。小ブルジョアジーは、諸矛盾の鈍化を空想し、しゃべりちらして、諸矛盾の激化は「有害な結果」をきたすという「論拠」をかかげる。帝国主義とは、有産階級のあらゆる層が金融資本に従属することと、五つないし六つの「大」国のあいだに世界が分割されることとであるが、これらの大国の大部分はいま戦争に参加している。大国による世界の分割とは、これらの国の有産階級全体が、植民地や勢力範囲の領有に、異民族の抑圧に利益をもっており、「大」国に属し抑圧民族に属する結果として、多少とも収入の多い地位や特権に利益をもっていることを、意味している。*

* E・シュルツェがつたえるところによると、一九一五年には全世界の有価証券の総額は、国債、地方債、抵当証券、商工業会社の株式などを合算して、七三二〇億フランと算定された。この総額のうち、イギリスの持分は一三〇〇億フラン、アメリカ合衆国の持分は一一五〇億フラン、フランスの持分は一〇〇〇億フラン、ドイツの持分は七五〇億フラン、したがって、これらの四大国全部の持分は四二〇〇億フラン、すなわち総額の半分以上となる。他国民を凌駕し、他国民を抑圧し強奪している先進的な大国民族の儲けと特権がどんなに大きなものかは、これによって判断することができる（エルンスト〔エミール〕・シュルツェ博士『ロシアにおけるフランス資本』、『金融文庫』所収、ベルリン、一九一五年、第三二巻、一二七ページ）。大国民族の「祖国防衛」とは、異民族の強奪から得られる獲物にたいする権利を防衛することである。周知のように、ロシアでは、資本主義的帝国主義は比較的弱いが、そのかわり軍事的＝封建的帝国主義がより強力である。

資本主義が順調に進化し、新しい国々にしだいに拡大していく、比較的平穏で文化的な、平和な環境のなかで、これまでどおりに生活するということは、できなくなっている。なぜなら、ちがった時代がやってきたからである。金融資本は、ある国を大国の列から駆逐しつつあり、また駆逐してしまうだろう。その国の植民地や勢力範囲をうばいとり（ドイツは、イギリスにたいして戦争をはじめたことで、そうするといって脅かしているのだ）、小ブルジョアジーからその「大国的」特権や副収入をうばいとるだろう。これは戦争によって証明されつつある事実である。実際、ずっと以前からだれもがみとめており、カウツキーその人もその小冊子『権力への道』でみとめている、諸矛盾の激

化が、こういう結果に導いたのである。

ところが、大国的特権のための武力闘争が一つの事実となったいま、カウツキーは、資本家と小ブルジョアジーにむかって、戦争は恐ろしいもので、軍備縮小はよいことである、と説得しはじめるのだ。それは、キリスト教の坊主が、説教壇から資本家にむかって、人類愛は神の戒律であり、魂のあこがれであり、文明の道徳律であると説得するのとまったく同じであり、また、まったく同じ結果しかもたらさない。カウツキーが「超帝国主義」への経済的傾向と呼んでいるものは、実際には、金融資本家たちにむかって、悪いことをしないようにと説く小ブルジョア的説教にほかならない。

資本の輸出はどうなるか？　でも、資本は、植民地へ輸出されるよりも、たとえばアメリカ合衆国のような独立国へ輸出されるほうが多い、と。植民地の奪取はどうなるのか？　でも、植民地は、すでに全部奪取されており、ほとんどすべてが解放をめざしている。「インドがイギリス領でなくなることはあるかもしれないが、しかしインドは一帝国としてまるごと別の外国の支配下にはいることは、けっしてないだろう」（前掲の小冊子、四九ページ）。「およそある資本主義的工業国家が、原料入手の点で外国へのその依存をまぬかれるのに十分なだけの植民地帝国を獲得しようとつとめるなら、かならず他のすべての資本主義国家を敵にまわして結束させ、自国をはてしない消耗戦にまきこむことになり、しかもその目的にはすこしも近づくことができないであろう。このような政策は、国家の経済生活全体を破産に導く、最も確実な道であろう」（七二―七三ページ）。

これは、金融資本家たちに帝国主義を放棄するようにと説く俗物的な説教ではないか？　破産するぞといって資本家をおどかすことは、株屋にむかって、「多くの人がそうして自分の財産をすってしまった」のだから相場はやるな、と忠告するのと同じである。競争相手の資本家や競争相手の民族が破産すれば、資本は、その集積がいっそうつよまって、得をするのである。だから、経済的競争が、すなわち、破産への経済上の駆立てが、いっそうはげしくなり、いっそう「緊迫して」くればくるほど、そのうえになお、軍事的にも競争相手を破産へと駆立てようとする資本家の努力はいっそうつよまる。植民地やトルコのような従属国に資本を輸出する場合には、金融資本家は、アメリカ合衆国のような、自由な独立した文明国に資本を輸出するのにくらべて、三倍もの利潤を手に入れるが、こういう植民地や従属国に輸出するのと同様の有利さで資本を輸出できる国がのこりすくなくなればなるほど、トルコ、中国その他

を従属させ分割するための闘争は、それだけいっそうはげしくなる。経済理論は、金融資本と帝国主義の時代について、このように言う。事実もこのように言う。ところが、カウッキーは、万事を卑俗な小市民的な「道徳訓話」に変えてしまう。いわく、トルコを分割したり、あるいはインドを奪取することに、ことさら熱中するのはつまらない。なぜなら、ましてそのためにたたかうのはつまらない。なぜなら、「いずれにしても、長いことはない」からだ。実際、資本主義を平和的に発展させたほうがよいだろう、と。……もちろん、賃金の引上げによって資本主義を発展させ、市場を拡大させせたなら、いっそうよいだろう。これはまったく「考えられる」ことだ。そして、こういう趣旨で金融資本家をいましめるということは、坊主の説教にとっては申し分ないテーマである。……善良なカウツキーは、ドイツの金融資本家をほとんど完全に説得し、説きふせてしまった、——植民地のためにイギリスとたたかうのはつまらない、なぜなら、これらの植民地はどのみちまぢかいうちに自己を解放するだろうから、と！……

一八七二年から一九一二年までのエジプトにたいするイギリスの輸出入の増大は、イギリスの総輸出入の増大よりも緩慢であった。そこで「マルクス主義者」カウツキーの道徳訓話はこう言う、「エジプトを軍事的に占領しなかったなら、経済的要因の力だけでは、エジプトとの貿易の増大はもらとすくなかっただろうと考える根拠はなにもない」（七二ページ）。「資本の膨脹欲」は「帝国主義の暴力的方法によるのではなくて、平和な民主主義によったほうが、最もよくこれを促進する」ことができる（七〇ページ）。

なんとすばらしくまじめな、科学的な「マルクス主義的」分析だろう！　カウツキーは、この不合理な歴史をみごとに「訂正」し、こういうことを証明した。イギリス人には、フランス人からエジプトをうばいとる必要は全然なかったし、ドイツの金融資本家は、エジプトからイギリス人を追いだすために、戦争をはじめ、トルコ遠征を組織し、またそれと同時に他のいろいろな方策を講じたりするには断じておよばなかったのだ！　すべてこういうことは誤解であって、それ以上のものではない。——イギリス人は、エジプトにたいする暴力を放棄し、「平和な民主主義」にうつる（カウツキー流に資本の輸出を拡大するために！）のが「最もよい」ということを、まだ呑みこんでいなかったのだ。……

「自由貿易は資本主義の生みだす経済的対立をすっかり取りのぞく、とブルジョア自由貿易論者が考えたのは、もちろん、彼らの幻想であった。自由貿易にせよ、民主主義にせよ、これらの対立を取りのぞくことはできない。

しかしわれわれはみな、勤労大衆に負わせられる苦悩や犠牲が最も少ないような形でこれらの対立がたたかいぬかれることに、関心をもっている」（七三ページ）。

主よ、めぐみたまえ！　主よ、あわれみたまえ！　ラッサールはかつて問うた、――俗物とはなにか？　そして、詩人〔ゲーテ〕の次の有名な格言をもって答えとした。俗物とは「恐怖と、神はあわれみたもうであろうという希望とにみたされた、うつろな腸である」。

カウツキーは、途方もなくマルクス主義を汚瀆し、自分は本物の坊主になってしまった。この坊主は、資本家たちに平和な民主主義にうつるよう説得し、しかも、これを弁証法と呼んでいる。はじめに自由貿易があり、つぎに独占と帝国主義があったなら、なぜ「超帝国主義」とふたたび自由貿易とがあってはいけないのか？　と。この坊主は、この「超帝国主義」のもたらす幸福を美しくえがきだして、被抑圧大衆をなぐさめている。とはいえこの坊主は、このような「超帝国主義」が「実現できる」かどうかをさえ、かたろうともしないのである！　宗教は人間を慰めるという論拠によって宗教を擁護した人々にたいして、フォイエルバッハは、慰めの反動的意義を正当にもこう指摘した。奴隷を奴隷制に反逆して立ちあがらせるかわりにこれを慰めるものは、奴隷主をたすけるものである、と。

あらゆる抑圧階級は、自分の支配を維持するために、二つの社会的機能を必要とする。すなわち、刑吏の機能と坊主の機能とである。刑吏は、被抑圧者の抗議と激昂をおしつぶさなければならない。坊主は、被抑圧者を慰め、階級支配がたもたれていても災厄と犠牲がかるくなる見通しを、彼らにえがいて見せ（これは、このような見通しが「実現できる」という保証なしでやるのだから、とくに都合がよい……）、そうすることによって、彼らをこのような支配に忍従させ、彼らに革命的行動をおもいとどまらせ、彼らの革命的気分をそぎ、彼らの革命的決意をぶちこわさなければならない。カウツキーは、マルクス主義を、最も忌まわしい、愚鈍な反革命理論に、最もけがらわしい坊主主義に変えてしまった。

一九〇九年にはカウツキーは、小冊子『権力への道』のなかで、だれにも反駁されておらず、また反駁することのできない事柄、すなわち、資本主義の諸矛盾の激化、戦争と革命の時代の接近、新しい「革命期」の接近を、みとめている。彼は、「時期尚早」の革命などというものはありえないと言明し、敗北する可能性もあることはたたかわないまえに否定することはできないにしても、蜂起のさいに勝利する可能性もあることを考慮しようとしないのは、「われわれの事業を直接に裏切ることである」と公言している。

戦争がやってきた。諸矛盾はさらにいっそう激化した。戦場は大衆の災厄は巨大な規模に達した。戦争は長びき、ますますひろがっていく。カウツキーは、つぎからつぎに小冊子を書き、検閲当局の命令におとなしく従い、領土の強奪や、戦争の惨禍や、軍需納入業者たちの法外な利潤や、物価騰貴や、動員された労働者の「軍事奴隷制」についての資料は出さないで、そのかわりにプロレタリアートをしきりに慰めている、——ブルジョアジーが革命的あるいは進歩的であった時代、「マルクス自身」がどちらかのブルジョアジーの勝利をのぞんでいた時代の戦争の実例を引いて慰め、植民地もなければ略奪もない、戦争もなければ軍備もない資本主義の「可能性」を証明する数字、「平和な民主主義」のほうがよいことを証明する数字をいっぱいにならべたてて慰めている。カウツキーは、大衆の災厄がひどくなり、革命的情勢（これを口に出すことはできない！検閲がゆるさないから……）が実際にわれわれの目のまえにやってきたことはあえて否定せずに、ブルジョアジーや日和見主義者にぺこぺこ頭をさげ、「犠牲と苦悩がもっとすくない」ような、新しい段階の闘争形態の「見通し」（これが「実現できる」とは彼は保証していない）をえがいている。……フランツ・メーリングとローザ・ルクセンブルグが、このためにカウツキーを淫売婦（Mädchen für alle）と呼んでいるのは、まったく正しい。

**

一九〇五年八月に、ロシアには革命的情勢が現にあった。ツァーリは、わきたっている大衆を「慰める」ために、ブルィギン国会を約束した。もし金融資本家が軍備を放棄し、おたがいのあいだで「永続的な平和」について協定することを、「超帝国主義」と呼ぶことができるなら、ブルィギンの立法諮問制度は「超専制」と呼ぶことができよう。数百の巨大企業のなかで「絡みあっている」百人の世界最大の金融資本家が、あす人民にむかって、戦後には軍備縮小に賛成しようと約束するものと、しばらく仮定してみよう（カウツキーのばかげた理論から出てくる政治的結論をあとづけてみるために、しばらくこのような仮定を立てるのである）。その場合でさえ、プロレタリアートにむかって革命的行動——これがなければ、あらゆる口約束、あらゆるけっこうな見通しも、単なる幻影にすぎない——を思いとどまるよう勧告するのは、プロレタリアートを直接に裏切ることであろう。

戦争は、資本家階級に巨大な利潤をもたらし、新しい強奪（トルコ、中国その他）や、数十億にのぼる新しい注文や、いっそうよい利率での新しい公債やらの、すばらしい

見通しをもたらしただけではない。それぱかりではない。戦争は、プロレタリアートを分裂させ堕落させて、資本家階級にさらに大きな政治的利益をもたらした。カウツキーは、この堕落をたすけており、「自」国の日和見主義者たち、ジュデクム派との統一の名において、たたかうプロレタリアのこの国際的分裂を神聖化している！　しかも、旧来の諸党の統一というスローガンが、一国のプロレタリアートとその国のブルジョアジーとの「統一」を意味し、いろいろな民族のプロレタリアートの分裂を意味することを、理解しない人々がいるのである。……

六

「社会民主党の崩壊」（クノーにたいするカウツキーの反論の第七節）についてのカウツキーの結論的な考察をのせた五月二八日付の『ノイエ・ツァイト』（第九号）が出たときには、前述の文章〔レーニンの文章〕はすでに書きあげられていた。カウツキーは、社会排外主義擁護のすべての古い詭弁と一つの新しい詭弁とをまとめて、みずから次のように総括している。

「この戦争は純粋に帝国主義的であるとか、戦争の勃発のさいの二者択一は帝国主義か社会主義かであったとか、ドイツとフランスの社会党とプロレタリア大衆は、またしばしばイギリスのそれらも、ひとにぎりの国会議員のたんなる指図だけで、無分別にも、帝国主義のふところに飛びこみ、社会主義を裏切り、そのようにしてあらゆる時代を通じてまったく例のない崩壊をまねいたかのようにいうのは、まったく正しくない」。

これは新しい詭弁であり、労働者をあらたに欺瞞するものである。この戦争は純粋に帝国主義的な戦争ではない、というのである！

カウツキーは、今日の戦争の性格と意義の問題については、驚くほど動揺しているが、そのさい、この党指導者は、泥棒がつい近ごろ盗みをした場所を避けて通るのと同じように慎重に、バーゼル大会とヘムニッツ大会の正確で公式な声明をつねに避けている。カウツキーは、一九一五年二月に執筆された小冊子『民族国家……』では、この戦争は「やはり結局のところ帝国主義的な戦争である」（六四ページ）と主張した。ところが、いまや、純粋に帝国主義的でない戦争、という新しい保留条件がもちこまれるのである。では、どんな戦争なのか？

まだ民族戦争だということになる！　カウツキーは、次のような「プレハーノフ的」なえせ弁証法によって、こういうとんでもないことまで言ったのである。

「今日の戦争は、帝国主義の生みの子であるばかりで

なく、ロシア革命の生みの子でもある」。すでに一九〇四年に、彼カウツキーは、ロシア革命が汎スラヴ主義を新しい形で復活させるであろうということ、「民主主義的ロシアは民族独立の達成をめざすオーストリアとトルコのスラヴ人の熱望を……新たに強力に燃えあがらせる」にちがいないということを予見していた。「そうなれば、ポーランド問題もふたたび切迫するだろう。……そのときにはオーストリアは打ちくだかれるであろう。なぜなら、たがいに離反しようとつとめている諸要素を今日なお結びつけている鉄のたががツァーリズムの崩壊とともに、がたがたになるからである」(いまカウツキー自身は、この引用句を一九〇四年の彼の論文から引いている)……「ロシア革命は……東方の民族的念願に強力な刺激をあたえ、……ヨーロッパ問題にアジア問題をつけくわえた。すべてこれらの問題は、今日の戦争期に騒々しく発言をもとめており、プロレタリア大衆をもふくめた人民大衆の気分にとって、しばしば決定的なものになっている。これにひきかえ、支配階級のあいだでは帝国主義的傾向が優勢である」(一七三ページ。傍点は引用者)。

これはマルクス主義の冒瀆のもう一つの見本である！「民主主義的ロシア」は東欧民族の自由への熱望を燃えたたせるであろう(これは争う余地がない)から、今日の戦争は、どの民族をも解放せず、どんな結末になっても、多くの民族を奴隷化するものであって、「純粋」に帝国主義的な戦争ではない。オーストリアの民族的構成が非民主的であるため、「ツァーリズムの崩壊」はオーストリアの分解を意味するであろうから、一時強くなった反革命的なツァーリズムは、オーストリアを略奪し、オーストリアの諸民族にさらに大きな抑圧をもたらし、「今日の戦争」に純粋に帝国主義的でない、ある程度民族的な性格をつけくわえた。「支配階級」は、帝国主義戦争の民族的目的というおとぎ話で愚かな小市民やうちひしがれた農民をだましているから、科学者、「マルクス主義」の権威者、第二インタナショナルの代表者は、支配階級には帝国主義的傾向があり、「人民」とプロレタリア大衆には「民族的」な熱望があるという「定式」にたよって、大衆にこの欺瞞をあきらめさせる権利をもっているのである。

弁証法が最も卑劣な、最も卑しい詭弁に変わっている！

今日の戦争での民族的要素は、オーストリア対セルビアの戦争だけによってあらわされている(ちなみに、このことは、わが党のベルン会議の決議によって指摘されている)。セルビアにだけ、セルビア人のあいだにだけ、幾百万の「人民大衆」をとらえている、多年にわたる民族解放

運動があり、オーストリア対セルビアの戦争は、この運動の「継続」である。この戦争が孤立したものであるなら、すなわち全ヨーロッパ戦争と結びつかず、イギリス、ロシアその他の国の貪欲な略奪目的と結びついていないなら、その場合はすべての社会主義者は、セルビアのブルジョアジーの勝利を望む義務があるであろう。これが、今日の戦争における民族的なモメントからひきだされる唯一の正しい、絶対に必然的な結論である。しかし、いまオーストリアのブルジョア、教権派、将軍連のご用をつとめている詭弁家カウツキーはまさにこのような結論をひきだしていないのである！

さらに、科学的＝進化的方法の最新の成果であるマルクスの弁証法は、対象を孤立的に、すなわち一面的に、かたわにゆがめて考察することをこそ、禁じているのである。セルビア＝オーストリア戦争の民族的モメントは、全ヨーロッパ戦争ではなんの重要な意義ももっていないし、またもちえない。ドイツが勝てば、この国はベルギーを、さらにポーランドの一部を、たぶんフランスの一部その他を圧殺するであろう。ロシアが勝てば、この国はガリチアを、さらにポーランドの一部、アルメニアその他を圧殺するであろう。戦争が「引分け」におわれば、古い民族的抑圧がのこるであろう。セルビアにとっては、すなわち今日の戦争の参加者のおよそ百分の一にとっては、戦争はブルジョア的解放運動の「政治の継続」である。百分の九九にとっては、この戦争は帝国主義的ブルジョアジーの、すなわち民族を堕落させることはできても、解放することはできない、老衰化したブルジョアジーの政治の継続なのである。三国協商は、セルビアを「解放」するにあたって、セルビアの自由の利益をイタリア帝国主義に売りわたし、オーストリアの略奪をイタリア帝国主義が援助することの代償にしようとしている。

すべてこれは周知の事柄である。しかも、カウツキーは日和見主義者を正当化するために、すべてこれを図々しくも歪曲している。「純粋」な現象は、自然界にも社会にもないし、またありえないのである。これについては、ほかならぬマルクスの弁証法がおしえており、純粋という概念そのものが、きわめて複雑な対象をくまなく把握することのない人間認識のある種の限界であり、一面性であることを、われわれにしめしている。この世には「純粋」な資本主義というものはなく、またありえないのであって、つねにあるものは、ときには封建制の、ときには小市民生活の、ときにはなおなにかの混合物である。だから、帝国主義者が「人民大衆」をひどく欺瞞し、「民族的」な美辞麗句で露骨な略奪の目的をおおいかくしていることが問題になっ

ているとき、この戦争が「純粋」に帝国主義的でない戦争であることを思いだすのは、底ぬけにおろかな衒学者か、それとも三百代言、詐欺師であることを意味している。カウツキーが「プロレタリア大衆をもふくめて人民大衆にとって、決定的な意義をもっていた」のは民族問題であったが、しかし支配階級にとってはそれは「帝国主義的傾向」(二七三ページ)であったと言い、「無限に多様な現実」(二七四ページ)をえせ弁証法的に引合いにだしてこのことを「裏書き」しているのは、帝国主義者による人民の欺瞞を支持するものであって、問題の全核心は、まさにここにあるのである。現実が無限に多様であるということは疑う余地がなく、これは神聖な真理である! しかし、この無限な多様性のなかに二つの主要な基本的な流れがあるということも、また疑う余地がない。すなわち戦争の客観的内容は、帝国主義の「政治の継続」であり、つまり「大国」の老衰したブルジョアジー(とその政府)が他の民族を略奪するという「政治の継続」であり、「主観的」な支配的イデオロギーは、大衆を愚弄するために流布される「民族的」な空文句である。

「戦争がおこったときには」帝国主義か社会主義かという二者択一をせまられるというように「左派」が事態をえがきだしていると、カウツキーは何度も何度も繰りかえしているが、彼のこの古い詭弁を、われわれはすでに検討した。これは恥知らずのすりかえである。なぜなら、左派がそれとは別な二者択一を提起したこと、すなわち、党が帝国主義的な略奪と欺瞞とに加担するかそれとも革命的行動を宣伝し準備するか、というふうに提起したことを、カウツキーはよく知っているからである。カウツキーはまた、ジュデクム派にたいして従僕的な忠勤をはげむために彼がふりまいているばかげたおとぎ話がドイツの「左派」から暴露されるのをふせいでくれているのは、検閲だけだということも知っているのだ。

「プロレタリア大衆」と「ひとにぎりの国会議員」との関係について言えば、ここでカウツキーは、最も陳腐な反論の一つをもちだしている。

「自己弁護とならないように、ドイツ人のことはとりのけておこう。しかし、ヴァイヤンとゲード、ハインドマンとプレハーノフのような人々が、一夜のうちに帝国主義者となり、社会主義を放棄したなどとは、だれが本気で主張できよう? ……」(カウツキーは、明らかに、ローザ・ルクセンブルグとフランツ・メーリングの雑誌『インテルナツィオナーレ』にあてつけているのだ。この雑誌では、裁決機関、すなわち、ドイツ社会民主党の

公認の上層部、同党中央委員会――「フォルシュタント」、同党の国会議員団その他――の政策にたいして、それにふさわしい軽蔑があびせかけられている)。……「だが、四〇〇万の階級意識あるドイツのプロレタリアが、ひとにぎりの国会議員の命令だけで、二四時間内に右旋回し、自分たちのこれまでの目的にまっこうから反対したなどとは、だれがあえて主張するだろうか？　もしそれが正しいとしたら、それはたしかにおそるべき崩壊を、だがわが党だけの崩壊でなしに、また大衆（傍点――カウツキー）のおそるべき崩壊をもしめすものであろう。大衆がこのような無定見な羊の群であるなら、われわれは自分を葬りさったがよかろう」（二七四ページ）。政治と科学のうえで最も権威のあるカール・カウツキーは、その振舞いと、あわれむべき遁辞をえらびだしたことで、すでに自分を葬りさってしまったのだ。これを理解しないもの、あるいは、すくなくともこれを感じないものは、社会主義の点では救いがたい人間である。だからこそ、メーリング、ローザ・ルクセンブルグと彼らの支持者たちが、『インテルナツィオナーレ』誌上で、カウツキー一派を最も軽蔑すべきしろものとしてあしらったのは、ただ一つの正しい論調をとったことになる。

考えてもみるがよい。戦争にたいする態度について、すこしでも自由に（すなわち、あっさりつかまえられて兵営におくられることもなく、銃殺される最も直接的な脅威にさらされることもなしに）自分の意見を表明できたものは、もっぱら、「ひとにぎりの国会議員」（彼らは、権利にしたがって、自由に投票した。彼らは反対投票することも十分にできた、――ロシアにおいてさえ、そうしたからといって、なぐられることも、ひどく攻撃されることも、逮捕されることさえもなかったのだ）、ひとにぎりの官吏、ジャーナリストなどであった。ところが、いまカウツキーは、この社会層の裏切りと無定見とを、お上品にも大衆のせいにしているのだが、当のカウツキー自身、この層が日和見主義の戦術やイデオロギーにつながりをもつことを、ここ数年のあいだに何十回となく書いてきたのだ！　一般に科学的研究の、とくにマルクス弁証法の、第一の基本的な準則は、社会主義における諸流派――裏切りについてかたり、さけびたて、これについて警鐘を鳴らす流派と、裏切りを見ようとしない流派――のあいだの現在の闘争と、それ以前にまる数十年にわたっておこなわれてきた闘争とのつながりを考察することを著作家に要求している。カウツキーは、このことをおくびにも出さないし、流派や潮流の問題を提起することさえのぞまない。これまではもろもろの潮流があったが、いまはもう、それがないのだ！　いまある

ものは、従僕根性の持ち主たちがいつでもひけらかしている「権威者」の嚇々たる名声だけである。このさいとくに便利なことは、おたがいに引合いにだしあい、同病あいあわれむという準則にしたがって、おたがいの「罪過」を仲よくかくしあうことである。エリ・マルトフはベルンの講演でさけんだ。ゲード、プレハーノフ、カウツキーが……なのに、いったいどういう日和見主義だというのか！（『ソツィアルーデモクラート』第三六号を見よ）。ゲードのような人々を日和見主義だと非難するについては、なるたけ慎重でなければならない、とアクセリロードは書いた（『ゴーロス』第八六号と第八七号）。自己弁護はすまい、しかも、……ヴァイヤンとゲード、ハインドマンとプレハーノフは……とカウツキーは、ベルリンであいづちをうっている！ 郭公は、雄鶏からほめられたお礼に雄鶏をほめる[100]。

熱心に従僕ぶりを発揮しようとするあまり、カウツキーの書きっぷりは、ハインドマンの手に接吻せんばかりであり、ハインドマンが帝国主義の側に立ったのはつい昨日のことのようにえがいている。ところで、ハインドマンの帝国主義については、同じ『ノイエ・ツァイト』誌上や全世界の数十種にものぼる社会民主主義的新聞で、すでに長年にわたって書かれているのである！ もしカウツキーが彼のあげている人物たちの政治的伝記に、良心的に関心をもっているのであれば、次のことを思いだすべきであろう。すなわち、この伝記のなかには、「一夜」ではなく数十年にわたって帝国主義への寝がえりを準備してきた特徴や事件がなかったかどうか、ヴァイヤンがジョレース派のとりこに、プレハーノフがメンシェヴィキと解党派とのとりこになっていなかったかどうか？ ゲードの流派は、模範的に無気力で才能のない、そして一つとして重要問題について自主的な立場をとる能力のないゲード派の雑誌『ソシアリスム』[101]の誌上で、万人の目のまえで死にかけていたのではないか？ カウツキー（彼をも、まったく正当にハインドマンやプレハーノフと同列のものとして扱っている人々のために、つけくわえておこう）は、ミルラン主義の問題で、またベルンシュタイン主義との闘争の初期に、無定見ぶりを発揮しなかったかどうか？ 等々。

ところが、これらの指導者の伝記を、科学的に研究しようとする関心は、一かけらも見られない。これらの指導者は、現在、自分自身の論拠で自分を弁護しているのか、それとも、日和見主義者やブルジョアの論拠を繰りかえすことで自分を弁護しているのか、ということを考察しようとする試みさえない。これらの指導者のおこないが重大な政治的意義を獲得したのは、彼らが特別に有力である結果なのか、それとも、彼らがほんとうに「有力」な、そして軍

事組織によって支持されている別の潮流、すなわちブルジョア的潮流に合流した結果であるのか？　カウツキーは、この問題の研究にとりかかろうとさえしていない。彼が気にかけていることといえば、大衆に目つぶしをくわせ、権威ある名まえの響きで大衆をつんぼにして、大衆が論争問題をはっきり提起して全面的に検討するのを妨げることだけなのである。*

* カウツキーが、ヴァイヤンとゲード、ハインドマンとプレハーノフを引合いにだしているのは、さらにもう一つの点で特徴的である。レンシュやヘニシュ（日和見主義者はいうまでもないが）のようなおおっぴらな帝国主義者は、自分の政策を正当化するために、ほかならぬハインドマンとプレハーノフを引合いにだしている。そして、彼らには、これらの人物を引合いにだす権利がある。これが、実際に同一の政策であるという点で、彼らは真実をかたっている。ところで、カウツキーは、帝国主義に転向したこの急進派のレンシュとヘニシュのことを軽蔑的にかたっている。カウツキーは、自分がこれらの悪行者とは似ていないこと、この連中には同意していないこと、自分が革命家としてとどまったということ――冗談ではない！――を、神に感謝している。しかし、実際には、カウツキーの立場は同じようなものである。甘ったるい言辞を弄する偽善的な排外主義者カウツキーは、うすのろの排外主義者であるダヴィッドやハイネ、レンシュやヘニシュよりも、はるかに忌まわしいものなのだ。

「四〇〇万の大衆が、ひとにぎりの国会議員の命令で右旋回した」。……

言うことがみなうそである。ドイツの党組織にいたのは、四〇〇万人ではなくて一〇〇万人であった。しかも、この大衆組織（あらゆる組織と同様に）の統一的な意志を表現していたのは、この組織の単一の政治的中心、すなわち、社会主義を裏切った「ひとにぎりの連中」だけであった。意見をもとめられて、投票するように要請されたのは、これらのひとにぎりの人々であった。彼らは、投票することもできたし、論文を書くことなどもできた。ところが、大衆は意見をもとめられなかった。大衆は、投票をゆるされなかったばかりか、分散させられ、追いたてられたが、それはけっしてひとにぎりの国会議員の「命令によって」なされたのではなく、軍当局の命令によってなされた。軍事組織は現にあった。軍事組織には指導者の裏切りはなかった。軍事組織は、「大衆」を個々に召集し、最後通牒をつきつけた、――（君たちの指導者の忠告に従って）軍隊にはいるか、それとも銃殺されるか、と。大衆は組織的に行動することができなかった。というのは、以前につくられていた大衆の組織、すなわち、レギーンら、カウツキーら、シャイデマンらのような「ひとにぎりの連中」に体現された組織は、大衆を裏切ってしまったが、一方、新しい組織

をつくるには、時が必要であり、古い腐敗した、死にぞこないの組織をほうりだす決意が必要だからである。

カウツキーは、自分の敵である左派をたたこうとつとめて、次のようなばかげたことを左派になすりつけている。すなわち、「大衆」は戦争にたいする「回答」として「二四時間以内に」革命をつくりだし、帝国主義に抗して「社会主義」を実施すべきだ、さもないと「大衆」は「無定見と裏切り」をしめすことになろう、というふうに左派が問題を提起している、と。これは、まったくのたわごとであり、これまで無学なブルジョア的小冊子や警察の小冊子の筆者たちが革命家を「たたく」のにもちいてきた手であって、それをいまではカウツキーがひけらかしているのである。カウツキーの敵である左派は、革命が「つくりだす」ことのできるものではなく、客観的に（党や階級の意志によらずに）成熟した危機と歴史の急転換とから成長してくるものであるということ、組織をもたない大衆は統一的な意志を失っていること、中央集権国家の強力な、テロル的な軍事組織との闘争は困難な、長期にわたる仕事だということを、十分によく知っている。大衆は、危機的な瞬間にその指導者に裏切られてなに一つすることができなかった。だが、これらの「ひとにぎり」の指導者は、〔軍事〕公債に反対投票したり、「国内平和」と戦争の正当化に反対する立場を取ったり、自国政府の敗北に賛成する言明をしたり、塹壕（ざんごう）での交歓の宣伝のための国際的な機関をもうけたり、革命的行動へうつる必要を宣伝する非合法文書*を発行したりなどすることが、完全にできたし、またそうしなければならなかったのである。

＊ ついでに言っておくが、非合法文書を発行するためには、階級的憎悪と階級闘争とについて書くことを禁止された答えとして、すべての社会民主主義的新聞をぜがひでも閉鎖しなければならないということはけっしてなかった。『フォルヴェルツ』がやったように、これらのことについて書かないという条件に同意することは、卑劣であり、臆病であった。『フォルヴェルツ』はそうしたことをやったから政治的に死んだのであって、エリ・マルトフがそう言明したのは正しかった。しかし、合法的な新聞が、党の機関紙でも、社会民主主義の新聞でもなく、たんに一部の労働者の技術的必要に奉仕するものにすぎないこと、すなわち、非政治的な新聞であることを声明して、合法新聞を維持することもできよう。戦争を評価する非合法の社会民主主義的文献と、このような評価をおこなわず、いつわりも言わないが、真実については口をつぐむ合法的な労働者文献と——どうしてこれが不可能だというのか？

カウツキーは、ドイツの「左派」がまさにこのような、もっと正確にいえば、これに類した行動を考慮していること、戦時検閲のもとではそういう行動について直接に公然

とかたることができないことを、非常によく知っている。なぜがひでも日和見主義者を擁護しようとねがうあまり、カウツキーは、戦時検閲のかげにかくれ、自分が暴露されることを検閲官がふせいでくれるものと確信して、明白なたわごとを左派になすりつけるという、無類の卑劣行為をやるまでになったのである。

七

カウツキーがあらゆる詭計を弄して、意識的に回避し、それによって、日和見主義者に大きな満足をあたえている重大な科学上および政治上の問題は、第二インタナショナルの最も著名な代表者たちが、どうして社会主義を裏切るようなことができたかということである。

もちろん、この問題をあれこれの権威者の個人的な伝記という観点で提起すべきではない。彼らの将来の伝記作者は、この側面からも問題を検討しなければならないだろうが、社会主義運動が現在関心を寄せているのは、けっしてこの点ではなく、社会排外主義的潮流の歴史的起源、その諸条件、その意義と力を研究することである。（一）社会排外主義はどこから出てきたのか？（二）なにがそれに力をあたえたのか？（三）どのようにしてそれとたたかうべきか？　問題をこのように提起することだけがまじめなものであって、問題を「個人的なこと」にうつすのは、実践的には、詭弁家の単なるごまかし、トリックを意味している。

第一問にこたえるためには、次のことを検討しなければならない。第一に、社会排外主義の思想的＝政治的内容は、社会主義のうちの以前のどれかの潮流とつながりがないかどうか？　第二に、社会主義者を社会排外主義の敵と味方とに分ける今日の区分は、実際的な政治的区分の見地からみて、歴史的に先行している以前の諸区分とどのような関係にあるのか？

われわれの理解する社会排外主義とは、現在の帝国主義戦争で祖国防衛の思想をみとめ、この戦争で社会主義者が「自」国のブルジョアジーおよび政府と同盟することを正当化し、「自」国のブルジョアジーにたいするプロレタリア的＝革命的行動を宣伝し支持するのを拒絶する、等々することである。社会排外主義の基本的な思想的＝政治的内容が日和見主義の基礎と完全に一致することは、まったく明らかである。それは同一の潮流である。一九一四―一九一五年の戦争の情勢のもとでは、日和見主義がほかならぬ社会排外主義を生みだしている。日和見主義の主要な点は、階級協力の思想である。戦争は、この思想を最後までおしすすめ、しかも、この思想の通常の要因や動機に多くの異

常な要因や動機をつけくわえ、ばらばらになっている住民大衆を、特別の威嚇や暴力によってむりやりにブルジョアジーに協力させる。この事情は、当然に、日和見主義の支持者の範囲をふやしており、きのうまでの急進主義者の多くのものがこの陣営に投じてくる理由を完全に説明している。

日和見主義とは、大衆の根本的な利益を労働者のうちのとるにたりない少数者の一時的な利益の犠牲に供することであり、言いかえれば、プロレタリアートの大衆に対抗して労働者の一部とブルジョアジーが同盟することである。戦争は、このような同盟をとくにはっきりと目だつもの、強制的なものにしている。日和見主義は、特権的な労働者の層の比較的に平和で文化的な生存が彼らを「ブルジョア化」し、彼らに自国の資本の利潤のおこぼれをあたえ、零落させられる極貧大衆の災厄や苦悩や革命的気分から彼らを隔絶させたような資本主義発展の一時代の特殊性によって、数十年のあいだに生みだされたものである。帝国主義戦争は、このような事態の直接の継続であり完成である。なぜなら、これは大国民族の特権のため、大国民族が植民地を相互に再分割するため、彼らが他の民族を支配するための戦争だからである。小市民の「上層」あるいは労働者階級の貴族（と官僚）としての自分の特権的な地位をまもり強化すること、――これは、小ブルジョア的＝日和見主義的な希望とそれにふさわしい戦術が当然戦時に継続されることであり、これは、今日の社会帝国主義の経済的基礎である。* そして、もちろん、習慣の力、比較的に「平和」な進化の因襲、民族的偏見、急転換への恐怖とそれへの不信――すべてこうしたことは、日和見主義をもつよめれば、日和見主義との偽善的な臆病な妥協、ほんの一時的なもので、特別の理由と動機だけからきているものだといったふうな妥協をもつよめる補足的な事情の役割を果たした。戦争は、数十年のあいだにつちかわれた日和見主義を変貌させ、それをいっそう高い段階にたかめ、その色合いの数と多様性をふやし、その支持者の隊列を増加させ、多くの新しい詭弁によってこういう支持者の論拠をゆたかにし、日和見主義の本流に多くの新しい小川や流れをいわば合流させたが、しかし本流は消えてなくなりはしなかった。その反対である。

＊ 労働者を分裂させ社会主義からそらせるための「大国的」特権や民族的特権の意義を、帝国主義とブルジョアがいかに高く評価しているかということをしめすいくつかの例をあげよう。イギリスの帝国主義者ルーカスは、その著書『大ローマと大ブリティン』（オックスフォード、一九一二年）のなかで、有色人種がいまのイギリス帝国では完全な権利をもっていないことをみとめて（九六―九七ページ）、次のように

述べている。「わが帝国では、白人労働者が有色人種系の労働者とならんで働く場合、……彼らは同じレベルで働くのではなく、白人はむしろ……有色人種の監督である」（九八ページ）。反社会民主主義者全国同盟の元書記エルヴィン・ベルガーは、その小冊子『開戦後の社会民主党』（一九一五年）のなかで、社会民主主義者の行動を称讃し、彼らは「純労働者党」（四三ページ）になるべきであり、「国際的、ユートピア的」、「革命的」な思想（四四ページ）ぬきの「民族的」な「ドイツ労働者党」（四五ページ）になるべきであると言明している。ドイツの帝国主義者ザルトリウス・フォン・ワルタースハウゼンは、対外投資についての著述（一九〇七年）のなかで、ドイツの社会民主主義者が「民族の福祉」――植民地を略取すること――を無視している点を非難し、イギリス労働者の「現実主義」、たとえば移民〔イギリスへの移民〕反対闘争を称讃している。ドイツの外交家リュードルファーは、世界政策の原理についての著書のなかで、資本が国際化されても、個々の国の資本の激烈な権力闘争、勢力争奪戦、「過半数の株式」（一六一ページ）の争奪戦はすこしもとりのぞかれないという周知の事実を強調して、この激烈な闘争に労働者が引きこまれていることを指摘している（一七五ページ）。この著書の発行日付は一九一三年一〇月である。著者は「資本の利益」（一五七ページ）が現代の戦争の原因であり、「民族的傾向」の問題が社会主義の「眼目」となり（一七六ページ）、政府は、実際にますます民族的になっている（一〇三、一一〇、一七六ページ）。社会民主主義者の国際主義的な示威をなにもおそれるにはおよばない（一七七ページ）ということを、まったくはっきりと述べている。彼は言う。暴力だけではなにもできないから、労働者を民族主義の影響からのがれさせるなら、国際社会主義は勝利するであろう。しかし民族感情が優勢になるならば、国際社会主義は敗北するであろう（一七三―一七四ページ）。

社会排外主義とは、ブルジョア的腫物（はれもの）である日和見主義が、社会主義諸党の内部でいままでどおりの存在をつづけられなくなったほどに成熟したものである。

社会排外主義と日和見主義との最も密接な、切ってもきれないつながりを見たがらない人々は、個々の事例や「特別な場合」をとりだして、これこれの日和見主義者は国際主義者になったとか、これこれの急進主義者は排外主義者になったとか言う。だが、こういうことは、諸潮流の発展の問題では真剣な論拠ではまったくない。第一に、労働運動における排外主義と日和見主義との経済的基盤は同一のものである。すなわち、それは、「自」国の資本の特権のおこぼれを頂戴しているプロレタリアートと小市民の少数の層が、プロレタリア大衆、一般に勤労者と被圧迫者の大衆に対抗してむすぶ同盟である。第二に、この二つの潮流の思想的＝政治的内容は同一のものである。第三に、社会主義者を日和見主義的潮流と革命的潮流とに分ける、第二

インタナショナルの時代（一八八九―一九一四年）に特有な古い区分は、排外主義者と国際主義者とに分ける新しい区分に、だいたい対応している。

右の命題の正しさを納得するためには、社会科学では（科学一般におけると同じように）、大量的な現象が問題となるのであって、個々の事例ではないという準則をおぼえていなければならない。ヨーロッパの一〇ヵ国、すなわち、ドイツ、イギリス、ロシア、イタリア、オランダ、スウェーデン、ブルガリア、スイス、フランス、ベルギーをとってみたまえ。はじめの八ヵ国では、社会主義者の新しい区分（国際主義を基準にした区分）は、古い区分（日和見主義を基準にした区分）に対応している。ドイツでは、日和見主義の要塞であった雑誌『社会主義月刊』（《Sozialistische Monatshefte》）は、排外主義の要塞となった。国際主義の思想は、最左翼から支持されている。イギリスでは、イギリス社会党の約七分の三が国際主義者（最近の計算によれば、国際主義的な決議にたいして賛成六六票、反対八四票）であるが、日和見主義派のブロック（労働党＋フェビアン派＋独立労働党）では、国際主義者は七分の一たらずである。*ロシアでは、日和見主義派の主要な中核である解党派の『ナーシャ・ザリャー』が、排外派の主要な中核となった。プレハーノフとアレクシンスキーは、いっそうはげしく騒ぎたてているが、われわれは、一九一〇―一九一四年の五ヵ年間の経験だけからしても、彼らがロシアの大衆のあいだで系統的な宣伝をやる能力のないことを知っている。ロシアにおける国際主義者の主要な中核は、一九一二年一月に党を再建した先進的労働者の代表者としての「プラウダ派」とロシア社会民主党労働者議員団である。

* 普通は、「独立労働党」だけと「イギリス社会党」とを比較する。これは正しくない。組織形態ではなく、問題の本質をとりあげなければならない。日刊新聞をとってみたまえ。それは二つあった、――一つはイギリス社会党のもの（『デイリー・ヘラルド』）であり、いま一つは、日和見主義派のブロックのもの（『デイリー・シティズン』）である。これらの日刊新聞は、宣伝、扇動および組織の実際の活動を表現している。

イタリアでは、純日和見主義的なビッソラーティ一派の党は、排外主義的になった。国際主義は労働者党によって代表されている。労働者大衆はこの党に味方し、日和見主義者、国会議員、小ブルジョアは排外主義に味方している。イタリアでは、数ヵ月のあいだ自由に選択することができた。そしてその選択は偶然的にではなく、普通のプロレタリアと小ブルジョア層との階級的地位の差異に応じてなされた。

オランダでは、トルルストラの日和見主義党が、排外主

義一般と折れあっている（オランダでは、小ブルジョアも大ブルジョアも、だれよりさきに自分たちを「併呑」できるドイツをとくににくんでいるということに、だまされてはならない）。一貫した、誠実な、熱烈な、確信にみちた国際主義者を出したのは、ホルテルとパンネクークを頭とするマルクス主義党である。スウェーデンでは、日和見主義的な指導者ブランティングは、ドイツの社会主義者が裏切りの非難をうけたのを憤慨しているが、左派の指導者ヘーグルンドは、自分の支持者のあいだにはまさにそれと同じ見方をしている人々がいると、言明している（『ソツィアル－デモクラート』第三六号を見よ）。ブルガリアでは、日和見主義の反対者である「テスニャキ」が、その機関誌『新時代』[101]で、ドイツの社会民主主義者は「醜行をおかした」といって、明文をもって非難している。スイスでは、日和見主義者グロイリヒの支持者が、ドイツの社会民主主義者を弁護する傾きがある（彼らの機関紙、チューリヒの『人民の権利』を見よ）が、これよりはるかに急進的なR・グリムの支持者は、ベルンの新聞（『ベルナー・タークヴァハト』）をドイツの左派の機関紙にした。例外は、一〇ヵ国のうちわずか二ヵ国、すなわちフランスとベルギーだけである。しかもここでも、もともと国際主義者がいないわけではないが、あまりにも（部分的には、十分理解できる原因によって）力が弱く、おさえつけられているのである。ヴァイヤン自身、『ユマニテ』紙上で、自分の読者から国際主義的傾向をもった手紙を受けとったことを告白しながら、そのただの一通の全文をも発表しなかったということを、われわれはわすれないようにしよう！

諸潮流や諸流派をとってみれば、全体として、ヨーロッパ社会主義の日和見主義的な一翼こそ社会主義を裏切り、排外主義へはしったことをみとめないわけにはいかない。公認の諸党における日和見主義的一翼の力や外見上の全能は、どこからきたのか？　カウツキーは、とくに古代ローマとか、それに類似の、実生活にあまり近くない材料が問題になっているときには、歴史的問題を非常にうまく提起することができるのだが、いまや問題が彼自身のことに触れてくると、偽善的に問題がわからないようなふうをしている。だが、問題はこのうえなく明白である。日和見主義派と排外派に巨大な力をあたえたものは、彼らとブルジョアジー、政府、参謀本部との同盟である。わがロシアでは、このことは、非常にしばしばわすれられており、あらゆる俗物的な手習本に書いてあるように、日和見主義は社会主義党の一部分であるとか、これらの党には二つの極端な翼がいつでもあったし、また将来もあるだろうとか、肝要なことは「極端」を避けることだとか、などというふうに問

題を見ている。

実際、日和見主義者が形式的に労働者党に席をおいても、だからといって彼らが――客観的に――ブルジョアジーの政治的分遣隊、ブルジョアジーの影響の伝達者、労働運動内でのブルジョアジーの手先でなくなるわけではけっしてない。ヘロストラトス式に有名な(103)日和見主義者ジュデクムがこの社会的、階級的な真理をまざまざと見せつけたときには、多くの善良な人々は嘆息したものである。フランスの社会主義者とプレハーノフは、ジュデクムを指弾しはじめた、――とはいえ、ヴァンデルヴェルデ、サンバ、プレハーノフは、鏡をのぞいてみさえすれば、民族的な顔だちはややちがうが、ジュデクムそっくりのものを見いだすだろう。カウツキーをほめ、またカウツキーからほめられているドイツの中央委員会(「フォルシュタンド」)は、自分たちがジュデクムの方針には「同意していない」ことを、(ジュデクムの名をあげないで)慎重に、控え目に、丁寧に大急ぎで声明した。

これはこっけいである。なぜなら、実際には、ドイツ社会民主党の実際政策では、決定的な瞬間には一人のジュデクムのほうが、一〇〇人のハーゼやカウツキーよりも強力であること(一つの『ナーシャ・ザリャー』のほうが、それとの分裂をおそれるブリュッセル・ブロックのすべての潮流よりも強力なように)がわかったからである。

なぜか? まさに、ジュデクムの背後には大国のブルジョアジー、政府、参謀本部が立っているからである。彼らは、百方手をつくしてジュデクムの政策を支持し、牢獄や銃殺までもふくめたあらゆる手段でジュデクムの反対者の政策を阻止している。ジュデクムの声は(ヴァンデルヴェルデやサンバやプレハーノフの声と同様に)、何百万部というブルジョア新聞によってひろめられているが、彼の反対者の声は、合法出版物では聞くことができない。なぜなら、この世には戦時検閲というものがあるからだ!

日和見主義が、個々の人間の偶然のできごとでも、過失でも、失策でも、裏切りでもなく、歴史的一時代の社会的産物であることについては、みなの意見が一致している。しかし、すべての人が、この真理の意義をふかく考えているわけではない。日和見主義は合法主義によってつちかわれた。一八八九―一九一四年の時代の労働者党は、ブルジョア的合法性を利用しなければならなかった。だが、危機がやってきたときには、非合法活動に移行することが必要であった(ところで、このような移行をおこなうには、多くの計略と結合した最大の精力と決意をもってするよりほかには、不可能であった)。この移行を妨げるには、ジュデクム一人だけで十分である。なぜなら、歴史哲学的にい

えば、彼のうしろには「旧世界」全体がひかえているからである。実際政治的にいえば、彼ジュデクムは、ブルジョアジーに、ブルジョアジーの階級敵の軍事計画全体を、つねに洩らしてきたし、今後もつねに洩らすだろうからである。

ドイツ社会民主党全体が、ジュデクムの気にいることだけ、あるいはジュデクムにがまんできることだけしかやっていないこと（これはフランス人その他にもあてはまるが）は、事実である。それ以外のことは、合法的にはなに一つやることができないのだ。ドイツ社会民主党のなかでやられている誠実なこと、真に社会主義的なことはすべて、党中央部にそむいて、党中央委員会と党中央機関紙を避けてやられており、組織上の規律に違反してやられており、たとえば本年五月三一日付の『ベルナー・ターグヴァハト』に発表されたドイツの「左派」の檄[108]が匿名であったように、新しい党の新しい匿名の中央機関の名において分派的にやられているのである。レギーン＝ジュデクム＝カウツキー＝ハーゼ＝シャイデマン一派の、古い、腐敗した、国権的自由主義的な党ではなくて、新しい党、真に労働者的な、真に革命的＝社会民主主義的な党が、実際に成長し、つよくなり、組織されつつあるのだ。*

＊　八月四日の歴史的な投票のまえにおこったことは、きわめて特徴的である。公認の党は、大多数で決定し、全員が一体となって賛成投票したと言って、このことにお役所式な偽善のヴェールをかぶせてしまった。だが、シュトレーベルは、雑誌『インテルナツィオナーレ』で、この偽善を暴露して、真相をかたった。社会民主党国会議員団のうちには、かねて用意の最後通牒を、すなわち分派的な、すなわち分裂的な決定をたずさえてやってきた二つのグループがあった。一つのグループ、約三〇名からなる日和見主義のグループは、どんなことがあっても賛成投票することに決めていた。もう一つは、約一五名からなる左翼グループで、反対投票することに——それほどしっかりとではなかったが——決めていた。なんの確固とした立場ももたない「中央派」または「泥沼」派が、日和見主義派に同調して投票したとき、左派は惨敗して……屈服してしまった！　ドイツ社会民主党の「統一」とは、日和見主義派の最後通牒に事実上不可避的に屈服したのをかくそうとする、まったくの偽善である。

だから、日和見主義者のモーニトルが、保守的な『プロシア年報』[109]のなかで、次のように声明したのは、このような深刻な歴史的真実を、うっかり口外したものであった。すなわち、もしいまの社会民主党が右翼化するようなことがあれば、そのときには労働者が党を去ってしまうだろうから、それは日和見主義派（ブルジョアジーと読め）にとって有害であろう、と。日和見主義派（とブルジョアジー）にとって必要なのは、右翼と左翼とを結合し、カウツキー

によって公けに代表されているほかならぬ現在の党であって、そのカウツキーは、この世のすべてのものを流暢な、「まったく、マルクス主義的」な文句で和解させることができるであろう。口さきでは、人民の手まえ、大衆の手まえ、労働者の手まえでは、社会主義と革命精神をとなえ、実際には、ジュデクム主義をとる、すなわち、あらゆる重大な危機の瞬間にブルジョアジーに加担する。われわれは、あらゆる危機、と言う。なぜなら、戦争の場合だけでなく、あらゆる重大な政治的ストライキの場合にも、「封建的」なドイツも、「自由な議会主義的」なイギリスまたはフランスも、あれこれの名のもとに、すぐに戒厳令をしくからである。健全な頭脳としっかりした記憶力の持ち主ならだれでも、このことを疑うことはできない。

　ここから、社会排外主義とどうたたかうか、というさきに提起された問題にたいする解答が出てくる。社会排外主義とは、こういう日和見主義である。すなわち、比較的「平和な」資本主義の長い時代にいちじるしく成熟し、つよくなり、恥知らずになり、思想的＝政治的にいちじるしく明確なものとなり、ブルジョアジーと政府にいちじるしく密接に接近したので、社会民主主義的労働者党の内部にそうした潮流の存在を大目に見ることができないまでになった、そういう日和見主義である。小さな地方都市の文化的な歩道をあるかなければならないときには、薄くて弱い靴底でもまだがまんできるが、山にのぼるには、釘をうった厚い靴底なしにはすまされない。ヨーロッパの社会主義は、狭い民族的なわくでかぎられた、比較的に平和な段階から抜けだした。それは、一九一四―一九一五年の戦争とともに革命的行動の段階にはいった。そして、日和見主義と完全に手を切り、労働者党から日和見主義を駆逐する時機は、無条件に熟したのである。

　もちろん、社会主義の世界的発展の新しい時代が社会主義のまえに提起している任務をこのように規定するからといって、小ブルジョア的＝日和見主義的な党から、労働者的な革命的＝社会民主主義的な党が分離していく過程が、個々の国で、まさにどんな速度で、まさにどんな形態ですすむかが、直接にきまるわけではまだない。だが、このことから、このような分離が避けられないものだということを明瞭に認識し、まさにこの視角から労働者党の全政策の方向を決める必要があるということになる。一九一四―一九一五年の戦争は歴史の非常に大きな転換であるから、日和見主義にたいする態度は、従来どおりであることはできない。過去にあったことを、なかったことにすることはできない。危機の時機に日和見主義者が、労働者党内でブルジョアジーの側にうつった分子の中核となったという事実

は、労働者の意識のうちからも、ブルジョアジーの経験からも、一般に現代の政治的達成のうちからも、抹殺してしまうことはできない。全ヨーロッパ的な規模でいうならば、日和見主義は、戦前にはいわば青年の状態にあった。戦争と同時に、それはすっかり大人になった。そこで、それをふたたび「無邪気な」青年にしようとしても、できるものではない。国会議員、ジャーナリスト、労働運動の役員、特権的な職員、プロレタリアートの若干の層からなるまとまった一社会層が成熟したが、この社会層は自国のブルジョアジーと癒着してしまい、そしてこのブルジョアジーは、この社会層を評価し、「順応させ」ることが、完全にできたのである。歴史の車輪を逆転させることも、停止させることもできるものではない。労働者階級の準備的な、合法的な組織、日和見主義のとりこになった組織から、「権力のための闘争」、ブルジョアジー打倒のための闘争を開始するプロレタリアートの革命的な組織、合法性のわくを出ることができ、かつ日和見主義的裏切りの危険から身をまもることのできる組織へと、臆することなく前進できるし、また前進しなければならない。

ついでにいえば、ゲードやプレハーノフやカウツキーなどというような第二インタナショナルの最も著名な権威者たちをどうしたらよいかという問題によって、自分の意識と労働者の意識をくらませている人々が、どんなにまちがった物の見方をしているかということは、このことから明らかである。実際には、そこにはどういう問題もないのである。もし、これらの人々が新しい任務を理解しないなら、彼らは局外にとどまるか、さもなければ、現在そうであるように、日和見主義派のとりこにとどまることになろう。もしこれらの人々が「とりこ」の身から自分を解放するなら、彼らが革命家の陣営に復帰するのを妨げる政治的妨害にぶつかることはまずあるまい。いずれにしても、もろもろの潮流の闘争の問題や労働運動の時代の交替の問題を個個の人物の役割の問題とおきかえることは、ばかげている。

八

労働者階級の合法的な大衆組織は、第二インタナショナル時代の社会主義諸党の、おそらく最も重要な特徴である。ドイツの党では、こういう大衆組織が最も強力であった。そして、ここでは、一九一四―一九一五年の戦争が最も激しい転換をつくりだし、問題を最も率直に提起した。革命的行動へうつることが、警察による合法的諸組織の解散を意味したことは、明らかである。そして、レギーンからカウツキーまでをふくめた旧来の党は、現在の合法的諸組織を保持するために、プロレタリアートの革命的目的を犠牲

にしてしまった。どんなにこれを否定しようと、事実は現にあるのである。彼らは、現行の警察法によってゆるされている組織という脇豆のあつものと引換えに、プロレタリアートが革命をおこなう権利を、売りわたしたのである。

ドイツの社会民主主義的労働組合の指導者カール・レギーンの小冊子『なぜ労働組合役員はもっと党の内部生活に参加しなければならないか?』(ベルリン、一九一五年)をとってみたまえ。これは、一九一五年一月二七日に著者が、労働組合運動の役員の集会でおこなった報告である。レギーンは、その報告のなかで、一つの興味ぶかい文書を読みあげ、それを小冊子に再録しているが、そうでもしなければ、この文書はけっして戦時検閲を通過しなかったであろう。この文書——いわゆる『ニーダーバルニム地区(ベルリン郊外)の報告者のための資料』——は、ドイツ社会民主党の左派の見解を叙述したものであり、党にたいする左派の抗議である。この文書には、次のように述べられている。革命的社会民主主義者は、一つの要因を予見しなかったし、また予見することができなかった。その要因とは、

「ドイツ社会民主党と労働組合との組織された力全体が、戦争を遂行しつつある政府の味方をし、この力が大衆の革命的エネルギーをおさえつけるためにつかわれたこと」(レギーンの小冊子の三四ページ)である。

これは無条件に真実である。同じ文書の次の主張もまた真実である。

「八月四日の社会民主党議員団の投票とともに、次のことが確定的になったのである。たとえ別の見解が大衆のあいだにふかく根をおろしていたにしても、その見解は、試練をへた党の指導のもとにではなく、党の裁決機関の意志にそむき、党と労働組合の抵抗を克服することによってのみ、その目的を遂げることができたであろう」(同上)。

これは無条件に真実である。

「もし八月四日に社会民主党議員団がその義務を履行していたならば、そのときは、おそらく、組織の外形は破壊されたであろうが、精神、社会主義者取締法の時代に党を鼓舞し、党にあらゆる困難を克服させたあの精神は、のこったであろう」(同)。

レギーンの小冊子には、彼がその報告を聞かせるためにあつめた「指導者」の一団、労働組合の指導者や役員と呼ばれている一団が、これを聞いて大笑いした、ということがしるされている。彼らにとっては、危機の時機には非合法の(社会主義者取締法のもとでのような)革命的組織をつくることができるし、またつくらなければならないとい

う考えが、こっけいなのである。ところで、ブルジョアジーの最も忠実な番犬としてのレギーンは、胸をたたいてこうさけんだ。

「この命題は、大衆による解決をもたらすために組織を破壊するという、明らかに無政府主義的な思想をふくんでいる。これが無政府主義の思想であろうことは、私にはすこしも疑いがない」。

「そのとおり！」――と労働者階級の社会民主主義的諸組織の指導者と自称しているブルジョアジーの従僕どもは、口をそろえてこうさけんだ（同、三七ページ）。

これは、教訓に富んだ光景である。ブルジョア的合法性によってひどく堕落させられ、愚鈍にされてしまって、この連中は、革命闘争を指導するための別個の非合法的な組織が必要だという考えを、理解することさえできないのである。この連中は、警察の許可をえて存在する合法団体がこえることのできない限界であり、危機の時代にこのような団体を指導団体として存続させることが、およそ可能であるかのように、想像するほどになってしまったのである！　ここに日和見主義の生きた弁証法がある。すなわち、合法団体の単なる成長、のろまだが良心的な俗物たちの単なる習慣が、帳簿つけに終始する、危機の瞬間にこれらの良心的な小市民を裏切者、変節者、大衆の革命的エネルギーの圧殺者とならせるにいたったのである。しかも、これは偶然ではない。革命的組織にうつることは、必要である。プロレタリアートの革命的行動の時代が、それを要求するのである。しかしこの移行は、革命的エネルギーの圧殺者である古い指導者たちの頭をのりこえ、古い党の頭をのりこえることによって、古い党を破壊することによって、はじめて可能となる。

だが、反革命的な小市民たちは、当然のことながら、「それは無政府主義だ！」とわめきたてる。それはちょうど、エドワルド・ダヴィッドがカール・リープクネヒトをののしって「無政府主義」だとわめきたてたのと同じである。ドイツで誠実な社会主義者にとどまったのは、日和見主義者から無政府主義だと罵倒されている指導者だけのようである。……

現行の軍隊をとってみよう。これこそ、組織のすぐれた見本の一つである。そして、この組織がすぐれているのは、ただそれが、柔軟であると同時に、幾百万という人々に統一的な意志をあたえることができるからである。この幾百万という人々は、きょうは全国のさまざまな土地のわが家にいるが、あす動員令がくだれば、指定された地点に集合する。きょうは塹壕のなかにひそんでおり、ときには何ヵ月もひそんでいるが、あすはちがった隊形で突撃にすすむ。

きょうは弾丸や榴散弾から身を避けて奇跡をあらわすが、あすは白兵戦で奇跡をあらわす。きょうはその先進部隊が地下に地雷を敷設するが、あすは、飛行士の指示にしたがって地上を数十ヴェルスタも移動する。一つの目的のために、一つの意志によって鼓舞された幾百万という人々が、情勢の変化と闘争の要請に応じて、その交通形態や行動形態を変え、活動の場所や方法を変え、器材や兵器を変える場合、それが組織と呼ばれるのである。

同じことは、ブルジョアジーにたいする労働者階級の闘争にもあてはまる。きょうは、革命的情勢は現存しておらず、大衆を沸きたたせ大衆の積極性をたかめる諸条件はない。きょうは投票用紙が手わたされる、――それは受けとりたまえ。そして牢獄こわさから安楽椅子にしがみつく人人を議会の居心地よい椅子におくりこむためではなく、この投票用紙で自分の敵を打つために、組織に結集するすべを理解したまえ。あすには、投票用紙が取りあげられ、君の手には小銃や、機械技術の最新の成果にしたがって装備されたすばらしい速射砲がわたされる。死と破壊のこの武器を手にとりたまえ。戦争をおそれるセンチメンタルなぐち屋の言うことは聴くな。労働者階級の解放のために火と鉄で絶滅しなければならないものが、この世にはまだあまりにもたくさんのこっている。そして、もし大衆のあいだに怒りと絶望がたかまるなら、もし革命的情勢が現存するなら、新しい組織をつくり、自国の政府と自国のブルジョアジーにむかって、死と破壊のかくも有効な道具をもちいる準備をせよ。

もちろん、それは容易なことではない。それは困難な準備行動を必要とする。それは大きな犠牲を要求する。それは、組織と闘争の新しい形態であって、それは、やはりまなびとられなければならない。しかし科学は、誤りや敗北なしにはえられない。階級闘争のこの形態と選挙への参加との関係は、突撃と機動、行軍あるいは塹壕内での待機との関係と同じである。この闘争形態が歴史のうえで日程にのぼることは、非常にまれである、――そのかわり、その意義と結果は、数十年にもおよぶのである。このような闘争方法を闘争日程にのぼらせることができ、またのぼらせなければならないときの数日は、他の歴史的時代の二〇年にも匹敵する。

……K・カウツキーをK・レギーンと比較してみたまえ。カウツキーはこう書いている、「党が小さかったあいだは、戦争に反対するあらゆる抗議は、勇敢な行為として、宣伝上の効果があった。……ロシアとセルビアの同志たちの驚嘆すべき行動は、一般の賞讃をかちえた。党が強力になればなるほど、党の諸決定の動機のなかでは、

宣伝上の考慮と、実際の結果の考慮とがいっそう多くいりまじるようになり、この両種の動機を同じ程度にかなえることは、それだけいっそう困難になるが、しかも、そのどちらをもやはり軽視するわけにはいかない。だから、われわれが強くなればなるほど、新しい複雑な情勢が生じるたびに、われわれのあいだに意見の相違がそれだけいっそうおこりがちになる」(『国際性と戦争』三〇ページ)。

カウツキーのこの議論がレギーンの議論とちがうところは、ただ偽善的で臆病なことだけである。本質上は、カウツキーは、レギーンが革命的活動を卑劣にも放棄したのを支持し正当化しているのだが、それをこっそりやっていて、明確に意見を表明せず、ほのめかしでお茶をにごし、レギーンにもロシア人の革命的行動にも敬意を表することにとどまっているのである。われわれロシア人が、革命家にたいするこのような態度を見なれているのは、ただ自由主義派のあいだにかぎられる。自由主義派は、革命家の「勇気」をいつでも喜んでみとめるが、それと同時に、自分の超日和見主義的な戦術を断じて放棄しない。自尊心のある革命家は、カウツキーからの「賞讃のことば」をうけいれないで、問題をこのように提起することを憤然としりぞけるであろう。もし革命的情勢が現存しないとすれば、また革命的行動を説くことが義務的でないとすれば、ロシア人とセルビア人の行動はまちがいであり、その戦術は正しくないであろう。レギーンやカウツキーのような騎士たちは、せめて自分の意見をまとめる勇気ぐらいはもつがよいし、それを率直に述べるがよい。

もしこれに反して、ロシアとセルビアの社会主義者の戦術が「賞讃」に値するなら、ドイツやフランスやその他の「強力な」党の、これと反対の戦術を正当化することはゆるされないし、犯罪的である。「実際の結果」という、わざとあいまいにした表現をつかうことによって、カウツキーは、大きな強力な党が、政府のために党組織が解散され、党資金が押収され、党指導者が逮捕されることにおびえたという、簡単な真実をおおいかくした。これは、カウツキーが革命的戦術から生じる好ましくない「実際の結果」の考慮によって、社会主義への裏切りを正当化していることを意味する。これは、マルクス主義の汚瀆ではないか？

ああしなかったらわれわれは逮捕されたであろう、――八月四日に軍事公債に賛成投票した社会民主党議員の一人は、ベルリンの労働者集会でこう言明したと言われている。ところが、労働者たちは彼にこたえてさけんだ、――「ふん、それのどこが悪いんだ？」

ドイツでもフランスでも、もし革命的気分や革命的行動

を準備する必要があるという思想を、労働者大衆に伝えるためにほかの信号がないなら、議員が勇敢な演説のかどで逮捕されるということは、いろいろな国のプロレタリアを革命的活動に統合するためのアピールの叫びとして、有益な役割を果たしたであろう。このような統合は容易ではない。それだけに、上に立って、政治全体を見ている議員にこそ、イニシアティヴをとる義務がますますあったのである。

戦争のときばかりでなく、無条件に、政治情勢が激化するあらゆる場合に、大衆がなんらかの革命的行動をとっているときはなおさらのこと、最も自由なブルジョア国の政府でさえつねに、合法組織の解散、資金の押収、指導者の逮捕、その他それに類した「実際の結果」で威嚇するであろう。では、どうすべきか？　カウツキーがやっているように、これを理由にして日和見主義者を正当化すべきであろうか？　だがそれは、社会民主党が国権的自由主義的な労働者党に転化するのを神聖化することを意味している。

社会主義者にとっては、結論はただ一つしかありえない。「ヨーロッパ」の諸党の純然たる合法主義、合法主義一点ばりは、寿命がつきてしまい、帝国主義以前の段階の資本主義の発展によって、ブルジョア的な労働政策の基礎にかわったのである。そこで、非合法的な基礎、非合法組織、非合法的な社会民主主義活動をつくりだすことによって、これを補わなければならず、しかもそのさい一つの合法的な部署をもあけわたしてはならない。いったいどうしてこれをなしとげるか、——それは経験がしめしてくれるであろう。ただ、この道をとろうとする意欲がありさえすれば、それが必要だという自覚がありさえすればよい。ロシアの革命的社会民主主義者は、一九一二—一九一四年に、この任務が解決できるものであることをしめした。法廷でだれよりもりっぱにふるまい、ツァーリズムによってシベリアにおくられた労働者議員ムラノフは、入閣論的な議会主義（ヘンダソン、サンバ、ヴァンデルヴェルデからジュデクムやシャイデマン——彼らもまったく完全に「入閣能力がある」のだが、ただ控室からさきへは入れてもらえない！——にいたるまでの）のほかに、さらに非合法的で革命的な議会主義があることを、明瞭にしめした。コソフスキーらやポトレソフらは、従僕どもの「ヨーロッパ的」議会主義に有頂天になるか、それともこれと和解するがいい。われわれは、うまずたゆまず労働者にむかって繰りかえすであろう。レギーンら、カウツキーら、シャイデマンらのこのような合法主義、このような社会民主主義は、ただ軽蔑に値するだけだということを。

九

しめくくりをつけよう。

第二インタナショナルの崩壊は、ヨーロッパの大多数の公認の社会民主党が、その信念とをシュトゥットガルトおよびバーゼルでのその厳粛な決議とをひどく裏切ったことに、最もきわだって現われた。しかし、日和見主義の完全な勝利と社会民主党の国権的自由主義的な労働者党への転化とを意味するこの崩壊は、一九世紀末と二〇世紀初頭の第二インタナショナルの歴史的時代全体の結果にすぎない。この時代――西ヨーロッパにおけるブルジョア革命と民族革命との完成から社会主義革命の開始への過渡期――の客観的諸条件が、日和見主義を生みだし、つちかったのである。ヨーロッパのある国々では、この期間に、――だいたい――ほかならぬ日和見主義の線にそって労働運動や社会主義運動の分裂が見られ（イギリス、イタリア、オランダ、ブルガリア、ロシア）、その他の国々では、同じ路線にそって諸潮流のあいだに長期にわたる頑強な闘争が見られる（ドイツ、フランス、ベルギー、スウェーデン、スイス）。大戦争がつくりだした危機は、ヴェールをはぎとり、因習的なものを一掃し、すでにはやくから化膿していた腫物をやぶり、ブルジョアジーの同盟者であるという日和見主義の真の役割をしめした。労働者党からこのような要素を完全に、組織的に切りはなすことが必要となった。帝国主義時代は、革命的プロレタリアートの先進分子と、「自」国の「大国的」地位の特権からのおこぼれを頂戴している、労働者階級の半小市民的な貴族とが、同一の党内に共存することをゆるさない。日和見主義は、「極端」とは無縁な、単一の党のなかの「正当な色合い」であるという古い理論は、いまや、労働者をこのうえなく欺瞞し、労働運動をこのうえなく妨げるものにかわった。労働者大衆をたちまち反発させる公然たる日和見主義は、マルクス主義的なことばをつかって日和見主義的実践を正当化し、多くの詭弁を弄して革命的行動の時期尚早なこと等々を証明しようとするこの中庸の理論ほどには、恐ろしいものでもなく、有害なものでもない。この理論の最も著名な代表者であると同時に、第二インタナショナルの最も著名な権威者であるカウツキーは、第一級の偽善者であり、マルクス主義を汚瀆する仕事にかけての達人であることを、暴露した。一〇〇万の党員をもつドイツの党には、多少とも正直な、自覚した、革命的な社会民主主義者で、ジュデクムやシャイデマンらに熱烈に擁護されているこのような「権威者」に憤然として背をむけないようなものはいなかった。

プロレタリア大衆は、おそらく古い指導者層の約十分の九が彼らを見すててブルジョアジーの側にはしったために、排外主義の跳梁に当面し、戒厳令と戦時検閲の圧迫に当面

して、ばらばらになり、孤立無援となってしまった。だが、戦争によってつくりだされ、ますます拡大し、ますます深刻になりつつある客観的な革命的情勢は、不可避的に革命的気分を生みだし、優秀な、最も自覚したすべてのプロレタリアをきたえあげ、啓発しつつある。大衆の気分のうちでは、一九〇五年初頭のロシアで「ガポン運動」に結びついて起こった急変と同様な、急速な変化が可能であるばかりでなく、ますます起こりそうになっている。一九〇五年の当時には、数ヵ月のうちに、ときには数週間のうちに、おくれたプロレタリア層のなかから、プロレタリアートの革命的前衛のあとに従う一〇〇万の軍隊が成長した。強力な革命運動がこの戦争の直後に、あるいは戦争中に、あるいはその他のときに発展するかどうかを知ることはできないが、いずれにしても、この方向での活動だけが社会主義的活動の名に値するのである。この活動を総括し、方向づけるスローガン、自国の政府と自国のブルジョアジーにたいするプロレタリアートの革命闘争をたすけようとのぞむ人々の統合と団結をたすけるスローガンは、内乱というスローガンである。

ロシアでは、革命的〃社会民主主義的なプロレタリア的分子が小ブルジョア的〃日和見主義的分子から完全に分離してゆく過程は、労働運動の歴史全体によって準備された。この歴史をおしのけて見まいとする人々、「分派行為」に反対する美辞麗句にふけって、いろいろな種類の日和見主義との多年の闘争のなかで形づくられてきたロシアのプロレタリア党の真の形成過程を理解する可能性をみずから捨てる人々は、この分離の仕事に最も大きな妨害をおこなっているのである。現在の戦争に参加しているすべての「大」国のうちで、ロシアだけが最近革命を経験した。この革命がブルジョア的な内容をもちながら、プロレタリアートが決定的な役割を果たしたことは、労働運動内のブルジョア的潮流とプロレタリア的潮流との分裂を生みださないではおかなかった。ロシア社会民主党が大衆的労働運動と結びついた組織として（一八八三—一八九四年のように思想的潮流としてだけでなく）存在してきた約二〇年（一八九四—一九一四年）の全期間にわたって、プロレタリア的〃革命的潮流と小ブルジョア的〃日和見主義的潮流との闘争がおこなわれてきた。一八九四—一九〇二年の時代の「経済主義」は、疑いもなく、あとの種類の潮流であった。経済主義のイデオロギーの多くの論証や特徴——マルクス主義を「ストルーヴェ主義的に」歪曲すること、日和見主義を正当化するために「大衆」を引合いにだすことなど——は、カウツキー、クノー、プレハーノフその他の、今日の卑俗化されたマルクス主義と、驚くほどよく似ている。社

会民主主義者の今日の世代に、今日のカウツキーの相似物として、古い『ラボーチャヤ・ムィスリ』[106]や『ラボーチェ・デーロ』[107]を思いださせることは、大いにやりがいのある仕事であろう。

次の時期（一九〇三―一九〇八年）の「メンシェヴィズム」は、思想上だけでなく、組織上でも、「経済主義」の直接の後継者であった。ロシア革命のとき、メンシェヴィズムは、客観的には自由主義的ブルジョアジーへのプロレタリアートの従属を意味し、小ブルジョア的な日和見主義的傾向をあらわしている戦術をとった。その次の時期（一九〇八―一九一四年）に、メンシェヴィキ的潮流の主流が解党主義を生みだしたときには、この潮流のこういう階級的意義が非常に明白になったので、メンシェヴィズムの最良の代表者たちは『ナーシャ・ザリャー』のグループの政策に、たえず抗議したほどである。ところが、このグループ――この五―六年間、大衆のあいだで労働者階級の革命的マルクス主義的な党に対抗して系統的な活動をやってきたただ一つのグループ――は、一九一四―一九一五年の戦争では社会排外主義のグループとなった！　しかも、これは、専制が生きており、ブルジョア革命はまだ完成にはほど遠く、人口の四三％が大多数の「異」民族を抑圧している国のことである。小ブルジョアジーの一定の層、とくにインテリゲンツィアと、労働貴族のごくわずかの部分とが「自」国の「大国的」地位の特権を「享受する」ことができるような「ヨーロッパ」型の発展は、ロシアにも現われないわけにはいかなかった。

ロシアの労働者階級と労働者的な社会民主党は、その全歴史によって、「国際主義的」な、すなわち真に革命的な、一貫して革命的な戦術をとるように訓練されてきたのである。

追記。この論文がすでに組みおわったときに、ベルンシュタインと共同のカウツキーおよびハーゼの『宣言』が新聞に出た。彼らは、大衆が左翼化しつつあるのを見てとって、いまや左派と「和解」する用意があるのである、――もちろん、ジュデクム派との「和解」を維持することを代償としてのことだが。まことに Mädchen für alle〔淫売婦〕だ！

一九一五年五月後半―六月前半に執筆
一九一五年九月に雑誌『コムニスト』第一―二号（ジュネーヴ）に発表
署名――エヌ・レーニン
雑誌のテキストによって印刷
全集、第五版、第二六巻、二〇九―二六五ページ所収
邦訳全集、第二一巻、二〇一―二六一ページ所収

平和の問題

社会主義者の緊急な綱領としての平和の問題は、またそれに関連して講和条件の問題も、すべての人の関心をひいている。『ベルナー・ターグヴァハト』紙上では、この問題を、ありきたりの、小ブルジョア的＝民族主義的な見地からでなく、真にプロレタリア的な、国際的な見地から提起しようとする試みがみられることについて、われわれは、この新聞に感謝の意を表わさないわけにはいかない。平和をのぞむドイツの社会民主主義者は、ユンカー政府の政策と絶縁（Sich lossagen）すべきであるという同紙第七三号の編集局の意見（『平和の渇望』《Friedenssehnsucht》）はすぐれたものであった。無益にも小ブルジョア的見地から平和の問題を解決しようと試みている「無力な雄弁家のもったいぶり」（Wichtigtuerei machtloser Schönredner）にたいする同志A・P〔アントン・パンネクーク〕の反論（同紙第七三号と第七五号）は、りっぱなものであった。

社会主義者は、この問題をどのように提起しなければならないかを考察してみよう。

平和のスローガンは、特定の講和条件と関連させて提起することもできるし、あるいは特定の平和のための闘争としてでなく、平和一般（Frieden ohne weiters）のための闘争として、なんの条件もつけずに提起することもできる。あとの場合には、それが非社会主義的なスローガンであるばかりでなく、概してまったく無内容、無意味なスローガンであるということは、はっきりしている。キッチナー、ジョッフル、ヒンデンブルク、ニコライ血帝をふくめた、だれでもが、平和一般には無条件に賛成している。なぜなら、彼らのいずれもが戦争の終結をのぞんでいるからである。だれもが「自分」の民族のために帝国主義的な（すなわち略奪的な、他民族抑圧的な）講和条件をだしていることこそ、問題なのである。社会主義と資本主義（帝国主義）との和解の余地のないほどのちがいを、宣伝、扇動のなかで大衆に説明するために、スローガンをかかげるべきであって、まるっきりちがう事柄を「統合」するようなことばによって、二つの敵対的な階級や二つの敵対的な政策を「和解」させるために、そうすべきではない。

さらに、一定の講和条件で、さまざまな国の社会主義者を統合することができるであろうか？　もしできるならば、あらゆる民族に自決権をみとめること、いっさいの「領土併合」すなわち自決権の侵害を否認することが、これらの講和条件に無条件にふくめられなければならない。しかし、自決権をある民族にだけみとめるならば、それは特定の民族の特権を擁護することを意味している。すなわち社会主義者ではなく、民族主義者、帝国主義者であることを意味している。この権利をあらゆる民族にみとめるならば、たとえば、ベルギー一国を特別あつかいにすることはできないし、ヨーロッパにおけるすべての被抑圧民族（イギリスのアイルランド人、ニースのイタリア人、ドイツのデンマーク人など、ロシアの住民の五七％等々）をも、ヨーロッパ以外のすべての被抑圧民族、すなわち全植民地をも、とりあげなければならない。同志A・Pがこれらの民族のことに注意をうながしたことは、きわめて時宜をえたものである。英仏独合わせて約一億五〇〇〇万の人口をもち、この三国が植民地で四億以上の住民を抑圧している!!　帝国主義戦争、すなわち資本家の利益のための戦争の本質は、新しい民族を抑圧するため、植民地の分割のために戦争がおこなわれているということだけではなく、一連の他の民族を抑圧し、地球人口の大部分を抑圧している先進諸国が主として戦争をおこなっているということでもある。

ベルギーの奪取を正当化するか、あるいはそれを大目にみるかしているドイツの社会主義者は、実際には社会民主主義者ではなく、帝国主義者、民族主義者である。なぜなら、彼らはベルギー人、アルサス人、デンマーク人、ポーランド人、アフリカの黒人などを抑圧するドイツ・ブルジョアジーの（さらに部分的にはドイツ労働者の）「権利」を擁護しているからである。彼らは社会主義者ではなく、ドイツ・ブルジョアジーの召使であり、このブルジョアジーが他民族を略奪するのを助けている。しかし、ベルギーを解放し、ベルギーに賠償せよ、という一つの要求だけをかかげているベルギーの社会主義者も、実際にはベルギーのブルジョアジーの要求を擁護しているのである。ベルギーのブルジョアジーは、従前どおり一五〇〇万のコンゴの住民を略奪し、他国における利権と特権を手にいれようとのぞんでいる。ベルギーのブルジョアは約三〇億フランの対外投資をおこなった。この三〇億からあがる利潤をありとあらゆる欺瞞と奸策によってまもること、実際にはこれが「英雄的なベルギー」の「民族的利益」なのである。同じことは、しかもはるかに的確に、ロシア、イギリス、フランス、日本にもあてはまる。

したがって、民族の自由という要求が、いくつかの個々

の国の帝国主義と民族主義をカムフラージするごまかしの文句でないなら、それは、あらゆる民族とあらゆる植民地におしおよぼされなければならない。だが、すべての先進国で一連の革命がなければ、このような要求は明らかに無内容である。そればかりでなく、この要求は、社会主義革命が成功しなければ、実現されえないのである。

これは、ますます広範な大衆が平和を要求しているということを、意味するだろうか？　けっしてそんなことはない。にたいして社会主義者は冷淡な態度をとってもよいという労働者の自覚した前衛のスローガンと、大衆の自然発生的な要求とは別物である。平和の渇望は、この戦争には「解放的」な目的があるとか、「祖国の防衛」とかいうブルジョア的なうそにたいして、そのほか資本家階級による庶民の欺瞞にたいして人々が幻滅を感じはじめていることの、きわめて重要な徴候の一つである。社会主義者は、この徴候に最も大きな注意をはらわなければならない。あらゆる努力をかたむけて、平和のために大衆の気分を利用しなければならない。しかし、どうやって利用するか？　平和のスローガンをみとめて、それを繰りかえすことは、「無力な（さらに悪いことには、偽善的な場合のほうが多いが）雄弁家のもったいぶり」を奨励することであろう。それは、一連の革命によって、今日の政府、今日の支配階級が「教えられ」（もっと正しくいえば、とりのぞかれ）なくとも、これらの政府や支配階級には、民主主義派と労働者階級をいくらかでも満足させる講和を締結する能力があるかのような幻想で、人民を欺瞞することであろう。このような欺瞞ほど有害なものはない。これほど労働者の目をふさぐものはなく、これほど、資本主義と社会主義との矛盾は深いものではないという欺瞞的な思想を労働者に注入するものはなく、これほど資本主義的奴隷制を美化するものはない。いや、われわれは、大衆が平和にたいして期待している幸福は一連の革命がなければ、不可能であるということを大衆に説明してやるために、大衆の平和気分を利用しなければならない。

戦争の終結、諸民族のあいだの平和、略奪と暴力行為の停止――これこそわれわれの理想である。だが、ブルジョア詭弁家だけは、革命的行動を即時に直接的に宣伝することから、このような理想を切りはなして、この理想によって大衆をたぶらかすことができるのである。このような宣伝のための基盤は現にあるのである。このような宣伝をおこなうために、ただ一つの必要なことは、ブルジョアジーの同盟者と、すなわち直接にも（はなはだしい場合には密告までやって）間接にも、革命的活動を妨害している日和見主義派と絶縁することである。

民族自決のスローガンも、同じように、資本主義の帝国主義時代と結びつけて、かかげられなければならない。われわれは現状（Status quo）を支持しないし、大戦争から逃避するという小市民的なユートピアを支持しない。われわれは、帝国主義すなわち資本主義に反対の革命的闘争を支持するものである。* 帝国主義は、一連の他民族を抑圧している民族がこの抑圧を拡大し強固にし、植民地を再分割しようとする志向である。だから、民族自決の問題の核心は、われわれの時代では、抑圧民族の社会主義者の行動にこそあるのである。被抑圧民族の自決権（すなわち自由に分離する権利）をみとめず擁護しない抑圧民族（イギリス、フランス、ドイツ、日本、合衆国その他）の社会主義者は、実際には社会主義者ではなく、排外主義者である。

* 手稿では、さらに次のような文句が消されている。「しかしこういうことをめざす宣伝、真に革命的な宣伝は、民族自決の問題を社会主義的に提起しなければ、不可能である」編注。

このような見地だけが、帝国主義との偽善的でない、徹底した闘争へ導き、このような見地だけが、民族問題を小市民的でなく、プロレタリア的に提起させることになる。このような見地だけが、あらゆる民族抑圧とたたかうという原則を徹底的につらぬき、抑圧民族のプロレタリアと被抑圧民族のプロレタリアとのあいだの不信をとりのぞき、資本主義のもとでのあらゆる小国家一般の自由という小市民的なユートピアをめざさず、社会主義革命をめざす（すなわち完全な民族同権の唯一の実現可能な制度をめざす）連帯的な国際闘争へ導くのである。

われわれの党は、すなわち中央委員会に同調しているロシアの社会民主主義派は、とりもなおさずこの見地に立っている。「他民族を抑圧する民族は自由ではありえない」とプロレタリアートにおしえたマルクスは、とりもなおさずこの見地に立っていた。マルクスはこの見地から、（アイルランドだけでなく）イギリスの労働者の解放運動の利益の見地からイギリスからのアイルランドの分離を要求した。

もし、イギリスの社会主義者がアイルランドの分離の権利を、フランス人がイタリア系ニースの分離の権利を、ドイツ人がエルザス＝ロートリンゲンやデンマーク系シュレズウィヒやポーランドのそれぞれの分離の権利を、ロシア人がポーランド、フィンランド、ウクライナその他の分離の権利を、ポーランド人がウクライナの分離の権利を、それぞれみとめず擁護しないならば、もし、「大」国の、すなわち大きな略奪をおこなっている強国の、すべての社会主義者が植民地にたいしてこの同じ権利を擁護しないなら

ば、それはまさに彼らが実際には帝国主義者であって、社会主義者でないためであり、ただそのためである。そして、みずから抑圧民族に属しながら、被抑圧民族の「自決権」を擁護しないような人に、社会主義政策を実行する能力があるかのような幻想をいだくことは、こっけいである。

社会主義者は偽善的なおしゃべり屋が民主主義的講和の可能性についての空文句や約束で人民をだますのをゆるしておくべきではなく、大衆にむかって、一連の革命がなければ、各国で自国政府にたいして革命的にたたかわなければ、いくらかでも民主主義的な講和は不可能であるということを説明してやらなければならない。社会主義者は、ブルジョア政治屋が民族の自由うんぬんの空文句で人民をだますのをゆるしておくべきではなく、抑圧民族の大衆にむかって、君たちが他民族の抑圧をたすけるならば、他民族の自決権すなわち自由に分離する権利をみとめず擁護しないならば、君たちの解放には望みがないであろうということを、説明してやらなければならない。まさにこれが、平和の問題と民族問題において、あらゆる国に共通な、帝国主義的でない、社会主義的な政策である。たしかに、この政策は多くの場合反逆罪法とは両立しえないものである。しかし、抑圧民族のほとんどすべての社会主義者があのように破廉恥に裏切ったバーゼル決議も、この法律とは両立しえないものである。

社会主義を支持するか、それともショップル氏やヒンデンブルク氏の法律に服従することを支持するか、革命的闘争を支持するか、それとも帝国主義へ平身低頭することを支持するか、どちらかを選択しなければならない。ここには中間の道はない。そしてプロレタリアートに最大の害をもたらしているのは「中間方針」政策の偽善的な(あるいは愚かな)案出者である。

一九一五年七—八月に執筆
署名—レーニン
一九二四年に雑誌『プロレタールスカヤ・レヴォリューツィア』第五号にはじめて発表
手稿によって印刷
全集、第五版、第二六巻、三〇一—三〇六ページ所収
邦訳全集、第二一巻、二九五—三〇〇ページ所収

社会主義と戦争

（戦争にたいするロシア社会民主労働党の態度）（一〇八）

第一版（国外版）の序文

戦争は、もう一年もつづいている。わが党はこの戦争にたいする態度を、戦争がはじまるとすぐ、中央委員会の宣言のなかではっきりきめた。この宣言は、一九一四年九月に起草され（中央委員会のメンバーとわが党のロシア国内での責任ある代表者たちの手もとにおくって、彼らの同意を得たうえで）一九一四年一一月一日にわが党の中央機関紙『ソツィアル－デモクラート』第三三号に掲載された。その後、われわれの原則と戦術をいっそう正確に述べているベルン会議の諸決議が、同紙第四〇号（一九一五年三月二九日）に掲載された。

現在ロシアでは、大衆のあいだに革命的な気分が明らかに成長している。他の国々では、公認の社会民主諸党の大多数が、自国の政府と自国のブルジョアジーの味方になってプロレタリアートの革命的な志向をおさえつけているにもかかわらず、同じような現象の徴候が、いたるところにみとめられる。こういう事態は、戦争にたいする社会民主主義者の戦術をまとめた小冊子の発行を、とくに緊急なものにしている。われわれは、右にあげた党の諸文書を全文再録し、それに短い解説をつけて、文献のなかや党の会合で述べられた、ブルジョア的戦術とプロレタリア的戦術との主要な論拠を全部検討するようつとめるつもりである。

第二版の序文

この小冊子は、一九一五年の夏、ツィンメルヴァルド会議そのもののまえに、書かれた。それは、ドイツ語とフランス語でも出され、またノールウェー社会民主主義青年〔同盟〕の機関紙にノールウェー語で全文転載された。この小冊子のドイツ語版は、非合法にドイツ国内に――ベルリン、ライプチヒ、ブレーメン、その他の都市にもちこまれ、そこでツィンメルヴァルド左派の支持者やカール・リープクネヒトのグループの手で非合法にひろめられた。フ

ランス語版は、パリで非合法に印刷され、フランスのツィンメルヴァルド派の手で同地にひろめられた。ロシア語版は非常な少部数しかロシア国内にはいらなかった。そこで、モスクワでは、労働者たちはこれを筆写したものである。

われわれは、いまこの小冊子を記録文書として全文再刊する。読者は、この小冊子が一九一五年八月に書かれたものであることを、つねに念頭におかなければならない。とくに、ロシアについて述べている箇所では、このことをわすれてはならない。当時ロシアは、まだ帝制ロシアであり、ロマノフのロシアだったのである。

一九一八年版の小冊子に発表
小冊子のテキストによって印刷

第一章　社会主義の諸原則と一九一四—一九一五年の戦争

戦争にたいする社会主義者の態度

社会主義者は、諸国民間の戦争を野蛮で残忍なものとして、いつも非難してきた。しかし、戦争にたいするわれわれの態度は、ブルジョア平和主義者（平和の友、平和の説教者）や無政府主義者の態度とは原則的にちがっている。われわれとブルジョア平和主義者とのちがいは、戦争が国内での階級闘争と不可避的な関連をもっていること、階級をなくし社会主義をうちたてずには戦争をなくすことはできないことを、われわれが理解していることであり、さらに、内乱、つまり抑圧階級にたいする被抑圧階級の戦争、奴隷主にたいする奴隷の戦争、地主にたいする農奴的農民の戦争、ブルジョアジーにたいする賃金労働者の戦争の正当性、進歩性、必然性を、われわれが完全にみとめていることである。われわれマルクス主義者が平和主義者とも、また無政府主義者ともちがうところは、それぞれの戦争を個別的に歴史的に（マルクスの弁証法的唯物論の見地から）研究する必要を、われわれがみとめることである。ど

の戦争にもかかならず惨禍と残虐行為と災厄と苦痛が結びついているにもかかわらず、歴史上には進歩的であった戦争、すなわち、とくに有害で反動的な制度（たとえば専制とか農奴制）やヨーロッパで最も野蛮な専制政治（トルコとロシアの専制政治）を破壊するのをたすけて、人類の発展に貢献した戦争が、いくどかあった。だから現在のこの戦争についても、それがどんな歴史的な特質をもっているかをしらべてみる必要がある。

近代の戦争の歴史的な諸類型

フランス大革命は人類の歴史に新しい時代をひらいた。そのときからパリ・コミューンまで、つまり一七八九年から一八七一年までは、戦争の一つの型として、ブルジョア進歩派の民族解放戦争があった。いいかえれば、これらの戦争のおもな内容と歴史的意義は、絶対主義と封建制を打倒し、それらを掘りくずし、外国の圧制を除去することにあった。だから、それらは進歩的な戦争であって、すべてのまじめな、革命的な民主主義者ばかりか、さらに社会主義者もみな、そういう戦争のさいには、封建制、絶対主義、他民族抑圧の最も危険な支柱をくつがえすか、掘りくずすのをたすけた国（つまりブルジョアジー）の勝利に、つねに共感を寄せたのである。たとえば、フランスの革命戦争では、フランス人が他国の土地を略奪し征服した要素もあったが、しかし、古い、農奴制的なヨーロッパ全体の封建制と絶対主義を破壊しゆるがせたそれらの戦争の基本的な歴史的意義は、そのためにけっして変わりはしない。フランス＝プロシア戦争では、ドイツはフランスを略奪したが、しかし、そのために、封建的な細分状態とロシアのツァーリおよびナポレオン三世という二人の専制君主による抑圧とから、数千万のドイツ国民を解放した、この戦争の基本的な歴史的意義は変わりはしない。

攻撃戦争と防衛戦争との相違

一七八九―一八七一年の時代は、深い痕跡と革命的な思い出をのこした。封建制、絶対主義、他の民族の抑圧が打倒されるまで、社会主義のためのプロレタリア闘争の発展は、問題にさえなりえなかったのである。社会主義者が、このような時代の戦争にたいして「防衛」戦争の正当性をうんぬんした場合、つねに念頭においていたのは、とりもなおさずこういう目的であった。つまり中世的制度と農奴制に反対する革命であったのである。社会主義者は、つねに「防衛」戦争をこういう意味の「正義」の戦争と解した（W・リープクネヒトは、かりにそのように表現した）。社会主義者は、ただこの意味でのみ「祖国防衛」あるいは

「防衛」戦争の適法性、進歩性、正当性をみとめてきたし、いまもみとめているのである。たとえば、あすにでも、モロッコがフランスにたいし、インドがイギリスにたいし、ペルシアあるいは中国がロシアなどにたいして、宣戦を布告するならば、それは、だれがさきに攻撃したかにはかかわりなしに、「正義」の「防衛」戦争であろう。そしてどの社会主義者も、抑圧者的、奴隷主的、強盗的な「大」国にたいする被抑圧的、従属的な、そして完全な権利をもたない国家の勝利に同情するであろう。

だが、奴隷をいっそう「公正」に再分配するために、一〇〇人の奴隷をもつ奴隷主が二〇〇人の奴隷をもつ奴隷主と戦っていると想像したまえ。「防衛」戦争あるいは「祖国防衛」の概念を、このようなケースに適用することは、明らかに歴史的偽りであり、実際には狡猾な奴隷主が庶民、小市民、無知蒙昧な人間をまったく欺瞞することであろう。今日の帝国主義的ブルジョアジーは、奴隷制を強固にし強化するための奴隷主相互のいまの戦争においては、「民族的」イデオロギーや祖国防衛の概念によって、人民をまさにこのように欺瞞しているのである。

今日の戦争は帝国主義戦争である

ほとんどすべての人が、今日の戦争を帝国主義戦争とみとめているが、しかし多くの場合、この概念をゆがめ、あるいはそれを交戦国の一方の側に適用し、あるいは、この戦争がブルジョア的＝進歩的な、民族解放的な性格をもつ可能性をやはりこっそりひそませているのである。帝国主義は、二〇世紀にはじめて達成された資本主義の最高の発展段階である。資本主義は、民族国家の形成なしには封建制を打倒することはできなかったが、いまやその古い民族国家が資本主義にとって窮屈なものになった。資本主義は集積をいちじるしく発展させたので、多くの産業部門がシンジケート、トラスト、億万長者の資本家団体に掌握され、ほとんど地球全体が、あるいは金融的搾取の無数の糸で他国をがんじがらめにすることによって、あるいは植民地の形で、これらの「資本王」のあいだに分割されてしまった。自由貿易と自由競争には、独占への志向、投資地域、原料資源地などを略取しようとする志向がとってかわった。資本主義は封建制との闘争においては民族の解放者であったが、帝国主義的資本主義は、民族の解放者から民族の最大の抑圧者となった。資本主義は進歩的なものから反動的なものになった。資本主義が生産力を大いに発展させたため、いまや人類は、社会主義へ移行するか、それとも植民地によって、独占によって、特権によって、あらゆる種類の民族的抑圧によって資本主義を人為的に存続させるための

「大」国間の武力闘争を何年間も、それどころか数十年間も経験するか、その選択に迫られている。

奴隷制を存続させ強化するための
巨大奴隷主のあいだの戦争

帝国主義の意義を明らかにするために、いわゆる「大」国（すなわち大がかりな略奪に成功している国々）による世界の分割についての正確なデータを引用しよう〔次ページの表〕。

これを見て明らかなように、一七八九―一八七一年にたいてい他の民族の先頭に立って自由のためにたたかった民族は、いまや一八七六年以後には、高度に発展し「爛熟」した資本主義を基盤として、全地球の人口と民族の大多数の抑圧者、圧制者に変わった。一八七六年から一九一四年まで、六「大」国は二五〇〇万平方キロメートル、すなわち全ヨーロッパより二倍半も大きい面積を略奪した！　六大国は五億以上（五億二三〇〇万）の植民地住民を奴隷化している。「大」国の住民四人あたり「大国」の植民地住民五人の割合である。そして周知のように、植民地住民は砲火と銃剣によって征服されたものであって、植民地では住民は残酷にとりあつかわれ、数かぎりない方法（資本の輸出、利権その他、商品販売のごまかし、「支配」民族当局への従属など）によって搾取されている。英仏のブルジョアジーは、諸民族とベルギーの自由のために戦争をしているといって、人民をあざむいている。だが、実際には彼らは、自分が法外にかすめとった植民地を維持するために戦争をしているのである。ドイツ帝国主義者は、イギリス人とフランス人がその植民地を「公平」にドイツ帝国主義者と分けるなら、即座にベルギーその他を解放するであろう。この戦争では植民地の運命が大陸の戦争によって決定されようとしていること、これが、現情勢の特徴である。ブルジョア的正義と民族の自由（あるいは民族の生存権）の見地からみれば、ドイツは英仏にたいして無条件に正しいであろう。なぜなら、ドイツは植民地の「分配にもれ」、その敵はドイツよりもくらべものにならないほど多くの民族を抑圧しており、ドイツの同盟国オーストリアでは抑圧下のスラヴ人は、真正の「民族の牢獄」ツァーリ・ロシアにおけるよりも、疑いもなく、大きな自由を享受しているからである。だが、ドイツ自身も、民族の解放のために戦っているのではなく、その抑圧のために戦っている。いっそう年とった飽食暖衣の強盗を略奪しようとするいっそう若くて強い強盗（ドイツ）を助けることは、社会主義者の仕事ではない。社会主義者は強盗同士の闘争を利用して、彼らの全部を打ちたおさなければならない。そうするためには、

奴隷所有者的「大」国による世界の分割（単位 面積 100万平方キロメートル／人口 100万人）

「大」国名	植民地				本国		合計	
	1876年		1914年		1914年			
	面積	人口	面積	人口	面積	人口	面積	人口
イギリス	22.5	251.9	33.5	393.5	0.3	46.5	33.8	440.0
ロシア	17.0	15.9	17.4	33.2	5.4	136.2	22.8	169.4
フランス	0.9	6.0	10.6	55.5	0.5	39.6	11.1	95.1
ドイツ	—	—	2.9	12.3	0.5	64.9	3.4	77.2
日本	—	—	0.3	19.2	0.4	53.0	0.7	72.2
アメリカ合衆国	—	—	0.3	9.7	9.4	97.0	9.7	106.7
六「大」国計	40.4	273.8	65.0	523.4	16.5	437.2	81.5	960.6
「大」国でない諸国家（ベルギー，オランダ，その他）に属する植民地			9.9	45.3			9.9	45.3
「半植民地」三国（トルコ，中国，ペルシア）							14.5	361.2
総計							105.9	1,367.1
その他の国家と国							28.0	289.9
全世界（極地をのぞく）							133.9	1,657.0

社会主義者はこの戦争が三重の意味で奴隷制強化のための奴隷主の戦争であるという真実を、人民にまずなによりもかたらなければならない。第一に、これは植民地をいっそう「公平」に分配し、そのあとさらにいっそう「仲よく」搾取することによって、植民地の奴隷制を強化するための戦争である。第二に、これは「大」国自身内の他の民族にたいする抑圧を強化するための戦争である。なぜなら、オーストリアも、ロシアも、戦争によってこのような抑圧を強め、このような抑圧によってのみささえられている（ロシアがオーストリアにくらべ、はるかに多く、はるかに悪く）からである。第三に、これは賃金奴隷制を強化し延引させるための戦争である。なぜなら、プロレタリアートは分裂させられ、おさえつけられているのに、資本家は、戦争で金をもうけ、民族的偏見をあおりたて、反動——あらゆる国で、それどころか最も自由な共和国でも、頭をもたげた——を強

化することによって得をしているからである。

「戦争は別の」（すなわち暴力的な）
「手段による政治の継続である」

この有名な格言は、軍事問題についての最も深遠な著述家の一人であるクラウゼヴィッツの言ったものである。マルクス主義者は、つねに正当にもこの命題を、当該戦争の意義を考察するさいの理論的基礎とみなしてきた。マルクスとエンゲルスは、つねにさまざまな戦争をまさにこの見地から考察した。

この見地を今日の戦争に適用してみたまえ。そうすれば、イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、オーストリア、ロシア、いずれの国の政府も支配階級も植民地の略奪、他民族の抑圧、労働運動の弾圧の政治をおこなってきたことがわかるであろう。とりもなおさずこのような政治が、ただこのような政治だけが、今日の戦争において継続されているのである。とくにオーストリアでもロシアでも、平時、戦時をとわず、その政治は、民族を解放することではなく、奴隷化することである。これに反して中国、ペルシア、インドその他の従属国では、この数十年のあいだに、幾千万幾億の人々を政治生活に目ざめさせ、彼らを反動的な「大」国の抑圧から解放しようとする政治が見られる。このような歴史的基盤に立つ戦争は、今日でもブルジョア的＝進歩的、民族解放的なものでありうる。

「大」国とその国内の基本的な階級の政治が今日の戦争において継続されているという見地から、この戦争を一瞥しさえすれば、この戦争における「祖国防衛」という考えを正当化することができるかのようにいう意見のはなはだしい反歴史性、偽り、欺瞞性は、即座にわかるであろう。

ベルギーの例

三国協商（いまでは四国協商）の社会排外派（ロシアではプレハーノフ一派）は、ベルギーの例を引合いにだすことを、最も好んでいる。しかし、この例は彼らに不利なことをものがたっている。ドイツ帝国主義者は図々しくもベルギーの中立を侵犯したが、これは、必要な場合にあらゆる交戦国家が、つねにどこでもやってきたことと同じである。国際条約を順守することに関心をもつすべての国家が、ベルギーの解放と同国への賠償を要求して、ドイツに宣戦を布告したと仮定しよう。この場合、もちろん、社会主義者はドイツの敵の側に同情するであろう。だが、「三国（四国）協商」は、ベルギーをめぐって戦争しているのではないということこそ、肝心な点である。これはよく知られていることであって、偽善者

だけはこれをかくそうとしている。イギリスはドイツの植民地とトルコを、ロシアはガリチアとトルコをそれぞれ略奪しようとしており、フランスはエルザス＝ロートリンゲン、それどころかライン左岸をも獲得しようとしている。またフランスは、イタリアとは獲物（アルバニア、小アジア）の分割条約を結んでおり、ブルガリア、ルーマニアとは、やはり獲物の分割をめぐって取引をすすめている。今日の政府の今日の戦争の基盤のうえでは、オーストリアあるいはトルコ等々の圧殺をたすける以外には、ベルギーをたすけることはできない！「祖国防衛」はここになんの関係があるのか？？　これこそ帝国主義戦争、すなわち歴史的に寿命のつきた反動的なブルジョア諸政府のあいだで、他民族の抑圧のためにおこなわれる戦争の特殊性があるのである。この戦争へ参加することを正当化する人は、民族の帝国主義的抑圧を永続させようとするものである。社会革命をめざす闘争のために政府の今日の苦境を利用するよう説く者は、ほんとうにすべての民族を、ほんとうの自由を擁護するものであって、このような自由は社会主義のもとではじめて実現されることができる。

ロシアはなんのために戦っているか

ロシアでは、最新の型の資本主義的帝国主義はペルシア、満州、モンゴルにたいするツァーリズムの政策のなかに完全に本領をあらわしたが、一般にロシアでは軍事的、封建的な帝国主義が優勢である。国の住民の大多数がロシアほど抑圧されているところは、世界中どこにもない。大ロシア人は人口のわずか四三％、すなわち半分以下をしめているにすぎないのに、そののこりのすべては「異民族」として無権利である。ロシアの人口一億七〇〇〇万人のうち約一億人は抑圧されていて無権利である。ツァーリズムはガリチアを略取し、ウクライナ人の自由をすっかり窒息させ、アルメニア、コンスタンチノープルなどを略取するために、戦争をおこなっている。ツァーリズムは、この戦争を国内の不満の増大から注意をそらし、革命運動の成長を弾圧する手段とみなしている。いまロシアでは大ロシア人二人あたり無権利な「異民族」二人ないし三人の割合である。ツァーリズムは、ロシアに抑圧されている民族の数を、戦争によってふやし、そういう民族の抑圧を強化し、それによって大ロシア人自身の自由獲得闘争をも掘りくずそうとつとめている。他の民族を抑圧し略奪する可能性は、経済的停滞を強める。なぜなら、しばしば「異民族」の半封建的な搾取が、生産力の発展にかわって、所得の源泉となるからである。こうしてロシア側からみて、この戦争の特徴ははなはだしい反動性と反解放的な性格とである。

社会排外主義とはなにか？

社会排外主義とは、この戦争における「祖国防衛」の考えを擁護することである。さらにこの考えからは、戦時には階級闘争を放棄し、軍事公債に賛成投票するなどという結論が出てくるのである。実際に社会排外派は反プロレタリア的なブルジョア政策をとっている。なぜなら、実際に彼らが擁護しているものは、他の民族の抑圧とたたかうという意味の「祖国の防衛」ではなく、植民地を略奪し、他の民族を抑圧するあれこれの「大」国の「権利」だからである。社会排外派は、戦争が民族の自由と生存を擁護するためにおこなわれているかのようにいうブルジョア的な人民欺瞞を繰りかえし、そうすることによって、プロレタリアートに敵対してブルジョアジー側に寝がえっている。一方の交戦国グループの政府とブルジョアジーを正当化し美化している者も、カウツキーのように、すべての交戦国の社会主義者の一様な「祖国防衛」権をみとめている者も、社会排外派の仲間である。社会排外主義は、実際には「自国」の（あるいは一般にあらゆる）帝国主義的ブルジョアジーの特権、優先権、略奪、暴力行為を擁護するものであるから、あらゆる社会主義的信念とバーゼルの国際社会主義者大会の決定とを完全に裏切るものである。

バーゼル宣言

一九一二年にバーゼルで満場一致で採択された戦争についての宣言は、一九一四年に勃発したイギリスとドイツ、および両国の今日の同盟国のあいだの戦争を予想している。宣言は大国の帝国主義的、略奪的政策を基盤として「資本家の利潤や王朝の利益のために」おこなわれるような戦争を、どんな国益によっても正当化することはできない、と率直に声明している。宣言は戦争が「諸国政府にとって」（すべて例外なしの）危険なものであることを率直に声明し、諸国政府が「プロレタリア革命」をおそれていることを指摘し、一八七一年のコミューンと一九〇五年の一〇―一二月の例を、すなわち革命と内戦の例を、きわめて明確にあげている。こうして、バーゼル宣言は、自国の政府に反対して国際的な規模でおこなわれる労働者の革命闘争の戦術、プロレタリア革命の戦術を、まさに今日の戦争のために策定しているのである。バーゼル宣言は、戦争がやってくる場合には、社会主義者は戦争によって生みだされる「経済危機と政治危機」を利用して「資本主義の没落を促進」しなければならないという、すなわち戦争によって生みだされた政府の苦境と大衆の憤りを、社会主義革命のために利用しなければならないというシュトゥットガルトの

決議のことばを繰りかえしている。

社会排外派の政策、彼らがブルジョア的解放戦争の見地から戦争を正当化していること、「祖国防衛」を容認していること、軍事公債に賛成投票したこと、（ブルジョア）内閣入りをしたこと等々は、社会主義をまっこうから裏切るものであって、このような裏切りは、ヨーロッパの大多数の党の内部で日和見主義と民族主義的自由主義的な労働政策が勝利したためである。

マルクスとエンゲルスを偽って引合いにだすこと

ロシアの社会排外派（プレハーノフを先頭とする）は一八七〇年の戦争におけるマルクスの戦術を引合いにだしている。ドイツの社会排外派（レンシュ・ダヴィッド一派の型の）は、露仏連合相手の戦争の場合にはドイツの社会主義者は祖国を防衛する義務があるという、一八九一年のエンゲルスの声明を引合いにだしている。最後に、国際排外派を調停し正当化しようとのぞんでいるカウツキーの型の社会排外派は、マルクスとエンゲルスが戦争を非難したにもかかわらず、つねに一八五四—一八五五年から一八七〇—一八七一年および一八七六—一八七七年まで、とにかく戦争が勃発した以上、交戦国のどちら側かに味方したということを、引合いにだしている。

すべてこういう引用は、ブルジョアジーと日和見主義者のご機嫌とりにマルクスとエンゲルスの見解をとんでもなく歪曲したものであって、それは、ギョーム一派の無政府主義者の書物が、無政府主義を正当化するために、マルクスとエンゲルスの見解を歪曲しているのと同じである。一八七〇—一八七一年の戦争は、ナポレオン三世が敗北するまでは、ドイツ側からみて歴史的に進歩的なものであった。というのは、ナポレオン三世はツァーリと共同で、ドイツに封建的割拠状態を維持しておき、長期にわたってドイツを抑圧していたからである。だが、戦争がフランスを略奪（エルザス、ロートリンゲンの併合）することへ移っていくやいなや、マルクスとエンゲルスは、断固としてドイツ人を非難した。しかもこの戦争のはじめでは、マルクスとエンゲルスは、ベーベルとリープクネヒトが軍事公債にたいする賛成投票を拒絶したことを是認しており、ブルジョアジーと合流せず、プロレタリアートの独自の階級的利益をまもるよう社会民主主義者に忠告した。このブルジョア的＝進歩的な民族解放戦争の評価を、今日の帝国主義戦争に引きうつすことは、真理を愚弄するものである。同じことは、一八五四—一八五五年の戦争、一九世紀のすべての戦争にいっそうよくあてはまる。一九世紀には、近代帝国

主義も、社会主義の成熟した客観的条件もなく、すべての交戦国に大衆的な社会主義政党もなかった、すなわちバーゼル宣言が大国間の戦争と結びつけて「プロレタリア革命」の戦術を引きだしたときの条件そのものがなかったのである。

ブルジョアジーが進歩的であった時代の戦争にたいするマルクスの態度をいま引合いにだしながら、「労働者は祖国をもたない」というマルクスのことば、すなわち反動的な、寿命のつきたブルジョアジーの時代、社会主義革命の時代にこそあてはまることばを忘れる者は、マルクスを図々しく歪曲し、社会主義的見地をブルジョア的見地とすりかえているのである。

第二インタナショナルの崩壊

全世界の社会主義者は、一九一二年に、バーゼルでおごそかにこう声明した。きたるべきヨーロッパ戦争を、われわれは、すべての政府の「犯罪的」で極反動的な行為であると考える、このような行為は、かならずや資本主義にたいする革命を呼びおこし、その崩壊をはやめるにちがいない、と。戦争は起こり、危機がやってきた。大多数の社会民主諸党は、自国の政府と自国のブルジョアジーの側に立って、革命的戦術のかわりに反動的戦術をとった。社会主義にたいするこの裏切りは、第二インタナショナル（一八八九—一九一四年）の崩壊を意味するものであって、われわれは、この崩壊がなににによってひきおこされたか、なにが社会排外主義を生みだしたか、またなにがそれに力をあたえたかを、はっきり理解しなければならない。

社会排外主義は完成された日和見主義である

第二インタナショナルの全期間を通じて、社会民主諸党の内部では、いたるところで、革命的な一翼と日和見主義的な一翼とのあいだに闘争がおこなわれた。いくつかの国ではこの線にそって分裂が起こった（イギリス、イタリア、オランダ、ブルガリア）。日和見主義が労働運動内でのブルジョア政策をあらわすものであり、小ブルジョアジーの利益をあらわし、またプロレタリア大衆の利益、被抑圧者大衆の利益に反対して、ごく一部のブルジョア化した労働者と「自国の」ブルジョアジーとの同盟の利益をあらわすものであることを疑ったマルクス主義者は、一人もいなかった。

一九世紀末の客観的諸条件は、日和見主義をとくにつよめ、ブルジョア的合法性の利用ということをその合法性への隷従に変え、労働者階級の官僚と貴族の小さな層をつく

りだし、社会民主諸党の隊列のなかに多数の小ブルジョア的「同伴者」を引きいれた。

戦争は、日和見主義を社会排外主義に変え、日和見主義者とブルジョアジーとの秘密の同盟を公然たる同盟に変えて、この発展を促進した。そのさい、軍当局はいたるところで戒厳令をしき、労働者大衆に猿ぐつわをかませたが、労働者大衆の古い指導者たちのほとんど全員が、ブルジョアジーの側に寝がえってしまった。

日和見主義と社会排外主義との経済的基礎は同一のものである。すなわち、労働者と小ブルジョアジーのごく少数の特権層の利益がそれであって、彼らは自分たちの特権的地位をまもり、また「自」国のブルジョアジーがあるいは他民族を略奪することにより、あるいはその大国としての有利な地位を利用することによって手に入れた利潤のおこぼれをもらう自分たちの「権利」をまもっているのである。

日和見主義と社会排外主義との思想的＝政治的内容は同一のものである。すなわち、階級闘争のかわりに階級的に協力すること、革命的闘争手段を放棄すること、「自国」政府の困難を革命のために利用するかわりに、困難な状態にある「自国」政府を援助すること、これである。もし注意を個々の個人(たとえ最も権威ある人物にせよ)にむけないで、ヨーロッパのすべての国を全体としてとりあげるなら、まさしく日和見主義的潮流こそ社会排外主義の主要な堡塁となったこと、またほとんどどこでも革命派の陣営から、社会排外主義にたいして多少とも、首尾一貫した抗議の声があがっていることがわかるであろう。また、たとえば、一九〇七年のシュトゥットガルトの国際社会主義者大会での各流派のグループ別分類をとってみるなら、国際的マルクス主義派が帝国主義に反対していたのにたいして、国際的日和見主義派は当時すでに帝国主義に味方していたことが、わかるであろう。

日和見主義派との統一は、労働者が「自」国のブルジョアジーと同盟することであり、革命的な国際労働者階級を分裂させることとである

過ぎさった戦前の時代には、日和見主義はしばしば「偏向」、「極端」と見なされてはいても、とにかく社会民主諸党の正当な構成部分と考えられていた。戦争は、将来そのことが不可能なことをしめした。日和見主義は「成熟し」、労働運動内のブルジョアジーの派遣者としてのその役割を行きつくところまでおしすすめた。日和見主義派との統一は、まったくの偽善となった。その例は、ドイツ社会民主党に見られる。日和見主義派は、重要な場合にはいつでも

(たとえば八月四日の投票のさい)、最後通牒を手にして登場し、ブルジョアジーとのその数かぎりない結びつきや労働組合の指導部内で多数を占めていることなどを利用して、その最後通牒を実行にうつす。今日では、日和見主義派とその統一とは、実際には、労働者階級を「自」国のブルジョアジーに従属させること、他民族を抑圧し大国の特権をもとめてたたかうために、彼らと同盟をむすぶことを意味し、すべての国々の革命的プロレタリアートを分裂させることを意味する。

多くの組織を牛耳っている日和見主義派との闘争が、個個の場合にどんなに困難であろうと、また労働者党から日和見主義派を清掃する過程が個々の国でどんなに独特なものであろうと、この過程は避けられないものであり、また実り多いものである。改良主義的社会主義は死にかかっている。復活しつつある社会主義は、フランスの社会主義者ポール・ゴレの正しい表現を借りれば「革命的、非妥協的な、蜂起的なものとなるであろう」。

「カウツキー主義」

第二インタナショナルの最大の権威者カウツキーは、ロさきでマルクス主義をみとめることが、実際にはマルクス主義を「ストルーヴェ主義」または「ブレンターノ主義」に変える結果になるということをしめす、このうえなく典型的で明瞭な一例である。プレハーノフの例にもこれと同じことが見られる。これらの人々は、見えすいた詭弁によって、マルクス主義からその革命的な精髄を抜きとり、マルクス主義のうちで、革命的な闘争手段と、それの宣伝および準備と、ほかならぬこの方向をめざす大衆の教育以外のものはなんでもみとめる。カウツキーは、社会排外主義の基本思想、すなわちこの戦争で祖国防衛をみとめることと、公債にたいする投票のさいに棄権したり、自分らの反政府性を口さきで自任したりなどするという形での、左派にたいする外交的な、見せかけの譲歩とを、無考えに「和解させよう」としている。一九〇九年には、革命の時代が近づいたことについて、また戦争と革命の結びつきについて、まるまる一冊の本を書いたカウツキー、——一九一二年には、きたるべき戦争を革命的に利用するというバーゼル宣言に署名したカウツキー、その彼が、いまは手をかえ品をかえて社会排外主義を正当化し美化しており、プレハーノフと同じように、ブルジョアジーに同調して、革命の考えや直接的革命闘争のための措置をいっさいあざわらっている。

労働者階級は、この背教、無定見、日和見主義への忠勤、前例のないマルクス主義の理論的卑俗化と容赦なくたたか

わなければ、自分の世界的な革命的役割を果たすことはできない。カウツキー主義は偶然のものではなく、第二インタナショナルの矛盾から、すなわち、口さきでのマルクス主義への忠誠と行動のうえでの日和見主義への屈従との組合せから生じた社会的産物である。

「カウツキー主義」のこの基本的な欺瞞性は、国によってそれぞれ異なった形をとって現われている。オランダでは、ロランド・ホルストは、祖国防衛の考えをしりぞけながら、日和見主義者の党との統一を主張している。ロシアでは、トロツキーが同じくこの考えをしりぞけながら同じように日和見主義的・排外主義的な「ナーシャ・ザリャー」グループとの統一を主張している。ルーマニアでは、ラコフスキーは、日和見主義がインタナショナル崩壊の責任者だとして、それに宣戦を布告しながら、同時に祖国防衛の考えの正当性をみとめる用意をもっている。これらはすべて、オランダのマルクス主義者（ホルテル、パンネクーク）が「消極的急進主義」と名づけた悪弊、つまり、理論のうえでは革命的マルクス主義を折衷主義とおきかえ、実践のうえでは日和見主義に隷従するか、あるいはそれにたいして無力であるという悪弊の現われである。

マルクス主義者のスローガンは革命的社会民主主義のスローガンである

戦争がきわめて鋭い危機を生みだし、大衆の災厄を信じられないほどはげしくしたことは、疑いをいれない。この戦争の反動的な性格、自分の略奪目的を「民族的」イデオロギーでおおいかくしているすべての国のブルジョアジーの恥知らずなうそ、――これらはすべて、客観的＝革命的情勢を基盤として、大衆のなかにかならずや革命的な気分をひきおこさずにはおかない。われわれの責務は、この気分を意識化し、ふかめ、それにはっきりした形をあたえるために手だすけをすることである。この任務をただしく言い表わしているのは、帝国主義戦争を内乱に転化せよというスローガンだけである。そして、戦時におけるあらゆる首尾一貫した階級闘争、真剣に実行されるあらゆる「大衆行動」戦術は、不可避的にこれへ導いていく。大国間の第一次あるいは第二次の帝国主義戦争に関連して、戦争中かあるいは戦後に強力な革命運動が燃えあがるかどうかはわからないが、いずれにせよ、ほかならぬこの方向にむかって系統的に、たゆみなく活動することが、われわれの無条件の責務である。

バーゼル宣言は、パリ・コミューンの例を、すなわち諸

国政府間の戦争を内乱に転化させた例を、はっきり拠りどころとして挙げている。半世紀まえには、プロレタリアートはあまりにも弱く、社会主義の客観的諸条件はまだ成熟していなかった。すべての交戦国で革命運動があい呼応し協力するなどということは、ありえなかった。パリの労働者の一部が「民族的イデオロギー」(一七九二年の伝統)に熱中したことは、当時マルクスが指摘したように、パリの労働者の小ブルジョア的な弱点であり、コミューンが崩壊した原因の一つであった。それから半世紀たって、当時の革命をよわめていた諸条件はなくなった。だから、今日では、ほかならぬパリ・コミューン戦士と同じ精神の活動をあまんじて放棄することは、社会主義者にとってゆるすべからざることである。

塹壕内での交歓の例

すべての交戦国のブルジョア新聞は、交戦国の兵士同士が塹壕のなかでさえ交歓した実例を挙げている。そして、軍当局(ドイツとイギリスの)がこのような交歓を禁止する峻厳な命令を出したことは、諸国の政府とブルジョアジーがこのことを重大視していることを証明した。西欧の社会民主諸党の上層部で日和見主義が完全に支配していて、社会民主主義新聞と第二インタナショナルの権威者全体が社会排外主義を支持しているときに、交歓の場合がおこりえたとすれば、このことによっても、すべての交戦国の社会主義の左派だけでもこの方向にむかって系統的に活動するならば、現在の犯罪的、反動的な奴隷主の戦争を短縮し、国際的な革命運動を組織することが、どれほど可能であるかが知られる。

非合法組織の意義

この戦争では、全世界の最も著名な無政府主義者も、日和見主義者におとらず、(プレハーノフやカウツキー流に)社会排外主義で身をけがしてしまった。この戦争の有益な結果の一つは、疑いもなく、それが日和見主義をも無政府主義をもうちほろぼすということであろう。

社会民主諸党は、たとえどんなにわずかでも大衆を組織し社会主義を宣伝する合法的可能性があるなら、どんな場合にも、どんな事情のもとでも、それを利用することを断念しないと同時に、合法性への隷従とは手を切らなければならない。エンゲルスは、まさしく内乱をほのめかしながら、そしてブルジョアジーが合法性をやぶったあとではわれわれも合法性をやぶる必要があることをほのめかして、こう書いている。「ブルジョア諸君、どうぞおさきに射ってくれたまえ」〔第一七巻、四〇五ページ〕と。この危機

がしめしたことは、ブルジョアジーが、あらゆる国で、最も自由な国においても、合法性をやぶっていること、また革命的な闘争手段を宣伝し、審議し、評価し、準備するための非合法組織をつくらなければ、大衆を革命に導くことはできないということである。たとえばドイツでは、社会主義者によってなされている誠実な仕事はすべて、卑劣な日和見主義と偽善的な「カウツキー主義」に反対してなされており、まさに非合法になされているのである。イギリスでは、徴兵反対を印刷物で呼びかけただけで監獄にぶちこまれている。

非合法の宣伝方法を否定し、合法出版物でそれを笑いものにするようなことが、社会民主党に所属していることと両立しうると考えるのは、社会主義を裏切ることである。

帝国主義戦争における自国政府の敗北について

現在の戦争で自国政府の勝利を擁護する者も、「勝利でもなく、敗北でもない」というスローガンを擁護する者も、一様に社会排外主義の立場に立っている。反動的な戦争では、革命的な階級は自国政府の敗北をのぞまないわけにはいかない。また、自国政府の軍事的敗北と、この政府を打倒することが容易になることとの関連性を見ないわけにはいかない。諸国政府のはじめた戦争がかならず諸国政府間の戦争として終わるものと信じ、またそれをのぞんでいるブルジョアにとってだけ、すべての交戦国の社会主義者はみな、「自国」政府の敗北を希望することを表明すべきだという考えが、「わらうべきもの」、あるいは「ばかげたもの」に思えるのである。その反対に、このような行動こそが、まさにあらゆる自覚した労働者の胸にひめられた考えに合致しており、帝国主義戦争を内乱に転化させることを目ざすわれわれの活動方針にそうであろう。

イギリス、ドイツ、ロシアの一部の社会主義者の真剣な戦争反対の扇動が、それぞれの国の政府の「軍事力をよわめた」ことは疑いないが、そうした扇動は社会主義者の功績であった。社会主義者は、大衆にむかって、「自国」政府を革命によって打倒するよりほかには彼らの救いの道はないこと、現在の戦争でこれらの政府の困難をまさにこの目的のために利用する必要があることを、説明しなければならない。

平和主義と講和のスローガンについて

平和をのぞむ大衆の気分は、しばしば抗議、憤激、戦争の反動性についての認識の始まりを、表わす。この気分を利用することは、すべての社会民主主義者の責務である。

社会民主主義者は、この気分を基盤とするあらゆる運動とあらゆるデモンストレーションに、最も熱心に参加するであろう。しかし、社会民主主義者は、革命運動がなくても、無併合の、民族抑圧を伴わず、略奪を伴わない講和、現在の政府間および支配階級間の新しい戦争の萌芽をふくまない講和が実現できるという考えをみとめることによって、人民をだますようなことはしないであろう。人民をこのようにだますことは、交戦諸国政府の秘密外交とその反革命計画に役だつだけである。恒久的で民主主義的な平和をのぞむものは、諸国の政府とブルジョアジーにたいする内乱に賛成しなければならない。

民族自決権について

今日の戦争のなかで最もひろまっている人民欺瞞――ブルジョアジーによる――は戦争の略奪目的を、「民族解放」というイデオロギーでおおいかくしていることである。イギリス人はベルギーの解放を、ドイツ人はポーランドの解放をそれぞれ約束しているというぐあいである。実際には、われわれが見たように、これは世界の大多数の民族の抑圧者が、そのような抑圧の強化と拡大のためにおこなっている戦争である。

社会主義者は、民族のいっさいの抑圧に反対してたたかわなければ、自分の偉大な目的を達成することはできない。だから、社会主義者は、抑圧国（とくに、いわゆる「大」国）の社会民主党が被抑圧民族の自決権、とりもなおさず政治的な意味の自決権、すなわち政治的に分離する権利をみとめ、擁護することを無条件に要求しなければならない。大国民族、あるいは植民地を領有している民族の社会主義者で、この権利を擁護しない者は、排外主義者である。

この権利を擁護することは、小国家の形成を奨励することでないばかりか、反対に、大衆にとっていっそう有利な、そして経済的発展により多く適応した巨大国家と諸国家同盟のいっそう自由な、なんら臆するところのない、したがってまたいっそう広範な、いたるところあらゆる地域における形成をもたらすものである。

逆に被抑圧民族の社会主義者は、被抑圧民族の労働者と抑圧民族の労働者との完全な統一（組織的な統一をふくむ）のために無条件にたたかわなければならない。ある民族を他の民族から法律的に分離させるというアイデア（バウアーとレンナーのいわゆる「文化的民族自治」）は反動的なアイデアである。

帝国主義は、ひとにぎりの「大」国による全世界の民族の抑圧が累進していく時代である。したがって、帝国主義に反対する国際社会主義革命のための闘争は、民族自決権

をみとめなければ不可能である。「他の民族を抑圧する民族は自由ではありえない」（マルクスとエンゲルス）。他の民族にたいする「自分」の民族のごくわずかな暴力でも大目にみるプロレタリアートは、社会主義的プロレタリアートではありえない。

第二章　ロシアにおける諸階級と諸政党

ブルジョアジーと戦争

一つの点で、ロシア政府は、そのヨーロッパの同僚諸政府に立ちおくれていない。すなわち、ロシア政府は、その同僚諸政府と同様に、大がかりに「自国」の人民をだますやり方を心えていたのである。ロシアでも、大衆に排外主義を感染させるために、またツァーリ政府は「正義」の戦争をおこない、「同胞スラヴ人」を私心なく擁護しているかのような考えを呼びおこすために、嘘と奸計の巨大な途方もない機関が動員された。

地主階級と商工ブルジョアジーの上層とは、ツァーリ政府の好戦的な政策を熱心に支持した。彼らが、トルコとオーストリアの遺産の分割から巨大な物質的利益と特権を得られるものと期待しているのは、もっともなことである。すでに彼らの多くの大会は、ツァーリの軍隊が勝利する場合に、彼らのポケットに落ちこんでくる利得の皮算用をやっている。そのうえ、反動派は、ロマノフ家の君主制の没落をおくらせ、ロシアにおける新しい革命を阻止できるものがまだなにかあるとすれば、それはただ、対外戦争がツァーリの勝利におわることだけだということを、非常によく理解している。

都市の「中間的」なブルジョアジー、ブルジョア・インテリゲンツィア、自由職業の人々などの広範な層も、――すくなくとも戦争のはじめには――排外主義に感染していた。ロシアの自由主義的ブルジョアジーの党――カデット――は、ツァーリ政府を完全に、無条件に支持した。対外政策の分野では、カデットは、すでにはやくから政府党である。ツァーリの外交が、すでに何度も大がかりな政治的ぺてんの手段としてつかった汎スラヴ主義は、カデットの公式のイデオロギーとなった。ロシアの自由主義派は、国権的自由主義派に退化した。それは「愛国主義」の点で黒百人組と競いあい、軍国主義、制海主義などに、つねに喜んで賛成投票している。ロシアの自由主義派の陣営には、七〇年代のドイツで「自由に思考する」自由主義派が解体して、国権的自由主義的な党〔国民自由党〕がわかれでて

きたときと、ほぼ同じ現象がみられる。ロシアの自由主義的ブルジョアジーは、決定的に反革命の道にのぼった。この問題でのロシア社会民主労働党の立場は、完全に確証された。ロシアの自由主義派がまだロシア革命の推進力であるかのようにいう、わが国の日和見主義者の見解は、生活によって粉砕されている。

支配的徒党は、ブルジョア出版物や聖職者などの助けで、農民のあいだにもやはり排外主義的な気分を呼びおこすことに成功した。しかし、兵士が戦場から帰還するにつれて、農村の気分がツァーリ君主制にとって不利にかわるだろうということは、疑いをいれない。農民と接触をたもっているブルジョア民主主義的諸党は、排外主義の波に抵抗することができなかった。トルドヴィキ党は、国会では軍事公債に賛成投票することを拒否した。だが、その指導者ケレンスキーの口を通じて、同党は、君主制にとって非常に有利な「愛国主義的」な宣言を公表した。「ナロードニキ」の合法出版物全体は、大体に自由主義者のあとを追った。ブルジョア民主主義派の左翼――国際社会主義ビューローにくわわっている、いわゆる社会革命党――でさえ、同じこの時流にさおさした。国際社会主義ビューローへのこの党の代表者ルバノヴィチ氏は、公然たる社会排外主義者として行動している。「協商国」社会主義者のロンドン会議では、この党の代議員の半分は、排外主義的な決議に賛成投票した（他の半分は棄権）。社会革命党の非合法出版物（新聞『ノーヴォスチ』[109]その他）では、排外主義者が優勢である。「ブルジョア社会出身」の革命家たち、すなわち、労働者階級とつながりをもっていないブルジョア革命家たちは、この戦争でまったく無慚な破綻をしめした。クロポトキン、ブルツェフ、ルバノヴィチのみじめな運命は、きわめて意味深長である。

労働者階級と戦争

ロシアで排外主義の病菌の接種がうまくいかなかったただ一つの階級は、プロレタリアートである。戦争のはじめの個々の行きすぎは、最も無知な労働者層だけに関係するものであった。モスクワのドイツ人にたいする乱暴事件に労働者が参加したことは、ひどく誇張されている。大体に、ロシアの労働者階級は、排外主義の点では免疫になっていた。

これは、国内の革命的情勢とロシアのプロレタリアートの一般的生活条件とにもとづくものである。

一九一二―一九一四年は、ロシアにおける新しい壮大な革命的高揚の始まりをしめしていた。われわれは、ふたたび世界未曽有の大きなストライキ運動を目撃した。大衆的

な革命的ストライキは、一九一三年には、最低に勘定しても一五〇万人の参加者を引きつけ、一九一四年には、この数は二〇〇万人をこえ、一九〇五年の水準に近づいた。戦争直前のペテルブルグでは、事態はすでに最初のバリケード戦闘がおきるまでになっていた。

非合法のロシア社会民主労働党は、インタナショナルにたいする自分の義務を果たした。国際主義の旗は、党の手ににぎられて微動もしなかった。わが党は、はやくから日和見主義的グループや分子と組織的に手を切っていた。日和見主義と「ぜがひでもの合法主義」の重しは、わが党の足にはまといついていなかった。そして、この事情は、わが党が革命的義務を果たすのをたすけた、――それは、ビッソラーティの日和見主義党との分裂がイタリアの同志たちをたすけたのと同じである。

わが国の一般情勢は、労働者大衆のあいだに「社会主義的」日和見主義がさかえるのにとっては、不利である。ロシアでは、インテリゲンツィア、小ブルジョアジーなどのあいだに、多くの色合いの日和見主義と改良主義が見られる。しかし、それは、政治的に活溌な労働者層のあいだでは、とるにたりない少数者である。特権的労働者と職員の層は、わが国では非常に微力である。合法性の物神崇拝は、わが国では生まれることができなかった。解党派(アクセリロード、ポトレソフ、チェレヴァーニン、マスロフその他に指導されている日和見主義者の党)は、戦争までは労働者大衆のあいだに言うにたる支柱をまったくもっていなかった。第四国会の選挙では、六名の労働者議員の全部が解党主義の反対者のうちから出た。ペトログラードとモスクワの合法的な労働者新聞の発行部数と醵金は、自覚した労働者の五分の四が日和見主義と解党主義に反対していることを、反駁の余地なくしめした。

戦争がはじまるとすぐ、ツァーリ政府は、わが非合法のロシア社会民主労働党の党員である何千何万もの先進的な労働者を逮捕し、流刑に処した。この事情は、国内での戒厳令の施行、われわれの新聞の禁止、等々とあいまって、運動を阻止した。しかし、わが党の非合法の革命的活動は、それでもなおつづいている。ペトログラードでは、わが党の委員会は、非合法新聞『プロレタールスキー・ゴーロス』(10)を発行している。

国外で発行されている中央機関紙『ソツィアル－デモクラート』の諸論文は、ペトログラードで複刻され、地方におくられている。非合法の宣伝ビラがだされて、兵営にもまかれている。都市の郊外のいろいろなひきこもった場所で、非合法の労働者集会がおこなわれている。最近、ペトログラードでは、金属労働者の大ストライキがはじまった。

このストライキに関連して、わが党のペトログラード委員会は、労働者にあてていくつかのアピールを出した。

ロシア社会民主党国会議員団と戦争

一九一三年に、社会民主党国会議員団のあいだに分裂がおこった。一方の側には、チヘイゼに指導される七名の日和見主義の支持者がいた。彼らは非プロレタリア的な七つの県から選出されたが、そこでは労働者の数は、二一万四〇〇〇人であった。他方の側には、全部労働者クーリア選出の六名の議員がいたが、これは、一〇〇万八〇〇〇人の労働者のいるロシアの最大の工業諸中心地から選出されていた。

意見の不一致がおこった主要な問題は、革命的マルクス主義の戦術か、それとも日和見主義的改良主義の戦術かということであった。実践上の不一致が最も多く現われたのは、議会外の大衆のあいだでの活動の分野であった。このような活動は、それをおこなう革命的な基盤にとどまろうとするかぎり、ロシアでは非合法におこなわれるほかはなかった。チヘイゼ派議員団は、非合法活動を否認した解党派の最も忠実な同盟者としてとどまり、労働者との座談会や集会のすべてで解党派を擁護した。分裂はこのためにおこったのである。六名の議員は、ロシア社会民主党労働者議員団を結成した。一年間の活動は、ロシアの労働者の圧倒的な多数がほかならぬこの議員団を支持していることを、反駁の余地なくしめした。

戦争のはじめに、意見の不一致が異常に明瞭に現われた。チヘイゼ派議員団は、議会の基盤だけにとどまった。チヘイゼ派議員団は、軍事公債に賛成投票はしなかった。もしそうしたなら、労働者の激しい憤りをまねいたであろうからである（われわれは、ロシアでは、小ブルジョア的なトルドヴィキでさえ軍事公債に賛成投票しなかったことを知っている）。だが、チヘイゼ派議員団は、社会排外主義にたいする抗議もおこなわなかった。

わが党の政治方針を表明していたロシア社会民主党労働者議員団は、それとはちがった行動をとった。この議員団は、労働者階級のまんなかに出かけていって戦争反対の抗議をおこない、帝国主義反対の宣伝をロシアの広範なプロレタリア大衆のなかへもちこんだ。

そして、この議員団は、労働者のあいだに非常な共鳴を生んだ、——これは、政府を熊かせたので、政府は、自身の法律に明らかに違反して、われわれの同志たる議員たちを逮捕し、彼らをシベリアへの終身流刑に処した。われわれの同志たちの逮捕にかんする最初の公式の発表のなかで、ツァーリ政府は次のように書いている。

「この点で、社会民主主義団体の若干のメンバーは、まったく特別の立場をとり、戦争反対の扇動や、非合法の檄文や、口頭の宣伝によって、ロシアの軍事力をぐらつかせることを自己の活動の目的としていた」。

ツァーリズムにたいする闘争を「一時」中止するようにというヴァンデルヴェルデの有名な呼びかけ――ベルギー駐在のツァーリの大使クダシェフ公爵の証言によって、いまでは、ヴァンデルヴェルデが、一人ででではなしに、前記のツァーリの大使と共同でこの呼びかけを作成したことがわかっている――にたいしては、わが党だけが、その中央委員会を代表して、拒絶の回答をあたえた。解党派の中央指導部は、ヴァンデルヴェルデに同意し、「戦争反対の活動をおこなわない」ことを、出版物のうえで公式に声明した。

ツァーリ政府が、われわれの同志たる議員たちを告発した第一の理由は、彼らがヴァンデルヴェルデにたいするこの拒絶の回答を労働者のあいだに宣伝したことであった。

ツァーリの検事ネナロコモフ氏は、法廷でわが同志たちにたいし、ドイツとフランスの社会主義者をまなぶべき手本としてしめした。彼はこう述べた。「ドイツの社会民主主義者は、軍事公債に賛成投票して、政府の味方となった。ドイツの社会民主主義者はこのように行動したのに、ロシア社会民主党のあわれむべき騎士たちは、そのようには行動しなかった。……ベルギーとフランスの社会主義者たちは、全党一致して他の階級との自分の反目をわすれ、党派的な不和をわすれ、動揺することなく一つの旗のもとに立った」。ところが、ロシア社会民主党労働者議員団のメンバーは、党中央委員会の指令に服従して、そのようには行動しなかった、と……

法廷は、わが党がプロレタリアートの大衆のあいだでおこなっている戦争反対の広範な非合法的扇動についてのすばらしい絵図をくりひろげてみせた。ツァーリの法廷が、この分野でのわが同志たちの活動の全部を「暴露」することにけっして成功しなかったことは、いうまでもない。だが、暴露されたことだけでも、数ヵ月の短い期間にどんなに多くのことがなされたかをしめしている。

法廷では、戦争に反対し、国際主義的戦術に賛成するわれわれのグループや委員会の非合法の檄文が読みあげられた。全ロシアの自覚した労働者たちからロシア社会民主党労働者議員団へと、糸が引かれていた。そして、議員団は、これらの労働者たちがマルクス主義の見地から戦争を評価するのを、力におうじてたすけることにつとめた。

ハリコフ県の労働者出身の議員、同志ムラノフは、法廷で次のように陳述した。

「私が人民によって国会におくりこまれたのは、国会の安楽椅子に腰をかけているためではないと考えて、私は、労働者階級の気分を知るために地方を旅行した」。彼はまた、わが党の非合法扇動家の役割を引きうけ、ウラルでヴェルフネイセット工場その他の場所で労働者委員会を組織したことを、法廷でみとめた。法廷は、ロシア社会民主党労働者議員団のメンバーが、戦争がはじまって以来、宣伝の目的でほとんど全ロシアを歴訪したこと、ムラノフ、ペトロフスキー、バダーエフその他が、多くの労働者集会を組織し、その席上では戦争反対の決議が採択されたことなどをしめした。

ツァーリ政府は、被告を死刑で脅かした。そのため、法廷そのものでは、被告全員が、かならずしも同志ムラノフのように勇敢に行動したわけではない。彼らは、ツァーリの検事が彼らに有罪の判決をくだしにくいようにしようとつとめたのである。いま、ロシアの社会排外派は、どんな議会主義が労働者階級にとって必要であるかという問題の核心をぼかすために、見ぐるしくもこのことを利用している。

ジュデクムとハイネ、サンバとヴァイヤン、ビッソラーティとムッソリーニ、チヘイゼとプレハーノフは、議会主義をみとめている。ロシア社会民主党労働者議員団に所属するわれわれの同志たちも議会主義をみとめており、排外派と手を切ったブルガリアやイタリアの同志たちも、それをみとめている。議会主義にもいろいろな種類がある。あるものは、自国政府にとりいるために、あるいはせいぜい、チヘイゼ派議員団のように、責任をのがれるために議会の舞台を利用している。他のあるものは、どこまでも革命家としてとどまるために、また最も困難な事情のもとでも、社会主義者および国際主義者としての自分の責務を果たすために、議会主義を利用している。前者の議会活動は、彼らを大臣の安楽椅子におくりこみ、後者の議会活動は、彼らを牢獄に、流刑に、懲役におくりこむ。前者は、ブルジョアジーに、後者はプロレタリアートに奉仕する。前者は社会帝国主義者であり、後者は革命的マルクス主義者である。

第三章　インタナショナルの再建

インタナショナルをどのようにして再建すべきか？　だが、――はじめにどのようにインタナショナルを再建してはならないかについて、二、三述べたい。

社会排外派と「中央派」の方法

おお、万国の社会排外派は偉大な「国際主義者」である！　彼らは、戦争がはじまって以来、インタナショナル

のための配慮で心がいっぱいである。一方では、彼らは断言する。インタナショナルの崩壊をうんぬんするのは「誇張だ」、実際には、なにも特別なことがおこったわけではない、と。カウツキーの言うことを聞きたまえ。まったく、インタナショナルは「平時の用具」である。だから、戦時にはこの道具がいくらか役に立たないのは、あたりまえのことである、と。他方では、万国の社会排外派は、すでに生じた事態からのがれでる一つの非常に簡単な――そして、肝心なことには、国際的な――手段を発見した。この手段はこみいったものではない。すなわち、戦争が終わるのを待ちさえすればよい、戦争が終わるまでは、各国の社会主義者は自分の「祖国」を防衛し、「自国」の政府を支持すべきである。だが、戦争が終わったら、おたがいに「大赦」をおこない、だれもみな正しかったことをみとめなければならない。平時にはわれわれは兄弟としてくらすが、戦時には、――これこれの決議に正確にもとづいて――ドイツの労働者にむかってはそのフランスの兄弟をみなごろしにするように、またフランスの労働者にむかってはその逆のことをするように呼びかけることを、みとめなければならない、というのである。

この点については、カウツキーも、プレハーノフも、ヴィクトル・アドラーも、ハイネも、みな一様に意見が一致する。ヴィクトル・アドラーは書いている。「この困難な時期をきりぬけたときのわれわれの第一の義務は、たがいに難くせをつけあうのをやめることであろう」と。カウツキーはこう断言している。「いままでのところ、どの方面からも、まじめな社会主義者によって」、インタナショナルの運命に「懸念をいだかせるような声はあげられていない」と。プレハーノフは言う。「罪もなくころされたものの血の臭いのする手（ドイツの社会民主主義者の）をにぎることは、快いことではない」と。しかし、彼はすぐ「大赦」を申しでる。「ここでは感情を理性にしたがわせることが、まったく適当であろう」。インタナショナルは、みずからの大業のためには、おくればせの後悔でも、考慮してやらなければならないだろう」と。ハイネは『社会主義月刊』で、ヴァンデルヴェルデの行動を「勇気ある毅然たる態度」と称し、ドイツの左派は彼を見ならうべきだ、としている。

要するに、戦争がすんだなら、カウツキーとプレハーノフ、ヴァンデルヴェルデとアドラーを委員とする委員会を任命しよう。そうすれば、相互大赦の精神に立つ「全員一致」の決議がたちどころにつくられるであろう。論争はうまいぐあいにぼかされてしまうであろう。労働者がおこった事柄を理解するのをたすけないで、紙のうえの見せかけ

の「統一」で労働者をだましてしまうだろう。万国の社会排外派と偽善者どもの連合が、インタナショナルの再建と呼ばれるであろう。

このような「再建」がなされる危険はきわめて大きいことに、われわれは目をつぶってはならない。すべての国の社会排外派は、みな同じようにこのような再建を利益としている。彼らはすべて同じように、自国の労働者大衆自身が、社会主義かそれとも民族主義か、という問題を理解することをのぞまない。彼らはすべて同じように、その罪をおたがいにかくしあうことを利益としている。彼らはすべて、「国際的」偽善の達人であるカウツキーの提案すること以外には、なに一つ提案できないのである。

ところが、人々はこの危険をほとんど理解していない。われわれは戦争の一年間に、国際的なつながりを復活しようとするいくつかの試みを見てきた。明白な排外主義者たちがその「祖国」の参謀本部とブルジョアジーをたすけるためにあつまった、あのロンドン会議やウィーン会議のことは、べつにしよう。われわれがここで言っているのは、ルガノ会議、コペンハーゲン会議、国際婦人会議、国際青年会議のことである。〔二二〕これらの集まりは、最良の願望にもとづくものであった。しかし、それらは、さきに述べた危険を全然理解していなかった。それらの集まりは、国際主義者の闘争方針の大要をさだめなかった。それらは、社会排外派のインタナショナル「再建」方法がプロレタリアートにもたらす危険をプロレタリアートにしめさなかった。それらは、社会排外派と闘争することなしには社会主義の事業は望みがないことを労働者におしえないで、古い決議を繰りかえすだけにとどまった。せいぜいのところ、それらの集まりは、一つ所での足ぶみであった。

反対派の状態

ドイツ社会民主党内の反対派内部の状態こそ、すべての国際主義者にとって最大の関心事であることは、すこしも疑いがない。第二インタナショナルで最も強力で指導的な党であった公認のドイツ社会民主党は、労働者の国際組織に最も手いたい打撃をあたえた。しかし、それと同時に、ドイツ社会民主党内には最も有力な反対派が現われた。ヨーロッパの大きな党のうちでは、ドイツの党内でまっさきに、社会主義の旗にあくまで忠実であった同志たちが高い抗議の声をあげた。われわれは喜びをもって、『リヒトシュトラーレン』や『インテルナツィオナーレ』のような雑誌を読んだ。われわれは、たとえば『主要な敵は自国内にいる』という檄のような、非合法の革命的な檄が、ドイツ国内にひろまっていることを知って、さらに大きな喜びを味わ

った。これは、ドイツの労働者のあいだに社会主義の精神が生きていること、ドイツには革命的マルクス主義をまもることのできる人々がまだいることを、ものがたっていた。

ドイツ社会民主党の内部では、今日の社会主義における分裂が最も明瞭に現われた。ここには、きわめてはっきりと三つの流派が見られる。すなわち、どこでもドイツほどひどい堕落と背教をしたところのない、日和見主義的排外派、日和見主義派の下僕の役割以外には、まったくなんの役割も果たせないことをドイツで証明したカウツキーの「中央派」、そして、ドイツにおける唯一の社会民主主義派である左派、これがそうである。

われわれがどれよりもいちばん関心を寄せているのは、もちろんドイツの左派内部の状態である。われわれはこの左派を、われわれの同志と見なし、国際主義的分子全体の希望と見なしている。

この状態はいったいどんなものか?

雑誌『インテルナツィオナーレ』が、ドイツの左派のなかではまだすべてが醱酵過程にあること、大きな再編成はまだ今後にあること、その内部にはかなり強硬な分子とそれほど強硬でない分子とがいることを述べているのは、まったく正しかった。

われわれロシアの国際主義者は、もちろん、わが同志であるドイツの左派の内部問題にあえて干渉しようとは、すこしも考えていない。ドイツの左派自身だけが、時と場所の諸条件を考えて、日和見主義派にたいする自分の闘争方法をきめる十分な権限をもっていることを、われわれは理解している。ただ、われわれは、情勢についてのわれわれの意見を率直に述べることがわれわれの権利でありまた義務であると、考えている。

雑誌『インテルナツィオナーレ』の巻頭論文の筆者が、カウツキーの「中央派」はむきだしの社会排外主義よりもいっそう大きな害毒をマルクス主義の大業におよぼしている、と断言しているのはまったく正しいと、われわれは確信する。現在意見の相違をあいまいにしている人々、現在、カウツキー派の説くところを、マルクス主義だという触れこみで労働者に説いている人々、そういう人々は労働者をねむりこませているのであり、むきだしに問題を提出している社会排外主義者よりも、労働者自身に問題をきわめさせるジュデクムやハイネの一派よりも有害である。

最近カウツキーとハーゼが「党裁決機関」にたいしてフロンドばりの反抗をやっていることに、だれもだまされてはならない。彼らとシャイデマン派との意見の相違は、原則的な意見の相違ではない。前者は、ヒンデンブルクとマッケンゼンがすでに勝利したと考えて、いまでは領土併合

に反対して抗議するというぜいたくがゆるされるだろうと考えている。後者は、ヒンデンブルクとマッケンゼンはまだ勝利をえたわけではないから、「最後までがんばらなければ」ならないと、考えている。

カウツキー派は「党裁決機関」にたいして見せかけの闘争をやっているだけである、――それはまさに戦後に原則的な論争を労働者のまえであいまいにし、第二インタナショナルの外交家たちがお得意とする、あのあいまいな「左派」流に書かれた一〇〇一番目の柔かい決議で問題を塗りかくすためなのだ。

ドイツの反対派は、「党裁決機関」にたいするその困難な闘争において、カウツキー派のこの無原則的な、フロンドばりの反抗をも利用しなければならないことは、まったく当然である。しかし、あらゆる国際主義者の試金石は、こんごとも新カウツキー主義にたいして否定的態度をとることでなければならない。カウツキー主義に反対してたたかうもの、「中央派」の指導者がらわべだけの転向をおこなったのちも「中央派」は原則的にはあいかわらず排外派や日和見主義派の同盟者であることを理解しているもの、このような人々だけが真に国際主義者である。

総じてインタナショナル内部の動揺分子にたいするわれわれの態度は、非常に重要である。これらの分子――おもに平和主義的な色合いの社会主義者――は、中立諸国にも、また若干の交戦国にもいる（たとえば、イギリスでは独立労働党）。これらの分子は、われわれの同伴者となりうるものである。これらの分子は、社会排外派に反対して彼らに接近することは、必要である。しかし、記憶しておかなければならないのは、彼らは同伴者にすぎないこと、インタナショナルを再建するさいの主要な、根本的な問題では、これらの分子は、われわれとともにすすまず、われわれに反対してカウツキー、シャイデマン、ヴァンデルヴェルデ、サンバとともにすすむであろうということである。国際諸会議では、われわれの綱領をこれらの分子に受けいれられるものだけにかぎってはならない。もしそんなことをするなら、われわれ自身が動揺的な平和主義者のとりこになってしまうであろう。たとえば、ベルンでひらかれた国際婦人会議ではそういうふうであった。同志クララ・ツェトキンの見地を固持したドイツの代表団は、この会議では事実上「中央派」の役割を果たした。この婦人会議は、トルルストラの日和見主義的なオランダの党の代表たちや、「協商国」の排外派のロンドン会議でヴァンデルヴェルデの決議に賛成投票した――われわれはこのことをわすれないようにしよう――I・L・P〔独立労働党〕の代表たちに受けいれられる事柄だけを、述べたのであった。われわれは、I・L・Pが

戦争中にイギリス政府にたいしておこなった勇敢な闘争に最大の敬意をはらうものである。しかし、われわれは、この党がマルクス主義の基盤に立っていなかったこと、いまでも立っていないことを知っている。そして、われわれの考えでは、現在、社会民主党内の反対派の主要な任務は、革命的マルクス主義の旗をかかげ、帝国主義戦争にたいするわれわれの見方を労働者にしっかりと、はっきりとかたり、革命的な大衆行動の標語、すなわち、帝国主義戦争の時期を内乱の時期の開始に転化せよという標語を提出することにある。

ともあれ、革命的な社会民主主義的分子は多くの国々にいる。彼らは、ドイツにも、ロシアにも、スカンディナヴィア（同志ヘーグルンドを代表者とする有力な一派）にも、バルカン（ブルガリアの「テスニャキ」党）にも、イタリアにも、イギリスにも（イギリス社会党の一部）フランスにも、（ヴァイヤン自身が『ユマニテ』紙上で、国際主義者たちから抗議の手紙を受けとったことをみとめたが、彼はそのただ一つの全文をも発表しなかった）、オランダにも（トリブーネ派）[二三]、なおその他の国々にもいる。これらのマルクス主義分子を――最初はどんなに少数であろうとも――結集すること、彼らの名において今日わすれられている真の社会主義のことばを大衆に思いださせること、すべての国の労働者にむかって、排外派と手を切って古くからのマルクス主義の旗のもとに集まるよう呼びかけること、――これこそが当面の任務である。

いわゆる「行動」綱領をもついろいろな会議のいままでの結着は、単なる平和主義の綱領が多少とも完全にその席上で宣言されたことだけである。マルクス主義は平和主義ではない。戦争を一刻もはやく終わらせるためにたたかうことは、必要である。しかし、「講和」の要求は、革命的な闘争への呼びかけを伴ってこそ、プロレタリア的な意味をもつものとなる。一連の革命なしには、いわゆる民主主義的講和は小市民的なユートピアである。真の行動綱領であるのは、おこった事柄について大衆に完全で明瞭な解答をあたえ、帝国主義とはなにか、それとどうたたかうべきかを説明し、第二インタナショナルの崩壊をもたらしたものが日和見主義であることを公然と言明し、日和見主義派をのぞき、彼らに反対して、マルクス主義的インタナショナルを建設するように公然と呼びかける、マルクス主義的な綱領だけであろう。こういう綱領は、われわれがみずからを信じ、マルクス主義を信じ、日和見主義にたいして生死の闘争を宣言することをしめすであろうが、このような綱領だけが、おそかれはやかれわれわれに真のプロレタリア大衆の共感を保証するであろう。

ロシア社会民主労働党と第三インタナショナル

ロシア社会民主労働党は、ずっと以前に自党の日和見主義派と分裂した。ロシアの日和見主義派は、いまでは排外派ともなっている。このことは、彼らとの分裂が社会主義のために必要であるというわれわれの意見をいっそうつよめるだけである。われわれは、社会民主主義者と社会排外派との今日の意見の不一致は、かつて社会民主主義者が無政府主義者と分裂したときの社会主義者と無政府主義者との意見の不一致に、けっしておとらない、と確信する。『プロシア年報』のなかで日和見主義者のモーニトルが次のように言っているのは正しい。日和見主義派とブルジョアジーにとって、現在の統一は有利である。なぜなら、統一があれば、左派は排外派に服従せざるをえないし、労働者が論争を自分できわめ、自分たちの真に労働者的な、真に社会主義的な党をつくることが妨げられるからである、と。現在の事態のもとでは、日和見主義派や排外派との分裂は、革命家の第一の義務である。それはちょうど、黄色派、反ユダヤ主義者、自由主義的労働者団体などとの分裂が、まさにおくれた労働者をできるだけはやく啓蒙し、彼らを社会民主党の隊列に引きいれるためにこそ、必要であったのと同様である、とわれわれは心の底から確信している。

われわれの考えでは、第三インタナショナルは、まさしくこのような革命的な基礎のうえにつくられなければならないであろう。わが党にとっては、社会排外派と手を切ることが適切かどうかという問題は存在しない。わが党にとっては、この問題はきっぱりと解決されている。わが党にとっては、これを近い将来に国際的な規模で実現できるかどうかという問題が存在しているだけである。

国際的なマルクス主義的組織を実現するためには、まず、さまざまな国で独立のマルクス主義党をつくりだす用意が必要であることは、まったくいうまでもない。ドイツは、労働運動がいちばん古くまた強力な国として、決定的な意義をもっている。新しいマルクス主義的インタナショナルをつくりだす条件がすでに成熟しているかどうかは、遠からぬ将来にわかるだろう。もしそれが成熟しているとすれば、わが党は、日和見主義と排外主義を清掃した、そういう第三インタナショナルに喜んで加入するだろう。もしその条件が成熟していないなら、それは、この清掃をおこなうためには、まだ多少とも長期間にわたる進化が必要だということを、しめすものであろう。その場合には、わが党は、——革命的マルクス主義の基盤に立つ国際労働者協会

の土台がさまざまな国にできあがるまでは――いままでのインタナショナルの内部で最左翼の反対派となるであろう。

ここ数年間に国際的舞台で発展がどのようにすすむかを、われわれは知らないし、また知ることもできない。だが、われわれがたしかに知っていること、われわれが不動の確信をもっていることは、わが党がわが国でわがプロレタリアートのあいだで、右に述べた方向をめざしてうまずたゆまず活動し、その日常活動全体によってマルクス主義的インタナショナルのロシア支部をつくりだすであろうということである。

わがロシアでも、露骨な社会排外派や「中央派」グループには事欠かない。これらの人々は、マルクス主義的インタナショナルの創設に反対してたたかうであろう。われわれは、プレハーノフがジュデクムと同一の原則的基盤に立っていて、いますでに彼にむかって手をさしのべていることを知っている。われわれは、アクセリロードの指導するいわゆる「組織委員会」がロシアを基盤とするカウツキー主義を説いていることを知っている。これらの人々は、労働者階級の統一という口実にかくれて、日和見主義派との統一を、そして彼らを媒介としてブルジョアジーとの統一を説いている。しかし、われわれが現在のロシアの労働運動について知っていることのすべては、ロシアの自覚したプロレタリアートがいままでどおりわが党とともにあるであろうということを、われわれに完全に確信させる。

第四章　ロシアの社会民主主義派の分裂の歴史とその現状

戦争にたいするロシア社会民主労働党の前述の戦術は、ロシアにおける社会民主主義派の三〇年にわたる発展の避けられない結果である。わが党の歴史に思いをひそめることなしには、この戦術も、またわが国における社会民主主義派の現状も、ただしく理解することはできない。だから、われわれは、ここでもこの歴史のなかの基本的な事実を読者に思いおこさせなければならない。

思想上の一潮流としての社会民主主義派は、「労働解放」団が外国ではじめて、ロシアに適用した社会民主主義的見解を系統的に述べた一八八三年に成立した。九〇年代の初めまでは、社会民主主義派はロシア国内の大衆的な労働運動と結びつかず、思想上の一潮流にとどまっていた。九〇年代の初めに、社会的高揚と、労働者のあいだの激動とストライキ運動とが、社会民主主義派を、労働者階級の（経済的ならびに政治的な）闘争と切りはなせないように結びついた、活溌な政治勢力とならせた。そして、まさにこの

時から、「経済主義者」と「イスクラ派」とへの社会民主主義派の分裂がはじまった。

「経済主義者」と旧『イスクラ』（一八九四—一九〇三年）

「経済主義」は、ロシアの社会民主主義派内の日和見主義的な一潮流であった。その政治的な本質は「労働者は経済闘争を、自由主義者は政治闘争を」という綱領に帰着していた。経済主義の主要な理論的支柱となっていたのは、いわゆる「合法マルクス主義」または「ストルーヴェ主義」であって、これは、あらゆる革命精神をとりさり、自由主義的ブルジョアジーの要求に適応させられた「マルクス主義」を「承認していた」。「経済主義者」は、ロシアにおける労働者大衆の未発達を理由として、「大衆とともにすすむ」ことをのぞみ、労働運動の任務と規模を経済闘争と自由主義派を政治的に支持することにかぎろうとし、独自の政治的任務をも、どういう革命的任務をもとりあげなかった。

旧『イスクラ』（一九〇〇—一九〇三年）は、革命的社会民主主義派の原則のために「経済主義」と闘争して勝利を得た。自覚したプロレタリアートの精鋭は、みな『イスクラ』の味方となった。革命の数年前に、社会民主主義派は、最も首尾一貫した、非妥協的な綱領をかかげた。そして、一九〇五年の革命当時の階級闘争、大衆行動は、この綱領の正しかったことを確証した。「経済主義者」は、大衆の後進性に自分を適応させていた。『イスクラ』は、大衆を前方へ導いていくことのできる労働者の前衛を教育した。今日の社会排外派の論拠（大衆を考慮にいれる必要についての、帝国主義の進歩性についての、革命家の「幻想」等々についての）は、すべて経済主義者がすでにかかげていたものである。マルクス主義を日和見主義的につくりかえて「ストルーヴェ主義」とすることは、ロシアの社会民主主義派には、二〇年も前からおなじみのことである。

メンシェヴィズムとボリシェヴィズム（一九〇三—一九〇八年）

ブルジョア民主主義革命の時期は、社会民主党の内部に諸潮流の新しい闘争を生みだしたが、それは以前の闘争の直接の継続であった。「経済主義」は「メンシェヴィズム」に姿をかえた。旧『イスクラ』の革命的戦術を堅持することが、「ボリシェヴィズム」を生みだした。

一九〇五—一九〇七年のあらしの年代には、メンシェヴィズムは、自由主義的ブルジョアの支持をうけ、労働運動内に自由主義的ブルジョア的傾向をつたえた日和見主義的

な一潮流であった。労働者階級の闘争を自由主義派に適応させること――ここにメンシェヴィズムの核心があった。これに反して、ボリシェヴィズムが社会民主主義的労働者の任務としたのは、自由主義派の動揺や裏切りにさからって、民主主義的な農民を革命的闘争に立ちあがらせることであった。そして、メンシェヴィキ自身がいくたびかみとめたように、労働者大衆は、革命時には、あらゆる巨大な行動のさいにボリシェヴィキとともにすすんだ。

一九〇五年の革命は、ロシアにおける非妥協的に革命的な社会民主主義的戦術を検証し、つよめ、ふかめ、きたえた。諸階級と諸政党との公然たる行動は、社会民主主義的な日和見主義（「メンシェヴィズム」）と自由主義との結びつきを、いくたびとなく暴露した。

マルクス主義と解党主義（一九〇八―一九一四年）

反革命の時期は、社会民主主義派の日和見主義的戦術と革命的戦術との問題を、またもや、まったく新しい形で日程にのぼした。メンシェヴィズムの主流は、その多くの最良の代表者たちの抗議にもかかわらず、解党主義の潮流を生みだしたし、ロシアにおける新しい革命をめざす闘争の否認、非合法組織と非合法活動の否認、「地下活動」や共和制のスローガンにたいする嘲笑、等々を生みだした。以前の社会民主党から独立した一つの中核が、雑誌『ナーシャ・ザリャー』の合法的文筆家グループ（ポトレソフ氏、チェレヴァーニン氏など）という形で結集した。この中核は労働者に革命闘争を放棄させようとのぞんでいたロシアの自由主義的ブルジョアジーによって、ありとあらゆる方法で支持され、吹聴され、あまやかされた。

一九一二年のロシア社会民主労働党の一月協議会は、この日和見主義派グループを党から排除し、大小の幾多の在外グループの猛烈な反抗を退けて、党を再建した。二年以上（一九一二年初めから一九一四年の半ばまで）にわたって、二つの社会民主主義政党のあいだに、すなわち、一九一二年一月にえらばれた中央委員会と、一月協議会をみとめず、『ナーシャ・ザリャー』グループとの統一を維持したままで別の形で党を再建しようとのぞんだ「組織委員会」とのあいだに、頑強な闘争がおこなわれた[一四]。二つの日刊労働者新聞（『プラウダ』と『ルーチ』、およびそれらの後継紙）のあいだや、第四国会の二つの社会民主党議員団（プラウダ派すなわちマルクス主義派の「ロシア社会民主党労働者議員団」とチヘイゼをかしらとする解党派の「社会民主党議員団」）のあいだでも、頑強な闘争がおこなわれた。

「プラウダ派」は、党の革命的な遺訓をあくまで忠実にまもり、（とくに一九一二年の春以後に）はじまった労働運動の高揚を支持し、合法組織と非合法組織、出版物と扇動を結合しながら、自覚した労働者階級の圧倒的多数を自分のまわりに結集した。他方、解党派は、――政治勢力としてはもっぱら『ナーシャ・ザリャー』グループとして活動しながら――自由主義的ブルジョア分子の全面的な支持にたよっていた。

この二つの党の新聞にたいする労働者グループの公然の醵金は、この時期にあっては、ロシアの事情に適した（そして、合法的に開放され、だれもが自由に監督できるただ一つの）社会民主党員の党費納入の形態であったが、この醵金は「プラウダ派」（マルクス主義派）の勢力と影響力の源泉がプロレタリアであり、解党派（とその「組織委員会」）のそれがブルジョア自由主義者であることを、まざまざと確証した。つぎにこれらの醵金についての簡単な資料をかかげる。これについては、くわしいことは著書『マルクス主義と解党主義』（二三）にのっており、またその要約が、一九一四年七月二一日付のドイツの社会民主主義新聞『ライプチヒ人民新聞』（二四）〔ライプチガー・フォルクスツァイトウング〕にのっている。

ペテルブルグで発行されるマルクス主義派（プラウダ派）および解党派の日刊新聞にたいする、一九一四年一月一日から五月一三日までの醵金の件数と金額は上の表のとおりである。

	プラウダ派		解党派	
	醵金件数	金額（ループリ）	醵金件数	金額（ループリ）
労働者グループからのもの	2,873	18,934	671	5,296
それ以外のもの	713	2,650	453	6,760

このようにわが党は、一九一四年までに、ロシアの自覚した労働者の五分の四を革命的な社会民主主義的戦術のまわりに結集させたのである。一九一三年の一年間には、労働者グループからの醵金の件数は、プラウダ派が二、一八一、解党派が六六一であった。そこで、一九一三年一月一日から一九一四年五月一三日までの総計では、労働者グループから「プラウダ派」（すなわちわが党）への醵金件数は五、〇五四、解党派への醵金件数は一、三三二、つまり二〇・八％ということになる。

マルクス主義と社会排外主義（一九一四―一九一五年）

一九一四―一九一五年のヨーロッパ大

戦は、すべてのヨーロッパの、またロシアの社会民主主義者に、世界的規模の危機によってその戦術を点検する機会をあたえた。ツァーリズムの場合に、この戦争が反動的、略奪的、奴隷主的な戦争であることは、他の国々の政府の場合よりも、くらべものにならないほど明瞭である。それにもかかわらず、解党派の基本的グループ（自由主義派とのつながりのおかげで、わが党をのぞけば、ロシアで重大な影響力をもつ唯一のグループ）は、社会排外主義に転向してしまった！　かなり長いあいだ合法性を独占していたので、この『ナーシャ・ザリャー』のグループは、「戦争にたいしては無抵抗でいこう」とか、三国協商（いまでは四国協商）側の勝利が望ましいとか、ドイツ帝国主義の「予想外の罪過」を非難すべきであるとかいって、大衆のあいだで宣伝をおこなった。一九〇三年以来、極度の政治的無定見と日和見主義者への寝がえりとの見本をいくたびとなくしめしたプレハーノフは、もっとはっきりとこの立場をとって、ロシアの全ブルジョア出版物の賞讃を博している。プレハーノフは、この戦争をツァーリズムの正義の戦争と公言し、イタリアの政府系新聞に同国の参戦をすすめるインタヴューをのせるまでに落ちぶれたのである!!

こうして解党主義にたいするわれわれの評価が正しく、解党派の主要なグループをわが党から排除したことが正しかったことは、完全に確証された。解党派の真の綱領とこの流派の真の意義は、いまや日和見主義一般にあるだけでなく、彼らが大ロシア人の地主とブルジョアジーの大国的特権と優先権を擁護しているところにもあるのである。これは、国権的自由主義的労働政策の流派である。これは、急進的な小ブルジョアの一部と、特権的な労働者のわずかな部分が、プロレタリアートの大衆に敵対して、「自」国のブルジョアジーとむすんだ同盟である。

ロシア社会民主党内の現状

すでに述べたように、解党派も、幾多の在外グループ（プレハーノフ、アレクシンスキー、トロツキーのグループ、など）も、いわゆる「非ロシア系」（すなわち非大ロシア人系の）社会民主主義者も、一九一二年のわが党の一月協議会をみとめなかった。われわれにあびせられた数しれない悪口のうちでいちばん頻繁に繰りかえされたのは、「横領主義」と「分裂主義」という非難であった。これにたいするわれわれの答えは、わが党こそがロシアの自覚した労働者の五分の四を統合していることを証明する、正確な、客観的な点検にたえる数字を引用することであった。反革命時代における非合法活動のあらゆる困難のもとでは、これはすくなからぬ数字である。

もしロシアで『ナーシャ・ザリャー』のグループを排除しなくとも、社会民主主義的戦術にもとづく「統一」が可能であったとすれば、われわれの多くの反対者たちが、彼らの仲間同士でさえ統一を実現できなかったのは、いったいどういうわけか？　一九一二年一月いらい、まる三年半たった。そして、この全期間中に、われわれの反対者たちは、われわれに対抗して社会民主党をつくろうと切望しながらも、それをつくることができなかった。この事実は、わが党の最良の弁護である。

わが党とたたかう社会民主主義グループの全史は、崩壊と解体の歴史である。一九一二年三月には、すべてのものが「一つになって」われわれを罵った。ところが、すでに一九一二年八月、われわれに対抗していわゆる「八月ブロック」がつくられたときには、すでに彼らのあいだに解体がはじまった。グループの一部は彼らからはなれ去った。彼らは党と中央委員会をつくることができなかった。彼らは、「統一を回復するために」組織委員会をつくったにすぎない。だが、実際には、この組織委員会は、ロシアにおける解党派グループの無力なかくれみのにすぎなかった。一九一二―一九一四年のロシアにおける労働運動の大きな高まりと大衆的ストライキの全期間を通じて、八月ブロック全体のうちで、大衆のなかで活動していた唯一のグループは、依然として『ナーシャ・ザリャー』のグループであったが、このグループの力は自由主義派と結びついていたところにあった。そして、一九一四年初めには、「八月ブロック」からラトヴィアの社会民主主義者（ポーランドの社会民主主義者は同ブロックにはいっていなかった）が正式に脱退し、このブロックの指導者の一人であるトロツキーは、非公式にこのブロックから脱退して、ふたたび独自のグループをつくった。一九一四年七月に、ブリュッセルの会議では、国際社会主義ビューロー執行委員会、カウツキー、ヴァンデルヴェルデの参加のもとに、われわれに対抗していわゆる「ブリュッセル・ブロック」がつくられたが、それにはラトヴィア人は加入せず、ポーランド社会民主党反対派はただちにそれから脱退してしまった。開戦後、このブロックは崩壊した。『ナーシャ・ザリャー』、プレハーノフ、アレクシンスキー、カフカーズの社会民主主義者の指導者アンは、公然たる社会排外派となって、ドイツの敗北がのぞましいと説いている。組織委員会とブンドは、社会排外派と社会排外主義の原則とを擁護している。チヘイゼ派議員団は、軍事公債には反対投票したとはいえ（ロシアではブルジョア民主主義者のトルドヴィキでさえ、それには反対投票した）、依然として『ナーシャ・ザリャー』の忠実な同盟者である。わが国の極端な社会排外派である

プレハーノフ、アレクシンスキーの一派は、チヘイゼ派議員団に完全に満足している。『ナーシャ・ザリャー』、組織委員会、あるいはチヘイゼ派議員団との統一の無条件的な要求と、国際主義のプラトニックな擁護とを両立させようとのぞんでいる、マルトフとトロツキーを主要な参加者として、新聞『ナーシェ・スローヴォ』(以前の『ゴーロス』)が創刊された。二五〇号発行したのち、この新聞自身もその解体をみとめざるをえなかった。すなわち、その編集局の一部はわが党のほうに傾き、マルトフは組織委員会にたいして依然として忠実である。組織委員会は『ナーシェ・スローヴォ』を「無政府主義」呼ばわりして公けに非難している(それは、ちょうどドイツの日和見主義派のダヴィッド一派や『インテルナツィオナーレ・コレスポンデンツ』(二三)やレギーン一派が、同志リープクネヒトを無政府主義呼ばわりして非難しているのと同じである)。トロツキーは組織委員会との絶縁を公言しているが、チヘイゼ派議員団との共同行動をのぞんでいる。つぎに引用するのは、チヘイゼ派議員団の指導者の一人が述べた同派の綱領と戦術である。プレハーノフとアレクシンスキー系の雑誌『ソヴレメンヌイ・ミール』(二〇)一九一五年、第五号で、チヘンケリはこう書いている、「ドイツ社会民主党は自国の軍事行動を妨げる力があったのにそうしなかった、とかたることは、ドイツ社会民主党が、それ自身だけでなく、彼らの祖国までも、バリケードの傍らで最後の息を引きとるのを心ひそかにのぞんでいるか、それともすぐそばにあるものを無政府主義の望遠鏡をとおして見ようとしているか、そのどちらかを意味するであろう*」。

* 『ソヴレメンヌイ・ミール』一九一五年、第五号、一四八ページ。トロツキーは最近、インタナショナルのなかでチヘイゼ派議員団の権威をたかめることを自分の任務と考えている、と言明した。チヘンケリのほうでも、同じように精力的に、インタナショナルのなかでトロツキーの権威をたかめようとするだろうということは、疑いない。……

このわずかな数行に、社会排外主義の本質がすっかり言いあらわされている。すなわち、いまの戦争における「祖国防衛」の思想を原則的に正当化することも、革命の宣伝と準備を――軍事検閲官のお許しをえて――嘲笑することも言いあらわされているのである。しかし、問題は、ドイツ社会民主党が戦争を妨げることができたかどうかにはまったくない。それは、一般に革命家が革命の成功を保証できるかどうかが問題でないのと同じである。問題は、社会主義者として行動するか、それとも、帝国主義的ブルジョアジーに抱擁されて、ほんとうに「息を引きとる」かどうかにある。

わが党の任務

ロシアにおける社会民主党は、わが国のブルジョア民主主義革命（一九〇五年）のまえに誕生し、革命と反革命の時期につよくなった。わが国に小ブルジョア的日和見主義の諸潮流やその各種の色合いが異常に多数あることは、ロシアの後進性によるものである。ところが、戦前のヨーロッパにおけるマルクス主義の影響力と、合法的な社会民主諸党の安定性が、わが国の模範的な自由主義者を、「理性的」、「ヨーロッパ的」（非革命的）、「合法的」な「マルクス主義」理論と社会民主党のほぼ崇拝者にならしめた。ロシアの労働者階級は、日和見主義のあらゆる変種との三〇年にわたる断固たる闘争によることなしには、自分の党をつくりあげることができなかった。ヨーロッパの日和見主義の恥ずべき崩壊をもたらし、わが国の国権的自由主義派と社会排外主義的解党派との同盟を強化した世界戦争の経験は、わが党がこんごも同じような一貫して革命的な道をすすまなければならないという、われわれの確信をいっそうつよめている。

一九一五年七－八月に執筆
一九一五年秋に新聞『ソツィアル・デモクラート』編集局（ジュネーヴ）刊行の単行の小冊子として発表
小冊子のテキストによって印刷
全集、第五版、第二六巻、三〇七－三五〇ページ所収
邦訳全集、第二一巻、三〇一－三四八ページ所収

ヨーロッパ合衆国のスローガンについて

『ソツィアル－デモクラート』[二九]第四〇号で報道しておいた〔全集、第二一巻、一五二ページ〕ように、わが党の在外支部会議[三〇]は「ヨーロッパ合衆国」というスローガンの問題を、この問題の経済的側面が出版物のうえで討議されるまで延期するよう決定した。

　この会議では、この問題についての討論は、一面的性格をおびていた。こういうことになったのは、おそらく、いくぶんかは、中央委員会の宣言のなかでこのスローガンが政治的スローガンとして（「当面の政治的スローガンとして……」と、そこには述べてある）はっきり定式化されており、しかも、共和制的ヨーロッパ合衆国が提起されているばかりでなく、「ドイツ、オーストリア、ロシアの君主制を革命的に打倒しないでは」、このスローガンは無意味であり、ごまかしであると、とくに強調されていたためであろう。

　このスローガンの政治的評価の範囲内では、問題をこのように提起することに反対するのは——たとえば、このスローガンは社会主義革命のスローガンをかげにおしやるか、よわめるなどという見地から反対するのは——まったく誤りである。真に民主主義的な方向をめざした政治的改革、まして政治革命は、どんな場合にも、どんなときにも、どんな条件のもとでも、社会主義革命のスローガンをかげにおしやったり、よわめたりすることはありえない。反対に、政治革命はつねに社会主義革命を近づけ、その基盤をひろげ、小ブルジョアジーと半プロレタリア大衆との新しい層を社会主義的闘争に引きいれるのである。また他方では、政治革命は、社会主義革命の過程では避けられないものである。この社会主義革命は、一回の行為と見てはならず、嵐のような政治的および経済的な震撼（しんかん）、激烈きわまる階級闘争、内乱、革命と反革命の一時代と見なければならない。

　しかし、共和制的ヨーロッパ合衆国のスローガンが、ロシアの君主制を先頭とするヨーロッパの三つの最も反動的な君主制の革命的打倒に結びつけて提起される場合、それは政治的スローガンとしてはまったく非難の余地のないものであっても、なお、このスローガンの経済的内容と意義

という、きわめて重要な問題が残っている。帝国主義の経済的諸条件、すなわち、「先進的」、「文明的」な植民地領有国による資本の輸出と世界の分割という見地からみれば、ヨーロッパ合衆国は、資本主義のもとでは、不可能であるか、そうでなければ反動的である。

資本は、国際的となり、独占的となった。世界は、ひとにぎりの大国のあいだに、すなわち、諸民族を大がかりに略奪し抑圧することに大成功をおさめている強国のあいだに、分配されてしまった。ヨーロッパの四大国、すなわち、人口二億五〇〇〇万から三億、面積約七〇〇〇万平方キロメートルにのぼるイギリス、フランス、ロシア、ドイツは、ほぼ五億（四億九四五〇万）の人口と、六四六〇万平方キロメートルの面積、すなわち地球（極地を除いて、一億三三〇〇万平方キロメートル）のほぼなかばを占める植民地をもっている。これに、「解放」戦争をおこなっている強盗ども、すなわち日本、ロシア、イギリス、フランスによっていまやばらばらに引き裂かれている中国、トルコ、ペルシアという三つのアジア国家をくわえてみたまえ。半植民地（実際には、いまでは一〇分の九まで植民地である）と呼ぶことのできるこのアジアの三国家には、三億六〇〇〇万の人口と、一四五〇万平方キロメートル（すなわち、ヨーロッパ全体の面積のほぼ一倍半）の面積の土地がある。

さらに、イギリス、フランス、ドイツは、七〇〇億ルーブリをくだらない資本を国外に投下している。このまんざらでもない金額からの「正当」な小収入——毎年三〇億ルーブリ以上にのぼる小収入——を手にいれるために、政府と呼ばれる百万長者たちの全国委員会が御用をつとめており、これらの委員会は陸海軍をそなえ、「億万長者氏」のご子息や兄弟を、総督、領事、大使、あらゆる種類の役人、僧侶その他の吸血鬼として、植民地と半植民地に「配置している」のである。

資本主義が最高の発展をとげた時代には、ひとにぎりの大国による約一〇億の地球人口の略奪は、このように組織されている。そして、資本主義のもとでは、これ以外の仕方で組織することは不可能である。植民地、「勢力範囲」、資本輸出を放棄すべきだというのか？　そういうことを考えるのは、日曜ごとにキリスト教の偉大さを金持に説教して、……毎年数十億ルーブリとまではいかなくとも、せめて数百ルーブリを貧乏人に施すようにすすめる坊主の水準に落ちることを意味する。

ヨーロッパ合衆国は、資本主義のもとでは、植民地の分割協定に等しい。だが、資本主義のもとでは、力のほかには、分割の基礎、分割の原則はありえない。億万長者は、比例によるよりほかには、すなわち「資本に応じて」分け

るよりほかにはしかも、巨大資本が当然の取り分以上に受け取れるように、割増づきで)資本主義国の「国民所得」を他のだれかと分けあうことはできない。資本主義は、生産手段の私的所有であり、生産の無政府性である。資本主義とこのような基礎のうえで所得を「公平」に分配するように説くのは、プルードン主義であり、小市民や俗物の愚鈍ぶりである。「力に応じて」分けるよりほかには、分けようがない。ところが、力は、経済的発展がすすむとともに変化するものである。一八七一年以後に、ドイツは、イギリスやフランスよりも三―四倍も急速に強くなった。日本は、ロシアよりも約一〇倍も急速に強くなった。資本主義国家の実力を確かめるためには、戦争よりほかの手段はないし、またありえない。戦争は、私的所有の基礎に矛盾するものではなく、そういう基礎の直接の、避けられない結果である。資本主義のもとでは、個々の経営や個々の国家の経済的発展が均等に成長するということはありえない。資本主義のもとでは、破壊された均衡をときどき回復する手段は、産業における恐慌と政治における戦争よりほかにはありえない。

もちろん、資本家のあいだや、列強のあいだの一時的な協定は可能である。この意味では、ヨーロッパの資本家の協定としてのヨーロッパ合衆国も、可能である。……なにについての協定か? どのようにして共同でヨーロッパの社会主義をおさえつけ、盗みためた植民地をどのようにして日本とアメリカにたいして共同でまもるかということについての協定にすぎない。日本とアメリカは、今日の植民地の分割状態のもとでは非常な不利をこうむっており、しかも、老年のためにくさりはじめた、おくれた、君主制的ヨーロッパよりも、この半世紀のあいだにはかりしれないほど急速に強くなった。アメリカ合衆国にくらべると、ヨーロッパは全体として、経済的停滞を意味している。現代の経済的基礎のうえでは、すなわち資本主義のもとでは、ヨーロッパ合衆国は、アメリカのいっそう急速な発展をおさえるための反動の組織を意味するであろう。民主主義の大業と社会主義の大業とがヨーロッパとだけ結びついていた時代は、またとかえらない過去になった。

世界合衆国(ヨーロッパ合衆国ではなく)は、――共産主義の完全な勝利が、民主主義国家をもふくめて、あらゆる国家を最後的に消滅させるまでは――われわれが社会主義と結びつける、諸民族の連合と自由との国家形態である。だが、独立のスローガンとしては、世界合衆国というスローガンは、おそらく正しくあるまい。第一に、このスローガンは社会主義と合致するからであり、第二には、一国での社会主義が不可能であるというまちがった解釈と、その

ような国と他の国々との関係についてのまちがった解釈を、生みだすおそれがあるからである。

経済的および政治的発展の不均等性は、資本主義の絶対的法則である。ここからして、社会主義の勝利は、はじめは少数の資本主義国で、あるいはただ一つの資本主義国ででも可能である、という結論が出てくる。この国の勝利したプロレタリアートは、資本家を収奪し、自国に社会主義的生産を組織したのち、その他の資本主義世界を向こうにまわして立ち上がり、他の国々の被抑圧階級を自分のほうに引きつけ、それらの国で資本家にたいする蜂起をおこさせ、必要な場合には、搾取階級とその国家にむかって武力にすら訴えるであろう。プロレタリアートがブルジョアジーを打倒して勝利を獲得する場合の社会の政治形態は、民主的共和制であろうが、この民主的共和制は、まだ社会主義に移行していない諸国家にたいする闘争のなかで、当該民族または当該諸民族のプロレタリアートの力をますます集中させるであろう。被抑圧階級の執権（ディクタトゥーラ）、プロレタリアートの執権（ディクタトゥーラ）がなければ、階級を廃絶することは不可能である。もろもろの社会主義共和国が、おくれた諸国家にたいして、多かれ少なかれ長期にわたってねばりづよくたたかわなければ、社会主義のもとでの諸民族の自由な連合は不可能である。

ロシア社会民主労働党在外支部会議の席上と、その会議の後とで何回もこの問題を審議した結果、中央機関紙編集局は、まさに右のような考慮にもとづいて、ヨーロッパ合衆国のスローガンは正しくないという結論に達したのである。

『ソツィアル－デモクラート』第四四号、一九一五年八月二三日
全集、第五版、第二六巻、三五一－三五五ページ所収
邦訳全集、第二一巻、三四九－三五三ページ所収

革命の二つの方向について

『プリズイフ』[三]第三号でプレハーノフ氏は、ロシアのきたるべき革命という基本的な理論問題を提起しようと試みている。彼はマルクスから、フランスの一七八九年の革命は、上向線をたどったが一八四八年の革命は下向線をたどったと述べられている一つの引用をとってきている。第一の場合には、権力はより穏健な政党からより左翼的な政党へと、すなわち、立憲派――ジロンド派――ジャコバン派へと――しだいに移っていった。第二の場合は、その逆である（プロレタリアート――小ブルジョア民主主義派――ブルジョア共和派――ナポレオン三世）。この筆者は、「ロシア革命に上向線をたどらせる」こと、すなわち、権力がはじめにカデットとオクチャブリストへうつり、次にトルドヴィキへ、そのあとで社会主義者へと移っていくことが「望ましい」と、推論している。この議論からひきだされる結論は、もちろん、カデットを支持することをのぞまず、時期尚早に彼らの信用を傷つけようとしているロシアの左派は、愚かであるということなのである。

プレハーノフ氏のこの「理論的」な議論は、マルクス主義を自由主義とすりかえる例をまたしてもしめしている。プレハーノフ氏は、事柄を、先進的分子の「戦略概念」が「正し」かったか、まちがっていたかという問題に帰着させている。マルクスの論じ方はそうではなかった。彼は、事実をしめしたのである。すなわち、革命は二つの場合でそれぞれちがったふうにすすんだ、と。そしてこの違いの説明を、マルクスは「戦略概念」のうちに探しもとめたりはしなかった。マルクス主義の観点からすれば、この違いを概念のなかにもとめることは、こっけいである。それは、諸階級の相互関係の相違のうちに探しもとめなければならない。おなじマルクスは、一七八九年にはフランスではブルジョアジーが農民と結合し、一八四八年には小ブルジョア的民主主義派がプロレタリアートを裏切った、と書いている。プレハーノフ氏は、マルクスのこの意見を知っているが、マルクスを「ストルーヴェ流に」偽造するために、それについては口をとざしている。一七八九年のフランスでは、絶対主義と貴族を打倒することが問題であった。ブルジョアジーは、その当時の政治・経済的発展段階では、

利害の調和を信じていて、自分の支配の強固なことを気づかわず、農民との同盟に応じた。この同盟が革命の完全な勝利を保証したのである。一八四八年には、プロレタリアートがブルジョアジーを打倒することが問題であった。プロレタリアートは、小ブルジョアジーを自分のほうに引きつけることに成功しなかった。そして小ブルジョアジーの裏切りが革命を敗北させたのである。一七八九年の上向線は、人民大衆が絶対主義に勝った革命の形態であった。一八四八年の下向線は、小ブルジョアジーの大衆がプロレタリアートを裏切って革命を敗北させた革命の形態であった。

プレハーノフ氏は、マルクス主義を俗流観念論とすりかえ、問題を諸階級の相互関係にではなく「戦略概念」に帰着させた。

一九〇五年のロシア革命とその後の反革命時代との経験がものがたっているように、わが国には、プロレタリアートと自由主義的ブルジョアジーという二階級が、大衆に指導的な影響力をおよぼすために闘争したという意味で、革命の二つの方向が見られた。プロレタリアートは革命的に行動し、君主制と地主を打倒するために民主主義的な農民をひきいていった。農民が、民主主義という意味で革命的な志向を発揮したことを、すべての政治的大事件は大規模に証明している。一九〇五—一九〇六年の農民蜂起も、同年の軍隊騒擾も一九〇五年の「農民同盟」も、農民トルドヴィキが「カデットよりも左翼的」に行動したばかりでなく、インテリゲンツィアの社会革命派やトルドヴィキよりも革命的に行動した第一国会と第二国会も、そういう事件である。これは、残念なことには、しばしばわすれられている。しかし、これは事実である。第三国会でも第四国会でも、農民トルドヴィキは、彼らとしては非常に弱かったにもかかわらず、農民大衆が地主反対の気分をもっていることをしめした。

ロシアのブルジョア民主主義革命の第一の方向は、「戦略的」なおしゃべりからでなくもろもろの事実からとってくるならば、プロレタリアートが断固としてたたかい、農民がそのあとをためらいながらすすんだ、ということにあった。この両階級は、君主制と地主に反対してすすんだ。この二階級の力と決意との不足が、敗北をまねいたのである（それでも専制に部分的な突破口があけられはしたが）。

第二の方向は、自由主義的ブルジョアジーの行動であった。われわれボリシェヴィキはつねに、とくに一九〇六年の春から言ってきた、——自由主義的ブルジョアジーを代表しているのは、統一した勢力としてのカデットとオクチャブリストである、と。一九〇五—一九一五年の一〇年間は、われわれの見解を確証した。闘争の決定的な瞬間に、

カデットはオクチャブリストといっしょに、民主主義派を裏切り、ツァーリと地主をたすけることに「乗りだした」。ロシア革命の「自由主義的」な方向は、ブルジョアジーと君主制とを和解させるために、大衆闘争を「落ちつかせ」、ばらばらにすることであった。ロシア革命の国際的情勢も、ロシアのプロレタリアートの力も、自由主義者のこのような行動を避けられないものにした。

ボリシェヴィキは、プロレタリアートが第一の方向をすすみ、限りない大胆さでたたかい、農民をひきいていくのをたすけた。メンシェヴィキは、たえず第二の方向に転落していき、ブルィギン国会（一九〇五年八月）にはいることをすすめることにはじまり、一九〇六年のカデット内閣、一九〇七年の民主主義派に反対するカデットとのブロックにいたるまで、プロレタリアートの運動を自由主義派に迎合させることによってプロレタリアートを堕落させた。（ついでながらいえば、プレハーノフ氏の見地からみて「正しい」、カデットとメンシェヴィキの「戦略概念」は、そのとき敗北をなめた。なぜか？　なぜ大衆は、ボリシェヴィキの助言よりも百倍もひろまっていたカデットの助言と賢明なプレハーノフ氏に耳をかさなかったのであろうか？）。

このボリシェヴィキ的潮流とメンシェヴィキ的潮流だけ、ただこれだけが、一九〇四―一九〇八年にも、その後の一九〇八―一九一四年にも、大衆の政治のうちに姿を表わした。なぜか？　なぜなら、この二つの潮流だけが強固な階級的根源を、第一の潮流はプロレタリア的な根源を、第二の潮流は自由主義ブルジョア的な根源を――もっていたからである。

いまやわれわれは、ふたたび革命にむかってすすんでいる。このことはだれでも知っている。フヴォストフ自身、農民の気分は一九〇五―一九〇六年を思いおこさせると言っている。そして、ふたたび、われわれのまえには革命のおなじ二つの方向、諸階級のおなじ相互関係がある。ただ国際情勢の変化によって形がかわっただけである。一九〇五年には、ヨーロッパのブルジョアジー全体がツァーリズムに味方し、あるもの（フランス人）は数十億の金によって、あるもの（ドイツ人）は反革命軍を用意することによって、ツァーリズムをたすけた。一九一四年にはヨーロッパ戦争が燃えあがった。ブルジョアジーは、一時、いたるところでプロレタリアートに勝ち、彼らに民族主義と排外主義の濁流をはねかけた。ロシアでは、小ブルジョア的な人民大衆、主として農民が、いままでどおり住民の大多数をしめている。彼らは、第一に地主から抑圧されている。彼らは、一部のものは政治的にねむっており、一部のもの

は、排外主義（「ドイツにたいする勝利」、「祖国防衛」）とが勝利する完全な可能性の客観的基礎がある。われわれには、西ヨーロッパで社会主義革命の客観的条件が完全に成熟しているということをここで証明する必要はない。それは、すべての先進国のすべての有力な社会主義者が、戦前にみとめていたことである。

革命精神のあいだを動揺している。これらの大衆の政治的代表者は、一方ではナロードニキ（トルドヴィキと社会革命派）であり、他方では、一九一〇年からは決定的に自由主義的な労働政策の道を転落しはじめて、一九一五年にはポトレソフ、チェレヴァーニン、レヴィツキー、マスロフの諸君の社会排外主義まで、あるいは彼らとの「統一」の要求まで転落してしまった、日和見主義的な社会民主主義者（『ナーシェ・デーロ』、プレハーノフ、チヘイゼ派議員団、組織委員会）である。

こういう実状から、プロレタリアートの任務が明瞭にでてくる。すなわち、君主制に反対する限りなく勇敢な革命的闘争をおこなうこと（一九一二年一月協議会のスローガン、「三つの柱」）、――すべての民主主義的大衆、すなわち主として農民をひきつけていく闘争をおこなうこと。だが、同時に排外主義と容赦なくたたかい、ヨーロッパのプロレタリアートと同盟してヨーロッパの社会主義革命のためにたたかうこと。小ブルジョアジーの動揺は、偶然なものではなく、避けがたいものである。それは、小ブルジョアジーの階級的地位からでてくる。軍事的危機は、小ブルジョアジー――農民をもふくめた――を左傾させる政治・経済的要因をつよめた。この点に、ロシアで民主主義革命

きたるべき革命における諸階級の相互関係を解明することは、革命党の主要な任務である。ロシア国内で依然として『ナーシェ・デーロ』の忠実な同盟者であり、国外ではなんの意味もない「左翼的」な言辞を弄している組織委員会は、任務から逸脱している。トロツキーは、『ナーシェ・スローヴォ』のなかでこの任務をまちがった仕方で解決している。彼は一九〇五年の彼の「独創的」な理論を繰りかえしていて、どんな理由で、実生活がまる一〇年もこのすばらしい理論を素通りしてきたかを考えてみようとしない。

トロツキーの独創的な理論は、ボリシェヴィキからは、プロレタリアートの断固たる革命的闘争への呼びかけと、プロレタリアートによる政治権力の獲得への呼びかけとをとり、メンシェヴィキからは、農民の役割の「否定」をとってきている。彼がいうには、農民は階層的にわかれ、分化した。農民の革命的役割の可能性は、ますます減退した。ロシアでは「国民」革命はありえない。「われわれは、帝国主義の時代に生きている」。ところが「帝国主義は、ブ

ルジョア的国民を旧制度に対置しないで、プロレタリアートをブルジョア的国民に対置させる」と。

これこそ、帝国主義という「言葉をもてあそぶ」こっけいな一例である！　ロシアですでにプロレタリアートが「ブルジョア的国民」に対立しているとすれば、ロシアは直接に社会主義革命に当面していることになる!!　そうなれば、「地主の土地の没収」（一九一二年一月の協議会でさだめられ、トロツキーが一九一五年に繰りかえしている）というスローガンは、正しくない。そうなれば、「革命的労働者政府」ではなく「社会主義的労働者」政府を問題としなければならない!!　トロツキーの混乱が、どういう限度に達しているかは、彼の次の文句からわかる。プロレタリアートは、「非プロレタリア（！）人民大衆」（第二一七号）をも断固としてひきつける!!　と。トロツキーは、プロレタリアートが地主の土地を没収し、君主制を打倒するために、農村の非プロレタリア大衆をひきつけるなら、これこそ、ロシアにおける「国民的ブルジョア革命」の完成であり、これこそ、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権（ディクタツーラ）であるということを、考えなかったのだ！

一九〇五―一九一五年の全一〇年間――偉大な一〇年間――は、ロシア革命の二つの、しかもただ二つの階級的方向があることを証明した。農民が階層分化したことは、農民内部の階級闘争をつよめ、政治的にねむっていた非常に多くの分子をめざめさせ、都市のプロレタリアートに農村のプロレタリアートを近づけた（ボリシェヴィキは一九〇六年から、農村のプロレタリアートの特殊な組織をつくることを主張し、この要求をメンシェヴィキ的なストックホルム大会の決議にいれた）。しかし、「農民」とマルコフら――ロマノフら――フヴォストフらとの敵対はつよまり、増大し、激化した。これは明白な真理であるから、トロツキーがパリで書いた数十の論文のなかの何千という文句でさえ、この真理を「くつがえす」ことはできない。トロツキーは、実際にはロシアの自由主義的労働者政治家をたすけている。彼らは、農民の役割の「否定」とは、農民を革命に立ちあがらせることをのぞまないことだと理解しているのだ！

ところで、いまではこの点に問題の核心がある。プロレタリアートは、権力獲得のため、共和制のため、土地没収のため、すなわち、農民をひきつけるため、農民の革命的な力を汲みつくすため、軍事的＝封建的「帝国主義」（＝ツァーリズム）からブルジョア的ロシアを解放することに「非プロレタリア人民大衆」を参加させるために、現にたたかっているし、将来も献身的にたたかうであろう。そして、プロレタリアートは、ブルジョア的ロシアをツァーリ

ズムから、地主の土地と権力からこのように解放することをただちに利用するが、それは、富農が農村労働者とたたかうのをたすけるためではなく、ヨーロッパのプロレタリアートと同盟して社会主義革命を遂行するためである。

『ソツィアル－デモクラート』第四八号、一九一五年一一月二〇日
新聞『ソツィアル－デモクラート』のテキストによって印刷
全集、第五版、第二七巻、七六－八一ページ所収
邦訳全集、第二一巻、四二八－四三四ページ所収

エヌ・ブハーリンの小冊子『世界経済と帝国主義』の序文

エヌ・イ・ブハーリンのこの労作のあつかっているテーマが、重要で緊切なものであることについては、とくに説明する必要はない。帝国主義の問題は、現代における資本主義の形態の変化を究明する経済科学の分野での、最も本質的な諸問題の一つであるばかりでなく、むしろ、いってみれば、最も本質的な問題である。これに関係ある諸事実、著者が最近の材料にもとづいて非常に豊富に拾いあつめている諸事実を知っておくことは、経済だけでなく現代の社会生活のなんらかの分野に関心をもっているすべての人にとって、無条件に必要である。いうまでもなく、現在の戦争を具体的＝歴史的に評価することは、もし帝国主義の本質をその経済的側面からも、政治的側面からも完全に解明

することをその評価の基礎としなければ、問題にさえなりえない。そうしなければ、この数十年の経済史と外交史の理解に近づくことはできないし、またこのような理解に近づかなければ、正しい戦争観をつくりあげるなどということは、口にするのもこっけいである。マルクス主義は、この問題で現代科学一般の諸要求をとくにくっきりと表現しているのであって、このマルクス主義の見地からすれば、一国の支配階級の気にいるか、あるいは彼らに都合のよい個々の事実を外交「文書」や今の政治的事件、等々のなかから抜きだすことを、戦争の具体的＝歴史的評価と理解するような方法の「科学的」意義などというものは、嘲笑をまねくだけのものでしかない。たとえば、ゲ・プレハーノフは、高度に発展した、成熟し爛熟した、最新の資本主義の経済関係の体系としての帝国主義の基本的な性質と傾向を分析するかわりに、ミリュコフをもふくむプリシケーヴィチ一派の気にいるような二―三の事実をあさったのだが、そうするためには、彼はマルクス主義と完全に手を切らなければならなかったのである。この場合帝国主義の科学的概念は、いま名をあげた二人の帝国主義者が、その敵手や反対者とまったく同じ階級的基盤にたちながら、直接の競争相手、敵手、反対者にたいしてはく悪罵の表現というようなものに引きさげられている！　言ったことがわすれられ、原則が失われ、世界観がくつがえされ、決議や厳粛な約束が顧みられないいまの時世では、これも、驚くにあたらない。

エヌ・イ・ブハーリンの労作の特別な科学的意義は、彼が全体としての、最高度に発展した資本主義の一定の段階としての帝国主義にかかわりのある世界経済の基本的な諸事実を考察しているところにある。相対的に「平和」な資本主義の時代があった。その当時、資本主義はヨーロッパの先進諸国では封建制を完全に征服し、最も――比較的に――平穏に、スムースに発展することができ、まだ占取されていない土地や資本主義の渦巻のなかに最終的に引きこまれていない諸国の広大な領域へ「平和」に拡大していった。もちろん、ほぼ一八七一―一九一四年をもって画されるこの時代でも、「平和」な資本主義は、軍事的な意味でも一般階級的な意味でも、真の「平和」とはほど遠い生活条件をつくりだしていた。先進国の住民の一〇分の九にとっては、植民地、後進国の何億もの住民にとっては、この時代は「平和」ではなく、抑圧、苦悩、恐怖であって、この恐怖は「終りのない恐怖」のように見えたから、たぶん、いっそう恐ろしいものであったであろう。この時代はまたとかえらぬ過去となった。この時代には、比較的にはるかに突発的で、飛躍的で、破局的で、トラブルの多い時代が

とってかわったが、この時代には「終りのない恐怖」よりも、むしろ「恐ろしい終末」が住民大衆にとって典型的なものとなりつつある。

この場合、この交代は、資本主義と商品生産一般の最も奥深い、根本的な諸傾向の直接の発展、拡大、継続以外のなにものによってもひきおこされたものでないことを、念頭におくことがきわめて重要である。交換の発展、大規模生産の発展——これが、数世紀にわたって文字どおり全世界で見うけられる基本的な傾向である。そして交換の一定の発展段階で、大規模生産の一定の発展段階で、すなわち、ほぼ一九世紀と二〇世紀の境目で到達された段階で、交換は、経済関係を大いに国際化し、資本を国際化し、大規模生産は非常に大規模なものになったので、自由競争にかわって独占が現われはじめたのである。典型的なものとなったのは、もはや、自由に競争する——国内で、また諸国間の関係で——企業ではなく、企業家の独占団体、トラストであった。世界の典型的な「支配者」となったのは、すでに金融資本であった。この金融資本は、とくに可動的で柔軟であり、一国内的にも国際的にも、とくに絡みあっており、とくに無性格的であり、直接的生産から切りはなされており、とくに集積されやすく、しかもすでにとくにはなはだしく集積されているので、文字どおり数百人の億万長者や百万長者が全世界の運命をその手ににぎっているのである。

抽象理論的に論じるなら、カウツキーが——いくらかちがったふうに、だがやはりマルクス主義を捨てさって——到達した結論、すなわち、国家的に分立した金融資本の競争を国際的に統合された金融資本でおきかえる単一の世界トラストに、これらの巨頭資本家が世界的に統合されることも、もうそれほど遠い先のことではないという結論にも、到達することができる。しかしこのような結論は、前世紀の九〇年代のわがロシアの「ストルーヴェ主義者」や「経済主義者」の同様な結論と同程度に抽象的であり、単純化されており、まちがっている。当時彼らは、資本主義は進歩的なものであり、不可避的なものであり、ロシアでもそれは最後には勝利するということから、ときには弁護論的な結論（資本主義にひざまずき、資本主義と和解し、それと闘争するかわりに賛美すること）を、ときには非政治主義的な結論（すなわち政治を否定し、あるいは政治の重要性、全政治的激動の蓋然性等々を否定すること、——これは「経済主義者」に特有の誤りである）を、ときにはあらわに「ストライキ主義的」な結論（「ゼネラル・ストライキ」をストライキ運動の大詰と見ること、これは他の運動形態を忘れまたは無視するまでなり、また資本主義からま

っすぐに、純粋にストライキによって、ストライキだけによって、資本主義の克服へ「飛躍」すると見る）さえ、ひきだしたのである。自由競争というなかば小市民的な「天国」にくらべて資本主義は進歩的であり、帝国主義は不可避的なものであり、世界の先進諸国ではそれは「平和な」資本主義に最後には勝利するという、争う余地のない事実が、いまでも、まことに無数の多様な政治的および非政治主義的な誤りや不幸をもたらしかねないという徴候がある。

とくに、カウツキーにあっては、マルクス主義とのはっきりした絶縁は、政治の否定あるいは忘却という形態ではなく、とくに帝国主義の時代の無数の多様な政治的紛争、激動、改造を「飛びこえる」という形態ではなく、また帝国主義の弁護論という形態ではなくて、「平和な」資本主義の夢想という形態をとっている。「平和な」資本主義が非平和的な、好戦的な、破局的な帝国主義と交代するということ、——これはカウツキーもみとめざるをえなかったところである。というのは、彼はこのことを、すでに一九〇九年に特別の著述(三三)——彼がマルクス主義者としてまとまりある結論をもって執筆した最後のもの——のなかでみとめていたからである。だが、帝国主義から「平和な」資本主義への復帰をあっさりと、あからさまに、やや粗雑に夢想することはできないにしても、本質的には同じ小ブルジョア的な夢想に、「平和な」「超帝国主義」うんぬんという無邪気な思索という形態をあたえることはできないものだろうか？　戦争とか政治的激動等々のような、小ブルジョアにとってとくにこのましくない、とくに物騒で不穏な紛争を取りのぞき「うるかもしれない」、個々の国の（もっと正確に言えば、国際的に分立した）帝国主義の国際的な結合を超帝国主義と名づけるとすれば、比較的平和な、比較的紛争のない、比較的破局的でない「超帝国主義」の無邪気な夢想によって、帝国主義の今日の、すでに到来した、現に存在している、非常に紛争の多い、破局的な時代を回避することが、どうしてできないだろうか？　ヨーロッパにとって到来した帝国主義時代は、おそらくすぐに過ぎさるだろうとか、おそらく、この時代のあとには比較的「平和な」、「きびしい」戦術を必要としない、「超帝国主義」の時代がやってくることがなお考えられるだろうとか夢想することによって、帝国主義の時代がいま提起しており、またすでに提起した「きびしい」任務を回避することはできないだろうか？　カウツキーはまさにそのことを、「いずれにしても資本主義のこのような（超帝国主義的な）新しい段階は考えられる」が、「それが実現されるかどうか、これをきめるには、まだ十分な前提がない」（『ノイエ・ツァイト(三四)』一九一五年四月三〇日、一四四ページ）と言って

いるのである。

すでに到来した帝国主義を回避して、実現されるかどうかわからない「超帝国主義」へ夢想によって逃避しようとするこの志向のうちには、マルクス主義のひとかけらもない。この理論構成のなかでは、その案出者自身もそれが実現可能であるとは保証していないあの「資本主義の新しい段階」についてはマルクス主義の有効性がみとめられているが、しかしすでに到来したいまの段階については、マルクス主義のかわりに、矛盾を鈍くさせようとする小ブルジョア的な、根底から反動的な志向がもちだされているのである。カウツキーは、きたるべき、尖鋭な、破局的な時代にはマルクス主義者となると約束したが、じつはこの時代は、彼がこのきたるべき時代について一九〇九年の著述を書いたときには、彼もまったく明確に予見しみとめざるをえなかったものである。ところが、この時代の到来したことがすでに絶対に疑う余地のないものとなったいま、カウツキーはまたもや、きたるべき、実現されるかどうかわからない超帝国主義の時代にはマルクス主義者になると、約束だけしているのである！　ひとことで言えば、いまではなく、現在の諸条件のもとではなく、この時代ではなく、別の時代にマルクス主義者となる約束なら、いくらでもするのである！　信用買いのマルクス主義、口約束のマルクス主義、あすにとっておくマルクス主義であり、きょうのところは、矛盾を鈍く見せる小ブルジョア的、日和見主義的な理論——しかも理論にとどまらないが——なのである。これは、「当世」非常にひろまっている、一種の輸出用国際主義である。その場合、熱情的な——おお、非常に熱情的な！——国際主義者やマルクス主義者は、国際主義のどんな現われにでも共鳴するが……ただそれは敵陣営における現われであって、自分のおひざもと、自分の同盟者のところだけは別である。彼らはまた、民主主義が「同盟者」の約束にとどまっているときには……民主主義に共鳴する。彼らはまた「民族自決」に共鳴する。ただし、光栄なことには同胞市民のあいだに共鳴者をもっている民族に従属している民族の「自決権」だけは別である……ひとことで言えば、これは、偽善の千一の変種の一つである。

しかし、帝国主義のあとに資本主義の新しい段階、すなわち超帝国主義が抽象的には「考えられる」ということに異論をさしはさむことができるだろうか？　いや、できない。このような段階を抽象的に考えることはできる。ただ、実践においては、これは、未来のおだやかな任務を夢想するために、現在のはげしい任務を否定する日和見主義者となることを意味する。理論においては、これは、現実のうちにすすんでいる発展に依拠しないで、こういう夢想のた

めに、この発展から勝手に目をそらすことを意味する。発展が、例外なくすべての企業と例外なくすべての国家を吸収する、ただ一つの世界トラストの方向へすすんでいることは、疑う余地がない。だが発展は、あのような情勢のもとで、あのようなテンポで、あのような矛盾、紛争、激動――けっして経済的ばかりでなく、政治的、民族的、その他等々の――のもとで、この方向へすすんでいるので、事態が一つの世界トラストに、すなわち個々の国の金融資本の「超帝国主義的」な世界的統合にいきつくまえに、きっと、帝国主義は不可避的に崩壊するにちがいないし、資本主義はその対立物に転化するであろう。

一九一五年一二月　　ヴェ・イリイン

一九二七年一月二一日にはじめて
新聞『プラウダ』第一七号に発表
手稿によって印刷
全集、第五版、第二七巻、九三―九八ページ所収
邦訳全集、第二二巻、一一二―一一八ページ所収

社会主義革命と民族自決権（テーゼ）

一　帝国主義、社会主義および被抑圧民族の解放

帝国主義は、資本主義の最高の発展段階である。先進諸国の資本は、民族国家のわくをはみだして成長し、競争を独占におきかえ、社会主義実現のためのあらゆる客観的な前提条件をつくりだした。それゆえに、西ヨーロッパとアメリカ合衆国では、資本家政府をうちたおしブルジョアジーを収奪するためのプロレタリアートの革命的闘争が日程にのぼっている。帝国主義は、階級矛盾を大規模に激化させ、経済関係でも――トラスト、物価騰貴――、政治関係でも――軍国主義の増大、戦争の頻発、反動の強化、民族的抑圧および植民地略奪の強化と拡大――大衆の状態を悪化させて、大衆をこのような闘争へ駆りたてている。勝利

をしめた社会主義は、かならず完全な民主主義を実現しなければならない。したがって、諸民族の完全な同権を実行するばかりでなく、被抑圧民族の自決権、すなわち自由な政治的分離の権利をも実現しなければならない。奴隷化された諸民族を解放し、自由な同盟——ところで、分離の自由なしには、自由な同盟はごまかし文句にすぎない——にもとづいてこれらの民族との関係をうちたてることを、現在、革命中にも、革命の勝利のあとにも、そのすべての活動によって証明しないような社会主義諸党は、社会主義を裏切るものであろう。

もちろん、民主主義もまた国家の一形態であって、この形態は国家が消滅するときには消滅しなければならないが、しかし、終局的に勝利をしめ、強固になった社会主義から完全な共産主義への過渡期にはじめてそうなるであろう。

二　社会主義革命と民主主義のための闘争

社会主義革命は、ただ一回の行為でも、一つの戦線でのただ一回の戦闘でもなく、幾多の激烈な階級衝突からなる一時代であり、あらゆる戦線での、すなわち、経済や政治のあらゆる問題についての戦闘の、ブルジョアジーの収奪によってはじめて完了することができる戦闘の長い系列である。民主主義のための闘争は、プロレタリアートを社会主義革命からそらせるか、あるいは、それをさえぎり、あいまいにする恐れがあるなどと考えるのは、根本的に誤りであろう。反対に、勝利をしめた社会主義が完全な民主主義を実現しないということはありえないのと同様に、民主主義のための全面的な、一貫した革命的な闘争をおこなわないプロレタリアートは、ブルジョアジーにたいする勝利にそなえることはできないのである。

民主主義的綱領の諸条項の一つ、たとえば民族自決の条項は、帝国主義のもとでは「実現できない」とか「幻想」であるかのようにいう理由で、この条項を削除することも、これにおとらぬ誤りであろう。資本主義の限界内では民族自決権は実現できないという主張は、絶対的、経済的な意味にもとれるし、条件的、政治的な意味にもとれるのである。

前者の場合には、この主張は、理論のうえでは、根本的に誤りである。第一に、資本主義のもとでこのような意味で実現できないのは、たとえば、労働貨幣、もしくは恐慌の絶滅などである。民族自決もまたこれらと同じように実現できないというのは、まったくまちがいである。第二に、一九〇五年にスウェーデンからノールウェーが分離した一

例だけでも、こういう意味での「実現不可能性」を反駁するのに十分である。第三に、たとえば、ドイツとイギリスの政治上や戦略上の相互関係がすこし変化すれば、きょうあすにもポーランド、インド、その他の新国家の形成が完全に「実現可能」であることを否定するのは、こっけいであろう。第四に、金融資本は、その膨張欲から、任意の国で、それがたとえ「独立」国であろうとも、最も自由な民主主義政府や、共和主義政府や選出された官吏を「自由」に買収し籠絡するであろう。金融資本の支配は、資本一般の支配と同じように、政治的民主主義の分野におけるどういう改革によっても排除できない。ところで、自決は、まったく、もっぱらこの分野に関係のあるものである。しかし、金融資本のこういう支配があるからといって、階級抑圧と階級闘争とのより自由な、広範な、そして明瞭な形態としての政治的民主主義の意義は、すこしもなくならないのである。だから、資本主義のもとでは政治的民主主義の諸要求の一つが経済的な意味で「実現できない」という議論はすべて、結局は、一般に資本主義と政治的民主主義との一般的および基本的な諸関係を理論上まちがって規定することになるのである。

第二の場合には、この主張は不完全であり、不正確である。なぜなら、民族自決権にかぎらず、政治的民主主義のあらゆる根本的な要求は、帝国主義のもとでは、不完全な、不具な形でしか、またまれな例外（たとえば一九〇五年におけるスウェーデンからのノールウェーの分離）としてしか「実現できない」。あらゆる革命的な社会民主主義者が提出している植民地の即時解放の要求もまた、資本主義のもとでは、一連の革命なしにはやはり「実現できない」のである。しかし、だからといって、社会民主党が、これらすべての要求をめざす、即時の、最も断固たる闘争を放棄することには、けっしてならないのである——これを放棄すれば、ブルジョアジーと反動派を利するだけであろう。まさにその反対に、すべてこれらの要求を改良主義的でなしに革命的に定式化し実行することが必要である。すなわち、ブルジョア的合法性の枠に制限されずに、それを打破し、議会演説や口さきだけの抗議に満足しないで、大衆を積極的な行動に引きいれ、あらゆる根本的な民主主義的要求のための闘争を拡大し燃えあがらせて、ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの直接の強襲に、すなわちブルジョアジーを収奪する社会主義革命に導かなければならない。社会主義革命は、大ストライキや、街頭のデモンストレーションや、飢餓一揆や、軍事的蜂起や、植民地の反乱だけからでなくとも、燃えあがりうるのである。（一三）それは、また、ドレフュス事件（一三）や、ツァーベルン事件のような、ど

んな政治的危機からでも、あるいは被抑圧民族の分離問題にかんする人民投票などと結びついても、燃えあがりうるのである。

帝国主義のもとでの民族抑圧の強化は、社会民主党が民族の分離の自由のための――ブルジョアジーに言わせると――「空想的」な闘争を放棄する条件となるものではなく、反対に、この基盤のうえでも発生する諸衝突を、大衆行動の、またブルジョアジーにたいする革命的行動のきっかけとしていっそう強力に利用する条件となるのである。

三　自決権の意義。自決権と連邦制との関係

民族自決権とは、もっぱら政治的意味での独立権を意味し、抑圧民族から自由に政治的に分離する権利を意味するだけである。具体的には、政治的民主主義のこの要求は、分離のための扇動をおこなう完全な自由を意味し、分離しようとしている民族の人民投票によって分離問題を決定することを意味している。だから、この要求は、けっして分離、細分、小国家の形成の要求と同じではない。この要求は、あらゆる民族的抑圧にたいする闘争の首尾一貫した表現を意味するにすぎない。民主主義的な国家制度が分離の完全な自由に近づけば近づくほど、実際には、分離の欲求はそれだけすくなくなり、弱くなるであろう。というのは、経済上の進歩の見地からしても、大衆の利益の見地からしても、大国家が有利なことは疑いなく、これらの利点はすべて資本主義の発展とともに増大するからである。自決の承認は、原則として連邦制を承認することと同じではない。この〔連邦制の〕原則の断固たる反対者であり、民主主義的中央集権制の支持者でありながら、しかも、完全な民主主義的中央集権制にいたる唯一の道として、民族の権利の不平等よりも連邦制のほうをえらぶことがありうる。マルクスが、中央集権論者でありながら、イギリス人によるアイルランドの強制的従属化よりもアイルランドとイギリスとの連邦制のほうをえらんだのは、まさにこの見地からであった〔第八巻、五一二ページ〕。

社会主義の目的とするところは、小国家への人類の細分状態と諸民族のあらゆる分立とをなくし、諸民族の接近をはかるばかりか、さらに諸民族を融合させることである。そして、この目的を達成するためにこそ、われわれは、一方では大衆にむかってレンナーやO・バウアーのいわゆる「文化的民族自治」〔三〕という思想の反動性を説明し、他方では被抑圧民族の解放を要求しなければならないのであるが、それは、一般的な、あいまいな文句や、無内容の大言壮語

によってでなく、問題を社会主義〔の時代〕まで「延期」するといった形でではなく、抑圧諸民族の社会主義者の偽善と臆病とをとくに考慮にいれた、明白に、また正確に定式化された政治綱領によってこれを要求しなければならないのである。人類は、被抑圧階級の執権（ディクタツーラ）のおこなわれる過渡期を通じてはじめて階級の廃絶に到達できるのであるが、それと同じように、人類は、すべての被抑圧民族の完全な解放、すなわち、それらの民族の分離の自由のおこなわれる過渡期を通じてはじめて、諸民族の不可避的な融合に到達できるのである。

四　民族の自決の問題のプロレタリア的〃革命的な提起の仕方

民族自決の要求ばかりでなく、われわれの民主主義的最小限綱領のすべての条項は、以前にすでに一七世紀と一八世紀に、小ブルジョアジーによって提起されていた。そして今日にいたるまで、小ブルジョアジーは、民主主義のもとでの階級闘争とこの闘争の促進とを認めないで、「平和」な資本主義を信じながら、これらすべての条項を空想的に提起している。カウツキー派が擁護している、帝国主義のもとでの同権の諸民族の平和な同盟という、人民欺瞞の空想がまさにこれである。この小市民的、日和見主義的な空想に対抗して、社会民主党の綱領は、抑圧民族と被抑圧民族への諸民族の分裂を、帝国主義のもとでの基本的な、最も本質的な、不可避的なものとして、提出しなければならない。

抑圧民族のプロレタリアートは、どんな平和主義的なブルジョアでも繰りかえし口にしている、一般的な、千篇一律の併合反対の空文句や、民族同権一般に賛成の空文句にとどまっているわけにはいかない。プロレタリアートは、民族的抑圧にもとづく国家の境界という、帝国主義的ブルジョアジーにとってとくに「不愉快」な問題をだまって回避するわけにはいかない。プロレタリアートは、その国家の境界内に被抑圧諸民族を暴力的にひきとめておくことに反対してたたかわざるをえないが、これこそ、自決権のためにたたかうことを意味する。プロレタリアートは、「自国の民族によって抑圧されている植民地および諸民族の政治的分離の自由を要求しなければならない。そうしない場合には、プロレタリアートの国際主義は、からっぽな口さきだけのものにとどまるだろう。また、被抑圧民族の労働者と抑圧民族の労働者とのあいだの信頼も、階級的連帯も、不可能であろう。そして、「自分自身」の民族によって抑圧され、「自分自身」の国家のうちに暴力的にひきとめら

れている諸民族について沈黙している改良主義的、カウツキー主義的な自決擁護論者の偽善は、暴露されないままであろう。

他方では、被抑圧民族の社会主義者は、抑圧民族の労働者と被抑圧民族の労働者との完全な無条件の統一――組織的な統一をもふくむ――を、とくに強く主張し、それを実現しなければならない。これなしには、ブルジョアジーのありとあらゆる奸策、裏切り、ぺてんのもとで、プロレタリアートの独自の政策、他の諸国のプロレタリアートと彼らとの階級的連帯を、まもりぬくことはできない。というのは、被抑圧民族のブルジョアジーは、いつも民族解放のスローガンを、労働者欺瞞の手段に変えているからである。国内政策では彼らは、これらのスローガンを支配民族のブルジョアジーとの反動的な協定に利用する（たとえば、オーストリアとロシア国内のポーランド人は、ユダヤ人とウクライナ人を抑圧するために反動派と取引をやっている）。対外政策では、自分の略奪目的を実現するために、被抑圧民族のブルジョアジーは、たがいに競争しつつある帝国主義列強のうちの一国と協定をむすぼうとつとめている（バルカンその他における諸小国家の政策）。

一つの帝国主義強国にたいする民族的自由のための闘争は、一定の条件のもとでは、他の「大」国によってその同じように帝国主義的な目的に利用されうるという事情があるからといって、社会民主党は民族自決権の承認を放棄するわけにはいかない。それは、たとえばラテン系諸国で、共和主義的スローガンがブルジョアジーによっていくたびとなく政治的欺瞞や金融的略奪のために利用された事例があるからといって、社会民主主義者がその共和主義を放棄するわけにいかないのと同様である。*

* 自決権からは一見「祖国防衛」が出てくるという理由で自決権を否認するのが、まったくこっけいなことは、いうまでもない。一九一四―一九一六年に社会排外派が、「祖国防衛」を正当化するために、民主主義派の要求（たとえばその共和主義）ならなんでも、民族的抑圧にたいする闘争の定式ならなんでも、かつぎだしているのは、それと同じ程度に正当なことである、すなわち、同じ程度にふまじめなことである。マルクス主義が、たとえばヨーロッパで、フランス大革命の諸戦争やガリバルディの諸戦争については祖国防衛を承認し、また一九一四―一九一六年の帝国主義戦争については祖国防衛を否認するのは、ともにそれぞれの戦争の具体的＝歴史的な特殊性の分析にもとづくものであって、けっしてなんらかの「一般原則」に、綱領の条項に、もとづくものではない。

五　民族問題におけるマルクス主義とプルードン主義

小ブルジョア的民主主義者とは反対に、マルクスは、例外なしにどんな民主主義的要求をも絶対的なものとは見なさないで、ブルジョアジーに指導される人民大衆の反封建制闘争の歴史的表現と見た。これらの要求のどれにしても、ある事情のもとで、ブルジョアジーが労働者を欺瞞する道具となりえないようなもの、また実際にならなかったものは一つもない。この点で政治的民主主義の諸要求の一つ、すなわち民族自決を特別あつかいにして、それをのこりの諸要求に対置するのは、理論上、根本的にまちがっている。実際には、プロレタリアートは、共和制をもふくむすべての民主主義的要求のための自分の闘争を、ブルジョアジー打倒のための自分の革命的闘争に従属させることによってはじめて、自分の自主性をたもつことができる。

他方では、「社会革命の名において」民族問題を「否定」したプルードン主義者に反対して、マルクスは、なによりも先進諸国におけるプロレタリアートの階級闘争の利益を念頭におきながら、他民族を抑圧する民族は自由ではありえないという、国際主義と社会主義の根本原則を最も重視した〔第一三巻、八七ページ〕。一八四八年にはマルクスは、まさにドイツの労働者の革命運動の利益の立場からして、勝利をしめたドイツの民主主義派がドイツ人に抑圧されている諸民族の自由を宣言し実現するよう要求した〔第三巻、一〇四ページ〕。一八六九年にはマルクスは、まさにイギリスの労働者の革命的闘争の立場からして、イギリスからのアイルランドの分離を要求し、そのさい「たとえ分離してから連邦制をつくるにしても」とつけくわえている。マルクスは、ただこのような要求をかかげることによってのみ、真にイギリスの労働者を国際主義の精神で教育したのであった。ただこのようにしてのみ、彼は、日和見主義者にたいし、またそれから半世紀後の今日までアイルランドの「改革」を実現していないブルジョア的改良主義にたいして、この歴史的任務の革命的解決を対置することができたのである。ただこのようにしてのみ、マルクスは小民族の分離の自由は空想的で実現不可能だとか、経済的集積だけでなしに政治的集積もまた進歩的だとかさけんでいる資本の弁護者たちとは反対に、この集積が非帝国主義的なやり方でおこなわれるときにだけ進歩的であることを主張し、強制にもとづかずに、万国のプロレタリアの自由な同盟にもとづく諸民族の接近を主張することができた。ただこのようにしてのみ、マルクスは、民族の同権や自決

をロさきだけで、しかもしばしば偽善的に承認することにたいして、民族問題の解決の分野でも大衆の革命的行動を対置することができたのである。一九一四年—一九一六年の帝国主義戦争と、この戦争によって明るみにだされた日和見主義者およびカウツキー派の偽善のアウギアスの牛小屋(三六)とは、マルクスのこの政策の正しさを明瞭に裏書きした。この政策はあらゆる先進国の模範とならなければならない。というのは、いまでは、これらの先進国はすべて他民族を抑圧しているからである。*

* 若干の民族の民族運動、たとえば一八四八年のチェコ人の民族運動にたいしてマルクスがとった否定的な態度は、マルクス主義の立場からは民族自決を承認する必要があるということを反駁するものだと、言い立てるものがすくなくない。たとえばちかごろ『グロッケ』(三七)の第八号と第九号でドイツの排外主義者レンシュがやったことがそれである。しかし、これは正しくない。なぜなら、一八四八年には、「反動的」民族と革命的＝民主主義的民族とを区別する歴史上ならびに政治上の根拠があったからである。マルクスが前者を非難し、後者を支持したのは正しかった〔第三巻、四六三、四七五ページ〕。自決権は民主主義の諸要求の一つであって、それは当然に、民主主義の一般的利益に従属させられなければならない。一八四八年とその後の数年には、この一般的利益は、第一にツァーリズムと闘争することであった。

六　民族自決との関係からみた国家の三つの型

この点では、三つの主要な国家型を区別する必要がある。

第一に、西欧の先進的な資本主義諸国とアメリカ合衆国。進歩的なブルジョア民族運動はここではとっくの昔に完了している。これらの「大」民族はいずれも、植民地や国内で他民族を抑圧している。支配民族のプロレタリアートの任務は、ここでは、一九世紀のアイルランドにたいするイギリスのプロレタリアートの任務とちょうど同じである。*

* 一九一四—一九一六年の戦争の圏外にとどまったいくつかの小国家、たとえばオランダやスイスでは、ブルジョアジーは、帝国主義戦争への参加を正当化するために、「民族自決」のスローガンを熱心に利用している。これは、こういう国の社会民主主義者を促して自決を否認させている動機の一つである。正しいプロレタリア的政策が、すなわち帝国主義戦争における「祖国防衛」を否認することが、正しくない論拠によって擁護されているのである。その結果は、理論上ではマルクス主義の歪曲となり、実践上では一種の小民族的な狭量となり、「大」国の民族によって奴隷化されている民族の数億の住民を忘れることとなる。同志ホルテルはそのすぐれた小冊子『帝国主義、戦争、社会民主党』のなかで民族自決の

原則を不当にも否認しているが、しかし、彼がオランダ領インドの即時の「政治的ならびに民族的独立」を要求し、このような要求の提出とそのための闘争を拒否しているオランダの日和見派を暴露しているときに、彼はこの原則をただしく適用しているのである。

第二に、東欧、すなわちオーストリア、バルカン諸国、とくにロシア。ここでは、ほかならぬ二〇世紀がブルジョア民主主義的民族運動をとくに発展させ、民族闘争を激化させた。これらの国のブルジョア民主主義的改革を完成する仕事でも、他国の社会主義革命を援助する仕事でも、これらの国のプロレタリアートの任務は、民族自決権の擁護なしには果たすことができない。ここでは、抑圧民族の労働者の階級闘争と被抑圧民族の労働者の階級闘争とを融合させる任務は、とくに困難であり、とくに重要である。

第三に、中国、ペルシア、トルコのような半植民地諸国とすべての植民地。その人口は合計約一〇億に達する。ここでは、ブルジョア民主主義運動は、一部ではやっとはじまろうとしており、一部では完了までになおほどとおい。社会主義者は、植民地の無条件の、無償の、即時の解放を要求するだけではいけない。この要求は、政治的に表現すれば、まさに自決権の承認にほかならない。社会主義者は、これらの国におけるブルジョア民主主義的な民族解放運動の最も革命的な分子を断固として支持しなければならないし、彼らを抑圧する帝国主義列強にたいする、これらの革命的分子の蜂起を——場合によっては彼らの革命的戦争をも——援助しなければならない。

七　社会排外主義と民族自決

帝国主義時代と一九一四—一九一六年の戦争とは、先進諸国における排外主義と民族主義にたいして闘争する任務を特別に提起した。民族自決の問題については、社会排外派のあいだに、すなわち「祖国防衛」の概念をこの戦争に適用して帝国主義的な反動戦争を美化している、日和見派やカウツキー派のあいだに、二つの主要なニュアンスがある。

一方には、かなり大っぴらなブルジョアジーの召使がいる。彼らは、帝国主義と政治的集積が進歩的であるという理由で領土併合を擁護しており、自決権を、空想的、幻想的、小ブルジョア的、などと称して否定している。ドイツではクノー、パルヴスらの極端な日和見派、イギリスではフェビアン派の一部と労働組合指導者の一部、ロシアではセムコフスキー、リープマン、ユルケヴィチ、その他の日和見派がその手合いである。

他方には、カウツキー派がいる。ヴァンデルヴェルデ、

ルノーデルおよびイギリス、フランス等々の多くの平和主義者が、この部類にはいる。彼らは、前者との統一を支持し、実践のうえでは彼らと完全に一致し、まったく口さきだけで偽善的に自決権を擁護している。彼らは、政治的分離の自由の要求を「過大な要求」(《zu viel verlangt》――『ノイエ・ツァイト』一九一五年五月二一日号のカウツキーのことば）と見なしている。彼らは、ほかならぬ抑圧国の社会主義者の革命的戦術の必要を主張しないで、反対に、これらの社会主義者の革命的義務をあいまいにし、その日和見主義を正当化し、これらの社会主義者による人民の欺瞞を容易にしており、完全な同権をもたない諸民族を自国内に強制的に抑制している国家の境界の問題をこそ回避しているのである、等々。

前者も後者も、同じく日和見派である。これらの日和見派は、マルクスがアイルランドの実例にもとづいて解明した、彼の戦術の理論的意義と実践的緊要性を理解するあらゆる能力を失って、マルクス主義を冒瀆している。

とくに領土併合についていえば、この問題は、戦争に関連してとくに緊要になった。だが、領土併合とは、いったいなにか？　併合にたいする抗議が、民族自決の承認に帰着するか、それとも、status quo〔現状〕を擁護し、あらゆる強力、革命的強力にさえ反対する平和主義的空文句にもとづくものであるか、そのどちらかであることは、容易に納得できる。この種の空文句は根本的に虚偽であり、マルクス主義とはあいいれない。

八　近い将来におけるプロレタリアートの具体的な諸任務

社会主義革命は、きわめて近い将来にはじまるかもしれない。その場合にはプロレタリアートは、権力を獲得し、銀行を収奪し、その他の執権的方策を実施する緊急の任務に当面するであろう。ブルジョアジー、およびとくにフェビアン派型やカウツキー派型のインテリゲンツィアは、そういう時点には、制限された民主主義的目的を革命におしつけることによって、革命を細分化し、革命にブレーキをかけるようつとめるであろう。ブルジョアジーの権力の基礎にたいするプロレタリアの強襲がすでにはじまっているという条件のもとでは、すべての純民主主義的な要求がある意味で革命の妨害物の役割を演じる恐れがあるにしても、すべての被抑圧民族の自由（すなわち彼らの自決権）を宣言し実現する必要は、たとえば一八四八年のドイツや、あるいは一九〇五年のロシアで、ブルジョア民主主義革命の勝利にとってそれが緊要であったのと同様に、社会主義革

命においても緊要なものとなるであろう。
とはいえ、社会主義革命のはじまるまでに、なお五年、一〇年ないしそれ以上かかるかもしれない。社会主義的排外派や日和見派が労働者党に所属することを不可能にし、一九一四—一九一六年の勝利と同じような勝利を彼らがおさめるのを不可能にするというふうに、大衆を革命的に教育することが、日程にのぼるであろう。社会主義者は次のことを大衆に説明しなければならないであろう。すなわち、植民地やアイルランドの分離の自由を要求しないイギリスの社会主義者、植民地の分離、アルサス人、デンマーク人、ポーランド人の分離の自由を要求せず、革命的宣伝と革命的大衆行動を民族抑圧にたいする闘争の分野にも直接におしひろげず、抑圧民族のプロレタリアートのあいだでの最も広範な非合法宣伝のために、また街頭デモンストレーションや革命的大衆行動のために、ツァーベルン事件のような事件を利用しないドイツの社会主義者、フィンランド、ポーランド、ウクライナ、その他等々の分離の自由を要求しないロシアの社会主義者、そういう社会主義者は、排外主義者として、また帝国主義的君主制と帝国主義的ブルジョアジーの血と汚泥にまみれた従僕として、ふるまっているのである、と。

九　自決にたいするロシア社会民主党、ポーランド社会民主党、第二インタナショナルの態度

自決の問題についての、ロシアの革命的社会民主主義者とポーランドの社会民主主義者との意見の相違は、すでに一九〇三年の党大会で明るみにでている。この大会は、ロシア社会民主労働党の綱領を採択し、ポーランド社会民主主義者代表団の抗議をおしきって、民族自決権を認める第九条をこの綱領に挿入した。そのとき以来、ポーランドの社会民主主義者は、自党の名において、わが党の綱領から第九条を削除するか、またはそれを他のなんらかの定式にとりかえようという提案を、一度も繰りかえしたことはない。
ロシアでは、総人口の五七%をくだらぬ一億人以上の人間が被抑圧民族に属しており、これらの民族は主として辺境に居住し、その一部分は大ロシア人よりも文化的である。また、ロシアでは政治制度は、とくに野蛮な中世的性格を特色としており、ブルジョア民主主義革命はまだ完成していない。こういうロシアで、ツァーリズムによって抑圧されている諸民族がロシアから自由に分離する権利を承認す

ることは、社会民主主義者にとって、彼らの民主主義的ならびに社会主義的諸任務のために、無条件の義務である。一九一二年一月に再建された(三六)わが党は、一九一三年に、民族自決権を確認する決議を採択したが、それはまさに前述のような具体的な意味でこの自決権を注解している。一九一四―一九一六年に、ブルジョアジーのあいだでも、日和見主義的社会主義者(ルバノヴィチ、プレハーノフ、『ナーシェ・デーロ』等々)のあいだでも、大ロシア人的排外主義がはびこったために、われわれは、この要求を固守するよう、この要求の否定者が実際には大ロシア人的排外主義とツァーリズムとを支持する役目を果たしていることを認めるよう、さらにいっそう迫られている。わが党は、自決権にたいするこのような反対にたいしてはあらゆる責任を最も断固として拒否すると声明する。

民族問題にかんするポーランド社会民主党の立場の最新の定式(ツィンメルヴァルド会議におけるポーランド社会民主党の宣言)には、次の思想がふくまれている。

「ポーランド民族から、みずから自分の運命を決定する可能性をうばって」、「ポーランド諸州」をきたるべき賠償のかけひきの担保と見るドイツその他の国の政府を、この宣言は非難している。「ポーランド社会民主党は、一国土をいくつかの部分に分けかえ区分することに断固として、厳粛に抗議する」。……党は「被抑圧民族の解放の大業」をホーエンツォルレルン家〔ドイツ王朝〕に……一任した社会主義者を糾弾する。党は、革命的国際プロレタリアートのこのせまりつつある闘争、社会主義のための闘争に参加することだけが、「民族抑圧の鉄鎖をたちきり、あらゆる形態の外国の支配をなくすであろうし、諸民族の同盟内の同権の一員として全面的に自由に発展する可能性をポーランド民族に保証するであろう」という確信を表明する。宣言は「ポーランド人のため」の戦争を、「二重の兄弟殺し戦争」と認めている。(国際社会主義委員会の通報、第二号、一九一五年九月二七日、一五ページ。論集『インタナショナルと戦争』中のロシア語版では九七ページ。)

これらの命題は、民族自決権の承認と本質上はすこしも異なるところがないが、ただ、第二インタナショナルの綱領や決議の大部分にくらべて、政治的な定式化がいっそうあいまいで不明確だという欠点があるだけである。これらの思想を正確な政治的な定式に表現し、これらの思想が資本主義制度に適用されるのか、それとも社会主義制度だけに適用されるのかを確定しようと試みさえすれば、ポーランドの社会民主主義者による民族自決の否認が誤りであることが、もっと明瞭にわかるであろう。

民族自決を認める一八九六年のロンドンの国際社会主義

者大会の決定は、上述のテーゼにもとづき、次のように指摘すること、によって補足されなければならない。すなわち、(一)帝国主義のもとではこの要求はとくに緊要である。(二)この要求をもふくめて、政治的民主主義のあらゆる要求の政治的条件性と階級的内容。(三)抑圧民族の社会民主主義者と被抑圧民族の社会民主主義者との具体的な任務を区別する必要があること。(四)日和見派とカウツキー派による自決の承認は不徹底であり、まったくロさきだけのものであり、したがって、その政治的意義からみて偽善的である。(五)「自国」民族によって抑圧されている植民地や民族の分離の自由を主張しない社会民主主義者、とくに大国民族(大ロシア人、イギリス＝アメリカ人、ドイツ人、フランス人、イタリア人、日本人、その他)の社会民主主義者は、実際には排外主義者と一致している。(六)この要求のための闘争や、さらに政治的民主主義のすべての根本的要求のための闘争を、ブルジョア政府打倒のための、社会主義実現のための、直接の革命的大衆闘争に従属させなければならない。

いくつかの小民族の見地、とくに、民族主義的スローガンで人民を欺瞞しているポーランド・ブルジョアジーにたいする闘争のために、誤って民族自決を否認するにいたったポーランドの社会民主主義者の見地を、インタナショナルにうつしいれることとは、理論的には誤りであり、マルクス主義をプルードン主義でとりかえることであろうし、実践のうえでは、大国民族の最も危険な排外主義と日和見主義を心ならずも支持することを意味するであろう。

ロシア社会民主労働党中央機関紙
『ソツィアル-デモクラート』編集局

追記。たったいま発行されたばかりの『ノイエ・ツァイト』一九一六年三月三日号で、カウツキーは、最もけがらわしいドイツ排外主義の代表者アウステルリッツに、キリスト教徒らしい和解の手を公然とさしのべ、ハプスブルグ家のオーストリアについては被抑圧民族の分離の自由を否認しながら、ヒンデンブルグとヴィルヘルム二世に忠勤をはげむために、ロシア領ポーランドには分離の自由を認めている。カウツキー主義のこれ以上にみごとな自己暴露は、のぞんでもむずかしいであろう!

一九一六年一—二月に執筆
一九一六年四月に雑誌『フォルボーテ』第二号にドイツ語で発表
ロシア語では、一九一六年一〇月に『ソツィアル-デモクラート論集』第一号に発表
『論集』のテキストによって印刷
全集、第五版、第二七巻、二五二—二六六ページ所収
邦訳全集、第二二巻、一六五—一八一ページ所収

第二回国際社会主義会議へあてたロシア社会民主労働党中央委員会の提案

（議事日程の第五、第六、第七a、第七b、第八の各条項、すなわち戦争終結のための闘争、講和問題にたいする態度、議会活動と大衆闘争にたいする態度、国際社会主義ビューローの召集にたいする態度についてのテーゼ。）

（I・S・K〔国際社会主義委員会〕は第二回会議の召集を通告し、諸組織にたいしてこれらの問題を討議し、各自の提案を送付するよう要請した。左記のテーゼは、この要請にたいするわが党の回答である。）

一　あらゆる戦争は、交戦国家とその支配階級が、戦争前の長い期間にわたって、ときには数十年にわたっておこなってきた政治を暴力手段によって継続したものであるが、それと同様に、あらゆる戦争を終結させる講和も、その戦争の進行中に、またその戦争の結果において達成された力の現実の変化を登録し記録したものでしかありえない。

二　今日の、すなわちブルジョア的な社会関係の基礎に手を触れないままにしておくかぎり、帝国主義戦争は、帝国主義的な講和にしか導きえない、すなわち、それは、この戦争の以前ばかりでなく戦争中にも、とくに巨大な成長をとげた金融資本による弱小の民族や国々の抑圧を強固にし、拡大し、強化することしかできないのである。二つの大国グループのブルジョアジーと政府が、戦争前にも戦争中にも、おこなってきた政治の客観的な内容は、経済的圧迫、民族的隷属化、政治的反動を強めている。だから、この戦争を終結させる講和は、戦争の結末がどんなものになるにせよ、ブルジョア的社会制度が存続するかぎりは、大衆の経済的地位と政治的地位のこのような悪化を成文化したものにならざるをえないのである。

帝国主義戦争から出てくる民主主義的講和の可能性を仮定することは、理論のうえでは、この戦争の以前におこなわれ、かつ戦争中におこなわれている政治を歴史的に研究することを卑俗な空文句とおきかえることを意味し、実践のうえでは、人民大衆を欺瞞し、彼らの政治意識をくもら

せ、きたるべき講和を準備中の支配階級のほんとうの政策を隠蔽粉飾し、一連の革命なしには民主主義的講和は不可能であるという肝心な点を、大衆の目からかくすことを意味している。

三　社会主義者は、改良のための闘争をこばむものではない。社会主義者は、たとえば、いまでも議会のなかで、大衆の状態のどんな、たとえわずかの改善にも、また荒廃地域の住民への補助金の増額、民族的な抑圧の緩和などに賛成投票しなければならない。しかし、歴史と現実の政治的事態とによって革命的に提起されている諸問題を解決するために改良を説くことは、まったくのブルジョア的欺瞞である。いまの戦争によって日程にのぼされている問題は、まさにそのような問題である。それは、帝国主義の根本問題である、すなわち資本主義社会の存在そのものの問題であり、ここ数十年間にすばらしく急速に発展してきたばかりでなく――これがとくに重要な点だが――異常に不均等に発展をとげてきた諸「大」国のあいだの新しい力関係に応じて、世界を再分割することによって、資本主義の崩壊を引きのばす問題である。たんに口さきで大衆を欺瞞しないで、社会的諸勢力の相互関係を変化させるほんとうの政治活動は、いまでは、次の二つの形態のうちの一つでしかありえない。「自」国のブルジョアジーが他国を略奪するのをたすける（そしてこの援助を「祖国防衛」あるいは「救国」と呼ぶ）か、それとも、プロレタリアートの社会主義革命をたすけ、すべての国にはじまっている大衆のあいだの動揺を支持し発展させ、開始中のストライキやデモンストレーションなどに協力し、革命的大衆闘争の、いまのところはまだ弱い、これらの現われを拡大し激化させて、それをブルジョアジー打倒のためのプロレタリアートの総襲撃に変えるかである。

いま、すべての社会排外派は、この戦争で継続されている資本家のほんとうの政治、すなわち帝国主義的政治の問題を、あれこれの資本主義的略奪者グループの「不誠実」な攻撃とか、「誠実」な防衛とかいう偽善的な文句でぼかして、人民を欺瞞しているが、それと同じように、すでにいま資本家と外交官によって準備されている来るべき講和は、「不誠実」な攻撃を「あっさり」ととりのぞき、「誠実」な関係を回復させることができるかのようにいい、この講和は、同じ帝国主義的政治、すなわち金融的略奪、植民地盗奪、民族的抑圧、政治的反動、あらゆる形の資本主義的搾取の強化の政治を継続し発展させ成文化するものではないかのようにいう、「民主主義的講和」うんぬんの空文句も、人を欺瞞するだけの役にしかたたないであろう。資本家とその外交官にとってまさにいま必要なのは、ブルジョ

アジーの「社会主義的」召使である。この召使は、「民主主義的講和」うんぬんの空文句で、人民をつんぼにし、愚弄し、ねむりこませ、ブルジョアジーの現実の政治をおおいかくし、この政治の本質にたいする人民の開眼を困難にし、大衆を革命闘争からそらせるであろう。

四　第二インタナショナルの最も著名な代表者たちが、いまその作成にあたっている「民主主義的」講和の綱領は、まさにこのようなブルジョア的な欺瞞であり、偽善である。たとえば、ユイスマンスはアルンヘムの大会で、（三九）またカウツキーは、このインタナショナルの最も権威ある、公認の「理想的」代表者の一人として、『ノイエ・ツァイト』誌上で、次のようにこの綱領を定式化した。帝国主義政府が講和を締結するまでは革命闘争を放棄し、さしあたり領土併合と賠償を口さきで否認すること、民族自決、対外政策の民主化、国家間の国際紛争を審判するための仲裁裁判所、軍備撤廃、ヨーロッパ合衆国等々。

カウツキーは、この問題について「インタナショナルの意見が一致している」ことの証拠として、ロンドン会議（一九一五年二月）とウィーン会議（一九一五年五月）が、「民族独立」というこの綱領の主要な条項を満場一致で承認した事実をあげているが、それによって彼はこの「講和綱領」のほんとうの政治的意義をとくに明瞭にさらけだしたのである。このようにして、カウツキーは社会排外派によるまごうかたない人民欺瞞を、全世界のまえで公然と是認したのである。こういう社会排外派は、民族の「独立」あるいは自決を口さきだけで、偽善的に、なんの拘束力ももたず、なんの結果ももたらさないようなやり方で承認することを、「自国」政府の帝国主義戦争にたいする支持に結合しているのであるが、実は、この戦争は、双方が弱い民族の「独立」を系統的に侵害して、それらの民族にたいする抑圧を強化し拡大するために、おこなわれているのである。

いま最も流行している、この「講和綱領」の客観的な意義は、ブルジョアジーへの労働者階級の従属を強化することであって、その方法は、革命闘争を展開しはじめている労働者を、彼らの排外主義的な指導者と「和解」させることであり、戦争前の社会主義党の状態、すなわち指導者の大多数をブルジョアジーの側へ移行させた状態へ復帰するために、社会主義の深刻な危機をぼかすことである。この「カウツキー主義的」政策は、もっともらしい文句でカムフラージされ、ドイツ一ヵ国でなく、あらゆる国でおこなわれているから、プロレタリアートにとってはいっそう危険である。たとえば、イギリスでは指導者の大多数が、フランスではロンゲ、プレスマーヌその他が、ロシアではア

クセリロード、マルトフ、チヘイゼその他が、この政策をおこなっている。チヘイゼは、この戦争における「国土防衛」という思想を「救国」という表現でカムフラージし、一方では口さきでツィンメルヴァルドを是認し、他方では、国会議員団の公式声明のなかで、アルンヘムにおけるユイスマンスの悪名高い演説を称讃し、実際には、国会の演壇からも出版物紙上でも、戦時工業委員会に労働者が参加することに反対をとなえていないし、このような参加を擁護している新聞の寄稿家としてとどまっている。イタリアでは、トレーヴェスがこのような政策をおこなっている。一九一六年三月五日付のイタリア社会党中央機関紙『アヴァンティ！』[三〇]を参照せよ。同紙は、トレーヴェスその他の「改良主義派＝ポシビリスト」[八〇]を暴露するぞと威嚇しており、ツィンメルヴァルド連合と新インタナショナルの創設をめざしている党執行部とオッディーノ・モルガーリの行動を阻止するために、あらゆる手段に訴えた者を暴露してやると威嚇している、等々。

五　「講和問題」の主眼点は、現在では領土併合の問題である。いまのさばっている社会主義的偽善も、真に社会主義的な宣伝扇動の任務も、まさにこの問題において最も明瞭にわかるのである。

領土併合とはなにか、社会主義者は、なにゆえに、いかに領土併合とたたかわなければならないのかを、解明する必要がある。「他国」の領土の編入のいっさいがっさいを領土併合とみなすことはできない。なぜなら、社会主義者は、概していえば、民族間の境界の撤去と、より大きな国家の形成とに共鳴しているからである。現状(status quo)の打破のどれをも領土併合とみなすことはできない。なぜなら、それは最もひどい反動的な考え方であり、歴史科学の基本概念を嘲笑するものだからである。軍事的編入のいっさいがっさいを領土併合とみなすことはできない。なぜなら、社会主義者は、住民大多数のための暴力と戦争を否定することはできないからである。その住民の意志に反した領土の編入だけを領土併合とみなさなければならない。いいかえれば、領土併合の概念は民族自決の概念と不可分に結びついているのである。

しかし、いまの戦争の基盤のうえでは、そしていまの戦争が二つの交戦国グループの帝国主義戦争であるからこそ、敵国が領土併合をおこなおうとするとき、あるいはおこなったとき、ブルジョアジーと社会排外派が領土併合に反対して猛烈に「たたかう」という現象が生じなければならなかったのであり、また実際に生じたのである。このような「領土併合反対闘争」や領土併合問題におけるこのような「一致」が、徹頭徹尾偽善であることは、明らかである。

アルサス＝ロレーヌをめぐる戦争を擁護するフランスの社会主義者も、ドイツからのアルサス＝ロレーヌ、ドイツ領ポーランドなどの分離の自由を要求しないドイツの社会主義者も、ツァーリズムによるポーランドの新たな奴隷化のための戦争を「救国」と呼び、「無併合の講和」の名においてポーランドのロシア編入を要求するロシアの社会主義者なども、実際には併合論者であることは明らかである。

領土併合反対の闘争が偽善あるいは空疎な文句でなくなるためには、それが、ほんとうに大衆に国際主義の精神を育成するために、今日領土併合の問題のなかにのさばっている欺瞞にたいして大衆の目をひらき、この欺瞞をおおいかくさないよう、この問題を提起しなければならない。それぞれの民族の社会主義者が、口さきで民族の同権をみとめたり、領土併合反対をまくしたてたり、誓約したり、神かけて誓ったりするだけでは、不十分である。それぞれの民族の社会主義者は、彼自身の「祖国」によって抑圧されている植民地と民族の分離の自由を、即時に無条件に要求しなければならない。

この条件がなければ、ツィンメルヴァルド宣言のなかで民族自決と国際主義の原則とをみとめていることも、せいぜい、死文にとどまるであろう。

六　社会主義者の「講和綱領」も、さらに彼らの「戦争終結のための闘争」の綱領も、あらゆる国のデマゴーグ的な大臣、平和主義的ブルジョア、社会排外主義者、カウツキー主義者がいま人民に呼びかけている「民主主義的講和」とか、交戦諸国の平和愛好の意図とかについての偽りを暴露することから出発しなければならない。どんな「講和綱領」も、もしそれが、第一に、革命の必然性を大衆に解明し、いたるところにはじまっている大衆の革命的闘争（動揺、抗議、塹壕での交歓、ストライキ、デモンストレーション、戦線から近親者にあてた――たとえば、フランスの場合――軍事公債に応募しないようにすすめる手紙、等々）を支持し援助し発展させることを基礎としていないなら、それは人民を欺瞞するものであり、偽善である。

戦争終結のためのあらゆる人民運動を支持し、拡大し、ふかめることが、社会主義者の義務である。しかし、実際にこの義務を果たすものは、リープクネヒトのように、議会の演壇から兵士にむかって武器を捨てるように呼びかけ、革命を説き、帝国主義戦争を社会主義のための内乱へ転化させるように説く社会主義者だけである。

大衆を革命的闘争へ引きいれ、「民主主義的」講和を可能にするための革命的方策の必要を説明する積極的なスローガンとして、国家債務の支払拒否というスローガンをかかげなければならない。

ツィンメルヴァルド宣言は、労働者は、他人のためでなく、自分のために、犠牲をはらわなければならないと述べて、革命を暗示しているが、それだけでは不十分である。大衆に彼らのすすむべき道をはっきりと、明確にさししめさなければならない。どこへ、なんのためにすすんでいくかを、大衆が知る必要がある。戦時の大衆的な革命的行動が成功裡に発展していく場合、それは、帝国主義戦争を社会主義戦争のための内乱に転化せざるをえないということ、これは明瞭であり、大衆にこれをかくすことは有害である。反対に、われわれがやっとこの道程のはじめにいるだけのときには、この目的の達成がどんなに困難なものに見えようとも、この目的をはっきりとしめさなければならない。ツィンメルヴァルド宣言に述べているように、「資本家」が、この戦争での「祖国防衛を口にするのは、嘘である」とか、労働者は、革命的闘争のさいには、自国の軍事的地位を顧慮すべきではないとか、言うだけでは、不十分である。宣言で暗示的に表現されていること、すなわち、資本家ばかりでなく、社会排外主義者や、カウツキー主義者も、いまの帝国主義戦争に祖国防衛の概念の適用をみとめて、嘘をついているということ、戦時の革命的行動は、「自国」の政府を敗戦の脅威にさらすことなしには、不可能であるということ、反動的な戦争における政府の敗北はすべて革命を容易にするが、この革命だけが、確固たる民主主義的講和をもたらすことができるということを、はっきりとかたらなければならない。最後に、大衆自身が非合法の組織をつくりだし、戦時検閲にとらわれない出版物、すなわち非合法の出版物をつくりださなければ、いまはじまっている革命的闘争をまじめに支持し、発展させ、その個々の歩みを批判し、その誤りを訂正し、この闘争を系統的に拡大し、激化させることは、不可能であることを、大衆にかたらなければならない。

七　社会主義者の議会闘争（Aktion）の問題については、ツィンメルヴァルドの決議が、わが党に所属し、シベリア流刑に処せられた五名の社会民主党国会議員に、同情の意を表わしているばかりでなく、彼らの戦術に共鳴していることを、念頭におかなければならない。大衆の革命的闘争をみとめながら、社会主義者がもっぱら議会内での合法的な活動にかぎるという状態に甘んじることはできない。これは、労働者の正当な不満を呼びおこし、彼らを、社会民主主義から、反議会的な無政府主義あるいはサンディカリズムへはしらせるにすぎない。議会内の社会民主主義者は、議会での演説のためばかりでなく、議会のそとで労働者の非合法組織と革命的闘争に全面的に協力するためにも、自分の地位を利用しなければならないし、大衆みずから、そ

の非合法組織を通じて、自分たちの指導者のこのような活動を点検しなければならないということを、はっきりと、だれにでも聞えるようにかたらなければならない。

八　国際社会主義ビューロー召集の問題は、旧来の諸党や第二インタナショナルとの統一が可能であるかどうか、という基本的、原則的な問題に帰着する。国際労働運動がツィンメルヴァルドでさだめられた進路にそってすすめる前進の一歩一歩は、ツィンメルヴァルド多数派のとった立場の不徹底なことを、ますますはっきりとしめしている。すなわち、一方では、旧来の諸党と第二インタナショナルの政策は、労働運動におけるブルジョア的政策、すなわち、プロレタリアートの利益でなしに、ブルジョアジーの利益をはかる政策と同一のものと見られている（たとえば、「資本家」がこの戦争での「祖国防衛」を口にするのは嘘をついているのだ、というツィンメルヴァルド宣言のことばや、ついで、〔三二〕一九一六年二月一〇日付の国際社会主義委員会の回章のなかでなされた、一連のもっと明確な言明が、それである）が、他方では、国際社会主義委員会は、国際社会主義ビューローとの分裂をおそれており、このビューローがふたたび会合をひらくなら、国際社会主義委員会は解散すると、公けに約束している。〔三三〕

われわれは、このような約束が、ツィンメルヴァルドで表決されなかったばかりでなく、審議もされなかったことを、確認する。

ツィンメルヴァルド会議後にすぎた半ヵ年は、ツィンメルヴァルドの精神による活動——われわれは、空っぽなことばのことでなく、もっぱら活動のことを言っている——が、事実上、全世界における分裂をふかめ拡大することにむすびついていくことを証明した。ドイツでは、非合法の反戦ビラが、党の決定にそむいて、すなわち分裂主義的に、発行されている。K・リープクネヒトの最も親しい同志オットー・リューレ代議士が、事実上、すでに二つの党がある、一つはブルジョアジーをたすけている党、もう一つはブルジョアジーとたたかっている党である、と公然と述べたとき、カウツキー派をもふくめた多くのものは、このことでリューレをののしったが、だれも彼を論駁したものはいなかった。フランスでは、社会党員ブルデロンは、分裂の断固たる反対者であるが、同時に、彼は、それが採択されたら、無条件に、即刻分裂を引きおこすような決議案——党中央委員会と議員団を否認するという（désapprouver Comm. Adm. Perm. и Gr. Parl.）——を自分の党に提案している。イギリスでは、穏健な『レイバー・リーダー』の紙上で、I・L・P〔独立労働党〕党員のT・ラッセル・ウィリアムズが、分裂の避けられないことを公然とみとめ、

地方の活動家たちの手紙で支持されている。アメリカの例は、おそらく、もっと教訓的であろう。なぜなら、中立国である同国でさえ、社会党内に、和解しがたいほど敵対的な二つの潮流がすでに現われているからである。すなわち、一方では、いわゆる《preparedness》〔「待機の態勢」〕、すなわち、戦争、軍国主義、海軍主義の支持者が、他方では、社会党の前大統領候補ユージン・デブスのように、きたるべき戦争と結びつけて、社会主義のための内乱を公然と説く社会主義者が、現われている。

全世界に、事実上すでに分裂があり、戦争にたいする労働者階級の二つの、まったく和解しがたい政策がすでに現われている。このことに目を閉じることはできない。これに目を閉じることは、労働者大衆を混乱させ、彼らの意識をくもらせ、全ツィンメルヴァルド派が公けに共鳴している革命的な大衆闘争を困難にする結果にしかならないし、国際社会主義委員会が、一九一六年二月一〇日付の回章のなかで、大衆を「まよわし」、社会主義に反対の「陰謀」(《Pakt》)をたくらんでいるといって、まっこうから非難している指導者たちの大衆におよぼす影響をつよめる結果にしかならない。

あらゆる国の社会排外主義者とカウツキー主義者は、破産した国際社会主義ビューローを復活しようとするであろう。社会主義者の任務は、社会主義の旗のかげでブルジョアジーの政策をおこなっている人々との分裂が避けられないことを、大衆に説明することである。

一九一六年二月末―三月に執筆
一九一六年四月二二日に『ベルン国際社会主義委員会通報』第四号に発表
ロシア語では一九一六年六月一〇日に新聞『ソツィアル-デモクラート』第五四―五五号に発表
手稿によって印刷
全集、第五版、第二七巻、二八二―二九三ページ所収
邦訳全集、第二二巻、一九六―二〇六ページ所収

資本主義の最高の段階としての帝国主義（三〇）

（一般向け概説）

序　文

ここに読者に提供する小冊子を、私は一九一六年の春にツューリヒで書いた。仕事をしたその土地の事情から、私は当然、フランス語と英語の文献のある程度の不足に、またロシア語の文献のいちじるしい不足になやまなければならなかった。しかしそれでも私は、帝国主義についての主要な英文の労作、J・A・ホブソンの著書を、十分の注意をもって利用した。この労作は、私の確信するところによれば、まさにそういう注意に値するものである。

この小冊子はツァーリズムの検閲を顧慮して書かれた。だから私はよぎなく、もっぱら理論的な——それもとくに経済学的な——分析にごく厳重に局限しなければならなかったばかりでなく、政治について少数の欠くことのできない意見を述べるときには、最大の慎重さをもって、ほのめかしで、あのイソップ的な——のろわしいイソップ的なことばで、定式化しなければならなかった。ツァーリズムのもとでは、「合法的」な著述のためにペンをとろうとすれば、あらゆる革命家がそれにたよることをよぎなくされたのである。

今日自由の日に、ツァーリズムの検閲を考慮してゆがめられ、鉄の万力によって圧しつぶされ締めつけられたこれらの箇所を読みなおすことは、苦痛である。帝国主義は社会主義革命の前夜であること、社会排外主義（口さきでは社会主義、行動では排外主義）は社会主義にたいする完全な裏切りであり、ブルジョアジーの側への完全な移行であること、労働運動のこの分裂は帝国主義の客観的条件と関連するものであること等々を、私は「奴隷の」ことばで語らなければならなかった。それで私は、この問題に関心をもつ読者には、一九一四—一九一七年に私が外国で書いた論文の、まもなく出る再版を参照していただかなければならない。だがとくにここで指摘しておく必要のある箇所が一つある。それは一一九—一二〇ページ〔本訳書では二九

八―二九九ページ）である。資本家たちと彼らの側にはしった社会排外主義者（カウツキーは彼らとはなはだ不徹底にしかたたかっていない）とが領土併合の問題でどんなに恥しらずな嘘をついているか、彼らが自国の資本家たちによる併合をどんなに恥しらずに包みかくしているかということを、検閲をとおる形で読者に説明するために、私はよぎなく……日本を例にとらなければならなかった！　注意ぶかい読者は容易に、日本のかわりにロシアを、朝鮮のかわりにフィンランド、ポーランド、クールランド、ウクライナ、ヒヴァ、ブハラ、エストニア、その他、大ロシア人でない人々が住んでいる地方をおいてみるであろう。

私はこの小冊子が、それを研究しないでは現在の戦争と現在の政治を評価するうえになにひとつ理解できない基本的な経済問題、すなわち帝国主義の経済的本質の問題を、究明する助けとなることを期待したい。

ペトログラード　一九一七年四月二六日

著　者

フランス語版およびドイツ語版への序文（註）

一

この小著は、ロシア語版の序文で指摘したように、一九一六年にツァーリズムの検閲を顧慮しながら書かれたものである。私には今日、全文を書きあらためる余裕はない。なたそうすることはおそらく当を得ていないであろう。なぜなら、本書の基本的な任務は、以前もいまも、争う余地のないブルジョア統計の総括資料とあらゆる国のブルジョア学者たちの告白とにもとづいて、二〇世紀初頭に、すなわち最初の帝国主義的世界戦争の前夜に、資本主義世界経済の概観図がどのようなものであったかを、その国際的相互関係において示すことにあるからである。

なおまた先進資本主義諸国の数多くの共産主義者にとって、ツァーリズムの検閲の見地からも合法的なこの小著の実例で、次のこと――すなわち、たとえば最近共産主義者がほとんど一人のこらず逮捕されたあとの今日のアメリカあるいはフランスで共産主義者にとってなお残されている、あのわずかばかりの合法性を利用して、「世界民主主義」という社会‐平和主義者の見解と期待がまったくの虚偽で

あることを説明することが可能であり、また必要であるということ――を確信することは、いくらか有益ですらあるだろう。だがこの検閲下の小著にたいするどうしても必要な補足を、私はこの序文ですることにしよう。

二

この小著では、一九一四―一九一八年の戦争は両方の側からして帝国主義的な（すなわち侵略的な、略奪的な、強盗的な）戦争であり、世界の分けどりのための、植民地と金融資本の「勢力範囲」の分割と再分割、等々のための戦争であったことが、証明されている。

というのは、戦争の真の社会的な性格、より正確にいえば真の階級的な性格がどんなものであるかの証明は、もちろん、戦争の外交史のうちにではなく、すべての交戦列強の支配階級の客観的立場の分析のうちに存するからである。この客観的立場を描きだすためには、たんなる事例や個々の資料をとりあげるべきではなく（社会生活における諸現象は非常に複雑なので、任意の命題を確証するのに事例や個々の資料をいつでも好きなだけ探しだすことができる）、ぜひとも、すべての交戦列強と全世界の経済生活の基礎にかんする資料の総体をとりあげなければならない。

反駁することのできない、まさにこのような資料を、私は一八七六年と一九一四年における世界の分割（第六章）と、一八九〇年と一九一三年における全世界の鉄道の分割（第七章）を描くさいにあげた。鉄道は、資本主義工業の最も主要な部門である石炭業と製鉄業との総括であり、世界商業とブルジョア民主主義文明との発展の総括であり、またその最も明瞭な指標である。鉄道が大規模生産と、独占体と、シンジケートやカルテルやトラストや銀行と、金融寡頭制と、どれほど結びついているかは、本書のはじめの諸章で示されている。鉄道網の分布、分布の不均等、鉄道網の発展の不均等等――これは、世界的規模における現代の独占資本主義の総結果である。そしてこの総結果は、生産手段の私的所有が存在するかぎり、このような経済的基礎のうえでは、帝国主義戦争が絶対に避けられないことを示している。

鉄道の建設は単純な、自然な、民主的な、文化的な、文明的な事業のように見える。資本主義的奴隷制を美化することで報酬をもらっているブルジョア教授たちの目には、また小ブルジョア的俗物の目には、そう見える。だが実際には、これらの事業を数千の網の目によって生産手段一般の私的所有とむすびつけている資本主義の糸は、鉄道の建設を、（植民地ならびに半植民地の）一〇億の人々、すなわち、地球人口の半分以上を占める従属諸国の住民と「文明」

諸国における資本の賃金奴隷とを抑圧する道具に変えてしまっている。

小経営主の労働にもとづく私的所有、自由競争、民主主義――資本家と彼らの新聞が労働者と農民をあざむくのにもちいているこれらのスローガンはみな、もはや遠い昔のものとなった。資本主義は、ひとにぎりの「先進」諸国による地球人口の圧倒的多数の植民地的抑圧と金融的絞殺との世界的体系に成長した。そしてこの「獲物」の分配は、頭のてっぺんから足の先まで武装した二―三の世界的に強大な略奪者ども（アメリカ、イギリス、日本）のあいだでおこなわれており、彼らは自分たちの獲物の分配をめぐる自分たちの戦争に全世界を引きずりこむのである。

三

君主制ドイツによって指図されたブレスト・リトフスクの講和[一三五]と、ついで「民主主義」共和国アメリカとフランスならびに「自由な」イギリスによって指図された、はるかに凶悪で卑劣なヴェルサイユの講和[一三六]とは、たとえ平和主義者とか社会主義者とか自称していても、「ウィルソン主義[一三七]」を賛美して、帝国主義のもとで平和と改良が可能であることを証明しようとしてきた、帝国主義のお雇い文筆苦力(クーリー)や反動的な俗物どもの正体をあばきだすことによって、人類にきわめて有益な貢献をした。

戦争――金融的強盗のイギリス・グループとドイツ・グループのどちらが大きな獲物を手に入れるべきか、ということをめぐる戦争――の残した幾千万の死者と不具者、ついでこれら二つの「平和条約」は、ブルジョアジーによって打ちのめされ、抑圧され、あざむかれ、愚弄されてきた幾百万、幾千万の人々の目を、かつて見られなかったような速さでひらかせている。こうして、戦争がつくりだした世界的な荒廃を基盤にして、世界的な革命的危機が成長しているのだが、この危機は、どんなに長期にわたる苦難な転変を経過しようとも、プロレタリア革命とその勝利とで終わるほかはありえない。

第二インタナショナルのバーゼル宣言[一三八]は、戦争一般ではなく（戦争にもいろいろあり、革命戦争もある）、一九一四年にはじまったまさにあの戦争の評価を、一九一二年にあたえたものであるが、この宣言は、第二インタナショナル[一三九]の英雄たちの不名誉きわまる破産、彼らのまったくの裏切りを暴露する記念碑として残っている。

だから私はこの宣言を本書の付録に収録[一四〇]して、この宣言のなかで、ほかならぬ来たるべきこの戦争とプロレタリア革命との関連について的確に、明白に、率直に述べてある箇所を、第二インタナショナルの英雄たちが用心ぶかく避

けている——ちょうど泥棒が、盗みを働いた場所を避けてとおるように用心ぶかく避けている——ことについて、読者の注意をなおもういちど促したい。

四

この小著では、「カウツキー主義」の批判に、すなわち、世界のあらゆる国で、「有数の理論家」である第二インタナショナルの指導者たち（オーストリアではオットー・バウアー一派、イギリスではラムゼー・マクドナルドその他、フランスではアルベール・トーマ、その他等々）と、多数の社会主義者、改良主義者、平和主義者、ブルジョア民主主義者、僧侶たちによって代表されている一つの国際的思潮の批判に、特別の注意をはらってある。

この思潮は、一方では第二インタナショナルの崩壊と腐敗の産物であり、他方では、その全生活環境のためブルジョア的および民主主義的偏見にとらわれている小ブルジョアたちのイデオロギーの不可避的な果実である。

カウツキーと彼の同類がいだいているこの種の見解は、この著述家が数十年のあいだ、わけても社会主義的日和見主義者たち（ベルンシュタイン、ミルラン、ハインドマン、ゴンパース、その他）との闘争のなかで特別に擁護してきた、マルクス主義のまさにあの革命的な原則を、完全に放棄するものである。だから、「カウツキー主義者」たちがいま全世界で、極端な日和見主義者[三]（第二インタナショナルあるいは黄色インタナショナルを通じて）やブルジョア政府（社会主義者の参加したブルジョア連立内閣を通じて）と実際政治のうえで結合するにいたったのも、偶然ではない。

全世界で成長しつつあるプロレタリア革命運動一般、とくに共産主義運動は、「カウツキー主義」の理論的誤りの分析と暴露をしないですますことはできない。それは、平和主義や「民主主義」一般——これらはすこしもマルクス主義たることを僭称してはいないが、しかしカウツキー一派とまったく同じように、帝国主義の諸矛盾の深さと帝国主義の生みだす革命的危機の不可避性とを塗りかくしている——のような思潮が、全世界でいまなおきわめて強力にひろまっているので、なおさらである。そしてこれらの思潮との闘争は、ブルジョアジーに愚弄されている小経営主と多少とも小ブルジョア的な生活条件におかれている幾百万の勤労者とを、ブルジョアジーから奪いとらなければならないプロレタリアート党にとって、ぜひともなすべきことである。

五

第八章「資本主義の寄生性と腐朽」について数言述べておく必要がある。本文ですでに指摘してあるとおり、かつての「マルクス主義者」でいまはカウツキーの戦友であり、また「ドイツ独立社会民主党」(一三二)内のブルジョア的、改良主義的政策の主要な代表者のひとりであるヒルファディングは、公然たる平和主義者で改良主義者のイギリス人ホブソンとくらべて、この問題で一歩後退している。労働運動全体の国際的分裂はいまやすでにまったく明るみに出た（第二インタナショナルと第三インタナショナル(一三三)）。二つの潮流のあいだの武装闘争と内戦の事実もまた明るみに出た。ロシアではボリシェヴィキ(一三四)に反対してメンシェヴィキ(一三五)と「社会革命党員」(一三六)がコルチャックとデニーキンを支持しており、ドイツではスパルタクス団(一三七)に反対してシャイデマン派とノスケ一派がブルジョアジーと手を組んでいる。フィンランド、ポーランド、ハンガリーなどでも同様のことがおこっている。ではこの世界史的な現象の経済的基礎はどこにあるか？

それはまさに、資本主義の最高の歴史的段階すなわち帝国主義に特有な、資本主義の寄生性と腐朽にある。この小著で証明したように、資本主義はいまや、ひとにぎりの

（地球人口の一〇分の一以下の、最も「おおよう」で誇大な計算をしても五分の一以下の）とくに富裕で強力な国家を抜きんでさせたが、これらの国家は――たんなる「利札切り」によって――全世界を略奪している。資本の輸出は、戦前の価格で戦前のブルジョア統計によっても、年に八〇億―一〇〇億フランの収入をもたらしている。いまでは、もちろん、もっと多い。

このような巨額の超過利潤（というのは、それは資本家が「自」国の労働者からしぼりとる利潤以上に得られるものだから）の一部で、労働者の指導者や上層の労働貴族を買収しうることは、理の当然である。そして「先進」諸国の資本家たちはこれらの上層の人たちを、幾千の直接および間接の、公然および隠然の方法で、実際に買収している。

このブルジョア化した労働者あるいは「労働貴族」の層は、その生活様式、その稼ぎ高、その全世界観の点でまったく小市民的なものであって、これが第二インタナショナルの主要な支柱であり、そして今日ではブルジョアジーの主要な社会的（軍事的ではないが）支柱である。なぜなら、これは労働運動におけるブルジョアジーのまぎれもない手先であり、資本家階級の労働者手代（labor lieutenants of the capitalist class）であり、改良主義と排外主義のまぎれもない先導者だからである。ブルジョアジーとのプロレ

タリアートの内戦で、彼らは不可避的に、それも少なからぬ数のものが、ブルジョアジーに味方し、「コミューン派」に反対して「ヴェルサイユ派」(一四八)に味方するのである。

この現象の経済的根源を理解せず、その政治的および社会的意義を評価しないでは、共産主義運動と来たるべき社会革命との実践的課題の解決にむかって一歩もすすむことはできない。

帝国主義はプロレタリアートの社会革命の前夜である。このことは一九一七年以来世界的な規模で確証された。

一九二〇年七月六日

エヌ・レーニン

最近の一五—二〇年間、とくにアメリカ＝スペイン戦争(一四九)(一八九八年)とボーア戦争(一五〇)(一八九九—一九〇二年)以後、新旧両世界の経済文献ならびに政治文献は、われわれの生活している時代を特徴づけるために「帝国主義」という概念についていて論じることが、しだいにますます多くなっている。一九〇二年にロンドンとニューヨークで、イギリスの経済学者J・A・ホブソンの著書『帝国主義論』が出版された。この著者は、ブルジョア的な社会改良主義と平和主義の見地——この見地は、実質的には、かつてのマルクス主義者K・カウツキーのいまの立場と同じものだが——に立ちながらも、帝国主義の基本的な経済的および政治的特質を、非常にみごとに詳細に記述している。また一九一〇年にはウィーンで、オーストリアのマルクス主義者ルドルフ・ヒルファディングの著書『金融資本論』(ロシア語訳、モスクワ、一九一二年)が出版された。この著者は貨幣理論の問題で誤りをおかしているし、またマルクス主義を日和見主義と和解させようとするある程度の傾向をもっているが、それにもかかわらず、この著書は、「資本主義の発展における最新の局面」(一五一)——ヒルファディングの本の副題はこういっている——のいちじるしく貴重な理論的分析の書である。本質的には、帝国主義について近年いわれてきたこと——とくに、このテーマにかんする無数の

雑誌論文や新聞紙上の論文で、またたとえば一九一二年の秋にひらかれたケムニッツとバーゼルの両大会(三三)の決議のなかでいわれたこと――は、上述の二人の著者によって説かれた、あるいはより正確にいえば、概括された思想から、ほとんど一歩も出ていない……。

以下にわれわれは、帝国主義の基本的な経済的諸特質の関連と相互関係とを、できるだけ一般向きな形で、手短かに述べてみよう。問題の経済的でない側面に立ちいることは、それがどんなにやりがいのあることであっても、われわれとしてするわけにはいかない。引用文献やその他の注は、かならずしもすべての読者の関心をひくものではないので、巻末に追いこんでおく(三六)。

一　生産の集積(三四)と独占体(三五)

工業の驚くべき成長と、ますます大規模な企業への生産の集中のいちじるしく急速な過程とは、資本主義の最も特徴的な特質の一つである。この過程については、近代の工業センサスがきわめて完全できわめて正確な資料をあたえてくれる。

たとえばドイツでは、工業企業一〇〇〇につき、大企業、すなわち賃金労働者五〇人以上を雇っているものは、一八八二年には三つ、一八九五年には六つ、一九〇七年には九つであった。そしてこれらの大企業に所属する労働者の比重は、労働者一〇〇人につきそれぞれ二二人、三〇人、三七人であった。だが生産の集積は労働者の集積よりもずっとおびただしい。なぜなら、大経営では労働はずっと生産的だからである。このことは、蒸気機関および電動機にかんする資料が示している。ドイツで広い意味で工業といわれるものをとれば、すなわち商業や交通機関その他をふくめていえば、次の情景が得られる。全体で三、二六五、六二三経営のうち大経営は三〇、五八八で、全体の〇・九％である。これらの大経営に属する労働者は、一四四〇万人のうち五七〇万人、すなわち三九・四％、蒸気機関は八八〇万馬力のうち六六〇万馬力、すなわち七五・三％、電力は一五〇万キロワットのうち一二〇万キロワット、すなわち七七・二％である。

一〇〇分の一たらずの経営が、蒸気力と電力の総数の四分の三以上をもっている！　そして企業総数の九一％を占める二九七万の小企業（賃金労働者五人未満）には、蒸気力と電力の七％しか属さない！　数万の巨大企業がすべてであり、数百万の小企業は無にひとしい。

一〇〇〇人以上の労働者を雇う経営は、ドイツでは一九〇七年に五八六あった。これらの経営が、労働者総数のほ

とんど一〇分の一（一三八万人）と、蒸気力および電力の総量のほとんど三分の一（三二%）をもっている。あとで見るように、貨幣資本と銀行とは、ひとにぎりの巨大企業のこの優越をいっそう圧倒的なものにする。しかもまったく文字どおりに圧倒的にする。すなわち、数百万の中小「経営主」とさらには一部の大「経営主」さえ、実際には、数百の百万長者金融業者に完全に隷属しているのである。

＊数字は、『ドイツ帝国年鑑』、一九一一年、ツァーン、からの摘要。

現代資本主義のもう一つの先進国である北アメリカ合衆国では、生産の集積の進展はもっとおびただしい。ここでは、統計は狭義の工業を別に分け、経営を年生産物の価額別に分類している。一九〇四年には、生産額一〇〇万ドル以上の巨大企業は一九〇〇（二一六、一八〇のうち、すなわち〇・九%）で、それらで一四〇万人の労働者（五五〇万人のうち、すなわち二五・六%）と五六億ドルの生産額（一四八億ドルのうち、すなわち三八%）をもっていた。五年後の一九〇九年には、これに対応する数字はそれぞれ次のとおりであった。企業数は三、〇六〇（二六八、四九一のうち——一・一%）で、それらのもつ労働者数は二〇〇万人（六六〇万人のうち——三〇・五%）、生産額は九〇億ドル（二〇七億ドルのうち——四三・八%）であった。＊

＊『合衆国統計要覧　一九一二年』、二〇二ページ。

国内の全企業の総生産額のほとんど半分が、企業総数の百分の一のものの手中にある！　そしてこれら三千の巨大企業は二五八の産業部門にわたっている。ここからして、集積はその一定の発展段階でおのずから、いわば独占の間際まで接近することが明らかである。なぜなら、数十の巨大企業にとっては相互のあいだで協定に達するのは容易であり、他方では、まさに企業が大規模であることが競争を困難にし、独占への傾向を生みだすからである。競争の独占へのこのような転化は最新の資本主義経済における最も重要な諸現象の一つ——最も重要なものではないとしても——であって、われわれはこれについてもっと詳しく論じる必要がある。だがはじめに、われわれは生じかねない一つの誤解をかたづけておかなければならない。

アメリカの統計の示すところによれば、二五〇の産業部門に三〇〇〇の巨大企業がある。そうすると、あたかも各部門に最大級の規模の企業が一二ずつあることになる。

しかし実際にはそうではない。あらゆる産業部門に大きな企業があるわけではない。また他方では、最高の発展段階に達した資本主義のきわめて重要な特質は、いわゆるコンビネーション、すなわち、さまざまな工業部門が一つの企業内で結合することである。これらの工業部門は、原料

加工の連続した段階をなすこともあれば（たとえば、鉄鉱石から銑鉄を精錬し、銑鉄を鋼鉄に精製し、さらにおそらくは、鋼鉄からいろいろな完成品をつくる）、あるいは、ある部門が他の部門にたいして補助的な役割を演じるという関係にある場合もある（たとえば、廃物または副産物の加工、包装材料の生産、等々）。

ヒルファディングは次のように書いている。「……コンビネーションは景気の差異を平均化し、したがって結合した事業にとって利潤率をより安定させる。第二に、コンビネーションは商業の排除をもたらす。第三に、それは技術的進歩を可能にし、そのため『純粋の』事業（すなわち結合していない事業）にくらべて超過利潤を得させる。第四に、それは、原料価格の下落が製品価格の下落よりもおくれる強度の不景気（事業の沈滞、恐慌）の時期の競争戦で、『純粋』の事業にくらべて結合した事業の地位を強める[一五]」。*

＊『金融資本論』、ロシア語訳、二八六―二八七ページ。

ドイツのブルジョア経済学者ハイマンは、ドイツの鉄工業における「混合」企業、すなわち結合した企業について記述した特別の著書を書いたが、そのなかで次のように言っている。「純粋の企業は、高い原料価格と安い製品価格とのあいだで圧しつぶされて、破滅しつつある」。そこで次のような情景が得られる。

「一方には、数百万トンの石炭採掘高をもち、石炭シンジケートにかたく組織された大きな石炭会社が残り、そしてこれらの会社には大きな製鋼所とそのシンジケートが緊密に結びついている。年に四〇万トン（一トンは六〇プード）の鉄鋼を生産し、膨大な量の鉱石や石炭を採掘し、鉄鋼製品を生産し、工場地区の労働者宿舎に一万人の労働者を住まわせ、ときには自分の鉄道や波止場さえもっているこれらの巨大企業、――これらはドイツの鉄工業の真の典型である。そして集積はますます進展する。個々の経営はますます大規模になり、同一の産業部門あるいは異なる産業部門のますます多くの経営が巨大企業に結合され、これらにとってベルリンの六大銀行が支柱とも指導者ともなっている。ドイツの鉱山業については、集積にかんするカール・マルクスの学説の正しさが的確に証明されている。たしかに、産業が保護関税と運賃とによって保護されている国については、そうである。ドイツの鉱山業は、収奪されてよいほどに成熟している」。*

＊ハンス・ギデオン・ハイマン『ドイツの大鉄工業における混合企業』、シュトゥットガルト、一九〇四年（二五六、二七八ページ）。

例外的に正直な一ブルジョア経済学者はこのような結論に到達せざるをえなかった。だが注意しておくべきことは、

ドイツの工業が高率の保護関税で庇護されているため、彼はドイツをどうやら特別あつかいしていることである。この事情は、集積と、企業家の独占団体すなわちカルテルやシンジケート等々（一七）の形成とを、促進しえたにすぎない。きわめて重要なことは、自由貿易の国イギリスでも、集積は、すこしおくれて、そしておそらくは別の形態でではあっても、やはり独占に導きつつある、ということである。ヘルマン・レヴィ教授は『独占、カルテルおよびトラスト』にかんする特別の研究のなかで、大ブリテンの経済的発展の資料によって、まさに次のように書いている。

「大ブリテンでは、まさに企業が大規模であることと、その技術水準の高いことが、独占への傾向をひそませている。一方では、集積の結果、企業に支出しなければならない資本は巨大な額にのぼるようになり、そこで新しい企業にとってはますます大きな資本額が必要とされるようになり、そのため新しい企業の出現が困難となる。他方では(そしてこの点のほうがわれわれにはより重要だと考えるのだが)、集積によってつくりだされた巨大企業と同じ水準に立とうとおもう企業はどれも、膨大な量の生産物を余分に生産しなければならないので、それを有利に売ることは需要が異常に増大した場合にだけできるのであって、そうでない場合には、この余分の生産物のため、価格は、新しい工場にとってもひきあわない水準に下落するようになる」。イギリスでは、企業家の独占団体、すなわちカルテルやトラストが発生するのは――保護関税がカルテル形成を容易にしている他の諸国とは異なり――、多くの場合、競争する主要な企業の数が「二ダースほど」になるときだけである。「大工業における独占の発生にたいする集積の影響は、ここでは結晶体のような純粋さであらわれている」*。

* ヘルマン・レヴィ『独占、カルテルおよびトラスト』、イエナ、一九〇九年、二八六、二九〇、二九八ページ。

いまから半世紀まえにマルクスが『資本論』を書いたころには、自由競争は圧倒的多数の経済学者にとっては「自然法則」とおもわれていた。マルクスは、資本主義の理論的および歴史的分析によって、自由競争は生産の集積を生みだし、そしてこの集積はその一定の発展段階で独占に導くことを証明したが、官学は、このマルクスの著述を黙殺という手段によって葬ろうとした。だがいまや独占は事実となった。経済学者たちは山なす本を書いて、独占の個々の現われについて記述しながら、あいかわらず口をそろえて、「マルクス主義は論破された」と言明している。しかしイギリスの諺にもいうように、事実は曲げようのないものであって、いやでもおうでもそれを考慮に入れなければ

ならない。ところで事実の示すところによれば、たとえば保護貿易か自由貿易かの点での個々の資本主義国のあいだの相違は、独占体の形態あるいはその出現の時期における本質的でない相違をひきおこすだけであって、生産の集積による独占の発生は、総じて、資本主義発展の現段階の一般的で基本的な法則である。

ヨーロッパについては、古い資本主義が新しい資本主義に最後的にとってかわられた時期を、かなり正確に確定することができる。すなわち、それは二〇世紀の初めである。「独占体の形成」の歴史についての最新の総括的な労作の一つに、つぎのように書いてある。

「資本主義的独占体の個々の事例は、一八六〇年以前の時代からもあげることができる。そしてそれらの事例のなかに、いまではこれほども普通のものになっている形態の萌芽を見いだすことができる。しかしこれはすべて、カルテルにとってまったく前史時代である。現代の独占体の真の端緒は、最もはやく見ても一八六〇年代のことである。そして独占体の最初の大発展期は一八七〇年代の国際的不況からはじまり、一八九〇年代の初めにまでおよんでいる」。「ヨーロッパにかぎって考察するならば、自由競争の発展の頂点は六〇年代と七〇年代である。その当時イギリスは古い型の資本主義組織の建設を完了した。ドイツではこの組織は手工業および家内工業と決定的な闘争にはいり、それ自身の存在形態をつくりだしはじめていた」。

「大きな変革は一八七三年の瓦落から、あるいはより正確にいえば、それにつづく不況からはじまった。この不況は、八〇年代の初めのほとんど目につかないほどの中断と、一八八九年ごろの異常に強力な、しかし短期の活況をともなっただけで、二二年にわたってヨーロッパ経済史を満たしている」。「一八八九―一八九〇年の短い活況期に、この景気を利用するのにカルテルが大いにもちいられた。無分別な政策のために、物価は、カルテルがなかった場合にあがったであろうよりも、もっと急速にもっと激しく高騰した。そしてこれらのカルテルはほとんどすべて不名誉な最期をとげて『瓦落の墓場』にはいってしまった。それからさらに五年間の事業不振と低物価がつづいたが、産業界で支配した空気はもはや以前と同じではなかった。人々は不況をなにか自明のものとは考えず、新しい好景気のまえの中休みにすぎないものと見た。

こうしてカルテル運動は第二期にはいった。カルテルはもはや経過的な現象ではなくて、全経済生活の基礎の一つとなった。カルテルは産業部門をつぎつぎに、なによりも原料産業を征服してゆく。すでに一八九〇年代の初めにカルテルは、のちに石炭シンジケートが形成されるときの手

本となったコークス・シンジケートの組織のうちに、今日でも本質的にはそれ以上すすんだものを見ないほどの、カルテル化技術をつくりだした。一九世紀末の非常な活況と一九〇〇—一九〇三年の恐慌とは、少なくとも鉱山業と鉄工業では、はじめてまったくカルテルの標識のもとでおこった。そして当時はこのことはなおなにか新しいものとおもわれたとしても、経済生活の大部分が原則として自由競争から遠ざけられたということは、いまでは広範な社会意識にとって自明のこととなった」。*

* Th・フォーゲルシュタイン『資本主義工業の金融組織と独占体の形成』——『社会経済学大綱』所収、第六編、テュービンゲン、一九一四年。なお同一著者の『イギリスとアメリカにおける鉄工業と繊維工業の組織形態』、第一巻、ライプツィヒ、一九一〇年、を参照。

そこで、独占体の歴史を総括すると次のとおりである。(一)一八六〇年代と一八七〇年代——自由競争の最高の、極限の発展段階。独占体はほとんど目につかないくらいの萌芽にすぎない。(二)一八七三年の恐慌以後のカルテルの広範な発展の時期。しかしカルテルはまだ例外にすぎない。それはまだ堅固なものではない。それはまだ経過的な現象である。(三)一九世紀末の活況と一九〇〇—一九〇三年の恐慌。カルテルは全経済生活の基礎の一つとなる。資本主義は帝国主義に転化した。

カルテルは販売条件、支払期限、その他について協定する。それは販路を相互のあいだで分割する。それは生産する生産物の量を決定する。それは価格をきめる。それは個個の企業に利潤を分配する、等々。

カルテルの数は、ドイツでは一八九六年にはほぼ二五〇、また一九〇五年には三八五で、これには約一二、〇〇〇の経営が参加していた、と算定されている。* しかしだれでも、この数字が過少に見積られていることを認めている。さきにあげた一九〇七年のドイツ工業統計の資料からわかるように、一二、〇〇〇の巨大企業だけでも、確実に、蒸気力と電力の総量の半分以上を集中している。北アメリカ合衆国ではトラストの数は、一九〇〇年には一八五、一九〇七年には二五〇と算定された。アメリカの統計は全工業企業を、個人に属するものと、商会に属するものと、会社に属するものとに区分している。最後の、会社に属するものは、一九〇四年には企業総数の二三・六%、一九〇九年には二五・九%、すなわち総数の四分の一以上であった。これらの経営で働く労働者の数は、一九〇四年には総数の七〇・六%、一九〇九年には七五・六%、すなわち総数の四分の三であった。また生産額は一〇九億ドルと一六三億ドル、すなわち総生産額の七三・七%と七九・〇%であった。

* リーサー博士『ドイツの大銀行、ドイツの一般経済の発展との関連におけるその集積』、第四版、一九一二年、一四九ページ。——R・リーフマン『カルテルとトラストおよび国民経済組織の発展』、第二版、一九一〇年、二五ページ。

カルテルやトラストの手に、その産業部門の全生産高の七—八割が集中されていることも、まれではない。ライン＝ヴェストファーレン石炭シンジケートは、一八九三年に創立されたときにはこの地方の石炭の全生産高の八六・七％を、一九一〇年にはもはや九五・四％を集積していた。* こうしてつくりだされた独占は巨額の所得を保障し、非常に大規模な技術＝生産単位の形成に導く。合衆国の有名な石油トラスト（スタンダード・オイル・カンパニー）は一九〇〇年に創立された。「その資本金は一億五〇〇〇万ドルであった。一億ドルの普通株と一億〇六〇〇万ドルの優先株が発行された。そして後者には、一九〇〇—一九〇七年のあいだにそれぞれ、四八％、四八％、四五％、四四％、三六％、四〇％、四〇％、四〇％の配当が、全部で三億六七〇〇万ドルの配当が支払われた。一八八二年から一九〇七年までに得られた純益は八億八九〇〇万ドルで、そのうち六億〇六〇〇万ドルが配当として支払われ、残りは積立金に繰りいれられた」。** 「鉄鋼トラスト（ユナイテッド・ステーツ・スティール・コーポレーション）の全企業には、一九〇七年に二一〇、一八〇人以上の労働者と職員がいた。ドイツ鉱山業の最大の企業、ゲルゼンキルヘン鉱山会社（ゲルゼンキルヘナー・ベルグヴェルクスゲゼールシャフト）には、一九〇八年には四六、〇四八人の労働者と職員がいた」。*** すでに一九〇二年に、右の鉄鋼トラストは九〇〇万トンの鉄鋼を生産していた。**** その鉄鋼生産高は、一九〇一年には合衆国の鉄鋼総生産高の六六・三％、一九〇八年には五六・一％を占めており、† 採鉱高では同じ年にそれぞれ四三・九％と四六・三％を占めていた。

* フリッツ・ケストナー博士『組織強制。カルテルとアウトサイダーとの闘争の研究』、ベルリン、一九一二年、一一ページ。
** R・リーフマン『参与会社と融資会社。現代資本主義と証券制度の研究』、第一版、イェナ、一九〇九年、二一二ページ。
*** 前掲書、二一八ページ。
**** S・チールシュキー博士『カルテルとトラスト』、ゲッティンゲン、一九〇三年、一三ページ。
† Th・フォーゲルシュタイン『組織形態』、二七五ページ。

アメリカ政府トラスト委員会の報告書は次のように言っている。「競争者にたいするトラストの優位は、その経営の大規模なことと技術装備の優秀なこととにもとづいている。タバコ・トラストは、創立の当初から、手労働を広範囲に機械労働にとりかえるために、あらゆる努力をはらっ

た。このトラストはこの目的のために、タバコの製造にな にかの関係のあるすべての特許を買いしめ、このために巨額の支出をした。多くの特許がはじめは役に立たないものであって、それらは、トラストに雇われている技師が手をくわえなければならなかった。一九〇六年の末に、特許の買占めだけを目的とした二つの子会社がつくられた。また同じ目的のために、トラストは、自分の鋳物工場、機械工場、修理工場を設立した。ブルックリンにあるこの種の工場の一つは、平均して三〇〇人の労働者を雇っており、ここで巻タバコ、小型葉巻、嗅ぎタバコ、包装用錫箔、箱、その他の生産のための種々の発明の試験がおこなわれ、同じくここで発明が改善されている」[*]。「その他のトラストも、いわゆる developping engineers（技術発展のための技師）を雇っている。彼らの任務は、新しい生産方法を発明し、技術の改善を試験することにある。鉄鋼トラストはその技師と労働者に、技術を高めるか生産費を引き下げるかしうる発明にたいして、高額の賞金をはらっている」[**]。

* タバコ工業にかんする諸会社委託委員会報告書、ワシントン、一九〇九年、二六六ページ。――パウル・ターフェル博士『北アメリカのトラストと技術の進歩にたいするその影響』、シュトゥットガルト、一九一三年、四八ページから重引。

** 前掲書、四九ページを参照。

ドイツの大工場でも、たとえば最近数十年間に長足の発展をとげた化学工場でも、技術改善の仕事が同じように組織されている。生産の集積過程によって、すでに一九〇八年までに、この産業では二つの主要な「グループ」がつくりだされ、それらはそれぞれの仕方でやはり独占に近づいていった。はじめ、これらのグループは、それぞれ二〇〇〇万—二一〇〇万マルクの資本をもつ二組の巨大工場の「二社連合」であった。すなわち、一方は、以前のマイスター会社だったヘヒストの一工場とフランクフルト・アム・マインのカッセラ会社とであり、他方は、ルードヴィヒスハーフェンのアニリン＝ソーダ工場とエルバーフェルドの旧バイエル会社とである。その後、一九〇五年には一方のグループが、一九〇八年にはもう一つのグループが、それぞれもう一つの大きな工場と協定をむすんだ。こうして、それぞれ四〇〇〇万—五〇〇〇万マルクの資本をもつ二つの「三社連合」ができあがり、そしてこれらの「連合」のあいだにすでに「接近」や、価格「協定」等々がはじまっている[*]。

* リーサー、前掲書、第三版、五四七ページ以下。新聞は（一九一六年六月）、ドイツの化学工業を統合する新しい巨大なトラストについて報道している。

競争は独占に転化する。その結果、生産の社会化がいち

じるしく前進する。とくに、技術上の発明と改善の過程が社会化される。

これはもはや、分散していて、おたがいのことをなにも知らずに、未知の市場で販売するために生産をおこなう経営主たちの昔の自由競争とは、まったく別のものである。集積は非常にすすんで、一国のすべての原料資源（たとえば、鉄鉱石の埋蔵量）だけでなく、あとで見るように、数ヵ国の、さらには全世界の原料資源の概算さえできるほどになった。そしてただにこのような計算がおこなわれるだけでなく、これらの資源が巨大な独占団体によって一手に掌握されてゆきつつある。市場の大きさの概算がおこなわれ、その市場をこれらの団体は、協定によって、相互のあいだで「分割」する。熟練労働力は独占され、すぐれた技術者は雇いきられ、交通路と交通手段――アメリカの鉄道、ヨーロッパとアメリカの汽船会社――はおさえられる。資本主義はその帝国主義段階で、生産の最も全面的な社会化の間際まで接近する。それは、資本家たちを、その意志と意識とに反して、競争の完全な自由から完全な社会化への過渡の、ある新しい社会秩序へ、いわばひきずりこむ。

生産は社会的となるが、取得は依然として私的である。社会的生産手段は依然として少数の人々の私的所有である。形式的に認められる自由競争の一般的な枠は、依然として残っている。そして少数の独占者たちの残りの住民にたいする抑圧は、いままでの百倍も重く、きびしく、耐えがたいものとなる。

ドイツの経済学者ケストナーは、「カルテルとアウトサイダー（すなわち、カルテルに加入していない企業家）とのあいだの闘争」について特別の著書を書いた。彼はこの著書に『組織強制』という標題をつけた。もっとも、資本主義を美化しようとするのでなければ、もちろん、独占者の団体への服従の強制というべきであっただろう。「組織」のための現代の、最新の、文明的な闘争で、独占者の団体がもちいている手段の一覧表をちょっと見てみるだけでも、教えられるところが多い。すなわち、（一）原料の剝奪（……「カルテルへの加入を強制するための最も重要な方法の一つ」）、（二）「盟約」による（すなわち、労働者はカルテル企業だけで労働に従事するという、資本家と労働団体との協定による）労働力の剝奪、（三）輸送の剝奪、（四）販路の剝奪、（五）カルテルとだけ商取引をするという、購買者との協定、（六）計画的な価格切下げ（「アウトサイダー」、すなわち、独占者に服従しない企業を破滅させるためのもの。一定の期間原価以下で売るために、幾百万が支出される。ベンジン工業では、価格が四〇マルクから二二マルクに、すなわちほとんど半分に引き下げられた例が

あった！）、（七）信用の剝奪、（八）ボイコット宣言。

ここに見られるのはもはや、小企業と大企業との、技術的におくれた企業と技術的にすすんだ企業との競争戦ではない。ここに見られるのは、独占に、その抑圧に、その専横に服従しない者が、独占者によって絞め殺されるという事実である。この過程はブルジョア経済学者の意識には次のように反映する。

ケストナーは書いている。「純粋に経済的な活動の分野においてさえ、従来の意味の商業活動から組織者的＝投機的活動への一定の推移がおこっている。最大の成功をおさめるのは、その技術上および商業上の経験にもとづいて顧客の欲望をだれよりもよく判定でき、潜在状態にある需要を発見して、それをいわば『明るみに出す』ことのできる商人ではなくて、組織的発展および個々の企業と銀行との一定の結びつきの可能性を予測できるか、すくなくとも予感できる、投機の天才（?!）である」……。

普通の人間のことばに翻訳すると、これは次のような意味である。すなわち、商品生産が従来どおり「支配」しており、それは経済全体の基礎と考えられているとはいえ、実際にはそれはすでにそこなわれ、主要な利潤は金融的術策の「天才」の手に帰するような状態にまで、資本主義の発展がすすんだ、と。これらの術策と詐欺の基礎には生産の社会化がある。しかしこのような社会化にまでこぎつけた人類の巨大な進歩が、……投機者を利することとなっているのである。われわれはあとで、資本主義的帝国主義にたいする反動的な小市民的批判が、「このことを基礎にして」どのように「自由な」、「平和な」、「公正な」競争への復帰を夢みているかを見るであろう。

ケストナーは言っている。「カルテルが形成された結果としての価格の持続的な高騰は、いままでは重要な生産手段について、とくに石炭、鉄、カリについてのみ見られたことであって、逆に完成品についてはけっして見られなかった。これと関連して、収益性の向上も同様に、生産手段を生産する工業にかぎられていた。この観察はさらに次のことで補足されなければならない。すなわち、原料（半製品ではなく）をつくる工業は、カルテルの形成のおかげで、半製品を再加工する工業を犠牲にして、高利潤という形で利益をひきだすだけでなく、この加工工業にたいして、自由競争のもとではなかった一定の支配関係に立つにいたったのである」。*

＊　ケストナー、前掲書、二五四ページ。

われわれが傍点をうったことばこそ、ブルジョア経済学者がいやいやながら、しかもまれに承認するだけの、そして、K・カウツキーを先頭とする現代の日和見主義擁護者

たちがいとも熱心に言いのがれをし拒否しようとつとめている、事態の本質を示している。支配関係およびそれと関連する強制関係――これこそ、「資本主義の発展における最新の局面」にとって典型的なことであり、これこそ、万能の経済的独占体の形成から不可避的に生じなければならなかったことであり、実際にも生じたことである。

カルテルのふるまいの例をもう一つあげよう。原料資源のすべて、あるいはその主要な部分をその手ににぎることができるところでは、カルテルの発生と独占体の形成はとくに容易である。しかし、原料資源の掌握が不可能な他の産業部門では独占体は発生しないと考えたら、それは誤りである。セメント工業では原料はどこにもある。しかしこの工業も、ドイツでは強度にカルテル化されている。工場は地域別シンジケートに、すなわち南ドイツ・シンジケート、ライン＝ヴェストファーレン・シンジケート、等々に統合された。価格は独占的な価格が設定されており、一車両あたりの原価は一八〇マルクなのに、価格は二三〇―二八〇マルクである！　企業は一二―一六％の配当をしている。しかも、現代の投機の「天才」たちは、配当として分配されるもののほかに多額の利得を自分のポケットに入れるすべを心得ているということを、忘れてはならない。これほども利益の多い産業から競争を除去するために、独占者たちは奸計すらもちいる。たとえば、この産業の状態は「資本家諸君！　セメント工業に資本を投ずるのを警戒せよ」という匿名の警告が掲載される。そして最後に、「アウトサイダー」（すなわち、シンジケートに加入していないもの）の施設を買収し、彼らに六万―八万―一五万マルクの「弁償金」が支払われる。* 独占体は、「控えめな」弁償金支払から、競争相手にたいするダイナマイトの「使用」というアメリカ式のものにいたるまでのあらゆる方法で、いたるところで自分の進路を切りひらくのである。

* L・エシュヴェーゲ『セメント』――『バンク』[(一六)]、一九〇九年、第一号、一一五ページ以下。

カルテルによって恐慌を除去するということは、なにがなんでも資本主義を美化しようとするブルジョア経済学者たちのおとぎ話である。事態はまさに反対で、いくつかの産業部門で形成されている独占は、総体としての全資本主義的生産に固有の混沌状態を強め激化させている。資本主義一般にとって特徴的な、農業と工業との発展の不均衡は、ますますひどくなる。最もカルテル化されているいわゆる重工業、とくに石炭と鉄のおかれている特権的地位は、その他の産業部門での「計画性のますますはなはだしい欠如」に導くのであって、このことは、「ドイツの大銀行の

工業にたいする関係」についてのすぐれた労作の一つの著者であるヤイデルスが認めているとおりである。*

＊ ヤイデルス『ドイツの大銀行の工業にたいする関係、とくに鉄工業について』、ライプツィヒ、一九〇五年、二七一ページ。

あつかましい資本主義擁護者リーフマンは次のように書いている。「国民経済が発展すればするほど、それは、より危険な企業か外国の企業に、その発展に長い期間が必要な企業に、あるいはまた地方的な意義しかもたない企業に、ますますむかうようになる」。* 危険の増大は、結局は、資本の非常な増大と関連するのであって、資本は、いわば縁から あふれるように外国その他に流れでるのである。しかもそれと同時に、技術のとくに急速な発達は、国民経済の種々の側面の不均衡、混沌状態、恐慌の諸要素をますます多くもたらす。そこでこの同じリーフマンは次のことを承認するのをよぎなくされる。「おそらく、人類はそう遠くない将来に、ふたたび技術面での大変革に当面し、その大変革は国民経済組織にも影響をおよぼすであろう」……。電気、航空……。「こういう根本的な経済的変動の時代には、普通、激しい投機が発展するのが通例である」**……。

＊ リーフマン『参与会社と融資会社』、四三四ページ。

＊＊ 前掲書、四六五―四六六ページ。

だが恐慌は――あらゆる種類の恐慌のこと、経済恐慌が最も多いが、たんに経済恐慌にかぎらない――、それはそれで、集積と独占への傾向を大いに強める。一九〇〇年の恐慌の意義についてのヤイデルスのきわめて教訓的な考察を、次に引用しよう。この恐慌は、われわれが知っているように、最近の独占体の歴史で転換点の役割を演じたものである。

「一九〇〇年の恐慌のころには、主要産業部門には、巨大企業とならんで、今日の概念からすれば時代おくれの組織をもった『純粋』企業」（すなわち、結合していないもの）「がまだたくさんあったが、これらは好景気の波に乗って頭をもたげたものであった。しかし物価の低落と需要の減退のため、これらの『純粋』企業は苦境に陥った。このような苦境は、合同した巨大企業には全然かかわりがなかったか、ごく短期間問題になったにすぎない。その結果、一九〇〇年の恐慌は、一八七三年の恐慌とは比べものにならないほどいちじるしく産業の集積をもたらした。一八七三年の恐慌もすぐれた企業のある程度の淘汰をおこないはしたが、この淘汰も、当時の技術水準のもとでは、恐慌から首尾よく脱出できた諸企業の独占をもたらすことはできなかった。だがまさしくそういう永続的な独占を、今日の製鉄業と電機産業の巨大企業は、それらの非常に複雑

な技術と、大いにすすんだ組織と、その資本力とのおかげで、いちじるしくもっており、またそれほどではないが、機械製作業や、金属工業のある部門や、運輸業その他の企業も、もっている」。*

* ヤイデルス、一〇八ページ。

独占――これこそ「資本主義の発展における最新の局面」の最後のことばである。しかし現代の独占体の実際の力と意義についてのわれわれの観念は、もし銀行の役割を考慮に入れなければ、きわめて不十分な、不完全な、過小なものとなるであろう。

二　銀行とその新しい役割

銀行の基本的な本来の業務は、支払の仲介である。これと関連して、銀行は遊休貨幣資本を稼働資本に、すなわち利潤をもたらす資本に転化させ、ありとあらゆる貨幣所得をかきあつめて、それを資本家階級の処分にゆだねる。

銀行業が発展しそれが少数の銀行に集積されるにつれて、銀行は仲介者という控えめの役割から成長して、あらゆる資本家と小経営主のほとんどすべての貨幣資本と、さらにはその国や幾多の国々の生産手段と原料資源の大部分を自由にする、全能の独占者に転化する。多数の控えめな仲介者からひとにぎりの独占者へのこの転化は、資本主義の資本主義的帝国主義への成長転化の基本的過程の一つをなしている。だからわれわれはまず最初に、銀行業の集積について論じなければならない。

一九〇七／〇八年には、一〇〇万マルク以上の資本をもつドイツのすべての株式銀行のもつ預金額は七〇億マルクであったが、一九一二／一三年にはそれはすでに九八億マルクになった。五年間に四〇%の増加であるが、しかもこの二八億マルクのうち二七億五〇〇〇万マルクは、一〇〇〇万マルク以上の資本をもつ五七銀行のものである。大銀行と小銀行とのあいだの預金の分布は次のとおりであった。*
〔第1表を参照〕(一五)

* アルフレッド・ランスブルグ『ドイツ銀行業の五ヵ年』――『バンク』、一九一三年、第八号、七二八ページ。

小銀行は大銀行によって駆逐され、大銀行のうちの九つだけで預金総額のほとんど半分を集積している。しかもここでは、たとえば多数の小銀行が大銀行の事実上の支店に転化している等々の非常に多くの事実が、なお考慮されていないのである。このことについてはあとで述べる。

シュルツェ－ゲーヴァニッツは、一九一三年末のベルリンの九大銀行のもつ預金額を、総預金額約一〇〇億マルクのうち五一億マルクと算定した。この同じ著者は、預金額

〔第1表〕　預金総額中のパーセント

	ベルリンの9大銀行	資本金1000万マルク以上のその他の48銀行	資本金100万—1000万マルクの115銀行	小銀行（資本金100万マルク未満）
1907／08年	47%	32.5%	16.5%	4%
1912／13年	49%	36　%	12　%	3%

だけでなく全銀行資本を考慮に入れて、次のように書いた。「一九〇九年末には、ベルリンの九大銀行は、その系列下にある諸銀行とあわせて、一一三億マルクを、すなわちドイツの銀行資本総額のほぼ八三%を支配していた。『ドイッチェ・バンク』(Deutsche Bank)は、その系列下にある諸銀行とあわせて、約三〇億マルクを支配しており、プロイセン国有鉄道金庫とならんで、旧世界における最大の、しかも高度に地方分散的な、資本の集合体である」*。

＊ シュルツェ-ゲーヴァニッツ『ドイツの信用銀行』――『社会経済学大綱』所収、テュービンゲン、一九一五年、一二および一三七ページ。

われわれは「系列下にある」銀行ということを強調しておいた。なぜなら、それは最近の資本主義的集積の最も重要なきわだった特質の一つだからである。大企業は、とくに大銀行は、小企業を直接に吸収するだけでなく、小企業の資本への「参与」により、株式の買占めあるいは交換により、債務関係の系統、その他等々によって、小企業を「系列化し」、それらを従属させ、「自分の」グループに、自分の「コンツェルン」――術語で言えば――に包含する。リーフマン教授は、現代の「参与会社と融資会社」*の記述に五〇〇ページもある膨大な「労作」を書いた――もっとも、残念なことには、これは、しばしば消化されていない素材に、きわめて粗末な「理論的」考察をつけくわえたものなのだが。この「参与」制度が集積という点でどのような結果に導くかは、ドイツの大銀行にかんする銀行「実務家」リーサーの著作のなかで、最もよく示されている。しかし彼の資料にうつるまえに、「参与」制度の具体的な一例をあげよう。

＊ R・リーフマン『参与会社と融資会社。現代資本主義と証券制度の研究』、第一版、イェナ、一九〇九年、二一二ページ。

「ドイッチェ・バンク」の「グループ」は、大銀行のあらゆるグループのうち、最大のものではないとしても、最大級のものの一つである。このグループのすべての銀行をいっしょに結びつけている主要な糸を確かめるためには、

〔第2表〕「ドイッチェ・バンク」の参与

	第1次従属	第2次従属	第3次従属
恒常的	17銀行へ	このうち9銀行は34銀行へ	このうち4銀行は7銀行へ
不定期	5銀行へ	——	——
随時	8銀行へ	このうち5銀行は14銀行へ	このうち2銀行は2銀行へ
総計	30銀行へ	このうち14銀行は48銀行へ	このうち6銀行は9銀行へ

〔第3表〕ベルリンの6大銀行の所有する営業所

年次	ドイツ国内の支店	貯蓄金庫と外貨両替所	ドイツの株式銀行への恒常的参与	営業所総数
1895年	16	14	1	42
1900年	21	40	8	80
1911年	104	276	63	450

第一次と第二次と第三次の「参与」を、あるいは同じことだが、第一次と第二次と第三次の従属(「ドイッチェ・バンク」にたいするより小さな銀行の)を、区別しなければならない。そうすると次のような情景が得られる。* 〔第2表を参照〕

* アルフレッド・ランスブルグ『ドイツ銀行業における参与制度』——『バンク』、一九一〇年、第一号、五〇〇ページ。

「ドイッチェ・バンク」に「随時」従属する「第一次従属」の八銀行のうちには、三つの外国銀行がはいっている。一つはオーストリアの銀行(ウィーンの「銀行連合」——《バンクフェライン》)で、二つはロシアの銀行(シベリア商業銀行とロシア外国貿易銀行)である。「ドイッチェ・バンク」のグループには、全部で八七銀行が、直接に か間接にか、また全部的にか部分的にか、はいっており、そしてこのグループの支配する資本総額は、自己資本と他人資本をあわせて、二〇億—三〇億マルクと算定される。

このようなグループの先頭に立ち、そして、国債のようなとくに大規模で有利な金融業務のために、自分よりわずかにおとるだけの半ダースほどの他の銀行と協定をむすんでいるような銀行が、すでに「仲介者」の役割から成長して、ひとにぎりの独占者の連合体に転化したことは、明らかである。

〔第4表〕

	支店と出張所の数			資本額（百万フラン）	
	地方所在	パリ所在	総　数	自己資本	他人資本
1870年	47	17	64	200	427
1890年	192	66	258	265	1,245
1909年	1,033	196	1,229	887	4,363

まさに一九世紀の末から二〇世紀の初めにかけてドイツにおける銀行業の集積がどれほど急速にすすんだかは、次に簡略にしてかかげるリーサーの資料からわかる。〔第3表を参照〕

われわれは、全国をおおい、すべての資本と貨幣所得を集中し、幾千幾万の分散経営を単一の全国民的な資本主義経済に、ついで全世界的な資本主義経済に転化させる、細かな運河の網の目が、どんなに急速に成長しつつあるかを見る。さきに引用した文章のなかでシュルツェ＝ゲーヴァニッツが現代のブルジョア経済学を代表して語ったあの「地方分散化」というのは、実際には、かつては比較的「自立的」だった、あるいはより正確にいえば、局地的に（地方的に）閉鎖的であった経営単位が、ますます多く単一の中心に従属することにある。つまり、これは実際には集中であり、〔一三〕独占的巨大経営の役割と意義と力の増大である。

より古い資本主義諸国では、この「銀行網」はもっと目が細かい。アイルランドをふくむイギリスでは、一九一〇年にすべての銀行の支店の数は七一五一であった。そして四つの大銀行がそれぞれ四〇〇以上の（四四七から六八九の）支店をもっており、さらに四つの銀行が二〇〇以上の、一一の銀行が一〇〇以上の支店をもっていた。

フランスでは三つの巨大銀行「クレディ・リヨネ」、「コントワール・ナショナール」、「ソシエテ・ジェネラール」が、次のように自分たちの業務と支店網をくりひろげていた。*〔第4表を参照〕

* オイゲン・カウフマン『フランスの銀行業』、テュービンゲン、一九一一年、三五六および三六二ページ。

現代の大銀行の「結びつき」を特徴づけるのに、リーサーは、ドイツならびに全世界における巨大銀行の一つである「ディスコント－ゲゼールシャフト」（《Disconto-Gesellschaft》）（その資本は一九一四年には三億マルクに達した）の発送および受領文書の数についての資料をあげている。〔第5表を参照〕

パリの大銀行「クレディ・リヨネ」では、口座の数は一

〔第５表〕　発受した文書の数

	受　領	発　送
1852 年	6, 135	6, 292
1870 年	85, 800	87, 513
1900 年	533, 102	626, 043

八七五年の二八、五三五から一九一二年には六三三、五三九に増加した。*

＊　ジァン・レスキュール『フランスにおける貯蓄』、パリ、一九一四年、五二ページ。

これらの簡単な数字は、おそらく、長たらしい議論よりももっと明瞭に、銀行の資本の集積および取引高の増加とともに銀行の意義が根本から変化することを、示している。ばらばらな資本家たちから一人の集団的資本家が形成される。幾人かの資本家に当座勘定をひらくとき、銀行はあたかも純粋に技術的な、もっぱら補助的な業務を遂行するかのようである。しかしこの業務が巨大な規模に成長すると、ひとにぎりの独占者たちが全資本主義社会の商工業業務を自己に従属させるようになる。彼らは――銀行取引関係を通じ、当座勘定その他の金融業務を通じて――、はじめは個々の資本家の事業の状態を正確に知ることができるようになり、のちには彼らを統制し、信用を拡げたり狭めたり、信用を緩和したり引締めたりすることによって彼らに影響をおよぼすことができるようになり、そして最後には、彼らの運命を完全に決定し、彼らの収益性を決定し、彼らから資本をひきあげたり彼らの資本を急速にかつ大規模に増加させる可能性をあたえたり、等々のことをすることができるようになるのである。

われわれはいま、ベルリンの「ディスコント－ゲゼールシャフト」の資本が三億マルクであることを述べた。「ディスコント－ゲゼールシャフト」が資本をこのようにふやしたのは、ベルリンの巨大銀行のうちの二つ「ドイッチェ・バンク」と「ディスコント－ゲゼールシャフト」とのあいだの、ヘゲモニー争いのエピソードの一つであった。一八七〇年には前者はまだ新参者で、わずか一五〇〇万マルクの資本しかもたなかったが、後者は三〇〇〇万マルクをもっていた。ところが一九〇八年には、前者は二億マルクの、後者は一億七〇〇〇万マルクの資本をもっていた。一九一四年には前者は資本を二億五〇〇〇万マルクにふやし、後者は、他の第一級の大銀行「シャフハウゼン・バンクフェライン」との合同によって、三億マルクにふやした。そしていうまでもなく、このヘゲモニー争いは、両銀行の「協定」がますます頻繁になり、ますます恒久的なものになってゆくのと並行しておこなわれた。この発展の歩みは、すこぶる穏健で実直なブルジョア改良主義の限界をいささかでも越えることのない見地から経済問題を見る銀行業の専門家たちに、次のような結論をいやおうなくひきださせている。

ドイツの雑誌『バンク』は、「ディスコントーゲゼールシャフト」の資本が三億マルクにふえたことについて、次のように書いた。「他の銀行もこれと同じ道を追うであろう。そして、いまドイツを経済的に統治している三〇〇人のうち、時とともに五〇人、二五人、あるいはもっと少ない人しか残らないであろう。最近の集積の動きが銀行業だけにかぎられるとは、期待できない。個々の銀行のあいだの緊密な結びつきは、当然また、これらの銀行の庇護する産業家のシンジケートのあいだの接近をもたらす。……そしてある日われわれが目をさましてよくよく見ると、驚いたことに、われわれのまわりはトラストばかりになっている。そしてわれわれにとっては、私的独占を国家的独占によっておきかえる必要がおこっているだろう。しかもわれわれは、本質的には、株式制度によってすこし速めはしたが、事物の発展を自由にすすむにまかせたという以外に、自責すべき点はなにもないのである」*。

* ランスブルグ『三億をもつ銀行』――『バンク』、一九一四年、第一号、四二六ページ。

これこそ、ブルジョア的評論の無能の見本である。これとブルジョア科学との違いは、後者のほうが誠実さが少なくて、事態の本質を塗りかくし木を見せて森を見せまいと努力するということだけである。集積の結果に「びっくりし」、資本主義的ドイツの政府あるいは資本主義「社会」(「自分自身」)を「非難し」、また、株式制度の採用からくる集積の「促進」を懸念しながら、「カルテルにかんする」ドイツの一専門家チールシュキーのように、アメリカのトラストをおそれ、また、ドイツのカルテルは「トラストほど法外に技術的進歩と経済的進歩を促進する」*能力はないという理由で、ドイツのカルテルのほうを「まだましだ」とすること、――これは無能でなくてなんであろうか？

* チールシュキー、前掲書、一二八ページ。

しかし事実はあくまで事実である。ドイツにはトラストはなく、あるのはカルテル「だけ」であるが、しかしドイツを支配しているのは三〇〇人たらずの巨大資本家である。しかもその数はたえず減少している。いずれにせよ銀行は、すべての資本主義国で、銀行立法にいろいろと相違があるにもかかわらず、資本の集積と独占体の形成との過程を何倍にも強め、促進するのである。

「銀行は、社会的規模において、一般的簿記と生産手段の一般的配分との形態を、しかしまさに形態だけを、つくりだす」、――マルクスは半世紀まえに『資本論』のなかでこう書いた(ロシア語訳、第三巻、第二冊、一四四ページ)[三]。さきにあげた銀行資本の増加、巨大銀行の支店と出張所の数の増大、それらの口座の増大その他にかんする資

料は、全資本家階級のこの「一般的簿記」を具体的にわれわれに示している。いや、資本家のだけでない。なぜなら銀行は、一時的とはいえ、小経営主や勤め人やごく少数の上層労働者などのありとあらゆる貨幣所得をかきあつめるからである。「生産手段の一般的配分」——これこそ、形式的側面からすれば、幾十億という金を自由にしている現代の銀行——このなかには三つないし六つのフランスの巨大銀行や、七つか八つのドイツの巨大銀行がある——から成長しつつあるものである。しかしその内容からすれば、生産手段のこの配分は「一般的」〔共同的〕ではなくて私的なものであり、すなわち、巨大資本の——それもなによりも最大級の、独占的資本の——利益に合致するものであって、この資本は、住民大衆が食うや食わずで暮らしており、また農業が工業の発展から絶望的に立ちおくれており、さらに工業では「重工業」が他のすべての工業部門から貢物を取りたてているというような条件のもとで、行動しているのである。

資本主義経済の社会化という仕事で、貯蓄金庫と郵便局が銀行と競争しはじめている。これらは銀行より「地方分散化」しており、すなわち、より多くの地方、より多くの僻地、より広い住民層をその勢力圏にとらえている。次にかかげるのは、銀行預金と貯蓄金庫預金との増加の比較の

〔第6表〕　預　　金　　額　　　（単位　十億マルク）

年次	イギリス		フランス		ドイツ		
	普通銀行	貯蓄金庫	普通銀行	貯蓄金庫	普通銀行	信行組合	貯蓄金庫
1880年	8.4	1.6	?	0.9	0.5	0.4	2.6
1888年	12.4	2.0	1.5	2.1	1.1	0.4	4.5
1908年	23.2	4.2	3.7	4.2	7.1	2.2	13.9

問題について、アメリカの一委員会がまとめた資料である。*

＊　アメリカ国家貨幣委員会の資料、『バンク』、一九一〇年、第二号、一二〇〇ページ。

貯蓄金庫は預金にたいして四%とか四・二五%とかいう利子を支払うので、その資本の「有利な」投下場所をさがし、手形業務、抵当貸付業務その他の業務に乗りださなくてはならない。銀行と貯蓄金庫との境界は「しだいに消滅しつつある」。たとえばボーフムやエルフルトの商業会議所は、貯蓄金庫が手形割引のような「純粋の」銀行業務を営むのを「禁止する」ことを要求し、また郵便局の「銀行」活動を制限することを要求している。*銀行の有力者たちは、予期しない方向から国家的独占が彼らに忍びよってくるのではな

いかとおそれているかのようである。しかし、いうまでもなく、その危惧は、いってみれば同一官庁内の二人の課長の競争以上のものではない。なぜなら、一方からすれば、貯蓄金庫の数十億の資本を実際に自由にするのは、結局は、あの同じ銀行資本の巨頭たちだからであり、他方からすれば、資本主義社会における国家的独占は、あれこれの産業部門のいまや破産に瀕している百万長者のために、所得を高めたり確実にしたりする手段にすぎないからである。

＊アメリカ国家貨幣委員会の資料、――『バンク』、一九一三年、八一一、一〇二二ページ、一九一四年、七一三ページ。

自由競争の支配する古い資本主義に、独占の支配する新しい資本主義がとってかわったことは、一つには、取引所の意義が低下したことのうちに現われている。雑誌『バンク』はこう書いている。「取引所はかつて、銀行が発行される有価証券の大部分をその顧客に売りさばくことがまだできなかったころには、欠くことのできない取引仲介者であったが、しかしそれはもうだいぶ以前からそういうものでなくなった＊」。

＊『バンク』、一九一四年、第一号、三一六ページ。

「『どの銀行もみな取引所だ』――この現代の格言は、銀行が大きくなればなるほど、また銀行業における集積が進展すればするほど、ますます真実をふくんでくる＊」。「かつて七〇年代には、若気の行きすぎをした取引所は」（これは、一八七三年の取引所瓦落[一二三]、創業スキャンダル[一二四]その他を「それとなく」ほのめかしたものである）「ドイツの工業化の時代をひらいたが、今日では銀行と工業は『ひとりだちでやってゆく』ことができる。取引所にたいするわが国の大銀行の支配は……完全に組織されたドイツ工業国家の表現にほかならない。もしこのように、自動的に作用する経済法則の作用する領域がせばめられ、銀行による意識的統制の領域が異常に拡大されるなら、それとともに、少数の指導者の国民経済上の責任はおそろしく増大する」。こう書いているのは、ドイツ帝国主義の弁護者で、すべての国の帝国主義者にとっての権威であるドイツの教授、シュルツェ－ゲーヴァニッツであるが＊＊、彼は「小さなこと」を、すなわち、銀行によるこの「意識的統制」というのは「完全に組織された」ひとにぎりの独占者たちによる民衆の略奪であることを、塗りかくそうとつとめているのだ。ブルジョア教授の任務は、全機構を解明し銀行独占者たちのすべての陰謀を暴露することにではなく、それを美化することにある。

＊オスカー・シュティリッヒ博士『貨幣制度と銀行制度』、ベルリン、一九〇七年、一六九ページ。

＊＊シュルツェ－ゲーヴァニッツ『ドイツの信用銀行』、――

『社会経済学大綱』、テュービンゲン、一九一五年、一〇一ページ。

これとまったく同じように、もっと権威のある経済学者で銀行「実務家」のリーサーも、否定することのできない事実について、意味のない空言でお茶をにごしている。「取引所は、そこに流れこんでくる経済的運動の最も精巧な測定器であるばかりでなく、それのほとんど自動的に作用する調節器でもあるという、全経済と有価証券取引とにとって無条件に必要な特性をしだいにますます失いつつある」*

* リーサー、前掲書、第四版、六二九ページ。

いいかえれば、古い資本主義、自分にとって無条件に必要な調節器である取引所をもつ自由競争の資本主義は、過去のものとなりつつある。それにかわって、自由競争と独占との混合物とでもいうべき、なにか過渡的なものの明白な特徴をもつ、新しい資本主義が到来した。そこで当然、この最新の資本主義はなにへ「移行」しつつあるかという問題がおこるのだが、この問題を提起することをブルジョア学者たちはおそれているのである。

「三〇年まえには、自由に競争する企業家たちは、『労働者』の肉体労働の範囲に属さない経済活動の一〇分の九を遂行していた。いまでは、雇い人がこの経済的精神労働の一〇分の九を遂行している。銀行業はこの発展で先頭を切っている」*。シュルツェ-ゲーヴァニッツのこの告白はまたしても、最新の資本主義、帝国主義段階の資本主義が、なにへの過渡であるかという問題に通じる。――

* シュルツェ-ゲーヴァニッツ『ドイツの信用銀行』、――『社会経済学大綱』、テュービンゲン、一九一五年、一五一ページ。

集積過程によって資本主義経済全体の先頭に立つこととなった少数の銀行のあいだで、おのずから、独占的協定へ の、銀行トラストへの志向がますます多く見られ、ますます強まっている。アメリカでは、九つではなく二つの巨大銀行が、すなわち億万長者ロックフェラーとモルガンの銀行が、一一〇億マルクの資本を支配している。* ドイツでは、さきに指摘した、「ディスコント-ゲゼールシャフト」による「シャフハウゼン・バンクフェライン」の併合は、取引所筋の新聞『フランクフルター・ツァイトゥング』〔103〕の次のような評価をひきおこした。

* 『バンク』、一九一二年、第一号、四三五ページ。

「銀行の集積がすすむにつれて、一般に信用を求めにゆける営業所の範囲が狭くなり、そのため少数の銀行群にたいする大産業の従属が増大する。産業と金融界との結びつきが緊密なため、銀行資本を必要としている産業会社の行動の自由が制限される。そのため大産業は、銀行のトラス

ト化（合同あるいはトラストへの転化）が強まるのを、複雑な感情でながめている。実際にも、個々の大銀行コンツェルンのあいだに、ある種の協定――競争を制限しようという協定――の萌芽が、すでに再三現われている」。*

＊『社会経済学大綱』のシュルツェーゲーヴァニッツから引用、一一五ページ。

ここでもまた、銀行業の発展における最後のことばは独占である。

銀行と産業との緊密な結びつきについていえば、ほかならぬこの分野で、銀行の新しい役割がおそらく最も明瞭に現われている。銀行がある企業家の手形を割引し、彼のために当座勘定をひらく等々の場合、これらの操作は、一つ一つとってみれば、この企業家の自立性をいささかも減少させないし、そして銀行は仲介者という控えめな役割を踏みこしていない。しかしもしこれらの操作がたびかさなって恒常的なものになってくると、もし銀行がその手に巨額の資本を「あつめる」となると、またもしこの企業の当座勘定をひらくことによって銀行が彼の顧客の経済状態をますます詳細にますます完全に知ることができるようになると――そして実際にもそうなっているのだが――、その結果として、産業資本家は銀行にますます完全に従属してゆくことになる。

それとともに、銀行と巨大商工業企業とのいわば人的結合が発展する。すなわち、株式を所有するとか、銀行の取締役が商工業企業の監査役会（あるいは取締役会）の一員になるとか、その逆になるとかの方法による、両者の融合が発展する。ドイツの経済学者ヤイデルスは、資本と企業のこの種の集積にかんするきわめて詳しい資料をあつめた。ベルリンの六つの巨大銀行は、その取締役を三四四の産業会社に代表としておくり、その取締役会の役員をさらに四〇七の産業会社におくり、全部で七五一の会社に代表をおくっていた。これらの銀行は二八九の会社で、監査役会の役員を二人もっているか、あるいは会長の地位を占めていた。これらの商工業会社のなかには種々さまざまな産業部門が、すなわち保険業も、運輸業も、レストランも、劇場も、美術産業その他も、見うけられる。他方、この六つの銀行の監査役会には（一九一〇年に）、五一人の巨大産業家がいた。このなかにはクルップ会社や大汽船会社「ハパーグ」（ハンブルグーアメリカ汽船）の支配人、その他等々がいた。六銀行はそれぞれ一八九五年から一九一〇年までのあいだに数百の、すなわち二八一から四一九の産業会社のために、株式や社債の発行に参加した。*

＊ヤイデルスとリーサーの前掲書。

銀行と産業との「人的結合」は、これらの会社と政府と

の「人的結合」によって補足されている。ヤイデルスはこう書いている。「監査役会の役員の地位は、知名の士や、さらにまた退職官吏にすすんで提供される。彼らは官庁との交流のさいにすくなからぬ便宜（!!）をあたえうるのである」。……「大銀行の監査役会のなかには、国会議員やベルリン市議会議員がいるのが通例である」。

したがって、あらゆる「自然的」および「超自然的」方法によって、巨大資本主義的独占体のいわば作成と仕上げは、全速力で進行する。こうして現代資本主義社会の数百人の金融王のあいだに、一定の分業体系が系統的につくりあげられてゆく。

「個々の大産業家の活動分野がこのように拡大し」（彼らは銀行の取締役会に参加、等々している）「銀行の地方担当重役の管轄がもっぱらある一定の産業地域に限定されてゆくのと並行して、大銀行の指導者たちのあいだである程度の専門化がすすむ。このような専門化は、一般に、銀行企業全体が大規模になり、とくに産業との関係が緊密になるような場合にはじめて、考えられることである。この分業は二つの方向で進行する。一方では、全体としての産業との交渉が一人の取締役にその専門の仕事としてゆだねられる。他方では、各取締役が、個々の企業の、あるいは職種または利害の点からたがいに近い関係にある企業群の、監督をひきうける」……（資本主義はすでに、個々の企業の組織的監督をするほどにまで成長したのだ）……「ドイツの国内産業だけが、ときには西ドイツの産業だけが」（西ドイツはドイツで最も工業的な部分である）「ある一人の受持ちとなり、外国の国家や産業との関係、工業家その他の人事にかんする事項、取引所業務、等々が、それぞれ他の人たちの専門事項となる。さらにまた、銀行の各取締役が特殊の地域あるいは特殊の産業部門を受けもつことも、しばしばある。すなわち、ある人は主として電気会社の監査役会で活動し、他の人は化学工場、醸造工場あるいは甜菜糖工場で、第三の人は少数の個々の企業で、またこれとならんで保険会社の監査役会で活動している。……要するに、疑いもなく、大銀行では、その業務の規模と多様性が増大するにつれて、指導者たちのあいだの分業がますますできあがってゆくのであるが、しかもそれは、彼らを純粋の銀行業務よりもいわばいくらか高くひきあげて、産業の一般問題と個々の産業部門の特殊問題についてもっと判断力をもち、もっと精通したものにし、こうして銀行の産業勢力圏内で彼らをもっと活動力あるものにするという目的をもっている（そしてそのような結果をともなっている）のである。銀行のこのような制度はまた、産業によく精通した人物、たとえば企業家、とくに鉄道や鉱山関係の官庁

につとめていた退職官吏を、銀行の監査役会に選出しようという努力によって、補足されている」。*

＊ヤイデルス、前掲書、一五六―一五七ページ。

同種の制度は、すこし形はちがうが、フランスの銀行業でも見られる。たとえば、フランスの三大銀行の一つ「クレディ・リヨネ」は特別の「金融調査局」(service des études financières) を設置した。そこではつねに五〇人をこえる技師、統計家、経済専門家、法律家その他が働いている。この局は年に六〇万から七〇万フランの経費がかかる。この局は八つの部に分かれており、第一の部は専門的に産業企業にかんする情報を収集し、第二の部は一般統計を研究し、第三の部は鉄道会社と汽船会社を、第四の部は有価証券を、第五の部は金融報告書を研究している、等等。*

＊『バンク』、一九〇九年、第二号所収、フランスの銀行にかんするオイゲン・カウフマンの論文、八五一ページ以下。

こうして、一方ではますます銀行資本と産業資本との融合が、あるいはエヌ・ブハーリンが適切に表現したように、癒着がおこり、他方では銀行は真に「普遍的な性格」の機関に成長転化してゆく。われわれは、この事情をだれよりもよく研究した著述家ヤイデルスの、この問題にかんする正確な表現を引用することを必要と考える。

「産業上の結びつきを総体において観察すると、その結果として、産業のために活動する金融機関の普遍的性格というものが得られる。他の形態の銀行とは反対に、また、銀行は地歩を失わないためには一定の事業部門または産業部門に専門化すべきであるという、文献でときどき開陳されている要求とは反対に、大銀行は、産業企業との結びつきを地域の点と生産の種類の点でできるだけ多様なものにしようと志し、個々の企業の歴史に由来する、個々の地域あるいは産業部門のあいだの資本の配分の不均等を除去しようとつとめている」。「産業との結びつきを一般的な現象にしようというのが一つの傾向であり、この結びつきを恒久的な緊密なものにしようというのがもう一つの傾向である。両方の傾向とも、六大銀行では、完全にではないが、しかしすでにいちじるしく、そして同じ程度に実現されている」。

商工業界からは、銀行の「テロリズム」にたいする苦情がしばしば聞かれる。そして、次の例が示すように、大銀行が「命令」するときにそういう苦情が大きくなるのも、あやしむにたりない。一九〇一年一一月一九日に、いわゆるベルリンのD銀行（四大銀行の名称はみなDの字ではじまっている）の一つが、中部北西ドイツ・セメント・シンジケートの取締役会につぎのような書簡を寄せた。「本月

一八日に貴シンジケートが某新聞に発表された公告から、われわれは、本月三〇日にひらかれる貴シンジケートの総会で、当方にとって好ましくない組織変更を貴企業内に生じさせるような決議が採択される可能性があることを、考慮せざるをえません。このためわれわれは、いままで貴社に提供してきた信用を停止するほかないことを、遺憾に存ずるしだいであります。……もっともその総会で、当方にとって好ましくない決議がなされず、また将来にたいしてもこの点で適当な保障があたえられるならば、当方は喜んで新しい信用の供与にかんしてなにぶんの商議に応ずる用意のあることを表明します」*。

＊ オスカー・シュティリヒ博士『貨幣制度と銀行制度』、一四八ページ。

本質的には、これは大資本の抑圧にたいする小資本の苦情であるが、ただこの場合「小」資本の部類にはいっているのが一つのシンジケートなのである！　小資本と大資本との古くからの闘争は、新しい、はるかに高い発展段階で、ふたたびおこなわれている。いうまでもなく、幾十億の資本をもつ大銀行企業は、従来のものとは比べものにならないような手段で技術的進歩を促進できる。銀行は、たとえば技術研究のための特別の団体を設立するが、その成果を利用できるのは、もちろん、「友好的な」工業企業だけである。そのようなものに、「電気鉄道問題研究協会」や「中央科学技術研究所」、その他がある。

大銀行の指導者たち自身が、国民経済のなにか新しい条件ができあがりつつあることを見ないわけにはいかないのだが、彼らはそれらの条件をまえにしてどうしようもないのである。

ヤイデルスはこう書いている。「近年の大銀行の重役職や監査役会の役員の更迭を観察した人なら認めないではいられないことだが、産業の全般的発展に積極的に介入することは大銀行の必要でますます緊急な任務だと考える人々が、しだいに支配権をもつようになりつつあり、しかもそのさい、これらの人々と銀行の古い重役とのあいだに、このことで業務上の対立と、ときには個人的な対立がもちあがっている。この場合問題となるのは、本質的には、銀行が産業の生産過程にこのように介入することから、信用機関としての銀行自体が害を受けはしないか、また、信用の媒介とはなにも関係のないような活動、そして銀行が産業上の景気の盲目的な支配にいままでよりもっとさらされることになるような分野に銀行を導きいれるような活動のために、堅実な原則と確実な利益が犠牲にされはしないか、ということである。古い銀行指導者たちの多くがこのようにいうのにたいして、若手指導者の大多数は、産業の諸問

題に積極的に介入することを、現代の大工業とともに大銀行と最新の産業的銀行企業が生みだされたことと同様に、必然的なことと考えている。ただ、大銀行の新しい活動にとってはまだ確固とした原則も具体的な目標も存在しないということについてだけは、両者は同意見である」*。

＊ ヤイデルス、前掲書、一八三—一八四ページ。

古い資本主義は寿命がつきた。新しい資本主義はなにものかへの過渡である。独占と自由競争とを「協調」させるための「確固とした原則と具体的な目標」を発見することは、もちろん、望みない仕事である。実務家たちの告白は、シュルツェ—ゲーヴァニッツやリーフマンやこれと同類の「理論家」たち[(六七)]のような資本主義弁護論者たちの、「組織された」資本主義の魅力にたいする公認の賛美とは、まるでちがった響きをもっている。

大銀行の「新しい活動」が最後的に確立されたのはいつのことか、というこの重要な問題にたいして、われわれはヤイデルスのうちにかなり正確な答を見いだす。

「新しい内容、新しい形態、新しい機関をもつ、すなわち、中央集権的であると同時に地方分散的に組織されている大銀行をもつ、産業企業間の関係が、特徴的な国民経済的現象として形成されたのは、はやくても一八九〇年代以前のことではない。ある意味では、この出発点は、企業の大『合同』があった一八九七年におくことができる。そしてこの大合同が銀行の対産業政策の考慮から地方分散的組織という新しい形態をはじめて採用したのである。あるいは、この出発点はおそらくもっとあとの時期におくこともできるであろう。というのは、一九〇〇年の恐慌によってはじめて、集積過程は産業においても銀行業においても大いに促進され、強化され、また産業とのつながりがはじめて大銀行の真の独占に転化し、そのつながりがいちじるしく緊密で強度のものになったからである」*。

＊ 前掲書、一八一ページ。

だから、二〇世紀は、古い資本主義から新しい資本主義への、資本一般の支配から金融資本の支配への転換点である。

三　金融資本と金融寡頭制

ヒルファディングは次のように書いている。「産業資本のますます多くの部分が、それを充用する産業資本家に属さなくなる。彼らは資本の管理権を、彼らにたいしてこの資本の所有者を代表する銀行をとおしてはじめて獲得する。他方、銀行はその資本のますます多くの部分を産業に固定しなければならない。そのため、銀行はますます産業資本

家になる。このような仕方で実際には産業資本に転化している銀行資本、すなわち貨幣形態にある資本を、私は金融資本と名づける」。「金融資本とは、銀行の管理下にあって産業家によって充用される資本である」。*

＊ R・ヒルファディング『金融資本論』、モスクワ、一九一二年、三三八―三三九ページ。(二六)

この定義は、そのなかに最も重要な契機の一つ――すなわち、生産と資本との集積は、それが独占に導きつつあり、またすでに導いたほどいちじるしく進展したということ――の指摘がないかぎりで、不完全である。だが一般にヒルファディングの叙述全体のなかでは、とくにこの定義をとってきた章のまえの二章では、資本主義的独占体の役割が強調されている。

生産の集積、それから成長してくる独占体、銀行と産業との融合あるいは癒着、――これが金融資本の発生史であり、金融資本の概念の内容である。

次にわれわれは、資本主義的独占体の「業務遂行」が、商品生産と私的所有という一般的環境のもとでどのようにして不可避的に金融寡頭制の支配になるか、ということの記述にうつらなければならない。ここで注意しておくが、リーサー、シュルツェ―ゲーヴァニッツ、リーフマンその他のようなドイツの――いや、ひとりドイツのだけではないが――ブルジョア科学の代表者たちは、ひとりのこらず帝国主義と金融資本の弁護者である。彼らは、寡頭制の形成の「からくり」、その手口、その「浄不浄の」所得の大きさ、寡頭制と議会との結びつき、その他等々を、あばくのではなく、塗りかくし美化している。彼らは「ややこしい問題」を避けるために、もったいぶった、ぼんやりしたことばをつかったり、銀行の取締役の「責任感」に訴えたり、プロイセン官吏の「義務感」をほめたたえたり、「監督」とか「規制」とかにかんするまったくくだらない法案などの小さなことを大まじめで検討したり、またたとえば次の「科学的」定義のようなたわいない理論遊戯にふけったりしている。リーフマン教授はこんなことまで書くにいたっている。……「商業とは財貨をあつめ、貯蔵し、**それを人の使用に供することを目的とする生業活動である**」。*（ゴシックと傍点は教授の著述どおり）……。そうすると、商業は、交換をまだ知らなかった原始人のもとでもあったし、社会主義社会にもあることになる！

＊ R・リーフマン、前掲書、四七六ページ。

しかし、金融寡頭制の驚くべき支配という驚くべき事実はなんとしても目につくので、すべての資本主義国で、アメリカでも、フランスでも、ドイツでも、ブルジョア的見地に立ちながらしかもなお金融寡頭制のほぼ正しい姿をえ

がき、そして――もちろん小市民的なものだが――それの批判をしている文献が現われている。

最も重要視すべきものは、まえにすでにいくらか述べた「参与制度」である。この制度にほとんどだれよりもはやく注意を向けたドイツの経済学者ハイマンは、ことの本質を次のように記述している。

「指導者は親会社（文字どおりには『母親会社』）を統制し、親会社はさらに、それに依存する会社（『子会社』）を支配し、子会社は『孫会社』を支配する、等々。こうして、あまり大きくない資本でもって、生産の巨大な分野を支配することができる。実際、資本の五〇％をもっていれば株式会社を統制するのにつねに十分であるとすれば、指導者は一〇〇万マルクの資本をもっているだけで、『孫会社』で八〇〇万マルクの資本を統制することができるわけである。もしこの『絡みあい』がもっとすすめば、一〇〇万マルクで一六〇〇万、三二〇〇万、等々を統制できるわけである」*。

* ハンス・ギデオン・ハイマン『ドイツの大鉄工業における混合企業』、シュトゥットガルト、一九〇四年、二六八―二六九ページ。

実際には、経験が示しているとおり、株式会社を切り盛りするためには株式の四〇％をもっていれば十分である。* なぜなら、ばらばらな小株主のある部分は、実際には、株主総会に出席したりなどすることがけっしてできないからである。株式所有の「民主化」ということから、ブルジョア的詭弁家や日和見主義的「でも社会民主主義者」たちは、「資本の民主化」、小規模生産の役割と意義の増大、等々を期待している（あるいは、期待するふりをしている）が、この株式所有の「民主化」は、実際には、金融寡頭制の威力を増大させる方法の一つなのである。より先進的な、あるいはより古くて「経験のつんだ」資本主義諸国でより小額面の株式が法律によってゆるされているのは、一つにはこのためである。ドイツでは、一〇〇〇マルク以下の額面の株式は法律によってゆるされていない。それでドイツの金融巨頭たちは、一ポンド・スターリング（＝二〇マルク、約一〇ルーブリ）の株式さえ法律でゆるしているイギリスを、うらやましげにながめている。ドイツの巨大産業家で「金融王」の一人であるジーメンスは、一九〇〇年六月七日の帝国議会で、「一ポンド・スターリングの株券はイギリス帝国主義の基礎である」** と言明した。この商人は、ロシアのマルクス主義の創始者とみなされていながら、帝国主義とはある国民の邪悪な性質だとおもっている不評判のある著述家〔プレハーノフ〕よりも、帝国主義とはなにかについてより深い、より「マルクス主義的」な理解をもっ

ている……。

＊ リーフマン『参与会社……』、第一版、二五八ページ。

＊＊ シュルツェ－ゲーヴァニッツ『社会経済学大綱』、第五章二、一一〇ページ。

しかし「参与制度」は独占者たちの権力の驚くべき増大に役だつだけではない。それはさらに、どんな後暗い醜い行為をも天下御免でやりとおし、公衆から巻きあげることを可能にする。なぜなら、「親会社」の指導者は、形式的には、法律上は、「子会社」にたいする責任がなく、子会社は「独立のもの」とみなされていて、子会社を通じてなんでも「やりとげ」うるからである。次に、ドイツの雑誌『バンク』の一九一四年の五月号から一例を借りよう。

「カッセルの『バネ鋼製造株式会社』は、数年まえには、ドイツで最も収益の多い企業の一つと考えられていた。しかし管理が悪かったため経営が悪化し、配当は一五％から無配当に落ちた。ここでわかったことだが、取締役会は株主には内密に、その『子会社』の一つで公称資本金が数十万マルクにすぎなかった『ハッシア』に六〇〇万マルクを貸しつけていたのである。『親会社』の株式資本のほとんど三倍もの額のこの貸付けについて、その貸借対照表にはなにも記載されていなかった。法的にはこのような隠蔽は完全に適法であって、まる二年間もそうしておくことができた。なぜなら、これは商法のどの規定にも違反していなかったからである。責任者として虚偽の貸借対照表に署名していた監査役会会長は、当時カッセル商業会議所の会頭であったが、いまでもそうである。株主たちが『ハッシア』会社への貸付けについて知ったのは、やっとそれが失敗……（このことばに筆者はかぎかっこをつけるべきであろう）……「だった」ことがわかり、『バネ鋼』の株を消息筋が売りに出したためその相場がほとんど一〇〇％下落してからのことである……」。

……「株式会社ではごくあたりまえな貸借対照表の綱渡り的芸当のこの典型的な実例は、株式会社の取締役会が個人企業家よりもはるかに気軽に危険な仕事に手をつける理由を、われわれに説明してくれる。貸借対照表作成の最新技術は、取締役会にそのおかした危険を平株主の目から蔽いかくす可能性をあたえるばかりでなく、実験が失敗した場合には、おもな当事者が適当なときにその持株を売却することによって被害をまぬかれる可能性をもあたえる。ところが個人企業家は、彼のすることの全部について全責任を負っている。……

数多くの株式会社の貸借対照表は、中世の時代から知られているあのパリムプセスト――上に書いてある文字をまず消さなければ、その下にある、ほんとうの意味をもった

記号を解読できないもの――に似ている」。（パリムプセストというのは、もとの文字が塗りつぶされていて、その上に他の文字が書いてある羊皮紙のことである。）

「貸借対照表を裹の見えないものにする手段として、最も簡単で、したがって最もしばしばもちいられるものは、『子会社』を設立するかまたは系列下に入れることによって、単一の経営をいくつかの部分に分割することである。この制度の有利なことは、種々の目的――合法、非合法の――から見てきわめて明白なので、この制度を採用しないような大会社は今日ではまったくの例外であるほどである」*。

* L・エシュヴェーゲ『子会社』――『バンク』、一九一四年、第一号、五四五ページ。

この制度を最も広範に採用している最大の独占会社の例として、この筆者は有名な「アルゲマイネ・エレクトリツィテーツ－ゲゼールシャフト」（A・E・G――この会社については、なおあとでも述べる）をあげている。一九一二年には、その会社は一七五―二〇〇の会社に参与し、もちろんこれらの会社を支配し、全体で約一五億マルクの資本を擁している、と考えられていた*。

* クルト・ハイニヒ『電気トラストへの道』――『ノイエ・ツァイト』[三〇]、一九一二年、第三〇巻、第二部、四八四ページ。

監査や、貸借対照表の公開や、その一定様式の作成や、監督機関その他についてのありとあらゆる法規は、善意の――すなわち、資本主義を擁護し美化しようという善良な意図をもった――大学教授や官吏たちが公衆の注意をひきつけるのにもちいるものであるが、しかしどんな法規もこの場合なんの意義ももちえない。なぜなら私的所有は神聖であり、株を売ったり、買ったり、交換したり、担保に入れたりなどすることは、だれにも禁止することができないからである。

ロシア大銀行で「参与制度」がどの程度に達しているかは、E・アガードのつたえている資料から判断することができる。彼は一五年間露清銀行の職員をつとめた人で、一九一四年五月に『大銀行と世界市場』*というあまりしっくりしない標題の著作を公刊した。著者はロシアの大銀行を二つの重要なグループに分けている。すなわち（a）「参与制度」のもとで活動しているものと、（b）「独立しているもの」とである。もっともこの「独立」というのは、著者がかってに外国の銀行からの独立という意味に理解しているものである。第一のグループを著者は三つの亜グループに、すなわち、(1)ドイツの参与、(2)イギリスの参与、(3)フランスの参与に分けているが、ここで著者が念頭においているのは、右のそれぞれの国籍の外国巨大銀行の

「参与」と支配である。また著者は銀行の資本を、「生産的」に投下されているもの（証券業務と工業に）と、「投機的に」投下されているもの（取引と金融業務に）とに区分しており、その持ち前の小ブルジョア的＝改良主義的見地から、資本主義を維持しながら第一種の投資を第二種の投資から分離して、第二種を除去することができるかのように考えている。

＊　E・アガード『大銀行と世界市場。ロシア国民経済とドイツ＝ロシア関係にたいする大銀行の影響という観点から見た、世界市場における大銀行の経済的および政治的意義』、ベルリン、一九一四年。

著者の資料は次のとおりである。〔第7表を参照〕

この資料によれば、大銀行の「稼動」資本を構成する約四〇億ルーブリのうち、四分の三以上すなわち三〇億ルーブリ以上は、外国銀行の、それもなによりもパリ（有名な三大銀行、すなわちバンク・ド・パリ・エ・デ・ペーバ、ソシエテ・ジェネラール）とベルリン（とくにドイッチェ・バンクとディスコントーゲゼールシャフト）の銀行の、実質上の「子会社」である諸銀行の手にある。ロシアの二つの巨大銀行、すなわち「ロシア銀行」（「ロシア外国貿易銀行」）と「国際銀行」（「サンクトーペテルブルグ国際商業銀行」）とは、一九〇六年から一九一二年までのあいだに、その資本を四〇〇〇万ルーブリから九八〇〇万ルーブリに、積立金を一五〇〇万ルーブリから三九〇〇万ルーブリにふやしたが、これらは「四分の三はドイツ資本によって稼動している」。第一の銀行はベルリンの「ドイッチェ・バンク」の、第二の銀行はベルリンの「ディスコントーゲゼールシャフト」の「コンツェルン」に属している。お人好しのアガードは、ベルリンの銀行が株式の大多数をにぎっていて、そのためロシアの株主が無力であることに、心の底から憤激している。いうまでもなく、資本を輸出する国は甘い汁を吸うものである。たとえばベルリンの「ドイッチェ・バンク」は、シベリア商業銀行の株をベルリンにもってゆき、それを一年間金庫にしまいこんでおいて、そのあとで一〇〇にたいする一九三という、ほとんど二倍の相場で売りだし、約六〇〇万ルーブリの儲けを「稼ぎだした」のであって、この儲けはヒルファディングが「創業者利得」と名づけたものである。

ペテルブルグの巨大銀行の全部の「力」を、この著者は八二億三五〇〇万ルーブリ、ほとんど八二億五〇〇〇万ルーブリと算定しているが、そのさい彼は、外国銀行の「参与」を、より正しくいえば、その支配を、フランスの銀行――五五％、イギリスの銀行――一〇％、ドイツの銀行

〔第7表〕 銀行の資産 (1913年10月—11月の決算報告による 単位 百万ルーブリ)

ロシアの銀行のグループ別	投下資本		
	生産的	投機的	合計
(aの1) 4銀行 シベリア商業銀行 ロシア銀行 国際銀行 割引銀行	413.7	859.1	1,272.8
(aの2) 2銀行 商工銀行 ロシア＝イギリス銀行	239.3	169.1	408.4
(aの3) 5銀行 ロシア＝アジア銀行 サンクト－ペテルブルグ私立銀行 アゾフ＝ドン銀行 モスクワ合同銀行 ロシア＝フランス商業銀行	711.8	661.2	1,373.0
(11銀行) 合計 (a) ＝	1,364.8	1,689.4	3,054.2
(b) 8銀行 モスクワ商人銀行 ヴォルガ＝カマ銀行 ユンカー会社 サンクト－ペテルブルグ商業銀行 (旧ヴァーヴェルベルグ銀行) モスクワ銀行 (旧リャブシンスキー銀行) モスクワ割引銀行 モスクワ商業銀行 モスクワ私立銀行	504.2	391.1	895.3
(19銀行) 総計	1,869.0	2,080.5	3,949.5

——三五％というふうに分けている。著者の計算によると、総額八二億三五〇〇万ルーブリのこの機能資本のうち、三六億八七〇〇万ルーブリ、すなわち四〇％以上は、いくつかのシンジケート、すなわち、プロドウーゴリ〔石炭シンジケート〕、プロダメータ〔製鉄シンジケート〕、および石油業、冶金業、セメント工業のシンジケートの手にある。したがって、銀行資本と産業資本との融合は、資本主義的独占体の形成と関連して、ロシアで

も巨大な前進をとげたわけである。

少数者の手に集積されて事実上の独占を享有している金融資本は、会社の創立、有価証券の発行、国債、等々から、巨額の、しかもますます増大する利潤をひきだし、金融寡頭制の支配をうちかため、社会全体に独占者への貢ぎ物を課している。つぎに示すのは、アメリカのトラストの「支配ぶり」の無数の事例の一つで、ヒルファディングがあげているものである。一八八七年にハヴメイヤーは、資本総額が六五〇〇万ドルになる一五の小会社の合同によって、一つの砂糖トラストを設立した。ところでこのトラストの資本は、アメリカ式表現によれば「水割りされて」、五〇〇〇万ドルとさだめられた。この「過大資本化」は、このおなじアメリカで鉄鋼トラストが将来の独占利潤を勘定に入れてますます多くの鉄鉱山を買いいれるのと同様に、将来の独占利潤を勘定に入れていた。実際に、砂糖トラストは独占価格を設定し、そして、七倍に「水割りされた」資本にたいして一〇％の配当をおこなうことができるほどの収入をあげたのであるが、この配当は、トラスト設立のときに実際に払いこまれた資本にたいしてほとんど七〇％にあたる！　一九〇九年にはこのトラストの資本は九〇〇〇万ドルであった。二二年のうちに資本は一〇倍以上になったわけである。

フランスでは「金融寡頭制」の支配は（『フランスにおける金融寡頭制に抗して』――これはリジスの有名な書物の標題である。第五版が一九〇八年に出ている）、わずかばかり変った形をとった。四つの巨大銀行は有価証券の発行にあたって、相対的ではなく「絶対的独占」を享有している。事実上、これは「大銀行のトラスト」である。そして独占は証券発行による独占利潤を保障している。借款の場合、借款を受ける国は、総額の九〇％以上は受けとらないのが普通であって、一〇％は銀行その他の仲介者の手にはいる。銀行の利潤は、四億フランの露清公債から八％、八億フランのロシア公債（一九〇四年）から一〇％、六二五〇万フランのモロッコ公債（一九〇四年）から一八・七五％であった。小さな高利貸資本から発展をはじめた資本主義は、巨大な高利貸資本としてその発展を終える。「フランス人はヨーロッパの高利貸である」、とリジスは言っている。経済生活のあらゆる条件が、資本主義のこの変質のため深刻な変化をこうむっている。人口も、工業も、商業も、海運業も停滞しているのに、「国」は高利貸によって富むことができるのである。「八〇〇万フランの資本を代表する五〇人の人が、四つの銀行で二〇億フランを自由にできる」。すでにわれわれの知っている「参与」制度が、やはり同じ結果に導く。巨大銀行の一つ「ソシエテ・ジェ

ネラール」が「子会社」の「エジプト精糖会社」の社債六四、〇〇〇口を発行したとき、その発行価格は一五〇%であった。すなわち、銀行は一ルーブリにつき五〇カペイカ儲けた。だがこの会社の配当は架空のものであることがわかり、「公衆」は九〇〇〇万から一億フランの損失を受けた。しかも「『ソシエテ・ジェネラール』の取締役の一人は『精糖会社』の重役の一人であった」。だから、この著者が、「フランス共和国は金融君主国である」とか、「金融寡頭制が完全に支配しており、それは新聞をも政府をも支配している」*とかいう結論をくださずにはいられなかったのも、あやしむにたりない。

* リジス『フランスにおける金融寡頭制に抗して』、第五版、パリ、一九〇八年、一一、一二、二六、三九、四〇、四八ページ。

金融資本の重要な業務の一つである有価証券発行のもつ異常に高い収益性は、金融寡頭制の発展と強化において非常に重大な役割を演じている。「国内には、外債発行のさいの仲介に匹敵するほどの収益をあたえる事業は一つもない」――ドイツの雑誌『バンク』はこのように書いている。*

* 『バンク』、一九一三年、第七号、六三〇ページ。

「証券発行の業務ほど高い利得をもたらす銀行業務は一つもない」。産業企業の証券を発行するときの利得は、『ドイッチェ・エコノミスト』の資料によれば、年平均で次のとおりであった。〔第8表を参照〕

〔第8表〕

年	%
1895年	38.6%
1896年	36.1%
1897年	66.7%
1898年	67.7%
1899年	66.9%
1900年	55.2%

「一八九一―一九〇〇年の一〇年間に、ドイツの産業証券の発行で一〇億マルク以上が『稼ぎだされ』た」*。

* シュティリヒ、前掲書、一四三ページおよびW・ゾンバルト『一九世紀のドイツ国民経済』、第二版、一九〇九年、五二六ページ、付録8。

産業の好況期には金融資本の利潤はすばらしく大きいが、他方また不況期には、小さくて堅実でない企業はたおれるのに、大銀行は、それらを安値買収とか、あるいは儲けの多い「整理」や「再建」に「参与」する。欠損企業の「整理」にあたっては、「株式資本は減価される。すなわち、収益はより少ない資本にたいして分配され、その後は、その資本にたいして計算される。あるいは、もし収益がなにもないようなら、新しい資本がつぎこまれ、これはより収益の少ない旧資本と結合されて、いまや十分な収益を生むこととなる」。ヒルファディングはさらにつけくわえていっている。「ついでながらいえば、こういう整理や再建は、銀行にとっては二重の意義をもつ。第一には有利な事業と

してであり、第二には、窮地にあるこのような会社を自分に従属させるための好機としてである」。*

* 『金融資本論』、一七二ページ。(一六)

例をあげよう。ドルトムントの「ウニオン」鉱業株式会社は一八七二年に設立された。約四〇〇〇万マルクの株式資本が発行され、その相場は、初年度に一二%の配当が得られたときには一七〇%に騰貴した。金融資本は甘い汁を吸って、二八〇〇万マルクばかりのほんのわずかを稼ぎだした。この会社の設立にあたって重要な役割を演じたのは、順調に三億マルクの資本をもつにいたっていた例のドイツ最大の銀行「ディスコントーゲゼールシャフト」であった。その後「ウニオン」の配当はゼロに下った。株主たちは資本の「棒びき」に、すなわち、全資本を失わないためにその一部を失うことに、同意しなければならなかった。こうして、何回かの「整理」の結果、「ウニオン」会社の帳簿から三〇年間に七三〇〇万マルク以上が消された。「現在では、この会社の最初の株主たちは、その株式の額面のわずか五%をもっているにすぎない」。* ——それなのに、「整理」のたびに銀行は「稼ぎ」つづけていたのである。

* シュティリヒ、前掲書、一三八ページおよびリーフマン、五一ページ。

急速に発達しつつある大都市の近郊での土地投機もまた、金融資本のとくに有利な業務である。銀行の独占は、この場合、地代の独占および交通機関の独占と融合している。なぜなら、地価の高騰、土地を有利に分譲する可能性、等等は、なによりも都心との交通の便のいかんにかかっており、しかもこれらの交通機関は、参与制度や取締役職の割当てによって当の銀行と結びついている大会社の手にあるからである。こうして、『バンク』の寄稿家で、土地売買や土地抵当などの業務を専門に研究したドイツの著述家L・エシュヴェーゲが「泥沼」と名づけたものが生じる。すなわち、近郊の土地の気違いじみた投機、ベルリンの商社「ボスヴァウ・ウント・クナウアー」のような建設会社の破産——この会社は、「最も堅実で最も大きな」「ドイチェ・バンク」の仲介によって一億マルクほどの金をかきあつめていた会社であるが、銀行のほうは、もちろん「参与」制度によって、すなわち内々に、裏で、うごいていて、「たった」一二〇〇万マルクの損をしただけで手を引いてしまった——、ついで、いかさま建設会社からなんの支払も受けない小経営主と労働者の零落、建築地情報や市会の建築許可証の交付を受けるための「誠実な」ベルリン警察や行政官庁との詐欺的な結託、その他等々である。*

* 『バンク』、一九一三年、九五二ページ、L・エシュヴェーゲ『泥沼』、同誌、一九一二年、第一号、二二三ページ以下。

ヨーロッパの大学教授やお人好しのブルジョアたちが偽善的に顔をしかめてなげいている「アメリカ式風習」が、金融資本の時代には、どこの国でも、文字どおりあらゆる大都市の風習となったのである。

一九一四年の初めにベルリンで、「交通業トラスト」が、すなわち、高架鉄道、市街電車、バス会社の三つのベルリンの交通企業のあいだの「利益協同体」が形成されようとしている、といううわさがたった。雑誌『バンク』は次のように書いた。「このような企てがあることは、バス会社の株式の過半数が他の二つの交通会社の手にうつったことがわかったときから、知られていた。……この目的を追求する人々が、自分たちは交通業を統一的に調整することによって節約をしようとのぞんでいるのであり、その節約の一部は結局は公衆の利益になりうるだろうと言うと、人々はこれをそのまま信じかねない。だが、形成されようとしているこの交通業トラストの背後にはいくつかの銀行がひかえており、それらは、のぞみさえすれば、それらが独占している交通機関を土地売買の利益に従属させうるので、問題は複雑である。このような推定が当然であることを納得するためには、すでに高架鉄道会社の設立のさいに、その設立を奨励した一つの大銀行の利益が介在していたことを思いおこせば、十分である。すなわち、この交通企業の利益は土地売買の利益と絡みあっていたのだ。じつは、この鉄道の東部線は、のちに鉄道の建設がもはや確実になったときにこの銀行が自分自身と何人かの関係者のために膨大な利益をもって売却した土地を、とおるはずになっていたのである……」。*

＊『交通業トラスト』——『バンク』、一九一四年、第一号、八九ページ。

独占は、ひとたび形成されて幾十億の金を運用するようになると、絶対的な不可避性をもって、政治機構やその他のどんな「特殊性」にもかかわりなく、社会生活のあらゆる面に浸みこんでゆく。(二六)ドイツの経済文献のなかでは、フランスのパナマ事件やアメリカの政治的腐敗についてあてつけをいいながら、プロイセン官吏の誠実さを追従的に賛美するのが普通である。しかし、ドイツの銀行業について論じているブルジョア文献でさえ、純粋の銀行業務の枠をつねに遠くはみだして、たとえば、官吏が銀行に転職する事例がますます多くなることと関連して、「銀行への突進」ということを書かなければならなくなっているのが、実情である。「その秘めたあこがれがベーレン街の坐り心地の良い椅子だというのでは、官吏の清廉さもはたしてどんなものであろうか？」*——ベーレン街というのは、「ドイッチェ・バンク」のあるベルリンの街路のことである。雑誌

『バンク』の発行者アルフレッド・ランスブルグは一九〇九年に『ビザンティン主義の経済的意義』という論文を書いたが、これは、一つには、ヴィルヘルム二世のパレスティナ旅行と、「この旅行の直接の結果であるバグダード鉄道の建設、すなわち、われわれのすべての政治的失策をあわせたよりももっと『包囲』について責任のある、のろうべき『ドイツ企業家精神の大事業』[**]」について述べている。――（包囲というのは、ドイツを孤立させ、帝国主義的な反ドイツ同盟の環でドイツを包囲しようとつとめた、エドワード七世の政策のことである）。すでにわれわれが言及した、この雑誌の寄稿家エシュヴェーゲは、一九一一年に『金権政治と官吏』という論文を書いて、ドイツ人官吏フエルカーの一件を暴露した。この男はカルテル委員会の委員で、精力的なことで秀でていたが、その後しばらくして、最大のカルテルである鉄鋼シンジケートで高給の地位を手に入れた人物である。けっして偶然ではない同様の事件がいくつかあるので、このブルジョア著述家は、「ドイツ憲法によって保障された経済的自由は、経済生活の多くの分野でもはや内容のない空語となった」とか、金権政治の支配が形成されたところでは、「もっとも広範な政治的自由でさえ、われわれが非自由人の国民となることからわれわれを救うことはできない[***]」とか、告白せざるをえなかったのである。

* 〔ランスブルグ〕『銀行への突進』――『バンク』、一九〇九年、第一号、七九ページ。

** 同誌、三〇一ページ。

*** 同誌、一九一一年、第二号、八二五ページおよび一九一三年、第二号、九六二ページ。

ロシアについては、一例をあげるにとどめよう。いまから数年前にあらゆる新聞に載ったことだが、信用局長のダヴィドフが官職を去ってある大銀行に就職したが、その俸給は、契約によれば、数年のうちに一〇〇万ルーブリ以上になることになっていた。信用局というのは、「国家のすべての信用機関の活動を統一すること」を任務として、首都の銀行に八億――一〇億ルーブリの額の補助金をあたえている官庁である[*]。――

* E・アガード、二〇二ページ。

資本の所有と資本の生産への投下との分離、貨幣資本と産業資本あるいは生産的資本との分離、貨幣資本からの収入だけで暮らしている金利生活者と、企業家および資本の運用に直接たずさわるすべての人々との分離――これは資本主義一般に固有のことである。帝国主義とは、あるいは金融資本の支配とは、この分離が巨大な規模に達している、資本主義の最高の段階のことである。金融資本が他のすべ

ての形態の資本に優越することは、金利生活者と金融寡頭制が支配的地位にあることを意味し、金融上の「力」をもつ少数の国家が他のすべての国家からぬきんでることを意味する。この過程がどれほどすすんでいるかは、証券発行の統計、すなわちあらゆる種類の有価証券の発行高の統計から、判断することができる。

A・ネイマルクは『国際統計研究所報』*に、全世界の証券発行にかんするきわめて詳細で、完全で、そして比較のできる資料を発表した。この資料はその後なんども、経済学文献に部分的に引用されている。次に四〇年間の集計をあげよう。〔第9表を参照〕

* 『国際統計研究所報』、第一九巻、第二冊、ハーグ、一九一二年。〔第10表の〕右の欄の小国にかんする数字は、一九〇二年を基準にとり、それを二〇%だけふやした概数である。

〔第9表〕　各10年間の証券発行額

（単位　十億フラン）

1871—1880年	76.1
1881—1890年	64.5
1891—1900年	100.4
1901—1910年	197.8

一八七〇年代に全世界の証券発行総額が高かったのは、とくに、フランス＝プロイセン戦争およびそれにつづいたドイツにおける会社創業時代と関連する起債のためである。全体としては、一九世紀の最後の三〇年間には増加の速度は比較的それほど急速ではなく、二〇世紀の最初の一〇年になってはじめていちじるしい増加を示し、この一〇年にほぼ二倍になっている。したがって二〇世紀の初頭は、独占体（カルテル、シンジケート、トラスト）の成長という点で転換期である——このことについてはすでに述べた——だけでなく、金融資本の成長という点でも、転換期である。

〔第10表〕　1910年の有価証券総額　　（単位　十億フラン）

イギリス	142	479	オランダ	12.5
アメリカ合衆国	132		ベルギー	7.5
フランス	110		スペイン	7.5
ドイツ	95		スイス	6.25
ロシア	31		デンマーク	3.75
オーストリア＝ハンガリー	24		スウェーデン，ノルウェー，ルーマニアその他	2.5
イタリア	14			
日本	12			
合計	600			

一九一〇年の世界における有価証券の総額を、ネイマルクはほぼ八一

五〇億フランと算定している。そして重複計算を概算で控除して、彼はこの額を五七五〇億—六〇〇〇億フランとしている。これを国別に示すと次のとおりである（総額を六〇〇〇億フランとして）。〔第10表を参照〕

この資料からただちに、それぞれおよそ一〇〇〇億から一五〇〇億フランの有価証券をもつ四つの最も富裕な資本主義国が、どれほどくっきりぬきんでているかがわかる。これらの四つの国のうち二つは、最も古い、そしてあとで見るように、最も植民地を多くもつ資本主義国、イギリスとフランスであり、他の二つは、発展の急速さと生産における資本主義的独占体の普及の程度との点で先進的な資本主義国、アメリカ合衆国とドイツである。これらの四ヵ国であわせて四七九〇億フランを、すなわち全世界の金融資本のほとんど八〇％をもっている。残りの世界のほとんどすべては、なんらかの形でこれらの国々の——国際的銀行家の、世界金融資本のこれら四本の「柱」の——債務者および貢納者の役割を演じている。

金融資本の依存と結びつきとの国際的な網をつくりだすうえで資本の輸出が演じる役割については、とくに立ちいって論じなければならない。

四　資本の輸出

自由競争が完全に支配する古い資本主義にとっては、商品の輸出が典型的であった。だが、独占体の支配する最新の資本主義にとっては、資本の輸出が典型的となった。

資本主義とは、労働力も商品となるような、最高の発展段階にある商品生産である。国内の交易だけでなく、とくに国際間の交易の増大は、資本主義の特徴的な顕著な特質である。個々の企業、個々の産業部門、個々の国の発展における不均等性と飛躍性は、資本主義のもとでは避けられない。はじめはイギリスが他の国々にさきがけて資本主義国となり、一九世紀のなかごろには、自由貿易を導入して、「世界の工場」、すなわち、すべての国への製造品の提供者という役割を要求し、他の国々はこれとひきかえに原料品をイギリスに供給しなければならなかった。しかしイギリスのこの独占は、すでに一九世紀の最後の四半世紀にそこなわれた。なぜなら、一連の他の国々が、「保護」関税にまもられて、自立的な資本主義国家に発展してきたからである。そしてわれわれは、二〇世紀にかかるころに別の種類の独占が形成されたのを見る。それは、第一には、資本主義の発展したすべての国における資本家の独占団体の形成であり、第二には、資本の蓄積が巨大な規模に達した少数の最も富裕な国々の独占的地位の形成である。先進諸国では巨額の「資本の過剰」が生じた。

もちろん、もし資本主義が、現在いたるところで工業からおそろしく立ちおくれている農業を発展させることができるなら、またもし資本主義が、目まぐるしい技術的進歩にもかかわらずいたるところで依然としてなかば飢餓的で乞食のような状態にある住民大衆の生活水準を高めることができるなら、資本の過剰などということは問題になりえないであろう。そのような「論拠」は小ブルジョア的な資本主義批判者たちがたえずもちだしているところである。しかしそうなったら資本主義は資本主義でなくなるであろう。なぜなら、発展の不均等性も大衆のなかば飢餓的な生活水準も、この生産様式の根本的な、避けられない条件であり前提であるからである。資本主義が資本主義であるかぎり、過剰な資本はその国の大衆の生活水準を引き上げるためにはもちいられないで——なぜならそうすれば資本家の利潤が下がるから——、資本を外国に、後進諸国に輸出することによって、利潤を高めることにもちいられるのである。これらの後進諸国では利潤が高いのが普通である。なぜなら、そこでは資本が少なく、地価は比較的低く、賃金は低く、原料は安いからである。資本輸出の可能性は、一連の後進諸国がすでに世界資本主義の循環のうちにひきいれられ、鉄道の幹線が開通するか建設されはじめ、工業発展の初歩的条件が確保されている、等々のことによってつくりだされる。そして資本輸出の必然性は、少数の国々で資本主義が「爛熟」し、資本にとって（農業の未発展と大衆の貧困という条件のもとで）「有利な」投下部面がたりない、ということによってつくりだされる。

　つぎに、主要な三ヵ国が外国に投下している資本の規模にかんする概略の資料をあげよう。*〔第11表を参照〕

〔第11表〕　国外に投下された資本

（単位　十億フラン）

年　次	イギリス	フランス	ドイツ
1862年	3.6	—	—
1872年	15	10(1869年)	—
1882年	22	15(1880年)	?
1893年	42	20(1890年)	?
1902年	62	27—37	12.5
1914年	75—100	60	44

* ホブソン『帝国主義論』、ロンドン、一九〇二年、五八ページ。リーサー、前掲書、三九五および四〇四ページ。『世界経済アルヒーフ』、第七巻、一九一六年、三五ページのP・アルント。『所報』所収のネイマルク。ヒルファディング『金融資本論』、四九二ページ。ロイド－ジョージ、一九一五年五月四日の下院における演説。『デイリー・テレグラフ』、一九一五年五月五日号。B・ハルムス『世界経済の諸問題』、イエナ、一九一二年、二三五ページほか。ジーグムント・シルダー博士『世界経済の発展傾向』、ベルリン、一九一二年、

第一巻、一五〇ページ。ジョージ・ペイシュ『イギリスの投資……』――『王立統計協会雑誌』、第七四巻、一九一〇―一一年、一六七ページ以下。ジョルジュ・ディウリッチ『ドイツ経済の発展と関連する(一九)、ドイツの銀行の国外膨張』、パリ、一九〇九年、八四ページ。

この表からわかるように、資本の輸出が大きな発展をとげたのはやっと二〇世紀初頭のことである。戦前に、この三つの主要な国々の国外への投資額は一七〇〇億―二〇〇〇億フランに達した。この額からの収益は、控えめに年利五%として、一年に八〇億―一〇〇億フランに達するにちがいない。これこそ、世界の大多数の民族と国とにたいする帝国主義的抑圧と搾取の、またひとにぎりの富裕な国家の資本主義的寄生性の、堅固な基礎である！

国外に投下されたこの資本はさまざまな国にどのように配分されているか、それはどこに投下されているか――この問題にはおおよその答えしかあたえることができないが、それでも現代帝国主義の若干の一般的な相互関係と関連とを明らかにすることができる。〔第12表を参照〕

イギリスでは、第一位にあるのはその植民地領土で、それは、アジアその他はいうにおよばず、アメリカでも非常に大きい（たとえばカナダ）。巨額の資本輸出がここではなによりも巨大な植民地と密接に結びついているのである

〔第12表〕　国外投下資本の大陸別分布　（概数）（1910年ころ）

（単位　十億マルク）

	イギリス	フランス	ドイツ	合計
ヨーロッパ	4	23	18	45
アメリカ	37	4	10	51
アジア，アフリカ，オーストラリア	29	8	7	44
総計	70	35	35	140

が、帝国主義にとっての植民地の意義についてはなおあとで述べる。フランスではこれと異なる。ここでは在外資本は主としてヨーロッパに、それもどこよりもロシアに（一〇〇億フランをくだらないものが）投下されている。しかもそれは主として貸付資本すなわち国債であって、産業企業に投下される資本ではない。イギリスの植民地的帝国主義と区別して、フランスのは高利貸的帝国主義と名づけることができる。ドイツには第三の変種がある。その植民地は大きくなく、ドイツが国外へ投下している資本は、ヨーロッパとアメリカにきわめて均等に分布している。

資本の輸出は、資本が向けられる国で資本主義の発展に影響をおよぼし、その発展をいちじるしく促進する。だから、ある程度、資本の輸出は輸出国での発展をいくらか停滞させることになりかねないとしても、そうなるのは、まさに全世界における資本主義のいっそうの発展を拡大し深めることとの代償としてである。

資本を輸出する国にとっては、ある「利益」を獲得する可能性がほとんどいつも得られるのであって、この利益の性格は金融資本と独占体の時代の特性を照らしだしてくれる。たとえば、ベルリンの雑誌『バンク』は一九一三年一〇月に次のように書いた。

「国際資本市場ではさきごろから、アリストパネースの筆にふさわしいような喜劇が演じられている。スペインからバルカンにいたる、ロシアからアルゼンティン、ブラジル、あるいは中国にいたる、数多くの外国国家が、借款を得ようという要求をもって、それもときにはきわめて緊急な要求をもって、公然あるいは隠然と大貨幣市場に現われている。ところが貨幣市場はいまとりわけ良好な状態にあるわけではなく、また政治的見通しも明るくはない。しかしどの貨幣市場も、隣国が自国を出しぬいて借款に応じ、それとともにその給付にたいしてなんらかの反対給付を確保しはしないかという懸念から、借款要求をあえて拒否しかねている。この種の国際取引のさいにはほとんどいつも、通商条約における譲歩であれ、給炭所であれ、港湾建設であれ、うまい利権であれ、大砲の注文であれ、なにかが債権者の利益に帰するのである」。*

* 『バンク』、一九一三年、第二号、一〇二四—一〇二五ページ。

金融資本は独占体の時代をつくりだした。ところで独占体はいたるところで独占原理をともなう。有利な取引のために「縁故」を利用することが、公開市場での競争にとってかわる。借款の一部を債権国の生産物、とくに軍需品、船舶、等々の購入に支出することを借款の条件とするのは、最も普通のことである。フランスは最近の二〇年間（一八九〇—一九一〇年）に非常にしばしばこの手段に訴えた。資本の輸出は商品の輸出を助長する手段となる。そのさい、とくに大きな企業のあいだの取引は——シルダーが「やんわりと」表現したように*——「贈賄と紙ひとえ」である。ドイツのクルップ、フランスのシュネーデル、イギリスのアームストロングは、巨大銀行および政府と緊密に結びついていて、借款契約をむすぶさいに容易には「無視」できない会社の見本である。

* シルダー、前掲書、三四六、三五〇、三七一ページ。

フランスはロシアに借款をあたえるにあたって、一九〇

五年一一月一六日の通商条約でロシアを「締めつけて」、一九一七年を期限とするある譲歩を獲得した。同じことは、一九一一年八月一九日の日本との通商条約についてもあった。オーストリアとセルビアとの関税戦争は、一九〇六年から一九一一年までのあいだに七ヵ月間中断しただけでずっとつづいたが、それは一部分は、セルビアへの軍需品供給でのオーストリアとフランスとの競争によってひきおこされたものである。ポール・デシャネルは一九一二年一月に議会で、フランスの商会は一九〇八―一九一一年のあいだにセルビアに四五〇〇万フランの軍需資材を納入した、と言明した。

サンーパウロ（ブラジル）駐在のオーストリア＝ハンガリーの領事の報告のなかでは、次のように述べられている。「ブラジルの鉄道建設は、大部分、フランス、ベルギー、イギリスおよびドイツの資本でおこなわれている。これらの国は、鉄道建設と関連する金融業務のさいに、鉄道建設資材の供給を自国の手に確保している」。

このように、金融資本はその網を世界のすべての国に、いわば文字どおり張りめぐらしている。そのさい大きな役割を演じるのは、植民地に設置される銀行とその支店である。ドイツの帝国主義者たちは、この点でとくに「うまく」やっている「古い」植民地領有国を、うらやましげにながめている。イギリスは一九〇四年に二二七九の支店をもつ五〇の植民地銀行（一九一〇年には五四四九の支店をもつ七二の銀行）をもっていたし、フランスは一三六の支店をもつ二〇の銀行を、オランダは六八の支店をもつ一六の銀行をもっていたのに、ドイツは「全部でたった」七〇の支店をもつ一三の銀行しかもっていなかった。*アメリカの資本家たちは、それはそれで、イギリスとドイツの資本家をうらやんでいる。彼らは一九一五年にこう不平をいった。「南アメリカでは五つのドイツ銀行が四〇の支店を、五つのイギリス銀行が七〇の支店をもっている。……イギリスとドイツは最近の二五年間にアルゼンティン、ブラジル、ウルグァイに約四〇億ドルを投資した。そしてその結果、両国はこれら三国の全貿易額の四六％をその手におさめている」。**

資本を輸出する国は、比喩的な意味で世界を自分たちの

* リーサー、前掲書、第四版、三七五ページおよびディウリッチ、二八三ページ。

** 『アメリカ政治＝社会科学アカデミー年報』、第五九巻、一九一五年五月、三〇一ページ。同書の三三一ページに書いてあるところによると、有名な統計学者ペイシュは、金融雑誌『ステーティスト』の最近号で、イギリス、ドイツ、フランス、ベルギー、オランダが輸出した資本の額を、四〇〇億ドルすなわち二〇〇〇億フランと算定した。

あいだで分割した。だが金融資本は世界の直接の分割をももたらした。

五　資本家団体のあいだでの世界の分割

資本家の独占団体、カルテル、シンジケート、トラストは、その国の生産を多少とも完全にその手におさめつつ、まずはじめに国内市場を相互のあいだで分割する。しかし資本主義のもとでは、国内市場は不可避的に外国市場と結びついている。資本主義は早くから世界市場をつくりだした。そして、資本輸出が増加し、最大の独占諸団体の対外的および対植民地的結びつきや「勢力範囲」がいろいろと拡大したのにつれて、事態は「おのずから」それらのあいだの世界的協定に、国際カルテルの形成に近づいていった。

これは、資本と生産との世界的集積の新しい段階、先行のものとは比べものにならないほど高い段階である。次にこの超独占がどのようにして成長するかを見よう。

電機産業は、技術の最新の達成によって、一九世紀末から二〇世紀初めにかけての資本主義にとって、最も典型的な産業である。そしてそれは新しい資本主義国のうちで最も先進的な二つの国、合衆国とドイツでどこよりも発展した。ドイツでは一九〇〇年の恐慌がこの産業部門における集積の増進にとくに強い影響をおよぼした。このころまで

電機産業におけるグループ

一九〇〇年以前		一九一二年ころ	
フェルテン・ウント・ギヨーム	フェルテン・ウント・ラーマイヤー	A・E・G（アルゲマイネ・エレクトリツィテーツ・ゲゼールシャフト）	一九〇八年以来密接に「協力」
ラーマイヤー	フェルテン・ウント・ラーマイヤー	A・E・G（アルゲマイネ・エレクトリツィテーツ・ゲゼールシャフト）	一九〇八年以来密接に「協力」
ウニオン	A・E・G（アルゲマイネ・エレクトリツィテーツ・ゲゼールシャフト）	A・E・G（アルゲマイネ・エレクトリツィテーツ・ゲゼールシャフト）	一九〇八年以来密接に「協力」
A・E・G	A・E・G（アルゲマイネ・エレクトリツィテーツ・ゲゼールシャフト）	A・E・G（アルゲマイネ・エレクトリツィテーツ・ゲゼールシャフト）	一九〇八年以来密接に「協力」
ジーメンス・ウント・ハルスケ	ジーメンス・ウント・ハルスケ・シュッケルト	ジーメンス・ウント・ハルスケ・シュッケルト	一九〇八年以来密接に「協力」
シュッケルト会社	ジーメンス・ウント・ハルスケ・シュッケルト	ジーメンス・ウント・ハルスケ・シュッケルト	一九〇八年以来密接に「協力」
ベルグマン	ベルグマン	ジーメンス・ウント・ハルスケ・シュッケルト	一九〇八年以来密接に「協力」
クンマー	一九〇〇年に破産		

にすでに産業と十分に癒着していた銀行は、この恐慌のときに比較的小さな企業の没落と大企業によるそれらの吸収をいちじるしく促進し強化した。ヤイデルスはこう書いている。「まさに銀行の援助を最も必要としている企業から手をひくことによって、銀行は、かつては援助によって気違いじみた景気をあおっておきながら、のちには、銀行と十分密接には結びついていない会社を絶望的な破滅に追いやる」*。

* ヤイデルス、前掲書、二三二ページ。

その結果、集積は一九〇〇年以後に巨大な前進をとげた。一九〇〇年以前には電機産業には七つか八つの「グループ」があり、そのおのおのはいくつかの会社（全部で二八あった）から成っていて、そしてそれぞれの背後に二つから一一の銀行があった。だが一九〇八―一九一二年ごろには、これらすべてのグループは二つあるいは一つに融合してしまった。この過程は次のようにすすんだ。〔前ページの表を参照〕

このようにして大きくなった有名なA・E・G（アルゲマイネ・エレクトリツィテーツ－ゲゼールシャフト）は、（「参与」制度によって）一七五―二〇〇の会社を支配し、総額約一五億マルクの資本を自由にしている。この会社は、直接の在外代理店だけでも一〇ヵ国以上に三四をもっており、そのうち一二は株式会社である。すでに一九〇四年に、ドイツの電機産業が国外に投下している資本は二億三三〇〇万マルクあり、そのうち六二〇〇万マルクはロシアに投下されている、と考えられていた。いうまでもなく、「アルゲマイネ・エレクトリツィテーツ－ゲゼールシャフト」は巨大な「総合」企業であり、それに属する製造会社だけでも一六をかぞえ、電線や碍子から自動車や飛行機にいたるまでの種々さまざまな生産物を生産している。

しかしヨーロッパにおける集積はアメリカにおける集積過程の構成部分でもあった。事態は次のようにすすんだ。

アメリカ　「ジェネラル・エレクトリック・カンパニー」(General Electric Co.)

トムソン＝ハウストン会社がヨーロッパに一会社を設立　｜　エディソン会社がヨーロッパのために会社「フランス・エディソン会社」を設立。これがドイツの会社に特許権を譲渡

ドイツ　「ウニオン・エレクトリツィテーツ－ゲゼールシャフト」　｜　「アルゲマイネ・エレクトリツィテーツ－ゲゼールシャフト」(A・E・G)

「アルゲマイネ・エレクトリツィテーツ－ゲゼールシャフト」(A・E・G)

〔第 13 表〕

		商品取引高（百万マルク）	従業員数	純益（百万マルク）
アメリカ――〈ジェネラル・エレクトリック・カンパニー〉（G・E・C）	1907年	252	28,000	35.4
	1910年	298	32,000	45.6
ドイツ――〈アルゲマイネ・エレクトリツィテーツ－ゲゼールシャフト〉（A・E・G）	1907年	216	30,700	14.5
	1911年	362	60,800	21.7

こうして二つの電機「強国」ができあがった。「これらから完全に独立している他の電機会社は地球上にない」、とハイニヒは論文『電機トラストへの道』のなかで書いている。この二つの「トラスト」の取引高と企業の規模については、次の数字がなにがしかの――完全というにはほど遠いが――観念をあたえてくれる。〔第13表を参照〕

そして一九〇七年にはアメリカとドイツのトラストのあいだに世界の分割にかんする協定がむすばれた。競争は排除された。「ジェネラル・エレクトリック・カンパニー」（G・E・C）は合衆国とカナダを「受けとり」、「アルゲマイネ・エレクトリツィテーツ－ゲゼールシャフト」（A・E・G）にはドイツ、オーストリア、ロシア、オランダ、デンマーク、スイス、トルコ、バルカンが「あてがわれた」。特別の――もちろん秘密の――協定が、新しい産業部門や形式的にはまだ分割されていない「新しい」国へ侵入する「子会社」にかんして、むすばれている。発明や経験を交換しあうことも規定されている。*

* リーサー、前掲書。ディウリッチ、前掲書、二三九ページ。クルト・ハイニヒ、前掲論文。

幾十億の資本を自由にし、世界のすみずみに自己の「支店」、代表、代理店、取引先、等々をもっている、この事実上単一の世界的なトラストと競争することがどんなに困難であるかは、自明である。しかしこの二つの強大なトラストのあいだでの世界の分割も、もし力関係が――発展の不均等や戦争や倒産などの結果――かわれば、もちろん、再分割を妨げるものではない。

このような再分割の試みの、再分割のための闘争の、教訓に富んだ実例を、石油産業が示している。

ヤイデルスは一九〇五年に次のように書いた。「世界の石油市場はいまでもなお二つの大きな金融グループのあい

だで、すなわち、アメリカのロックフェラーの『石油トラスト』(スタンダード・オイル・カンパニー)と、ロシアのバクー石油の支配者たるロスチャイルドおよびノーベルとのあいだで、分割されている。この二つのグループはたがいに密接な関係に立っているが、それらの独占的地位はすでにこの数年来五つの敵によって脅かされている」。* すなわち、(一)アメリカ油田の枯渇、(二)バクーのマンタショーフ商会の競争、(三)オーストリアの油田、(四)ルーマニアの油田、(五)海外の油田、とくにオランダ植民地の油田(きわめて富裕なサミュエル商会とシェル商会、これらはまたイギリスの資本と結びついている)がそれである。最後の三つの企業群は、巨大な「ドイッチェ・バンク」を筆頭とするドイツの大銀行と結びついている。これらの銀行は、「自分の」足場を得るために、たとえばルーマニアで石油産業を自主的に計画的に発展させた。ルーマニアの石油産業には一九〇七年に外国資本が一億八五〇〇万フランあり、そのうちドイツ資本は七四〇〇万フランと見つもられていた。**

* ヤイデルス、一九三ページ。

** ディウリッチ、二四五ページ。

経済学文献でまさに「世界の分割」のための闘争といわれる闘争がはじまった。一方では、ロックフェラーの「石油トラスト」は、すべてを手に入れようとのぞんで、オランダ領インドそのもののなかに「子会社」を設立し、こうしてその主要な敵であるアングロ＝ダッチ「シェル」トラストに一撃をくわえようとおもった。他方、「ドイッチェ・バンク」とその他のベルリンの銀行は、ルーマニアを「わが手に」「ひきとめ」、ロックフェラーに対抗してルーマニアをロシアと連合させようとつとめた。ところがロックフェラーは、はるかに大きな資本と、石油を輸送して消費者に送りとどけるすばらしい組織とをもっていた。闘争は「ドイッチェ・バンク」の完全な敗北をもっておわるほかはなかったし、実際に一九〇七年にそれでもっておわった。「ドイッチェ・バンク」にとっては、数百万の損失でその「石油事業」と手を切るか、それとも屈服するかの、二つに一つの道しか残されていなかった。第二の道がえらばれ、「ドイッチェ・バンク」にとって非常に不利な協定が「石油トラスト」とのあいだにむすばれた。この協定によって「ドイッチェ・バンク」は、「アメリカ側の利益をそこなうことはなにも企てない」義務を負った。もっともそのさい、もしドイツで石油の国家専売法が制定された場合には協定は効力を失う、という規定があった。

そこで「石油喜劇」がはじまる。ドイツの金融王のひと

りで「ドイッチェ・バンク」の取締役であるフォン・グヴィンナーは、彼の秘書シュタウスを通じて、石油専売のための扇動をはじめた。ベルリン最大の銀行の巨大な機関全体、すべての広範な「関係者」が動員され、新聞はアメリカのトラストの「くびき」に反対する「愛国的な」叫びにむせび、帝国議会は一九一一年三月一五日にほとんど満場一致で、石油専売法案を作成すべきことを政府に要請する決議を採択した。政府はこの「人気のある」思いつきにとびついた。そして、アメリカ側の協定当事者をあざむき、国家専売によって自分の事業を建てなおそうと欲した「ドイッチェ・バンク」の賭博は、勝ったように見えた。ドイツの石油王たちは、ロシアの精糖業者の利潤にもおとらない膨大な利潤の前喜びにひたっていた。……しかし第一に、ドイツの大銀行が相互のあいだで獲物の分配をめぐって争いをはじめ、「ディスコントーゲゼールシャフト」は「ドイッチェ・バンク」の貪欲な関心を暴露した。第二に、政府がロックフェラーとの戦いにおそれをいだいた。というのは、ロックフェラーなしでドイツが石油を手に入れられるかどうか（ルーマニアの産出高は大きくない）、きわめて疑問だったからである。第三に、ちょうどそのとき、ドイツの戦争準備のために数十億にのぼる一九一三年度予算が可決された。こうして専売法案は延期された。ロックフェラーの「石油トラスト」はここ当分は戦いの勝利者となっている。

ベルリンの雑誌『バンク』はこのことについて次のように書いた。ドイツは電力の専売を実施し、水力を利用して安い電気をおこす以外の方法では、「石油トラスト」とたたかいえない、と。だが——とこの雑誌はつけくわえている——「電力の専売は、電力生産者が必要とするときにおこなわれるであろう。すなわち、電気産業における次の大きな瓦落が真近にせまったときに、そして、今日電気産業の私的『コンツェルン』によって方々に建設されている巨大で高価な発電所——それのために、これらの『コンツェルン』は今日すでに都市や国家その他からなんらかの部分的独占をあたえられているのだが——が、もはや有利に営業できなくなったときに、おこなわれるであろう。そのときに、水力を利用しなければならなくなるであろう。しかし国営では水力から安い電力を得ることはできなくて、水力はふたたび『国家によって統制される私的独占』に譲渡されなければならないだろう。なぜなら、私的産業はすでにたくさんの取引契約をむすんでいて、巨額の補償金を獲得しているからである。……カリの専売のときもそうだったし、石油の専売のときもそうだし、電力の専売のときもそうであろう。いまや、美しい原理に目がくらんでいるわ

が国家社会主義者たちも、ついに次のことを理解すべきときであろう。すなわち、ドイツでは専売は、消費者に利益をもたらすとか、あるいは国家に企業者利得の一部でもあたえるとかいう目的をもったことも、そういう結果をもたらしたこともけっしてないのであって、それは、破産に瀕した私的産業を国家の負担で救済することに役だっただけなのである」*。

* 『バンク』、一九一二年、第一号、一〇三六ページ、一九一二年、第二号、六二九ページ、一九一三年、第一号、三八八ページ。

このように貴重な告白をドイツのブルジョア経済学者はしなければならなくなっている。われわれはここで、金融資本の時代には私的独占と国家的独占とが一つに絡みあっていること、両者とも実際には、世界の分割のための最大の独占者たちのあいだの帝国主義的闘争の個々の環にすぎないことを、はっきり見るのである。

海運業でも、集積の巨大な成長はやはり世界の分割に導いた。ドイツでは二つの巨大会社、「ハンブルグ＝アメリカ」と「北ドイツ・ロイド」とがずばぬけている。両方とも、おのおの二億マルクの資本（株式と社債）と、一億八五〇〇万―一億八九〇〇万マルクの価額の汽船をもっている。他方アメリカでは一九〇三年一月一日に、いわゆるモルガン・トラストすなわち「国際商船会社」が、アメリカとイギリスの九つの海運会社を合併し、一億二〇〇〇万ドル（四億八〇〇〇万マルク）の資本を擁して、設立された。すでに一九〇三年に、ドイツの巨大会社とこのアメリカ＝イギリスのトラストとのあいだに、利潤の分配に関連して世界の分割にかんする協定がむすばれた。そしてドイツの会社はイギリスとアメリカとをむすぶ輸送業務で競争することを断念した。どの港はどの会社に「ゆだねられる」かが精密に規定され、共同統制委員会が設置された、等々。この協定は二〇年の期限でむすばれているが、戦争のときには効力を失うという用意周到な但し書がついている*。

* リーサー、前掲書、一二五ページ。

国際軌条カルテルの形成史もまたきわめて教訓に富んでいる。はじめイギリス、ベルギー、ドイツの軌条工場が、すでに一八八四年、産業の極度の沈滞期に、このようなカルテルを設立しようと試みた。協定に参加した国の国内市場では競争しないことと、外国市場をイギリス――六六％、ドイツ――二七％、ベルギー――七％の比率で分割することが、協定された。インドは全部イギリスにゆだねられた。協定にくわわらなかったイギリスの一会社にたいしては共同の戦いが遂行され、その費用は共同販売から一定の比率によってまかなわれた。しかし一八八六年に二つのイギリ

スの会社が連合から脱退したときに、トラストは崩壊した。これにつづく産業の好況期に協定に達しえなかったことは、特徴的である。

一九〇四年初めに、ドイツで鉄鋼シンジケートが設立された。そして一九〇四年一一月には、イギリス――五三・五%、ドイツ――二八・八三%、ベルギー――一七・六七%の比率で、国際軌条カルテルが復活した。ついでフランスが、第一年、第二年、第三年に一〇〇%をこえる四・八%、五・八%、六・四%の比率で協定にくわわり、総量は一〇四・八%、等々となった。一九〇五年には合衆国の「鉄鋼トラスト」（「U・S・スティール・コーポレーション」）が、ついでオーストリアとスペインがくわわった。フォーゲルシュタインは一九一〇年にこう書いた。「いまの時点で地球の分割は完了している。そして大口消費者、なによりも国有鉄道は、彼らの利益が考慮されることなしに世界がすでに分割されているのだから、詩人のようにジュピターの天国に住まわなければならない」*。

＊ フォーゲルシュタイン『組織形態』、一〇〇ページ。

さらに国際亜鉛シンジケートについて一言すると、これは一九〇九年に設立され、ドイツ、ベルギー、フランス、スペイン、イギリスの五ヵ国の工場群のあいだに、生産高をこまかく割り当てた。つぎに国際火薬トラストは、リーフマンのことばによれば、「ドイツのすべての爆薬製造工場のあいだのまったく現代的な緊密な同盟であって、これらの工場は、のちにこれにならって組織されたフランスとアメリカの爆薬工場とともに、相互のあいだで、いわば世界を分割した」*。

＊ リーフマン『カルテルとトラスト』、第二版、一六一ページ。

リーフマンは、ドイツの参加する国際カルテルの数は、一八九七年には全部で約四〇であったが、一九一〇年ころにはすでに一〇〇ほどあったと見つもった。

一部のブルジョア著述家たち（いまではK・カウツキーも、たとえば一九〇九年の彼のマルクス主義的立場を完全に裏切って、彼らの仲間にくわわった）は、国際カルテルは資本の国際化の最もきわだった現われの一つであって、資本主義のもとでの諸国民間の平和を期待する可能性をあたえるものだ、という見解を表明した。この見解は、理論的には完全に不合理であり、実践的には詭弁であって、最悪の日和見主義を不誠実にも擁護する一方法である。国際カルテルは、いまや資本主義的独占体がどの程度まで成長したか、そしてなにをめぐって資本家団体のあいだの闘争がおこなわれているかを、示している。この最後の事情は[三]最も重要である。この事情だけが、いま起こっていることの歴史的＝経済的意味をわれわれに明らかにしてくれる。

というのは、闘争の形態は、種々の、比較的部分的で一時的な原因によって変化しうるし、またたえず変化するが、闘争の本質、その階級的内容は、階級が存在するかぎり、どうあっても変化しえないからである。いうまでもなく、現代の経済闘争の内容（世界の分割）を塗りかくし、時に応じてこの闘争のあれこれの形態を強調することは、たとえばドイツ・ブルジョアジーの利益になることである――カウツキーはその理論的考察において、本質上彼らの側にうつってしまったのだ（このことについてはなおあとで述べる）。まさにこの誤りをカウツキーはおかしているのである。もちろん、ここで問題になるのはドイツ・ブルジョアジーではなく、全世界のブルジョアジーである。資本家たちが世界を分割するのは、彼らに特別に悪意があるからではなく、集積の到達した段階が利潤獲得のために彼らをいやおうなくこの道に立たせるからである。そのさい、彼らは世界を「資本に応じて」、「力に応じて」分割する、――商品生産と資本主義との制度のもとでは、これ以外の分割方法はありえない。ところで、力は経済的および政治的発展に応じて変化する。いま起こっていることを理解するためには、どういう問題が力の変化によって解決されようとしているかを知らなければならない。そして、これが「純粋に」経済的な変化であるか、それとも経済外的な（たとえば軍事的な）変化であるかという問題は、第二義的な問題であって、資本主義の最新の時代にたいする基本的見解をすこしも変えることはできない。資本家団体のあいだの闘争と協約の内容の問題を、闘争と協約の形態の問題（きょうは平和的で、あすは非平和的で、あさってもまた非平和的である、というような）にすりかえることは、詭弁家の役割に身をおとすことを意味する。

最新の資本主義の時代はわれわれに次のことを示している。すなわち、資本家団体のあいだに世界の経済的分割を基礎として一定の関係が形成されつつあり、そしてこれとならんで、これと関連して、政治的団体のあいだに、諸国家のあいだに、世界の領土的分割を基礎とし、植民地のための闘争、「経済的領土のための闘争」を基礎として、一定の関係が形成されつつある、ということである。

六　列強のあいだでの世界の分割

地理学者A・ズーパンは『ヨーロッパの植民地の領土的発展』[*]という著書のなかで、一九世紀末におけるこの発展について次のような簡単な要約をしている。〔第14表を参照〕

* A・ズーパン『ヨーロッパの植民地の領土的発展』、一九〇

〔第14表〕 ヨーロッパの植民地領有列強（合衆国をふくむ）に属する土地面積のパーセント

	1876年	1900年	増加率
アフリカ	10.8%	90.4%	＋ 79.6%
ポリネシア	56.8	98.9	＋ 42.1
アジア	51.5	56.6	＋ 5.1
オーストラリア	100.0	100.0	—
アメリカ	27.5	27.2	－ 0.3

六年、二五四ページ。

「したがって、この時期の特徴はアフリカとポリネシアの分割である」——彼はこうむすんでいる。だがアジアにもアメリカにも未占取の土地、すなわちどの国家にも属さない土地はないのだから、ズーパンの結論を拡張して、この時期の特徴は地球の最後的分割である、といわなくてはならない。もっともここに最後的というのは、再分割が不可能だという意味ではなく——それどころか、再分割は可能だし、不可避である——、資本主義諸国の植民政策が地球上の未占取の土地の略取を完了した、という意味である。世界ははじめて分割されつくした。だから今後きたるべきものは再分割だけである。すなわち、無主の状態から「所有主」への移転ではなくて、ある「所有者」から他の「所有者」への移転である。

したがってわれわれは、世界的植民政策の独特な時代に際会しているのであるが、この植民政策は「資本主義の発展の最新の段階」と、金融資本と、きわめて緊密に結びついている。だから、この時代のまえの諸時代との相違および現在の事態をできるだけ正確に解明するためには、なによりもまず事実資料を詳しく見る必要がある。この場合になによりも次の二つの事実問題がおこる。すなわち、ほかならぬ金融資本の時代に植民政策の強化が、植民地のための闘争の激化が見うけられるかどうかということと、現在この点で世界はいったいどのように分割されているかということとである。

アメリカの著述家モリスは、植民史にかんする著書*のなかで、一九世紀のいろいろな時期におけるイギリス、フランス、ドイツの植民地領有の規模にかんする資料をつくることを試みている。彼の得た結果を次に簡略にしてかかげよう。〔第15表を参照〕

* ヘンリー・C・モリス『植民地史』、ニューヨーク、一九〇〇年、第二巻、八八ページ、第一巻、四一九ページ、第二

〔第15表〕 植民地領土の規模

年次	イギリス		フランス		ドイツ	
	面積(百万平方マイル)	人口(百万人)	面積(百万平方マイル)	人口(百万人)	面積(百万平方マイル)	人口(百万人)
1815—1830	?	126.4	0.02	0.5	—	—
1860	2.5	145.1	0.2	3.4	—	—
1880	7.7	267.9	0.7	7.5	—	—
1899	9.3	309.0	3.7	56.4	1.0	14.7

巻、三〇四ページ。

イギリスにとっては、植民地略取が大いに強まった時期は一八六〇—一八八〇年の諸年のことで、一九世紀の最後の二〇年間もそれが非常に顕著だった時期である。フランスとドイツにとっては、それはまさにこの二〇年間のことである。われわれがさきに見たとおり、独占以前の資本主義、自由競争の支配していた資本主義の発展が絶頂に達した時期は、一八六〇年代と一八七〇年代である。われわれはいまや、まさにこの時期のあとで植民地略取のおそるべき「高揚」がはじまり、世界の領土的分割のための闘争が極度に強まったことを見るのである。したがって、独占資本主義の段階への、金融資本への資本主義の移行が、世界の分割のための闘争の激化と結びついているという事実は、疑うべくもない。

ホブソンは帝国主義にかんする彼の著述のなかで、一八八四—一九〇〇年の時代を、主要なヨーロッパ諸国の猛烈な「膨張」(領土拡張)の時代として、とくに区別している。彼の計算によれば、イギリスはこの時期に五七〇〇万の人口をもつ三七〇万平方マイルを、フランスは三六五〇万の人口をもつ三六〇万平方マイルを、ドイツは一四七〇万の人口をもつ一〇〇万平方マイルを、ベルギーは三〇〇〇万の人口をもつ九〇万平方マイルを、ポルトガルは九〇〇万の人口をもつ八〇万平方マイルを、獲得した。一九世紀末の、とくに一八八〇年代以降の、すべての資本主義国家による植民地追求は、外交史と対外政策史のあまねく知られている事実である。

イギリスで自由競争が最も繁栄した時代、一八四〇—一八六〇年代には、この国の指導的なブルジョア政治家たちは植民政策に反対し、植民地の解放、イギリスからの植民地の完全な分離を、不可避で有益なことと考えていた。M・ベアは一八九八年に発表した『現代イギリス帝国主義』*という論文のなかで、ディスレイリのような、一般的

にいえば帝国主義的な傾向のイギリス政治家が、「植民地はわれわれの首にかけられた石うすだ」、といったことを指摘している。だが一九世紀の末には、イギリスにおける時代の英雄は、公然と帝国主義を唱道して最もあつかましく帝国主義的政策を実行したセシル・ローズやジョゼフ・チェンバレンであった！

＊『ノイエ・ツァイト』、第一六巻、第一部、一八九八年、三〇二ページ。

最新の帝国主義のいわば純粋に経済的な根底と社会＝政治的根底との結びつきが、そのころすでにイギリス・ブルジョアジーのそれらの指導的政治家たちにとってはっきりしていたことは、興味ないことではない。チェンバレンはイギリスがいまや世界市場でドイツ、アメリカ、ベルギーから受けている競争をとくに指摘して、帝国主義を「真実の、賢明な、経済的な政策」として唱道した。救いは独占にある――資本家たちはこういって、カルテルやシンジケートやトラストをつくった。救いは独占にある――ブルジョアジーの政治的首領たちはおうむがえしにこういって、世界のまだ分割されていない部分の略取をいそいだ。セシル・ローズは、彼の親友の新聞記者ステッドが語ったところによれば、一八九五年に彼の帝国主義的思想についてステッドに次のようにいった。「私はきのうロンドンのイースト・エンド（労働者街）にゆき、失業者たちの集会をおとずれた。そしてそこで、パンを、パンを、とさけんでいるだけの荒っぽい演説を聞き、家にかえる途中でそのときの光景をよく考えてみたとき、私はいままでよりもっと帝国主義の重要性を確信するようになった。……胸に秘めた私の理想は社会問題の解決である。すなわち、連合王国の四〇〇〇万の住民を血なまぐさい内乱から救うためには、われわれ植民政治家は、過剰人口を住まわせ、工場や鉱山で生産される商品の新しい販路を手に入れるために、新しい土地を手に入れなければならない。私がいつもいっているように、帝国とは胃の腑の問題である。もし内乱を欲しないなら、諸君は帝国主義者にならなければならない」＊。

＊ 前掲誌、三〇四ページ。

百万長者、金融王、そしてボーア戦争の張本人であるセシル・ローズは、一八九五年にこのようにいった。ところが、彼の帝国主義擁護はやや荒っぽくてあつかましいというだけで、本質的には、マスロフ、ジュデクム、ポトレソフ、ダーヴィドやロシアのマルクス主義の創始者〔プレハーノフ〕、その他等々の諸氏の「理論」と違いはない。セシル・ローズはすこしばかりより正直な社会排外主義者だったのである(一三)……

世界の領土的分割とこの点で最近数十年間に生じた変化

とのできるだけ正確な姿を描きだすために、世界のすべての強国の植民地領有の問題にかんする前述の著書のなかでズーパンがあたえている総括的資料を利用しよう。ズーパンは一八七六年と一九〇〇年をとっているが、われわれは一八七六年と一九一四年をとる。一八七六年はきわめて選択の当を得た時点である。なぜなら、大体においてまさにこのころに独占以前の段階における西ヨーロッパ資本主義の発展が完了した、と考えることができるからである。もうひとつの一九一四年については、ズーパンの数字のかわりにヒューブナーの『地理統計表』によって新しい数字をあげよう。またズーパンは植民地しかとっていないが、われわれは――世界の分割の完全な姿をしめすために――、非植民地諸国と半植民地諸国にかんする数字を簡単につけくわえるのが有益だと考える。われわれが半植民地の部類に入れるのはペルシア、中国、トルコで、このうち第一の国はすでにほとんどまったく植民地になったし、第二と第三の国はそうなりつつある。

こうして次の表が得られる。〔第16表を参照〕

われわれはここに、一九世紀と二〇世紀との境目で世界の分割が「完了」したことをはっきり見る。植民地領土は一八七六年以後巨大な規模に拡大した。すなわち、六大強国にあっては四〇〇〇万平方キロメートルから六五〇〇万平方キロメートルへ、一倍半以上に拡大した。増加面積は二五〇〇万平方キロメートルであって、これは本国の面積(一六五〇万平方キロメートル)の一倍半にあたる。三つの強国は一八七六年にはすこしも植民地をもっておらず、第四の強国フランスもほとんどもっていなかった。だが一九一四年までには、これらの強国は一四一〇万平方キロメートルの面積の植民地を獲得していた。これはヨーロッパの面積のほぼ一倍半であって、その人口はほとんど一億人になる。植民地領土の拡大における不均等は非常に大きい。たとえばフランスとドイツと日本を比較すると、これらは面積と人口の点であまり違わないのに、フランスは、ドイツと日本をあわせたもののほとんど三倍(面積の点で)の植民地を獲得したことがわかる。だが金融資本の規模の点では、フランスはこの時期の初めのころには、おそらく、ドイツと日本をあわせたよりもこれまた何倍も富裕だったであろう。植民地領土の規模には、純経済的な条件のほかに、それを基礎にして、地理的な条件その他が影響をおよぼす。最近数十年のあいだに、大工業や交易や金融資本の圧迫のもとで、世界の平準化、さまざまな国における経済条件や生活条件の平均化がどんなにいちじるしくすすんだとしても、それにもかかわらず、やはり少なからぬ相違がのこっているのであって、上記の六ヵ国のなかにも、わ

〔第16表〕　列強の植民地領土

（面積一百万平方キロメートル，住民一百万人）

	植民地				本国		合計	
	1876年		1914年		1914年		1914年	
	面積	住民	面積	住民	面積	住民	面積	住民
イギリス	22.5	251.9	33.5	393.5	0.3	46.5	33.8	440.0
ロシア	17.0	15.9	17.4	33.2	5.4	136.2	22.8	169.4
フランス	0.9	6.0	10.6	55.5	0.5	39.6	11.1	95.1
ドイツ	—	—	2.9	12.3	0.5	64.9	3.4	77.2
合衆国	—	—	0.3	9.7	9.4	97.0	9.7	106.7
日本	—	—	0.3	19.2	0.4	53.0	0.7	72.2
6大強国総計	40.4	273.8	65.0	523.4	16.5	437.2	81.5	960.6
その他の強国（ベルギー，オランダ，等）の植民地							9.9	45.3
半植民地（ペルシア，中国，トルコ）							14.5	361.2
その他の諸国							28.0	289.9
全世界							133.9	1,657.0

われわれは、一方では、異常に急速に進歩しつつある若い資本主義諸国（アメリカ、ドイツ、日本）を見るかとおもうと、他方では、近年前記の諸国よりも進歩がはるかにゆっくりしていた、資本主義的発展の古い国国（フランス、イギリス）を見るし、第三には、経済の点で最も立ちおくれた国（ロシア）を見る。ここでは、最新の資本主義的帝国主義が、いわば、資本主義以前の関係のとくに細かな網の目でおおわれている。

列強の植民地領土とならべて、われわれは小国の小さな植民地をかかげておいたが、これらの植民地は、おこりうべき、そしてたしかにおこりそうな植民地「再分割」の、いわば最も手近な対象である。これらの小国の大部分がその植民地を維持しているのは、ひとえに、大国のあいだに獲物の分配についての協定を妨げる利害の対立やあつれきその他があるおかげである。「半植民地」国家についていえば、それらは、自然と社会のすべての分野に見うけられるあの過渡的形態の一例を示している。金融資本は、あらゆる経済関係とあらゆる国際関係において、きわめて大きな、決定的ともいえるほどの勢力であるから、それは、完全な政治的独立を享有している国家をさえ従属させる能力があるし、実際にも従属させている。われわれはす

ぐあとでその実例を見るであろう。だが、いうまでもなく、金融資本に最大の「便宜」と最大の利益をあたえるのは、従属する国と民族との政治的独立の喪失と結びついているような従属である。半植民地はこの点での「中間物」として典型的である。これらの半従属諸国をめぐる闘争が、残りの世界がすでに分割されてしまった金融資本の時代にとくに激化せずにおかなかったのも、当然である。

植民政策と帝国主義は資本主義の最新の段階以前にも存在したし、資本主義以前にすら存在した。奴隷制に基礎をおくローマは植民政策を遂行し、帝国主義を実現した。しかしもろもろの経済的社会構成体の根本的相違をわすれ、あるいは背後におしやって、帝国主義について「一般的」に論じるような議論は、不可避的に、「大ローマと大ブリテン」とを比較するというような空虚な駄弁や駄ぼらにならずにはおかない。* 資本主義の従前の諸段階の資本主義的植民政策でさえ、金融資本の植民政策とは本質的に異なるのである。

* C・P・ルーカス『大ローマと大ブリテン』、オックスフォド、一九一二年、あるいはクローマー伯『古代帝国主義と近代帝国主義』、ロンドン、一九一〇年。

最新の資本主義の基本的特質は、巨大企業家たちの独占団体の支配ということである。このような独占体は、すべての原料資源を一手ににぎっているときに最も強固である。そして国際的資本家団体が、対抗者から競争のあらゆる可能性をうばうために、たとえば、鉄鉱山や油田などを買収するために、どんなに熱心に努力しているかは、すでにわれわれが見たとおりである。植民地の領有だけが、競争相手との闘争のあらゆる偶発事——対抗者が国家専売法によって自分をまもろうと思うかもしれないというような偶発事までもふくめて——にたいして、独占が成功する完全な保障をあたえる。資本主義が高度に発展すればするほど、原料の不足が強く感じられれば感じられるほど、また全世界における競争と原料資源の追求が激化すればするほど、植民地獲得のための闘争はそれだけ死にものぐるいになる。

シルダーは次のように書いている。「一部の人にはおそらく逆説的と思われるだろうが、都市工業人口の増加は、多少とも近い将来に、食料品の不足によるよりはむしろ工業原料の不足によって抑制されることになりかねない、という主張をすることもできよう」。たとえば、木材の不足がひどくなっているので、木材価格はますます高騰している。皮革や繊維工業の原料もおなじである。「工業家の団体は世界経済全体の範囲で農業と工業との均衡をつくりだそうと試みている。その例として一九〇四年以来存在している、いくつかの最も重要な工業国における綿紡績業者の

団体の国際的連合や、一九一〇年にこれにならって設立されたヨーロッパの麻紡績業者団体の連合を、あげることができる」*。

＊ シルダー、前掲書、三八—四二ページ。

もちろん、ブルジョア的改良主義者たちは、また彼らのなかでとくに今日のカウツキー主義者たちは、この種の事実の意義を弱めようと試みて、次のことを指摘している。すなわち、原料は「高価で危険な」植民政策なしにも自由市場で入手することが「できるであろう」とか、原料の供給は農業一般の条件の「たんなる」改善によってすばらしく増大させることが「できるであろう」とかいうのである。しかしこのような指摘は帝国主義の弁護、美化に転化する。なぜなら、その基礎には、最新の資本主義の主要な特質である独占の忘却があるからである。自由市場はますます過去のものとなりつつあり、独占的なシンジケートやトラストは日ごとに自由市場をせばめている。そして農業の条件の「たんなる」改善というのは、つきつめれば、大衆の状態を改善し、賃金を引き上げ、利潤を減少させることである。いったい、植民地を征服するかわりに大衆の状態に配慮することのできるトラストなどというものが、甘ったるい改良主義者の幻想以外のどこに存在するだろうか？

金融資本にとっては、すでに開発されている原料資源が意義をもっているだけではない。ありうべき資源もまたそうである。なぜなら、今日技術は信じられないほどの速さで発展しており、きょうは役にたたない土地も、新しい方法が発見されれば（このために、大銀行は技師や農学者その他の特別遠征隊を用意することができる）、またもっと多くの資本支出がなされるなら、あすは役にたつものになりうるからである。鉱物資源の探査、あれこれの原料の新しい加工法や利用法、その他等々についても、おなじである。そこで、金融資本は不可避的に経済的領土の拡張、さらには領土一般の拡張に努力することになる。トラストが、将来「ありうべき」（現在のではなく）利潤を計算に入れ、独占の将来の成果を計算に入れて、その財産を二倍にも三倍にも評価して資本化するのとおなじように、一般に金融資本も、ありうべき原料資源を計算に入れ、まだ分割されていない世界の土地の最後の一片のための、あるいはすでに分割されている土地の再分割のための、気違いじみた闘争でおくれをとることをおそれて、どんな土地であろうと、それがどこにあろうと、どのようにしてであろうと、できるだけ多くの土地を略取しようと努力するのである。

イギリスの資本家は自分たちの植民地エジプトで綿花の生産を発展させようと、さまざまに努力している。一九〇四年には、エジプトの可耕地二三〇万ヘクタールのうち、

すでに六〇万ヘクタールすなわち四分の一以上が綿花栽培地であった。またロシアの資本家は自分たちの植民地トゥルケスタンでおなじことをしている。それは、こうすることによって彼らは、よりたやすく外国の競争相手に打撃をくわえることができるし、よりたやすく原料資源を独占するようになることができるし、また、「総合された」生産をもち、綿花の生産と加工のすべての段階を一手に集中している、より経済的で利潤の多い繊維トラストを、よりたやすく設立できるようになるからである。

資本輸出の利益も、同様に、植民地の征服におしやる。なぜなら、植民地市場では、独占的方法によって競争相手を排除し、供給を確保し、適当な「結びつき」をかためる等々のことが、よりたやすい（いや、ときにはここでだけそういうことが可能である）からである。

金融資本の基礎上に成長する経済外的上部構造、すなわち金融資本の政策やイデオロギーは、植民地征服の熱望を強める。「金融資本は、自由ではなく支配を欲する」とヒルファディングは正当にも述べている。（一三） またフランスの一ブルジョア著述家は、さきに引用したセシル・ローズの思想をいわば発展させ補足して、現代の植民政策の経済的諸原因に社会的諸原因をつけくわえるべきだと書いている。「生活が複雑になり、生活難が増大して、これが労働大衆だけでなく中産階級をも圧迫するようになるため、すべての旧文明諸国で『焦慮、憤怒、憎悪が蓄積されて、これが社会の平穏を脅かしている。ある一定の階級的軌道からほとばしりでるエネルギーは、行き場を見つけなければならない。国内で爆発しないように、そのエネルギーは国外で発散させられなければならない』*」。

* ワール『植民地におけるフランス』——アンリ・リュシエ『大洋州の分割』、パリ、一九〇五年、一六五ページから重引。

資本主義的帝国主義の時代の植民政策について述べる以上、金融資本とそれに照応する国際政策——それは、世界の経済的および政治的分割のための列強の闘争に帰着するが——は、国家的従属の幾多の過渡的形態をつくりだすということを、注意しておかなければならない。この時代にとって典型的なのは、植民地を領有する国と植民地という二つの基本的国家群だけでなく、政治的に、形式的には独立国でありながら、実際には金融上および外交上の従属の網でがんじがらめにされている、種々さまざまな形態の従属国も典型的である。これらの形態のうちの一つ——半植民地——については、すでにさきに指摘した。もう一つの形態の見本は、たとえばアルゼンティンである。

シュルツェ－ゲーヴァニッツはイギリス帝国主義にかんする著述のなかで次のように書いている。「南アメリカと

くにアルゼンティンは、ほとんどイギリスの商業植民地と名づけてもよいほど、アルゼンティンは、ロンドンに金融的に従属している」。[*]イギリスがアルゼンティンに投下している資本を、シルダーは、ブエノスアイレス駐在オーストリア＝ハンガリー領事の一九〇九年度報告によって、八七億五〇〇〇万フランと算定した。このためイギリスの金融資本――およびその忠実な「友人」である外交――が、アルゼンティンのブルジョアジー、その国の経済生活と政治生活全体の指導者層と、どんなに強固な結びつきをもつようになっているかは、想像にかたくない。

＊ シュルツェ－ゲーヴァニッツ『二〇世紀初頭のイギリス帝国主義とイギリス自由貿易』、ライプツィヒ、一九〇六年、三一八ページ。ザルトリウス・フォン・ヴァルタースハウゼンもおなじことを述べている。『国外投資の国民経済体系』、ベルリン、一九〇七年、四六ページ。

政治的独立をたもちながら金融的および外交的に従属していることのいくらか違った形態を示しているのが、ポルトガルの例である。ポルトガルは独立の主権国家であるが、事実上は二〇〇年以上のあいだ、すなわちスペインの王位継承戦争（一七〇一―一七一四年）のとき以来、イギリスの保護下にある。イギリスは自分の対抗者であるスペインやフランスとの闘争での自分の立場を強化するために、ポルトガルとその植民地領土を擁護した。イギリスはそれとひきかえに通商上の特恵、すなわち、ポルトガルおよびその植民地への商品の輸出ととくに資本の輸出のための他国より有利な条件や、ポルトガルの港湾、島、海底電線を利用する可能性や、その他等々を獲得した。[*]個々の大国と小国とのあいだのこの種の関係はいつの世にもあった。しかし資本主義的帝国主義の時代には、それは一般的な体系となり、「世界の分割」の諸関係の総体のなかの一部分となり、世界金融資本の諸活動の鎖の環に転化している。

＊ シルダー、前掲書、第一巻、一六〇―一六一ページ。

世界の分割の問題をおえるにあたって、なお次のことを注意しておかなければならない。アメリカ＝スペイン戦争後のアメリカ文献とボーア戦争後のイギリス文献だけが、まさに一九世紀末から二〇世紀初めにかけてこの問題をまったく公然と、そしてきっぱり提起したのではないし、まただれよりも「嫉妬ぶかく」「イギリス帝国主義」をあとづけていたドイツ文献だけがこの事実を系統的に評価したのでもない。フランスのブルジョア文献のなかでも、この問題は、ブルジョア的見地から考えられるかぎりで十分にきっぱり、また広範に提起されている。歴史家ドリオをひきあいにだそう。彼は著書『一九世紀末における政治問題と社会問題』のなかの「列強と世界の分割」という章で次

のように書いている。「近年、中国をのぞき、地球上のすべての自由な土地は、ヨーロッパと北アメリカの強国によって占取された。このことが基礎になってすでにいくつかの衝突と勢力の移動がおこったが、これは近い将来におけるもっと恐ろしい爆発の前兆である。なぜなら、急がなければならないからである。なにも確保しなかった国民は、今後けっして自分の分け前をもらえず、また次の世紀（すなわち二〇世紀）の最も本質的な事実となるであろう地球のあの大規模な開発に参加できない恐れがある。だからこそ全ヨーロッパとアメリカは近時、植民地拡張、一九世紀末の最も顕著な特徴である『帝国主義』の熱病に、とりつかれてしまったのである」。そして著者はつけくわえている。「この世界分割のもとで、地上の宝庫と大市場をめざすこの気違いじみた追求のなかで、この一九世紀に建設された諸帝国の相対的力は、それらの帝国を建設した諸国民がヨーロッパで占めている地位とまったく釣りあわなくなっている。ヨーロッパで優位にある諸強国、すなわちヨーロッパの運命の決定者が、全世界でも同様に優位にあるわけではない。そして植民地の威力、まだ算定されていない富を支配しようという希望は、明らかにヨーロッパの列強の相対的な力に反作用をおよぼすであろうから、そのため、ヨーロッパ自身の政治的諸条件を変化させた植民地問題――あるいはそういいたければ『帝国主義』――は、この政治的諸条件をさらにいっそう変化させるであろう」*。

＊ J・ドリオ『政治問題と社会問題』、パリ、一九〇七年、二九九ページ。

七　資本主義の特殊の段階としての帝国主義

いまやわれわれは一応のしめくくりをし、帝国主義について以上に述べたことを総括してみなければならない。帝国主義は、資本主義一般の基本的諸特質の発展およびその直接の継続として生じた。だが資本主義が資本主義的帝国主義になったのは、やっとその発展の一定の、非常に高い段階でのことであり、資本主義のいくつかの基本的特質がその対立物に転化しはじめ、資本主義からより高度の社会＝経済制度への過渡期の諸特徴があらゆる面で形成され、表面にあらわれたときのことである。この過程で経済的に基本的なのは、資本主義的自由競争に資本主義的独占がとってかわったことである。自由競争は資本主義および商品生産一般の基本的特質である。独占は自由競争の直接の対立物であるが、この自由競争が、大規模生産をつくりだし、小規模生産を駆逐し、大規模生産を巨大な規模の生産によ

っておきかえ、生産と資本との集積を、そのなかから独占をうごかすおよそ一〇ほどの銀行の、これらと融合した資本——カルテル、シンジケート、トラスト、および幾十億の金本——がすでに発生し、いまも発生しつつあるほどにまで導き、こうしてわれわれの目のまえで独占に転化しはじめたのである。それと同時に、独占は、自由競争から生じながらも、自由競争を排除せず、自由競争のうえにこれとならんで存在し、そのことによって幾多のとくに先鋭で激烈な矛盾、あつれき、紛争を生みだす。独占は資本主義からより高度の制度への過渡である。

もし帝国主義のできるだけ簡単な定義をあたえなければならないとしたら、帝国主義とは資本主義の独占段階である、というべきであろう。この定義は最も主要なものをふくんでいるであろう。なぜなら、一方では、金融資本は、産業家の独占団体の資本と融合した、少数の独占的な巨大銀行の銀行資本であり、他方では、世界の分割は、まだどの資本主義的強国によっても略取されていない領域へ妨げられずに拡張しうる植民政策から、くまなく分割された領土の独占的領有という植民政策への移行だからである。

しかしあまりにも簡単すぎる定義は、なるほど主要なものを総括するので便利であるとはいえ、定義すべき現象のきわめて本質的な特徴をその定義からとくに引きださなければならないとなると、やはり不十分である。だから、定義というものはけっして現象の全面的な関連をその完全な発展のうちにとらえうるものではないという、一般にすべての定義のもつ条件的で相対的な意義をわすれることなしに、次の五つの基本的標識をふくむような、帝国主義の定義をあたえなければならない。(一) 生産と資本との集積が、経済生活で決定的な役割を演ずる独占をつくりだすほどに高い発展段階に達したこと。(二) 銀行資本と産業資本が融合し、この「金融資本」を基礎にして金融寡頭制がつくりだされたこと。(三) 商品の輸出とは異なる資本の輸出がとくに重要な意義を獲得しつつあること。(四) 世界を分割する資本家の国際的独占団体が形成されつつあること。(五) 最大の資本主義列強による地球の領土的分割が完了していること。帝国主義とは、独占体と金融資本との支配が成立して、資本の輸出が顕著な意義を獲得し、国際トラストによる世界の分割がはじまり、最大の資本主義諸国による地球の全領土の分割が完了した、そういう発展段階の資本主義である。

なおあとで見るように、もし基本的な純経済的概念(右の定義はこれに限定されている)だけでなく、資本主義一般にたいする資本主義のこの段階の歴史的地位とか、あるいは労働運動の内部における二つの基本的傾向と帝国主義

との関係を考慮に入れれば、帝国主義についてこれとは別様に定義することができるし、またしなければならない。だがいまは、右に指摘した意味に理解される帝国主義は、疑いもなく、資本主義の特殊の発展段階であるということを、注意しておく必要がある。帝国主義についてできるだけ根拠ある観念を読者にあたえるために、われわれはことさら、最新の資本主義経済のとくに争う余地なく明確な事実を承認することをよぎなくされているブルジョア経済学者の論説を、できるだけ多く引用することにつとめた。銀行資本等々がまさにどの程度まで成長したか、量の質への移行、すなわち発展した資本主義の帝国主義への移行がまさにどういう点にあらわれているか、ということを見せてくれる詳しい統計資料を引用したのも、これと同じ目的からであった。もちろん、いうまでもなく、自然や社会における境界はすべて条件的で可動的なものであるから、たとえば帝国主義が「最終的に」確立されたのは何年のことか、あるいは何十年代のことか、などということについて論争するのは、ばかげたことであろう。

しかし帝国主義の定義について、まずだれよりも、いわゆる第二インタナショナルの時代の、すなわち一八八九—一九一四年の二五年間の、主要なマルクス主義理論家であるK・カウツキーと論争しなければならない。われわれがあたえた帝国主義の定義のなかで表現されている基本的思想にたいして、カウツキーは一九一五年に、いやすでに一九一四年一一月にまったく決然と反対して、次のように言明した。——帝国主義は、経済の「局面」あるいは段階と理解すべきではなくて、政策と、すなわち金融資本が「好んでもちいる」一定の政策と、理解すべきである。帝国主義と「現代資本主義」とを同一視してはならない。もし帝国主義を「現代資本主義のすべての現象」——カルテル、保護政策、金融業者の支配、植民政策——と理解すると、資本主義にとっての帝国主義の必然性の問題は、「最も月なみな同義反復」に帰してしまう。なぜなら、そうとすると、「帝国主義は、当然、資本主義にとって死活の必要物だ」ということになるからである。等々。カウツキーのこの考えは、われわれの叙述した思想の本質にまっこうから反対して彼があたえた帝国主義の定義を引用することによって、なによりも正確にあらわせるであろう(なぜなら、長年のあいだこれと同様の思想を説いてきたドイツのマルクス主義者の陣営内の異論は、マルクス主義内の一定の潮流の異論として、カウツキーには早くから知られていたことだからである)。

カウツキーの定義は次のようにいっている。

「帝国主義は高度に発展した産業資本主義の産物である。

それは、そこにどんな民族が住んでいるかにかかわりなく、ますます大きな農業地域（傍点はカウツキー）を隷属させ併合しようという、あらゆる産業資本主義的民族の志向である」。*

＊『ノイエ・ツァイト』、一九一四年、第二号（第三二巻）、九〇九ページ、一九一四年一一月一一日号。なお一九一五年、第二号、一〇七ページ以下を参照。

この定義はまったくなんの役にもたたない。なぜなら、それは一面的だからである。すなわち、それはかってに民族問題だけを（それは、そのものとしても、また帝国主義にたいする関係においても、いちじるしく重要なものではあるが）とりだし、しかもそれを、かってに、またまちがって、他の民族を併合する国の産業資本とだけ結びつけ、おなじくかってに、またまちがって、農業地域の併合をとりだしているからである。

帝国主義は併合への志向である――カウツキーの定義の政治的部分はまさにこれに帰着する。その部分は正しいが、しかしきわめて不完全である。なぜなら、政治的には、帝国主義は一般に強圧と反動とへの志向だからである。しかしわれわれがここで論じているのは問題の経済的側面であって、そしてカウツキー自身もその側面を彼の定義のなかにとりいれているのだ。カウツキーの定義のなかの誤りは明白である。帝国主義にとって特徴的なのは、まさに産業資本ではなく、金融資本である。フランスで、産業資本が弱まったのに、まさに金融資本がとくに急速に発展したため、前世紀の八〇年代に併合（植民）政策が極度に先鋭化したのも、けっして偶然ではない。また帝国主義にとって特徴的なのは、まさに、農業地域だけでなく最も工業的な地域をも併合しようという志向である（ドイツはベルギーに、フランスはローレーヌに食指をうごかしている）。というのは、第一に、地球の分割が完了しているので、再分割にあたっては、どんな土地にも手を出さなければならなくなっているからであり、第二に、帝国主義にとっては、ヘゲモニーをにぎろうと努力する、すなわち、直接に自分のためというよりは、むしろ相手を弱めてそのヘゲモニーをくつがえすために土地を略取しようと努力する、いくつかの強国の競争が本質的だからである（ドイツにとってはベルギーはイギリスにたいする拠点として、イギリスにとってはバグダードはドイツにたいする拠点として、特別に重要である、等々）。

カウツキーは、帝国主義ということばの純政治的意義を彼カウツキーのいう意味で確立したといわれるイギリス人たちを、とくに――しかもたびたび――引合いに出している。そこでイギリス人ホブソンをとってみよう。一九〇二

年に出版された彼の著書『帝国主義論』には、次のように書いてある。

「新しい帝国主義は次の点で古い帝国主義と異なる。第一に、一個の成長しつつある帝国の野望のかわりに、それぞれ政治的膨張と商業的利益とにたいする同様の欲求によって誘導されている、競争しあういくつかの帝国の理論と実践があらわれたことであり、第二に、金融上の利益あるいは資本投下の利益が商業上の利益に優越していることである」*。

* ホブソン『帝国主義論』、ロンドン、一九〇二年、三二四ページ。

われわれは、カウツキーがイギリス人を一般に引合いに出すのは事実のうえから絶対にまちがいであることを知る(彼はせいぜい、イギリスの俗流帝国主義者あるいは帝国主義の公然たる弁護者を引合いに出せるだけであろう)。われわれはまた、カウツキーが、自分ではマルクス主義の擁護をつづけているつもりになっていても、実際には社会自由主義者ホブソンとくらべて一歩後退していることを知る。ホブソンは現代帝国主義の二つの「歴史的に具体的な」(カウツキーは彼の定義によってこの歴史的具体性をまさに愚弄しているのだ!)特性を、すなわち(一)いくつかの帝国主義の競争と(二)商人にたいする金融業者の優越を、より正しく考慮に入れている。だがもし工業国が農業国を併合することが主として問題だというのなら、商人の傑出した役割が前面におしだされるわけである。

カウツキーの定義はまちがっていて、マルクス主義的でないだけでない。それは、すべての面でマルクス主義理論およびマルクス主義的実践と手を切ったもろもろの見解の全体系の基礎として役だつものであるが、このことについてはなおあとで述べよう。カウツキーがもちだした用語上の争い、すなわち、資本主義の最新の段階を帝国主義と呼ぶべきか、金融資本の段階と呼ぶべきかということは、まったくくだらないことである。呼びたいように呼ぶがよい。それはどうでもよいことだ。ことの本質は、カウツキーが帝国主義の政策をその経済から切りはなし、併合を金融資本の「好んでもちいる」政策だと説明し、この政策に、金融資本というこの同じ基盤のうえで可能であるという他のブルジョア的政策を対置していることにある。これでは、経済における独占が政治における非独占的な、非強圧的な、非侵略的な行動様式と両立しうることになる。また、ほかならぬ金融資本の時代に完了し、最大の資本主義諸国家のあいだの競争の現在の形態の特異性の基礎をなす世界の領土的分割が、非帝国主義的政策と両立しうることになる。こうして、資本主義の最新の段階の最も根本的な諸矛盾の

深刻さをあばきだすかわりに、それらを塗りかくし、鈍く見せることになり、マルクス主義のかわりにブルジョア的改良主義が得られるのである。

　カウツキーは帝国主義と併合とのドイツ人弁護者クノーと論争している。クノーは不器用に、しかもあつかましく次のように論じている。帝国主義は現代資本主義である。資本主義の発展は不可避であり進歩的である。だから帝国主義は進歩的である。だから帝国主義のまえにひれふし、これを礼賛しなければならない！と。これは、一八九四―一八九五年にナロードニキ[三四]がロシアのマルクス主義者に反対して描いた漫画と、まずは同じようなものである。もしマルクス主義者がロシアにおける資本主義を不可避的で進歩的なことと考えるのなら、マルクス主義者[三五]は居酒屋でもひらいて資本主義の扶植に従事すべきである、というのである。カウツキーはクノーに反論していう。いや、帝国主義は現代資本主義のことではなく、現代資本主義の政策の一形態にすぎない。だからわれわれはこの政策とたたかい、帝国主義と、併合等々とたたかうことができるし、またたたかわなければならない、と。

　この反論はいかにももっともらしく見えるが、実際には、それは帝国主義との和解のより巧妙な、より隠蔽された（だからまたより危険な）説教である。なぜなら、トラストや銀行の経済の基礎に手を触れないでトラストや銀行の政策と「闘争」することは、ブルジョア的改良主義と平和主義に帰着し、お人好しであどけない願望に帰着するからである。存在する諸矛盾をその全根底から暴露するかわりに、それらの矛盾を回避し、それらのうちの最も重要なものをわすれること、――これこそ、マルクス主義とは縁もゆかりもないカウツキー理論である。このような「理論」がクノー一派との統一の思想を擁護するのに役だつだけなのは、明らかである！

　カウツキーは書いている。「純経済的見地からすれば、資本主義がなお一つ新しい段階を、すなわち、カルテルの政策の対外政策への転移を、超帝国主義の段階をとおることは、ありえないことではない」*。この超帝国主義の段階というのは、全世界の帝国主義者があいたたかうのではなくて合同する段階であり、資本主義のもとで戦争がなくなる段階であり、「国際的に連合した金融資本による世界の共同搾取」**の段階なのである。

*『ノイエ・ツァイト』、一九一四年、第二号、（第三二巻）、一九一四年一一月一一日号、九二一ページ。一九一五年、第二号、一〇七ページ以下を参照。

**『ノイエ・ツァイト』、一九一五年、第一号、一九一五年、四月三〇日号、一四四ページ。

〔第17表〕

世界の主要な経済的地域	面積 (百万平方km)	人口 (百万人)	交通機関		貿易	工業		
			鉄道 (千km)	商船 (百万トン)	輸出入合計 (十億マルク)	石炭採掘高 (百万トン)	銑鉄生産額 (百万トン)	綿紡績業の紡錘数 (百万)
(1)中央ヨーロッパ地域	27.6 (23.6)	388 (146)	204	8	41	251	15	26
(2)イギリス地域	28.9 (28.6)	398 (355)	140	11	25	249	9	51
(3)ロシア地域	22	131	63	1	3	16	3	7
(4)東アジア地域	12	389	8	1	2	8	0.02	2
(5)アメリカ地域	30	148	379	6	14	245	14	19

（　）内の数字は植民地の面積と人口

この「超帝国主義の理論」については、それがマルクス主義とどれほど決定的に、どうにもならないまでに絶縁しているかを詳しくしめすために、われわれはまたあとで論じなければならない。ここでは、この概説の一般的計画にしたがって、この問題に関係ある精密な経済的資料に目を向けてみる必要がある。いったい「純経済的な見地から」して「超帝国主義」は可能であろうか、それともこれは超ナンセンスであろうか？

もし純経済的見地ということを「純粋の」抽象と理解すれば、言いうることのすべては、要するに、発展は独占にむかっており、したがって一つの全世界的独占に、一つの全世界的トラストにむかっている、という命題に帰着するであろう。これは争う余地がない。だがこれは、「発展は」実験室内での食糧の生産に「むかっている」という指摘とおなじように、まったく無内容である。この意味で、超帝国主義の「理論」は「超農業の理論」とおなじくらいばかげている。

もし二〇世紀の初めにあたる歴史的に具体的な時代としての金融資本の時代の「純経済的」事情について語るなら、「超帝国主義」という死んだ抽象（現存する諸矛盾の深刻さから人々の注意をそらすという、きわめて反動的な目的に役だつもの）にたいする最良の回答は、現代の世界経済

の具体的な経済的現実をそれに対置することである。超帝国主義にかんするカウツキーの無内容きわまるおしゃべりは、とりわけ、金融資本の支配は、実際には世界経済の内部の不均等性と矛盾を激化させているのに、それらを弱めるかのようにいう、根本からまちがった、そして帝国主義の弁護者たちに力ぞえをする思想を、鼓吹するものである。

R・カルヴァーは小著『世界経済入門』*のなかで、一九世紀と二〇世紀との境い目のころにおける世界経済内部の相互関係について具体的な観念をあたえうる、最も主要な純経済的資料を総括する試みをした。彼は全世界を次の五つの「主要な経済地域」に区分している。(一) 中央ヨーロッパ地域（ロシアとイギリスをのぞく全ヨーロッパ）、(二) イギリス地域、(三) ロシア地域、(四) 東アジア地域、(五) アメリカ地域。植民地は、それが属する国家の「地域」にふくめてあるが、どの地域にも配分されない少数の国、たとえばアジアにおけるペルシア、アフガニスタン、アラビア、アフリカのモロッコ、アビシニアなどは、「度外視してある」。

＊ R・カルヴァー『世界経済入門』、ベルリン、一九〇六年。

次に、これらの地域にかんする彼のあげた経済的資料を、簡略にして示そう。〔第17表を参照〕

われわれは、資本主義の高度に発展した（交通機関も貿易も工業も強度に発展した）三つの地域、すなわち中央ヨーロッパ地域、イギリス地域、アメリカ地域を見る。これらの地域には世界を支配している三つの国家、ドイツ、イギリス、合衆国がある。それらのあいだの帝国主義的競争と闘争は、ドイツがとるにたりない地域とわずかな植民地しかもっていないことから、極度に先鋭化している。「中央ヨーロッパ」ができあがるのはなお将来のことであって、それは死にものぐるいの闘争のうちに生まれる。いまのところ、全ヨーロッパの特徴は政治的細分状態である。イギリス地域とアメリカ地域では、これと反対に、政治的集中度が非常に高い。しかし、前者は広大な植民地をもっているのに後者はとるにたりない植民地しかもっていないという大きな不均衡がある。ところで植民地では資本主義は発展しはじめたばかりである。南アメリカをめざす闘争はますます先鋭化している。

二つの地域は資本主義の発展の微弱な地域で、これはロシア地域と東アジア地域である。前者では人口の密度がきわめて低く、後者ではきわめて高い。また前者では政治的集中度が大きいが、後者ではそれが欠けている。中国の分割はやっとはじまったばかりである。そして中国をめぐる日本、合衆国、その他のあいだの闘争は、しだいにますます先鋭化している。

この現実——経済的条件と政治的条件がこのように非常に多様であり、さまざまな国の成長の速度その他に極度の不均衡があり、帝国主義諸国家のあいだに凶暴な闘争がおこなわれているというこの現実——を、「平和な」超帝国主義というカウツキーのばかげきったおとぎ話と対比してみたまえ。これは、びっくり仰天した小市民が恐ろしい現実から身をかくそうという反動的な企てではないだろうか？　カウツキーには「超帝国主義」の萌芽と思われる（実験室での錠剤の生産を超農業の萌芽と宣言「できる」のと同様に）国際カルテルは、世界の分割と再分割の実例、平和的な分割から非平和的な分割への移行およびその逆の移行の実例を、われわれにしめすものではないだろうか？ドイツの参加を得てたとえば国際軌条シンジケートや国際海運トラストにおいて全世界を平和的に分割していた、アメリカその他の金融資本は、まったく非平和的な方法によって一変されつつある新しい力関係にもとづいて、いま世界を再分割しつつあるのではないだろうか？

金融資本およびトラストは、世界経済のさまざまな部分の成長速度の相違を弱めるものではなく、むしろ強めるものである。ところで、力関係が変化した場合、資本主義のもとでは、矛盾の解決は力による以外になににもとめえようか？　世界経済全体における資本主義と金融資本との成長の速度の相違についてのきわめて精密な資料を、われわれは鉄道統計のうちに見いだす。* 帝国主義発展の最近の数十年間に、鉄道の延長は次のように変化した。〔第18表を参照〕

〔第18表〕 鉄　道 （単位　千km）

	1890年		1913年		増加	
ヨーロッパ	224		346		122	
アメリカ合衆国	268		411		143	
全植民地	82	125	210	347	128	222
アジアとアメリカの独立国と半独立国	43		137		94	
合計	617		1,104			

*『ドイツ帝国統計年鑑』、一九一五年、『鉄道事業記録』、一八九二年。一八九〇年度におけるいろいろな国の植民地のあいだの鉄道の分布については、細部はいくらか概算しなければならなかった。

したがって、鉄道の発展は、アジアとアメリカの植民地と独立国（および半独立国）で最も急速にすすんだわけである。周知のように、四つか五

つの最大の資本主義国家の金融資本が、この地域で全面的に君臨し支配している。植民地とアジアとアメリカのその他の国々における二〇万キロメートルの新しい鉄道、それは、四〇〇億マルク以上の新しい資本の投下がとくに有利な条件でおこなわれ、収益がとくに保障され、製鋼所に利益の多い注文がなされる、その他等々のことを意味している。

資本主義は植民地と海外諸国で最も急速に成長しつつある。それらのなかに新しい帝国主義的諸強国（日本）が出現している。世界帝国主義の闘争は激化している。金融資本が植民地や海外のとくに有利な企業から取りたてる貢物は、増大している。この「獲物」の分配にあたって、異常に大きな部分が、生産力の発展速度の点でかならずしも第一位を占めていない国々の手に落ちている。植民地をふくめた最大列強の鉄道の延長は、次のとおりである。〔第19表を参照〕

〔第19表〕　（単位 千km）

	1890年	1913年	増加
合衆国	268	413	145
イギリス帝国	107	208	101
ロシア	32	78	46
ドイツ	43	68	25
フランス	41	63	22
5強国合計	491	830	339

このように、鉄道の全延長の約八〇％が五つの最大の強国に集積されている。しかしこれらの鉄道の所有の集積、金融資本の集積は、これよりずっといちじるしい。なぜなら、アメリカ、ロシアその他の鉄道の大量の株式や社債が、たとえばイギリスとフランスの百万長者の手にあるからである。

イギリスはその植民地のおかげで「その」鉄道網を一〇万キロメートル増加させたが、これはドイツの増加の四倍にあたる。ところが周知のように、この期間におけるドイツの生産力の発展は、とくに石炭業と製鉄業の発展は、フランスやロシアはいうまでもなく、イギリスとくらべてさえ、比較にならないくらい急速であった。一八九二年には、銑鉄の生産高はイギリスの六八〇万トンにたいしてドイツは四九〇万トンであったが、一九一二年にはもはや九〇〇万トンにたいして一七六〇万トンであって、イギリスより圧倒的に優位にある！* そこでたずねるが、資本主義の基礎上では、一方における生産力の発展および資本の蓄積と、他方における金融資本のための植民地および「勢力範囲」の分割とのあいだの不均衡を除去するのに、いったい戦争以外にどんな手段がありえようか？

* なお、エドガー・クラモンド『イギリス帝国とドイツ帝国との経済的関係』——『王立統計協会雑誌』、一九一四年七月、七七七ページ以下を参照。

八 資本主義の寄生性と腐朽

さてこんどは、帝国主義のもう一つの非常に重要な側面について論じなければならない。この側面は、このテーマにかんする大多数の議論で、多くの場合十分に評価されていないものである。マルクス主義者ヒルファディングの欠陥の一つは、彼がこの点で非マルクス主義者ホブソンとくらべて一歩後退したことである。私がいうのは、帝国主義に固有の寄生性のことである。

さきに見たように、帝国主義の最も奥深い経済的基礎は独占である。これは資本主義的独占であり、すなわち、資本主義から成長してきて、資本主義、商品生産、競争という一般的環境のうちにある、そしてこの一般的環境とのたえまない、活路のない矛盾のうちにある、独占である。しかしそれにもかかわらず、それは、あらゆる独占とおなじように、不可避的に停滞と腐朽の傾向を生みだす。たとえ一時的にでも独占価格が設定されると、技術的進歩にたいする、したがってまたあらゆる他の進歩、前進運動にたいする刺激的要因がある程度消滅し、さらには技術的進歩を人為的に阻止する経済的可能性があらわれる。たとえば、アメリカでオーウェンスという人が、ビンの製造に革命をもたらすようなビン製造機を発明した。ドイツのビン製造業者のカルテルがオーウェンスの特許を買いとり、それをしまいこんで、それの応用を妨げるのである。もちろん、独占は資本主義のもとで、世界市場から競争を完全に、長期にわたって排除することはけっしてできない(ちなみに、超帝国主義の理論がばかげていることの理由の一つはここにある)。もちろん、技術的改善をとりいれることによって生産費を引き下げ利潤を高める可能性があることは、変化をうながす作用をする。しかし停滞と腐朽とへの傾向は独占に固有であって、それはそれで作用をつづけ、個々の産業部門で、個々の国で、一定期間優位を占める。

とくに広大な、豊かな、あるいはよい位置を占めている植民地の領有の独占も、これとおなじ方向に作用する。

さらに、帝国主義とは少数の国に貨幣資本が大量に蓄積されることであって、それは、すでに見たように、有価証券で一〇〇〇億—一五〇〇億フランの額に達している。その結果、金利生活者の、すなわち「利札切り」で生活する人々の、どんな企業にも全然参加していない人々の、遊惰をもって職業とする人々の階級、あるいはより正確にいえば階層が、異常に成長してくる。帝国主義の最も本質的な経済的基礎の一つである資本輸出は、金利生活者層の生産からのこの完全な断絶をさらにいっそう強め、いくつか

の海外の国々と植民地の労働を搾取することによって生活する国全体に、寄生性という刻印をおす。

ホブソンは書いている。「一八九三年に、外国に投下されているイギリス資本は、連合王国の富全体の約一五%であった」＊。一九一五年までにこの資本はおよそ二倍半に増大したことを思いおこそう。ホブソンはさらにいっている。「納税者には非常に高くつき、製造業者や貿易業者には非常にわずかな意義しかもたない侵略的帝国主義も、……自分の資本の投下場所を探しもとめている資本家」（英語ではこの概念は「インヴェスター」――「投資家」、金利生活者――という一語で表現される）「にとっては、大きな利得の源泉である」。……「イギリスが外国貿易と植民地貿易の全体、すなわち輸出入から得ている年間所得は、統計家ギッフェンによると、八億ポンドの取引額にたいする二・五%と見て、一八九九年には一八〇〇万ポンド（約一億七〇〇〇万ルーブリ）と見つもられている」。だがこの額がどんなに大きかろうとも、それはイギリスの侵略的帝国主義を説明することはできない。それを説明するものは、九〇〇〇万―一億ポンドという額の、「投下された」資本からの所得、金利生活者層の所得である。

＊ ホブソン、五九、六〇ページ。(一六六)

世界の最も「商業的な」国で、金利生活者の所得が外国貿易からの所得の五倍にものぼっている！　ここに帝国主義と帝国主義的寄生性との本質がある。

だから、「金利生活者国家」（Rentnerstaat）とか高利貸国家とかいう概念が、帝国主義にかんする経済学文献のなかで一般にもちいられるようになっている。世界は、ひとにぎりの高利貸国家と圧倒的に多数の債務者国家とに分裂した。シュルツェ－ゲーヴァニッツは書いている。「国外の投資のなかで首位を占めるのは、政治的に従属しているか同盟関係にある国々へ向けられる投資である。イギリスはエジプト、日本、中国、南アメリカに借款をあたえている。そしてその艦隊は、必要とあれば執達吏の役割を演じるのである」＊。ザルトリウス・フォン・ヴァルタースハウゼンは著述『国外投資の国民経済体系』のなかで、オランダを「金利生活者国家」の見本としてあげ、いまではイギリスやフランスもそのようになりつつあることを指摘している＊＊。シルダーは、イギリス、フランス、ドイツ、ベルギー、スイスの五つの工業国は「明白な債権者国家」だと考えている。彼がオランダをこのなかに入れないのは、この国が「あまり工業的でない」＊＊＊からにすぎない。合衆国はアメリカ大陸にたいしてだけ債権者である。

＊ シュルツェ－ゲーヴァニッツ『イギリス帝国主義』、三二

〇ページ、その他。

** ザルトリウス・フォン・ヴァルタースハウゼン『……国民経済体系』、ベルリン、一九〇七年、第四編。

*** シルダー、三九三ページ。

シュルツェーゲーヴァニッツはこう書いている。「イギリスは工業国からしだいに債権者国家に転化しつつある。工業生産と工業品輸出が絶対的に増加しているにもかかわらず、国民経済全体にとっての、利子と配当金からの所得、証券発行、手数料、投機からの所得のもつ意義が相対的に増大している。私の考えでは、この事実こそ帝国主義的高揚の経済的基礎である。債権者と債務者とは、売り手と買い手とよりももっと緊密にむすばれる」*。ドイツについては、ベルリンの雑誌『バンク』の発行人A・ランスブルグは一九一一年に、『金利生活者国家ドイツ』という論文のなかで、次のように書いた。「ドイツでは、人々はフランスで見られる金利生活者への転化傾向を嘲笑したがるが、そのさい彼らは、ブルジョアジーにかんするかぎり、ドイツの状態はフランスの状態にますます似てきつつあることをわすれている」**。

* シュルツェーゲーヴァニッツ、イギリス帝国主義、一二二ページ。

** 『バンク』、一九一一年、第一号、一〇—一一ページ。

金利生活者国家は寄生的な腐朽しつつある資本主義の国家であり、そしてこの事情は、一般にはその国のあらゆる社会＝政治情勢に、またとくには労働運動における二つの基本的な潮流に、反映しないではおかない。このことをできるだけはっきり示すために、証人としてだれよりも「信頼できる」ホブソンに語らせよう。というのは、彼が「マルクス主義的正統」をえこひいきしているという容疑をかけることはだれにもできないし、他方では、彼はイギリス人であって、植民地にも金融資本にも帝国主義的経験にも最も富んでいるこの国の事情を、よく知っている人だからである。

ホブソンは、ボーア戦争のなまなましい印象のもとに、帝国主義と「金融業者」の利害との結びつき、請負や納入その他からの彼らの利潤の増大を記述して、次のように書いた。「この明確に寄生的な政策を指導するのは資本家であるが、これとおなじ動機は労働者の特殊の部類にも作用している。多くの都市で、最も重要な産業諸部門が政府の注文に依存している。冶金業や造船業の中心地の帝国主義は、すくなからずこの事実に起因している」。この著者の見解によれば、次の二とおりの事情が旧帝国の力を弱めた。すなわち、(一)「経済的寄生」と(二)従属民族から成る軍隊の編成とである。「第一は経済的寄生の習慣であって、これによって、支配する国家は、自国の支配階級を富ませ、

自国の下層階級を買収しておとなしくさせておくために、その領土、植民地、属領を利用した」。われわれはこれにつけくわえて言おう、――どんな形でおこなわれようと、このような買収が経済的に可能になるためには、独占的高利潤が必要である。

第二の事情についてホブソンは次のように書いている。「帝国主義の盲目さかげんの最も奇妙な徴候の一つは、イギリス、フランス、その他の帝国主義諸国民がこの危険な道に乗りだしている、あの無頓着さである。イギリスはこの点で最も先にすすんでいる。われわれがわがインド帝国を征服したさいの戦闘の大部分は、現住民から編成されたわが軍隊によっておこなわれた。インドでは、また最近はエジプトでも、大きな常備軍がイギリス人司令官のもとにおかれている。われわれのアフリカ征服と関連する戦争は、南部をのぞけば、ほとんどすべて現住民がわれわれのためにおこなったのである」。

中国分割の見通しはホブソンに次のような経済的評価をさせている。「〔分割が完了した〕そのときには、西ヨーロッパの大部分は、イングランド南部や、リヴィエラや、またイタリアとスイスの観光地帯あるいは邸宅地帯がすでに呈しているのと同じ外観と性格をおびるようになりかねない。すなわち、そこには、極東からの配当金や年金を受けとる富裕な貴族の一小群のほかに、それよりいくらか大きなおかかえ自由職業者と商人の一群と、召使いと、運輸業や消耗品の最終の生産工程に従事する労働者との大群がいる。そして重要な産業部門はみな消滅して、主食品と工業製品は貢物としてアジアとアフリカから流れこむようなことになるかもしれない」。「われわれのまえには西欧諸国のもっと大きな同盟、大国のヨーロッパ連邦の可能性がひらかれているが、それは世界文明の大義を促進するどころか、西欧の寄生状態という絶大な危険をまねきかねないものであり、また、その上層諸階級がアジアとアフリカから膨大な貢物を受けとって、それでもって非常に多数の手なずけられた従者たち――彼らはもはや農工業製品の生産には従事しないで、新しい金融貴族の統制下に個人的なサーヴィスあるいは第二義的な産業労働をさせられるだけである――を扶養している、先進的工業諸国民の一集団である。このような理論」(見通しというべきであろう)「を、考慮に値しないものとしてはねつけようとするものがいるなら、そういう人は、すでにこのような状態に陥っている今日のイングランド南部の諸地方の経済的および社会的事情をしらべてみるがよい。そして、金融業者、『投資家』、政界や実業界の役員たちからなる同様のグループが、中国を自分たちの経済的支配に従属させ、世界がかつて知らなかった

この最大の潜在的な利潤貯水池から利潤を汲みだして、それをヨーロッパで消費するとき、このような制度がどんなに広く拡大されうるかを、考えてみるがよい。もちろん、事態はあまりにも複雑であり、世界の諸勢力の動きはあまりにも測りがたいものがあるから、将来についての解釈は、この解釈だろうが他のどんな解釈だろうが、それだけしかありえないということはない。しかし、今日西ヨーロッパの帝国主義を左右している力はこの方向にうごいており、なにものかがこれに抵抗するかその方向を変えさせないかぎり、大体においてこのような結末にむかってすすんでゆくのである」。*

* ホブソン、一〇三、二〇五、一四四、三三五、三八六ページ。(一七〇)

著者はまったく正しい。もし帝国主義勢力が抵抗に出会わないなら、それはまさにこのような状態に導くだろう。現代の、帝国主義的な環境のもとでの「ヨーロッパ合衆国」の意義が、ここでは正しく評価されている。ただ、労働運動の内部でも、大多数の国でいまさしあたって勝利を占めている日和見主義者たちが、ほかならぬこの方向に系統的にたゆみなく「働いている」ことを、つけくわえておくべきであろう。帝国主義は、世界の分割を意味し、ひとり中国にかぎらない他の国々の搾取を意味し、ひとにぎりの最も富裕な国々のための独占的な高利潤を意味するものであって、それはプロレタリアートの上層部を買収する経済的可能性をつくりだし、そのことによって日和見主義をつちかい、形どらせ、強固にする。ただ、一般に帝国主義にたいして、とくに日和見主義にたいして抵抗している勢力のことを、わすれてはならない。当然のことながら、この勢力は社会＝自由主義者ホブソンの目にはいらないのである。

ドイツの日和見主義者ゲルハルト・ヒルデブラント——彼は帝国主義を擁護したという理由でかつて党から除名されたが、いまならドイツのいわゆる「社会民主」党の首領になることができよう——は、ホブソンをみごとに補足して、……アフリカの黒人に対抗するための、「大イスラム運動」に対抗するための、「強大な陸海軍」を維持するための、「日中提携」に対抗するための、その他等々のための「共同」行動を目的として、「西ヨーロッパ合衆国」（ロシアをのぞく）をとなえている。*

* ゲルハルト・ヒルデブラント『産業支配と産業社会主義との動揺』、一九一〇年、二二九ページ以下。

シュルツェ＝ゲーヴァニッツの『イギリス帝国主義』の記述も、寄生性の同じ特徴をわれわれに示してくれる。イギリスの国民所得は一八六五年から一八九八年までにほぼ

二倍になったが、「国外からの」所得はこの期間に九倍に増加した。帝国主義の「功績」が「黒人に労働を教えこむこと」（強制なしにはすまされない……）であるとすれば、帝国主義の「危険」は次のことにある。すなわち、「ヨーロッパは肉体労働を――まずはじめに農業労働と鉱山労働を、のちには熟練のいらない工業労働を――黒色人種の肩に負わせ、自分は金利生活者の役におさまり、それによって、おそらく、銅色人種と黒色人種の経済的解放と、のちには政治的解放を準備する」ということにある。

イギリスでは、土地のますます大きな部分が農業生産からひきあげられて、金持のスポーツや娯楽の用に供されている。スコットランド――狩猟やその他のスポーツのための最も貴族的な土地――については、「この土地は、その過去とカーネギー氏」（アメリカの億万長者）「とによって暮らしている」といわれている。競馬と狐狩りのためだけに、イギリスは年々一四〇〇万ポンド（約一億三〇〇〇万ルーブリ）を費やしている。イギリスにおける金利生活者の数はほぼ一〇〇万人である。そして生産的人口のパーセントは次のように低下している。〔第20表を参照〕

〔第20表〕

	イギリスの人口	主要産業部門における労働者数	総人口にたいする%
	（百万人）		
1851年	17.9	4.1	23%
1901年	32.5	4.9	15%

また、「二〇世紀初めのイギリス帝国主義」を研究した一ブルジョア研究家は、イギリスの労働者階級について語るさいに、労働者の「上層」と「本来のプロレタリア的下層」とを系統的に区別することをよぎなくされている。上層から、協同組合や労働組合やスポーツ団体や数多くの宗教団体の多数の役員が出ている。選挙権はこの層の水準にあわされているのであって、それはイギリスでは「いまなお、本来のプロレタリア的下層を排除するのに十分なだけ制限されている」!! イギリスの労働者階級の状態を美化するために、人々はふつう、プロレタリアートの少数者をなすにすぎないこの上層のことしか語らない。たとえば、「失業の問題は、もっぱらロンドンおよびプロレタリア的下層にかんする問題であって、政治家は彼らにあまり考慮をはらわない」*……と。この場合、ブルジョア的政治屋と「社会主義的」日和見主義者は彼らにあまり考慮をはらわない、と言うべきであった。

* シュルツェ-ゲーヴァニッツ、『イギリス帝国主義』、三〇一ページ。

いま記述している一群の現象と関連する、帝国主義の特性の一つに、帝国主義諸国からの移出民の減少と、これらの国への賃金の低い遅れた

国々からの移入民（労働者の流入と一般住民の移住）の増大ということがある。イギリスからの移出民は、ホブソンが指摘しているように、一八八四年以来減少している。それは、この年には二四万二千人であったが、一九〇〇年には一六万九千人になった。ドイツからの移出民は、一八八一—一八九〇年の一〇年間に最高に達して一四五万三千人になったが、その後の二〇年には、一〇年ごとにそれぞれ五四万四千人と三四万一千人に減少した。そのかわり、オーストリア、イタリア、ロシアその他からドイツにやってくる労働者の数がふえた。一九〇七年のセンサスによると、ドイツには一、三四二、二九四人の外国人がいたが、そのうち工業労働者は四四〇、八〇〇人、農業労働者は二五七、三二九人であった。* フランスでは、鉱山業における労働者は「大部分」外国人——ポーランド人、イタリア人、スペイン人——であった。** 合衆国では、東および南ヨーロッパからの移住民は最も賃金の安い職業についており、他方アメリカ人労働者は、監督に昇進した者や最も俸給の高い仕事をしている者のなかで最大のパーセントを占めている。*** 帝国主義は、労働者のあいだでも特権をもつ部類を分離して彼らをプロレタリアートの広範な大衆からひきはなす傾向をもっている。

* 『ドイツ帝国統計』、第二一一巻。

** ヘンガー『フランスの投資』、シュトゥットガルト、一九一三年。

*** グールヴィチ『移民と労働』、ニューヨーク、一九一三年。

労働者を分裂させ、彼らのなかで日和見主義を強め、労働運動を一時腐敗させるという帝国主義の傾向は、イギリスでは、一九世紀末から二〇世紀初めにかけてよりもずっと以前に現われたということを、とくに指摘しておく必要がある。こうなったのは、帝国主義の二つの大きな特徴が、イギリスでは一九世紀のなかごろから存在していたからである。その特徴とは、広大な植民地領土と世界市場における独占的地位のことである。マルクスとエンゲルスは、労働運動における日和見主義とイギリス資本主義の帝国主義的特質とのこの関連を、数十年にわたって系統的に研究した。たとえば、エンゲルスは一八五八年一〇月七日にマルクスにあてて次のように書いた。「イギリスのプロレタリアートは、事実上ますますブルジョア化しつつあり、その結果、すべての国民のうちで最もブルジョア的なこの国民は、ついにはブルジョアとならんで、ブルジョア的貴族とブルジョア的プロレタリアートをもつところまで行きつこうとおもっているように見える。全世界を搾取している国民にあっては、これはたしかにある程度当然のことである」。それからほぼ四分の一世紀たったのち、一八八一年

八月一一日付の手紙のなかで、彼は、「ブルジョアジーに身売りしたか、あるいはすくなくとも彼らから金をもらっている連中にあまんじて指導されている、最悪のイギリス労働組合」について語っている。さらに一八八二年九月一二日付のカウツキーあての手紙で、エンゲルスは次のように書いた。「イギリスの労働者は植民政策をどう考えているかとのお尋ねですが、それは一般に彼らが政治について考えているのとまさに同じようにです。事実、当地には労働者政党はないのであって、あるのは保守党と急進自由党だけです。そして労働者は気軽に、イギリスの世界市場独占と植民地独占のおすそわけにあずかっているのです」*。(おなじことを、エンゲルスは一八九二年の『イギリスにおける労働者階級の状態』の第二版の序文のなかで述べている)。

* 『マルクス=エンゲルス往復書簡』、第二巻、二九〇ページ、第四巻、四五三ページ、――K・カウツキー『社会主義と植民政策』、ベルリン、一九〇七年、七九ページ。この小冊子は、カウツキーがマルクス主義者であったはるか遠い昔に書かれたものである。(一六)

ここでは原因と結果がはっきり示されている。原因は、(一)この国による全世界の搾取、(二)世界市場におけるこの国の独占的地位、(三)その植民地独占である。結果は、(一)イギリス・プロレタリアートの一部のブルジョア化、(二)プロレタリアートの一部が、ブルジョアジーに身売りしたか、あるいはすくなくとも彼らから金をもらっている人々にあまんじて指導されていること、である。二〇世紀初めの帝国主義はひとにぎりの国家による世界の分割を完了し、そしていまやそれらの国はそれぞれ、「全世界」のうち、一八五八年のイギリスにくらべてわずかしかおとらない部分を搾取(超過利潤をひきだしているという意味で)している。それぞれの国は、トラスト、カルテル、金融資本、債務者にたいする債権者の関係のおかげで、世界市場で独占的地位を占めている。またそれぞれの国は、ある程度、植民地独占をもっている(すでに見たように、世界の全植民地七五〇〇万平方キロメートルのうち、六五〇〇万平方キロメートルすなわち八六%は六大強国の手に集中されており、そのうちの六一〇〇万平方キロメートルすなわち全体の八一%は三大強国の手に集中されている)。

今日の状態の特徴は、日和見主義と労働運動の一般的で根本的な利益とのあいいれない対立を強めずにはおかないような、経済的および政治的諸条件にある。帝国主義は萌芽から支配的な体制に成長した。資本主義的独占体は国民経済と政治で首位を占めるにいたった。世界の分割が完了した。他方では、イギリスの全一的な独占にかわって、少

数の帝国主義列強のあいだで独占に参加しようとする闘争がおこなわれているが、この闘争は二〇世紀初頭全体を特徴づけるものである。日和見主義は、もはや今日では、一九世紀の後半にイギリスで勝利を得たように、数十年の長きにわたってある一国の労働運動で完全な勝利者となることはできない。それは幾多の国で最後的に成熟し、爛熟し、腐朽してしまい、社会排外主義としてブルジョア政治と完全に融合するにいたったのである。*

* ロシアの社会排外主義は、ポトレソフ、チヘンケリ、マスロフ、等々の諸氏の公然たる形のものも、隠然たる形のもの(チヘイゼ、スコベーレフ、アクセリロード、マルトフ、その他の諸氏)も、日和見主義のロシア的変種すなわち解党主義から成長したものである。(一五)

九　帝国主義の批判

帝国主義の批判ということを、ここでは広い意味に、すなわち、社会の種々の階級がそれぞれの一般的イデオロギーとの関連において帝国主義の政策にたいしてとる態度のことと理解する。

一方では、少数の者の手に集積されていて、もろもろの関係や結びつきの異常にひろく張りめぐらされている細かな網の目――中小資本家ばかりでなく、極小の資本家や経営主までも大量に金融資本に従属させている網の目――をつくりだしている、巨大な規模の金融資本、他方では、世界の分割と他国の支配とのための、他の民族国家の金融業者グループとの激烈な闘争、――これらすべてのことは、すべての有産階級をこぞって帝国主義の側に移行させている。帝国主義の前途にたいする「全般的」熱狂、気違いじみた帝国主義擁護、ありとあらゆる方法での帝国主義の美化、――これが時代の象徴である。帝国主義的イデオロギーは労働者階級のなかにも浸透している。労働者階級は万里の長城で他の階級からへだてられているわけではない。今日のいわゆるドイツ「社会民主」党の指導者たちは正当にも「社会帝国主義者」、――すなわち口さきでは社会主義者、行動では帝国主義者――という称号をもらったが、ホブソンはすでに一九〇二年に、イギリスには日和見主義的な「フェビアン協会」(二〇)に属する「フェビアン帝国主義者」が存在することを指摘している。

ブルジョア学者や政論家たちは、ふつう、いくらか隠蔽された形で帝国主義の擁護者として立ちあらわれ、帝国主義の完全な支配とその奥深い根源を塗りかくし、部分的なことや第二義的な細かな点をつとめて前面におしだし、トラストや銀行にたいする警察の監督などのようなまったく

くだらない「改革」案でもって本質的なものから人の注意をそらそうと懸命になっている。帝国主義の基本的諸特性を改革しようという考えがばかげたものであることを認めるだけの勇気をもった、あつかましいむきだしの帝国主義者は、めったにあらわれない。

一例をあげよう。出版物『世界経済アルヒーフ』にたてこもっているドイツの帝国主義者たちは、植民地――といっても、もちろん、とくにドイツのではないのだが――における民族解放運動をあとづけようとつとめている。彼らはインドにおける不穏状態や抗議、ナタール（南アフリカ）やオランダ領インドにおける運動、等々を指摘している。彼らのひとりは、外国の支配下にあるアジア、アフリカ、ヨーロッパの諸民族の代表があつまって一九一〇年六月二八―三〇日にひらいた、従属民族・従属人種会議についての英文の報告にかんする記事のなかで、この大会での演説を評価して次のように書いている。「彼らはいう。帝国主義とたたかわなければならない。支配する国家は従属民族の自主権を認めなければならない。国際司法裁判所は強大国と弱小民族とのあいだでむすばれた条約の履行を監視しなければならない、と。大会はこれらのあどけない願望以上には出ていない。帝国主義は今日の形態の資本主義と不可分に結びついており、だから（!!）帝国主義との直接の闘争は、個々のとくにいまわしい過度の不法にたいする反対行動に限定されないかぎり望みがないこと、――こういう真理を理解しているという痕跡さえ見られない」*。帝国主義の基礎を改良主義的に修正するというのは欺瞞であり、「あどけない願望」であるから、また被抑圧民族のブルジョア的代表者たちは「それ以上」に出ないから、だから抑圧する側の民族のブルジョア的代表者は「それ以上」後退して、帝国主義のまえに自称の「科学性」でおおわれた追従をする。これも「論理」ではある！

* 『世界経済アルヒーフ』、第二巻、一九三ページ。

帝国主義の基礎を改良主義的に改めることが可能かどうか、事態は帝国主義の生みだす諸矛盾のいっそうの激化と深刻化にむかって前進するか、あるいはその鈍化にむかって後退するかという問題は、帝国主義批判の根本問題である。帝国主義の政治的特質は、金融寡頭制の抑圧および自由競争の排除に関連する、あらゆる面での反動と民族的抑圧の強化とであるから、帝国主義にたいする小ブルジョア民主主義的反対派が、二〇世紀の初めにほとんどすべての帝国主義国で出現している。そしてカウツキーおよびカウツキー主義の広範な国際的潮流のマルクス主義との絶縁は、まさにカウツキーが、この小ブルジョア的で、改良主義的で、経済的には根本から反動的な反対派に敵対しようと心

がけず、またそうする能力をもたなかったばかりか、逆にこの反対派と実践上で融合した点にある。

合衆国では、一八九八年のスペインにたいする帝国主義戦争は「反帝国主義者」という反対派を発生させた。ブルジョア民主主義のこの最後のモヒカン族(一〇)は、この戦争を「犯罪的」と呼び、他国の土地の併合を憲法違反とみなし、フィリピンの土着民の首領アグィナルドにたいするふるまいを「排外主義者の欺瞞」と言明し(はじめ彼にむかって彼の国の自由を約束しておきながら、のちにアメリカの軍隊を上陸させ、フィリピンを併合してしまった)、そしてリンカーンの次のことばを引用した。「白人が自分自身を統治するなら、それは自治である。しかし白人が自分自身とともに他人をも統治するなら、それはもはや自治ではなく、専制である」*。しかしこの批判全体が、帝国主義とトラストとの、したがって資本主義の基礎との不可分の結びつきを認めることをおそれ、大規模資本主義とその発展が生みだした勢力と結合することをおそれているかぎり、それは「あどけない願望」にとどまったのである。

* J・パトゥイエ『アメリカ帝国主義』、ディジョン、一九〇四年、二七二ページ。

帝国主義批判におけるホブソンの基本的立場も、これとおなじである。ホブソンはカウツキーに先んじて、「帝国主義の不可避性」に反対し、住民の「消費能力を高める」(資本主義のもとで!)必要を訴えている。帝国主義、銀行の全能、金融寡頭制、その他の批判で小ブルジョア的立場に立っているものに、われわれがなんども引用したアガード、A・ランスブルグ、L・エシュヴェーゲがあり、またフランスの著述家には、一九〇〇年に出た『イギリスと帝国主義』という浅薄な本の著者ヴィクトル・ベラールがある。彼らはみな、すこしもマルクス主義を僭称せず、帝国主義に自由競争と民主主義を対置し、紛争と戦争に導くバグダード鉄道のもくろみを非難し、平和への「あどけない願望」を表明し、等々している。さらに国際証券の統計研究家A・ネイマルクにいたっては、一九一二年にこうさけんでいる。「国際」有価証券を計算して、幾千億フランの「国際」有価証券を計算して、一九一二年にこうさけんでいる。「平和が破壊されるかもしれないと考えることができようか?……これほども膨大な証券があるときに、戦争をひきおこすという冒険をおかすと考えられようか?」*。

* 『国際統計研究所所報』、第一九巻、第二冊、二二五ページ。

ブルジョア経済学者にしてみれば、このような素朴さはあやしむにたりない。それればかりか、これほども素朴に見せること、帝国主義のもとでの平和について「大まじめで」説くことは、彼らにとって有利でさえある。だがカウツキーが一九一四年、一九一五年、一九一六年にこれとお

なじブルジョア改良主義的立場にたち、平和については「万人が」（帝国主義者と、えせ社会主義者と、社会平和主義者とが）「一致している」と主張したとき、彼のもとにいったいマルクス主義のなにが残っていただろうか？　帝国主義の諸矛盾の根底の分析と暴露のかわりに、ここにあるのは、これらの矛盾を見まいとし、避けようとする改良主義的な「あどけない願望」だけである。

カウツキーによる帝国主義の経済学的批判の見本をあげよう。彼は一八七二年と一九一二年におけるイギリスのエジプトとの輸出入の資料をとりあげる。そうすると、この輸出入は、イギリスの全輸出入よりも増加が微弱だったことがわかる。そこでカウツキーは推論する。「エジプトの軍事占領がなく、たんなる経済的要因の力にたよっていたなら、エジプトとの貿易はもっとわずかしか増加しなかっただろうと考える根拠は、なにもない」。「資本の膨張欲は」、「帝国主義の強圧的方法によってではなく、平和的な民主主義によって最もよく達成されうる」。*

* カウツキー『民族国家、帝国主義国家、国家連合』、ニュールンベルグ、一九一五年、七二および七〇ページ。

カウツキーのこの議論は、ロシアでの彼の太刀持ち（その社会排外主義のロシアでの擁護者）スペクタートル氏によって、いろいろな調子で歌いかえされているものだが、この議論こそ、カウツキーの帝国主義批判の基礎をなすものなので、これについてもうすこし詳しく立ちいる必要がある。まずヒルファディングの引用からはじめよう。彼のこの結論は、カウツキーがなんども、一九一五年四月にも、「すべての社会主義理論家によって一致して受けいれられている」と言明したものである。

ヒルファディングはこう書いている。「より進歩した資本主義的政策に対置して、自由貿易と国家敵視との時代の古びた政策をもちだすことは、プロレタリアートのなすべきことではない。金融資本の経済政策、帝国主義にたいするプロレタリアートの回答となりうるのは、自由貿易ではなく、社会主義だけである。いまやプロレタリアートの政策の目標でありうるのは、自由貿易の復活というような、いまや反動的になった理想ではなく、ただひとつ、資本主義の克服による競争の完全な廃絶だけである」。*

* 『金融資本論』、五六七ページ。(二〇)

カウツキーは、金融資本の時代のために「反動的な理想」、「平和的民主主義」、「たんなる経済的要因の力」を擁護することによって、マルクス主義と絶縁した。というのは、この理想は客観的には、独占資本主義から非独占資本主義へひきもどすものであり、改良主義的欺瞞だからである。

エジプトとの（あるいは他の植民地または半植民地との）貿易は、軍事占領がなく、帝国主義がなく、金融資本がなければ、もっと勢いよく「増大したであろう」。これはなにを意味するか？　それは、もし自由競争が独占一般によっても、金融資本の「結びつき」あるいは抑圧（すなわちこれまた独占）によっても、個々の国による独占的な植民地領有によっても制限されなかったら、資本主義はもっと急速に発展したであろう、ということだろうか？

カウツキーの議論はこれ以外の意味はもちえない。だがこの「意味」が無意味なのだ。どのような独占もなかったら、自由競争は資本主義と貿易とをもっと急速に発展させたであろうということを、かりに肯定してみよう。しかし貿易と資本主義が急速に発展すればするほど、生産と資本との集積はいっそう強力で、これが独占を生みだすのではないのか。そしてもろもろの独占がすでに生まれたのだ――まさに自由競争のなかから！　独占がいまや発展をおくらせはじめているとしても、それでもやはりそれは自由競争を支持する論拠とはならない。自由競争は、それが独占を生みだしたあとでは、もはや不可能なのである。

カウツキーの議論をいくらひねくりまわしてみても、反動性とブルジョア的改良主義以外のものはそのなかになにもない。

この議論を手なおしして、スペクタートルがいっているように、イギリス植民地のイギリスとの貿易は、いまでは他の国々との貿易よりもゆっくり発展しているといってみたところで、これまたカウツキーを救いはしない。なぜなら、イギリスをうちまかしているのはこれまた独占であり、これまた帝国主義――ただし他の国（アメリカ、ドイツ）の――であるからである。周知のように、カルテルは新しい特異な型の保護関税をもたらした。保護されるのは（すでにエンゲルスが『資本論』第三巻で指摘したことだが[23]）、まさに輸出能力のある生産物である。さらにまた、カルテルと金融資本に特有の制度である「捨て値輸出」、イギリス人のいう「ダンピング」も、周知のところである。国内ではカルテルはその生産物を独占的な高価格で売るが、国外へは、競争者をやっつけ、自己の生産を最大限に拡張する、等々のために、捨て値で売りさばくのである。もしドイツがイギリス植民地との貿易をイギリスよりも急速に発展させているとしても、それは、ドイツ帝国主義がイギリス帝国主義よりも若々しく、強力で、組織的で、高度のものであることを証明するにすぎず、けっして自由貿易の「優越」を証明するものではない。なぜなら、自由貿易が保護貿易と、植民地的従属とたたかっているのではなく、ある帝国主義が他の帝国主義と、ある独占体が他の独占体

〔第21表〕　ドイツからの輸出　　（単位　百万マルク）

		1889年	1908年	増加率
ドイツに金融的に従属している国へ	ルーマニア	48.2	70.8	＋ 47%
	ポルトガル	19.0	32.8	＋ 73
	アルゼンティン	60.7	147.0	＋ 143
	ブラジル	48.7	84.5	＋ 73
	チリ	28.3	52.4	＋ 85
	トルコ	29.9	64.0	＋ 114
	合計	*234.8*	*451.5*	＋ *92%*
ドイツから金融的に独立している国へ	イギリス	651.8	997.4	＋ 53%
	フランス	210.2	437.9	＋ 108
	ベルギー	137.2	322.8	＋ 135
	スイス	177.4	401.1	＋ 127
	オーストリア	21.2	64.5	＋ 205
	オランダ領インド	8.8	40.7	＋ 363
	合計	*1,206.6*	*2,264.4*	＋ *87%*

と、ある金融資本が他の金融資本とたたかっているのだからである。イギリス帝国主義にたいするドイツ帝国主義の優越は、植民地の境界や保護関税の壁よりも強い。このことを自由貿易と「平和的民主主義」のための「論拠」にしようというのは、低俗なことであり、帝国主義の基本的特徴と特質をわすれることであり、マルクス主義を小市民的改良主義によっておきかえることである。

帝国主義をカウツキーとおなじように小市民的に批判しているブルジョア経済学者A・ランスブルグでさえ、なおかつ貿易統計の資料をもっと科学的に加工していることは、興味ぶかい。彼は、でまかせにとりあげた一国と一つの植民地だけを他の国々と比較するようなことはせず、ある帝国主義国からの、(一)その国に金融的に従属し、その国から借金している国への輸出と、(二)金融的に独立している国への輸出とを、比較している。そして次のような結果が得られた。〔第21表を参照〕

ランスブルグは合計を出さなかったので、奇妙にも、もしこれらの数字がなにかを証明するとしたら、彼の言おうとするのと反対のことしか証明しないということに、気がつかなかった。というのは、金融的に従属している国への輸出は、金融的に独立している国への輸出よりも、わずかながら、それでもやはりより急速に増大しているからであ

る（われわれが「もし……としたら」というところに傍点をうったのは、ランスブルグの統計は完全というにはほど遠いからである）。

輸出と借款との関連を研究して、ランスブルグは次のように書いている。

「一八九〇／九一年に、ドイツの銀行の仲介でルーマニアへの借款が締結されたが、銀行はこれに先だつ数年間にすでに前貸ししていた。借款は主として、ドイツから受けとった鉄道材料の買入れにあてられた。一八九一年にはルーマニアへのドイツの輸出は五五〇〇万マルクであった。翌年にはそれは三九四〇万マルクにおち、そしてときに増減はあったが、一九〇〇年には二五四〇万マルクまでおちた。やっとこの数年来、新しい二つの借款のおかげで、ふたたび一八九一年の水準に達した。

ポルトガルへのドイツの輸出は、一八八八／八九年の借款の結果、二一〇万マルク（一八九〇年）にふえた。つづく二ヵ年に一六二〇万マルクと七四〇万マルクにおち、やっと一九〇三年にもとの水準に達した。

ドイツとアルゼンティンとの貿易の資料はもっときわだっている。一八八八年と一八九〇年の借款の結果、アルゼンティンへのドイツの輸出は一八八九年には六〇七〇万マルクに達した。二年後には、輸出はたった一八六〇万マルクで、以前の三分の一以下となった。やっと一九〇一年に一八八九年の水準に達し、これを上まわったが、それは、新しい国債と市債、電機工場建設のための資金交付、その他の信用供与と結びついていた。

チリへの輸出は、一八八九年の借款の結果四五二〇万マルク（一八九二年）にふえたが、一年たつと二二五〇万マルクにおちた。一九〇六年にドイツの銀行の仲介でむすばれた新しい借款ののち、輸出は八四七〇万マルク（一九〇七年）にのぼったが、一九〇八年にはまたもや五二四〇万マルクにおちた」*。

* 『バンク』、一九〇九年、第二号、八一九ページ。

ランスブルグはこれらの事実から、借款と結びついた輸出がどんなに不安定で不均等なものであるか、母国の産業を「自然的に」「調和よく」発展させるかわりに資本を国外に輸出することがどんなに良くないことであるか、対外借款のさいの幾百万マルクもの賄賂がクルップにとってどんなに「高く」つくか等々という、笑うべき小市民的な道徳をひきだしている。しかし事実は次のことをはっきり物語っている。すなわち、輸出の上昇はまさに金融資本の詐欺的な術策と結びついており、金融資本はブルジョア道徳なんか気にせずに、一頭の牛から二枚の皮をとる——第一に、借款から利益を、第二に、借款がクルップの製品や鉄

鋼シンジケートの鉄道材料などの購入にあてられるときに、そのおないじ借款から利益をあげる――のである。
繰りかえしていうが、われわれはランスブルグの統計をけっして完全なものとは考えない。しかし、どうしてもそれを引用しなければならなかった。なぜなら、それはカウツキーやスペクタートルの統計よりも科学的であり、またランスブルグは問題に正しく接近しようとしているからである。輸出における金融資本の意義、等々を論じるためには、輸出と金融業者の術策との関連だけをとくに、また輸出とカルテル生産物の販路との関連、等々だけをとくに、べつにとりだすことを、心得ていなければならない。単純に植民地一般と非植民地とを、ある帝国主義と他の帝国主義とを、ある半植民地あるいは植民地（エジプト）とその他のすべての国とを比較するようなことは、ほかならぬこの本質を回避し塗りかくすことを意味する。
カウツキーによる帝国主義の理論的批判は、マルクス主義とまったく無縁であり、日和見主義および社会排外主義との和平と統一の説教への前口上として役だつものにすぎないのだが、その理由は、この批判がまさに帝国主義の最も奥深い根本的な諸矛盾――もろもろの独占と、それとならんで存在する自由競争との矛盾、金融資本の巨大な「取引」（および巨大な利潤）と自由市場における「正直な」商売との矛盾、カルテルおよびトラストと、カルテル化されていない産業との矛盾、等々――を回避し塗りかくしているからである。
カウツキーが編みだしたあの悪名高い「超帝国主義」の理論も、まったくこれとおなじような反動的な性格をもっている。このテーマについての一九一五年の彼の議論を、一九〇二年のホブソンの議論と比較してみたまえ。
カウツキー――「……今日の帝国主義的政策が新しい超帝国主義的政策によって駆逐され、後者が、諸国の金融資本相互の闘争を、国際的に連合した金融資本による世界の共同搾取によっておきかえることは、ありえないことだろうか？　いずれにせよ、資本主義のこのような新しい段階は考えられる。それが実現されるかどうか、それをきめるにはまだ十分な前提がない」。*

＊『ノイエ・ツァイト』、一九一五年、四月三〇日号、一四四ページ。

ホブソン――「それぞれ幾多の未開の植民地と従属国をもつ少数の強大な連合帝国のなかで強固になったキリスト教は、多くの人々に、現在の傾向の最も法則にかなった発展であるように見える。しかもそのような発展は、なによりも、国際帝国主義という強固な基礎のうえにきずかれる恒久平和への希望をあたえるであろう」[(一〇)]。

カウツキーがウルトラ・インペリアリスムスすなわち超帝国主義と名づけたものは、彼より一三年まえにホブソンがインター・インペリアリズムすなわち国際帝国主義と名づけたものである。ことばの一部のラテン語を他のラテン語でおきかえることによって、新しい、賢そうなことばを編みだしたことを別とすれば、カウツキーの「科学的」思考の進歩は、ひとえに、ホブソンが本質的にはイギリスの坊主の偽善として記述していることを、カウツキーはマルクス主義だと詐称している点にある。ボーア戦争以後は、この至尊の身分にしてみれば、イギリスの金融業者にいっそう高い利潤を保障するために南アフリカの戦闘で少なからぬ死傷者を出し、増税に苦しめられていた、イギリスの小市民と労働者を慰めることに主要な努力をはらうことは、まったく当然であった。そしてそれには、帝国主義はそんなに悪いものではなく、それは、恒久平和を保障しうる国際（あるいは超）帝国主義の真近にある、ということ以上によい慰めがありえようか？　イギリスの小坊主たちや甘っちょろいカウツキーの善良な意図がどうであろうと、彼の「理論」の客観的な、すなわち現実的な社会的意味は、ただ一つ、次のことにある。すなわち、それは、現代の先鋭な諸矛盾と先鋭な諸問題から大衆の注意をそらせ、なにか新しそうに見える将来の「超帝国主義」という偽りの見通しに注意を向けさせることによって、資本主義のもとでも恒久平和が可能であるという希望で大衆を慰めるという、反動的きわまるものである。大衆を欺瞞すること――カウツキーの「マルクス主義的」理論のなかには、これ以外のものはなにもない。

実際に、カウツキーがドイツの労働者（およびすべての国の労働者）に吹きこもうとつとめている見通しがどんなに虚偽のものであるかを納得するには、だれでも知っている、争う余地のない事実をこれにはっきりつきあわせてみるだけで、十分である。インド、インドシナ、中国をとってみよう。周知のように、六億―七億の人口をもつこれら三つの植民地および半植民地国は、いくつかの帝国主義的強国、すなわちイギリス、フランス、日本、合衆国、等々の金融資本の搾取を受けている。いま、これらの帝国主義国の一部のものが、上記のアジア諸国家における自分たちの領土、利益、「勢力範囲」を守り、あるいは拡張する目的で、他の一部のものに対抗して同盟をむすぶと仮定しよう。これは「国際帝国主義的」あるいは「超帝国主義的」同盟であろう。また、すべての帝国主義列強が上記のアジア諸国の「平和的」分割のために同盟をむすぶと仮定しよう。これは「国際的に連合した金融資本」であろう。このような同盟の実例は、二〇世紀の歴史に、たとえば中国に

たいする列強の関係のうちに、いくつもある。そこでたずねるが、資本主義が維持されているという条件のもとで（カウツキーはまさにこういう条件を前提しているのだが）、このような同盟が短期のものではないとか、それらはありとあらゆる可能な形態の摩擦、紛争、闘争を除去するとか予測することが、はたして「考えられる」だろうか？

この問題をはっきり提起するだけで、それには否定的な解答以外のものはあたえられないことがわかる。なぜなら、資本主義のもとでは、勢力範囲、利益、植民地などの分割のための根拠としては、分割に参加する者の一般経済上、金融上、軍事上、等々の力の計算以外のことは、考えられないからである。だがこれらの分割参加者のあいだで、力は一様に変化するわけではない。なぜなら、個々の企業、トラスト、産業部門、国の均等な発展は、資本主義のもとではありえないからである。半世紀まえにはドイツは、その資本主義的力を当時のイギリスの力と比較してみれば、あわれなほど微々たる存在であった。ロシアとくらべた日本も同様であった。一〇年、二〇年たっても、帝国主義列強の力関係が依然としてかわらないと推測することが、「考えられる」だろうか？　絶対に考えられない。

だから、イギリスの坊主あるいはドイツの「マルクス主義者」カウツキーの低俗な小市民的幻想のうちにあるのではなく、資本主義の現実のうちにある「国際帝国主義的」あるいは「超帝国主義的」同盟は——それらの同盟がどういう形態でむすばれていようとも、すなわち、ある帝国主義的連合にたいする他の帝国主義的連合という形態であろうと、すべての帝国主義列強の全般的同盟という形態であろうと——、不可避的に、戦争と戦争とのあいだの「息ぬき」にすぎない。平和的な同盟が戦争を準備し、戦争からこんどは平和的な同盟が成長するのであって、両者は相互に制約しあいながら、世界経済と世界政治の帝国主義的な関連および相互関係という同一の基盤から、平和的な闘争と非平和的な闘争との形態の交替を生みだすのである。だがいとも賢明なカウツキーは、労働者をしずめ、彼らを、ブルジョアジーの側にうつった社会排外主義者と和解させるために、一つの鎖の一つの環を他の環から切りはなし、中国を「しずめる」ためのすべての列強のきょうの平和的な（そして超帝国主義的な——さらには超超帝国主義的ですらある）同盟（義和団の暴動の鎮圧[一〇六]を思いおこせ）を、あすの非平和的な紛争から切りはなすのであるが、じつはこれがまたあさっては、たとえばトルコを分割するための「平和的な」全般的同盟を準備するのである、その他、等等。帝国主義的平和の時期と帝国主義的戦争の時期との生きた関連のかわりに、カウツキーは労働者に死んだ抽象を

贈り、こうして労働者たちを彼らの死んだような指導者と和解させようとしているのである。

アメリカ人ヒルは、その著『ヨーロッパの国際的発展における外交史』の序文のなかで、近代の外交史を次の時期に分けている。(一) 革命の時代、(二) 立憲運動、(三) 今日の「商業帝国主義」の時代。* また別の著述家は、一八七〇年以降のイギリスの「世界政策」の歴史を四つの時期に区分している。(一) 第一次アジア時代 (インドに目を向けたロシアの中央アジア進出にたいする闘争)、(二) アフリカ時代 (ほぼ一八八五―一九〇二年) ――アフリカの分割をめぐるフランスとの闘争 (一八九八年の「ファショダ」事件[一〇五]――フランスとの戦争まで危機一髪)、(三) 第二次アジア時代 (ロシアに対抗しての日本との条約[一〇六])、(四) 「ヨーロッパ」時代――主としてドイツに対抗して。** 「政治的前哨戦が金融面で演じられている」――銀行「実務家」リーサーはすでに一九〇五年にこのように書いて、イタリアで活動しているフランスの金融資本がいかに両国の政治的同盟を準備したか、ペルシアをめぐるドイツとイギリスとの闘争、中国への借款をめぐるすべてのヨーロッパ資本の闘争、その他がどのように展開されたかを、指摘している。これこそ、普通の帝国主義的紛争と不可分に結びついている「超帝国主義的」な平和的同盟の生きた現実である。

* デイヴィド・ジェーン・ヒル『ヨーロッパの国際的発展における外交史』、第一巻、序文一〇ページ。

** シルダー、前掲書、一七八ページ。

カウツキーが帝国主義の最も奥深い諸矛盾を塗りかくしていることは、不可避的に帝国主義を美化することになりおわるのであるが、それはまた、この著述家による帝国主義の政治的特質の批判にも痕跡を残さないではおかない。帝国主義は金融資本と独占体の時代であるが、これらのものはいたるところに、自由への志向ではなく支配への志向をもちこむ。政治制度のいかんにかかわりなくすべての方面での反動、この分野でも見られる諸矛盾の極端な激化――これが以上の傾向の結果である。民族的抑圧と、併合への志向、すなわち民族的独立を破壊しようとする志向(なぜなら、併合は民族自決の破壊にほかならないから)もまた、とくに激化する。ヒルファディングは帝国主義と民族的抑圧の激化との関連を正当に指摘して、次のように書いている。「あらたに開発[一〇七]された諸国についていえば、そこでは、輸入された資本は諸矛盾を増進させ、民族的自覚に目ざめつつある諸民族の侵入者にたいする抵抗をたえず増大させる。この抵抗は容易に、外国資本に向けられる危険な手段にまで成長しかねない。古い社会関係は根本から変革され、『歴史なき民族』の数千年来の農業的孤立は

破壊され、彼らは資本主義の渦のなかに巻きこまれる。資本主義そのものが被征服者に、解放のための手段と方法とをしだいにあたえてゆく。そして彼らも、かつてヨーロッパ諸民族にとって最高のものだったあの目標を、すなわち、経済的自由と文化的自由の手段としての民族統一国家の建設を、おしたてる。この独立運動は、最も輝かしい展望のある最も貴重な搾取分野でヨーロッパ資本を脅かす。そしてこのヨーロッパ資本は、たえずその武力を増強することによってしか自己の支配を維持できなくなる」*。

＊『金融資本論』、四八七ページ。(一八〇)

なお、あらたに開発された国々ばかりでなく、古い国々でも、帝国主義は併合を、民族的抑圧の強化を、したがってまた抵抗の激化をもたらしていることを、つけくわえておかなければならない。カウツキーは、帝国主義が政治的反動を強めることに反対しながら、帝国主義の時代には日和見主義者との統一は不可能であるという、とくに緊要になった問題をぼかしている。彼はまた、併合に反対しながら、この反対論に、日和見主義者にとってちっとも気にさわらず、彼らにとって最も受けいれやすい形態をあたえている。彼は直接ドイツの聴衆に訴えているのだが、それにもかかわらず、たとえばアルサス＝ローレーヌはドイツが併合したものであるという、まさに最も重要で緊要なことをおしかくしている。カウツキーのこの「思想の偏向」を評価するために、一例をあげよう。たとえば、ある日本人がアメリカのフィリピン併合を非難すると仮定しよう。さてこの場合、これが併合一般をにくむことからなされたのであって、自分でフィリピンを併合しようという願望からなされたものではないということを、多くの人々が信じるかどうか？　この日本人の併合反対「闘争」は、彼が日本による朝鮮の併合に反対して立ちあがり、日本からの朝鮮の分離の自由を要求する場合にのみ、誠実で政治的に公明なものと考えることができる、ということを認めるべきではなかろうか？

カウツキーのおこなった帝国主義の理論的分析にも、帝国主義の経済的ならびに政治的批判にも、最も根本的な諸矛盾を塗りかくしぼかそうという、マルクス主義とは絶対にあいいれない精神、ヨーロッパの労働運動で日和見主義との崩壊しつつある統一をなにがなんでもまもろうという志向が、骨の髄までしみこんでいる。

一〇　帝国主義の歴史的地位

すでに見たように、その経済的本質からすれば、帝国主義は独占資本主義である。すでにこのことによって、帝国

主義の歴史的地位が規定されている。なぜなら、自由競争を基盤として、ほかならぬその自由競争から成長する独占は、資本主義制度からより高度の社会経済制度への過渡だからである。ここでとくに、いま考察している時代にとって特徴的な独占の、あるいは独占資本主義の主要な現われの、四つの主要な種類を指摘しなければならない。

第一に、独占は、生産の集積の非常に高度の発展段階で、生産の集積から生じた。これは資本家の独占団体、すなわちカルテル、シンジケート、トラストである。それらが現代の経済生活でどんなに巨大な役割を演じているかは、すでに見たところである。二〇世紀の初めにそれらは先進諸国で完全な優位を占めるようになった。カルテル化の最初の歩みは高率関税の国（ドイツ、アメリカ）が先に踏みだしたが、自由貿易制度のイギリスも、わずかばかりおくれただけで、生産の集積からの独占体の発生という同じ基本的事実を示した。

第二に、独占体は、最も重要な原料資源の、それもとくに、資本主義社会の基本的な、そして最もカルテル化された産業すなわち石炭業と製鉄業にとっての原料資源の、略取を強化させた。最も重要な原料資源の独占的占有は、大資本の力をおそろしく増大させ、カルテル化された産業とカルテル化されていない産業との矛盾を激化させた。

第三に、独占は銀行から生じた。銀行は控えめな仲介者的企業から金融資本の独占者に転化した。最もすすんだ資本主義的民族のどれ一つをとってみても、三つか五つほどの巨大銀行が産業資本と銀行資本との「人的結合」を実現し、全国の資本と貨幣収入との大部分をなす幾十億の金の処理権をその手に集中した。現代ブルジョア社会の、例外なくすべての経済機関と政治機関のうえに、従属関係の細かな網の目を張りめぐらしている金融寡頭制——これがこの独占の最もきわだった現われである。

第四に、独占は植民政策から生じた。金融資本は、植民政策の多数の「古い」動機に、原料資源のための、資本輸出のための、「勢力範囲」——すなわち有利な取引や、利権や、独占利潤、その他を得る範囲——のための、さらに経済的領土一般のための、闘争をつけくわえた。一八七六年にまだそうであったように、ヨーロッパの列強がたとえばアフリカの一〇分の一をその植民地として占取していたにすぎないときには、植民政策は、土地をいわば「早いもの勝ち」に占取するという形で、非独占的に発展することができた。しかしアフリカの一〇分の九が奪取され（一九〇〇年ころに）、全世界が分割されてしまうと、不可避的に、植民地の独占的領有の時代が、したがってまた世界の分割と再分割のためのとくに激化した闘争の時代が、到来した。

独占資本主義が資本主義のあらゆる矛盾をどれほど激化させたかは、周知のとおりである。物価騰貴とカルテルの圧迫を指摘すれば十分であろう。諸矛盾のこのような激化は、世界金融資本が最後的に勝利したときからはじまった歴史的過渡期の、最も強力な推進力である。

独占、寡頭制、自由への志向にかわる支配への志向、ごく少数の富裕なあるいは強大な民族によるますます多数の弱小民族の搾取、――これらすべてのことは、帝国主義を寄生的なあるいは腐朽しつつある資本主義として特徴づけさせる、帝国主義のきわだった諸特徴を生みだした。「金利生活者国家」、高利貸国家の形成が、帝国主義の傾向のひとつとしてますます明瞭に現われてきて、その国のブルジョアジーはますます資本の輸出と「利札切り」で生活するようになる。この腐朽の傾向が資本主義の急速な発達を排除すると考えたら、それは誤りである。いや、個々の産業部門、ブルジョアジーの個々の層、個々の国は、帝国主義の時代に、程度の差はあれ、この二つの傾向のうち、あるときは一方を、あるときは他方をあらわすのである。そして全体として、資本主義は以前よりもはるかに急速に発達する。だがこの発達は総じてより不均等になるばかりでなく、不均等はまたとくに資本力の最も強大な国（イギリス）の腐朽のうちに現われるのである。

ドイツの急速な経済的発展については、ドイツの大銀行の研究をおこなった著者リーサーが次のようにいっている。「まえの時代（一八四八―一八七〇年）のそれほどゆっくりでなかった進歩と、この時代（一八七〇―一九〇五年）にドイツの全経済およびとくに銀行が進歩した速度との関係は、ほぼ、在りし良かりし昔の郵便馬車の速度と、今日の自動車の速度――のんびり歩いている歩行者にとっても、自動車に乗っている人自身にとっても、危険となっているほどの――との関係のようなものである」。ところで、この異常に急速に成長した金融資本は、まさにこれほども急速に成長したため、より富裕な国民からかならずしも平和的手段だけによらずに奪取すべき植民地を、むしろ「平穏に」領有する方向にうつるのをいとわないのである。合衆国では、最近の数十年の経済発展はドイツよりも急速であった。そしてまさにそのため、最近のアメリカ資本主義の寄生的特徴がとくに明白にあらわれた。他方では、共和国アメリカのブルジョアジーと君主国日本あるいはドイツのブルジョアジーとをくらべてみると、きわめて大きな政治上の相違も、帝国主義の時代には極度に減殺されることがわかる。――もっともそれは、その相違が一般に重要でないからではなく、これらすべての場合に、問題になっているのが寄生性の一定の特徴をもつブルジョアジーだからで

ある。

多くの産業部門のうちの一つ、多くの国のうちの一国、等々で資本家たちが独占的高利潤を獲得することは、彼らに、労働者の個々の層を——一時的に、しかもかなり少数の者にすぎないが——買収し、彼らを残りのすべての労働者に対抗して、その部門あるいはその国のブルジョアジーの側にひきつける経済的可能性をあたえる。そして世界の分割のための帝国主義諸国民の敵対の激化は、この志向を強める。こうして帝国主義と日和見主義との結びつきがつくりだされる。この結びつきはイギリスで他のどこよりも早く、どこよりも明瞭にあらわれたが、それは発展のいくつかの帝国主義的特徴がここでは他の国よりもずっと早く見うけられたからである。一部の著述家、たとえばエリ・マルトフは、帝国主義と労働運動における日和見主義との結びつきの事実を——いまではとくに強く目につく事実を——つとめて見まいとして、次のような種類の「お役所ふうに楽観的な」（カウツキーやユイスマンス流の）議論をその手段につかっている。すなわち、もしほかならぬ先進資本主義が日和見主義を強化させ、あるいはほかならぬ最も高給を得ている労働者が日和見主義に傾くのなら、資本主義反対者の事業は望みないものとなろう、うんぬん、と。この種の「楽観論」の意義について、思い違いをしてはならない。これは日和見主義についての楽観論であり、日和見主義の隠蔽に役だつ楽観論である。実際には、日和見主義の発展がとくに早くとくに醜いものであることは、けっしてそれの永続的勝利の保障となるものではないのであって、それはちょうど、悪性の腫れ物が早く大きくなることが、健康な肉体にとっては、その腫れ物が早くつぶれて治癒が早くなるだけであるのと、おなじである。この点で最も危険なのは、帝国主義との闘争は、もし日和見主義にたいする闘争と不可分に結合されないなら、空虚で偽りの言辞にすぎないことを、理解しようとのぞまない人々である。

帝国主義の経済的本質について以上に述べたすべてのことから、帝国主義は過渡的な、あるいはより正確にいえば、死滅しつつある資本主義として特徴づけられなければならない、という結論が出てくる。この点できわめて教訓的なのは、最新の資本主義について記述するブルジョア経済学者のあいだで、「絡みあい」とか、「孤立性の欠如」等々ということばが常用されていることである。いわく、銀行は、「その任務からしても、その発展からしても、純然たる私経済的な性格をもつものではなく、純然たる私経済的な規制の範囲を越えてますます成長しつつある企業である」と。しかもこれらのことを書いているリーサーその人は、大まじめな顔つきで、「社会化」にかんするマルクス主義者の

「予言」は「実現されなかった」と言明しているのだ！

この「絡みあい」ということばはいったいなにをあらわすか？　それは、われわれの目のまえで進行している過程の、最も目につく特徴をとらえていないことを示している。それは、観察者が木を見て森を見ないことを示しているにすぎない。それは表面の、偶然の、混沌としたものを、ただそのまま書きうつしているだけである。それは、観察者が、素材に圧倒されてその意味も重要性もまったく理解できない人間であることを証明している。株式の所有、私的所有者の関係が「偶然に絡みあっている」。だが、この絡みあいの裏面にあるもの、その基礎をなすものは、変化しつつある社会的生産関係である。大企業が巨大企業になり、大量の資料の精密な計算にもとづいて、第一次原料の供給を、幾千万の住民にとって必要な総量の三分の二とか四分の三までも計画的に組織化するとき、またときには幾百あるいは幾千ヴェルスタもはなれている最も便利な生産地点へのこの原料の輸送が系統的に組織されるとき、また幾多の種類の完成品が得られるまでの一貫した原料加工のすべての段階が、一個の中心地から管理されるとき、またこれらの生産物の分配が幾千万、幾億人の消費者のあいだに単一の計画にしたがっておこなわれるとき（アメリカの「石油トラスト」によるアメリカとドイツでの石油の販売）——そのときには、われわれの目のまえにあるのはけっして単純な「絡みあい」ではなく、生産の社会化であること、私経済的関係と私的所有の関係は、もはやその内容にふさわしくない外皮をなすこと、そしてこの外皮は、その除去を人為的にひきのばされても、不可避的に腐敗せざるをえないこと、（最悪の場合に日和見主義の腫れ物の治癒が長びくと）その外皮も比較的長いあいだ腐敗したままの状態にとどまりかねないが、しかしそれでもやはり不可避的に除去されるであろうことが、明白になるのである。

ドイツ帝国主義の熱狂的な崇拝者シュルツェ-ゲーヴァニッツはさけんでいる。

「もしドイツの銀行にたいする指導が結局において一ダースほどの人の手にゆだねられているとすれば、彼らの活動は、すでに今日、国民の福祉にとって大多数の国務大臣の活動よりも重要である」。（銀行家と、大臣と、実業家と、金利生活者の「絡みあい」については、このさいわすれたほうが有利である……）……「すでに見た発展傾向を最後までつきつめて考えてみると、国民の貨幣資本は銀行に統合され、その銀行はカルテルを結成し、国民の投下資本は有価証券の形に鋳こまれることになる。そのときには、サン-シモンの次の天才的なことばが実現される。『経済関係が統一的な規制なしに展開されるという事実に照応する、

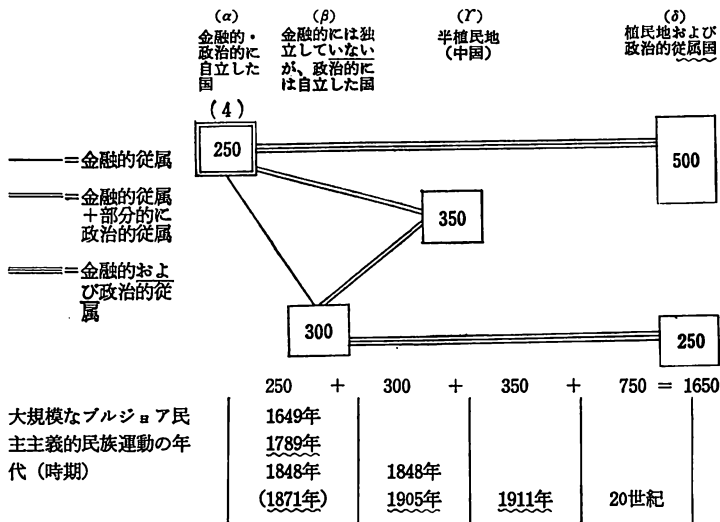
生産における今日の無政府状態は、生産の組織化に席をゆずるにちがいない。生産を指導するのは、相互に独立していて人々の経済的欲求を知らない孤立した企業家ではない。この仕事はある社会機関の手に帰するであろう。より高い見地から社会経済の広い領域を見わたすことのできる中央の管理委員会が、社会経済を全社会にとって役だつように規制し、生産手段を最も適当な人の手にゆだね、とくに生産と消費とがいつも調和をたもつように配慮するであろう。経済活動の一定の組織化をすでにその任務のうちにとりいれている機関がある。それは銀行である』。われわれはまだサン－シモンのこのことばを実現するにはほど遠い。しかしわれわれはすでにその実現の途上にある。これは、マルクス自身が考えていたのとは異なる、だが形態の点だけで異なるマルクス主義である」*。

＊『社会経済学大綱』、一四六ページ。

たしかに、これはみごとなマルクス「反駁」であるが、マルクスの正確な科学的分析から、天才的ではあったがやはり推測にすぎなかったサン－シモンの推測への、一歩後退である。

一九一六年一月—六月に執筆
はじめ一九一七年なかごろに、ペトログラードの出版社『ジーズニ・イ・ズナーニエ』から、単行の小冊子として発行
「フランス語とドイツ語版の序文」は、一九二一年に雑誌『コンムニスチーチェスキー・インテルナツィオナール』、第一八号に発表
全集、第五版、第二七巻、二九九—四二六ページ所収
邦訳全集、第二二巻、二一三—三五二ページ所収

世界の分割状況（民族的発展との関連における）

	250 ＋	300 ＋	350 ＋	750 ＝ 1650
大規模なブルジョア民主主義的民族運動の年代（時期）	1649年 1789年 1848年 （1871年）	1848年 1905年	1911年	20世紀

α＝すくなくとも1600億（??）フランの在外資本．3000億フランを下らない!!

α）4ヵ国，イギリス＋ドイツ＋フランス＋アメリカ合衆国＝人口252（百万）

4ヵ国の植民地人口＝473（百万）

β）東ヨーロッパに128（百万）（ロシア＋オーストリア＋トルコ）＝＝従属国の144（百万）

西ヨーロッパ　＋

小国家の　129 〃 ＝＝植民地の 84 〃

257　228

50 日本

307 ＋中央および南アメリカ

γ）中国＋半植民地

δ）植民地の557＋144＝701（百万）の従属国＋中央および南アメリカの一部＋半植民地の一部

邦訳全集、第39巻、687ページ所収
全集、第５版、第28巻、700ページ所収

ユニウスの小冊子について

ついにドイツで、戦争の問題を論じた社会民主主義の小冊子が、卑劣なユンカーの検閲に迎合せずに非合法に出版された！　明らかに党の「急進左」翼に所属していると思われる著者は、ユニウス（これはラテン語で青年の意味）と署名していて、その小冊子を『社会民主党の危機』と名づけた。付録としては、すでにベルンのI・S・K（国際社会主義委員会）に提出されて、その通報第三号に掲載された、『国際社会民主主義運動の任務にかんするテーゼ』がのっている。このテーゼは「インテルナツィオナーレ」グループのものであるが、このグループは、一九一五年の春に、この標題の雑誌〔『インテルナツィオナーレ』〕を一号発行し（ツェトキン、メーリング、ローザ・ルクセンブルグ、タールハイマー、ドゥンカー、シュトレーベル、その他の論文を掲載）、一九一五―一九一六年の冬には、ドイツの各地からあつまった社会民主主義者の会議(一八九)を開催して、このテーゼを採決したのである。

この小冊子は、一九一六年一月二日付の序文で著者が述べているところによれば、一九一五年四月に執筆され、「すこしも書きかえないで」印刷されたものである。もっとはやく出版できなかったのは、「外部的な諸事情」に妨げられたためである。小冊子は「社会民主党の危機」を論じているというよりも、むしろ、戦争を分析し、この戦争が解放的、民族的な性格をもっているという作り話を反駁し、この戦争がドイツの側からみても他の大国の側からみても帝国主義戦争であることを証明し、ついで公認の党の振舞いを革命的に批判することに、あてられている。きわめて生きいきと書かれているユニウスのこの小冊子は、ブルジョアジーとユンカーの側に移行した旧ドイツ社会民主党とたたかううえで、疑いもなく大きな役割をはたしてきたし、またこれからもはたすことであろう。そして、われわれも心から著者に挨拶をおくる。

一九一四年から一九一六年にかけて国外でロシア語で発表された社会民主党の文献に通じているロシアの読者には、ユニウスの小冊子は、原則的にはなにも新しいものを提供していない。この小冊子を読んでドイツのこの革命的マルクス主義者の論拠を、たとえばわが党中央委員会の宣言

（一九一四年九―一一月）〔全集、第二一巻、一三―二二ページ〕や、ベルンの諸決議（一九一五年三月）〔同、一五二―一五八ページ〕や、それらにたいする数多くの注解のうちに述べられていることと対比してみるときには、ユニウスの論拠が非常に不十分であり、彼が二つの誤りをおかしていることを、確信せざるをえない。(一七) われわれはこれからユニウスの欠陥と誤りを批判するが、こうするのも、マルクス主義者にとって必要な自己批判のためであり、第三インタナショナルの思想的基礎として役だつべき諸見解を全面的に検討するためであることを、極力強調しなければならない。ユニウスの小冊子は大体においてすばらしいマルクス主義的労作であって、その欠陥もある程度まで偶然のものであることはまったくありうることである。

ユニウスの小冊子の主要な欠陥と、それが合法的な（発行直後に禁止されたとはいえ）雑誌『インテルナツィオナーレ』にくらべてはっきり一歩後退している点とは、社会排外主義（著者はこの用語をも、正確さの点でこれにおとる社会愛国主義という表現をも、つかっていない）と日和見主義との結びつきについて口をつぐんでいることである。著者は、まったく正当に、ドイツ社会民主党の「降伏」と崩壊、党の「公認指導者たち」の「裏切り」についてかたっているが、それ以上には出ていない。ところが、すでに『インテルナツィオナーレ』誌は、「中央派」すなわちカウツキー派に批判をくわえ、彼らの無定見、彼らによるマルクス主義の冒瀆、日和見派にたいする彼らの従僕的な態度を、まったく正当に嘲笑していた。しかも、同誌は、たとえば、一九一四年八月四日に日和見主義者が最後通牒をたずさえて、すなわちどんな場合でも軍事公債に賛成投票するという決意をかためて登院〔議会に登院〕したという、きわめて重要な事実を公表して、日和見主義者のほんとうの役割を暴露しはじめたのである。ユニウスの小冊子でも、テーゼでも、日和見主義やカウツキー主義についてはなにも述べていない！ これは、理論上正しくない。というのは長い歴史、すなわち第二インタナショナル全体の歴史を背後にもつ一流派としての日和見主義に連関させないでは、この「裏切り」は説明できないからである。これは、実践的＝政治的に誤りである。なぜなら、公然の日和見主義的流派（レギーン、ダヴィッドなど）と隠然の日和見主義的流派（カウツキー一派）という二つの流派の意義と役割を明らかにしないでは、「社会民主党の危機」を理解することも、それを克服することも、できないからである。これは、たとえば、『フォルヴェルツ』一九一六年一月一二日号にのったオットー・リューレの歴史的な論文――彼は、そこで率直に、公然と、ドイツ社会民主党の分裂の不可

避性を証明している——にくらべて、一歩後退している(『フォルヴェルツ』編集局は、すでに二つの党が現存していて、それらを和解させることができないということに反対する本質的な論拠はただの一つも見いだせずに、甘ったるい偽善的なカウツキー主義的文句をむしかえして彼に答えている)。これは、ひどく首尾一貫しないことである。というのは、「インテルナツィオナーレ」グループのテーゼ第一二には「主導的な国々の社会主義諸党の公認の代表者たち」が「裏切って」、「ブルジョア的＝帝国主義的政策の基盤へ移行した」ために、「新しい」インタナショナルを創設しなければならなくなったと、率直に述べているからである。あきらかに、古いドイツ社会民主党、またはレギーン、ダヴィッド一派と馴れあっている党を「新しい」インタナショナルに参加させることなどについてかたるのは、まったくこっけいである。

「インテルナツィオナーレ」グループのこの後退が、どういう原因によるものか、われわれにはわからない。ドイツにおける革命的マルクス主義全体の最大の欠陥は、系統的にその方針を遂行し、新しい任務の精神で大衆を教育する、結束した非合法組織のないことである。このような組織は、日和見主義にたいしても、カウツキー主義にたいしても、はっきりした立場をとらなければならないであろう。

いまや、二つの最後の日刊新聞、ブレーメンの新聞(『ブレーマー・ビュルガー－ツァイトゥング』[二〇])とブラウンシュワイクの新聞(『フォルクスフロインド』[二一])とが、ドイツの革命的社会民主主義者の手からとりあげられて、二つともカウツキー派にうつってしまっただけに、これはなおさら必要である。「ドイツ国際派社会主義者」(I・S・D)のグループだけがその部署に踏みとどまっていることは、すべての人にとって明白であり明確である。

どうやら「インテルナツィオナーレ」グループの若干のメンバーは、またもや無原則的なカウツキー主義の泥沼に転落したようである。たとえば、シュトレーベルは『ノイエ・ツァイト』誌上で、ベルンシュタインとカウツキーに低頭するまでになった！　またごく最近、一九一六年七月一五日には、彼は『平和主義と社会民主党』という論文を諸新聞に発表して、カウツキー流の卑俗きわまる平和主義を擁護した。ユニウスはどうかといえば、彼は「軍備撤廃」だの、「秘密外交の廃止」だの、といったふうなカウツキー派の空想計画に断固として反対している。おそらく「インテルナツィオナーレ」グループのうちには、革命的潮流とカウツキー主義のほうへ動揺しつつある潮流との二つがあるのであろう。

ユニウスのまちがった諸命題のうち第一のものは、「イ

ソテルナツィオナーレ」グループの第五テーゼに具体的に表明されている。……「この野ばなしの帝国主義の時代には、もはやどんな民族戦争もありえない。民族的利益は、勤労人民大衆を、その不倶戴天の敵である帝国主義に奉仕させるための、欺瞞の手段に役だつにすぎない」。……この命題でおわる第五テーゼの初めのほうは、現在の戦争を帝国主義戦争として特徴づけることにあてられている。民族戦争一般を否定したのは、単なる見落しか、それとも現在の戦争が帝国主義戦争であって民族戦争ではないという、まったく正しい思想を強調するあまり、たまたま無我夢中になったのかもしれない。しかし、その反対であるかもしれないし、また現在の戦争を民族戦争だとするまちがった考え方のために、いろいろな社会民主主義者のあいだに、あらゆる民族戦争を否定するまちがったやり方も見られるから、われわれはこの誤りを詳しく論じないわけにはいかない。

ユニウスが、現在の戦争における「帝国主義的環境」の決定的な影響を強調して、セルビアの背後にはロシアがあり、「セルビアの民族主義の背後にはロシアの帝国主義がある」と言い、たとえばオランダの参戦もやはり帝国主義的なものであろう、なぜなら、同国は、第一に自国の植民地を擁護するであろうし、第二に一方の帝国主義連合の同盟国となるであろうから、と言っているのは、まったく正しい。このことは、現在の戦争にかんしては、議論の余地がない。そしてこの場合ユニウスが、自分にとってなによりも重要な事柄、すなわち、「現在、社会民主党の政策を支配している」「民族戦争の幻影」（八一ページ）との闘争を、とくに強調しているとき、彼の議論は正しくもあり、まったく適切でもあることを、認めないわけにはいかない。

ただ、この真理を誇張して、具体的であれ、というマルクス主義の要求からそれて、現在の戦争の評価を帝国主義のもとでおこりうるすべての戦争に引きうつし、帝国主義に反対する民族運動をわすれることは、誤りであろう。「もはや民族戦争はありえない」という命題を擁護するためにだされる唯一の論拠は、世界がごく少数の帝国主義的「大」国のあいだに分割されていて、そのために、どんな戦争も、かりに最初は民族戦争であっても、帝国主義列強のうちのある一国、もしくは帝国主義諸国連合の利害に触れるため、帝国主義戦争に転化する、ということである（ユニウス、八一ページ）。

この論拠がまちがっていることは、明白である。もちろん、マルクス主義的弁証法の基本命題は、自然および社会ではすべての限界は条件的であり可動的であって、一定の諸条件のもとでその対立物に転化しえないような現象は一

つもない、ということである。民族戦争は帝国主義戦争に転化しうるし、その逆もありうる。たとえばフランス大革命の諸戦争は民族戦争としてはじまったし、またそういう戦争であった。これらの戦争は革命的であった。すなわち、反革命的な諸君主国の連合にたいして大革命を擁護したのである。ところが、ナポレオンが、ずっとまえに形づくられた、生活力のある、大きなヨーロッパの民族国家をいくつも隷属させて、フランス帝国を創建したとき、フランスの民族戦争は帝国主義戦争となり、後者はついでナポレオンの帝国主義に反対する民族解放戦争を生みだした。

帝国主義戦争と民族戦争とがたがいに転化しうるということを根拠にして、両者の差異を抹殺するようなことをやれるのは、詭弁家だけである。弁証法は、ギリシア哲学の歴史でも、一度ならず、詭弁哲学への橋渡しになった。だが、われわれは、あらゆる転化一般の可能性を否定することによってではなく、あたえられたものをその環境のなかで、またその発展のなかで具体的に分析することによって、詭弁哲学とたたかうときに、弁証家としてとどまるのである。

一九一四―一九一六年のこの帝国主義戦争が民族戦争に転化するということは、はなはだありそうもないことである。というのは、前進的な発展を代表する階級はプロレタリアートであって、彼らは客観的には帝国主義戦争をブルジョアジーにたいする内乱に転化させることをめざしているからであり、さらにまた、二つの連合の力にあまり大きな相違がなく、国際金融資本がいたるところに反動的ブルジョアジーをつくりだしたからである。しかし、このような転化を不可能であるときめつけることはできない。――もしヨーロッパのプロレタリアートが今後二〇年ちかくも無力でいれば、またもし現在の戦争がナポレオン戦争のような勝利に終わり、生活力のある多くの民族国家の隷属化に終わるなら、またもしヨーロッパ以外の帝国主義（第一に日本およびアメリカの帝国主義）が、たとえば日米戦争のおかげで、社会主義にうつらないで、同じく二〇年ももちこたえるとすれば、そのときには、ヨーロッパにおける一大民族戦争も可能であろう。こういうことは、ヨーロッパの発展の数十年もの後退であろう。これは、ありそうもないことである。しかし、不可能ではない。なぜなら、ときどきはあともどりの大跳躍をすることなく、なめらかに、きちんと前進してゆく世界史を考えることは、非弁証法的であり、非科学的であり、理論的に正しくないからである。

さらに、帝国主義の時代には、植民地と半植民地による民族戦争は、ありそうなばかりか、不可避的でもある。植民地と半植民地（中国、トルコ、ペルシア）には、一〇億

に近い人間、すなわち地球人口の半数以上が、生活している。民族解放運動は、ここではすでに非常に強力になっているか、それとも成長し成熟しつつあるかである。どんな戦争も、別の手段による政治の継続である。植民地の民族解放政治の継続は、不可避的に植民地が帝国主義にたいしておこなう民族戦争となるであろう。このような戦争は、今日の帝国主義的「大」国のあいだの帝国主義戦争に導くかもしれないし、また導かないかもしれない、——これは、多くの事情にかかっている。

たとえば、イギリスとフランスは植民地をめぐる七年戦争をたたかった。すなわち、帝国主義戦争をおこなった（帝国主義戦争は、高度に発展した資本主義という現代的基盤のうえでだけでなく、奴隷制を基盤としても、またプリミティヴな資本主義を基盤としても、可能である）。フランスは敗北して、その植民地の一部を失った。それから数年を経て、イギリス一国にたいする北アメリカ諸州の民族解放戦争がはじまった。今日の合衆国の一部を自分でも領有しつづけていたフランスとスペインはイギリスにたいする敵意から、すなわちその帝国主義的な利害関係から、イギリスにたいして反乱した北アメリカ諸州と友好条約をむすんだ。フランス軍はアメリカ軍といっしょになって、イギリス軍をやぶった。これは民族解放戦争であって、この戦争では帝国主義的競争は重要な意義をなにももたない付随的な要素であった。——これは、われわれが一九一四—一九一六年の戦争（オーストリア＝セルビア戦争における民族的要素は、すべてを規定する帝国主義的競争にくらべて重要な意義をもっていない）で見ていることと反対である。このことからして、帝国主義の概念を紋切型に適用して、この概念から民族戦争の「ありえない」ことを導きだすことがどんなにばかげているかがわかる。たとえば、いずれかの帝国主義強国にたいするペルシア、インドおよび中国の同盟の民族解放戦争は、まったくありうることであり、ありそうなことである。というのは、こういう戦争は、これらの国の民族解放運動から出てくるものだからである。ところで、この場合に、このような戦争が今日の帝国主義強国のあいだの帝国主義戦争に転化するかどうかは、非常に多くの具体的事情にかかるのであって、このような事情が到来することを保証するのはこっけいである。

第三に、ヨーロッパでさえ帝国主義時代の民族戦争をありえないものと見なすことはできない。「帝国主義時代」は、今日の戦争を帝国主義戦争とした。この時代は、（社会主義が到来するまでは）新しい帝国主義戦争を不可避的に生みだす。それは、今日の諸大国の政治をすっかり帝国主義的なものにしたが、しかし、この「時代」は、たとえ

ば帝国主義強国に反対する小国家（併合されているか、もしくは民族的に抑圧されている小国家を仮定しよう）がおこなう民族戦争を、すこしも排除するものではない。それは、この「時代」が東部ヨーロッパの大規模な民族運動をも排除しないのと同様である。たとえば、オーストリアについては、ユニウスは、きわめて健全な判断をくだし、「経済的なもの」ばかりでなく、特異な政治的なものをも考慮に入れて、「オーストリアが内的生活力をもたない」ことを指摘し、「ハプスブルグの君主制は、ブルジョア国家の政治組織ではなく、社会的寄生者のいくつかの徒党の、ゆるいシンジケートにすぎない」こと、「オーストリア＝ハンガリーの解消は、歴史的には、トルコの崩壊の継続にすぎず、ともに、歴史的発展過程の要求である」ことをみとめている。バルカンの若干の国家やロシアの事態も、これよりましではない。そして、現在の戦争で諸「大」国がひどく疲弊する場合には、もしくはロシアで革命が勝利する場合には、民族戦争は、しかもその勝利さえ、まったく可能なのである。帝国主義列強の干渉は、どんな事情のもとでも実際に実現できるとはかぎらない。これが一つ。他方、巨大国にたいする小国家の戦争は見こみがない、と「軽率に」論ずる人があるなら、これにたいしては、見こみのない戦争もまた戦争であり、さらに「巨大国」内部のある現象——たとえば革命の開始——が「見こみのない」戦争を大いに「見こみのある」戦争にするかもしれない、と指摘しなければならない。

われわれが「もはや民族戦争はありえない」という命題のまちがいを詳しく論じたのは、それが理論上あきらかに誤っているためばかりではない。もちろん、俗流化されたマルクス主義を基盤としてのみ第三インタナショナルの創設が可能であるときに、「左翼」がマルクス主義の理論にたいして無頓着な態度をしめしはじめるとすれば、大いに悲しむべきことであろう。しかし、実践的＝政治的にも、この誤りは、非常に有害である。すなわち、反動的な戦争のほかにはどんな戦争もありえないというのであるから、「軍備撤廃」というばかげた宣伝がこの誤りから導きだされるのである。また、いっそうばかげた、まったく反動的な、民族運動への無関心が導きだされる。このような無関心は、ヨーロッパの「大」民族の成員、すなわち小民族や植民地民族の大衆を抑圧している民族の成員が、学者ぶった顔つきで「もはや民族戦争はありえない！」と声明する場合には、排外主義となるのである！　帝国主義列強にたいする民族戦争は、ありうることであり、ありそうなことであるばかりではない。それは、不可避的であり、進歩的、革命的でもある。とはいえ、この戦争が成功するためには、

被抑圧諸国の住民の膨大な数（われわれのあげたインドと中国の例では数億の人間）の努力を結合するか、または国際情勢の諸条件がとくに有利に組み合わされるか（たとえば、帝国主義列強の干渉がそれらの国の無力化、それらの国のあいだの戦争、それらの国のあいだの敵対などのために麻痺させられる場合）、ないしは大国のうちの一国のプロレタリアートがブルジョアジーにたいして〔民族戦争と〕同時に蜂起するか、いずれかを必要とすることは、もちろんである（以上に列挙したうちのこの最後の場合は、プロレタリアートの勝利にとって望ましく有利なものという見地からすれば、第一のものである）。

しかし、注意しておかなければならないのは、ユニウスを民族運動に無関心だといって非難するのは不公平であろう、ということである。彼は、すくなくとも、カメルンにおける土着民の一指導者の「反逆罪」による（あきらかに、戦争を機に蜂起するという企図のための）処刑を黙過したことを社会民主党国会議員団の罪過の一つにかぞえ、〔小冊子の〕他の個所では、とくに「社会民主主義者」として通用しているレギーン、レンシュ、その他のろくでなしどもにたいして、植民地民族もまた民族であることを強調している。彼はきわめて明確に言明している。「社会主義は、各民族にたいして独立と自由の権利、自分の運命を自主的に処理する権利を認める」。「国際社会主義は、自由な、独立した、そして同権の諸民族の権利をみとめる。しかし、このような民族をつくりだすことができるのはただ国際社会主義だけであり、民族自決権を実現できるものはただ国際社会主義だけである。社会主義のこのスローガンも」――と著者は正しく指摘している――「他のすべてのスローガンと同じように、現存するものを正当化することに役だつものでなく、プロレタリアートの革命的、変革的、積極的な政策への道標として、鼓舞として、役だつものである」（七七、七八ページ）。したがって、オランダとポーランドの若干の社会民主主義者が、社会主義のもとでさえ民族自決があることを否認することによって落ちこんだあの偏狭性とマルクス主義の戯画化とに、ドイツの左派社会民主主義者の全員が陥ったのだと思う人があるなら、それは大きなまちがいであろう。なお、この誤りの特殊なオランダ＝ポーランド的源泉については、別の個所で述べることにしよう。

ユニウスのもう一つのまちがった議論は、祖国防衛の問題と関連している。これは、帝国主義戦争の時期における根本的な政治問題である。そしてユニウスは、わが党によるこの問題の提起の仕方が唯一の正しい提起の仕方だというわれわれの確信をつよめた。それは、この戦争が強盗的、

奴隷主的、反動的な性格のものであるから、またこの戦争にたいして社会主義のための内戦を対置する（またこの戦争を内戦に転化しようと努力する）ことが可能であり必要であるから、プロレタリアートはこの帝国主義戦争で祖国を防衛することに反対するということである。ところが、ユニウスは、一方では、民族戦争とはちがった現在の戦争の帝国主義的性格をみごとにあばきだしながら、他方では、きわめておかしな誤りに陥り、民族戦争でない現在の戦争にたいして、民族綱領をこじつけてあてはめようと試みたのである！　これは、ほとんどありそうもないことのように聞えるが、しかし事実である。

レギーン的色合いのものにせよ、カウツキー的色合いのものにせよ、御用社会民主主義者は、戦争が帝国主義的性格のものであることについて人民大衆を欺くために、なによりも外国の「侵攻」をわめきたてたブルジョアジーに下僕的に奉仕して、この「侵攻」という論拠をとくに熱心にくりかえした。今日カウツキーは、自分は一九一四年の末から反対派にうつったのだと、素朴な、ものごとを信じやすい人々に（とりわけ、ロシアの組織委員会派のスペクタートルをつうじて）信じこませようとして、この「論拠」を引合いにだしつづけている！　ユニウスは、この論拠をくつがえそうとつとめて、「ブルジョア的歴史では、侵攻と階級闘争とは、公けの作り話のいうように、あい対立するものではなく、一方は他方の手段であり現われである」ことを証明するために、きわめて教訓に富む歴史上の実例をあげている。その実例はこうである、――フランスのブルボン派はジャコバン派に対抗するため、一八七一年のブルジョアはコミューンに対抗するため、それぞれ外国の侵攻を誘致した。マルクスは『フランスにおける内乱』のなかでこう書いている。

「旧社会が、いまでもなしうる英雄的な努力の極致は、民族戦争である。ところが、これさえいまでは、階級闘争を延期させることを目的とする政府のごまかしにすぎず、その階級闘争が内戦となって爆発するやいなや、たちまち投げすてられてしまうということが、明らかとなった」〔第一一巻、三五八ページ〕。

ユニウスは、一七九三年を引合いにだしてこう書いている。「あらゆる時代の古典的な実例はフランス大革命である」と。そして、すべてこういうことから次の結論が引きだされる。「したがって、幾世紀もの経験が証明しているように、外敵にたいする国土の最良の防護、最良の防衛となるものは、戒厳状態ではなくて、人民大衆の自尊心や、犠牲的精神や、道徳的力を呼びおこす、容赦ない階級闘争である」。

ユニウスの実践的結論は次のようである。「いかにも、社会民主主義者には、大きな歴史的危機にさいしては、自国を防護する義務がある。そしてまさに社会民主党国会議員団が、一九一四年八月四日の彼らの声明で『われわれは危急存亡のときに祖国を見すてない』と厳粛に宣言しておきながら、同時に自分の言ったことを否認したことにこそ、彼らの重大な罪があるのだ。彼らは、最大の危険の時に、祖国を見すてたのである。なぜなら、この時における祖国にたいする第一の義務は、次の点にあったからである。すなわち、祖国にこの帝国主義戦争の真の背景をしめし、祖国にたいするこの陰謀を織りなしている愛国主義的な嘘や外交上の嘘の織物を引きさくこと。この戦争ではドイツの人民にとって勝利も敗北もひとしく災厄であることを、大声に、はっきりと言明すること。戒厳状態によって祖国に猿ぐつわをはめることにたいしては、あくまでも抵抗すること。人民を即時武装させ、戦争か平和かの問題を人民に決定させる必要のあることを宣言すること。人民代表機関が政府を、また人民が人民代表機関を、注意ぶかく統制するのを保証するために、戦争のあいだ人民代表機関を無休会でひらくよう断固として要求すること。自由な人民だけが自国を首尾よく防衛できるのであるから、すべての政治的権利の制限の即時廃止を要求すること。最後にオーストリアとトルコの保持、すなわちヨーロッパおよびドイツにおける反動の保持をめざす帝国主義的な戦争綱領にたいして、一八四八年の愛国者や民主主義者の古い、真に民族的な綱領、すなわちマルクス、エンゲルス、ラッサールの綱領を、単一の大ドイツ共和国というスローガンを、対置すること。これこそ、国のまえにかかげなければならなかった旗じるしであり、真に民族的で、真に自由な旗じるしであり、またドイツとプロレタリアートの国際的階級政策との最良の伝統に一致した旗じるしであった」。……「こうして、祖国の利害とプロレタリアートの国際的連帯性とのあいだの重大なディレンマとか、わが党の国会議員をして『重苦しい気持をいだき』ながら帝国主義戦争に味方させた、悲劇的な葛藤とかいうものは、純然たる想像であり、ブルジョア的民族主義の作り話である。むしろ、国の利害とプロレタリア・インタナショナルの階級的利害とのあいだには、戦時にも平時にも、完全な調和が存在する。すなわち、両者ともに、階級闘争の最も精力的な展開を要求し、社会民主主義の綱領を最も力をこめて固守することを、要求するのである」。

このようにユニウスは論じている。彼の議論の誤りは明白である。そこで、ツァーリズムの公然隠然の従僕であるわがプレハーノフやチヘンケリの諸君、またおそらくはマ

ルトフやチヘイゼの諸君までが、理論上の真実を期してではなく、うまく言いのがれ、証跡をくらまし、労働者に目つぶしをくらわせようという考えで、得たり顔でユニウスのことば尻をとらえるとすれば、われわれは、ユニウスの誤りの理論的源泉の解明にもっと詳細にたずさわらなければならない。

彼は、帝国主義戦争に民族綱領を「対置」するよう提案している。彼は、将来に面をむけずに過去へ面をむけよ、と先進的階級に提案している！　一七九三年と一八四八年には、フランスでもドイツでも、またヨーロッパ全体でも、客観的にはブルジョア民主主義革命が日程にのぼっていた。この客観的な歴史的事態には当時の民主主義派の「真に民族的な」綱領すなわち民族的＝ブルジョア的な綱領が照応していたのであって、この綱領は、一七九三年にはブルジョアジーおよび平民の最も革命的な分子によって実現され、一八四八年にはマルクスによって先進的な民主主義派全体の名において宣言されたのである。その当時は、封建的＝王朝的戦争にたいして、客観的には、革命的＝民主主義的戦争、民族解放戦争が対置されていた。これが、その時代の歴史的任務の内容であった。

いまや、ヨーロッパの先進的な最大の諸国家にとっては客観的事態はちがったものである。前進的な発展――もしありうべき一時的な後退を考慮に入れないなら――は、社会主義社会、社会主義革命をめざしてのみ実現可能である。帝国主義的＝ブルジョア的戦争、すなわち高度に発展した資本主義の戦争にたいして客観的に対置できるものは、前進的な発展の見地からすれば、先進的な階級の見地からすれば、ブルジョアジーにたいする戦争だけである。すなわち、まず第一には、権力を獲得するためにブルジョアジーにたいしてプロレタリアートがおこなう内戦――それがなければ真剣な前進運動がありえない戦争――であり、次には、一定の特殊な諸条件のもとでだけ可能なものであって、ブルジョア諸国家から社会主義国家を防衛する戦争である。だから、条件つきの防衛という見地、すなわちロシアにおける革命の勝利と共和制の勝利とを条件として祖国を防衛する見地に立つ心がまえのある、あのボリシェヴィキ（幸いなことに、彼らはまったく少数であり、われわれは彼らをさっそくプリズィフ派へひきわたした）は、ボリシェヴィズムの文字にはひきつづき忠実であっても、その精神を裏切ったのである。なぜなら、ヨーロッパの先進的な列強の帝国主義戦争にまきこまれたロシアは、共和制の形態をとったところで、やはり帝国主義戦争をおこなうであろうから！

階級闘争は侵攻に対抗する最良の手段であると、ユニウ

スが言うのは、マルクスの弁証法を半分だけしか適用せず、正しい道を一歩踏みだしただけで、すぐにそれからはずれてしまったものである。マルクスの弁証法は、おのおのの特殊な歴史的情勢を、具体的に分析することを要求する。階級闘争が侵攻に対抗する最良の手段であること――これは、封建制を打倒しようとするブルジョアジーについても、ブルジョアジーを打倒しようとするプロレタリアートについても、あてはまる。これがあらゆる階級的抑圧についてあてはまるからこそ、これは、あまりにも一般的であり、したがって当の特殊の場合については不十分なのである。ブルジョアジーにたいする内戦もまた階級闘争の一種である。そして、この種の階級闘争だけが、ヨーロッパ（一国だけでなくヨーロッパ全体）を侵攻の危険からすくうであろう。「大ドイツ共和国」は、たとえそれが一九一四―一九一六年に存在していたとしても、同じような帝国主義戦争をおこなったであろう。

ユニウスは、この問題にたいする正しい解答と、ブルジョアジーに反対する社会主義のための内戦という正しいスローガンとのすぐそばまで来ながら、まるですべての真理を言いつくすのをおそれたかのように、一九一四年、一九一五年、一九一六年における「民族戦争」という夢想へ後退したのである。問題を理論的側面からでなく純実践的な見地からみても、ユニウスの誤りは、同じように明らかになるであろう。ドイツの全ブルジョア社会、農民にいたるまですべての階級は戦争に賛成した（ロシアでも、おそらく同じであった。すくなくとも、富農と中農との大多数と貧農のきわめて大きな部分は、明らかにブルジョア的帝国主義に幻惑されていた）。ブルジョアジーは歯まで武装していた。こういう状態のもとで、共和制、無休会の議会、人民による将校の選挙（「人民の武装」）などという綱領を「宣言」することは、実際には革命（正しくない革命的綱領をもつ！）を「宣言する」ことを、意味するであろう。

ユニウスは、その同じところで、まったく正当にも、革命を「製造する」ことはできない、と言っている。一九一四―一九一六年には、革命は、戦争の胎内にひそみ、戦争のなかから成長しながら、日程にのぼっていたのである。そこで、このことを革命的階級の名において「宣言する」必要があった。すなわち、社会主義――戦争の時代には、極反動的な、犯罪的な、そして人民を筆紙につくせない災厄に運命づけるブルジョアジーにたいする内戦なしには不可能であるところの――というこの階級の綱領を、徹底的に、おそれるところなく指示する必要があった。系統的な、首尾一貫した、実践的な、そして、革命的危機がどんなテンポで発展する場合にも無条件に実現されうる行動、成熟

しつつある革命の線にそった行動を、熟考する必要があった。これらの行動はわが党の決議に指示されている。（一）軍事公債にたいする反対投票、（二）「国内平和」の破棄、（三）非合法組織の創設、（四）兵士の交歓、（五）大衆のあらゆる革命的行動の支持。これらすべての措置が成功するならば、不可避的に内戦に導くのである〔全集、第二一巻、一五五ページ〕。

偉大な歴史的綱領を宣言することは、疑いもなく、巨大な意義をもっていた。ただし、これは、一九一四—一九一六年には陳腐なものとなっている古い民族的＝ドイツ的綱領ではなしに、プロレタリア的＝国際的な、そして社会主義的な綱領であるとしてのことである。君たちブルジョアは強奪のためにたたかいたまえ。われわれ全交戦国の労働者は諸君にむかって戦争を、社会主義のための戦争を宣言する。——これこそ、レギーン派、ダヴィッド派、カウツキー派、プレハーノフ派、ゲード派、サンバ派などとちがって、プロレタリアートを裏切らなかった社会主義者が一九一四年八月四日に議会でおこなうべき演説の内容である。

どうやら、二つの種類のまちがった考えがユニウスの誤りを引きおこしたもののようである。疑いもなく、ユニウスは、帝国主義戦争に断固として反対し、革命的戦術に断固として味方している。プレハーノフ派の諸君がユニウスの「祖国防衛主義」にどんなに意地わるくほくそ笑んだところで、この事実は抹消されないであろう。この種のありうべき、そしてありそうな中傷にたいしては、即座に、はっきりと答えなければならない。

しかし、第一に、ユニウスは、分裂をおそれ、掛値なしに革命的スローガンを口にすることをおそれているドイツの社会民主主義者——左派社会民主主義者までもふくめて——の「環境」から完全には脱却していない。* これはまちがった恐怖であって、ドイツの左派社会民主主義者は、この恐怖から脱却しなければならないし、また脱却するであろう。社会排外派にたいする彼らの闘争の進行は、そこまですすむであろう。だが彼らは、自国の社会排外派にたいして、断固として、確固として誠実にたたかっており、この点にこそ、彼らと、マルトフや、チヘイゼの諸君のように、一方の手では（スコベレフ流に）「万国のリープクネヒトたち」への挨拶を書いた旗をひるがえし、他方の手ではチヘンケリやポトレソフをやさしく抱擁するような連中とのあいだの、巨大な、原則的な、根本的な違いがある！

* 勝利と敗北とどちらがよいか、というユニウスの議論にも、同じ誤りがある。どちらも、同じように悪い（荒廃、軍備の増大、等々）、——これが彼の結論である。これは、革命的プロレタリアートの見地ではなく、平和主義的小ブルジョアの

見地である。もしプロレタリアートの「革命的干渉」を論じるのであれば――そして、ユニウスも「インテルナツィオナーレ」グループのテーゼも、遺憾ながらあまりにも一般的な形ではあるが、このことについて論じているのである――どうしても別の見地から問題を提起しなければならない。すなわち、(一)敗北の危険をおかさずに「革命的干渉」は可能であるかどうか？　(二)同じ危険をおかさずに自国のブルジョアジーと政府とを責めることができるかどうか？　(三)敗北は革命的階級の仕事を容易にすると、われわれはつねに言ってきたではないか、また反動的戦争の歴史的経験もそうかたっているではないか？　と。

第二に、明らかに、ユニウスは、いたましい思い出の、メンシェヴィキ的「段階理論」のようなものを実現しようとのぞんだのである。すなわち、革命的綱領を実行するのに、それの「最も都合のよい」、「一般むきのする」、小ブルジョアジーに受けいれられる点からはじめようとのぞんだのである。これは、「歴史のうらをかき」、俗物のうらをかこうとする計画のようなものである。つまりこうである。真実の祖国の最良の防衛ということにはだれも反対することはできない。ところで、真実の祖国とは大ドイツ共和国であり、最良の防衛とは民兵、無休会の議会、その他である。このような綱領は、ひとたびそれが採択されるなら、ひとりでに次の段階に、すなわち社会主義革命にむかってすすむであろう、というのである。

おそらく、このような議論が、意識的にか半意識的にか、ユニウスの戦術を規定したのであろう。それが誤りであることはいうまでもない。ユニウスの小冊子には、革命的スローガンを十分に考えぬき、これらのスローガンの精神で大衆を系統的に教育することに慣れた非合法組織の同志たちをもたない、孤独者が感じられる。しかし、このような欠陥は――これをわすれるのは大きなまちがいであろうが――ユニウスの個人的欠陥ではなくて、カウツキー主義の偽善と衒学と日和見主義者への「友情」とのこまかな網の目に四方八方からぐるぐるまきされているドイツの左派全体の弱点の結果である。ユニウスの支持者たちは、孤独であるにもかかわらず、非合法リーフレットの発行とカウツキー主義にたいする戦いとに着手することができた。彼らは正しい道をさらに前進することができるであろう。

一九一六年七月に執筆
一九一六年一〇月に『ソツィアル－デモクラート論集』第一号に発表
署名――エヌ・レーニン
『論集』のテキストによって印刷
全集、第五版、第三〇巻、一－一六ページ所収
邦訳全集、第二二巻、三五三－三七一ページ所収

事項注

（一）論文『カール・マルクス』は、当時ロシアで最も好評をえていたグラナート百科辞典のために書かれた。一九一八年この論文を単行本として出版するさい、レーニンはその序文で、執筆の時期は一九一三年であると、心覚えでしるしている。実際にはレーニンがこの論文の執筆に取りかかったのは一九一四年の春、ポロニノにおいてであった。しかし、党活動と新聞『プラウダ』の指導に忙殺されていたので、執筆を中断しなければならなかった。九月にベルンに移ったのちはじめて、レーニンはふたたび論文の執筆にとりかかり、一一月の前半に執筆を終えた。一一月四（一七）日、グラナート出版社の編集部あての手紙で彼はこう書いている。「きょう、マルクスおよびマルクス主義にかんする辞典用の論文を書留帯封でお送りしました。七万五〇〇〇字そこらのわくに解説をつめこむという困難な課題を、どれだけうまく解決できたかを判断するのは私の任ではありません。言っておきますが、文献は大いに圧縮しなければならなかった（一万五〇〇〇字が最後的条件でした）ので、いろいろの傾向のうちの最も重要なもの（もちろん、マルクスを支持するものを多くして）をえらばなければなりませんでした」（全集、第三五巻、一七四ページ）。

論文は、不完全なかたちで、一九一五年に同百科辞典（第七版）、第二八巻に、ヴェ・イリインの署名で発表された。検閲上の事情から、編集部は『社会主義』、『プロレタリアートの階級闘争の戦術』の二つの章を印刷せず、また論文の原文に一連の変更をくわえた。論文の終りには、付録として『マルクス主義文献』が印刷された。

一九一八年、論文は「プリボイ」出版社によって単行本として百科辞典のテキストにしたがって印刷されたが、『マルクス主義文献』はつけてなかった。論文の原稿どおりの全文は、一九二五年にはじめてレーニンの論文集『マルクス＝エンゲルス＝マルクス主義』（ソ連邦共産党中央委員会付属レーニン研究所発行）に発表された。

本書でも『マルクス主義文献』は省略してある。二

（二）一八五六年四月一六日付のマルクスからエンゲルスへの手紙（二巻選集、第八冊、一七七ページ）を参照。二

（三）ヘーゲル左派または青年ヘーゲル派——ドイツの観念論哲学の一潮流であったヘーゲル学派の左翼の代表者たち。

青年ヘーゲル派は、社会発展の客観的法則や、社会の発展における物質的生産の役割や、社会における階級闘争の不可避性を認めなかった。彼らは、一九世紀の三〇—四〇年代のドイツのブルジョア自由主義派のイデオロギーを代表し、ドイツ・ブルジョアジーの臆病さ、封建的基盤とたたかううえでの頼りなさを言いあらわしていた。彼らの活動は、革命的空文句、支配階級にたいするおどしに、支配階級の説得に終わっていた。

マルクスとエンゲルスは、活動の初期には青年ヘーゲル派に属していたが、革命的民主主義者として行動した。二人は、観念論から唯物論へ、革命的民主主義から共産主義にうつって、青年ヘーゲル派の哲学に全面的な批判をくわえ、この哲学の階級的根源を明らかにし、この哲学が学問的にまったく成りたたないことを示した。三

（四）エンゲルスの『ルートヴィヒ・フォイエルバッハとドイツ古典哲学の終結』（全集、第二一巻、二七七ページ）を参照。一三

（五）『政治、商業および営業のためのライン新聞』——一八四二

年一月一日から一八四三年三月三一日まで、ケルンで発行されていた日刊新聞。プロイセンの絶対主義に反対の気分をもっていたライン州ブルジョアジーの代表者たちが創刊したもの。一部のヘーゲル左派も同紙に寄稿していた。同紙にはエンゲルスの論文がいくつか発表された。マルクスは一八四二年四月から『ライン新聞』に寄稿し、同年一〇月からその編集者の一人になった。マルクスの編集により、同紙は革命的民主主義的な性格をおびるようになった。一八四三年一月、プロイセン政府は、同年四月一日以降『ライン新聞』を禁止することにきめ、それまでのあいだ同紙をとくに厳重に検閲することに決定した。『ライン新聞』の株主たちが同紙をもっと穏健なものにしようと図ったので、マルクスは、一八四三年三月一七日、編集局からの脱退を声明した。三

(六) 本書では省略した『マルクス主義文献』をさす。三

(七) マルクスの論文『モーゼル通信員の弁護』(全集、第一巻、二〇一―二二九ページ)をさす。三

(八) マルクスとA・ルーゲの編集により、パリでドイツ語で発行した雑誌『独仏年誌』をさす。一八四四年二月に一冊、合併号が出ただけである。同誌には、マルクスの著作『ユダヤ人問題によせて』、『ヘーゲル法哲学批判 序説』、エンゲルスの著作『国民経済学批判大綱』、『イギリスの状態 トマス・カーライル「過去と現在」』が発表された(いずれも、全集、第一巻所収)。これらの著作は、マルクスとエンゲルスが唯物論と共産主義へ最後的に移行したことを示していた。

同誌停刊のおもな原因は、マルクスとブルジョア急進論者ルーゲとの原則的な意見の相違であった。三

(九) マルクス『ヘーゲル法哲学批判 序説』(全集、第一巻、四二二ページ)を参照。三

(一〇) 「共産主義者同盟」――革命的プロレタリアートの最初の国際組織。「同盟」の創立にさきだって、マルクスとエンゲルスは、すべての国の社会主義者と労働者の思想的および組織的結束をめざす大々的な活動をおこなった。一八四七年の初め、マルクスとエンゲルスは、ドイツ人の秘密結社「正義者同盟」に加入した。一八四七年六月の初め、ロンドンで「正義者同盟」の大会が開かれ、その大会で同盟は「共産主義者同盟」と改称され、またこれまでのあいまいなスローガン「すべての人は兄弟である!」は、戦闘的で国際主義的なスローガン「万国のプロレタリア、団結せよ!」に代えられた。

「共産主義者同盟」の歴史については、エンゲルスの論文『共産主義者同盟の歴史によせて』(全集、第二一巻、二一〇―二二九ページ)を参照。三

(一一) 一八四八年二月のフランスのブルジョア革命をさす。四

(一二) 一八四八年三月にはじまった、ドイツとオーストリアにおけるブルジョア革命をさす。四

(一三) 『新ライン新聞』――一八四八年六月一日から一八四九年五月一九日までケルンで発行されていた。同紙の指導者はマルクスとエンゲルスで、マルクスが編集長であった。同紙は、レーニンのことばによれば「革命的プロレタリアートの機関紙として今日にいたるまで最良のものであり、その右に出るものはかつてなかった」(全集、第二一巻、六九ページ)。『新ライン新聞』については、エンゲルスの論文『マルクスと「新ライン新聞」』(全集、第二一巻、一六―二四ページ)を参照。四

(一四) 一八四八年の革命によって樹立された立憲制度に大統領と

立法議会の多数派とが違反したのに抗議して、小ブルジョアジーの党（「山嶽党」）が組織した、パリにおける国民のデモンストレーションをさす。デモンストレーションは政府によって追いちらされた。一四

（一五）　マルクスとエンゲルスの往復書簡の出版をさす。この書簡集は一九一三年九月にドイツで四巻本として出版された。標題は《Briefwechsel zwischen Friedrich Engels und Karl Marx 1844 bis 1883》herausgegeben von A. Bebel und Ed. Bernstein. Vier Bände. Stuttgart, 1913（A・ベーベル、Ed・ベルンシュタイン刊行『一八四四年から一八八三年にいたるカール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスの往復書簡』四巻本、シュトゥットガルト、一九一三年）。

一五〇〇通以上にのぼる『往復書簡』は、マルクスとエンゲルスの理論的遺産の重要な構成部分である。この往復書簡には、貴重な伝記上の情報とならんで、科学的共産主義の創始者の組織活動と理論的活動を反映する豊富な資料がふくまれている。レーニンはこの往復書簡を深く研究した。七九ページにのぼるレーニンのノートが保存されているが、このノートは、四巻本の摘要、理論上重要な手紙の抜書き、概要の簡単なテーマ別目録から成っている。四巻本の本文や余白に、いろいろな色の鉛筆で書きいれた書きこみのある往復書簡集も保存されている。

一九五九年にレーニンのこの手稿は単行本として刊行された（ソ連邦共産党中央委員会付属マルクス＝レーニン主義研究所刊『「一八四四年から一八八三年にいたるK・マルクス、F・エンゲルスの往復書簡」摘要』）。一四

（一六）　マルクスのパンフレット『フォークト君』をさす。同書は、ボナパルトの手さきのK・フォークトの中傷的な小冊子『「アルゲマイネ・ツァイトゥング」にたいする私の訴訟』にたいする回答であった（全集、第一四巻、三五五―七〇八ページを参照）。一四

（一七）　国際労働者協会の創立宣言をさす（全集、第一六巻、三―一一ページを参照）。一四

（一八）　全集、第二巻、一三〇ページを参照。一六

（一九）　全集、第二三巻a、二二ページを参照。一八

（二〇）　全集、第二〇巻、二三ページを参照。一七

（二一）　全集、第二一巻、二七八―二八一ページを参照。一七

（二二）　全集、第三二巻、二二九（原）ページを参照。一七

（二三）　全集、第二〇巻、一一、二二ページを参照。一八

（二四）　全集、第二一巻、二九八ページを参照。一九

（二五）　全集、第二〇巻、二五ページを参照。一九

（二六）　全集、第三三巻、九（原）ページを参照。二〇

（二七）　全集、第二一巻、二八五ページを参照。二〇

（二八）　全集、第二三巻a、四八七ページを参照。二〇

（二九）　全集、第一三巻、七―八ページを参照。二一

（三〇）　全集、第三一巻、二三四（原）ページを参照。二一

（三一）　全集、第四巻、一八九ページを参照。二三

（三二）　全集、第二三巻a、一〇ページを参照。二三

（三三）　同、一〇〇ページを参照。二四

（三四）　全集、第一三巻、一六ページを参照。二四

（三五）　全集、第二三巻a、二二一―二二三ページを参照。二五

（三六）　同、二一九ページを参照。二六

（三七）　同、九九五ページを参照。二六

（三八）　国民文庫版『資本論にかんする手紙』（1）、一〇八―一一

五ページを参照。三

(三九) 全集、第二五巻b、一〇二四ページを参照。三

(四〇) 全集、第二三巻a、九七五ページを参照。三

(四一) 同、八三七ページを参照。三

(四二) 全集、第七巻、八一ページを参照。三

(四三) 全集、第八巻、一九七ページを参照。三

(四四) 全集、第七巻、八一ページを参照。三

(四五) 全集、第二五巻b、一〇三四ページを参照。三

(四六) 全集、第二三巻a、六五七ページを参照。三

(四七) 同、六二九ページを参照。三四

(四八) 全集、第四巻、四九三ページを参照。三五

(四九) 全集、第二一巻、一七〇—一七一ページを参照。三五

(五〇) 全集、第二〇巻、二九〇ページを参照。三五

(五一) 全集、第二一巻、一七二ページを参照。三五

(五二) 二巻選集、第八冊、一四一ページを参照。三六

(五三) 『ノイエ・ツァイト』(『新時代』) ——ドイツ社会民主党の理論雑誌で、一八八三年から一九二三年までシュトゥットガルトで発行されていた。一九一七年一〇月まではカウツキーが、それ以後はH・クノーが編集していた。同誌にはマルクス主義の創始者のいくつかの著作がはじめて発表された。マルクスの『ゴータ綱領批判』、エンゲルスの『一八九一年の社会民主党綱領草案の批判によせて』その他がそうである。エンゲルスは同誌編集部に助言をあたえ、編集部がマルクス主義からそれていることを再三批判した。同誌には、A・ベーベル、W・リープクネヒト、R・ルクセンブルグ、F・メーリング、K・ツェトキン、ゲ・ヴェ・プレハーノフ、P・ラファルグその他、一九世紀の終りから二〇世紀初頭のドイツおよび国際労働運動の有数な活動家が寄稿していた。エンゲルスの死後、九〇年代の後半から同誌には修正主義者の論文が絶えず発表されるようになった。E・ベルンシュタインの連続論文『社会主義の諸問題』もその一つであった。この論文は、修正主義者のマルクス主義攻撃の口火をきったものであった。第一次世界大戦中には、同誌は中央派の立場をとり、事実上社会排外主義者を支持した。三六、一八〇、三九

(五四) 一八六三年四月九日付のマルクスの手紙(全集、第三〇巻、三四二(原)ページを参照)。三六

(五五) 全集、第四巻、一八八—一八九ページを参照。三七

(五六) 一八五一年二月五日付のエンゲルスの手紙をさす(全集、第二七巻、一六〇ページを参照)。三七

(五七) 一八五八年一〇月七日付のエンゲルスの手紙(全集、第二九巻、三五八(原)ページを参照)。なお二三巻選集、第六巻、四九〇ページを参照。三七

(五八) 一八六六年四月二日付のマルクスの手紙(全集、第三一巻、一九八(原)ページを参照)。三八

(五九) 一八八一年八月一一日付のエンゲルスの手紙(全集、第三五巻、二〇(原)ページを参照。三八

(六〇) 全集、第四巻、五〇六ページを参照。三八

(六一) 一八一五年いらいオーストリア、プロイセン、ロシアの共同統治のもとにおかれたクラコフ共和国におこった民主主義的な民族解放の蜂起をさす。蜂起のあいだに蜂起参加者は民族政府をつくり、同政府は封建的義務の廃止を宣言し、土地を農民に無償で引渡すことを約束した。その他のアピールで同政府は、国営の仕事場の設置、この仕事場での賃金の引上げ、市民的平等の確立を宣言した。しかし、蜂起はまもなく鎮圧された。三八

(六二) マルクス『ブルジョアジーと反革命』(全集、第六巻、一〇四―一〇五ページ) を参照。三八

(六三) 一八五六年四月一六日付のマルクスの手紙 (二三巻選集、第五巻、四九九ページを参照)。三九

(六四) 一八六三年二月五日付のエンゲルスの手紙。三九

(六五) これはそれぞれ以下の手紙である。一八六三年六月一一日、同一二日、一一月二四日、一八六四年九月四日、一二月一〇日、一八六五年一月二七日、二月三日、一八六七年一〇月二二日、一二月六日、同一七日、同一九日付のマルクスまたはエンゲルスの手紙。三九

(六六) 全集、第一七巻、二五二―二六一ページを参照。三九

(六七) 二巻選集、第八冊、一九四ページを参照。三九

(六八) 社会主義者取締法―― 一八七八年に、ビスマルクが労働運動、社会主義運動とたたかうためにドイツに施行したもの。この法律は、一八九〇年に、ますます強化していく大衆的な労働運動におされて、廃止された。四〇

(六九) これはそれぞれ以下の手紙である。一八七七年七月二三日、八月一日、一八七九年八月二〇日、九月九日、九月一〇日付のマルクスまたはエンゲルスの手紙。四〇

(七〇) 宣言『戦争とロシア社会民主党』は、始まった世界帝国主義戦争にたいするボリシェヴィキ党の立場を表明した、最初の公式文書である。党中央機関紙『ソツィアル－デモクラート』第三三号の主張として発表された。部数は一五〇〇。宣言はロシアの内外で広く普及した。党の正式の文書として国際社会主義ビューローとイギリス、ドイツ、フランス、スウェーデン、スイスの社会主義新聞にも送られた。一九一四年一一月一三日、宣言は、いくらかちぢめた形で、スイス (ショーデーフォン) の社会主義新聞『ラ・サンティネル』第二六五号に掲載された。この新聞は国際主義の立場に立っていた。宣言は、レーニンの指示にしたがって、中立諸国の社会主義者会議に送られた。

ロシアでは宣言の全文は、ペテルブルグ党委員会が一九一五年二月に発行した『プロレタールスキー・ゴーロス』(『プロレタリアの声』) 第一号に発表された。この宣言にある命題とスローガンは、ロシアの多くの工業中心地で発行されたボリシェヴィキのビラのなかに反映している。四一

(七一) 戦争のはじめから第四国会のボリシェヴィキ議員 (ア・イエ・バダーエフ、エム・カ・ムラノフ、ゲ・イ・ペトロフスキー、エフ・エヌ・サモイロフ、エヌ・ペ・シャゴフ) は、労働者階級の利益をまもるために断固として行動した。党の方針を実行して、彼らは戦費への賛成投票を拒否し、戦争の反人民的、帝国主義的性格を暴露し、労働者に戦争についての真実をつたえ、彼らをツァーリズム、ブルジョアジー、地主にたいする闘争に立ち上らせた。戦時の革命的活動のために、彼らは裁判に付されて、シベリアに流刑された。レーニンの論文『社会民主労働党議員団の裁判はなにを証明したか?』(全集、第二一巻、一六二―一六九ページ) を参照。四四

(七二) 戦争が始まってからまもなく、ボリシェヴィキのペテルブルグ委員会は、反戦闘争のために組織をつくるよう労働者と兵士に呼びかけるビラを発行し、「専制君主制をたおせ!」、「社会主義万歳!」、「民主的共和制万歳!」というスローガンをかかげた。八月、同委員会は非合法反戦ビラをふたたび発行し、組織をつくり武器をたくわえるよう呼びかけた。四四

(七三) 第二インタナショナルのシュトウットガルト大会は、一九

〇七年八月一八―二四日にひらかれた。大会には社会主義諸党と労働組合の代表八八六名が出席した。ロシア社会民主労働党は三七名の代議員を送った。ボリシェヴィキを代表して、レーニン、ルナチャルスキー、リトヴィノフ、メシコフスキー（イ・ペ・ゴリデンベルグ）、ベ・エム・クヌニャンツ、エヌ・ア・セマシコ、エム・ツハカーヤ、その他が参加した。

大会は次の問題を討議した。（一）軍国主義と国際紛争、（二）政党と労働組合の相互関係、（三）植民地問題、（四）労働者の移住、（五）婦人の選挙権。

大会のあいだにレーニンは、国際社会民主主義運動内の左翼勢力を団結させるために大々的に活動し、日和見主義者、修正主義者にたいして断固としてたたかった。レーニンの組織した、左派の代表者（ツェトキン、ルクセンブルグ、エリ・トィシカ、G・レーデブールその他）との会議は、帝国主義時代の国際社会主義運動内の革命的マルクス主義者結集の第一歩であった。レーニンは主要な問題である「軍国主義と国際紛争」の委員会の活動に参加した。ベーベルの提出した決議案を討議するさい、レーニンは、ポーランド社会民主主義者の代表の支持を受けて、修正案を出して、決議案を革命的マルクス主義の精神に立って根本的に変更させた。

この決議の採択は、国際労働運動における日和見主義的一翼にたいする革命的一翼の大勝利であった。四五

（七四）　**コペンハーゲンの国際社会主義者大会**（第二インタナショナル第八回大会）――一九一〇年八月二八日から九月三日までひらかれた。八九六名の代表が出席した。ロシア社会民主労働党は、レーニン、プレハーノフ、コロンタイ、ルナチャルスキーその他を代表として送った。主要な問題の予備的審議と決議作成のために五つの委員会が設置され、レーニンは協同組合委員会にはいった。国際舞台で革命的マルクス主義者を結束させるために、レーニンは、大会中に、大会に出席していた左派社会民主主義者の会議をひらいた。戦争とたたかう問題についての決議『仲裁裁判と軍備縮小』のなかで、大会はシュトゥットガルト大会の決議『軍国主義と国際紛争』を確認した。この後者の決議にはレーニンとルクセンブルグが修正案を提出したが、それは戦争によってひきおこされた経済上、政治上の危機を利用して、ブルジョアジーを打倒することを要求していた。コペンハーゲン大会の決議は、社会主義政党とその議会代表に、自国政府に軍備縮小と国際間の紛争を仲裁裁判によって解決することを要求する義務をおわせ、すべての国の労働者に戦争の危険に抗議するよう呼びかけた。四五

（七五）　**バーゼル大会**――一九一二年一一月二四―二五日の臨時国際社会主義者大会。せまりつつある世界帝国主義戦争の危険（この危険はバルカン戦争が始まってからはいっそう大きくなった）とたたかう問題を解決するために招集され、五五五名が出席した。ロシア社会民主労働党は、六名の代表を送った。大会開会の日には、大規模な反戦デモンストレーションと国際集会がひらかれた。

一一月二五日、大会では全員一致して戦争についての宣言が採択された。宣言は、せまりつつある世界戦争の脅威について諸国民に警告し、この戦争の略奪目的をあばきだし、各国の労働者に戦争の脅威に反対して平和のために断固としてたたかい、「資本主義的帝国主義にプロレタリアートの国際連帯を対置する」よう呼びかけた。宣言は、帝国主義戦争が起きた場合には、戦争によって生じた政治経済的危機を利用して、社会主義革命のためにたたかうよう勧告した。

第二インタナショナルの指導者（カウツキー、ヴァンデルヴェルデその他）は反戦宣言の採択に賛成したが、世界帝国主義戦争が始まると、バーゼル宣言も国際諸大会の反戦決議も忘れてしまって、自国の帝国主義政府の側に立った。四五

（七六）　連合貴族会議――一九〇六年五月、県貴族会の第一回代表者大会で結成された、農奴主的地主の反革命組織で、一九一七年一〇月まで存続していた。指導者は伯爵ア・ア・ボブリンスキー、大公エヌ・エフ・カサトキン－ロストフスキー、伯爵デ・ア・オルスフィエフ、ヴェ・エム・プリシケヴィチその他であった。レーニンはこの評議会を「連合農奴主評議会」と呼んだ。連合貴族評議会は、事実上半政府機関になり、政府に農奴主の利益の擁護を目的とする方策をとることを命じた。評議会の大多数は参議院や黒百人組の指導機関にはいった。四八

（七七）　ラズノチーネツ――一九世紀中葉のロシアにおける、聖職者、官吏、町人あるいは農民等の雑多な階層の出身者で、貴族には属しない、平民のインテリゲンツィア。四九

（七八）　チェルヌィシェフスキーの小説『プロローグ』のなかのことば。四九

（七九）　エンゲルス『亡命者文献』から（全集、第一八巻、五二〇ページを参照）。五〇

（八〇）　マルクス＝エンゲルス『声明』（全集、第一六巻、七六ページを参照）。五一

（八一）　論文『よその旗をかかげて』は、はじめ「プリリーフ」出版所の『論集』に発表されたが、そのさい『論集』の編集者は原文を改訂した。五三

（八二）　『ナーシェ・デーロ』（『われわれの事業』）――メンシェヴィキ的月刊雑誌で、ロシア国内における解党派、社会排外主義者の主要な機関誌。一九一四年一〇月に閉鎖された雑誌『ナーシャ・ザリャー』にかわって、一九一五年にペテルブルグで発行されていた。五三

（八三）　マルクスとエンゲルスは、一八四八―一八七六年のあいだに、なんどか当時あった戦争――（一）一八五四―一八五五年のクリミア戦争、（二）一八五九年のイタリア＝オーストリア戦争、（三）一八七〇―一八七一年のフランス＝プロシア戦争――について自分たちの意見を述べる機会があった。この点でとくに重要なのは、マルクスからエンゲルスへの一八五四年五月九日付の手紙、おなじくルクスへの一八七〇年八月八日付と八月一七日付の手紙、エンゲルスからマルクスへの一八七〇年八月一五日付と九月一二日付の手紙、マルクスからクーゲルマンへの一八七一年四月一二日付と同一七日付の手紙（マルクス『クーゲルマンへの手紙』国民文庫、一五三―一五六ページ）である。五六

（八四）　メーリングとは反対に――一八五九年のイタリア＝オーストリア戦争に関連して、ドイツの民族的統一の問題について、マルクスとラッサールとのあいだに論争がおこなわれた。これについてメーリングは『カール・マルクス』のなかで、彼らのあいだにはなにか原則的な意見の相違があったのではなくて、事実にもとづく諸前提について判断の対立があっただけだといっている（栗原佑訳、大月書店版、三五一ページを参照）。五七

（八五）　次の戦争をさす。――一八五四―一八五五年のクリミア戦争、一八五九年のイタリア＝オーストリア戦争、一八六四年のシュレスウィヒ－ホルシュタイン戦争、一八六六年のプロシア＝オーストリア戦争、一八七〇―一八七一年のフランス＝プロシア戦争。六三

(八六)　ポシビリスト（可能主義者）——一八八二年にフランス労働党から脱落した小ブルジョア的、改良主義的分子。労働者階級の行動を、資本主義のもとで「可能な」（「ポッシブルな」）枠内にとどめようとしたので、この名がある。六七、一六八

(八七)　「オープシチェエ・デーロ」派——ブルガリア社会民主党内の日和見主義的、社会排外主義的部分。雑誌『オープシチェエ・デーロ』を出していた。また「寛容派」という名称でも知られている。

「テスニャキ」（「偏狭派」）——革命的なブルガリア社会民主労働党のこと。社会民主党が分裂したあと一九〇三年に創立された。「テスニャキ」の創立者で指導者であったのはデ・ブラゴエフで、のちにゲ・ディミトロフ、ヴェ・コラロフその他が首脳になった。第一次世界大戦のときには帝国主義戦争に反対した。一九一九年にはコミンテルンに加入し、ブルガリア共産党を結成した。六九

(八八)　『デイリー・シティズン』（《The Daily Citizen》）——イギリス労働党、フェビアン派、イギリス独立労働党のブロックの日刊新聞。一九一二年から一九一五年までロンドンで出ていた。六九

(八九)　『デイリー・ヘラルド』（《The Daily Herald》）——イギリス社会党の日刊の機関紙。一九一二年からロンドンで出ているが、現在では自由党系の新聞となっている。六九

(九〇)　フェビアン派——フェビアン協会は、一八八四年にイギリスでブルジョア・インテリゲンツィアの一群によって創立された改良主義的な結社。この協会の名は、決戦を回避する戦術をとったことで名高い古代ローマの司令官ファビウス・クンクタトール（ぐずぐずする者、の意味）の名にちなんでいる。フェビアン派の人たちは、プロレタリアートを階級闘争からそらし、こまごました改良の道によって資本主義から社会主義に移行することを説教した。第一次世界大戦のときには、この一派は社会排外主義の立場をとった。

フェビアン派の見解の批判については一八九三年一月一八日付のエンゲルスのゾルゲあての手紙（選集、第一七巻、二一八―二二〇ページ）およびレーニンの諸著作『「……F・エンゲルス、K・マルクスその他からF・A・ゾルゲその他への手紙」のロシア語訳序文』（全集、第一二巻、三七一―三七二ページ）、『ロシア革命における社会民主党の農業綱領』（全集、第一五巻、一六二ページ）、『イギリス人の平和主義とイギリス人の理論ぎらい』（全集、第二一巻、二六三―二六四ページ）を参照。七〇、二六八

(九一)　イギリス労働党（Labour Party）——一九〇〇年に、議会内に労働者の代表団（「労働者代表委員会」）をつくる目的で、労働組合、社会主義諸党およびグループの合同体として創立された。この委員会は一九〇六年にイギリス労働党と改称された。労働党は、イデオロギーと戦術の点で日和見主義的組織であり、ブルジョアジーとの階級協調の政策をとっている。第一次世界大戦のときには、党の指導者たちは社会排外主義の立場をとった。

党は一九二四年、一九二九年、一九四五年の三回にわたって政権をとり、内閣を組織したが、その政策は基本的には自由党や保守党の政策と異ならなかった。一九四五年に政権をとったときには、党は「社会化」政策を推しすすめたが、これも社会主義とは縁遠いものであった。七〇

(九二)　これは、レーニンが彼の『哲学ノート』の一冊に、「F・ラッサールの著書『エフェソスの暗き人ヘラクレイトスの哲学』の摘要」と、「アリストテレスの著書『形而上学』の摘要」とのあいだに書きこんだ覚え書である。レーニンはこれを一九一五年にベル

ンで書いた。七一

(九三) 『哲学ノート』所収の「F・ラッサールの著書『エフェソスの暗き人ヘラクレイトスの哲学』の摘要」。全集、第三八巻、三二〇ページを参照。七三

(九四) エンゲルス『反デューリング論』第一篇第一三章、大月書店、新訳研究版、一五七―一六五ページを参照。七三

(九五) ここでレーニンは、シュヴェーグラーのドイツ語訳をそのままに引用し（ただし、「家一般」はロシア語でレーニンが書きいれたもの）、さらにシュヴェーグラー校訂のギリシア語原文を引用している。

《denn natürlich kann man nicht der Meinung sein, daß es ein Haus—дом вообще—gebe außer den sichtbaren Häusern.》

《οὐ γὰρ ἂν θείημεν εἶναί τινα οἰκίαν παρὰ τὰς τινὰς οἰκίας》七三

(九六) J・ディーツゲンが、たとえば著書『哲学小論集』、シュトゥットガルト、一九〇三年、二〇四ページに、「誇大に」、「法外に」、「過度に」を意味する用語 überschwenglich を使用したことをさしている。ディーツゲンはこの用語をつかうにあたって、「絶対的なものと相対的なものを過度にわけることはできない」と述べている。『人間の頭脳活動の本質』、モスクワ、一九〇七年、八八ページのなかでJ・ディーツゲンが精神と感性的世界との差異の度合いについて述べているところを参照せよ。七五

(九七) ドイツ社会民主党のケムニッツ大会——一九一二年九月一五―二一日にひらかれた。帝国主義の問題および戦争にたいする社会主義者の態度の問題にかんする決議は、反対三、棄権二にたいする圧倒的多数で可決された。『コムニスト』編集局はこの決議を掲載するにあたって、当編集局は「けっして決議のすべての主張（たとえば軍備縮小について）に賛成するものではなく」、「決議を記録文書としてかかげるにすぎない」と言明した。七七

(九八) 『ジーズニ』(『生活』)——エス・エル党の新聞。一九一五年三月に禁止された『ムィスリ』にかわって、その月から一九一六年一月まで、はじめはパリで、のちにはジュネーヴで発行されていた。八九

(九九) 箱のなかの男はチェーホフの小説『箱のなかの男』からきた慣用語。狭い習俗的な日常生活の枠にとじこもって、革新を恐れる人間をさす。九五

(一〇〇) 郭公は雄鶏からほめられたお礼に雄鶏をほめる——クルィロフの『寓話』のなかの『かっこう鳥と雄鶏』からとったことば。かっこう鳥が雄鶏の歌声をほめた。すると雄鶏はかっこう鳥の歌声をほめかえした。そうするとかっこう鳥はさらにほめかえす……。こうして切りなくほめあっているところに雀が来あわせて、こういった、「ご両人！ あんたがたはかすれ声をしぼっていくらおたがいにほめあったって、あんたがたの音楽はまずいよ！……」。仲間ぼめのみっともないことを諷刺したもの。一〇六

(一〇一) 『ソシアリスム』(『社会主義』)——フランスの社会主義者ゲードが編集し発行していた雑誌。一九〇七年から一九一四年六月までパリで出ていた。一〇六

(一〇二) 『新時代』(『ノヴォ・ヴレーメ』)——ブルガリア社会民主党の革命的左翼(「テスニャキ」)の隔週刊の理論機関誌。ブラゴエフが編集していた。一九二三年にブルガリアの反動政府によって禁止された。一一三

(一〇三) ヘロストラトス式に有名な——ヘロストラトスは古代ギリシアのエフェソスの人で、自分の名まえを不朽のものにしたいという希望から、紀元前三五六年に、当時尊崇のまとであったエフェソスのアルテミス大神殿に放火した。一二四

(一〇四) ドイツの「左派」の檄——K・リープクネヒトの執筆した檄『主要な敵は自国にいる』のこと。一二五

(一〇五) 『プロシア年報』(《Preussische Jahrbücher》)——保守的な月刊雑誌。一八五八年から一九三五年までベルリンで出ていた。

(一〇六) 『ラボーチャヤ・ムィスリ』(『労働者の思想』)——「経済主義者」の新聞。一八九七—一九〇二年に出ていた。国際日和見主義のロシア的変種としてのこの新聞の見解の批判を、レーニンは新聞『イスクラ』に発表した諸論文や著書『なにをなすべきか?』のなかでおこなっている。一三五

(一〇七) 『ラボーチエエ・デーロ』(『労働者の事業』)——「経済主義者」の雑誌で、「在外ロシア社会民主主義者同盟」の不定期機関誌。一八九九—一九〇二年にジュネーヴで発行されていた。この新聞の見解の批判を、レーニンは新聞『イスクラ』に発表した諸論文や著書『なにをなすべきか?』でおこなっている。一三五

(一〇八) 小冊子『戦争と社会主義』は一九一五年九月にドイツ語で出版され、ツィンメルヴァルド会議の代議員に配布された。一九一六年にはフランス語訳が出版された。一三

(一〇九) 『ノーヴォスチ』(『ニュース』)——エス・エル党の日刊新聞。一九一四年八月から一九一五年五月までパリで発行されていた。一四九

(一一〇) 『プロレタールスキー・ゴーロス』(『プロレタリアの声』)——ロシア社会民主労働党ペテルブルグ委員会の非合法の機関紙。一九一五年二月から一九一六年一二月まで発行されていた。全部で四号出た。第一号に、党中央委員会の宣言『戦争とロシア社会民主党』が掲載された。一五〇

(一一一) 国際青年会議——戦争にたいする態度を審議するため、一九一五年四月四—六日ベルンでひらかれた。会議には、ロシア、ノールウェー、オランダ、スイス、ブルガリア、ドイツ、ポーランド、イタリア、デンマーク、スウェーデンの一〇ヵ国の青年組織の代表が出席した。会議は、国際青年デーを毎年もよおすという決議を採択し、国際社会主義青年ビューローを選出した。このビューローは、会議の決定にもとづいて雑誌『ユーゲント・インテルナツィオナーレ』(『青年インタナショナル』)を発刊したが、これにはレーニンやリープクネヒトも参加した。一五五

(一一二) フロンドばりの反抗——フロンド派は一七世紀の中葉のフランスの反王党派。この一派は、絶対王制をたおすことを目的とするものではなく、個人的な不平、不満を動機として王党に反抗したにとどまる。一五六

(一一三) 「トリブーネ」派——オランダ社会労働民主党の左翼グループ。一九〇七年から雑誌『トリブーネ』(『演壇』)を出していたのでこの名がある。一九〇九年にこの派は党から除名され、オランダ社会民主党を結成した。この派はオランダの労働運動の左翼を代表していたが、徹底した革命政党ではなかった。

一九一八年にこの派はオランダ共産党の結成に参加した。そして、『トリブーネ』は、ひきつづいて共産党の機関紙となった。これは三〇年代の初めから一九四〇年まで『フォルクスダハブラット』(『人民新聞』)という名称で発行されていた。一五六

(一一四) 『ルーチ』(『光』)——解党派メンシェヴィキの日刊新聞で、

一九一二年九月から一九一三年七月までペテルブルグで発行されていた。レーニンのことばによれば、それは「ブルジョア中の裕福な紙友たちの資金」で出されていた。一六三

(一二五)『マルクス主義と解党主義。現在の労働運動の基本的諸問題にかんする論文集。第二部』は、一九一四年七月に党出版所「プリボイ」から出版された。これには、解党派に反対したレーニンの一連の論文が収録された。レーニンがここで念頭においているのは、『労働者階級と労働者出版物』(全集、第二〇巻、三九二—三九九ページ)と『ロシア社会民主労働党国会議員団の結成にたいする労働者の反響』(同、五七九—五八七ページ)の二つの論文である。一六三

(一二六)『ライプチヒ人民新聞』(『ライプチガー・フォルクスツァイトゥング』)——ドイツ社会民主党左派の機関紙。一八九四年から一九三三年まで出ていた。かなりのあいだメーリングやルクセンブルグが編集の仕事にたずさわっていた。一九一七年から一九二二年までは独立社会民主党の機関紙であったが、社会民主党との合同後は右翼社会民主主義者の機関紙となった。一六三

(一二七)『インテルナツィオナーレ・コレスポンデンツ』(『国際通信』)——国際政治と国際労働運動の諸問題にかんする、ドイツの社会排外主義派の週刊誌。一九一四年から一九一七年までベルリンで出ていた。一六六

(一二八)『ソヴレメンヌイ・ミール』(『今日の世界』)——月刊の文学、科学、政治雑誌。一九〇六年から一九一八年までペテルブルグで出ていた。これには、プレハーノフをふくむメンシェヴィキが親しく参加していた。プレハーノフの党擁護派メンシェヴィキとのブロックをむすんでいた時期には、ボリシェヴィキもこれに寄稿した。しかし第一次世界大戦のときには、同誌は社会排外主義者の機関誌となった。一六六

(一二九)『ソツィアル−デモクラート』(『社会民主主義者』)——非合法新聞、ロシア社会民主労働党の中央機関紙。一九〇八年二月から一九一七年一月まで発行されていた。ボリシェヴィキが準備し、部分的にはヴィルノの個人印刷所ですでに印刷されていた第一号は、ツァーリの保安部によって没収された。まもなくペテルブルグで新聞発行の次の企てがなされた。印刷された部数の大部分も憲兵の手におちた。その後新聞の印刷は国外に移され、第二—三二号(一九〇九年二月—一九一三年一二月)はパリで、第三三—五八号(一九一四年一一月—一九一七年一月)はジュネーヴで発行された。全部で五八号発行され、そのうち五号には付録がついた。

編集局は、第五回(ロンドン)党大会で選出された党中央委員会の決定にしたがってボリシェヴィキ、メンシェヴィキ、ポーランド社会民主党の代表からなっていた。新聞の事実上の指導者はレーニンであった。彼の論文が同紙の中心的な地位を占めていた。同紙には八〇以上のレーニンの論文や覚え書が発表された。

『ソツィアル−デモクラート』編集局内でレーニンは、一貫したボリシェヴィキ的方針のために解党派メンシェヴィキとたたかった。解党派にたいするレーニンの非妥協的な闘争の結果、一九一一年六月、マルトフとダンは編集局から脱退した。一九一一年一二月からはレーニンが新聞を編集した。

苦しい反動期と革命運動の新しい高揚期に『ソツィアル−デモクラート』は、ボリシェヴィキの解党派、トロツキー派、召還派にたいする闘争、非合法マルクス主義党を維持し、その統一をかため、大衆と党の結びつきをつよめるための闘争で大きな意義をもっていた。

第一次世界大戦の時期には、ボリシェヴィキ党の中央機関紙であ

る同紙は、戦争、平和、革命の問題についてのボリシェヴィキのスローガンを宣伝するうえで重要な役割を果たした。

第一次世界大戦期の同紙の功績を高く評価して、レーニンはのちにこう書いている。同紙の論文を研究せずには「国際社会主義革命の思想と一九一七年一〇月二五日にこの思想がおさめた最初の勝利との発展を理解する」ことはできない、と（全集、第二七巻、二二五ページ）。一六六

（一三〇）　ロシア社会民主労働党在外支部会議――一九一五年二月一四―一九日（二月二七日―三月四日）、ベルンでひらかれた。レーニンの提唱でひらかれ、全国協議会としての意義をもっていた。党中央委員会、党中央機関紙『ソツィアル－デモクラート』、社会民主党婦人組織の各代表、在外組織――パリ、ツューリヒ、ベルン、ローザンヌ、ジュネーヴ、ロンドン――の代表、ボジ・グループの代表が出席した。レーニン、クルプスカヤ、イ・アルマンド、ヴェ・エム・カスパロフ、ゲ・エリ・シクロフスキー、エフ・イリイン、エヌ・ヴェ・クルイレンコ、イ・コロンブリュム、エム・エム・ハリトノフ、ゲ・ヤ・ベーレニキー、ジノヴィエフ、ブハーリンその他が出席した。ベルン支部の全員、ローザンヌ支部、ボジ・グループの一部のメンバーは来賓としてくわわった。レーニンは党中央委員会と中央機関紙の代表であった。彼は会議の活動全体を指導した。会議の主要議題は、戦争と党の任務の問題であった。レーニンは党の宣言『戦争とロシア社会民主党』の諸命題をくわしく説明した。

「ヨーロッパ合衆国」のスローガンの問題は活発な議論を呼んだ。この討論は一面的な政治的性格をおびていたので、問題の解決は問題の経済的側面が出版物で広く討議されるまで延期された。しかしこうした討議はおこなわれなかった。問題は、『ソツィアル－デモクラート』第四〇号にレーニンの論文『ヨーロッパ合衆国のスローガンについて』が発表されたことで、解決された。全集、第二一巻、三四九―三五三ページ参照。

レーニンの報告にしたがって採択された決議のなかで、ベルン会議は、帝国主義戦争のもとでのボリシェヴィキ党の任務と戦術とを規定した。

会議はまた決議『ロシア社会民主労働党在外組織の任務』、『「植民地」問題にたいする態度』、『中央機関紙のための募金について』、を採択した。会議は、党在外組織指導委員会の新しいメンバーを選出した。

レーニンはベルン会議を重視して、その決定がいっそう普及するように多くの努力を払った。レーニンは、これらの決定が党の原則と戦術を正しく述べていると指摘した。会議の主要決議は、レーニンの序文をつけて、全部『ソツィアル－デモクラート』に発表され、またレーニンの小冊子『社会主義と戦争』（ロシア語とドイツ語で出版）の付録として発表された。会議の決議はまた単行のリーフレットとしてフランス語で出版され、ツィンメルヴァルド社会主義者会議の代議員に配布され、国際社会主義運動の左翼分子に送られた。一六六

（一三一）　『プリズィフ』（『呼びかけ』）――メンシェヴィキとエス・エルの週刊の機関紙。一九一五年一〇月から一九一七年三月までパリで発行されていた。レーニンがここでいっているのは、一九一五年一〇月一七日号に掲載されたプレハーノフの論文『革命の二つの方向』のことである。一七三

（一三二）　一九〇九年にベルリンで出版されたカウツキーの小冊子

『権力への道』のこと。一八〇

（一二三）　ドレフュス事件——フランス軍部の反動的な王朝派の一団が一八九四年におこした挑発的な訴訟事件。参謀本部の将校ユダヤ人ドレフュスがスパイと売国行為のかどで告発された。軍事裁判によって、ドレフュスは終身禁錮の判決をくだされた。フランスの世論は憤激し、事件の再審を要求する社会的運動が、共和派と王朝派との闘争のうちに展開された。その結果、結局、一九〇六年にドレフュスの無罪が認められた。

レーニンはドレフュス事件を、「反動的軍閥のやる数千数百の悪行の一つ」と言った。一八四

（一二四）　ツァーベルン事件——一九一三年一一月にアルサスのツァーベルンでおきた事件。プロイセンの貴族で青年士官のフォルストネルがアルサスの住民を口ぎたなくののしったのが誘因になって、主としてフランス人からなるその地方の住民は、プロイセンの軍閥の圧制にたいして憤激を爆発させた。この事件について、レーニンは『ツァーベルン』（全集、第一九巻、五五三—五五五ページ）という論文を書いている。一八四

（一二五）　文化的民族自治——各民族は、それに所属する個々人が住んでいる地域とは無関係に、国家的に認められた単一の団体を形成し、この団体がその民族の文化事業を管轄する、という考え。オーストリアの社会民主主義者レンナーとバウアーが唱道したもので、ロシアではブンドがこの考えを実行にうつすことを要求していた。この思想の反動性の批判については、レーニンの論文『「文化的民族的自治」について』（全集、第一九巻、五四二—五四六ページ）、『民族問題にかんする論評』（全集、第二〇巻、三—三九ページ）を参照。一八五

（一二六）　アウギアスの牛小屋——ギリシア神話のうちの物語で、エリスの国王アウギアスの牛小屋には三千頭の牛がおり、三〇年間掃除されずに放置されていた。英雄ヘラクレスが二つの河の河水をそそぎこんで、一日でこの小屋を掃除した。「アウギアスの牛小屋」とは非常な汚穢のことである。一八九

（一二七）　『グロッケ』（『鐘』）——隔週刊雑誌。一九一五—一九二五年に、はじめはツューリヒで、のちにはベルリンで、ドイツ社会民主党員パルヴスによって発行されていた。一八九

（一二八）　民族自決権を確認する決議——一九一三年一〇月六—一四日（新暦）に、クラコフの近くのポロニノ村でひらかれた、ロシア社会民主労働党中央委員会と党活動家との会議（いわゆる「夏の」会議あるいは「八月」会議）で採択された、民族問題にかんする決議のこと。これはレーニンが書いたもので、全集、第一九巻（四五四—四五六ページ）におさめられている。一九七

（一二九）　アルンヘムの大会——オランダ社会民主党の大会。一九一六年一月九日にひらかれた。一九七

（一三〇）　『アヴァンティ！』（『前進！』）——イタリア社会党の日刊の機関紙、一八九六年一二月に創刊された。第一次世界大戦のときには、改良主義者と手を切ることなく、不徹底な国際主義的立場をとった。いまもイタリア社会党の機関紙として発行されている。一九六

（一三一）　一九一六年二月一〇日付の国際社会主義委員会の回章——ツィンメルヴァルド合同のすべての党とグループにあてた国際社会主義委員会（I・S・K）の回章は、一九一六年のベルリン所在I・S・Kの二月会議で、満場一致で採択された。レーニンを先頭とするロシア社会民主労働党中央委員会の代表団は、この会議の席上、同代表団はこの回章をツィンメルヴァルドの第一回国際社会主義者

会議の諸決定とくらべて一歩前進したものとみとめるが、すべての基本的主張において満足なものとは考えない、と声明した。回章は一九一六年二月二九日付のI・S・K『通報』第三号および一九一六年三月五日付の『ソツィアル－デモクラート』第五二号に掲載された。二〇一

（一三二）国際社会主義委員会の公けの約束——一九一五年九月二九日付のI・S・Kの公式声明のこと。これは同年一一月二七日付のI・S・K『通報』第二号に発表された。この声明のなかで、I・S・Kは、ツィンメルヴァルド会議の決定にさからって同委員会は、ハーグにある国際社会主義ビューローがその活動を復活するならすぐに、解散する用意があると報じた。こうして、同委員会は第二インタナショナルの復活を助成する道に立った。二〇一

（一三三）著書『資本主義の最高の段階としての帝国主義』——レーニンは本書を一九一六年一月から六月のあいだに、スイスのチューリヒで書いた。

一九世紀末——二〇世紀初頭の資本主義の新しい諸現象については、レーニンはこれまでもいくつかの論文のなかで指摘していたが、一九一四年八月に世界大戦がおこると、この戦争の真の性格を解明することが、共産主義運動の前進のために欠くことのできない必要事となった。

レーニンはこうして、一九一五年なかごろから、帝国主義にかんする系統的な研究に着手した。彼は当時スイスのベルンにいたが、彼はそこで数多くの資料を渉猟して、多数の抜粋、要綱、覚え書、統計表その他を作成した。これらの資料はのちに一九三九年に『帝国主義論ノート』という標題で、モスクワのマルクス＝エンゲルス＝レーニン研究所の手で公刊された（この『ノート』は、レーニン全集では第三九巻に収められている）。

一九一六年一月初めに、レーニンは、前年の春にできたばかりのペトログラードの「パールス」出版社から、帝国主義にかんする小著を書くよう申入れを受けた。彼はそれに承諾をあたえるとともに、二月には居をチューリヒにうつして、さらに資料の集収と研究をつづけながら、本書の執筆に従事した。

レーニンはできあがった原稿を、一九一六年六月一九日（七月二日）にフランスにいたエム・エヌ・ポクロフスキーに送ったが、これが届かなかったため、もう一度送りなおした。これを入手した出版社は、印刷全紙五枚分の原稿を三枚分に圧縮することを申入れてきた。しかしレーニンはこの申入れを拒否した。

そのため「パールス」出版社はレーニンの原稿をやむなく印刷にまわしたが、しかしそのさい、この出版社を牛耳っていたメンシェヴィキ的分子は、レーニンの原稿から、マルトフその他のメンシェヴィキの日和見主義をきびしく批判した部分を削除したり、個々の用語をかってに変えたりした。また標題そのものも『資本主義の最新の段階の帝国主義』と変えられた。そのうちに一九一七年の二月革命がおこり、四月にはレーニンもペトログラードに帰ってきたが、レーニンはなによりも本書を公刊することを重要と考えたらしく、四月二六日付であらたに序文を書いて渡した。そして本書はやっと一九一七年なかごろに出版された。

レーニンの原稿どおりの『帝国主義論』は、やっと一九二九年に『レーニン全集』第二版第一九巻で公刊された。二〇三

（一三四）『フランス語版とドイツ語版への序文』——どういう理由からか、このフランス語版とドイツ語版は、レーニンがこの序文を書いた当時出版されなかった。これはやっと一九二一年一〇月に、

雑誌『共産主義インタナショナル』の第一八号にはじめて発表された。三〇四

（二三五）　ブレスト－リトフスクの講和——一〇月革命の勝利の瞬間から、ソヴェト政府は公正な民主主義的講和について交戦諸国と交渉を開始した。イギリス、フランスはソヴェト政府の提唱を拒絶したので、ソヴェト政府はドイツ、オーストリアと単独に講和することにきめ、その交渉を一九一八年二月にブレスト－リトフスクではじめた。生まれたばかりのソヴェト共和国は、息つぎの時間をつくってソヴェト権力を強化するために、たとえ犠牲をはらってもこの講和を必要とした。しかしメンシェヴィキやエス・エル、白衛派などはこぞって講和に反対した。この会談はトロツキーの背信行為によっていったん決裂し、のちに同年三月に、ドイツのいうがままのもっと耐えがたい屈辱的な条件で講和が成立した。三〇六

（二三六）　ヴェルサイユの講和——第一次世界大戦の後始末をつけるための講和会議は、一九一九年一—六月にパリでひらかれた。この会議は、イギリス、アメリカ、フランス、イタリア、日本のいわゆる五大国が敗戦諸国の犠牲において世界の再分割をおこなうためのものであった。この会議を実際に指図したのはロイド－ジョージ（英）、ウィルソン（米）、クレマンソー（仏）の三巨頭であった。六月二九日にヴェルサイユ宮殿で調印された条約は、ドイツからあらゆる植民地領土を取りあげたうえ、ドイツに天文学的数字の賠償を支払うことを強要した。このヴェルサイユ条約の第一部は、この不公正な帝国主義的な性格の「平和」を維持することを目的とした国際連盟の創立を規定していた。ソヴェト・ロシアはもちろんこの会議に参加しなかった。三〇六

（二三七）　ウィルソン主義——アメリカ大統領ウィルソンは、ヴェルサイユの平和会議にあたって、いわゆる「ウィルソンの一四ヵ条」の原則を提案した。この第一条で彼は国際連盟の創設を提唱し、第二条で民族自決権をとなえていたが、しかし結局は、五大帝国主義国で世界の再分割をおこなうことを目的とするものにほかならなかった。三〇六

（二三八）　バーゼル宣言——一九一二年一一月二四—二五日にバーゼルで開かれた第二インタナショナルの臨時大会で採択された有名な宣言。これは、切迫している戦争が帝国主義的性格の世界戦争であることを強調し、万国の社会主義者が国際主義の立場に立ってあくまでも戦争にたいして反対するように訴えるとともに、さらに、もし不幸にも戦争がおきた場合には諸国の労働者階級は政府の行為にたいして反逆するであろうと警告した。三〇六

（二三九）　第二インタナショナル——一八八九年にフランス革命一〇〇周年を記念して、諸国の社会主義者がパリでひらいた大会によって創立された。はじめのうちはエンゲルスの指導もあったが、彼の死後ベルンシュタインが修正主義をもちこんだ。カウツキーたちはこれにたいしてマルクス主義の「正統」をまもってたたかったが、彼らも帝国主義の本質を理解できなかったので、この組織はついに革命的な組織になることができなかった。第一次世界大戦がおこると、これに加入していた主要な諸国の社会主義政党は——ボリシェヴィキ党をのぞき——祖国防衛主義の立場に立つにいたった。こうしてそれはそのときをもって不名誉な崩壊をとげた。三〇六

（二四〇）　本選集には収録しない。宣言の要旨は前出の注一三八を参照。なお、宣言の全文は国民文庫版の『帝国主義論』に訳載されている。三〇六

（二四一）　黄色インタナショナル——第二インタナショナルの再興

をはかった西ヨーロッパ諸国の社会主義諸党の指導者たちがベルンに結成した国際組織。黄色は赤色に対応する形容詞。二〇七

（一四二）ドイツ独立社会民主党――一九一六年三月に国会で軍事予算に反対投票したためにドイツ社会民主党から除名されたカウツキー以下一七名は、一時、院内活動のため「社会民主党同志団」をつくったのち、一九一七年四月にスパルタクス団（注一四七を参照）と合同してあらたにドイツ独立社会民主党を結成した。しかし一九一八年一一月のドイツ革命を契機として、彼らはスパルタクス団とはなれた。一九二〇年一〇月のハレ大会で党内の左派がスパルタクス団にはしったのち、残党はますます反革命的性格を明らかにし、一九二二年九月にドイツ社会民主党と合同した。二〇八

（一四三）第三インタナショナル――共産主義インタナショナル、略称――コミンテルン。レーニンの主唱によって一九一九年三月六日に共産主義を指導原理としてモスクワで結成された。諸国の共産党の統一的指導機関で、一九三五年にはソ連邦共産党をはじめ七六の党が加盟していた。第二次世界大戦のさなか、一九四三年五月一五日に解散を決議した。二〇八

（一四四）ボリシェヴィキ――ソ連邦共産党の前身ロシア社会民主労働党内のレーニン派の総称。一九〇三年の第二回党大会（党は事実上はこのときに結成された）で、レーニン派と反レーニン派が鋭く対立したが、前者が多数を占めたので、これ以来レーニン派はボリシェヴィキ（多数派）と呼ばれるようになった。その後ボリシェヴィキは、真の革命的社会民主主義者＝レーニン主義者＝共産主義者の代名詞としてもちいられるにいたった。二〇八

（一四五）メンシェヴィキ――第二回党大会でボリシェヴィキに対立して敗れたメンシェヴィキ（少数派）は、口さきでは革命をとなえながら、本質的には改良主義者、日和見主義者で、第一次世界大戦にさいしては祖国防衛主義の立場に立って帝国主義戦争に協力した。さらに一〇月社会主義革命の勝利後は、ボリシェヴィキ勢力に反対するために白色反革命軍と直接に手をにぎるにいたった。二〇八

（一四六）エス・エル（社会革命党員）――一九〇一年に結成されたナロードニキ的政党で、社会的テロルを主要な闘争手段としていた。二〇八農民を基盤として、ロシアの社会運動で一時かなりの役割を演じた。しかしボリシェヴィキが権力をにぎり、農村でも社会主義革命を遂行しようとすると、これにたいしてテロルをもちい、さらに白衛軍と協力して反革命行動をとるにいたった。二〇八

（一四七）スパルタクス団――第一次大戦がおこったあと、ドイツ社会民主党内の国際主義者たちは党主流の日和見主義的・社会排外主義的傾向に反対してたたかい、そのため党から除名された。彼らK・リープクネヒト、ルクセンブルグ、メーリング、ツェトキン、ピークらのグループは、のちにスパルタクス団と呼ばれた。これが母体となって、一九一八年一二月にドイツ共産党が形成された。二〇八

（一四八）「コミューン派」と「ヴェルサイユ派」――一八七一年のパリ・コミューンのとき、パリの労働者たちは、自分たちの革命政府の樹立と自由なフランスのために、コミューンに拠って英雄的にたたかった。これに反して、旧政府首脳ティエールらブルジョアジーの代表者たちは、ヴェルサイユにのがれてそこに売国的偽政府をつくり、自分たちの階級支配を維持するために、きのうまでの敵であるプロイセン侵略軍と恥ずべき講和をむすび、その支持のもとにパリ・コミューンを攻撃し弾圧した。二〇九

（一四九）アメリカ＝スペイン戦争――一八九〇年代の後半にスペインの海外植民地に反乱が勃発したのに乗じ、アメリカはそれらの

領土を強奪しようとして一八九八年にスペインに戦争をしかけた。戦争はスペインの敗北におわり、アメリカは同年一二月のパリ条約によってグァム、プエルトリコ、フィリピンを獲得し、形式的な独立を得たキューバを完全な支配下においた。二〇九

（二五〇）　ボーア戦争――イギリスは、南アフリカのボーア人共和国トランスヴァールとオレンジを滅ぼし強奪するために、一八九九年にこの国に戦争をしかけた。ボーア人ははじめ諸所でイギリス軍を負かしたが、力つきて一九〇二年にプレトリアで講和条約をむすび、イギリス国王の支配下にはいることを承認した。イギリスはこの戦争で限りない暴虐をボーア人にくわえた。二〇九

（二五一）　正しくはヒルファディングの著書の標題は次のとおりである。『金融資本。資本主義の最近の発展についての一研究』。二〇九

（二五二）　ケムニッツとバーゼルの両大会――一九一二年九月にひらかれたドイツ社会民主党のケムニッツ大会と、同年一一月にひらかれた第二インタナショナルのバーゼル大会のこと。これらはともにその決議で、社会民主主義者はきたるべき帝国主義戦争に積極的に反対することを決定した。二一〇

（二五三）　本訳書では、すべて邦訳して各段落の直後につけることにする。二一〇

（二五四）　集積と集中――資本の集積というのは、直接に資本の蓄積にもとづくものであって、剰余価値の一部を原資本に付加することを通じて、資本の規模が拡大することである。これにたいして、資本の集中とは、既在の資本の合同または合併によって個々の資本が大きくなることである。両者はたがいに制約しあうものであるが、資本主義的生産の発展の過程でより基本的なのは、集積である。
ところで、レーニンは本書では、わずかの例外をのぞき、内容的には集中（ツェントラリザーツィヤ）centralizationについて述べている箇所でも、集積（コンツェントラーツィヤ）concentrationという術語をもちいている。この訳書では、レーニンがどういう術語をもちいているかを明確に示す意味で、「コンツェントラーツィヤ」はすべて「集積」と訳した。しかしここでいう「集積」は、狭い意味での「集積」にかぎられず、集積に制約されつつ進行する「集中」の過程および概念をもふくんでいる、と理解すべきである。なおレーニンは、集中について述べる場合、「ツェントラリザーツィヤ」という外来語のほかに、「ソスレドトーチェニエ」という伝来のロシア語をも使っている。二一〇

（二五五）　独占と独占体――レーニンは本書で「独占」を単数で使ったり複数で使ったりしている。単数の場合はそのまま「独占」と訳して問題ないが、複数の場合は、いくつかの例外を除き、「独占体」と訳しておいた。レーニンが複数で使っている場合でも、もろもろの独占の現象を指していると思われる場合は、「独占」と訳出した。二一〇

（二五六）　邦訳、大月書店版、二九九―三〇〇ページを参照。二一三

（二五七）　企業の独占団体の諸形態――レーニンが本書であげているものは、次のとおりである。
カルテル――とくにドイツで発達した形態で、同種の企業が相互の競争を制限することによって独占的な高利潤を獲得しようという協定によって成立する。それぞれの加盟企業は、商業上および生産上の独立性を保持したままで、生産物価格、販売市場、生産量その他について協定を結ぶ。なお、非加盟者はアウトサイダーと呼ばれる。
シンジケート――カルテルよりも高度の形態で、加盟者はもはやその製品を自分の手で販売することをやめ、独立の組織であるシン

ジケートをとおして売るようになる。そしてシンジケートの内部では、カルテルの場合よりも、大資本の支配がより強まる。

トラスト——とくにアメリカで発達した形態。アメリカでは一九世紀末に独占行為にたいして禁止立法がなされたので、カルテルにかわる脱法的手段として、考えだされた。ここでは、加盟企業は独立性を失い、トラストの単一の経営と管理に服することになる。二三三

（一五八）『バンク』（『銀行』）——ドイツ金融業界の雑誌で、一九〇八年から一九四三年までベルリンで出ていた。二三〇

（一五九）レーニンの原文では表に番号はないが、組みの関係から、本訳書では便宜上〔　〕にかこんで表に番号をつけることにした。二三三

（一六〇）このパラグラフではレーニンは二度とも「ツェントラリザーツィヤ」という術語をつかっている。二三五

（一六一）邦訳、七八二ページ、旧ディーツ版（原）六五五ページ。レーニンはロシア語訳をそのまま引用しているが、これはマルクスの原文とはすこし違っている。マルクスの原文は次のとおりである。「たしかに、それ〔銀行制度〕とともに社会的規模での生産手段の一般的簿記や配分の形態があたえられているが、しかし形態だけである。」二三七

（一六二）一八七三年の取引所瓦落——一八七三年の前半に、まずオーストリアｰハンガリーで、ついでドイツその他の諸国でおこった。七〇年代の初めに信用の膨張、創業行為、株式投機が空前の規模に達した。そして、世界経済恐慌の兆候がすでに見られはじめた時期に、株式投機はなお増大した。その反動としてついに一八七三年五月九日にウィーンの取引所で大暴落が生じ、二四時間内に株価は数億分の一にさがり、膨大な数の破産者を出した。二三九

（一六三）創業スキャンダル——フランス＝プロイセン戦争ののち、ドイツの資本主義は急速な発展をとげたが、その当時、一八七〇年代に、株式会社の設立にさいしてもろもろのスキャンダルが生まれた。急激な会社創立にともなって、事業家の詐欺的取引、土地や有価証券の気ちがいじみた投機がひろくおこなわれた。二三九

（一六四）『フランクフルター・ツァイトゥング』（『フランクフルト新聞』）——ドイツの巨大株式取引業界の日刊新聞。一八五六年から一九四三年までフランクフルト・アム・マインで出ていた。二三〇

（一六五）「組織された」資本主義——独占資本主義の段階で巨大資本が相互のあいだで競争を制限する協定をむすんでいる事実に幻惑されて、いまや資本主義的生産のかつての無政府性が排除され、恐慌はなくなり、国民経済の計画的発展が可能となったと説く、非科学的なブルジョア的資本主義弁護論。はじめゾンバルト、リーフマンその他の独占資本の理論的代弁者が唱えたが、のちに、カウツキー、ヒルファディングらの第二インタナショナルの改良主義的理論家たちもこれにとびついた。二三五

（一六六）邦訳、大月書店版、三四六ページ。第二の引用文は、「産業に充用された資本のますます多くの部分は金融資本、すなわち、銀行の管理下にあって産業資本家が充用している資本である」という一句のなかの、後半の部分である。二三六

（一六七）邦訳、一九九ページ。なおヒルファディングの原文では、ここは「より収益の少ない旧資本」ではなく、「より少なく評価された旧資本」となっている。二四四

（一六八）フランスのパナマ事件——パナマ運河の開掘工事がフランスの手ですすめられていたころ、一八九二—一八九三年に、フランスの諸会社による政治家や官僚や新聞の大規模な買収事件がおこ

り、センセーションをひきおこした。二四五

（一六九）　レーニンがあげている著書のうち、ホブソン『帝国主義論』については、岩波文庫版、上巻、一一四―一一五ページを、ヒルファディング『金融資本論』については、大月書店版、四七五―四七六ページを参照。二五〇

（一七〇）　**いまおこっていること**――第一次世界大戦のこと。レーニンは検閲を顧慮してこのような言い方をしたのである。二五九

（一七一）　六行まえの「ところが」以下この段落の最後までの文章は、一九一七年の初版では削除されていた。これは、この著書を出版した「パールス」出版社にいたメンシェヴィキたちがやったことである。このような箇所はほかにもいくつかあるが、いちいち指摘せず、ここで一例をあげておくにとどめる。二六三

（一七二）　ヒルファディング『金融資本論』、四九四ページを参照。二六八

（一七三）　邦訳、下巻、二二四ページ。二七四

（一七四）　**ナロードニキ**――一八六〇―一八九〇年代のロシアの革命運動における主要な潮流で、農民社会主義の立場をとっていた一派。ロシアにおける資本主義の発展がまだ微弱だったあいだは革命的な役割を果たしたが、九〇年代になると、プロレタリアートの立場にたつマルクス主義的社会主義の直接の反対者となるにいたった。二七五

（一七五）　ロシアにおける資本主義の発展の可能性を否定するナロードニキのひとりクリヴェンコは、その発展の必然性を主張するマルクス主義者に反論して、もし資本主義の発展が必然的で進歩的であるなら、「農地の買占めをも、店舗や居酒屋の開設をもはばかってはならず」、「国会にいる多数の居酒屋の主人の成功をよろこび、農民の穀物の多数の買占人を、もっと援助しなければならない」という、こっけいきわまる「結論」をひきだした。レーニン『「人民の友」とはなにか』、全集、第一巻、二八二ページを参照。二七五

（一七六）　邦訳、上巻、一一五―一一六、一〇六、一〇七ページ。二八二

（一七七）　邦訳、上巻、一五五ページ、下巻、一〇一、三五、二四五、三〇四ページ。二八四

（一七八）　『マルクス＝エンゲルス往復書簡』については、全集、第二九巻、（原）三五八ページ、第三五巻、（原）二〇ページを、エンゲルスのカウツキーあての手紙については、第三五巻、（原）三五六ページを参照。なお、『イギリスにおける労働者階級の状態』第二版の序文は、全集、第二巻、六六四―六八〇ページに収録されている。二八七

（一七九）　**解党主義**――一九〇五―一九〇七年の第一次ロシア革命が失敗におわると、メンシェヴィキたちは、非合法のロシア社会民主労働党の組織を解消し、非合法の革命活動をやめることを要求した。彼らは、革命を放棄することを代償に、ツァーリ政府から党の合法的な存在の許可を得ようと試みたわけである。二八八

（一八〇）　**最後のモヒカン族**――モヒカン族は、かつて北アメリカに住んでいたインディアンの一種族で、いまは死滅している。F・クーパーの同名の小説から転じて、このことばは、死滅しつつある社会現象の最後の代表者を指すのにもちいられる。二九〇

（一八一）　邦訳、五三九―五四〇ページ。二九一

（一八二）　エンゲルスは『資本論』第三巻第六章の「注一六」で次のように書いている。近代的生産力が資本主義的商品交換の法則からますますはみだしつつあることは、「……とくに二つの徴候のうちにあらわれている。第一に、あらたな一般的な保護関税熱であっ

て、これはことに、ほかならぬ輸出能力ある物品を最もよく保護するものだという点で、旧来の保護関税と異なる。第二に、生産を、したがって価格と利潤を調整するための、大きな生産部面全体の工場主たちのカルテル（トラスト）である」（邦訳、一五二ページ、旧ディーツ版、一四三ページ）。二九二

（一八三） ホブソン『帝国主義論』、下巻、二六五ページ。二九五

（一八四） 義和団暴動の鎮圧——義和団の暴動は一九〇〇年六月に北京、天津を中心におこった。これよりさきにイギリス、フランス、ドイツ、ロシア、日本などの帝国主義諸国は、中国の分割に乗りだし、中国をめぐって相互に対立していたが、中国人がしだいに目ざめて外人排斥運動を展開し、ついに義和団の蜂起にまで発展すると、居留民の安全を確保するという名目で、中国人民の解放運動を、アメリカの軍隊をもくわえて共同して武力によって鎮圧した。二九七

（一八五） ファショダ事件——アフリカにおける植民地拡張を目的として、フランスのマルシャン少佐の率いる特別遠征隊は一八九八年にナイル河上流のファショダを占領した。これが、おなじく東アフリカの侵略をめざすイギリス帝国主義との衝突をひきおこした。結局、フランスはナイル地域から手をひき、イギリスはエジプトを確保することで、おさまった。二九八

（一八六） ロシアに対抗してのイギリスと日本との条約（日英同盟）——ロシアの満州進出が露骨になった一九世紀の末に、イギリスはロシアに対抗して極東における自国の「権益」をまもることを目的として、日本と同盟関係にはいろうとした。こうして一九〇二年にむすばれた日英同盟条約は、その後情勢の変化に応じて何回か修正されたのち、一九二四年まで存続したが、その年に日英米仏の太平洋条約の発効と同時に効力を失った。二九八

（一八七） 邦訳、四七一—四七二ページ。なお、ヒルファディングの原文では、「輸入された資本」ではなく「輸入された資本主義」であり、「農業的孤立」ではなく「農業的きずな」であり、また「その武力」は「その権力手段」となっている。二九八

（一八八） 邦訳、四七一—四七二ページを参照。二九九

（一八九） ドイツの左派社会民主主義者の会議——一九一六年一月一日にK・リープクネヒトの家でひらかれた会議のこと。会議は、R・ルクセンブルグの作成した「インテルナツィオナーレ」グループのテーゼを承認した。三〇六

（一九〇） ユニウスはローザ・ルクセンブルグのペンネームであるから、正確にいえば「彼女」であるが、一応原文のままにしておく。三〇七

（一九一） 『ブレーマー・ビュルガー・ツァイトゥング』（『ブレーメン市民新聞』）——日刊新聞、ドイツ社会民主主義者のブレーメン・グループの機関紙、一八九〇年から一九一九年まで出ていた。一九一四—一九一五年には実際上ドイツ社会民主主義者の左派の機関紙であったが、一九一六年に同紙はカウツキー派の手におちた。三〇八

（一九二） 『フォルクスフロインド』（『人民の友』）——日刊の社会民主主義的新聞。一八七一年にブラウンシュヴァイクで創刊され、一九一四—一九一五年には実際上ドイツの左派社会民主主義者の機関紙であった。一九一六年には、カウツキー派の手におちた。三〇八

人名注

（括弧内でゴシック体になっているものは本名を示す）

アガード、イエー——ロシアの経済学者、一時、露支銀行の職員。

アグィナルド、エミリオ（一八六九—一九四六）——一八九八年のアメリカ＝スペイン戦争当時のフィリピン諸島原住民の独立運動の指導者。

アクセリロード、ペ・ベ（一八五〇—一九二八）——メンシェヴィキの指導者のひとり。一八七〇年代にはナロードニキ、一九〇〇年から『イスクラ』、『ザリャー』編集局員。ロシア社会民主労働党第二回大会のとき以来、一貫してレーニンに反対する立場をとった。

アードラー、ヴィクトル（一八五二—一九一八）——オーストリア社会民主党の創立者で指導者、修正主義者。オーストリア・マルクス主義の代表者。

アレクシンスキー、イ・ペ（一八七二生）——モスクワ大学外科医学講座の教授。ゼムストヴォ活動家、ウラヂーミル県選出第一国会議員。カデット、のちに人民社会党（エヌ・エス）に移った。

アリストパネース（ほぼ紀元前四四三—三八五）——ギリシアの喜劇作家。

ヴァイヤン、エドゥアール・マリ（一八四〇—一九一五）——フランス社会主義運動の指導者。パリ・コミューンおよび第一インタナショナルの中心的メンバー。第一次大戦前には徹底的な反軍国主義者で、戦争にたいしゼネラル・ストライキでたたかうことを主張していた（一九一〇年、コペンハーゲン大会）が、大戦開始後は極端な社会排外主義者になった。

ヴァンデルヴェルデ、エミル（一八六六—一九三八）——ベルギー労働党および第二インタナショナルの指導者。極端な修正主義者で日和見主義者。

ウィリアムズ、ラッセル——イギリスの社会主義者、独立労働党員。第一次大戦中、反軍国主義の立場をとり、第二インタナショナル指導者の政策を批判した。

ウィルソン、ウッドロー（一八五六—一九二四）——アメリカ大統領（一九一三—一九二〇）。民主党党首。第一次大戦中、「一四カ条」の講和条約を発表し、国際連盟の組織案を起草した。

ヴィルヘルム二世（一八五九—一九四一）——ドイツ皇帝（一八八八—一九一八）。

エーヴリング、エリナー（一八五五—一八九八）——カール・マルクスの末女、イギリスの社会主義者エドワード・エーヴリングの妻、イギリスおよび国際労働運動の活動家。

エシュヴェーゲ、ルードヴィヒ——ドイツの経済学者、経済雑誌『バンク』の寄稿家。一九一二—一九一三年に金融資本の問題について多くの論文を書いた。

エドワード七世（一八四一—一九一〇）——イギリス国王（在位一九〇一—一九一〇）。

エンゲルス（一八二〇—一八九五）

オーウェンス（一八五九—一九二三）——アメリカのガラスびん製造機械の発明家。

カイヨー、ジョセフ（一八六三—一九四四）——フランスのブルジョア政治家、急進社会党総裁、首相兼内相（一九一一—一九一二）、蔵相（一八九九—一九〇二、一九〇六—一九〇九、一九一一、

一九一三—一九一四、一九二五—一九二六）を歴任。第一次大戦前から非戦論、親独論をとなえ、一八年敵国通謀の疑いで逮捕され、二四年までパリから追放された。

カウツキー、カール（一八五四—一九三八）——第二インタナショナルおよびドイツ社会民主党の指導的理論家。一九世紀末—二〇世紀初めにベルンシュタインの修正主義にたいしてマルクス主義の「正統」を守ったが、のちに日和見主義者。第一次大戦中は中央派。十月革命後はソヴェト権力の激しい敵。

カーネギー、アンドリュー（一八三五—一九一九）——スコットランド出身のアメリカの億万長者。一八四八年にアメリカに移住。一八七三年にはじめて鉄鋼工業に投資。一九〇一年にモルガンの鉄鋼トラストと合同。

ガリバルディ、ジュゼッペ（一八〇七—一八八二）——イタリアの国民的英雄、イタリアの革命的民主主義の指導者、すぐれた軍司令官。一八四八—一八六七年、イタリアの統一のために外国への隷属、封建・絶対主義制度、教権の反動に反対して闘争。一八六〇年、シチリアの解放で事実上イタリアを統一。一八七〇年、息子たちとともにフランスへ行き、プロイセン軍と戦闘。パリ・コミューンを歓迎。マルクス、エンゲルス、レーニンは彼を自由のためのすぐれた闘士として高く評価した。

カルワー、リヒアルト（一八六八—一九二七）——ドイツの社会民主主義者、経済学者、修正主義者。国会議員。世界経済の統計学的研究に従事。一九〇九年に離党。

ガルデーニン、ユ——チェルノーフ、ヴェ・エムを見よ。

カント、イマヌエル（一七二四—一八〇四年）——ドイツの古典的観念論哲学の創始者。

ギゾー、フランソワ（一七八七—一八七四）——フランスの政治家、歴史家。下院議員となり、はじめ政府の反動政策に抵抗したが、七月革命（一八三〇年）後、反動化し、内相、文相、外相、首相を歴任。二月革命（一八四八年）で亡命。帰国後は、歴史学の著述に没頭し、その著作はフランス近代史学の出発点となった。

キッチナー、ホレイシオ・ハーバート（一八五〇—一九一六年）——イギリスの将軍、政治家、元帥。第一次大戦のさいには陸相。軍艦でロシアへ赴く途中、ドイツの潜水艦に襲撃されて戦没。

ギッフェン、ロバート（一八三七—一九一〇）——イギリスの統計学者で経済学者。

ギヨーム、ジェームス（一八四四—一九一五）——フランスの無政府主義者。第一次大戦中、祖国防衛論者。

グヴィンナー、アルトゥール（一八五六—一九三一）——ドイッチェ・バンクの取締役。ドイツ金融資本の主要人物。

クーゲルマン、ルートヴィヒ（一八三〇—一九〇二）——ドイツの社会民主主義者、第一インタナショナル会員。マルクスの友人で『資本論』の発行、普及に協力した。

クダシェフ、イ・ア（一八五九生）——ツァーリ政府の外交官。第一次大戦の初期にベルギー駐在公使、のち帝政の末期に中国駐在大使。

グチコーフ、ア・イ（一八六二—一九三六）——大資本家、オクチャブリスト党の創立者で指導者。二月革命後、第一次臨時政府の陸海軍相、コルニーロフ反乱の組織に参加。十月革命後はソヴェト権力とたたかい、のち亡命。

クーノー、ハインリヒ（一八六二—一九三六）——ドイツの歴史家、社会学者、人類学者。はじめはマルクス主義者、ついで修正主

義者。第一次大戦中は社会帝国主義者。

クラウゼヴィッツ、カール・フォン（一七八〇—一八三一）——ドイツの軍人、著名な軍事理論家、近代国民戦争の特質をあきらかにした。主著——『戦争論』。

グリム、ローベルト（一八八一—一九五八）——スイス社会民主党の指導者、同党書記。第一次大戦中は中央派、ツィンメルヴァルト、キーンタール両会議の議長、国際社会主義委員会議長。中央派の第二半インタナショナルの創立者のひとり。

グールヴィチ、イ・ア（一八六〇—一九二四）——ロシアの初期マルクス主義者のひとり。アメリカに移住。その地で著作活動に従事。レーニンと文通があった。

グレーヴィチ、エ・エリ（スミルノフ、イェ）（一八六五生）——メンシェヴィキ。解党派。第一次大戦中、祖国防衛派。

クレストーヴニコフ、ケ・ア（一八五五生）——大工業家、証券業者、モスクワ財界代表。オクチャブリスト、参議院議員。

グロイリヒ、ヘルマン（一八四二—一九二五）——スイス社会民主党の創立者、同党右派の指導者。一九〇二年から国会議員。第一次大戦中は社会排外主義者。

クロポトキン、ペ・ア（一八四二—一九二一）——無政府主義の主要な指導者、理論家のひとり。第一次大戦中は社会排外主義者。十月革命後亡命したが、対ソ武力干渉に反対した。

クローマー、エヴリン・ベアリング（一八四一—一九一七）——イギリスの政治家、一八八三年から一九〇七年までエジプトの事実上の支配者、伯爵。

ケストナー、フリッツ——ドイツのブルジョア経済学者。トラストの発達を研究、『組織強制』の著者。

ゲード、ジュール（一八四五—一九二二）——フランスの社会主義運動および第二インタナショナルの組織者で指導者。マルクス主義思想の普及と社会主義運動の発展に貢献したが、セクト主義的な誤りをおかした。第一次大戦が始まると、社会排外主義の立場をとり、ブルジョア政府に入閣した。

ケレンスキー、ア・エフ（一八八一—一九七〇）——エス・エル党の指導者、第一次大戦中は祖国防衛派。二月革命後、臨時政府の閣僚、ついで首相兼最高総司令官。十月革命後、ソヴェト権力とたたかい、一九一八年に国外へ亡命。

コソフスキー、ヴェ（レヴィンソン、エム・ヤ）（一八七〇—一九四一）——一八九七年ブンド創立大会で中央委員、その中央機関紙『ディ・アルバイター・シュティンメ』編集長。反イスクラ派、第二回党大会以後メンシェヴィキ。反動期には解党派。第一次世界大戦期には親独的立場をとった。十月革命に反対。亡命し、ポーランドのブンド組織で活動。一九三九年渡米。

ゴルチャコフ、ア・エム（一七九八—一八八三）——ロシアの外交家、公爵。外相（一八五六年）、宰相（一八六三年）。外交上のかけひきが巧妙であったので、有名。

コルチャック、ア・ヴェ（一八七五—一九二〇）——ロシアの海軍提督、反革命家。一九一八年一一月オムスクで反ソ武力闘争を開始、一九一九年末赤軍に粉砕され、銃殺された。

ゴレ、ポール——フランスの社会主義者。第一次大戦中、ローザンヌ発行の社会主義小新聞編集者。小冊子『死にかけている社会主義と復活すべき社会主義』の著者。

ゴンパーズ、サミュエル（一八五〇—一九二四）——アメリカ労働総同盟の創立者、その機関紙『アメリカン・フェダレイショニス

ト』の編集者、労資協調論者。第一次大戦中は主戦論者、戦後、パリ講和会議の活動に参加。ソヴェト・ロシア孤立化の政策を支持した。

サーヴィンコフ、ベ・エヌ（ロープシン、ベーーヴェ）（一八七九ー一九二五）――エス・エル党の指導者。第一次大戦中は社会排外主義者。二月革命後、陸軍次官、ついでペトログラード軍事総督。十月革命後は一連の反革命的反乱の組織者。のち逮捕され、獄中で自殺。

サランドラ、アントニオ（一八五三ー一九三一）――イタリア首相（一九一四ー一九一六年）。連合国側にくわわって参戦。トレンティノにおけるイタリア軍の敗北後、辞職。

ザルトリウス・フォン、ヴァルタースハウゼン（一八五二生）――ドイツの経済学者、近代世界経済史の研究家。

サン－シモン、アンリ・クロード（一七六〇ー一八二五）――フランスの偉大なユートピア社会主義者。

サンバ、マルセル（一八六二ー一九二二）――フランス社会党の改良主義的指導者、ジャーナリスト、下院議員。第一次大戦中は社会排外主義者、公共事業相として帝国主義的「国防政府」に入閣した。

ジーメンス、ゲオルグ（一八三九ー一九〇一）――ドイツの大産業家。金融業者。一八七〇年に「ドイッチェ・バンク」を創立、その取締役となる。プロイセン下院議員、のちドイツ国会議員。

シャイデマン、フィリップ（一八六五ー一九三三）――ドイツ社会民主党の日和見主義的極右派の指導者。一九〇三年から国会議員。第一次大戦中は猛烈な社会排外主義者。一九一八年一一月革命当時、スパルタクス団員虐殺の張本人。ドイツ労働運動の流血の弾圧の組織者。

ジュオー、レオン（一八七九ー一九五四）――フランスおよび国際労働組合運動の改良主義的指導者、アムステルダム・インタナショナルの右翼指導者のひとり。第一次大戦のさいには排外主義者。

シュタウス、エミール・ゲオルグ・フォン（一八七七生）――グヴィンナーの私設秘書、のちにドイッチェ・バンク、ディスコントーゲゼールシャフトの取締役。

シュティリヒ、オスカー（一八七二生）――ドイツの経済学者、金融問題の著述家。

ジデュクム、アルベルト（一八七一ーー一九四四）――ドイツ社会民主党員、修正主義者、社会帝国主義者。第一次世界大戦中、イタリアとスカンディナヴィア諸国をまわって社会民主党多数派の社会排外主義的行動を弁護した。

シュトレーベル、ハインリヒーードイツの社会民主主義者。第一次大戦のはじめ、国際主義者。雑誌『インテルナツィオナーレ』（『インタナショナル』）に協力。のち社会排外主義へ転向。

シュルツエ、エミールーードイツの経済学者。『ロシアにおけるフランス資本』（一九一五年）の著者。

シュルツエ－ゲーヴァニッツ（一八六四ー一九四三）――ドイツのブルジョア経済学者、フライブルグ大学教授。自由主義の立場から階級調和論をとなえた。多くの著作がある。

ジョッフル、ジョセフ（一八五二ー一九三一）――第一次大戦中のフランス軍最高司令官、ついで連合軍軍事会議議長（一九一六年）。元帥。

シルダー、ジーグムント（一九三二没）――ドイツの経済学者、大学教授、世界貿易政策の専門家。

スコーベレフ、エム・イ（一八八五ー一九三九）――メンシェヴ

ィキ。第一次大戦中は中央派。二月革命後、ペトログラード・ソヴェト副議長、第一次全ロシア中央執行委員会副議長、ブルジョア臨時政府の労働相。十月革命後、メンシェヴィキから離れ、のちボリシェヴィキ党員。

ステッド、W・G（一八四九—一九一二）——イギリスの新聞記者。『レヴュー・オヴ・レヴュース』の編集者。

ストルーヴェ、ペ・ベ（一八七〇—一九四四）——一八九〇年代には「合法マルクス主義」の著名な代表者。のちにブルジョア的な立憲民主党の指導者。

ズーパン、アレクサンダー（一八四七—一九二〇）——ドイツの地理学者、ゴータ大学教授。

スペクタートル（ナヒムソン、エム・イ）（一八八〇生）——ロシアの経済学者、評論家、ブンド派。第一次大戦中は中央派。革命後、一九三五年コム・アカデミーに勤務。

スミス、アダム（一七二三—一七九〇）——古典的ブルジョア経済学を確立したイギリスの大経済学者、社会哲学者。主著——『国富論』。

スミルノフ、イエ——グレーヴィチ、エ・エリを見よ。

ゾンバルト、ヴェルナー（一八六三—一九四一）——ドイツの経済学者。近代資本主義の発生および発展の問題について多くの著作がある。最も典型的なブルジョア的マルクス批判家のひとり。

ダーヴィト、エドゥアルト（一八六三—一九三〇）——ドイツの経済学者、社会民主党員、ベルンシュタイン主義者。第一次大戦中は社会排外主義者。一九一九—一九二〇年、内相。

チェルヌィシェフスキー、エヌ・ゲ（一八二八—一八八九）——ロシアの革命的民主主義者、ユートピア社会主義者。一八五〇—一八六〇年代の革命運動の指導者。一八六二年に逮捕、流刑に処され、赦免直後に死んだ。

チェルノーフ、ヴェ・エム（一八七六—一九五二）——エス・エル党の指導者で理論家。一九一七年にブルジョア臨時政府の農相、地主の土地を占拠した農民にたいして苛酷な弾圧政策をとった。十月革命後、反ソ反乱の組織者。

チェレヴァーニン、エヌ（リプキン、エフ・ア）（一八六八—一九三八）——メンシェヴィキの指導者、極端な解党主義者。第四回、第五回党大会に参加。解党にかんする一六人のメンシェヴィキの『公開状』（一九一〇年）の起草者のひとり。一九一二年八月の反党協議会（八月ブロック）後メンシェヴィキ本部員。第一次大戦中社会排外主義者。一九一七年メンシェヴィキ中央委員、『ラボーチャヤ・ガゼータ』編集員。十月革命に敵対的態度をとった。

チェンバレン、ジョゼフ（一八三六—一九一四）——イギリスの代表的保守政治家のひとり。一八八〇—八五年に商相、八六年に内相、一八九五—一九〇三年に植民地相、帝国主義的政策を鼓舞した。ボーア戦争の張本人のひとり。

チヘイゼ、エヌ・エス（一八六四—一九二六）——メンシェヴィキの指導者。第一次大戦中は中央派。二月革命のときは国会臨時委員、祖国防衛派。ついでペトログラード・ソヴェト議長、第一次中央執行委員会議長。十月革命後、メンシェヴィキの反革命政府であるグルジア憲法制定議会の議長、のち亡命。

チヘンケーリ、ア・イ（一八七四生）——メンシェヴィキ。第一次大戦中は社会排外主義者。二月革命後、ブルジョア臨時政府のザカフカーズ駐在代表。一九一八—一九二一年、グルジアの反革命メンシェヴィキ政府の外相、ついで亡命。

チールシュキー、ジーグフリード（一八七二生）――ドイツの経済学者。『カルテルとトラスト』の著者。

ツェトキン、クララ（一八五七―一九三三）――ドイツの著名な婦人革命家。ドイツ社会民主党員、のち共産党員、コミンテルン執行委員。

ティエリ、J・N・A（一七九五―一八五六）――フランスの歴史家。自由主義的ブルジョアの立場を堅持した。

ティエール、ルイ・アドルフ（一七九七―一八七七）――フランスの反動政治家、歴史家、弁護士。一八三〇年六月革命後しばしば大臣および首相。一八四八年には反革命的「秩序党」のリーダー。一八七一年二月首相となり、パリ・コミューンを残忍に弾圧。

ディスレーリ、ベンジャミン（一八〇四―一八八一）――イギリス保守党の指導者。もと青年「イングランド派」、しばしば大臣、首相となる。

デシャネル、ポール（一八五五―一九二二）――フランス進歩党の指導者。下院の副議長、議長をつとめ、一九二〇年大統領となる。

デニーキン、ア・イ（一八七二―一九四七）――ロシアの将軍。一九一八年に反ソ武力闘争を開始し、北カフカーズとウクライナを占領したが、翌年三月赤軍に撃破されて、国外へ逃亡。

デブス、ユージン（一八五四―一九二六）――アメリカ社会党（左派）指導者。一九〇〇―一二年、社会党大統領候補者。第一次大戦中、積極的な反軍国主義者。十月革命後、ボリシェヴィズムに共鳴。

デューマ、シャルル（一八八三生）――フランスの社会主義者。第一次大戦中、社会帝国主義者、ジュール・ゲードに協力。小冊子『われわれののぞむ平和』の著者。

トマ、アルベール（一八七八―一九三二）――フランスの政治家、社会改良主義者。第一次大戦中は社会排外主義者、ブルジョア政府の軍需相。二月革命後、ロシアに来て戦争継続を扇動した。

ドリオ、エドワール（一八六五―一九四七）――フランスのブルジョア歴史家。

トルルストラ、ピーテル・イェレス（一八六〇―一九三〇）――オランダ労働運動の指導者、右翼社会主義者。第一次大戦中は親ドイツ的傾向の社会排外主義者。

トロツキー（ブロンシテイン）、（エリ・デ）（一八七九―一九四〇）――メンシェヴィキ。第一次大戦中は中央派。二月革命後、第六回党大会でボリシェヴィキ党に入党。つねに党の一般方針に反対する分派闘争をおこない、一九二七年に党から除名された。

ナポレオン三世（ボナパルト、ルイ）（一八〇八―一八七三）――フランス皇帝（在位一八五二―一八七〇）。

ネイマルク、アルフレッド――フランスの金融財政統計家。取引所の雑誌『カピタリスト』の編集者。

ネナロコモフ、ゲ・ペ（一八七四生）――検事。一九一五年二月、ボリシェヴィキ国会議員「五人組」裁判の「特別公訴人」。

ノスケ、グスタフ（一八六八―一九四六）――ドイツ社会民主党右派、ドイツ労働運動の裏切者。一九一九年一月にカール・リープクネヒトとローザ・ルクセンブルグの虐殺を組織した張本人のひとり。

ノーベル、アルフレット（一八三三―一八九六）――スウェーデンの工業家、ダイナマイトの発明者。ノーベル賞はこの人の遺言によってもうけられた。

ハイニヒ、クルト（一八八六―一九五六）――ドイツの経済学者、

社会民主党員。主として現代資本主義経済を研究。
ハイネ、ヴォルフガング（一八六一生）——ドイツ社会民主党員。ベルンシュタイン主義者。第一次大戦中は社会帝国主義者。
ハイマン、ハンス・ギデオン——ドイツの経済学者。ドイツの経済事情を研究した。ヒルファディングの雑誌『ゲゼルシャフト』の寄稿家。
ハインドマン、ヘンリ・メアズ（一八四二—一九二一）——イギリスの社会主義者、改良主義者。イギリス社会党の指導者。第一次大戦中は社会排外主義者。十月革命に敵意を示した。
バウアー、オットー（一八八二—一九三八）——オーストリア社会民主党および第二インタナショナルの指導者。いわゆる「オーストリア・マルクス主義」の代表者。
バウアー、ブルーノ（一八〇九—一八八二）——青年ヘーゲル派のひとり、ブルジョア急進主義者。
ハヴメイヤー——アメリカの工業家、最大の製糖トラストの所有者。
バクーニン、エム・ア（一八一四—一八七六）——無政府主義者。一八四八—四九年のドイツ革命に参加。ナロードニキの運動に思想的な影響をあたえた。国際労働者協会内でマルクス主義の敵として行動し、一八七二年に分裂活動の理由で除名された。
ハーゼ、フーゴー（一八六三—一九一九）——ドイツ社会民主党の指導者。第一次大戦中は中央派。カウツキーとともに「ドイツ独立社会党」を創立。
ハックスリ、トマス・ヘンリー（一八二五—一八九五）——イギリスの生物学者、ダーウィン進化論の普及につとめ、また不可知論をとなえた。
ハルムス、ベルンハルト（一八七六生）——ドイツのブルジョア経済学者、『国民経済と世界経済』（一九一二年）の著者。
パンネクーク、アントン（一八七三—一九六〇）——オランダの社会民主主義者。第一次大戦中は国際主義者、ツィンメルヴァルト左派。一九一八年からオランダ共産党員、コミンテルンの活動に参加。一九二一年に脱党、のち政治活動から離れた。
ビスマルク、オットー・エドゥアルト・レオポルト（一八一五—一八九八）——ドイツ帝国初代宰相（一八七一—一八九〇）。鉄血宰相とよばれ、ドイツの統一を実現し、ユンカー（地主貴族）と大ブルジョアジーの同盟を確保。社会主義者取締法を制定。それでも労働運動を圧殺しえないので、社会立法の約束で労働者をあざむこうとしたが、成功しなかった。
ビッソラーティ、レオーニダ（一八五七—一九二〇）——イタリア社会党の創立者、同党の改良主義的極右派の指導者。一九一二年、社会党から除名されて「社会改良党」を結成。第一次大戦中は社会排外主義者、参戦論者。一九一六—一九一八年、無任所相。
ビュヒナー、F・K・C・ルードヴィヒ（一八二四—一八九九）——ドイツのいわゆる「俗流唯物論」の代表者、社会ダーウィン主義者、医師。
ヒューブナー、オットー——世界統計＝地理年鑑『世界各国の地理＝統計表』の編集者。
ヒューム、デーヴィド（一七一一—一七七八）——イギリスの哲学者、経済学者、歴史家、不可知論者。
ヒル、デーヴィド（一八五〇—一九三二）——アメリカの歴史家。主著『ヨーロッパ外交史』。
ヒルデブランド、ゲルハルト（一八七八—一九二一）——ドイツ

の修正主義者。帝国主義的植民政策を支持して一九一二年に社会民主党から除名された。

ヒルファディング、ルードルフ（一八七七―一九四一）――ドイツ社会民主党および第二インタナショナルの理論家、日和見主義者、経済学者。第一次大戦中は中央派。

ヒンデンブルク、パウル・フォン（一八四七―一九三四）――ドイツの将軍、政治家。一九一六―一九一七年にドイツ軍総司令官。一九二五―一九三四年に大統領。

フォイエルバッハ、ルードヴィヒ・アンドレアス（一八〇四―一八七二）――ドイツのすぐれた哲学者。はじめヘーゲル左派の観念論者、のち唯物論に移り、鋭い宗教批判をおこなったが、人間を感性的存在としてのみとらえ、認識と社会発展における実践の役割をつかみえなかった。晩年社会主義に関心をよせ、『資本論』を読み、一八七〇年ドイツ社会民主党に入党した。

フォーゲルシュタイン、Th――ドイツの経済学者。主著『資本主義工業の金融組織と独占の形成』。

フォークト、カール（一八一七―一八九五）――ドイツの自然科学者、俗流唯物論者。

ブハーリン、エヌ・イ（一八八八―一九三八）――ボリシェヴィキ。第六回党大会で中央委員。十月革命後、党中央委員会政治局員、『プラウダ』編集者、コミンテルン執行委員。のち反党活動のために党から除名された。

ブランティング、カール・ヤルマル（一八六〇―一九二五）――スウェーデン社会民主党首、日和見主義者。第一次大戦中は社会排外主義者。一九一九年に連立政府に入閣、対ソ軍事干渉を支持した。

プリシケヴィチ、ヴェ・エム（一八七〇―一九二〇）――札つきの反動政治家。大地主、第二、第三国会議員。「ロシア国民同盟」と「天使長ミハイル同盟」の創立者。ラスプーチンの暗殺に参画。十月革命後、白衛軍に参加。

ブルツェフ、ヴェ・エリ（一八六二―一九三六）――ロシアのブルジョア民主主義者。一九〇五年革命前はエス・エルに接近したが、同革命後にはカデットを支持。第一次大戦中、極端な社会排外主義者となり、ロシアの民主主義派にツァーリズムとの闘争をやめるよう呼びかけた。

ブルデロン、アルベール（一八五八生）――フランス社会党員、労働者、サンディカリズム運動の左翼指導者。一九一五年、労働総同盟反対派の首領として階級協調思想に反対。同年、ツィンメルヴァルド会議に参加。メランとともに国際連絡再建委員会を組織。一九一六年、フランスの中央派、ロンゲ派に傾き、第二インタナショナルの復活を支持。一九一六年一二月の党大会で社会主義者の入閣を支持、ルノーデル＝ロンゲ派に同調、ツィンメルヴァルド派と絶縁した。

プルードン、ピエール―ジョゼフ（一八〇九―一八六五）――フランスの小ブルジョア社会主義者。無政府主義の理論的創始者のひとり。

ブレイルスフォード、ヘンリー・ノエル（一八七三生）――イギリスの政論家。はじめ自由党左派、のちに独立労働党に戻す。第一次大戦中、平和主義者。

プレスマーヌ、アドリアン（一八七九生）――フランスの社会主義者。第一次大戦にさいしては半防衛主義的、半平和主義的立場をとり、一九一六年の社会党大会では反対派の代表として出席したが、軍事公債の投票で多数派に同調した。

プレハーノフ、ゲ・ヴェ（ベリトフ、エヌ）（一八五六―一九一八）――ロシアにおける最初のマルクス主義宣伝家、レーニン以前における最も主要な理論家のひとり、「労働解放団」の創立者。『イスクラ』編集局員。一九〇三年の第二回大会後はメンシェヴィキ、第一次大戦中は祖国防衛派。十月革命には否定的であったが、反ソヴェト的な行動はとらなかった。

ベア、マックス（一八六四生）――社会主義史家。ドイツ社会民主党右派、のち左派。その代表的著作に『社会主義通史』などがある。

ペイシュ、ジョージ（一八六七―一九五七）――イギリスのブルジョア経済学者、雑誌『ステーティスト』発行者のひとり。

ヘーグルンド、カール・Z・コンスタンティン（一八八四―一九五六）――スウェーデンの社会民主主義者。第一次大戦中は国際主義者、ツィンメルヴァルド左派。一九一七―二四年、スウェーデン共産党の指導者。党から除名されて社会民主党に復帰。

ヘーゲル、ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ（一七七〇―一八三一）――ドイツの大哲学者、客観的観念論者。弁証法を深く研究し、全面的に仕上げた。

ペトロフスキー、ゲ・イ（第六）（一八七八生）――ボリシェヴィキ、第四国会議員。一九一四年一一月、党会議の席上で一斉逮捕され、シベリアへ流刑。

ヘニシュ、コンラード（一八七六―一九二六）――ドイツの社会民主主義者。第一次大戦中、社会帝国主義者。

ベーベル、アウグスト（一八四〇―一九一三）――ドイツおよび国際労働運動の著名な活動家。第一インタナショナル会員、ドイツ社会民主労働党（アイゼナッハ派）の創立者。ベルンシュタイン主義とたたかったが、後年いくつかの中央主義的誤りをおかした。

ペラール、ヴィクトル（一八六四―一九三一）――フランスのブルジョア経済学者、政論家。帝国主義に反対し自由競争を支持し、フランスの植民政策に警告をあたえた。

ベルンシュタイン、エドゥアルト（一八五〇―一九三二）――ドイツ社会民主党および第二インタナショナルの極端な日和見主義的一翼の指導者。一八九〇年代末にマルクス主義理論にたいする全面的な日和見主義的修正に乗りだした。

ヘンダソン、アーサー（一八六三―一九三五）――イギリス労働党の指導者。第一次大戦中は社会排外主義者。ブルジョア政府に入閣。二月革命後、ロシアに来て戦争継続を扇動した。

ポアンカレ、レーモン（一八六〇―一九三四）――フランスの首相（一九一二―一九一三、一九二二―一九二四、一九二六―一九二九年）、大統領（一九一三―一九二〇年）。一九一四年七月、第一次大戦の数日前にニコライ二世をペテルブルグに訪問。大戦の鼓吹者、パリ取引所と緊密に結びついたフランス帝国主義の指導者。

ポトレソフ、ア・エヌ（スタロヴェール）（一八六九―一九三四）――『イスクラ』編集局員、メンシェヴィキの指導者。第一次大戦中は社会排外主義者。一九一七年には悪質なボリシェヴィキ攻撃をおこなった。十月革命後、国外に亡命。

ホブソン、ジョン・アトキンソン（一八五八―一九四〇）――イギリスの経済学者、ブルジョア改良主義および平和主義の典型的な代表者。晩年には公然たる帝国主義弁護論に移り、「世界国家論」を説いた。

ボーブリンスキー、アル・ア、アン・ア、ヴェ・ア――ともに伯爵、大地主、製糖業者、反動政治家。

ホルテル、ヘルマン（一八六四―一九二七）――オランダの社会

民主主義者。第一次大戦中は国際主義者、ツィンメルヴァルド左派。一九一八—一九二一年、オランダ共産党員。のち政治活動から離れた。

マクドナルド、ジェイムズ・ラムゼイ(一八六六—一九三七)——イギリスの政治家、労働党首、日和見主義者。第一次大戦の後期には帝国主義ブルジョアジーを公然と支持した。のち再三首相。

マースロフ、ペ・ペ(イクス)(一八六七—一九四六)——経済学者、メンシェヴィキ。反動期には解党派。第一次大戦中は社会排外主義者。十月革命後、政治活動から離れた。

マッケンゼン、アウグスト・フォン(一八四五—一九四五)——ドイツの将軍、元帥、第一次大戦におけるドイツ軍司令官のひとり。

マッツィーニ、ジュゼッペ(一八〇五—一八七二)——イタリアの著名な革命家、ブルジョア民主主義者、イタリア民族解放運動の指導者、思想的代表者のひとり。イタリアを「下から」独立ブルジョア共和国として再統一するという綱領を主張し、その闘争の主要手段は蜂起であると考えた。しかし、陰謀的戦術をとり、農民の利益を軽視し、労働問題を「労資協調」で解決するという小ブルジョア的空想計画を宣伝した。レーニンは彼をマルクス以前の非プロレタリア的社会主義の代表者のひとりと見た。

マルクス、カール(一八一八—一八八三)

マルクス、イェンニー(フォン・ヴェストファーレン)(一八一四—一八八一)——カール・マルクスの妻。

マルトフ、エリ(ツェーデルバウム、ユ・オ)(一八七三—一九二三)——『イスクラ』編集局員、メンシェヴィキの指導者。第一次大戦中は中央派、二月革命後は国際派メンシェヴィキ。十月革命後はソヴェト権力に反対し、ドイツに亡命した。

ミニエ、フランソア(一七九六—一八八四)——フランスの歴史家、ジャーナリスト、反王党派。フランス革命および一六世紀の歴史を専攻。

ミルラン、アレクサンドル・エティエンヌ(一八五九—一九四三)——フランスの政治家、はじめ社会党員。一八九九年ヴァルデック・ルソーの反動的ブルジョア政府に入閣。一九〇四年に除名され、「独立社会党」を創立。一九二〇—一九二四年フランス大統領。

ムラノフ、エム・カ(一八七三—一九五九)——ボリシェヴィキ、仕上げ工。一九〇四年以来の党員。ハリコフで活動。第四国会議員。国会外でも活動。『プラウダ』に協力。一九一四年一一月他のボリシェヴィキ議員とともに逮捕され、トゥルハンスクへ流刑。一九一七—一九二三年、ロシア共産党(ボ)中央委員会の機構内で働く。第六、第八、第九回党大会で中央委員。一九二二—一九二四年、党中央統制委員。

メーリング、フランツ(一八四六—一九一九)——ドイツ社会民主党左派の指導者、理論家。第一次大戦中は国際主義者、「スパルタクス」団の指導者のひとり。十月革命を歓迎し、ドイツ共産党の創立に大きな役割を果たした。

メンシコフ、エム・オ(一八五九—一九一九)——極反動的政論家、『ノーヴォエ・ヴレーミャ』寄稿者。青年時代には自由主義に秋波を送っていたが、一八九〇年以後ツァーリズムを擁護して、自由主義を攻撃。一九一九年銃殺。

モーニトル——ドイツの社会民主主義者、日和見主義者。第一次大戦中、反動雑誌『プロイセン年報』で、社会民主党戦術の「新しい」原則を解説。

モリス、ヘンリー・C——アメリカの歴史家。植民史に大著があ

る。

モルガン、ジョン・ピアポント（一八三七—一九一三）——アメリカの大財閥モルガン家の創始者。

モレショット、ヤコブ（一八二二—一八九三）——オランダ生まれの生理学者、哲学者。ツューリヒ、トゥリンおよびローマの大学教授。イタリアの上院議員。俗流唯物論の代表者。

ヤイデルス、オットー——ドイツの経済学者、金融資本の発展を研究した。

ユイスマンス、カミーユ（一八七一生）——ベルギーの社会民主主義、哲学教授。第一次世界大戦まえに国際社会主義ビューロー書記、戦争とともに社会愛国主義者となる。のち首相、文相。

ユニウス→ローザ・ルクセンブルグ

ラコフスキー、ハ・ゲ（一八七三—一九三七）——ルーマニア生まれ。第一次大戦前はメンシェヴィキに接近、大戦にさいし国際主義者、ツィンメルヴァルド中央派、のち共産党員となり、十月革命後、ウクライナ首相、駐英、駐仏大使。トロツキー派の指導者となり、第一五回党大会で除名、一九三七年反革命裁判の結果、処刑。

ラサール、フェルディナンド（一八二五—一八六四）——ドイツの小ブルジョア社会主義者。一八六三年に全ドイツ労働者協会を創設、大衆的労働運動の基礎をすえたが、ビスマルクと結んで労働運動を絶対君主制支持の方向へ向けようとした。

ラデック、カール（一八八五—一九三九）——一九〇〇年代のはじめからガリチア、ポーランドおよびドイツの社会民主主義運動に参加。第一次大戦中、国際主義の立場をとったが、中央派への動揺を示した。一九一七年からボリシェヴィキ党員、コミンテルンで活動した。のち反党活動のために除名された。

ラファルグ、ローラ（一八四五—一九一一）——カール・マルクスの次女、ポール・ラファルグの妻。

ランスブルグ、アルフレッド——ドイツのブルジョア経済学者、雑誌『バンク』の発行者。

リーサー、ヤコブ（一八五三—一九三二）——ドイツの経済学者、銀行家、政治家。ドイツ民主党の指導者。金融資本と帝国主義の擁護者。主著『ドイツの大銀行』。

リジス（ルタイユール）——フランスのジャーナリスト。議会制度反対の反動雑誌『ヌーヴェル・デモクラシー』の編集者。

リープクネヒト、カール（一八七一—一九一九）——ドイツの革命的社会主義者。第一次大戦中、国会でただひとり軍事予算に反対した。一九一五年にスパルタクス団を組織した。ドイツ共産党の創立者。ドイツ革命に活躍中、白色テロルにたおれた。

リーフマン、ロベルト（一八七四—一九四一）——ドイツの経済学者、教授、トラスト資本の擁護者で研究者。

リーブマン、エフ（一八八二生）——ブンドの指導者。第一次大戦中、ツァーリズムの侵略政策を支持した。

リュードルファー（リッツラー）——ドイツの外交官で評論家。『世界政治の基礎』（一九一三年）の著者。

リューレ、オットー（一八七四生）——ドイツ社会民主党左派。一九一二年から国会議員。第一次大戦中は国際主義者。一九一九年、ドイツ共産党に入党。のち社会民主党に復帰。

リンカーン、エイブラハム（一八〇九—一八六五）——アメリカ合衆国第一六代大統領。奴隷解放を支持し、南北戦争後、南部の奴隷制支持勢力の手で殺された。

ルーカス、C・P——イギリスの評論家。イギリス帝国主義の擁

護者。著書『大ローマと大ブリテン』。

ルクセンブルグ、ローザ（一八七一—一九一九）——ポーランド生まれの婦人革命家、経済学者、ドイツ社会民主党左派の指導者。第一次大戦中は国際主義者、スパルタクス団を組織した。ドイツ共産党の創立者のひとり。ドイツ革命に活躍中、白色テロルに倒れた。

ルーゲ、アーノルド（一八〇二—一八八〇）——ドイツの急進主義者。左翼ヘーゲル主義者。一八四〇年代にマルクスとともに『独仏年誌』を発行。

ルバノーヴィチ、イ・ア（一八六〇—一九二〇）——エス・エルの指導者、国際社会主義ビューローの一員。第一次大戦中は社会排外主義者、十月革命後はソヴェト権力の敵。

レヴィ、ヘルマン（一八八一生）——ドイツのブルジョア経済学者、金融資本の研究者。

レギーン、カール（一八六一—一九二〇）——ドイツの労働組合指導者、社会民主党国会議員、修正主義者。第一次大戦中は極端な社会排外主義者。戦後はブルジョアジーの政策を支持し、プロレタリアートの革命運動とたたかった。

レンシュ、パウル（一八七三—一九二六）——ドイツ社会民主党員。第一次大戦中は社会排外主義者。一九二二年、一般党員の要求によって社会民主党から除名された。

ロイド・ジョージ、デーヴィッド（一八六三—一九四五）——イギリスの政治家、自由党首。一九一六—一九二二年、首相。十月革命後、対ソ武力干渉および封鎖の唱道者で組織者。

ローズ、セシル・ジョン（一八五三—一九〇二）——イギリス帝国主義の代表者、植民主義者、ボーア戦争の張本人。アフリカのイギリス領ローデシアは彼の名をとったもの。

ロスチャイルド（あるいはロートシルド）——ヨーロッパ全土に力をふるっていたフランクフルトの銀行家の一族。一九世紀までは世界で最大の金融王であった。

ローヂチェフ、エフ・イ（一八五六生）——地主、カデット党中央委員、全四期をつうじて国会議員。二月革命後、臨時政府のフィンランド司政委員。

ロックフェラー、ジョン・デイヴィソン（一八三九—一九三七）——アメリカの大財閥ロックフェラー家の創始者。スタンダード石油会社をおこし、石油独占をおこなった。ロックフェラー家はアメリカの対外政策に大きな力をおよぼしている。

ロードベルトゥス、ヨハン・カール（一八〇五—一八七五）——ドイツの経済学者、マルクスのいわゆるプロイセン・ユンカー社会主義の主要な理論家。

ロープシン——サーヴィンコフ、ベ・ヴェを見よ。

ロベスピエール、マクシミリアン（一七五八—一七九四）——フランス大革命におけるジャコバン党の指導者。

ローラント・ホルスト、ヘンリエッタ（一八六九—一九五二）——オランダの婦人社会主義者、作家。第一次大戦の初期には中央派、ついで国際主義者。一九一八—一九二七年、オランダ共産党員、コミンテルンの活動に参加。一九二七年に脱党。

ロンゲ、イエンニー（一八四四—一八八三）——カール・マルクスの長女、フランスの社会主義者シャルル・ロンゲの妻、労働運動家、マルクス主義政論家。

ロンゲ、ジャン（一八七六—一九三八）——フランス社会党および第二インタナショナルの活動家、カール・マルクスの孫。第一次大戦中、中央派的＝平和主義的立場をとった。

レーニン10巻選集 ⑥

1971年9月22日第1刷発行
1977年7月20日第13刷発行

定価は函に表示してあります

編　者© 日本共産党中央委員会
レーニン選集編集委員会

発行者　小林直衛
印刷所　三晃印刷株式会社
製本所　㈱関山製本社
発行所　株式会社 大月書店

東京都文京区本郷2-11-9
電話 (813) 4651 (代表)
振替 東京 3-16387

落丁・乱丁本はお取替いたします

⑥

大月書店